
魔道新世紀リリカルガンダム

泉海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔道新世紀リリカルガンダム

【Nコード】

N5266T

【作者名】

泉海斗

【あらすじ】

とある管理外世界に住む一人の少年・・・ハヤト。

軍人として毎日を送っていた彼であるが、突然の出来事で世界を離れなければいけなくなる。

そんな彼が幾多もの事件や戦いを少女たちと共に時に協力し時に敵対して生き抜いていく。

抜けた先で彼が知るのは何か・・・。

(注意) 多重クロスであり、原作乖離やキャラ崩壊がある可能性があります。

ファーストステージ、オリジナル編終了！！セカンドステージ、
蒼き宝^{ジュエル}石編開終了！！サードステージ、闇に染まりし魔道書編終了
！！8月26日、フォースステージ、フォーリンエンジェル編開始
！！

MS（モビルスーツ解説）（前書き）

始めまして泉海斗です。

未だ終わらぬ作品が多数ありますが楽しんでいただければ嬉しいです。

他の作者さんの作品で勉強しつつの執筆になりますので、原作と違うところも多々出ると思います。

それでも、最後までお楽しみいただければ幸いです。

今後ともよろしく願います。

MS（モビルスーツ解説）

今作品でのMSはモビルスーツデバイスを更に進化させたものとします。

機械の全身装甲フルスキンのものから部分装甲まであり、フルスキン全身装甲のものは武装のみや装甲のみの展開も可能。

従来のバリアジャケットと比べてより防御面の高さや武装の種類
の豊富さが特徴。

使用者には魔導師の生命線であるリンカーコアが必要がなく、GNドライブという特殊なコアがリンカーコアの代わりをなしている。

GNドライブにも総魔力量を示すランク同様にあり、最も少ない
F↓最も多いSがある。

高ランクに行くほど機体の性能が上がりかなりピーキーなものに
なるためかなりの訓練が必要。

到来の魔導師とはちがい陸海空のほかに宇宙空間における活動も
可能。

管理局においても運用されているが、やはり魔導師主義者による
反対も多く、未だ多くは望めていない。

MS（モビルスーツ解説）（後書き）

感想などお待ちしております。

予告 フォースステージ（前書き）

大幅に変更することもあります。が、流れるにはこれでいいかと思っ
ています。

ややご都合主義などが混ざっていますが、ご了承ください。

予告 フォースステージ

あの戦いからもう2年が経っていた。

少女たちはそれぞれ目標を持ち、その手に持つ魔法という力の可能性から、管理局に勤めることを決めていた。

「もう、私・・・飛べないのかな?？」

小さな少女にとっては全てを否定されたような地獄が襲いかかる。

『巨大隕石が地球に向かって降下中!!』

「一体どうすればいいというのだ!!」

「核は絶対に反対だ!! そんなことをしたら小島の国々は水没してしまう!!」

「なら一体どんな手があるというのかね!!」

「我々に死ねというのか!!」

まとまらない国家間の論議。

「エクシアで出る」

「馬鹿言わないで!! あれはもう」

白き天使が再び・・・。

「あ、あれは一体!？」

「ミサイルか!？」

突如として現れた、宇宙空間に向かって飛び立つ物体。

「あ、あれは・・・」

「エクシア」

白い翼を広げた天使が大宇宙へと光臨する。

「目標を捕捉・・・破壊する」

構えられる銃口。

「トランザム！！」

地球を包み込む光の翼・・・。

「俺は・・・」

救えたのだろうかと宇宙空間の藻屑と化す一人の青年。

『私たちはソレスタルビーイング。機動兵器”ガンダム”を有する、私設武装組織です』

戦争根絶を目指す新たな組織の出現。

「アヴァランチエクシア、目標を捕捉。介入行動に入る」

嘗て、宇宙で散った青年が再び・・・。

「会いたかったぞ・・・”ガンダム”！！」

ガンダムという存在にゆがめられたものたち。

「あなたたちがやっていることは犯罪です!!」
「大人しくこちらの指示に従ってください!!」

嘗て共に戦った少女たちが立ちはだかる。

「優しいのだな・・・」

「ん?? まあ、女性限定でな・・・」

敵同士とは知らず、深まる恋・・・。

「知っていたのか??」

「薄々とだが、まさかな・・・」

突きつけられた現実。それでも愛はそれすらも超越する。

「くたばれよおおおお!!」

「やめろおおおお!!」

赤き悪魔が夜天を落とす。

「家族を、家族を返しいやあ!!」

最後の王が怒る。

「主のために」

守護騎士たちが再び殺しの道へ。

「ごめんね・・・もう、はめられないの」

「そ、そんな・・・」

ようやくつながった恋が無情にも引き裂かれる。

「死んじゃえよ・・・ガンダム」

それは憎悪をかきたて・・・、世界は更なる混沌へと向かう。

「君たちには力がある」

「それをあまたなる次元世界の平和のために」

「「我ら、管理局のために」」

二人の少女たちに迫り来る黒い影。

「御神の剣士として、必ず守る!!」

愛するものを守るために刀を抜くもの。

「フェニックス、行くわよ!!」

ダブル・エックス

「DX行きます!!」

嘗ての友を止めるために・・・。

「あんたたちがやってること、本当に分かってんでしょうね!!」

「主の命ならば、我々は喜んで実行しよう!!」

「やめて、皆を傷つけないの!!」

「うっせえ!! いくら友達でも、はやてを悲しませた奴らを許すわけにはいかないんだよ!!」

不死鳥と月が堕ちる。

「どないしてや・・・、また皆がいのうなってもうた・・・」

孤独の王。そこに生まれるは、家族を奪ったものたちへの復讐心。

「どうして・・・」

「これが、俺の意思だ」

知ってしまう悲しい事実。

「我々一族の悲願のために!!」

「世界は、人は、滅ぶべくして滅ぶ!!」

世界を手にしたいと物申すもの。世界を破壊したいと物申すもの。

「貴様が、貴様自身が世界のゆがみだ!!」

「また君か。厄介だよ、本当に!!」

天使と帝の激闘。

「お前だけは、お前だけは許さない!!」

「ふははは、世界は滅ぶ。結果的に私の勝ちだな、ハヤト・ブリッ
グス!!」

滅びの危機に直面する世界。

「やらせねえ、絶対にな!!」

『ネライウツゼ、ネライウツゼ』

愛するものを失った狙撃主が取る道とは・・・。

「満足かよ……。お前らは、こんな世界で」

何もない空間へと飲み込まれる男が望んだ世界とは???

「俺は嫌だね」

消え行く仲間たちの命。

「誰もが望む明日を、けして奪わせはしない!!」

「いつかは!! またいつかはと、けして変わらぬ、そして、欺瞞と欲望に染まった世界をまだ信じるのか!!」

「それでも!! 俺達には守りたい世界が、変えられるという可能性があるんだ!!」

決着のつく死闘。

「いい道化でしたよ??」

「く……。最初から」

「全ては僕の計画だったんですよ。あなたの役割は終わりです」

本当の黒幕か?? それとも……。

「どうして……。どうしてそんなところにの??」

「……だから、甘いんだよ、テメエは。」

「最初から知ってたの?? なら、どうして……。??」

「……知ってたさ。だけどよ、それを知っちゃまえばおまえは戦えない。テメエは弱すぎるんだよ。」

愛する少女が目の前にいるのに届かない手。次元の海へと投げ出さ

れる少年。その胸には絶望という感情があった・・・。

「せめて、ドライブだけでも・・・」

けしてあきらめない、きっと計画は実行し、成功させてみせる。

「尋常に勝負を申し込む」

「貴様も・・・俺達にゆがめられた存在」

再び天使にダンスを申し込む。

「人が分かり合える道は・・・」

舞台は変わる・・・そう4年後の新暦75年に。

そして、全ての世界を変える機体。

「ダブルオーガンダム・・・」

魔道新世紀リリカルガンダム フォースステージ。サードステージ
終了と同時に執筆開始!!

予告 フォースステージ（後書き）

明日の本編もよろしくお願いします。

ご感想があればうれしいです。

キャラ&MS（モビルスーツ）設定（前書き）

ここに来て、ようやくキャラ設定です。

すぐに変更がありますが、セカンドステージからフォースステージ前半部分はこの設定です。

キャラ&MS（モビルスーツ）設定

名前 ハヤト・ブリッグス

性別 男

年齢 16歳

容姿 顔立ちは上の上。茶髪で髪型は無造作ヘアーというよりも寝癖頭。瞳は紫色。やや眼が鋭いために怖がられることもある。やや表情が柔らかくなりつつある。

性格 あまり自分の感情を表にしないクールな性格。しかし根は優しく、不器用な気遣いを見せる。意外と鋭い観察眼を持つ。

モビルスーツ
使用MS エクシア

総魔力量 なし

魔導師ランク なし

魔道戦士ランク Sランク

稀少技能 なし

好きなもの 特になし

嫌いなもの 権力を振りかざすもの、戦争、弱い自分

得意なこと プログラミング、スパイ活動

機体名 エクシア

人工A I なし

特殊機能 トランザム・システム・・・短時間機体のスペックを3倍以上引き上げる。システム・ダウン後は数秒粒子が足りなくなるために、スペックが大幅にダウンするという諸刃の剣。

・光の翼・・・高濃度GN粒子が背信部の三対六枚の翼と合わさって広域に展開されるGNフィールドのこと。詳細は分からないが、死者との対話、病氣進行の減退、プログラム改修などさまざまな効果が今までに上がっている。

武装・GNソード×1・GNバルカン×1・GNロング・ブレイド×1・GMショット・ブレイド×1・GNビーム・サーベル×4・GNツイン・バスターライフル

備考 ハヤト・ブリッグスが漂流した第97管理外世界地球において月村重工とバニングス社が協力して作り上げたMS^{モビルスーツ}。PT事件時にジュエルシード（九つ）が劣化GNドライブに同化して、オリジナルのGNドライブになってから、その高いスペックを完全に扱えるようになった。その後起きた闇の書事件においても光の翼（仮称）で奇跡を起こしている。GNツイン・バスターライフルのトランザム時の砲撃の反動が大きすぎたためか現在も改修と強化の途中である。背信部の翼は魔力と粒子を無効化することができる。

キャラ&MS（モビルスーツ）設定（後書き）

フォースステージでは、他のキャラの設定も載せたいと思います。

PHASE00 プロローグ? (前書き)

おはようございます。

それではどうぞ。

PHASE 00 プロローグ？

世界に激震が走った。

その世界の名前は『アイリオス』。豊かな自然物資で有名な世界であった。一年中暖かな気候の下豊かな自然に囲まれた美しい世界であった。

工業系においても他世界には及ばないものの日常生活に支障をきたすことのないレベルであり、発展を続けていた。

今日もまた青い海を投影したかのような大空に白い雲が風に流されながら移動している。空を飛行するのはこの世界における軍事用パワードスーツ。^{モビルスーツ}MSであった。

どの世界にも自然空間には魔導師が魔法を使うのに必要不可欠な力である魔力の粒子が宿っている。その目に見えない力を利用してそれを取り入れ独自のドライブにて魔力に変換することによって他世界において脅威である魔法というものに対抗するために作られたのだ。

もちろんその世界には非殺傷というものがあるためにこの世界においてもそのような安全装置を施さない手はなかった。

それはむやみな殺傷をなくすことと共にそれが脅威となれば管理外であるこの世界に目をつけたその世界が管理に来るかもしれないということだった。

まだこの世界以外にも管理外世界というものは多くあるだろうが、ほとんどの近隣世界はその世界の管理下におかれている。

この世界における上層部はむやみに事を荒立てたくなかったのだ。

そんな自然溢れる世界似合わない軍事基地が見られる。

空からその基地に向かって降下する1つの機影。

姿形はまるで人間に裁きを下すために神から使わされたかのような大天使の姿であった。

しかし、いささか配色から大天使というよりも神に反逆して翼をもがれ、地に伏した墮天使のようにも見えた。

四肢はダークグレー、胸部や肩部、頭部は漆黒の黒であり、ツインアイ双眼は金色に光っている。背中の推進部からは青白い粒子を放っている。

まるでこの世界にはない冬という季節に降る雪を降らせ、幻想的な世界を作り出しているかのような光景だった。

ゆっくりと基地の滑走路にその足を着ける。

その後が続いて純白の白色の機体もまた足をつける。

ゆっくりと歩いて整備所にくるとその機体が光に包まれそこには10代前半とも見える少年と少女が現れた。

少年は整った顔つきに茶髪の寝癖ヘア、やや釣り目の灼眼。少女は美少女と見える顔つきに紅の黒紫髪のショートヘア、黒眼。

第三者から見れば美男美女のカップルとも取れるだろう。二人はそのような関係ではないが幼馴染である。

そんな平和な世界においてあんなことが起きるだなんて・・・まだ誰も予測することはできなかった。

PHASE00 プロローグ? (後書き)

感想お待ちしております。

PHASE 01 いつもと通りの世界（前書き）

平穏な日々が続く・・・。

それがどれだけすばらしいことか・・・。

俺達はまだ・・・知らない。

ハヤト・ブリッグス

PHASE 01 いつもどおりの世界

青色のパイロットスーツのまま長時間見回りを行っていたために汗がひどく出ていた。

そのため少年はシャワーを浴びるべくシャワー室へと足を運ぶ。

自分のロッカーに来ていた軍服を掛け、洗面用具を持ってあいている場所に入る。

ひどくかいていたためかなり気持ちが悪かったがシャワーを浴びるとその違和感が一瞬で流され逆に爽快感が生まれてくる。

10代前半とはいえない体付きをする少年170センチをゆうに越える長身に軍人として鍛え上げられた体付き、筋肉。

滴り落ちる雫がシャワーを止め、無音となったシャワー室に小さな波紋と音を響き渡らせる。

目の前の鏡には頭を洗ったためにしなだれて顔にくっついている茶髪に睨みつけているような紫眼を持つ少年自身の顔が映る。

すると隣のシャワー室に誰かが入る音がした。

「おう、ハヤトじゃないか。お疲れ」

「・・・マサキ」

隣に入ってきたのは同僚のマサキ・イクオ少尉であった。

階級的にはハヤトのほうが上であるが入隊が同じであり、口数が少なくいつもブスツとしているハヤトに友達が少なかったこともあり、何かと同姓として気にかけてくれていたのだ。

「しかし最近は何も起きないな」

彼らが入隊する以前は大きな戦争が近隣世界で起き、その余波がこの世界まで雇用としたことがあった。

そこまで大きなものになることもなかったが、それでも死傷者は多く出てしまった。

そんなことがないようにするために高機動性のあるMSモビルスーツが開発され実用化されるようになっていた。

これはこの世界のみの軍事兵器であるためにこれが他世界へと伝わりとなると開発データを提供するようにとさまざまな手を下される危険もあるために日夜の管理に余念がなかった。

「なにも起きないことには越したことはないだろう」

「だよな。だけどそうになると俺達のいる意味あるのか?？」

確かに自分たち軍人は戦って何ぼの存在である。

この世界は比較的平和であり、自分たちが緊急出動することなど今の今までは皆無である。

それに越したことはないのだが・・・それでもつまらないこの状況に退屈していることは嘘ではなかった。

別段人を殺したいわけではない。

「そういえば・・・」

何かを思い出したかのように頭を洗いながらマサキが言う。

「カオルがお前のこと探してたぜ?..?」

PHASE 01 **いつもどおりの世界（後書き）**

未だ眠りから醒めぬもの・・・。

刻一刻と黒い影が迫る。

その影から守れるか、ガンダム!!

PHASE 02 幼馴染（前書き）

幼き頃からの仲・・・幼馴染。

どうしたらあなたの心が分かるでしょうか・・・。

どうしたらあなたは私を受け入れてくれるでしょうか・・・。

カオル・ブルーメル

PHASE 02 幼馴染

黒紫色のショートヘアの少女カオル・ブルーメルはその両手に青と赤のナプキンにつつまれた弁当を持ってどことなくソワソワして誰かこの場にいないものを探していた。

「もー、何でも言わずにいつちやうかな?」

かわいらしく頬を膨らませて怒る。

そんな彼女を見てその場にいた男性軍人たちはなかなかいることの少ない女性軍人、それも美人の部類にはいる彼女を見て鼻のしたを伸ばす。

しかし彼女のひと睨みでそそくさとその場を離れていく。

「まったくこの男ったらいくら女が少ないからって変な目で見ないで欲しいな」

彼女として思春期真っ盛りである。

周りからの視線は彼女の成長途中のからだに向けられる。

それがいくら軍服といえども飢えている男たちから見れば眼福なのだろう。

彼女とてやはり見て欲しいのは自身が恋する少年であろう。

しかしいつもブスツとしてクールを装っている寂しがりやな少年はそのことについてはまったく言わない。

少しは自分を見てくれてもいいのにと。

ちょっと悲しくもあった。

「すまない。何か用か?？」

「ひゃあ!？」

突然後ろから低い声で声をかけられたためおどろいて飛びのいてしまう。

後ろを向くとそこにはカオルが探していた少年ハヤト・ブリッダ

スがいた。

シャワーを浴びてきてすぐなのか髪の毛は乾いているが今だ熱気で上気した顔は赤かった。

「いきなり声かけないでよ。それと何も言わずにどこかに行くなんていつも言ってるでしょ?？」

相変わらずマイペースな幼馴染の少年に対してや次に文句を言うカオル。

しかしまったく馬耳東風なようで少年、ハヤトはまったく聞いている状況だ。

「は・な・し・を聞け!!」

「ぬお!？」

無視を決め込む少年に大声で言うが、前に行き過ぎたためか二人の顔が急接近し、あわや唇同士が触れ合うところであった。

目の前には恋心を抱いている少年の、照れているのか驚いている

のかやや赤い顔が見える。

少年の前には見知った幼馴染の顔があった。

それも数秒後には何かぼつという音と共に少女の顔が茹蛸のように真っ赤になり、頭からは湯気が立ち込めるなどが起きていると不思議な光景が見えた。

「顔が赤いな。熱でもあるのか?？」

「あわわわわ／＼／＼」

突然こつんとおでこにハヤトのおでこが当たる。

熱があるかどうか図ってくれているようだが、すでに限界を超えていたカオルは次の瞬間ハヤトの頬にもみじを作っていた。

PHASE 02 幼馴染（後書き）

平穏な日常・・・。

そんな誰もが求める大切なものを守れるか・・・。

ガンダム！！

PHASE 03 昼下がり（前書き）

平穏な時間・・・。

暖かな木漏れ日・・・。

こんな時間が続きますように・・・。

カオル・ブルーメル

PHASE 03 昼下がり

昼下がり、ハヤトとカオルはカオルの手作りのお弁当を食しながらつかの間の休息を謳歌していた。

軍人となれば常に巡回か訓練とほとんど休まる時間がない。

その中でいつもお弁当を作ってくれるカオルには言葉にせずともハヤトは感謝していた。

「うまい」

「ホント！？よかった」

表情に変化はないがそれでもおいしそうに食べてくれているハヤトの言葉を聞いてカオルも作ってよかったと喜びを感じていた。

夜遅くまでの訓練、さらには夜勤の巡回などもあり、安定した睡眠時間を確保できない仕事であるにもかかわらず、いつも忘れずに作ってきてくれるのは何故だろうとずっとハヤトは思っていた。

（はぁ・・・。ハヤトったらなんで私の気持ちに気づいてくれな

いんだろ・・・)

ハヤトが黙々と食事を続ける傍らその様子を見ながらカオルは肩を落として思っていた。

もう少し何か気にしてくれれば嬉しいと思っているのだが、如何せん鈍感で有り余り感情を表にしない彼にそれは酷であろうか。

小さい頃から彼の事を見てきているが笑った顔を見たことはほとんどないに等しかった。

亡き両親の笑い賭けにもただ能面のような無表情な顔を向けるだけであり、彼の両親もまた、どうしたことやらと頭を悩ませていた。

感情も表に出さず何を考えているかもさっぱり分からないということとで周りからは気味悪がられていて、幼少時も友達はいなかった。

しかし数少ない彼の考えていることを読み取れたのがカオルであった。

初めてあったときはちょっと怖いイメージがあったが一言二言はなしかけてみるとぶっきらぼうだが言葉を返してくれた。

きっと恥ずかしがりやなんだと思い彼女から積極的にかかわるようになっていた。

彼もまたそんな彼女を邪険には扱わずにぶつきらぼうだが普通に付き合っていた。

そんな関係が変化することなく14歳まで来ていた。

それでも出会ってから手の掛かる男の子からまだ10代前半というにもかかわらず大人な身の身長と体付きになっていた少年はもはや青年であった。

彼女もまた同年代に比べれば発育がいいほうであって周りからはうらやまれる体付きであった。

それなのに身はするがまったく恥ずかしがるどころか何か用かという表情ばかりするためまったくそのような感情を持っていないのかと疑いたくなることは多々あった。

まだまだ10代前半だから大丈夫だと思うがそれでも自分以外にも彼の考えていることを読み取れる人物が現れたらどうしようと思うカオル。

（何とか気づいてもらうには・・・うう・・・ん。分かんないよ
おお！！）

まだまだ恋の成就には遠いカオルのようだった。

PHASE 03 昼下がりに（後書き）

影は足音もなしに近づく。

そんな脅威に気づくのはいつか・・・。

まだ気づかぬか、ガンダム！！

PHASE 04 変化（前書き）

うごめく影・・・。

その光る瞳に映るのは何なのか・・・。

そして平和は終焉を迎える・・・。

ハヤト・ブリッ格斯

PHASE 04 変化

「騒がしいな」

「そうね」

ハヤトがどこからか聞こえてくる軍人たちの叫び声に気づいて呟く。

それを聞いてカオルも耳をそばだてると確かに何か騒いでいるようだった。

カオルに言ってみると聞かれ、コクリと頷いたハヤト。

二人は並んでその騒ぎが起きているだろう場所へといった。

「どうしたんだ?？」

ハヤトはその場に他つてこの状況を見ていた同僚のツカサ・グレイブに話しかける。

准尉である彼も同僚でも上司であるハヤトから話しかけられたので敬礼してからそのことを説明し始める。

「どうしたわけか、管理局の輸送艦が裏の谷に墜落したらしいぞ」

「墜落？？調査隊は出ているのか？？」

「一応すぐにラインの奴が小隊を引き連れていったようだぞ」

「なら連絡待ちか・・・」

まだ自分の出る幕ではないのかと思いつつ、連絡を待つことにするハヤト。

「それにしても一体何を輸送してたのかな？？」

カオルが疑問を呈す。

ツカサは聞いているわけではないので知らず、更に先ほど転移魔法を使ってここに逃げてきたのか、その管理局員は、すでに気を失っておりかなり大変な目にあったのだろうかえた。

現在治療室にて手当てを受け、眠っているようだ。

「それも含めてラインたちの報告を待つしかない」

「そっか……。あんまり大きなことにならなければいいけど」

棒読みにも近い無感情な声でハヤトが言うと、カオルもそれに納得し、もやもやとする胸の不安が一体なんなのか押し殺していた。

「なら俺達は訓練に入るぞ。もう部下は揃っているだろうからな」

「そうだね。いつでも出動できるようにしておかなきゃ」

「なら今日は軽めの内容か?？」

「そうなるね」

ハヤトとカオルはそれぞれ部隊の隊長を勤めるくらいのエリートパイロットである。

そのため毎日の訓練を仕切るのも彼らであり、中には年上の部下もいるということでカオルのほうは少々気後れするときもある。

ハヤトの方はまったく表情に出さないためにただ淡々と訓練を行うなど、指摘するときも起こっているのか褒めているのかまったく区別がつかないのが玉に瑕である。

二人は足並みそろえて訓練施設へ徒歩を進める。

はたから見れば息のあったカップルなのだが。

しかしまだ誰もこの後に起きる最悪のことを知らなかった。

PHASE 04 変化（後書き）

明らかになる陰の正体・・・。

その影の目的は・・・？？

その瞳で何を見る・・・、ガンダム！！

PHASE 05 探索（前書き）

託される意志・・・。

散り果てる命・・・。

それでも、後を託せる仲間がいるから・・・。

PHASE 05 探索

ライン・カルトス准尉は自身の小隊を引きつれ管理局の輸送艦が墜落したと思われる谷底へと向かっていた。

彼らが纏っているのはMSモビルスーツの第2世代のストライクダガーである。

これは一般兵に支給されるポピュラーな機体でありストライカーパックという臨機応変な装備をすることであらゆる戦局に対応できるという優れたものであった。

隊長であるライルは戦闘にいるということで万能型であるエールストライクダガーを纏っている。

「隊長、まだですかね?？」

部下の一人が言う。

しばらく飛行しているがそれらしいものが見当たらないのだ。

「それにしても不気味ですね。いつもは何気なく通っているところでもこういうった非常事態になれば不気味に見えます」

もう一人の部下が真っ黒な谷底を見つめながら言う。

いくらカメラを使用しても谷底まで映し出すことができずにいた。

そして更に奇妙なことに気づく。

「鳥たちの声がしない・・・」

部下の3人も耳をそばだてると確かにと口々に言う。

いつもだったら元気な鳥たちの声が響き渡っているはずなのに。

それがぴたりと消えてしまっていた。

まるで何かがそこにいることから鳥たちが遠く彼方へと逃げてしまったかのように・・・。

すると突然気体に熱源反応及び、生命反応が感知され、アラートになる。

何かが来ると身構えると突然赤黒い熱戦が谷底からまっすぐこちらに向かってきた。

まずいと思いラインはかわすように叫びつつ自身も回避行動に入る。

しかし回避行動に遅れた部下の一人ゴウが機体を熱戦に貫かれ爆散したのだ。

「グアアアアアア!!」

「ゴウ!!」

煙の中から機体の破片だけが谷底へと飲み込まれていく。

ラインたちは未確認の生命体からの襲撃ということで一人キースに報告をするようにと常時カメラの映像を送りつつ、それを持ち帰るようにと指示する。

キースは隊長ともう一人のアイルという女性を残してはいけないというが一個小隊は後方支援、近接戦闘、そして情報管理と役割が決められていて、一応戦闘もできるがそれでも今できることをしなければいけないということでキースにいったん帰るようにと指示す

るのだった。

「りよ、了解しました」

「必ず伝えるんだぞ」

そうしてキースは自分が戦えないことを悔やみ、涙を流しながら異形と戦う隊長と同僚の姿を見ながら撤退し、そして最後に移ったのは二人が崩れ落ち、異形によって食されるところだった・・・。

PHASE 05 探索（後書き）

散り果てる命・・・。

託された思い・・・。

その思いを受け、立ち上がれ・・・ガンダム！！

PHASE 06 異形（前書き）

残るもの・・・。

託されたものを伝えるため走るもの・・・。

それぞれの役割は違えど、目指すものは同じ・・・。

PHASE 06 異形

部下の一人キースを情報通達のために返したラインと残った部下のアイルはゆつくりと谷底へと入る。

キースがエールストライクダガーならば、アイルはランチャーストライクダガーであった。

「!」

「あれは・・・」

アイルはあまりの異形の奇妙な姿に驚いて声も出せず、同様にラインは眩くだけであった。

メインカメラから常時キースにこの映像が送られているだろう。

自分たちがやるべきことはここで自身を生贄にしても異形の戦闘能力を測るというものだった。

目の前には口から熱線を発したのか今だ煙を上げている異形。

人よりも一回り大きな異形。

鋭い爪を持った異形。

特に特徴はなくともものすごい数の異形。

「これを・・・何故管理局は」

ラインはまったく分からなかった。

何故このような化け物を管理局は輸送しようとしていたのだろうか。
かと。

もしくは管理局の輸送艦をハイジャックしたテロリストがいたの
かもしれない。

だとしても何故管理局から何も連絡がないのだろうか。

管理外世界だからといってそれを怠る管理局ではないだろうと思
っていた。

「それはそれで・・・こいつらを何とかしなきゃな」

このままだといずれ谷を上られ、世界に広がる可能性がある。

この先に行くと上に上る道がある。

それを発見されると危険である。

もしかするとすでに言っているかもしれない。

なるべき早くキースには到着して欲しいと思っていた。

『ガアアアアア!!』

異形たちが一斉に襲い掛かってきた。

先頭を走る数で押してくる異形に対してアイルはバスターランチ
ヤーを構えて一気に引き金を引く。

するとものすごい火力で砲撃が放たれ一瞬にして戦場の異形を薙

ぎ払う。

このときすでに非殺傷は解除していた。

こんなとき甘ったれた考えを持つほうがおかしい。

熱線を放つ異形の攻撃をエールのシールドで防ぎつつ、ラインは矢次に頭部を狙ってビームライフルを放つ。

次々と頭部を吹き飛ばされ、戦闘不能になる異形。

「隊長、私たちの攻撃は効いているようですよ」

右肩の魔力弾ポッドから次々と槍状の魔力弾を放ち、次々と押し寄せる畏敬を十厘していく。

更に両手に持たれた小型ピストルからも次々と魔力弾を放つ。

「そうだな、これでは残り二種類の異形の特徴さえ分かれば・・・」

しかしそう眩き戦闘を続行しようとしていた二人に対して、巨大な異形が攻撃を諸共せずに突撃してきたのだった。

PHASE 06 異形（後書き）

感想等ございましたらよろしく願います。

世界をゆがめる存在・・・。

『アリオリス』に迫る危機・・・。

その歪みを駆逐しろ・・・ガンダム！！

PHASE 07 散る命と託された未来（前書き）

見えるはただ異形のみ・・・。

自分たちの役割は異形の情報を得ること・・・。

それでも・・・生きて帰りたいという希望は捨てない。

PHASE 07 散る命と託された未来

突然大きな地響きを立てながら巨大な異形が襲い掛かってきた。

それに対してラインはライフルを連射し蜂の巣にするがまったく勢いが衰えることなく死んだ状態でも勢いだけで襲い掛かってきた。

狭い谷底にて何とか上空へと回避することでそれをかわしたが突然肩を焼くような痛みが走った。

下を見ると口から熱戦を放った異形が数体こちらを凝視していた。

「隊長!!」

次々と襲い掛かる異形に対してランチャーを放ち蹂躪しているアイルが叫ぶ。

表情をゆがめながらもなんとか戦闘を続行するライン。

「気にするな!! 続行だ!!」

利き腕である右肩を打ち抜かれたために腕が上がらない。

そのために左腕のシールドをパージし、ビームサーベルを構える。

鋭い爪を持った異形が襲い掛かるがそれを次々と切り倒していく。

しかし無傷にはならない。

いくら硬いPS装甲だからといって異形の強さは半端なものではなかった。
フェイズシステム

切り裂かれたところから煙が出ていることから溶解の力もあるらしい。

なかなか手ごわいと久しぶりの命を懸けた戦いに興奮していたライン。

手負いであるが右手にもビームサーベルを握ると二刀流で押し寄せてくる異形を切り刻む。

「援護します！！隊長」

「頼む!!」

アイルの魔力弾によってきり残した異形を倒していく。

巨大な異形に体当たりを喰らい何度も吹き飛ばされる二人。

徐々に上に行くための道に近づきつつあった。

「はぁ・・・はぁ・・・」

「くぅ・・・」

二人は戦った。

それは想像を絶する戦いだった。

彼らに嘗てここまで戦った記憶はなかった。

あったとしてもそれはすでに終戦していたはずだ。

しかし彼らの目の前には今だ遭遇したときと同じ数の異形たちがぞろぞろと近づいてきた。

「た、隊長・・・」

すでに残り魔力の残量もなく、すでに武装は携帯用のナイフの2本だけ。

さらにフェイズシステムがダウンして防御力ももはや皆無に等しかった。

「く・・・キースは無事についてただろうか」

ここに来て自分たちの戦いを記録した部下のことを心配する。

途中で落とされていないだろうか。

きちんと仲間届けられただろうか。

もしそうなら今のところこの光景を見ているだろう。

だが彼らならやってくれるだろう。

自分たちはお互いに切磋琢磨してきたのだ、負けるはずがないそのラインは思った。

「後は頼んだぞ・・・ハヤト」

そして二人は押し寄せてきた異形の波に飲み込まれた・・・。

PHASE 07 散る命と託された未来（後書き）

感想等ありましたらよろしく願いします。

託された思い・・・。

世界を守るため、今動き出す・・・。

今こそ立ち上がれ・・・ガンダム！！

PHASE 08 第二戦闘配備（前書き）

見せつけられた敵・・・。

散り行く仲間・・・。

彼らの思いを胸に、俺達は向かう。

誰もが思うだろう・・・生きたいと。

ハヤト。ブリッグス

PHASE 08 第一戦闘配備

＞ブリッグス大尉及びブルーメル少尉はすぐにブリーフィングルームにお越しください。繰り返します・・・＜

突然アナウンスで呼ばれたハヤトとカオル。

一体どうしたのかと内心大きな不安にさいなまれながらブリーフィングルームに向かった。

「失礼します」

二人は声をそろえて敬礼しつつ中に入る。

そこにはそれぞれの小隊の隊長及び帰還したラインの部下が涙を流して椅子に座っていた。

「まさか・・・」

「ラインが・・・??」

部下の姿を見てハヤトとカオルは彼らの戦いの結果を知った。

そしてその目の前の部下は逃げ帰ったのではない。

ラインから託されたデータを自分たちに持ち帰るために命からがら帰還したのだ。

「ブリッグス大尉、ブルーメル少尉。今回の戦いの引き金はここに

いる管理局員が原因らしい」

「詳しくお話を聞かせてください」

無感情な声がハヤトから出る。

しかしカオルは感じ取っていた。

ハヤトは泣いていると・・・。

「この管理局員は捨て駒らしい。なにやら実験に使うために捕獲してくるように一個隊を犠牲にしてまでこの計画に走ったらしい」

「腐ってる・・・」

カオルはそう呟いた。

隣で聞いているハヤトも同感だと頷く。

「何とか捕獲したが輸送の途中、力を見誤っていたのか牢屋を破壊され、更に捕獲魔法もちからづくで破られてこの世界に墜落したようだ」

「迷惑な話だ」

「そのせいで・・・ラインたちは」

ギリッと悔しさをあらわにする。

そこまでして何がしたいのかと考えがまったく読めない管理局に

対して不信任が募る。

どうやら連絡が取れたらしく、現在増援を派遣するというところらしい。

こちらでも緊急脱出船に民間人を搭乗させているようだ。

すでにこちらに向かって来ている異形。このままではこの世界は崩壊してしまう。

そのために自分たちができることは戦うこと、そして子の世界を守るだけだった。

「これより第一戦闘配備に入る」

そう告げられるとアラート音が鳴り響く。

そして次々と隊長陣は自身の部隊の元へと走る。

「ブリッグス大尉とブルーメル少尉は私についてきてくれ……」

上司と呼ばれてその後ろをついていくことになった……。

PHASE 08 第一戦闘配備（後書き）

立ち向かう人々・・・。

それをあざ笑う敵・・・。

今こそ、そのベールを脱げ、ガンダム！！

PHASE 09 託された剣（前書き）

託されたは嘗ての剣

それはとても重く、さまざまな思いが感じられた

今、これを抜き、守るべく立ち上がらなければいけない

PHASE 09 託された剣

ロイド大佐に連れられてハヤトとカオルは軍の地下へと来ていた。

そこは薄暗く、普通の人が勝手に出入りできるようなところではないと感じていた。

更に嚴重なできであることからなにか重要なものが隠されているのではないかと考えられた。

「君たちの部隊もすでに戦闘配備についてもらっている」

「了解しました」

ロイドの言葉に返事をするハヤト。

緊張感はなさそうだが、自分が何故このような場所に来る必要があるのだろうかと考えているのだろうか。カオルは感じていた。

しばらく歩いていくと大きな扉が三人の行く手を阻んだ。

「これは一体?」

見たこともない大きな扉に驚くカオル。

「嘗てこの世界の平和が崩れたとき、再び二人の神が降り立った」
パスワードを入れるとゆっくりとその扉が開いた。

開いたときは目の前が真っ暗でおくがまったく見えない状態であった。

しかし次の瞬間カツと明かりがともされた。

思わずハヤトとカオルは目をつぶってしまう。

「ある神は刀を振るいて人々の野望を切り裂き、力なきものたちの剣となった」

カツカツと歩いていく音がしたので慌てて目を開けてロイドを追いかける二人。

「ある神はその神の背中を支えるべく嵐を巻き起こし、その身を守り、力なきものたちの盾となった」

人よりも一回り大きな何かが大きな布に覆われていた。

何か嚴重に保管されているようだった。

「おそらく子の世界が始まって依頼の未曾有の大事件であろう」

軽快にタイピングをするとぽさっとかけられていた布と共に接続されていたケーブルなどがすべて取り外しされた。

「「!」」

二人の目の前に現れたのは二機のモビルスーツであった。

それは今まで自分たちが乗り込んでいたストライクダガーとはま

まったく違う雰囲気を漂わせていた。

「嘗てこの世界を救った英雄たちだ。『イザナギ』と『イザナミ』だ」

「そんな！？どうしてそれらがこんなところに！？それに私達がここに呼ばれたのって・・・」

カオルはまさかという表情になり、ハヤトはただただ自分を見下ろしている『イザナギ』を見ていた。

「君たちに搭乗してもらいたい。頼む、この世界を守ってくれ」

嘗ての英雄、ロイド・クラインは頭を下げていった。

PHASE 09 託された剣（後書き）

ベールを脱いだ嘗ての英雄。

託された二人の運命は・・・。

今こそその剣を手に、立ち上がれ・・・ガンダム！！

PHASE 10 舞い降りる二本の剣（前書き）

託されたものの重みは大きい。

それが誰かを守る力になるなら・・・。

大空から舞い降りるふたふりの剣。

PHASE 10 舞い降りる二本の剣

この世界を守ってくれ……。

その言葉に意味がどれだけ重いか彼らはひしひしと感じていた。

これに乗ればそれを見ただけで人々は奮起するだろう。

しかし逆にそれが敗れることもあれば一気に指揮が下がる。

（これは……責任重大ね）

カオルは自分に任せられようとしている世界の重み、責任の重み、それがすべて生きている人々の命であると感じていた。

「君たちのように若すぎるものにこれを託すのはいささか気が引ける。しかしこれを使いこなせるものは君たちしかないのだ」

それは現存するどのMSをも上回る第4世代のMSである。
モビルスーツ

『イザナギ』は徹底して超近接距離を極めた設計であり、『イザナミ』はそれを支えるために中遠距離を極めた設計になっている。

この場合、『イザナギ』にハヤトが『イザナミ』にカオルが乗るのがいつもどおりのパターンだ。

！< 異形出現！！各隊はそれぞれの持ち場で撃激に入ってください！

通信で異形がとうとう現れたことが告げられる。

モニターに出されると思わず目をそらしたくなるような姿の異形が大軍を率いていこちらに向かっていた。

「なんなのよ・・・あれ」

カオルが口を手で覆いながらいう。

「歪みだ・・・」

「え?？」

ハヤトの言葉に変な声を出してしまうカオル。

「あれが、この世界をゆがめる元凶だ。ならそれを駆逐する。俺が・・・俺の手で」

何か焦っているような感じだった。

そんなハヤトの肩に手を押して落ち着くようにぼんぼんと叩く。

「ハヤトだけじゃないよ。私だっているし、みんなも同じ気持ちだよ」

「カオル・・・」

久しぶりに自分の名前を言ってくれたような気がした。

少し嬉しかった。

「一緒に戦お。二人ならできるから、ね?？」

後ろは任せてというカオル。

それを聞いてコクリと頷くハヤト。

「ロイド・クライン大佐。その機体、ありがたく貰い受けます」

二人は頭を下げる。

「頼んだ・・・」

そうして二人はセッティングに入るのだった。

PHASE 10 舞い降りる二本の剣（後書き）

迫り来る敵。

世界の歪み。

今こそ、その剣で断ち切れ・・・ガンダム！！

PHASE 11 異形との戦い (前書き)

溢れる敵。

崩れる仲間。

今時分たちにできることは・・・。

PHASE 11 異形との戦い

人々は逃げ惑う。

緊急脱出船に乗り込んでいたものたちが空へと逃げていく。

しかし出発が遅れた緊急脱出船にたいして異形たちが一斉に攻撃を開始する。

熱線を放つと船の装甲が解かされ、巨大な異形によって攻撃を受けると船がひっくり返ってしまう。

そして逃げようと外に出た瞬間に群れで襲い掛かる異形。

「イヤーアアアア!!」

「クルナアアア!!」

「お父さん!! お母さん!!」

「痛い!! 痛い!!」

逃げ惑う人に対してまったく慈悲のない異形。

子どもを守ろうと良心が犠牲になり、それを見た子どもは啞然としてその場にへたれこんでしまう。

四肢を切り裂かれ、溶解によって激しい痛みをもよおす。

「早く船を出せ！！ウワアアアアア！！」

「艦長！！艦長おおお！！」

船が何本もの熱戦によって人々もろとも爆発した。

そのときに吹き飛んだのはおそらく人間の肉の塊であろう。

炎に焼かれて火達磨になった人々も逃げ出してくるがそれを待ってましたと異形たちによって食用の肉と化す。

世界はすでに地獄と化していた・・・。

それは一般市民だけではなかった。

モビルスーツ
MSを展開した軍人たちもまたあまりの数に対処しきれないでいた。

「くっそ！！なんて多さだ！！」

威力で何とか互角に持ち込んでいる。

こちらが質であればあちらは数だ。

圧倒的なまでの数でスクラムを組んでいる。

現在第2防衛ラインまで突破されてしまっていた。

これ以上やられると政府まで飲み込まれ、更にマスドライバーま

で破壊されてしまう。

「なんとしてでもここで抑えるんだ!!」

『了解!!』

隊長の声に答え、次々とライフルからビームを放つ。

それが押し寄せてくる異形たちを貫き命を奪っていく。

しかし後方からその異形たちを貫いても人々に攻撃してきたものがいた。

口から熱戦を放つものだった。

それは数だけの異形を貫き、人々諸共吹き飛ばした。

「隊長!!」

頭を貫かればたりと倒れるその部隊の隊長。

その瞬間陣形は総崩れを起こし、異形は第2防衛ラインを突破した。

PHASE 11 異形との戦い（後書き）

世界崩壊の危機。

最悪の未来を回避するべく立ち上がる。

その手で未来を切り開け・・・ガンダム！！

PHASE 12 舞い降りる剣（前書き）

迫り来る敵。

先の見えない戦い。

終止符を打つべく立ち上がる。

PHASE 12 舞い降りる剣

「はぁはぁ・・・」

少年は走る。

黒髪灼眼の少年は必死に走って逃げる。

前方には同じく逃げる3人の姿がある。

両親と大切な妹だ。突然の緊急避難命令。

しかし遅れてしまい、一つ目の脱出船に乗り遅れてしまったのだ。

更に待っていたいようと思ったが突然の襲撃にあい、命からがら逃げていた。

後ろを振り向くと異形たちが群れをなして次々と戦う軍人たちのMSを破壊し、食しにかかっている。

「うええ・・・」

あんな光景を見て無事でいられるものはほとんどいないだろう。

少年もまた吐き気をも要しながらも必死で走る。

「もう少しだ・・・もう少しで次の脱出船に乗れるぞ」

「頑張って、カイ、リン」

「もう少しだ、頑張るんだぞ、リン」

「分かったの」

カイは妹のリンを勇気づける。

絶対に守ってみせる。

そう決意しつつ走る。

すると突然リンが声をあげる。

「ああ、私の携帯!!」

「え?」

カイがリンの指差すほうを見るとかかんかと転がり落ちていくピンク色の携帯。

誕生日に買ってもらったばかりの、リンのお気に入り携帯電話である。

しかし今から取りにいてもいつ異形に襲われるか分からない。

ここは仕方が無いと思っていた。

「携帯!! 携帯!! リンの携帯!!」

今にもとりに行こうとしているリンを必死に宥める母親。

「我慢してリン。また新しいの買ってあげるから」

「やだやだぁ!! あれがいいのお!!」

それでも駄々をこねるリン。

このままではいつ追いつかれるか分からない。

両親としては早く行きたいのだが・・・。

「俺がいつてくる!!」

「カイ!?!」

母親の制止を無視してがけから滑り降りていく。

そしてしばらくしてから引つかかっていた携帯を見つける。

ほっとしながらそれについた汚れを払い落とす。

「「うわああああ!!」」

突然の両親と妹の悲鳴。

上を見ると異形がそこに群がっていた。

やめろやめろという声が響く。

しかし今ここから向かったとしても自分も殺されるだろう。

何もできずにただ家族が殺されるのを見ているしかできないのか
と思ったそのときだった・・・。

目の前に漆黒の剣士が舞い降り、異形を一瞬にして殲滅したのを見
たのは・・・。

PHASE 12 舞い降りる剣（後書き）

幼き命を守る。

1つでも多くの命を救う。

怒りの刃となり、守りぬけ・・・ガンダム！！

PHASE 13 イザナギとイザナミ（前書き）

燃える世界。

響く悲鳴。

地獄と化した世界に光を齎すことはできようか・・・???

PHASE 13 イザナギとイザナミ

イザナギを起動させたハヤトの目の前のカメラのモニターに映し出された文字……。

General・Unilateral・Neuro-Link・
Dispersive・Autonomic・Maneuver
| Synthesis System。

(これは……ガンダム!!！)

ガンダム、システムの頭文字であるG・U・N・D・A・Mから取られた呼称だ。

かつてこの世界の平和を守るために立ち上がったそれに今自分が使っているのだ。

いくらハヤトとて興奮を抑えきれない様子だ。

その様子を交流カメラから映し出された表情を見てカオルはくすりと笑う。

どうしたのかと聞いてくるハヤトであるがなんでもないといっていないす。

あんな無邪気なハヤトを見るのは初めてだった。

今自分がすることは人々を安全に脱出船にまでいける道を確保することと護衛とハヤトの背中を守ることだった。

（私がハヤトを支える・・・絶対に）

そして全システムに以上がないことが確認され、それぞれ高速で自身のOSへと書き換えが完了した。

そしてゆっくりと天井のハッチが開けられていく。

空は青く澄んでいるのに今現在最悪なことが行われている。

それを止めるべくしての剣である。そして発進可能のブザーがなる。

「この世界と人々の命、お前たちに託す！！」

ロイドが叫ぶ。

「ハヤト・ブリッグス、イザナギ。出る！！」

ひざを軽く曲げ、一気に推進部のドライブをうならせて空へと飛ぶ。

それに続いてカオルもでる。

「カオル・ブルーメル、イザナミ。行きます！！」

同じくひざを軽く曲げて一気に飛翔する。

それを見ていたロイドはただただこの世界の行く末を見つめることしかできない自分のふがいなさを悔いていた。

「うおおお!!」

ハヤトはイザナギを駆って腰にマウントされている鞘つきの大太刀を引き抜き、殺傷設定にて異形たちを切り裂く。

一瞬で数体の異形が真つ二つに切り裂かれる。

「私だって!!」

カオルもイザナミにて小型ピストルから魔力弾を放ち、的確に異形の頭を吹き飛ばしていた。

いつも使用している量産型とはまったく違う。

自分たちのいのままに操れるその性能の高さに驚いていた。

大太刀と更に肩にジョイントされているビームブーメランを抜き取ると投擲し、数体の異形の首をはねて戻ってくる。

すると光学カメラに家族に向かって畏敬が襲い掛かるのが見えた。

ハヤトはそれに向かってフラッシュムーブを使用した。

PHASE 13 イザナギとイザナミ（後書き）

託された剣。

それは守るための剣。

混迷の事態を断絶せよ・・・ガンダム！！

PHASE 14 戦闘開始（前書き）

舞い降りる剣。

それは少年に何を見せる。

PHASE 14 戦闘開始

次々と人々に襲い掛かる異形たち。

彼らの目的はただ食を満たすだけ。

それが終わればこの世界において子孫を残し、更なる世界に向かうための軍を作り出すことだった。

これは彼らが意志を持って行っているのではなく、異形自身の遺伝子に組み込まれたものからだった。

それは人間と同じである。

しかし人間もまた生き残るために異形たちを殺す。

異形もまた食欲を満たすために人間を食う。どちらにしても自分勝手な欲からのことだった。

「やめろおおお!!」

ハヤトの目には今にも襲い掛かれそうな夫婦と少女がいた。

更にかけ下には少年の姿。

もしかしたら余波ではなれてしまったのかもしれないと思ったハヤト。

「ちょっとどうしたの、ハヤト!？」

「人が襲われている」

「え?？」

「俺が行く!!」

カオルの制止を振り切って早とは高速移動を使い襲い掛かる軍をなす異形に向かってつつこむ。

小さな女の子に襲い掛かる異形に対して腰から抜き取った大太刀を振るい数体を一瞬にして真っ二つにし、絶命させる。

「誰も殺させない!!」

更に飛び掛ってきた鋭い爪を持った異形に攻撃を防がれ、他のものに攻撃を許してしまう。

「ハヤト!!」

上空からそれを見ていたカオルがすぐに銃を構えると的確に異形の脳天を打ち抜き絶命させる。

援護を貰ったハヤトもまたすぐにその爪を叩ききると一閃して異形を斬る。

大型の異形が小型の異形をそのまま潰しながらもこちらに向かって突進してきた。

「「きゃあああ!!」」

このままでは家族もろとも潰されてしまう。

カオルも援護で魔力弾を放つが次々と来るそれを倒すには威力が足りない。

それに対して腰の鞘に大太刀を収めると両手に近接用ブレードを2本構える。

「おおおおお！！！」

巨大な異形に対して両手に構えたブレードを上から下へ、左から右へ、斜めからクロスさせるようにして上から下へ切り裂いていく。

巨大な異形の体がまるでバターのように切り裂かれていく。

その圧倒的なまでの強さにそこに腰を抜かしている家族と何とか上ってきた少年が見ていた。

「早く逃げろ！！！」

ハヤトはそういうと再び大空へと飛翔した。

その時少年カイはその強さに憧れの視線を送っていた。

PHASE 14 戦闘開始（後書き）

救う命。

救われる命。

命の灯火を消させるな・・・ガンダム！！

PHASE 15 最終防衛ライン（前書き）

途切れることのない異形。

気づく黒幕。

PHASE 15 最終防衛ライン

なんとしてでもここで食い止めろ!!」

「閣下を避難させろ!! 避難船はまだか!!」

「東前方より、異形接近してきます!!」

「北防衛部隊の連絡途絶!!」

「西防衛部隊苦戦!! 応援を要求しています!!」

「こちら南防衛隊。前方異形の軍団が高速接近!! 第1番ダガー部隊発砲開始!!」

一列に並んだダガー部隊のライフルから次々と魔力砲が放たれる。

次々とそれ外形たちのからだを貫き絶命させていくがその後ろからも次々と群れをなしてこちらにつっこんでくる。

「ええい、薙ぎ払え!! ランチャー部隊、一斉掃射!!」

左右の腰から構えられたバスターランチャーの銃口から色鮮やかな魔力の砲撃が異形たちを蹂躪していく。

異形たちは一体自分たちが飲み込まれどうなったのかもしれないうちに存在がその場からかき消される。

巨大な異形は肉片を飛ばして消滅する。

しかし数が次々と増えてくるために一向に気が抜けない。

管理局員から聞いた輸送船の大きさからしてそろそろ数は減ってもおかしくないのに一向に減らずむしろ増えている。

一個小隊を率いているマサキはありえないことだが、考えられないことではないと、子の異形たちを生み出している親玉がいるのではないかと考える。

「ロラン大佐、わたくしの予想ですがもしかするとこいつらを生み出す親玉がいるのではないのでしょうか？」

「マサキ少尉・・・もしかするとそうかもしれん。ちい、何故そのことに今まで気づかなかった。あんな小さな輸送艦にこれだけの数が入りきるはずはない!!」

ロランはマサキからの突然の通信にはじめは忙しいときにとはいいつつ聞いていたが子のあまりの長期戦に疑問を感じていたのでそれしかないと思った。

しかし現在ここを抑えているだけでも精一杯であり閣下の避難する脱出船も今ようやく発信の準備ができたところである。

「ちい!! 邪魔するな!!」

飛び掛ってきた爪を持った異形に対してそれをたてで受け止める隙について右手のライフルから2発撃ちこむとその二匹は絶命する。

そして再び通信に入る。

「お前のところは迎えるか!？」

「こっちも手一杯です・・・くう!!」

大型の異形に押されつつ何とか首をはねることですれ以上の追撃をなくする。

しかし次々と異形に飲み込まれていく味方部隊。

ついには西からの連絡が取れなくなる。

最終防衛ラインを死守しているマサキとロランたちもまたかなり疲弊していた。

その時おそらく親玉が鎮座しているだろう方向に飛ぶ2つの機影がいたのを確認した。

PHASE 15 最終防衛ライン（後書き）

遅すぎたのか・・・。

それともまだ間に合うのか・・・。

わずかな希望を逃がすな・・・ガンダム！！

PHASE 16 向かうべき場所（前書き）

現れたすべての元凶。

託された剣は2本。

立ち向かうはただ二人・・・。

PHASE 16 向かうべき場所

ハヤトたちの周りには助かったことに安堵して座り込んでしまっている家族とそんな二人のことを尊敬のまなざしで見ている少年の姿があった。

足元に背景たちの体液と血液で気味が悪い水溜りが出来上がっていた。

ハヤトはほっとしていて呆けている家族に対して早く脱出船の方へ行くように急かすハヤト。

父親らしき男はそれに慌てて頷くとお礼を言いつつ妻と二人のこともをつれて走り出す。

「ありがとう!!」

少年が言う。

ちらりとその少年の事を見ると手を振りながらも走っている少年の姿があった。

すぐに走る方を見て言ってしまったが、まさか感謝されるとは思わなかったために一瞬驚いてしまった。

「感謝されることはいいものでしょ?」

カオルがモニターに映るいたずらっ子じみた笑顔で言うてくる。

まあ、悪くは無いといえなさなるのだが。

「嬉しいならそれ相応に笑えばいいとおもうけどな」

カオルはいつものように無愛想なしかめっ面をするハヤトを見ながら言う。

嬉しいなら笑う。

悲しいなら泣く。

むかつくなら睨む。

そんな風に心の状態を表に出してくればいいのにと・・・。

そんな不器用なところは相変わらずかと子の状況に似合わないことを考えていた。

「それにしてもこの数は多すぎる・・・」

「確かに・・・。管理局の輸送船の大きさからしてもうありえない数だよ」

二人もうすうす感じていたこと。

輸送船の大きさと異形たちの数の多さがまったく合わないのだ。

もしかしたら今もまた異形たちが次々と生み出されているのではないかと考える。

それならこのまま戦っていてもじりひつである。

情報が欲しく他の部隊に連絡するもどの通信網からも自身の判断で防衛線を死守せよとのことしか来ない。

おそらくもはや話をするほどの余裕は無いということか、もしくはすでに彼らもやられてしまったということになる。

嘗ての同期のものたちは次々と異形たちに殺されてしまった。

それは決して許しておけることではない。

なんとしてでも敵をとり、この世界と人々を守らなければいけないと決意する。

「俺は行く」

「どこに・・・ってまさか!？」

カオルはぎよつとした。

彼が向かうところはあそこしかない。

たとえ彼ひとりしかいなくても・・・。

ついていく仲間がいなくても。

絶対に子の戦いを終えるためにならなんでもするだろう。

たとえその身が減びようともガンダムと共に戦いを続ける。

（何で誰も頼ってくれないの??）

カオルは自分も信頼されていないのではないかと不安になる。

通信ができないことから自分が行くことを決めたのかハヤトは飛翔する。

カオルもその後にくのだった・・・。

PHASE 16 向かうべき場所（後書き）

あとがき

おかげさまで1万ヒットに到達することができました。

ここまで読んでくださった皆様ありがとうございます。

無印編には来週には入れると思います。

評価や感想をいただけると嬉しいです。

それでは!!

PHASE 17 脱出

管理外世界『アイリオス』の総帥であるオルグは脱出船の窓から自身の世界を見て啞然としていた。

突然現れた異形。

それらが次々とこの世界の代表兵器であるMS部隊を破壊し中にいる人間を食しているのである。モビルスーツ

逃げ惑う一般市民を守ろうと必死に戦っている隊員たちし勝ち健闘むなしく次々と群れの波にのめ困れ、そこから痛みと恐怖の叫びが飛ぶ。

自分はこうして子の世界の代表だからということですので子の世界から他世界へと避難することになっている。

生きていてもらわなければできないことがたくさんあるからであつた。

何もできないことが悔しかった。

自分は軍人ではないために戦いとは無縁であつた。

しかし何も武器を取るだけが戦いではない。

なんとしてでも子の世界から脱出できた一般市民と生き残るであろう隊員たちがゆっくりできるように計らってもらえるように、世界へと打診しなければいけない。

それが自分にできる戦いであり、勝たなければいけないものでもあると思った。

そしてまた悲鳴が聞こえ、尊い命の灯火が異形によって食いちぎられた。

耳をふさがないのは決して今日のようなことが二度と起こらないようにする為の戒めにするためだ。

事の発端は管理局であるが、不測の事態に対しての対策を立てられないでいたのは自分たちが弱いからであった。

「決して終わらぬぞ……。私たち、『アイリオス』の人間が生き残っている限り……」

オルグはただただ人々を恐怖のどん底へと音す異形に対して睨みを利かせながら呟くのだった……。

そんな同じ頃、速人たちに命を救われた家族は何とか間とか最後の脱出船に乗り込むことが成功した。

あそこであの二人が子なかったら今頃自分ひとりだけだっただろうと思う少年……カイ。

大好きな両親と大切な妹……リンがしんでしまうだなんて彼は考えもつかない。

だからこそあの二人には感謝していた。

家族の命を救ってくれたMSとそれを操る二人に人物に。そして同時に悔しさもあった。

あの時自分は何もできなかったことに。

死んで欲しくない、だから守りたい。

妹に対して悪戯など嫌がらせをしていた子をぶっ飛ばしたことも合った。

家族が傷つくことなんて見たくもなかった。

だからこそ力がない今の自分が嫌だった。

「よかった・・・よかった・・・」

父親の男性は家族が無事だったことに本当に喜んでいた。

そんな男性に抱きしめられるカイと母親に抱きしめられる妹のリン。

よほど嬉しいのか強い力なので少し痛かったがそれが子どもたちに向けられる愛情なのだと思うと我慢できた。

「お兄ちゃん、携帯ありがとう」

妹のリンが笑顔でピンク色の携帯を見せる。

誕生日でようやく買ってもらえた携帯である。

愛着がわくのも無理はない。この笑顔を守りたい。

そんな風に思ったカイ。

このとき大きな決意ができた。

「父さん、俺^{モビルスーツ}将来MSのパイロットになるよ」

PHASE 17 脱出（後書き）

それぞれの戦い。

生きるものが目指す未来。

そして決意するもの。

明日への種を守れ・・・ガンダム！！

PHASE 18 異形の巢（前書き）

現れた元凶・・・。

あるはふたふりの剣のみ。

それを手に、俺達は立ち向かう。

ハヤト・ブリッグス

PHASE 18 異形の巢

ハヤトとカオルは飛行によって異動していた。

谷間からは次々と異形たちが群れをなして上へと歩いていた。

周りから何かを感じ取って正確な位置を特定しているのだろうか。

それともしつかりとして知能があるのだろうか。

あれの詳しい情報がない今考えても仕方のないことなのではあるが。

なるべく悟られないように注意して飛行を続ける。

中にはレーザー攻撃をするものもいるので警戒を怠るわけには行かないのだ。

「嫌な気配を感じる・・・」

「そう・・・?？」

淡々と語るハヤトであるが、その言葉の裏から緊張が伺えた。

同じく香るもまたあんな異形のうごめく谷を見た瞬間に思わず吐き気がした。

あんなおぞましい姿をしたものがうじゃうじゃと湧き出る蛆虫のようにうごめいているのだから嫌になるのも当然である。

「無理をするな」

「大丈夫・・・それよりも二人だけでできてること事態が無理をしてるってものじゃない??」

「ほかの部隊は自分たちの防衛ラインを守るだけで精一杯だ」

「そうけど・・・」

「ならガンダムを託された俺達がやるしかない。無理なら戻ってもいい」

「無理じゃない!!」

「なに大きな声出してるんだ??」

「ハヤトが誰も頼らないからだよ・・・」

「別に親玉を倒すだけだ。俺一人でも・・・」

「もしほかの異形が襲い掛かってきたら??」

「それも倒す」

「無理だよ」

「無理じゃない。やるだけだ」

「無理だよ」

「……」

お互いに飛行異動を止めその場にただずむ。

あくまでも自分で何とかするというハヤトとそんなことはできないとかたくなに言い張るカオル。

「一緒に戦おうよ。このガンダムだって昔は一緒に戦ってたんでしょ?? なら私たちにできないわけないよね??」

カオルはあえてハヤトを諭すように言う。

それに対してハヤトは当たり前だと淡々と言う。

そうして再び飛行によって移動する。

うごめく中によりやく見つけた管理局の墜落した輸送船。

そしてその中心にいたのはまさに親玉とも取れる大きな肉の塊であった。

そこからは何本もの触手が出ており、その破れた肉の部分から次々と種類の違う異形たちが生み出されていた。

あれがすべての元凶。

おそらく管理局はあれをどこかに運ぼうとしていたのだろうと思った。

二人は武器を構え突進を開始した。

PHASE 18 異形の巣（後書き）

決意。

それは戦いの中、希望を託して散っていった仲間たちのために、行きたくとも生きられなかった人々のために。

そしてこれから生きていく人々のために。

その手にある剣を今。

未来を切り開け・・・ガンダム！！

追記

毎日見てくださる皆さん、初めての皆さん、ありがとうございます。

誤字脱字や、ご感想がありましたらよろしく願います。

PHASE 19 作戦

おぞましい姿をし、まさに親玉といえるような大きな肉の塊の姿をした異形がいた。

いくつもの巨大な目がギョロギョロと動いている。

それがハヤトたちを捉えると、数本の触手が襲い掛かってきた。

「くう!!」

すぐにそれに対して腰の大太刀を抜き取ると一閃して切り裂く。

カオルもまた次々に魔力弾を放ち、破壊していく。

しかしすぐに代わりの触手が襲い掛かってくるためになかなか接近することができない。

「しつこいな・・・」

薙ぎや払いを駆使して襲い掛かってくる触手を切り裂くハヤトはそう愚痴る。

いい加減馬鹿も1つ覚えたような攻撃ばかりではあるが、数が多すぎるためにまったくきりがない。

だからといってむやみにつっこむとおそらく絡め取られるだろう。

回避行動を取りながらカオルも触手の相手をしている。

「このままじゃいつか粒子が切れちゃうよ」

「分かっている」

いくらオリジナルのドライブを有している二人であつても何時かは切れてしまうだろう粒子。

それ以上に二人の精神力と体力が切れる。

彼らは人間である。限界も当たり前のようにあるのだ。

どれくらいの時間がたっただろうか、一応連絡を取ろうと信号を発していたが最終的にまったく応答しなくなった。

大太刀を振るい、触手を切り裂くハヤトだがダンダン腕が鉛のようになくなってきた。

同じくカオルもまたトリガーを引く指が痙攣を始めていた。

更に動きも鈍くなっていたために溶解の効果を持つ触手が掠めただけで装甲がどろどろと溶け始める。

それを何度か受けたハヤトは舌打ちをし、カオルはそれを見てぎよっとしていた。

「はあはあ・・・くっそ、あいつの心臓を破壊しない限りは永遠に続くな」

「はあはあ・・・そうね。でもどうするの?? いくらなんでも特攻

は無理よ」

あんな触手の束に絡められた瞬間解けてしまうのだから。

しかしハヤトが支持したのは特攻だった。

自身の大太刀のほかにある6本の剣。その設計から『イザナギ』はガンダムセブンスソードというコードネームだったということを軍隊に入る前の講習で習っていた。

それを一気につきたて、心臓を狙うという博打にも似た作戦を取ろうということだった。

それに対してももちろんカオルは大反対だった。

しかし装甲している間に更にレーザーを打つ異形が狙い打ってくるということで更に神経をすり減らすことになる。

「そんなことしたらハヤトがもし何かあったら・・・」

「だからこそのお前であり『イザナミ』なんだろう?？」

ハヤトはモニターからではなく、空高くいったん避難して顔を出している。

それにならってカオルもまた顔を出す。いつものぼんやりとした紫色の眼ではなく、何か意志の強さを宿した眼になっていた。

PHASE 19 作戦（後書き）

託された思いは重い。

平和を勝ち取るため、今元凶との終止符を打つ。

鍵となるは絆。

絆というつながりの力を胸に、未来を切り開け・・・ガンダム！！

追記

ご感想お待ちしております。

PHASE 20 作戦決行（前書き）

守るから・・・。

私の愛が、あなたを守るから。

カオル・ブルーメル

PHASE 20 作戦決行

ハヤトとカオルが決めた作戦はこうだった。

ハヤトが特攻を仕掛けるに当たってレーザーは回避するが触手に関してはカオルが射撃で撃墜させるということだった。

できるだろうかと悩む暇はなかった。

自分の前で好きな人を死なせてたまるかという気持ちが一番強かった。

そんなこともあってかかけてあったネックレスを首から外してハヤトにかけてあげる。

ハヤトは一体これは何だという顔でこれを自分にかける意味を問いかける。

「覚えてないかな？ 私たちがはじめて一緒に買い物言ったときに私が無理やり取ったプリクラが張ってあるのなんだけど……。それとそのネックレスは私が我侭買ってもらったものなんだけどね。ハヤトに……」

そんなことがあったなあと小さく思い出に浸るハヤト。

彼自身なんとなくついていったに過ぎないあのときの買い物。

はたから見ればそれは美男美女のデートにしか見えないかもしれないがハヤトはそんなこと微塵も思っていなかったのはカオルにと

つては悲しい思い出である。

それでも幸せであったのは確かである。

むすつとしながらもつないでくれた手の暖かさ。

そのときの頬に感じた幸せな熱気。

「きつとこれがハヤトを守ってくれると思う。ううん、きつと守るから」

そう涙を目じりにためたカオルが言う。

このときばかりは能面のような表情を持つはやとも顔を横に向けるを得なかった。

（何故だ・・・何故こうも胸がどきどきする・・・）

今まで味わったことのないこの感覚にこの状況下で困惑するハヤト。

そんなハヤトを見ていたカオルは嬉しくもあり、ちょっと悔しくもあった。

何故こんなときになってその兆しが現れるのだろうか・・・。

行くかと小さく呟くハヤト。

きつと真剣な表情に変わるハヤト。

こんな顔ができるなら早くして欲しかったといつも以上にカッコいい、愛する者を見て思うカオル。

ただカオルはうんというだけだ。

自分ができるのはハヤトに襲い掛かるであろう触手を打ち抜くだけだから。

再び全身装甲となった二人。

ハヤトは大太刀を構え、カオルは二丁の銃を構える。

「イザナギ（イザナミ）、ハヤト・ブリッグス（カオル・ブルーメル）。目標を駆逐する（狙い打ちます）！！」

それぞれコールをいい、作戦行動に入る。

ハヤトが特攻を始めると待つてましたといわんばかりに親玉は触手を幾本もの放ち絡め取りにはいり、熱戦を放つ異形は嵐のような集中砲火を浴びせる。

触手は後方から次々と放たれる魔力段によって打ち落とされ、熱戦は高速移動で最低限回避する。

的確に落とされていく触手。

最後の力を振り絞り、体力と精神力の欠片を手繰り寄せながら戦う。

そして終に到達した肉の塊の正面。

大太刀を突き刺す。

刺した所から体液と血液の混じったものが飛び出し、機体を染め上げる。

更に腰から抜き取るブレード2本をえぐるように差し込む。

更に二本のビームサーベルで、そして止めといわんばかりに肩から抜き取るビームブーメランを短剣にしておく深くへと突き刺すと悪魔の悲鳴をあげ、親玉はゆっくりと異臭を放ちながら腐っていったのだった・・・。

PHASE 20 作戦決行（後書き）

終焉の時・・・。

元凶を討ち取った二人。

しかし、そんな二人に迫り来る黒い影・・・。

あとがき

ご感想お待ちしております。

その影に気づかぬか・・・ガンダム！！

PHASE 21 終焉（前書き）

闇に降り注いだ一寸の光。

掴みかけたその先に。

あったのはなんなのか。

PHASE 21 終焉

戦闘の途中、突然の入電が入った。

それはなかなか姿を現さなかったハヤト・ブリッグスとカオル・ブルーメルからのものだった。

今まさに背水の陣であったものたちにとっては神を信じてもいいと思えるくらいのものであった。

“異形を生み出す親玉を討ち取った”

その入電は隊員たちに最後の力を与えた。

ここをなんとかしてでも持ちこたえさせ、生き延びて見せると。

たとえ擬似ドライブであっても未だ粒子は残っている。

これ以上の異形の増加は不可能であろうと思った。ならば押し寄せてくる残りの異形を叩けばいいこと。

「陣形を立て直せ!! もう一息だ!!」

「エール部隊前え!!」

一列に並べられたエールストライクダガーがライフルを片手に構える。

そして襲いかかる異形たちに向けて一斉に掃射したのだった。

先ほどの及び腰はまったく泣く、なんとしてでも生き残ってみせるという強い意志があった。

「ランチャー部隊前え!!」

巨大な異形が現れるとランチャーストライクダガーが左右にバスターランチャーを構えると巨大な砲撃を放つ。

貫かれた異形はいくら巨大だとしても肉片が四散してしまえば何もすることはできない。

「ソード部隊前え!! エール部隊は援護に入れ!!」

ソードストライクダガーが突進し、その手にもつ対艦刀によって異形たちを数体一気に真つ二つに横槍に切り裂いていく。

振り切ったところの隙を着いて襲いかかる異形たち。

しかしそんな異形たちに対してエール部隊が次々とライフルを掃射し好きができていたソード部隊を援護する。

更にソード部隊は肩にあるビームブーメランを投擲し、異形たちの首を次々とはねていく。

そうして徐々に異形たちを押し始める。

更に彼らの上空には連絡を受けてきたのか時空管理局の戦艦が数隻姿を現していた。

すでに脱出船は他世界へと避難しているためにそれ以外といったら管理局のものでしかなかった。

この優勢に更に管理局の魔導師が加われば何とかなる。そう誰もが思った。

＞私は、時空管理局第1戦艦のハルバートン提督だ。貴公たちはそのまま戦闘を続けたまえ。こちらは“アルカンシエル”の準備に入らせてもらうく

「「!」」

着てくれたことは素直に嬉しかった。

自分たちの世界は管理外であるが彼らのミスで子のようなことになったのだからむしろ遅いくらいであった。

しかし今の言葉はどういう意味だろうか。

アルカンシエルだなんて数十キロにわたって焦土と化させる魔道砲を撃つだなんて・・・。

そしてその瞬間彼らと今まさに飛び立とうとしていた脱出船に乗る者たちの視界は真っ白に染め上げられた・・・。

轟音と共に『アイリオス』は半崩壊した・・・。

PHASE 21 終焉（後書き）

掴みかけた光。

切り開けたはずの未来。

それを断ち切ったは白い光。

それを知らぬ者たちに忍び寄る影。

まだ気づかぬか・・・ガンダム！！

PHASE 22 すり抜ける明日（前書き）

終わったと思った。

甘い・・・。

甘すぎる・・・。

俺はいつからそうなっていたのだろう・・・。

ハヤト・ブリッグス

PHASE 22 すり抜ける明日

カオルは通信によって親玉である敵を殲滅したことを伝える。

向こうもかなり押されていたがそのことで指揮が上がり再び盛り返しているようだった。

しかし突然モニターが真っ白に染まったと思うと突然モニターが切れ、通信ができなくなる。

管理局・・・戦艦があゝの悪魔のような魔道砲を使ったということだった。

幸いここは使用地域から離れていたための突然の突風だけですんだが、異形たちは抵抗むなく吹き飛ばされていた。

「ハヤト・・・って危ない!!」

ハヤトは特攻後、息を吸う間もない連続の攻撃にて剣を突き刺した。

蓄積していた疲労と倒したことからの安堵からか体の力が抜け、気を抜いてしまったのだろう。

後ろからレーザーを放つ異形たちが嵐のような掃射を行う。

赤い熱戦が致命傷を与えるような場所には突き刺さらないものの、
MSの絶対防御を貫きハヤトのからだを射抜いていく。

「ぐああ！？何で・・・」

ハヤトにとってぼうつとしていた時間は数秒に感じていたのだろう。

しかし実際には数分、一分だとしても戦場では命取りである。

そんな隙を作ってしまったハヤトは熱戦を浴び、ぐらりと体が傾くと異形たちの中へと落ちていく。

「やめてえ！！」

銃をしまいバスターランチャーを構えるとハヤトに群がろうとする異形に向かって蹂躪するように砲撃を放つ。

異形は一瞬のうちに蒸発し、消滅する。

なんとか立ち上がったハヤトもカオルのイザナミに装備されているビームサーベルを構えると迫る異形を次々と切り裂いていく。

奇声を上げて爪をつきたててくる異形。

片手のサーベルでそれらを受け止め。もう片方で横一線に切り裂き、受け止めに使っていた逆手もちのサーベルによっても押し寄せてきた異形を切り裂く。

カオルもバスターランチャーの砲撃と共に誘導機能付きのポッドからの魔力弾を次々と放ちオールレンジの攻撃を仕掛ける。

砲撃にて塵も残らずに消滅する異形、魔力弾によって蜂の巣に変

わり果てる異形。

しかし上に上り始めていた異形たちは一斉に進路変更し、息のいい二人に的を絞ってきた。

お互いに意思疎通したのではなく場の雰囲気から感じ取っているという動物的本能からだったようだ。

じりじりと一進一退の攻防が続く。

不意に熱戦がハヤトの肩を貫く。

焼けるような痛みが走る。

苦悶の声をあげるとともに食らったのが右であったことからその手からサーベルが落ちる。

それをチャンスといわんばかりに襲いかかる異形たちに対してなんとか応戦するハヤトであるが痛みと疲労で不利が襲い、なんとか決定打を打たせはしないがそれでもはやいつ殺されてもおかしくない状況だ。

そして終に一部分の耐久レベルを超えてしまい、このままではM^{モビル} S^{スーツ}が解除され丸腰になってしまう。

そのからだを押し倒され、対に鋭い爪がイザナギとハヤトに襲いかかる。

やられる・・・そう確信したハヤトは少しでも痛みがないようにと目をつぶる。

しかし鈍い肉を貫く音と共にいくら待っても来ない痛み・・・。

瞳を開けるとそこには腹から鋭い爪で貫かれた純白の白い機体があった。

PHASE 22 すり抜ける明日（後書き）

鮮血が飛ぶ。

愛する者を守るため。

我が身を盾に、立ち尽くす。

感想お待ちしております。

PHASE 23 明日への誓い

目の前で何が起こっているかハヤトはまったく理解できなかった。

それでもその状態は数秒後のカオルの言葉で一気に理解が加速する。

「ハ・・・ヤト?? だい、じょうぶだよね??」

喋る直前にのどをやられたのか、もはやほとんど呂律が回らないようだ。

ハヤトはそんなカオルを見て恐怖にとらわれる。

自分を守るためにからだを張った。それは分かる。しかし何故自分のためなんかにと。

「な・・・んでだ」

「なん、でって・・・。ハ・・・ヤトだった、からだよ」

「でも・・・」

お前が死ぬ必要はないだろう・・・。

そう続くはずだった。次々と襲いかかる異形。

痛みをこらえて引き金を引き続けるカオルとイザナミ。

「もうやめろ……。傷が……」

「いいんだ、よ。もう私……は、だめ……。だから」

「なんで……。あきらめる」

「こんな傷だよ……。それにさっき……。この世、界に管理局……が来た」

なら安心だと思った。

管理局のやり方はあまり好ましくないが、今回の発端なかれらの責任である。

ならその処理は彼らがやるべきだと思う。

「でもね……。最終、防、衛ライ……。ンの人たち……。も一緒にアル……。カン、シエルで、吹、き飛ばし……。たって」

何故世界を守るとあれだけ言い張っている管理局が世界を滅ぼすようなものを簡単に使用できる。

更に異形だけならまだましも自分たちの仲間諸共すべてを亡き者にした。

それが正義なのか……。

それが管理局というもののあり方なのかと。

管理外世界だから。

自分たちに従わないから。

それなら簡単に切り捨てられるとでも言いたいのかと。

ハヤトにはすでに戦えるだけの残量粒子は無く、すでに装甲もレツドゾーンに入っていた。

「それ、は分からない・・・けど。それより、も・・・早く逃げて」

「何で俺一人逃げなきゃいけないんだ。俺だった『イザナギ』を、ガンダムを託されたんだ。ここで戦わないと意味ないだろ」

「死なせない・・・よ」

「え?？」

「ハヤト・・・は、死なせないよ。理由は・・・簡単だ、よ。大好き、だから。今も、これから」

それを聞いて啞然としてしまった。

カオルが自分のことが好き。

戸惑っているはやとのイザナギの強制離脱システムが作動してその場から離れていく。

手を伸ばしても届かないところにいつてしまう。

最後に見たのは笑顔のままハヤトのことを見つめ、異形たちに飲

み込まれていくカオルの姿だった。

虚しくハヤトの叫びが『アイリオス』に響き渡った。

PHASE 23 明日への誓い（後書き）

愛するもの守るために散った命。

その託された思いはあまりに重い。

自身の本当の気持ちに気づくことができるのか。

託された思いを胸に・・・立ち上がれ、ガンダム！！

感想お待ちしております！！

PHASE 24 失う剣

ぐったりとうなだれているハヤト。

現在助かった少ない隊員たちと共にやってきていた管理局の戦艦に乘せられていた。

持っていたMSはすべて没収されてしまった。
モビルスーツ

現在は装飾品と服以外はまったく無く、待機室には飲み物が置かれているくらいであり、退屈極まりなかった。

しかしそれは一部だけであり、ハヤトを含む大勢は恋人、友達、家族を失ったことにひどく落ち込んでいた。

カチリと音を立てて開かれるのはあの時カオルに渡されたネックレス。
ス。

中に張られていたのはあの時二人でとったプリクラであった。

ベターだと思うハヤトだがその相手がまさか自分だとは思わなかった。

カオルが今まで何故自分にくつついていたのか。

ただ回りになじめない自分との仲立ち役になってくれていたからだと思っていた。

しかし最後の最後で伝えられた彼女の本当の気持ち。

それ以前からもしかしたらと思っていたのではないか。

いやしかし自分はそんな風に思ったことは無かった。

何故かそのような気持ちが欠落していたのかもしれない。

悲しむことも。

嬉しいと思うことも。

むかつくから怒ることも。

楽しむことも。

しかし今まで彼女とそして友達と一緒に過ごしてきた月日はどう
だっただろうか。

そう考えると胸が痛かった。

この感情は一体なんだと。

悲しいのか。

楽しいことがうれしいことがすべて失ってしまったことへの怒り
なのか。

「諸君」

「「!」」

突然扉が開くと思ったら底には管理局の制服を着込んだ年を取った男性数名が立っていた。

しかしその目を見れば分かった。

濁っている。

空気が悪くなるのを感じ取っていた。

吐き気がするような感じだった。

その濁った目で一同を見渡すとそれぞれに回収していた大気状態モバイルスーツのMSを返却していた。

しかし最後になったハヤトだがイザナギが帰ってくることは無かった。

それを不審に思ったハヤトは聞いてみる。

「貴様の持っていたものだが、あれは危険すぎる」

確かにあれは一般のMSモバイルスーツとは違い、オリジナルのドライブが搭載されている。

性能的にも通常の倍はあるだろう。

「そのため我々が安全のために保管することになった」

実際に管理局でも研究はすすめられているが、アイオリスほどは

進んでいない。

そのために進んでいる技術はのどから手が出るほど欲しかったのだ。

「だけどあれは俺が託されたもので」

「託された?? あは・・・あははは」

「「あははは」」

「なにがおかしい・・・」

「君のような未熟なパイロットにはこれは不釣合いだ」

「我々管理局には君くらいのパイロットいくらでもいる」

「だからこれは我々が有効活用してやる。そのほうがこいつのためにもなるう」

「ふざけるな!! そうやって欲しいものは勝手に取っていくのか!!
! 俺達の大切な存在を散々奪ったくせに!!」

ここまで感情的になったのはあの時カオルが死に行くときとあわせて二度目だ。

しかしハヤトは失ってしまった。

イザナギというなにかのための剣という名の力を・・・。

PHASE 24 失う剣（後書き）

力も。

仲間も。

居場所も。

すべてを失った男が向かう先に光はあるのか。

向かうべく可能性を示せ・・・ガンダム！！

PHASE 25 失って気づくこと

ハヤトたち元アイオリスの生き残った軍人たちが送られたのは他の生き残った国民たちも避難していたとある世界であった。

生き残った人たちはそれぞれ家族や友人、恋人と再会を喜び合っていた。

しかしハヤトにはすでに会うべき家族も、喜び合う友人も・・・そして、恋人も、というより彼にはそのような存在はいなかったが。

それでもちくちくと痛むこの胸の痛み。

(なんだ・・・この痛みは)

今までにない痛み。

家族は小さい頃に勝手にいなくなっていた。

まったく子どもらしくないハヤトを不気味がってしてていたら
しい。

感情などをまったく表に出さない能面のような表情。

そして小さい頃から何かと物覚えだけは良かったのか、コンピュータ関係も5歳あたりで天才レベルにまで達するなど回りを驚かせた。

しかし逆に気味悪さを助長していたのかもしれない。

それから施設に預けられ、軍事学校へと通うようになる。

もしかしたら生きる意味が欲しかったのかもしれない。

「分からない・・・」

確かに学校を主席で出てさまざまな訓練を受け軍隊へと入隊した。

そこには嘗ての幼馴染の姿があった。

初めは誰だかわからなかったが名前を言われてようやく思い出したくらいだった。

それからまたカオルの幼馴染という名のお節介が始まり同期の中では仲がよくなったものもあるし、上官に対しても最低限の礼を見せるようにもなった。

今まで自分のペースを決して崩さなかったハヤトは入隊早々にそのペースを崩された。

もしあのまま自分勝手にやっていたらおそらく自分は早々に除隊させられていたか、それ以上に下っ端のままだったかもしれない。

このままこの世界でアイリオスの復興活動が始まるまで待つのか、それとも他世界へといってみるのか・・・。

そのいずれを取っても彼の周りには人はいない。

こんなにも自分は無力だったのかとようやく大きな存在を失って
感じることができた。

「かは……」

自分はおろかだ。

自分は馬鹿だ。

自分は無力だ。

自分は……自分は……。

「うわあああああああ！！」

いつもハヤトの隣にはカオルがいてくれたいつもいつも。

しかし今はもういない。

自分のせいで死なせてしまった。

彼女の存在がどれほど大きかったのか。

今失ったことを理解してようやく分かった。

「俺は……俺は……」

カオルのことが好きだった。

それに気づいたのはあまりにも遅かった……。

泣き叫ぶハヤトに周りから何事だというような視線が集まる。

しかし今のハヤトにはそれに対して何かを言う気力も何もなかった。

あまりにも喪失感が大きすぎたのだ。

いつもいつも自分のことを思っていてくれたカオル。

はじめて大きな声をあげてないた。

初めて大粒の涙を流した。

その涙が地面に落ちてあいたペンダントの写真に雫を落としていた……。

PHASE 25 失って気づくこと（後書き）

大きすぎる喪失。

芽生え始めた感情。

それが示す可能性とは。

まだ見ぬ明日へ、立ち上がれ・・・ガンダム！！

PHASE 26 突然の襲撃

あの日から数日が立っていた。

現在職探しということもあり輸送船に乗せてもらいながらもミッドチルダを目指していた。

あの時世界にアルカンシエルを打ち込んだことは納得できない。

しかしあそこで魔導師を出動させたからといって何とかできたかといえそうですが、モビルスーツMSの相手は違う。

魔導師は結果的に対人間である。

しかしモビルスーツMSはその性能というのか、構造から人間だけではなくあらゆる生物との戦闘が組み込まれている。

あの異形は明らかに魔導師の一人二人が相手できるものではなかった。

空戦魔導師はどうだろうか。

空を飛んだからといってあのレーザーを放つ異形にとっては格好の的である。

陸戦魔導師はどうだろうか。

数で押し寄せられたらまったく相手にならないだろう。

タッグを組むことで何とか相手にできるかもしれないが一對一などという構造など望めないのだ。

「はあ」

大きくため息をつくのはこれからのことへの不安からとこの輸送船がなんともロストログアをつんでいるということから危険極まりないということだった。

なんでもスクライアという部族が遺跡から発掘したものらしいが・
・・。

「ご一緒してもいいですか??」

話しかけてきたのは少年だった。

彼もまたスクライアの人間なのだろう。

なんとなく雰囲気を感じ取っていた。

「ああ」

そっけないが別段隣の席に物を置くわけでもなかったのです承した。

一言お礼を言って少年は座り込んだ。

なんとも礼儀の行き届いたいいことなのか、まじめすぎるというのか。

そんな風に思っていた。

手元にはミッドチルダでのハローワークの雑誌を棚から取り出しながら眺めていた。

自分でもできることはないだろうか。

あちらでもMSモビルスーツはあるようだが、あれだけコケにされた自分を入れてくれるだろうかと少々不安も感じている。

それにあまり管理局には厄介にはなりたくなかった。

あまりいいイメージがない。

あの異形然り、突然のアルカンシエル然り。

まずあの異形を捕まえる理由が分からない。

あんな危険なものを、興味本位で調べるつもりでつれてこさせようとしていたならあきれるしかない。

どこまで管理というオブラートにつつんだ支配ということが続けようとしているのだろうか。

その異形もまた、生物兵器にでもしようとしているのだろうか。

あのような生き物をどう人間が扱えようか。

どんな手を使うのかは知らないが、あまり踏み込みすぎるのはよ

くないと思い、その考えを記憶の彼方へとほおる。

窓の外を見ても景色は変わらず時空空間を漂っている。

すると突然大きな爆発音と共に衝撃が輸送船を襲った。

「一体何が!？」

慌てる乗客。

後ろの扉が空間へと飛ばされる。

それと同時に青い光を発した21個もの宝石が飛び出していった。

それと共に突然1つが光だし、ハヤトを包み込んで消えた・・・。

PHASE 26 突然の襲撃（後書き）

青い可能性の宝石。

歪んだそれは一体どんな可能性を与えるのか。

向かう先で何が待ち構えているか。

まだ見えぬ明日を切り開け・・・ガンダム！！

OP ? 1 T. M. Revolution 『I N V O K E』

すれ違い、急ぐたびに

ぶつけ合い、千切れあう

互いの羽の、痛み

感じている

寂しさに、汚れた

腕で抱いた

それ以外の何かを

知らないから

つながる瞬間

目覚める永遠

待ち焦がれる

早すぎる、時の

瞬きにさらされて

一人では届かない

願いなんて

絡み合う、熱の

伝えたい、真実を

誰から守ればいい

ここで君が、欲しかった思いが

そこにあるから

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

『すれ違い、急ぐたびに　ぶつけ合い、千切れあう』

これはなのはとフェイトのぶつかり合っている様子が思い浮かびます。

『寂しさに、汚れた　腕で抱いた　それ以外の何かを　知らないから』

これもまたなのはの過去、フェイトの現状が思い浮かびます。

『一人では届かない　願いなんて』

これはジュエルシードを回収、フェイトと話をしたいというなのはとなのはを支えるユーノ。母プレシアのためにジュエルシードを集

めるフェイトとフェイトを支えるアルフの様子が思い浮かびます。

『伝えたい、真実を』

これは本当は一人の娘として愛したいが、アリシアという失ってしまったかけがえのない存在のために、フェイトに本当の気持ちを伝えられないプレシアの様子が思い浮かびます。

『ここで君が、欲しかった思いが　そこにあるから』

これはなのはのフェイトと友達になりたいという気持ち、フェイトの母に褒めてもらいたいという気持ちか思い浮かびます。

OP ? 1 T. M. Revolution 『I N V O K E』 (後書き)

OPがあつたらどんな曲がいいかなと思ひながら乗せて見ました。

特に話には関係ありませんが、曲に合わせて話を考えるのも楽しいものです。

あれ主人公は??

エンディングテーマ
EDは何がいいかな??

サードステージのOPはあれしかないが・・・。

PHASE 27 プロローグ？

明るい日差しが青空から降りそそいでいる。

道端に生えている草木が微風に揺られている。

そんな風を少年の茶色い髪が一緒になってふわふわと動く。

まぶしい光に思わず手をかざしてしまう。

「平和だ・・・」

この世界には争いというものがないのかと思うくらい平和である。

コンビニという日用品やら食料などが売っている小さな店に良く立ち寄り小さな仕事をこなして手に入れたなけなしのお金でおにぎりというこの世界の料理とお茶というなんとも不思議な味のする飲み物を購入する。

「・・・」

もそもそとそのおにぎりを口に運んではお茶で流し込むということを繰り返して食事を終える。

空になった紙パックとおにぎりについていたフィルムと一緒にゴミ箱へと投げ入れる。

少年の服装は温かな春先だというのに長袖長ズボン、更にマフラーという季節はずれもいい格好である。

周りからもそんな視線がくるがまったく気にならない。

少年は数日生活する間にさまざまな手を使ってここがどんな世界なのかを調べ上げた。

まずここは地球という世界だということ。

魔法文化はなくむしろ自分たちが魔法を使えないために使用していた質量兵器、簡単に言えば魔法以外武器であり、殺傷能力があるものだ。

それを使用しての治安維持をしているということ。

この鳴海市は一応平和な分類に入るらしい。

この世界に来て自分のやることは少なくなってしまった。

しかしそれに比べて真昼間から人々が笑顔で往来して、皆と同じような服・・・調べたものによると制服という所謂学校に来ていくものらしい。

相変わらず暇だった。

仕事がないためにただぶらぶらと歩いていた。

はたから見れば不審者とも見れるその格好。

横を通り過ぎる少女たちも少年に対して不思議そうな視線を向けていた。

「あの子なんであんな格好してるのかな??」

栗色の髪の毛をツインテールにしている少女が聞く。

「アルビノ・・・てわけじゃなさそうね。もしそうなら顔も隠すはずよ」

金髪の少女が言う。

「寒がりなのかな??」

ラベンダー色のストレートヘアーの少女が言う。

季節が暖かくなっているし、むしろ彼女たちはスカートであるから寒いとかそういうものではない。少年はそんな少女たちの会話を遠くから聞いていた。

否聞こえてしまうのだ・・・彼だから。

そんな彼と少女たちが互いに横切りしばらくするものすごいブレーキ音が響いてきた。

何だろうかと音に反応して後ろを振り向くと先ほどの少女たちが突然車の中に押し込まれているのが見えた。

周りには人が少なかったための反抗らしく、少年一人では何もできまいと思ったのだろう。

黒い車が少女たちを乗せ、猛スピードで走っていくのを見ていた。

それを見ていた少年はその車が走り去る後を追いかけていった。

PHASE 27 プロローグ? (後書き)

異世界へと降り立ったハヤト。

その世界において何が待ち受けているか。

異世界という地に、立ち上がれ・・・ガンダム!!

PHASE 28 誘拐

少女たちは一体何が起きたのかわからなかった。

今自分たちがいるのはどこだろうか。

車の中だと気づくと自分たちがいつの間にか拘束されていることに気がつく。

結び目が硬く、動いてもまったく切れることはない。

むしろ肌に食い込むために紅くあざになっていた。

少女の目には恐怖からか涙が浮かぶ。

少女はできるだけことを荒立てないようにするためにじっとしている。

なすがままに寝かされている少女はまだ気を失ったままだ。

しばらく車に乗せられてはしっていた。

ブレーキ音に外の様子が寝かされているために断片的にしか見えないがわずかに見えるは廃墟だ。

どうやら知らないところにつれてこられたようだ。

誘拐されたのだ。

廃墟の奥に大きな倉庫が建っていた、その中にすずかとアリサ、なのははつれてこられ、拘束されたままその場に座らされた。

さらに目隠しと両腕を後ろで縛られる。

するとその3人の前で数人の男が話し合っているのが聞こえてきた。

「ここまででは計画通りです。今相手先に身代金を要求しているところですよ」

スーツ姿の30代くらいだろうと思われる男性がタバコを吸いながらやってきた男から報告を受けているのを目隠しの隙間から見えた。

「うむ、お前達に大金を払って雇ったんだ。ミスはするなよ・・・」

「承知しました」

「はっはっは！！ついに・・・やっとだ！！やっと念願の大金が入りあの・・・あの野郎の焦った声を聞けるとは！！」

スーツ姿の男は声高らかに笑う。

まさに悲願ともいえることが今まさに達成されようとしていることに嬉々としている。

まず男たちの計画はアリサ・バニングスを誘拐し身代金を要求することだ。

二人の少女を誘拐したのは不足の出来事に対する保険の為であった。

もし、アリサ・バニングスを誘拐する計画の途中にこの場所を見られた場合、他の少女と交換条件に移動することができる。

しかし既にそれらはクリアされたので二人の少女の存在価値はほぼ失われているのだが・・・。

あくまで保険の為に生かしている。

別段ここで殺すこともできるのだ。

アリサの父親であるデビット・バニングスに娘を誘拐したことを連絡をして身代金を要求した。

普通の家庭ではとてもではないが払える金額ではない。

もちろん警察には通報するなという条件で開放を約束した。

この計画を発案した男性はデビットに深い恨みがあったのだ。

数年前までこの男性も自分で設立した会社をもっていた。

こつこつと努力して少しずつだが大きくしていったのだ。

しかし不況の波に飲まれ当然のことながら小さな会社は大きな会社に飲み込まれる。

彼の場合、会社はデビットに買収されたのだ。

買収されてしまうのは仕方のないことだった。

そこまでなら我慢できる。

自分の会社が存続できるのだから。

しかし経費削減のため社長自らを解任させられた。

それが彼にとっては我慢ができなかったのだ。

そしてそのお陰で彼は今まで裕福だった生活は一変にして変わったのだ。

まさに天国から突然地獄行きを言い渡されたもののように・・・。

だから男は復讐を決心したのだ・・・。

しかし相手は有望な資産家。

自分ひとりではとてもではないが相手にできるものではなかった。

しかしなんとしてでも子の復讐を成し遂げ、再び以前のような生活に戻りたい。

だからこそ残ったなけなしのお金と、やりくりして借りたお金を使ってプロを雇いこの計画を実行したのだ。

（これで勝てる！！）

そう思った。

そして現在自分の近くで転がっている三人の少女を見下しながら言う。

「お嬢ちゃん達には悪いけど、お金さえ入れればすぐに開放してあげるから。もうちょっと待っててね」

少女たちのうち一人が復讐の相手の愛娘であるアリサ・バニングスである。

彼女に言ったのかそれとも三人に言ったのか。

男性はこみ上げる笑いを必死に我慢して言う。

「あんた達・・・最低ね!!」

それを聞いたアリサは恐怖に駆られながらも相手を罵倒する。

男がしているのは単なる逆恨みである。

それで自分はいいとしても自分の友達を人質に取ることを許すことはできなかった。

男性の顔は見えないがおそらく見下しながら笑っているだろうとアリサには思えてならなかった。

ギリッと歯噛みする。

こんな男に父が苦しめられるだなんて。

こんな男に自分の友達を危険にさらすだなんて。

彼女には我慢できなかった。

「子供が吼えてもおじさん達はまったく、ぜんぜん怖くないからねえ」

甘ったるく小馬鹿にしたように言う男。

思わず怖気がした。

その話を聞いていた傭兵の男は子の男はまったくの小物であると思っただ。

いくら彼が頑張って築き上げた会社だからと言って彼があんなまゝ上に居座り続けたとしてもいくら援助があってもつぶれていただろうと。

何とか維持されているだけましではないかと思っただ。

しかし自分たちは傭兵である。

それだけの金を貰って雇われたのだからやることはきちんとやる。

その男のやり取りを無視して、机でパソコンを操作している仲間にどうなっているかを聞く。

「はいここまでは順調に來ています。一応退路の確保は外部協力を使ってルート確保済みですのでご心配なく。残りは金さえ振り込ま

れば今回の仕事も終わりです」

「そうか」

相手が身代金を要求した口座に振り込む制限時間はあと1時間も無いようだ。

しかしもし振り込まれない場合は他の少女を代わりの生贄にしない。

そうこちらが本気を言うことを脅しによって示さねばならないのだった。

はつきり言ってこんな小さな少女たちを危険にさらすことに男は気が進まないがしかしこれも自分たちが傭兵としての仕事なのだと割り切る。

しかし今回の仕事は何か得体の知れない不安がリーダーの男を襲っていた。

何か大きな得体の知れないものが着そうだという長年の感。

明らかにその感というものが逃げろといっている。

何も起きなければ良いがと内心不安でいっぱいである。

すると先ほどからパソコンを操作していた男がいきなり振り向いた。

「隊長！！定期連絡が途絶えています！」

「何だと!?!」

こまめに警察など相手側が送ってきた救出部隊が来ないか探りを入れるために定期連絡が入るようにしていたのだが、先ほどから1回も連絡がきていなかった。

しまったと思った。

あのもやもやはこのことだったのかと。

そして更に大きくなるもやもやとしたこの感覚。

一体外で何が起きているというのだと・・・。

そしてボタン式の連絡なので何かがあっても直ぐに連絡は出来るのだがそれすらできていないということは何かあったのだと言う証拠でしかない。

「残りのメンバーをここに集合させろ!!あと、この倉庫の入り口に2人見張りを配置しておけ!!」

「!!了解しました!!」

リーダーの男の指示を的確にこなす。

そしてそのままクライアントであるスーツの男に向き直り報告する。

「すみません、緊急事態です。直ぐに逃げられる準備をしておいて

下さい」

静かに申し上げたリーダーである男性。

しかしそれを聴いた瞬間、クライアントである男性の表情が先ほどまであれだけ嬉々としていたものが青白くなった。

明らかに動揺しているようだ。

「な、何だと！？どういうことだ！？」

「そのままの意味です。誰かが私の部下を倒し侵入してきたみたいです」

やんわりとできるだけ自分の焦りを悟られまいと冷静に説明する。

まあ、この男にそんなことを見抜き余裕など皆無ではあるが・・・。

「貴様ら何をやってるんだ！？この手のプロじゃなかったのか！！」

すべての責任を目の前にいる男性に向けているかのように言うスーツの男。

やはりこの男は屑だと確信した。

役を降ろされて当然であると思った。

「はいプロです。ですが我々は人間なので完璧な人ではありません」

それは当然である。

いくら戦場やさまざまな修羅場を潜り抜けてきても一瞬の判断ミスが命取りになるのだから。

それに彼らにミスは無かったのだ。

しかし彼らを上回る不測の事態が起きてしまったのだ。

「こういう事態は何度か経験したことがありますのでご安心してくだ
さい」

「く!! なんとしても・・・守りぬけよ!!」

スーツの男性は汗をハンカチでふき取りながら指を指し、命令する。

リーダーの男は分かりましたといい、その場を離れる。

（ふざけるな・・・。ここまで来て一体何者だ?? しかし何がある
うと俺は・・・俺は!!）

PHASE 28 誘拐（後書き）

囚われの少女たち。

その鎖を断ち切るべく立ち上がれ・・・ガンダム！！

御感想等お待ちしております。

PHASE 29 希望 上

アリサと同様に誘拐されたすずかは恐怖と戦いながら目の前にいるであろう男達の会話を聞いていた。

犯人である彼らは親友のアリサの父から身代金と復讐の為に自分達を誘拐したことだということを知る。

そしてずっと順調にきていたらしいこの計画に突然不測の事態が起きたらしい。

誰かが助けに来てくれたのだろうかとすずかはわずかな希望を見出していた。

「すずか、なのはごめんね・・・」

彼女と同じく手足を縛られ目隠しをされている今回ターゲットにされてしまった少女・・・アリサ・バニングスが話しかけてきた。

「私達のせいでこんな怖い目に合わせちゃって・・・」

いつものような強気の彼女の声ではなく、どこと鳴く恐怖を感じ、申し訳なさなにじんだ声だった。

「大丈夫だよアリサちゃん。気にしないで、怖いけど誰かが助けに来てくれたみたいだから、きっと大丈夫だよ」

すずかは気丈に振舞う。

彼女とて怖くないわけではない。

今にも泣きたいくらいである。

それでもわずかな希望があればと思って言うのだ。

「私も気にしてないよ、だから大丈夫だよアリサちゃん」

「なのは・・・」

「すずちゃんも行ってたけど誰かが助けに来てくれたみたいなの。だから大丈夫だよ」

なのはも怖いのを必死に我慢して言う。

「うん」

アリサは人一倍正義感が強いのでこの後が心配になってくる。

あれだけ気の強い彼女がこれ程までに恐怖を感じているのだ・・・いつも一緒にいるすずかとなのはには分かる。

「すずかとなのはは強いね・・・」

アリサは今までに何度も誘拐にあい、命の危険にあってきた。

こればかりは慣れない。

恐怖で心が押しつぶされそうだ。

「違うよアリサちゃん」

なのは言う。

すずかも二人には見えないかもしれないが頷いている。

「アリサちゃんとなのはちゃんが隣に居てくれるから怖くても耐えられるんだよ」

「そうそう、私もアリサちゃんとすずかちゃんがいるから大丈夫なの」

一人だったらきつと既に恐怖に飲まれていただろう。

だけど隣に守りたい親友が居る。

心強い仲間がいる。

そして、彼女達の耳にも扉の向こうの悲鳴がと大きな音が聞こえてきた。

PHASE 29 希望 上（後書き）

心強い友がいる。

守りたい友がいる。

そんな彼女たちの希望となれるか・・・ガンダム！！

PHASE 30 希望 中

少年は警察に連絡後なのはたちが誘拐された倉庫へとやってきていた。

色々と走り回ったためにかなり疲れているはずだった。

しかしここは軍隊で鍛え上げたおかげで何とかもたすことができる。

現在所持しているは近くで拾った鉄の棒と携帯用の擬似GNコア入りの簡易の拳銃型とナイフ型のデバイスであった。

ちらりと見るとそこにはやはり警戒心丸出しの男が二人で扉を守っていたのだ。

恐らくこの先の中に誘拐された少女たちと彼女たちを誘拐した首謀者はいると思った。

屋根を破って中に入ることも作戦のうちであるが如何せん、ここに少女たちがいることは分かったとしても中のどこにいいのかまでは分からないでいる。

ついうっかり少女たちの頭上を打ち抜いてしまったらそれこそ本末転倒である。

そのため正面突破しかないと決心した。

にらみを利かせ男たちの武器を確認する。

男たちの手にはサブマシンガンが握られている。

ハヤトはすばやく男たちへと近づく。

突然現れた少年に気がついた男たちハヤトに向けてサブマシンガンを掃射した。

しかしそれをまるで見えているかのように左に右にと華麗にステップでかわす。

そして握られている銃型のデバイスを男たちの心臓めがけて放つ。

性質変換機構が内蔵されているために軽い電気ショックを与えることができる粒子弾を放つことができる。

それを喰らった男たちはばたりと気絶してしまった。

非殺傷であるために死ぬことは無い。

これで入り口の2人は片付けた。

ここからは先は奇襲は使えない。

一気に手早く倒す必要がある。

殺すわけにはいかない。

深く深呼吸をして心の中で扉を開けるタイミングを計り・・・そして一気に突入した。

扉を思いっきり蹴り破り中へ入る。

恐らく相手は自分の存在に感知していた筈であった。

しかし開けた瞬間攻撃は無かった。

この場合考えられるのは既に逃げたのか、状況が分からないので無闇に撃たなかったのかのどちらかしかないと思った。

しかしそのどちらもはずれであった。

中を覗くと建物の中央に5人男が立っていた・・・ハンドガンを構えお互いの死角を消すようにしていたのだ。

現在の所男達の後ろに見える3人の少女たちはそのまま座らされているので盾に取られる可能性は低いと見える。

そこに青い顔をして完全におびえている男がどんな行動を取るかは分からないが。

そしてこの場にいる誰もがたった一人の少年を見て驚いているだろう。

敵は後ろのスーツ姿の男と少女3人を守るような形の陣形を取っている。

ハンドガンと軍刀であろうか。

更に少し違いサブマシンガンにサバイバルナイフを装備している

男もいた。

そんな男たちに対して拳銃を向けると一気間合いを縮めながら発砲する。

つつこむハヤトに対して嵐のような銃弾の数が襲い掛かる。

しかし弾丸をスローモーションで見ているかのように次々と左右に動き的を絞らせない。

「早いぞ!!」

間合いがほとんど無いため銃が効かない事から軍刀を抜き、切りかかってくる。

それに対してもっていた鉄の棒で受け止めると、すぐさまけりを顎めがけて叩き込む。

「なあ!?!」

脳を激しく揺さぶられた男はその場に気絶する。

更に残り3人に対しても殴りかかろうとしたとき、瞬間的に散会され囲まれる。

近くに居た男を狙うが、男が間一髪抜いた軍刀によって弾かれた。

すでに銃による迎撃は無理と判断したのか、男たち銃を捨て片手持ち軍刀やサバイバルナイフを両手や片手に持ち直した。

金属と金属がぶつかり合い、大きな火花が散る。

すると隙を突いて切りかかってくる。

それを棒で受け止めるも真つ二つに折れてしまう。しかしそれを
トンファーのように振り回すと男の顎を勝ち上げ、更にこめかみを
回し蹴りを打ち込み撃墜させる。

「がああああ！！！」

残った2人の男達は驚愕の念を感じていた。

得体の知れない不快感の正体がようやく分かった。

「おおおおお！！！」

男は気合の入った声をあげ、切りかかる。

それを片方の棒で受け流す。

それだけではなく今までの戦闘の流れから子の少年は軍隊などで
特殊な訓練を受けていると確信していた。

そこらにいる少年ができるような動きではないからだ。

なぜか戦いたかった。

それは何故??

男として??

傭兵だから？？

好奇心かもしれない。

「おおおお！！」

無言でただ振り下ろされてくる軍刀を受け止め弾き返すことを繰り返すハヤト。

しばらくその攻防が続いていたが徐々に軍刀の刃と鉄の棒がこぼれてきていた。

そして終に振り下ろした刃が受け止められると粉々に砕け散ってしまう。

「がああああ！！」

腹に打ち込まれた回し蹴りはあばらを数本奪い取って男を吹き飛ばし、男は壁を打ち抜いてぐったりと倒れてしまった。

そして残りの男を倒そうと振り向いたところ。

「クソ！！こいつがどうなってもいいのか！！」

後ろから声が掛かり振り向くと、そこには銃をアリサに突きつけたスーツ姿の男が居た。

PHASE 30 希望 中（後書き）

剣を失いし者。

偽りの剣にて何を守る???

突きつけられた刃、それを見てなにを思う。

決してそれを許すな・・・ガンダム!!

PHASE 3 1 希望 下

「オラァ！」

残っていた男たちが一斉に襲い掛かる。

「！！！」

「「！！！！」なァ！！！！」

一閃だろうか二閃だろうか。

すばやくナイフを掴む。

その手からは赤い血が流れ出る。

しかしそれを無視して引き寄せると鋭い肘鉄を食い込ませると男たちは苦悶の声をあげながら倒れる。

そして呆けていたスーツの男に対して気絶させた男たちが使っていたナイフを投擲、その手にあった拳銃を真っ二つにして、驚いている隙に腹に渾身の一撃を喰らわせた。

ハヤトは戦闘が終了した後気絶しているはずかとアリサ、なのはに近づくと手の縄を解いて目隠しは取らないまま近くにあったソファの上で3人を寝かした。

よほど怖かったのだろう。

彼女たちの目じりには涙があった。

おそらく見てはいないものの自分の戦闘の音でも恐怖を与えてしまったかもしれない。

このまま放置して帰るわけにも行かないし、誰かが来るまでずっと居ないと危ない。

だからといって正体は知られたくないから早く逃げなければいけない。

そう考えているうちに、パトカーのサイレンのようなものが聞こえてきた。

どうやら先に連絡してあったパトカーがようやく来たらしい。

なんにせよ警察が来た以上ここに居るのは不味い。

（すまない・・・怖い思いをさせて）

ずずかとアリサ、なのはの頭をやさしく撫でてから部屋から急いで走り去る。

こうしてバニングス家の令嬢誘拐事件は一日も経たずに無事解決をすることができた。

当然のようにこの事件が表ざたになる事は無く、警察内部では犯人を殺害した人物の追求については一切の捜査の打ち切りが決定された。

それは当然であろう、警察や家族がやってきたときには犯人と思われる男たちは皆骨を折られて逃げるすべを失っていたのだから。

そしてその事件を解決した功労者の姿も無かった。

犯人の証言によればただ一人の少年が来たとしかなわないのだった。

三人の意識が戻るとそばにはそれぞれの家族がいた。

すぐに良かったといいながらそれぞれ抱きしめてくれた。

三人もよほど怖かったのか安心しきってしまい声をあげてないた。

その後アリサの両親はすぐにそれぞれの家に来て謝罪をしていた。

「巻き込んで申し訳ない」

あの堅物の見本だったアリサのお父さんが平謝りしていたのにびつくりせざるを得なかったのは余談だ。

彼女たちが怖くなかったと言うのは嘘になるが、それでも友達が隣に居てくれただけで救いだった。

もし一人でつかまっていたらどうなっていたかと考えただけでも怖かった。

「私達を助けてくれたのだ誰だったの??」

なのはの疑問に誰もが首をひねるしかできなかった。

アリスも拳銃を向けられたとき恐怖でそれど頃ではなかったし目隠しも取れていなかった。

なのはも目隠し状態ではまったく分からずただただ剣がぶつかり合う金属音だけが耳に響いていた。

「私は見たよ」

すずかの言葉に皆が視線を向けた。

一気に注目されたのでびくっとしてしまった。

「誰なんだい?? 君たちを助けてくれたという人は」

やはり愛娘を救ってくれた人にはお礼を言いたいのだろう、デビットが真っ先に食いついてきた。

他のメンバーもやはりあれだけの仲、三人を無傷で救い出すことができるくらいなのだからかなりの手誰なのだろうと思っていた。

「男の子だったよ」

この言葉を聞いた高町士郎と恭也はその強さを持つ少年と一度手合わせしたいと呟いた

PHASE 3 1 希望 下（後書き）

救われた少女たち。

立ち去った少年。

その出会いが運命フュイトの歯車がかみ合ったかのようにして急加速する。

物語は始まる。

魔法という名の物語が・・・。

まだなきその姿・・・目覚める日がくるか・・・、ガンダム!!

PHASE 32 語らいと歌 上

アリサ・バニングス令嬢誘拐事件が解決してから数日が立っていた。

今日もまたいつものようにコンビニで簡単なものを購入し、近くのベンチに腰掛食事をしていた。

とある昼下がり。

休日とあってか子ども達も家族を連れて楽しそうにしている。

平和な中にもうらでは何が起きているか分からない。

この前の誘拐事件のように一方的な怨み、欲望、嫉妬、憎悪など人の闇の部分によって何かが行われているのだ。

というように、ハヤトの仕事はそのような行為が行われているところに行っては撃退するということだった。

そのほかにもプログラミングが得意であるためにとある工業系の系列から日雇いでそれを請け負っていた。

「家族か・・・」

手を伸ばしてでも決して手に入らないものだ。

そう、もう永遠に失われてしまったのだから。

子どもたちが親に向ける笑顔。

そしてその笑顔を見て笑みが耐えない両親を見ているとちくりと胸が痛んだ。

しばらくしてから海の見えるところまで歩いていた。

手すりにつかまり潮の香りを運んでくる風を感じていた。

遠くには船が数隻走っている。

「♪〜♪〜」

不意に昔母親がなかなか寝付かないハヤトに対して子守唄代わりに歌ってくれていた歌を口ずさんでいた。

あの時はどうでもいいようにして聞いていたが、今となっては懐かしさに思わず涙がこぼれそうになる。

厳しさと優しさで自分を強い子供に育てようとしてくれた父親。

いつも暖かく抱きしめてくれた母親。

もう二人の温もりを感じることはできない。

自分からそれをきってしまったのだ・・・あれだけ愛してくれた両親に何も返せなかった。

あの時見せた涙は一体なんだったのだろうか。

諦めか・・・それとも呆れか・・・。

「♪~~~~♪」

どこことなく暖かく、そして悲しい歌。

歌い終わると後ろから突然拍手が起きたのだ。

一体誰だろうと思い、振り返るとそこには金色の髪をしたあの時誘拐された少女がいた。

PHASE32 語らいと歌 上（後書き）

失われたもの。

自ら離してしまったもの。

それは時間が経ってようやく分かる、その重さ・・・。

その重みを背負い、未来に羽ばたけるか。

PHASE 33 語らいと歌 中

アリサ・バニングスは家から飛び出したただただ走っていた。

彼女の瞳には涙があり、走るたびに雫となって後ろへと流れていく。

「パパの馬鹿・・・」

後ろから聞こえてくる父親の声を無視して走る。

「ママの馬鹿・・・」

母親の静止するように言う声も無視して走る。

彼女が走っているのには理由があった。

いつも会社の経営で海外を走って回っているアリサの両親。

家にいることはほとんど無いといってもいいだろう。

アリサ自身小さい頃からの英才教育と自身の立場の自覚というところから仕方のないことだと割り切っていた。

両親は自分のために頑張っている。

そう考えることで年相応に甘えたいことを押し殺していた。

しかしこの日ばかりはそうもいえなかった。

誘拐されたということで戻っていた両親。

しばらく滞在することで今日は久しぶりに、本当に久しぶりに両親と出かける予定であった。

『え??今日は一緒に出かけるんじゃないかったの??』

何故か荷づくりを終えて執事の鮫島の用意した車に乗り込もうとしている両親に対して言う。

『すまないな、アリサ。急な用事が入ってしまったんだ』

本当に申しわけなさそうに言うデビット。

『ごめんね、アリサ。でもいい子にしていればまたすぐに帰ってくるから』

アリサの頭を優しくなでながら言う母親。

『何で・・・??』

アリサが呟くようにいう。

何でいつも仕事を理由にしておいていくのか。

今日くらい一緒にいて欲しい。

これは完全に我侖であることは百も承知である。

それでも楽しみにしていた久しぶりの家族でのお出かけをこうも簡単に捨てられるとは思っても見なかったのだ。

いい子にしていれば？？

そういつも言うがほとんど帰ってくることはない。

『パパもママも私より仕事の方が大事なのね！！もう知らない！！』

そう叫ぶと一目散に両親の横を走り、執事の鯨島のガードをひらりとかわすと家の外へと走っていく。

『アリサ！！待ちなさい！！』

そういうがどうせすぐに帰ってしまうのだろうと思ったので無視する。

『待って、アリサ！！』

一事の引止めに過ぎないので無視する。

そうしてしばらく走っているといつの間にか鳴海の公園に着いた。

海の静かな音が耳を刺激する。

そうしてその静かな音と共に、それに合わせて歌声が聞こえてきた。

まるで子どもをあやすような歌だった。

思わず聞きほれてしまい、歌の聞こえる方へと足を動かす。

そこには手すりに手を置いて目をつぶりながら歌を歌っている少年……いや青年の姿があった。

自分よりも年上だろうかと思う。

瞳の色は分からないが茶色の髪は無造作ヘアーというよりは寝起きの寝癖みたいに見えた。

そうして謳い終わったのか小さくため息をつく。

思わず聞きほれていたので拍手をしていた。

するとそれに反応してか青年がこちらを向いた。

宝石のアメジストのような紫色の眼がアリサの姿を捕えていた。

PHASE33 語らいと歌 中（後書き）

心に響く歌。

歌のように万人に気持ち伝わればいいのに・・・。

PHASE 34 語らいと歌 下

現在アリサは公園のベンチに座っていた。

しばらくするとその手に缶ジュースを2本持った青年がやってきた。

近くの自動販売機で買ってきたようだ。

「・・・飲め」

「ありがとう・・・」

ぶっきらぼうに言いながら青年は買ってきたジュースの一本をアリサに渡す。

アリサもお礼を言ってぷシュッとふたを開けるとは知ってきたためにのどが渴いていたので飲み込んだジュースがのどを潤すので気持ち良かった。

「歌うまいのね」

「・・・別に」

アリサが青年を褒めるが特に青年は嬉しそうではなかった。

歌などは行動の1つだとは思っていないからだ。

なんとなく歌いたかったからした。

別に歌が好きだとか歌が得意だからではないのだ。

「あなた、見かけない顔ね」

「まあな、ここには最近来たばかりだから」

アリサがこの近辺の人間を全員知っているわけではないが、この青年のような人を見るのは初めてだった。

やや釣り目の瞳がまるで獲物を睨む肉食動物のようだった。

しかしどうしてかその瞳からは恐怖はなく、むしろ悲しみしか感じられなかった。

「あなた、何でここに来たの?? あなたくらいの年の人が来るようなところじゃないと思うけど??」

「青い大きな水溜りを見ていた・・・」

「え?..?」

大きな水溜り・・・青年は海をそう形容した。

アリサは一体何のことだか一瞬分からなかった。

「あなた、海を知らないの??」

「海・・・?? とはあの水溜りのことか??」

「え・・・ええ、そう。あれは海って言うの」

「海・・・そうか、海か」

青年はアリサから海と教えられ、それを何度も口ずさみながら海を眺める。

アリサには青年が先ほどまでとは違い、見た目よりも幼いように見えた。

しばらくしてから青年が再びアリサを見る。

「なぜ・・・お前はそんなに悲しみを感じている??」

「!!」

アリサは心を見透かされたように感じて思わず驚く。

「何故だ・・・??」

「・・・なんでそう思うのよ??」

アリサがたずねる。

「なんとなく」

思わず目を見開き、そりゃそうかと青年がエスパーなのかと疑っていた自分が馬鹿だと思い、とたんに笑ってしまった。

「なにか気に触ることもしたか??」

「あはは、なんでもないのよ」

笑いで目にたまった涙をふき取ると少しくらい表情になるアリサ。別に解決方法を教えて欲しいわけでもない、ただ聞いて欲しかっただけだ。

それからしばらく先ほどまでのことを話していた。

両親は海外でも有名な人物で家にいることも少ないと言うこと。

今日は久しぶりに家族で出かける予定だったこと。

しかし突然の仕事でそれがキャンセルになったこと。

思わず両親に文句を言ってしまったこと。

少年はただただ無言でそれを聞いていた。

話し終わるとアリサは幾分かすっきりしていた。

それでもまさか自分があるそこまで感情的に両親に文句を言うとは思わなかったために少々罪悪感を抱いていた。

「俺に何か言うことはできない」

「別にあなたから助言を貰おうとは思ってないわ」

「だが両親は大切にされた方がいい。それにその両親はお前を嫌って

いるわけでもないだろう」

「そうだいいけど・・・」

「分からないなら聞いてみたらいい」

「え?？」

「言葉にしなければ伝わらない。思いだけじゃ、人は分かり合えない」

「・・・」

「お前からいつてやるんだ。私のことどう思っているの・・・とでもな」

「そうね」

「両親は・・・失ってからじゃ遅いんだ」

「え・・・あなたには」

「いない、もう昔のことだ」

「悲しくないの??」

「後悔しかない」

「どういふこと?？」

「子どものお前には重過ぎる。早く戻るんだな。今頃お前のことを探してるんじゃないか??」

「もう仕事に行ってるわよ・・・」

「なら向こうにいるものたちは誰だ??」

少年が指差す方を見ると間違いなくアリサの両親が必死になってアリサの名前を呼んで探していた。人の名前をそんなに大きな声で呼ばないでと恥ずかしいが、それでも探しに来てくれたことが嬉しかった。

頼んだわけではないが相談に乗ってくれたのでお礼を言おうと思ったのだが振り向いた先には青年の姿はなく誰もいなかった。

PHASE 34 語らいと歌 下（後書き）

少しでもなにかの力になれば・・・。

失うつらさをこれ以上与えたくない。

大切な存在を守りぬけ・・・ガンダム！！

ご感想お待ちしております。

PHASE 35 居候と秘密 上

ここはとある大きな豪邸・・・月村邸である。

月村重工はかなりの大手であるために子のような大きな豪邸を持つことができている。

見た目どおりというのかかなり厳重な警備システムがあるために泥棒がはいるなどとはほとんど無理な話であった。

自室のベランダから月村すずかは空を眺めていた。

自分たちを助けてくれたのはうそも何も青年としか見えなかった。

「一体なんだったんだろう・・・」

見たのは誘拐されたときだけなので見なくて当然なのだが・・・。

姉の忍も妹のすずかを助けてくれた人にお礼を言いたいと思っていたがまったく正体が分からないために打つ手なしであった。

きらりと夜空に光る星を見つけた。

流れ星のように夜空を走る。

すずかは思わずもう一度あの青年に会いたいと願う。

すると突然邸のむこうがわで大きな音が響いた。

何かが落ちてきたような音であった。

そして次の瞬間警備システムが作動し嵐のような銃弾が放たれる音がする。

今頃入ったものは蜂の巣にされているかもしれないと思わずぞつとする。

慌ててメイドのノエルとファリンがその場へと直行する。

もしかしたら警備システムを破ったものが来たかもしれないのだ。すずかは突然中に入ってきた姉の忍に引っ張られて家の奥へと避難したのではなく外へと連れ出された。

危険が身近に迫っているのに何故だろうかと思っていると徐々に先に向かっていったノエルとファンリの姿が見えてきた。

そしてその向こうにいる何物かを見て目を見開く。

彼女と同じように三人も驚きを隠せない。

以前すずかたちを助けてくれた人物が青年だということを聞いていた。

年はすずかよりも上で忍よりはしたのようだ。

整った顔つき、髪型は無造作というよりは寝起きのような状態だ。

しかし今のすずかにとってはそんなことよりも目の前に現れたあ

のときの青年にもう一度会えたことの嬉しさと、倒れた少年が自分たちを助けてくれたことを知ってお礼をしなければという思いだった。

「すずかちゃん!？」

「危ないです!!」

二人の制止を振り切って青年に尋ねる。

大丈夫かと。

するとゆっくりと顔を挙げ、眼を半開きにしていった・・・。

「は・・・」

「は?？」

すずかがオウム返しに聞く。

「腹減った・・・」

その時月村家の4人はその場にずっとこけるのだった。

PHASE35 居候と秘密 上（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 36 居候と秘密 下

月村家のものは目の前で起こっているブラックホールにただただ
啞然とするしかできなかった。

大量に用意しておいた料理が見る見る口の中に飲み込まれていく
のだ。

「あんまり急いで食べなくてもいいんじゃない??」

詰まらせるのではないかと思ひ忠告するがそのスピードは更に上
がる。

あまりの食欲にあきれてものが言えない。

そしてしばらくしてようやくすべての食事が終わった。

「ごちそうさまでした・・・でいいのか??」

「ええ。お粗末さまでした」

正面に座る忍が頷きながら言う。そして本題に入る。

「まずあなたは一体何者?? ずかたちが誘拐されたときもあなたが
助けてくれたようだけど」

何者と聞いたのはあの状況下をたった一人で三人を助け出した身
体能力と度胸があまりにもハヤトとの年齢を同じくするものたちと
比べると明らかに違っているからであった。

更にここにセキュリティにあっても怪我一つしていないとなると相当訓練をつまれている証拠になろう。

しかしいくら訓練したからといってここまで人間代われるものなのだろうかと思は自身のことを思い出しながら考えていた。

「俺はただの人間だ。名前はハヤト・ブリッグス。そいつを助けたのは気まぐれだ」

「ただの人間・・・というのはどういことかしら?？」

忍が再度聞き返す。

その時ハヤトの瞳は一瞬片目だけ淡い金色に輝いていた。

「なんとなくお前たちから俺とは違う雰囲気があったからだ」

「「!」」

何か見透かされたかと思ったがなんとか平静を保つ。

「何かあるのか??別に聞きたいわけじゃない」

ハヤトは特に興味があるわけではないという様子で言う。

むしろ早くここから帰りたいかった。

ここにいても彼にすることはなく、退屈なのだ。

まあ、帰ったとしても帰る場所などなく、やることもまたない。

「あなたの言っていることは間違いじゃないわ」

「忍お嬢様!？」

「何でそのことを!？」

「お姉ちゃん・・・」

どうやら彼女たちには人には触れられたくない何か大きな問題があるようだ。

無理に聞くことはない。

聞かされたとしても彼にできることはないだろう。

むしろ聞かされて何か問題を抱え込まれることがあればそれこそ困り物だ。

「聞きたいわけじゃないのなら話さないわ。聞くにはそれ相応の覚悟がいることだから」

「安心しろ。俺にはそんな覚悟などない」

ハヤトが軽く断りを入れると・・・。

「あの、この前は友達も一緒に助けてくれてありがとうございます」
「すずかがようやく話しかけるタイミングをえたので話しかけた。」

数日前の親友のアリサを身代金目的で誘拐した事件に代用としてなのはとともに誘拐されたすずか。

アリサとなのはは恐怖からか気絶していたがすずかはかろうじてそのとき意識がありさらに目隠しされていた布の隙間から自分たちを助けてくれた人物の姿を見ることができた。

それが先ほど自分の家に現れた青年・・・ハヤト・ブリッグスだった。

あの時いえなかったお礼をずっと言いたかったのでこのタイミングを見て言うことができたのだ。

「そうだったわね。姉としても妹を助けてくれてありがとう。おかげで大切な存在を失わずにすんだわ」

「私たちからお礼を言わせてください」

「すずかちゃんを助けてくれてありがとうございます」

すずかに続いて忍、ノエル、ファリンもお礼を言う。

彼女たちにとってすずかは大切な存在である。

もし彼女に何かがあったらと思うと恐怖しかない。

彼女たちには人には言えない秘密があるためにもしものことがあったらと考えると今回ハヤトが着てくれたことには感謝しなければいけなかった。

「今日はもう遅いわね」

よく見るとすでに深夜を回っていた。

すずかと忍は明日も授業があるためにこれ以上夜更かしをするわけにはいかない。

ハヤトは学校すら通っていないのでいくら夜更かししてもいいのだ。

ハヤトは帰宅しようと立ち上がる。

まあ、帰る家など彼にはとうの昔に失われてしまっているのだが・
・。

「それでは失礼する」

「ちょっと待って」

立ち去ろうと背を向けて玄関へと足を向けていたハヤトを忍は引き止める。

まだ何かという顔をしながら振り返ってきた。

「ハヤト君は帰る家はあるの?」

あの空腹のことやハヤトからにおってきた血ではあるが別の血のことを考えると忍にはハヤトには家族はいないのではないかと思った。

そのためにそのような質問をしたのだった。

「ないが??それがどうした??」

「名前で思い出したんだけど、あなたよね。いつも家の仕事をパートで請け負ってくれてる天才プログラマーは」

「ええ!?!もしかして忍お嬢様がいつも言っていた人ってこの子なんですか!?!」

ファリンが驚きの声を上げる。自身が使える主が認めるものだったのでどんな人物なのかと思っていたのだが、まさか若干10数歳だったということに驚きを隠せなかったのだ。

「あなたのその力は私たちの会社にはのどから手が出るくらいほしいのよ。もしよければただここにいてもいいのよ?」

それは善意からのものであり、貴重な人材を確保をしたいということからであった。

何度か断りを入れたハヤトであったが、涙目で上目ずかいをしてくるすずかに罪悪感を持ったこととその後ろでなかせるなという黒いオーラに圧倒されたためにお世話になることになった。

そのときのすずかの柄がをは今まで以上に輝いて見えたのは嘘ではない・・・。

PHASE 36 居候と秘密 下（後書き）

感想お待ちしております、

PHASE 37 日常

月村すずかが自分たちを救出してくれた人物・・・ハヤト・ブリッグスと出会ってからの翌日。

とある一軒家に住む少女は夢を見ていた。

木々に包まれたところだ。

一人の少年が肩を大きく上下させてたっている。

立っているのも辛そうなように見えた。

そんな少年の目の前には異形のような姿が立っている。

思わず逃げたい気持ちになった。

しかし今の少女には逃げるための足もなければ声を上げるための口もない。

少年は何かをつぶやいたように聞こえた。

すると少年の足元になにやら魔法陣が現れ異形は苦しみ始める。

しかし少年は傷だらけで力が尽きてしまったのかその場に倒れる。

すると魔法陣も消え少年の下から異形は走り去ってしまう。

少年は逃げていった異形を見つめながら悔しそうな声を上げる。

そして助けを求めるかのようにつぶやく。

「誰か・・・僕の声が聞こえているなら気づいて」

そして少年は意識を手放したのか瞳を閉じてぴくりとも動かなくなってしまう。

この様子を見ていた少女はどうしてもその少年のことが気になっていた。

そうして突然鳴り響く携帯のアラーム音で一気に意識を覚醒させるのであった。

部屋の中に携帯のアラーム音が鳴り響く。

もぞもぞとベッドの盛り上がった布団がうごめく。

そして枕元にある携帯に布団の中からよきつと生えた手がつかむとアラームを止める。

しばらくそのまま静止していたがすぐに布団がめくりあがるとパジャマ姿の栗色をした髪の毛の少女が眠い眼をこすりながら携帯の時計を見る。

「うーん、まだ眠いの」

少女はそうつぶやくが時計の示している時間を見ると声を上げて慌てて着替えをはじめ洗顔をするべく下へと走っていったのだった。

しっかりと洗顔することで眠気の残っていた意識が一気に覚醒する。

そして下ろしていた長い栗色の髪の毛を持っていたリボンでツインテールにする。

以前はなかなか同じ形にならずに最終的には親に手伝って貰うことも多々あったが、それでも3年目になると手馴れたものになり、しっかりと出来上がりになっていた。

どんなもんだというように笑顔のまま今へと向かう。

走るとき上下にツインテールの髪の毛がぴよぴよことはねていた。

居間に行くとテーブルには家族5人分の食器が準備されていて、すでに父親がいすに座って新聞を読んでいて、母親は台所で料理をしていた。

「おはよう、お父さん、お母さん」

少女は元気に挨拶する。

すると二人も少女の声に顔を向けると笑顔で挨拶してくれた。

「おはよう、なのは」

「おはよう、なのは。悪いんだけどそろそろ道場にいる恭也と美由

希のこと呼んできてくれない??」

母親の高町桃子はテーブルに置かれていたタオルの二枚を少女見せながらいう。

少女はいいよと笑顔で返し、そのタオルをもって玄関に向かい靴を履くと裏にある道場へと向かった。

高町家には大きすぎず小さすぎない道場があった。

タオルと飲料水の入ったペットボトルを持ちととっと走っていく。

木刀同士が激しくぶつかり合う音と共に、男性の的確にアドバイスしながらの訓練がなのは目の前で行われていた。

兄の恭也と姉の美由希である。

二人は持って生まれた運動神経から剣の道に進み流派の継承を目指している。

すでに皆伝している恭也は美由希にその技を叩き込んでいるということになる。

なのはは二人と比べて運動神経は雲泥の差であることから剣の道は歩むことはなかった。

二人はじっと訓練を見ていたなのはに気づくと、もうそんな時間なのかと訓練を終了しこちらに向かってくる。

「おはよう、お兄ちゃん、お姉ちゃん」

「おはよう、なのは」

「おはよう、いつもありがとうな」

「えへへ」

それぞれに挨拶し、兄と姉にそれぞれ持ってきたものを手渡す。

兄に頭をなでてもらい嬉しそうに笑顔になるなのは。

「恭ちゃんはなのはに甘甘だよね」

「そんなことはない、俺はいつも厳しくしているつもりだ」

「そうなのかな・・・??」

美由希は常日頃のなのはに対する兄の行動を思い返してみるとそれが厳しくしているのかどうかと悩みどころだった。

まあ、なのはが何も言わないのならそれでいいのだろうとは思うのだが。

それでもややシスコン気味の自分の兄にはため息をつかざるを得なかった。

そんな風にして家族全員が集まり、テーブルを囲んでの朝食に入る。

いつものように進んでいく食の流れ。

自慢の母親が作る料理はとてもおいしく、それを褒める父親とは何年たっても新婚夫婦のようである。

身だしなみなどに厳しい兄はリボンが曲がっている姉を治すなど兄妹というよりも第三者から見ると恋人のようにも見えない。

そんな4人をうらやましそうにして見ているは末っ子のなのはだ。

にぎやかな4人とは別に彼女だけこの家の中では微妙に浮いていた。

そのことが少し彼女にとってはつらいものでもある。

食事を終え、少々時間が押していたために急いでバス停へと急ぐなのは。

この日彼女の日常が180度変わってしまうことをまだ誰も知らない……。

PHASE 37 日常（後書き）

あるはずのない力に出会う少女。

それはただひとつのきっかけ。

しかしそれは運命^{フエイト}を変えてしまう、大きなきっかけ。

その手に持つ力は彼女をどう変えるのか・・・。

PHASE 38 友達

高町なのはは息を切らせながらも停車しているバスに乗り込んだ。
すると後ろの方から彼女の名前を呼ぶ二人の声がした。

なのはは顔をそちらに向けると金髪の少女とラベンダー色の神の少女が彼女の分の席をとりながら、待っていた。

彼女たちはなのはの親友であり、クラスメイトである。

更にこの前の誘拐事件に巻き込まれたのも彼女たち3人であった。

「おはよう、アリサちゃん、すずかちゃん」

「おはよう、なのは」

「おはよう、なのはちゃん」

なのはは二人の隣に座る。

「そうそう、さっきすずかから聞いたんだけど。あのときの誘拐事件で助けてくれた男の人が見つかったんだって」

「え??? ほんとうなの??」

アリサの言葉になのはも反応する。

彼女はあの時気絶してしまい、助けてくれたのだ一体誰だったの

かはわからない。

ただ唯一見ていたすずかの証言から自分たちよりも年上の男性だと言うことだけだった。

「うん、今は家の会社の仕事を手伝ってもらってるの。お姉ちゃん、ハヤトさんのコンピューター関係の技術には舌を巻いてるから」

「そんなにすごいのかしら?？」

「うん。一人で一日分の仕事を二、三時間で終わらせちゃうから」

「にやはは、それはすごいの」

その一日の仕事量がどれくらいなのかは分からないが、それでも天才的なプログラマーであることはそれだけで予想できた。

学校には通わないのかと聞いてみる。

「なんだかもう、学校は卒業してるらしいよ?? 御伽嚟みたいだけど、別世界から来たって言ってるの」

「「別世界!？」」

「う、うん」

なのはとアリサはぽかんとしてしまう。

何せ別世界だなんて空想のまた空想でしかないと考えていたのだから。

「嘘ついてるってことはないの??」

「ええっとね、なんだかこの世界にはないものも持ってたから、一概にはそういいないのかな」

その子の世界にはないものというのはあの拳銃型の簡易デバイスのことだった。

少々研究熱心な姉の忍はそれを受け取ると嬉々として研究に没頭するのだった。

更に近いうちに大掛かりなことにも着手するということも聞いているがすずかはそれが何かは知らない・・・。

PHASE 38 友達（後書き）

ご感想お待ちしております。

おかげさまで2万アクセスありがとうございます。今後もよろしく
願います。

PHASE 39 設計

ものすごい勢いで次々とモニターが移り変わっていく。

その場に差し入れとして会食を持ってきた月村家の専属メイドのファリンは眼を点にしてそれを見ていた。

「・・・」

「あの・・・」

話しかけてみてもまったく聞こえていないように作業に没頭する。

そんな青年ハヤト・ブリッグスを見ているファリンは徐々に無視されていることに涙を浮かべる。

それでも何とか我慢し、再度決心して話しかけてみる。

「あの・・・ハヤト君?？」

「・・・」

「ちょっと休憩しませんか?？」

「・・・」

「あう・・・仕事が終わってからもうずっとかじりついてばかりですからあ・・・」

「・・・」

「はうあう・・・」

「・・・」

「ひっく・・・」

「!! 难道しようか・・・」

「えぐう?? よかったですう、やっと気づいてくれました」

涙を流し始めたところでそろそろ空気がまずい状態になりそうだったために集中力が切れてしまったハヤトが振り向く。

ようやく気づいてくれたことに喜んでいるファリンだ。

テーブルに移動し持ってきたくれた間食のサンドイッチを口に入れる。

もぐもぐという風に食していく。

一緒に入れてくれた紅茶も飲む。

こんな風にゆっくりと時間を過ごせるのはいつ以来だろうかと考えても思い出せない。

もしかするといつも時間に追われていたのかもしれない。

「どうしました?」

「え?？」

「とても悲しそうな顔をしています」

どうやら彼女にはハヤトが何か悲しんでいるような表情に見えたらしい。

それもそうかもしれない。

二度と戻らないあのときの時間であるから。

失われた力をもう一度取り戻すべく、ここ月村家の会社と、同じく誘拐事件でハヤトが助けたアリサ・バニングスの両親が全面的に金銭と資材面の協力に出てくれた。

他世界のことを説明したとき、まさかテレビの中だけだと思っていたものが実際に使われているとは思わなかったのだ。

しかしむしろ好意的に手を貸してくれるとのことだった。

それはお礼でもあり、興味からでもあった。

現在パソコンで作り上げられている設計図と搭載されるOS。

その設計されるMSモビルスーツの名前にはガンダムエクシアと付けられていた。

PHASE39 設計（後書き）

ご感想お待ちしております。

PHASE 40 夢

「この前みんなに調べてもらった通り、この街にもたくさんのお店がありましたね。そこで働く人たちの様子や工夫を、実際に見て聞いて大変勉強になったと思います。このように、いろいろな場所でいろいろな仕事があるわけですが、みんなは将来どんな仕事に就きたいですか?? 今から考えてみるのも、いいかもしれませんね」

先生の言葉で締めくくられ、授業終了のチャイムが鳴って、今日の午前中の授業は終わりを迎えた。

「将来かぁ・・・」

母親手作りのたこさんウインナーを食べながら呟くのは。

「アリサちゃんとすすかちゃんは、もう結構決まってるんだよね?」

「あたしは、お父さんもお母さんも会社経営だし・・・いっぱい勉強して、後を継がなきゃ、ぐらいだけど」

「私は機械系が好きだから・・・工学系で専門職がいいなと思ってるけど・・・」

「そっかぁ。2人とも凄いよねえ・・・」

なのはは小さくため息をつきながらいう。

彼女たち二人と比べると彼女自身のことを過小評価してしまう。

人は誰しもそう考えてしまうが、彼女の場合それがあまりにもひどかった。

「でも、なのはは喫茶翠屋の2代目なんじゃないの??」

アリサが勧めてみる。

彼女の両親が経営している喫茶店。

彼女もまた看板娘として手伝うことがあるためにそのような将来もいいのではないかという。

「うん・・・それも、将来のビジョンの一つではあるんだけど・・・やりたいことは何かある気もするんだけど・・・まだそれが何なのか、ハッキリしないんだ」

たしかに、翠屋を継ぐのも将来の選択肢の一つだと思う。

しかし、本当に自分のやりたいこと・・・それが何なのか、なのははまだ分からないのだ。

むしろ子の小学生という年代から将来のことを固定化すること事態が疑問なのであるが・・・。

「私、特技も取り柄も特にないし・・・」

なのはがそういうと突然アリサが叫び何かを投げつける。

何かと思いきや、それは彼女のお弁当についていたレモンの輪切

りであった。

「自分からそういうこと言うんじゃないの!!」

「そうだよ。なのはちゃんにしかできないこと、きっとあるよ!!」

まだ9年しか生きていない少女が自らを卑下すること事態がおかしいのであるが。

決められたレールを歩くもよろし。

自らこれから生きていき、開拓していくもよろし。

流れに任せるのもよろし。

「大体!! あんた、理数の成績はあたしよりいいじゃないの!! それで取り柄がないとは、どの口が言うわけ!? ああーん!?」

そういうとアリサはなのはに飛びかかってきてほったたけをグイグイひっぱりはじめ、すずかはオロオロしている。

「だ、だっれなのは、文系苦手だし、運動も苦手らしい!!」

「だ、駄目だよ2人とも、落ち着いて!! ねえ、ねえってばあ!! それに2人とも、ほかのひとたちがみてるから、そこまでにして」

それからしばらくして、ようやくなのははアリサから解放された。

彼女に残ったのは自らにも可能性があるという期待感とアリサに引っぱられたときの頬の痛みだった。

PHASE40 夢（後書き）

ご感想お待ちしております。

おかげさまでアクセス数30,000アクセス。

これからもよろしくお願いします。

PHASE 4 1 出会い

3人は放課後、塾へと行くべく歩いていた。

「あつ、こっちこっち。ここを通ると塾に行くのに近道なんだ」

アリサが指差す方向に目を向ける。

「えっ、そうなの??」

「ちょっと、道悪いけどね」

先頭を歩くアリサが横道に入っていった、なのはとすずかも後に続いて横道に入っていく。

林道を歩きながらなのは不思議に思ってた。

アリサが見つけたはずなのに、彼女はその場所を知っている気がしたのだ・・・。

「あっ!!」

思い出したのは今朝見た夢誰かは分からないが、男の子が大きな生き物と戦っていて・・・。

（此処、昨日夢で見た場所と同じだ!!）

「どうしたの??」

「なのは??」

なのは突然が止まったのでアリサ達が振り返っていて話しかけてきた。

「あっ、ううん。何でもないの。ごめんごめん」

「大丈夫??」

「うん」

「じゃ、行こっか」

なのはが何も無いといったのでアリサとすずかがまた歩き出して、後を急いで追いかけて林道を歩いた。

>助けて<

突然なのはの頭の中に聞こえた声・・・。

それは昨日見た夢の少年の声に似ていた。

なのははまた足を止めた。

「なのは??」

アリサが再び立ち止まるなのはに話しかける。

「今、何か聞こえなかった??」

なのはは気になったので聞いてみる。

「何か?？」

アリサは分からないらしい。

「何か、声みたいな・・・」

よく聞こえるように耳をそばだてる。

「別に・・・」

「聞こえなかった、かな?？」

なのはは周りを見回し、アリサとすずかも同じように周りを見回していた。

しかし二人には何も聞こえないらしい。

>助けて!!<

「!!」

さっきより強く聞こえた声になのははいつの間にか走り出していた。

「なのは?？」

「なのはちゃん?？」

二人が呼び止めるが何故か急がないといけない気がして少し走る速さを上げた。

「はあ、はあ、はあ・・・多分、こっちの方から」

走り続けていると目の前には小さな動物が横たわっていた。

しゃがみ込んでその動物を見るとピクピクと耳が動いて、動物は顔を上げた。

すると首元に見えたのは夢で見たのと同じ赤い宝玉。

「まだ息はあるから、早く動物病院に連れて行かなくちゃ!!」

後を追って来たアリサとすずかがなのは抱えている動物を見て、動物病院に連絡を入れてくれたのだった。

動物病院にて診察が終わった。

「怪我はそんなに深くないけど、随分衰弱してるみたいね。きっとずっと独りぼっちだったんじゃないかな??」

「院長先生、ありがとうございます」

「ありがとうございます!」

「いいえ。どういたしまして」

なんとか動物病院に運び込んだ動物は一命を取り留めて、今はな

のは目の前に眠っている。

「先生、これってフェレットですよね?? 何所かのペットなんでしょうか??」

「フェレット、なのかな?? 変わった種類だけど・・・それに、この首輪についてるのは宝石、なのかな??」

「宝石みたいですけどね・・・」

院長が宝石に触るとフェレットが目を覚ました。

「あっ、起きた」

そして起きたフェレットはキョロキョロと周りを見渡して、なのは顔を見て止まった。

「ん?? 見てる・・・」

「「・・・・」」

「なのは、見られてるよ」

「え、あ、うう・・・」

恐る恐るフェレットに指を近づけると、クンクンと鼻を動かして、なのはの指をペロツつと舐めた。思わず可愛いと思った。

「うわぁ／＼／＼」

しかしまたフェレットは気を失って倒れ込んでしまう。

「しばらく安静にしておいた方がよさそうだから、とりあえず、明日まで預かっておこうか？」

「はい、おねがいします」

「よかったら、また明日様子を見に来てくれるかな？？」

「わかりました」

院長の提案に三人は元気に挨拶をする。

「あっ！みんな、塾の時間、始まっちゃうよ！？」

「え？？ホントだ！！」

「じゃあ、院長先生。また明日きます」

動物病院の時計で時間を見ると本当に塾の開始の時間まであとわずかしがなく、大急ぎで塾に向かった。

PHASE 4 1 出会い（後書き）

ご感想お待ちしております。

そろそろ魔法と出会う頃ですかね。

しかし主人公が空気だ……。はやくMSモビルスーツ登場させたいな♪

PHASE 42 お願

塾が終わり帰宅してから現在、なのはは父士郎と母桃子たちに昼間のフェレットの話をしていた。

「・・・と言うわけで、そのフェレットさんを暫く家で預かるわけにはいかないかなあって思ったんだけど・・・」

あまりこのように我俣をいったことがなかったので受け入れてもらえるか不安であった。

「んゝフェレットか・・・ってところでなんだ、フェレットってなんだ?？」

真剣な表情で考えていた士郎から返って来た答えに兄恭也と姉美由希は崩れ落ち、なのははテーブルに頭をぶつけた。

思いつきりぶつけたのでぶつけたところが紅くなっていた。

(痛い・・・)

「鼬の仲間だよ、父さん」

「だいぶ前から、ペットとして人気なんだよ」

頭の後ろに両手を回して言う恭也と眼鏡をかけなおす美由希。

そこに料理を持ってきた桃子もテーブルに着いた。

「フレットって、小さいわよね?。」

「知ってるのか?。」

「んゝつと・・・これくらいかな」

今日見つけたフレットの大きさをなのは手で表現する。

それを見ながら考えていた桃子は言う。

「暫く預かるだけなら、かごに入れておいてなのはがちゃんとお世話できるならいいかも。恭也、美由希どうかしら?。」

「俺は特に異存はないけど」

「私も」

二人とも承諾してくれた。

「だ、そうだよ」

士郎も三人が承認していることを総括してなのはに了承する。

「よかったわね」

「うん!! ありがとう」

そうして高町家にてフレットを預かることが決定された。

「さっ、冷めないうちに食べちゃってね」

そろそろ夕食にしようと準備が整った

「「はあい」」

「桃子、サラダ取ってくれるか??」

「はい、どうぞ」

「俺も」

「はいはい」

いつもと変わらない、平和な夕食だった。

PHASE 42 お願い（後書き）

ご感想お待ちしております。

PHASE 43 変わる日常

“アリサちゃん、すずかちゃん。あの子はうちで、預かるれることになりました。明日、学校帰りに一緒に迎えに行こうね。なのは”

そのように携帯電話でメールを打ち込むと送信ボタンを押す。

「送信!!」

二人にメールを送り終わって、携帯電話を充電器に差し込んでベッドに戻ろうとしたとき、なのはの頭の中になにかが聞こえた。

>聞こえますか・・・?? 僕の声が聞こえますか?? <

次に見えたのは赤く広がる波紋だった。

「昨夜の夢と、昼間の声と同じ声なの・・・」

なのははすぐに目を閉じ、耳をそばだてる。

>聞いてください。僕の声が聞こえた貴女! お願いです、僕に少しだけ、力を貸して下さい!! <

(あの子が、喋ってるの??)

なのはは夢で出てきた少年のことを思い出す。

>お願い!! 僕の所へ。時間が・・・ない。危険な・・・ <

そこで頭の中の声は聞こえなくなってしまう。

しかしなのはには行かなければいけない気がした。

ここで何もしなければとてつもなく大きなことが起きてしまうように感じたのだ。

いつの間にか、なのはは着替えて家を飛び出していた。

「はあはあ・・・はあ」

家を飛び出して、走り続けて目指したのは昼間の動物病院だった。

本当になんとなくではあるが不思議な間隔がなのはのことを呼んでいるような気がしたのだ。

一生懸命走ってようやく到着した。

なのはが中に入ろうとした瞬間、頭の中にさっきの声と同じ音が流れて、耳を塞いだ。

それから少しすると音も消えていて、周りの雰囲気が変わっていた。

それはまるで世界から、色が消えたみたい・・・。

中に入ろうとして歩き始めたなのはの視界に入ってきたのは・・・。

「あれは!?!」

昼間のフェレットとそのフェレットを追う変な黒い生き物・・・。

その変な黒い生き物が木にぶつかるとその木に逃げていたフェレットがなのはの方に飛んできたのでなんとかフェレットをキャッチした。

「何々?? いったい何なんなの!??」

「来て・・・くれたの??」

「え・・・?? 喋ったあああ!??」

突然フェレットがしゃべったためになのはは驚いてしまう。

それは当然の反応なのだが・・・。

とりあえず危険だということからなのはたちはその場から逃げることにした。

フェレットを抱きかかえてなのはとにかく走っていた。

「えっと・・・」

なのははは知りながら現在起きていることを聞くべく話しかける。

「その、何がなんだかよく分からないけど、一体何なの!?? 今何が起きてるの!??」

「君には資質がある。お願い!! 僕に少しだけ、力を貸して!!」

「資質?？」

なのは自身、自分に取り柄のない、ごく普通の女の子だと思っている。

しかし目の前のフェレットは彼女に資質があるという。

「僕はある探し物のために、ここではない世界から来ました。でも、僕1人の力では想いを遂げられないかもしれない。だから・・・迷惑だと分かっています。資質を持っている人に協力してほしい・・・」

そういつてフェレットはなのはの手の中から飛び降りた。

「お礼はします、必ずします!! 僕の持っている力を、貴女に使って欲しいんです。僕の力を・・・魔法の力を!!」

「魔法・・・」

魔法といわれてなのはよくゲームや御伽噺に出てくるもののことかと思ひ出す。

いきなりそういわれてもはい分かりましたなどといえるわけがなかった。

しかしそうこうしているうちにもなのは頭上からさっきの生き物が降ってきた。

なんとか無事に避けることができたが、追いつかれてしまった。

「お礼は必ずしますから!!」

フェレットは再度懇願する。

「お礼とか、そんな場合じゃないでしょ」

フェレットはなのはに首から下げている赤い宝石を渡した。

それを手に取ったそき、何かとても暖かな間隔がその手に広がった。

「温かい・・・」

「それを手に、目を閉じて心を澄ませて。僕の言う通りに繰り返して」

なのはは一度黒い物体・・・おどましい姿をした異形を一瞥し頷く。

「いい?? いくよ!!」

「うん!!」

そしてなのははユーノの言葉を聞き、それを繰り返すようにして言葉にする。

「我、使命を受けし者也」

「我、使命を受けし者也・・・」

「契約の元、その力を解き放て」

「えと・・・、契約の元、その力を解き放て」

なのはの胸の奥で何かが大きく鼓動した感じがしたそしてそれとともに手に持っている宝石が鼓動した。

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「そして、不屈の心は」

「そして、不屈の心は・・・」

「「この胸に！この手に魔法を！！レイジングハート、セツトアツプ！！」」

『スタンバイレディ、バリアジャケット展開』

赤い宝石から声が聞こえると、なのはのいる周りはピンク色の光に包まれた。

「な・・・なんなの」

なのはは自分を包み込む光に戸惑っていた。

「なんて魔力だ・・・そんなことより落ち着いてイメージして！！キミの魔法を制御する、魔法の杖の

姿を!!そして君の身を守る強い衣服の姿を!!」

ユーノは感じ取っていたなのは魔法の資質の高さが確信に変わると同時に、自身の予想を遥かに超えるものだったことに舌を巻く。今にも襲い掛かろうとしている異形に気づく慌てて叫ぶ。

「そんな。急に言われても・・・」

なのはは戸惑う。

「落ち着いて。なのはの中で一番強い物をイメージするんだ。そうすればわかるはずだから」

頷きなのはは目を閉じてイメージを広げる。頭に思い浮かんだのは白い柄と紅い宝石を持つ杖だった。

そして、服は一番イメージしやすい聖祥大付属の制服に近いもの。

「決まったの!!」

イメージを決めると更に光が強くなりその光に包まれてその光が粒子になるとなのはが着ている服は聖祥大付属の制服に近いもので手にはイメージした杖と全く同じものがあった。

「成功だ!!」

ユーノは衣服が替わったなのはの姿を見て喜ぶ。

「ふえ・・・ふええ!? 嘘お、何なのこれえ!! 私ほんとに魔法少

女になっちゃったの!？」

なのは自身に起きて劇的な変化を受け止め切れていないようだ。

しかし異形はそんな二人を待ってはくれない。二人に対して襲い掛かろうとしていた。

「ふええええ」

なのははどうすればいいのか戸惑うばかりであった

PHASE 43 変わる日常（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 4 準備

ハヤトは現在大きな工場に来ていた。

周りには技術者のような人物たちが彼を囲んで色々話し込んでいる。

つい先日月村家とバニングス家との会合ではやとが元の世界に戻るための機体を製造することが決定していた。

設計図などはそのうわさを聞きつけた技術者たちが興味でくみ上げたものに手直しを入れたもので決まり、必要材料や、その他のOSなどを仕事の合間にハヤトが作り上げていた。

確かに目には見えない魔力はこの世界にかかわらずすべての世界にある。

しかしそれをエネルギーに変換するドライブシステムを作れるかどうかが問題だった。

一応工業科も出ていたために仕組みについてはハヤトは知っていたがそれができたとしてうまく動くかどうかはやってみなければわからないというものだった。

武装にしてもさまざまな思案が飛び交った。

そしてその中でこった機体のコードネームである『ガンダムヘブンスソード』から複数本の剣などの重武装した機体になることが決められた。

もちろん射撃機能も付けられるなどオールラウンドに戦えるようにもなっていた。

「いや、まさか自分の手でロボットを作れるだなんて」

「ホントホント、夢じゃないかって思えるよな」

「けどまさか本当に御伽噺だけだと思ってたけど本当にあるんだな」

ここにいる技術者たちは口々に言う。

他言無用ということで彼らだけに話したハヤトの過去。

異形との戦い。

そんなSFじみたものが存在するのかと自分たちの世界はまだまだ狭いなと思わされるばかりであった。

魔法などと本やアニメでしか知らなかった彼ら。

それは今まで人を悪から守るものだとはかり思っていた。

おそらく彼らにも息子や娘が居ればそう思うだろう。

しかし話からすればそれはなんら兵器と変わらないというものだった。

なら魔法少女などはただ馬鹿でかい大砲を持っている兵士と変わ

らないということだった。

つまりは何でも良くも悪くもなるということであり、それを決めるのはいつもそれを扱うものの心しだいなのだ。

悪しきものが使えばそれは人を不幸や悲しみにつきおとそ者でしなくなり、善きものが使えばそれは人に幸せと笑顔を与える。

完成図はでき、それに必要な経費なども双方の家は笑顔で出してくれるということだった。

なんとも気前のいい人たちだと思ったが、今どのくらいの復興をなしているか、それを知りたかった。

始めはもう居場所がなくなってしまったと思ったが、もしかすると自分にもできることがまだあるかもしれないということで一度戻ろうかと思っていた。

完成するれば何とかできると思っていた。

「ガンダムエクシア・・・これが、俺の新しいガンダム」

設計図には純白の四肢、サブに青色という配色のガンダムが描かれていた・・・。

PHASE 4 準備（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 45 戦う存在 上

夜のことだった。いつものように月村家で居候としているハヤトは夕食を貰い、入浴後用意してもらっていた自身の部屋でMSモビルスーツに搭載される武装についてパソコンと睨めっこしながら考えていた。

すでに夜遅いことから周りは静かである。窓を開けているためにそよそよと流れ込んでくる風。

その風になびかれ小さく音を立てる草木。夜空には月が出ており、星星がきらめいている。

「!？」

突然ハヤトのパソコンのキーをタイピングする手がぴたりと止まった。

「なんだ今のは・・・??？」

胸がぞわぞわと嫌な感じをキャッチしていた。いつの間にか月は流れてきていた雲によって隠れてしまい、外はやや暗くなる。

何か招かれざるものがやってきたような感じである。どこことなく流れてくる風も嫌な感じがする。

音が聞こえる……。声のようだ……。周りを見ても誰もおらず声を漏らすようなものはない。しかし確かに耳に入ってくるのだ。

（なんだ・・・この音は・・・この声は）

聞こえてくるのは何かを訴えている声だった。何かあってはならないものが来たと。礼脈に歪みが出ていると。空気が悪いと。

この声の主は一体なんだろうか。助けを求めている。

（なんだ・・・なんなんだこの声は）

あまりの声の数に、無理やりねじ込まれる情報という名の映像に頭が、思考が追いつかない。

「ぐあああ・・・ううう・・・あがぁ」

ひどい頭痛をもよおす。声が大きかったのかバタバタと足音が聞こえらるとぼんつとが開けられ忍、ファリン、ノエル、そしてすずかがどうしたのかと血相を変えてきたのだった。彼女たちに映ったのは頭痛に苦しみながら床に倒れているハヤトだった。

「ハヤト君！？どうしたの！？」

慌てて声をかける忍。しかしハヤトはうなるだけで言葉にならない。

「ファリン、すぐに救急車を！」

「はい！！」

忍の指示に頷くとすぐにファリンは走り出そうとしたが、彼女を止めるハヤト。

「だい・・・じょ・・・うぶだ」

途切れ途切れに苦しそうに喋るハヤト。冷や汗が滝のように流れ落ちる。明らかに大丈夫ではないことが分かる。

「どう見たって大丈夫じゃないわ。無理しないで今は黙ってて」

「そうですよ。こんなに顔が真っ青です」

忍とすずかは立ち上がりとするハヤトを押しとどめる。

「聞こえるんだ・・・」

「何が??」

呟くハヤトに忍が聞き返す。

「なにか、危機を知らせる声が・・・この町に危険が及んでいる」

それを聞いて二人のメイドでアルファリンとノエルを見るが彼女たちもまったくなんのことだか分からないという様子。

特に危険だと思われることも聞いているわけではないが、早とは確かに何かを感じ取っているようである。

（私たちには分からない何かを魔法に関わっていた彼は分かるってことかしら・・・??）

忍はとある仮説を立てる。

「ちょっと待ってください」

ノエルが慌てて立ち上がり、歩き出そうとしているハヤトを抑える。汗をかき、ぎらぎらと紫色の眼はまるで獲物を狙う肉食動物そのもののように見えた。

「なにをしようとしているのですか!？」

「いるんだ・・・」

「何がですか??」

慌てて同じく止めようとするファリンと何がきたのだろうかと思う。うすずか。

「この世界にいるはずのない・・・得体の知れないもの、あつてはならないもの・・・」

それが具体的になんなのかは分からないらしい。それでもそれがこの鳴海にきているということだ。いったい何の目的で、何をしようとしているのかは分からないが・・・。

そして机にあった銃型の擬似GNコアの入ったデバイスを手に取る。

「ちよつとどこ行こうとしてるの!？」

先ほどより顔色が幾分か良くなったハヤトがとうとう部屋から出て行こうとするのを止める。しかしその制止を振り切りハヤトは出て行く。

いかなければならないような気がしてそれがハヤトの背を後押しする。

いつの間にか彼の歩いていたゆっくりな足取りが、鍛えられた俊足を飛ばして気配のする方向へと飛ばしていた。

PHASE 45 戦う存在 上（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 46 戦う存在 中

しばらく走っていると突然夜空を桜色に染め上げる光の柱がほとばしる。紛れもない、消して見まごうことのない魔力の色だった。

（発動・・・魔導師が来ているのか？？管理局か・・・）

色々と予測が立てられるがいくら魔法文化がなく、管理外世界だからといって魔導師が絶対にいないとは言い切れない。

いつでも戦闘ができるようにチャージを始める。

「！！」

そして角を曲がったところでその魔力の柱の場所に行き着く。そこには先日誘拐事件にかかわり、助け出したはずである一人の少女が光の中にいたのだ。

そして光が収まるとそこにはコスプレのような服を身にまとい、その手には杖のようなものが握られていた。

（初起動・・・??）

そんな風に考え、何かがうごめくを見る。そしてまさかというように目を見開いてそれを見てしまう。

そこにいたのは生物であった。しかしそれは子の世界にはあるはずもない醜い姿をしているものだった。皮膚は灰色にただれたよう

な垂れ下がったしわだらけのものである。目はあるのかないのか分からぬ。手足には獲物を引き裂くような鋭い爪がある。

目の前の少女も魔法を発動させたはいいがそれ以外何をしたら宵の川から無いという様子だ。

またハヤトも目の前の異形を前に、何故いるのかと困惑していた。そんな異形はこちらのことなどお構い無しにその鋭い爪をなのはに向けて振り下ろしてきた。

「!!」

「く!!」

反応するも遅れて動けないのは。そんな彼女の肩にいたフェレットが緑色の障壁を出してその攻撃を何とか防ぎきる。しかしそれだけでかなりの疲労を感じているようだった。

「どうすればいいの!?!」

初めての魔法。しかしテレビや本のようにうまくいかない。いく苦労がない。そんなに簡単にできるなら、訓練などはいらない。

再び襲いかかる爪を今度はデバイスのオートプロテクションが発動し、なんとかやり過ごすが、衝撃で吹き飛ばされる。

「つう・・・」

「大丈夫!?!」

フレットが心配そうにいう。よろよろと立ち上がるのは。しかし目の前の異形の姿と何をすればいいのか分からないということに困惑している。

「心を鎮めて！！君だけの魔法があるはずです！！」

「そ、そんなこといわれても！！」

なのはは振り下ろされる爪をデバイスが常時発動させる障壁と回避することで何とか時間を作っているがそれもいずれは通用しなくなる。

「あれが取り込んだジュエルシードを封印できれば・・・」

みずからが何もできないことを悔しく思うフレット。何度目かの爪による攻撃が繰り出され、それ

も障壁に阻まれるが今度は足についたそれで更に追撃してきた。もともとオートであることと、彼女がまだ魔力の操作になっていないということもあってひびが入る。それでも魔力を注げば何とかなったかもしれないが彼女はまだその操作を習っていない。ついに輝が大きくはいる。

「きゃああああ！！」

「うわああああ！！」

障壁を破られ吹き飛ばされる。追撃に近づきながら異形が腕を振り下ろしてくる。やられると思いたいのには目を閉じる。

しかし次に瞬間自分が地面を離れ、浮いているような感じがした。

恐る恐る目を開けると抱き上げられていることに気づく。誰だろうと見上げると茶髪の寝癖頭にやや釣りあがった紫色の眼と整った青年の顔だった。

「あ、あの・・・」

なのはは戸惑う。突然現れた整った顔立ちの青年なのだから。まさに彼女にとってはヒーローのように見えた。しかし彼の纏っているのは暖かなものというよりは少しばかり冷えているものだ。

「どいてろ・・・」

「え・・・??」

「そこをどいて、封印だけに集中しろ」

「ふえ?? あ、はい」

なのははハヤトから邪魔だといわれ、後ろに下がる。そしてフェレットに言われたように今作られた時間を使い、自身だけの魔法を探す。

瞳を閉じて、心をしずませる。真っ暗な世界が続く。何も希望のないくらい世界。しかしなのはは手探りでそれを探す。

あるはずである自分だけの希望を・・・。

その間ハヤトは必死で異形に対して牽制を行っていた。今の武装である銃型のデバイスとナイフ型のデバイスだけではどう戦っても

勝ち目はない。

炸裂弾を放っても吹き飛んだところから再生するのである。

「ちい、ジュエルシードか」

ロストログアであるジュエルシードの願いをかなえる力が発動しているらしい。しかしそれは純粹なものではなく歪んだものしか受けられない。そして歪んだ形で具現化してしまうのだ。

（そもそもなぜ異形がこの世界に・・・??）

いるはずのないものの存在。それが一番の疑問だった。振り下ろされる鋭い爪に対して、小さなナイフ型のデバイスで受け止め、反転して踵落としを決めて腕を引きちぎる。詩化すかさずちぎれたところから高速回復して延びてくる。なんとかかわそうとするも爪が服を引きちぎり、皮膚を掠める。

「あぐああ・・・!!」

激しい痛みと共に熱を感じる。そうだ・・・あれには溶解の効果もあったのだ。ジュクジュクと煙を上げている腕を押さえる。

その頃激しい戦闘による轟音を聞きつつなのは必死に探していた。そして闇の中に一筋に光を見つける。

「あったの!!」

「やったあ!!」

そしてそれを掴む。そしてそれが頭に流れ込んでくるような感覚があった。そして瞳を開け、杖であるデバイスを構える。

「レイジングハート行くよ」

『了解、シーリングモードに移行します』

機械音声が聞こえると杖の形態が変化する。

「行けます!!」

なのはは戦っている少年・・・ハヤトに向かってそういう。ちらりとこちらを一瞥すると再び異形に対して走り出す。

襲いかかる二本の腕を次々と炸裂弾にて肉片に変える。更に再生が始まらんとする前に次々とからだに炸裂弾を放つ。

打ち込まれたところから次々と肉片に変わっていき、再生するところが多いことから先ほどより遅く感じる。

そうしてデバイスであるレイジングハートを構えたなのはは詠唱に入る。

「リリカル、マジカル!! 封印すべきは忌まわしき器、ジュエルシード。ジュエルシード、封印!!」

『シーリングモード、セットアップ』

杖・・・レイジングハートから光の翼が現れて、異形を光の帯が

動きを封じる。そして、その額に現れた21の数字。

『スタンバイレディ』

「リリカル・マジカル。ジュエルシールド、シリアル21!!封印！」

『シーリング』

異形を縛っている光の帯とは別の光の帯が異形を貫き、その場から異形は姿を消した。そして異形がいた場所から何かがキラリと光った。

「あっ!!」

なのははその光宝石を見つめつつ、指を指す。

「これがジュエルシールドです。レイジングハートで触れて」

フェレットがいうとおり、なのははレイジングハートを向けると、宝石・・・ジュエルシールドはレイジングハートに吸い込まれていった。そしてなのはの服がいつもの私服に戻っていた。左手にはさっきまで杖だったレイジングハートが赤い宝石になっていた。

「あ、あれ??終わったの??」

「はい。貴女たちのおかげで、ありがとう・・・」

そう言うとフェレットはばたきと倒れてしまった。

「ちょっと大丈夫!？」

なのはがフェレットに駆け寄っても、動かなく・・・どうやら気を失っただけの様だ。

「逃げるぞ」

「ふえ?？」

突然のことにすっとなきよんな声をあげてしまう。どうしてだろうかと思っているとどこからか聞こえてきたのはパトカーのサイレンの音だった。

「も、もしかしたら・・・私たちが此処にいたら大変アレなのでは?？」と、とりあえず・・・ご、ごめんなさい!!」

そうして二人はその場から逃げ出したのだった。

PHASE 46 戦う存在 中（後書き）

ご感想お待ちしております。

初めて手にしたその魔法の力。

彼女の運命は^{フエイト}確実に変わり始めていた・・・。

PHASE 47 戦う存在 下

あの場所から一生懸命走ってなのは達は今、公園に来ていた。息の切れたなのはフェレットを抱えたままベンチに座っている。

「すみません・・・」

するとフェレットが起き上がった。

「あっ、起こしちゃった?? ごめんね、乱暴で。怪我、痛くない?」

なのはは氣遣うようにいう。

「怪我は平気です。もう治っているから」

目が覚めたフェレットは器用に自分の体に巻いた包帯を外している。

「ホントだ。怪我の跡がほとんど消えてる。すごい・・・」

これも魔法の力ということからなのはは感心している。

「助けてくれたおかげで、残った魔力を治療に回せました」

フェレットは感謝しますと頭をぺこりと下げる。

「よく分ないけど・・・そうなんだ。ねえ、自己紹介していい?」

「あっ、うん」

「私、高町なのは。小学校3年生。家族とか仲良しの友達は、なのはって呼ぶよ」

「僕は、ユーノ・スクライア。スクライアは部族名だから、ユーノが名前です」

「ユーノくんかぁ、可愛い名前だね・・・あれ??」

「どうしたんですか??」

なのははキョロキョロと周りを見回す。それにユーノがどうしたのだろうかと聞く。何故かさっきまで一緒に走っていたハヤトが何処にもいないのだ。

「何所に行ったんだろう、あの人??」

「さっきのあの人ですか??」

「あっ、うん。名前も聞いてなかったからね」

「あの人どこかで見たことあるんだよね・・・」

「そうなの??」

頭をひねって思い出そうとするも今の今までいろいろあったために混乱して思い出せない。

「魔法の事を知ってた……。それに持ってた銃に使ってた魔法。ただ者じゃない」

そして入り口を見ると先ほどの青年がポケットに手を入れながらぶらぶらと帰ろうとしているところだった。

「ちょっとまってなの」

なのはは彼女の声が聞こえていないのか無視して歩き去る少年をユーノを肩に乗せたまま追いかける。

「ちょっと待ってなの」

「なんだ??」

なんとか追いつき、服の端をつかむ。青年は早く帰らせろと興味なさそうに淡々と言う。なのはよりも身長が高いためか睨まれているように見え、少々おびえてしまう。

「貴方は、一体……」

ユーノがなかなか話しかけないのはにかわって聞く。

「別に……。そこらにいる人間と変わらない」

「ええっと、何で魔法を使えるのですか??」

「デバイスがあるから」

「あなたは管理局員ですか??」

「違う」

「この世界は魔法文化がないはずですが?？」

「それは知っている。俺は別世界から来たからな」

「別世界・・・そんなものがあるの?？」

「あります。さまざまな世界・・・。魔法があったり、それこそ架空の存在のものが存在したり、後はすでに人が住めるところではないところもあります」

「ほえ」

なのはは今までの自身の常識が一気に壊されたことで、戸惑いと共に、興味もあった。

「えっと・・・」

なのはが再び話しかけようとすると少年は手でそれを遮る。そして腕に嵌めている時計を見せ。

「詳しい話は、また今度だ。今はもう遅い」

よく見れば両親や兄弟に何もいわずに出てきてしまったなのは。おそらくいなくなったことに気づき、心配しているだろうと容易に想像できた。

その後家まで一言も喋らずに気まずい雰囲気のまま、なのは、ユ

「ノ、そしてそんな二人をハヤトが高町家まで送り届けたのだった。

PHASE 47 戦う存在 下（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 48 初めての我俣 上

現在ハヤトは高町家のなのはを除く4人の正面に座っていた。

小学生にとってはもう寝る時間だというのになのはが突然慌てて外に出て行くのを気配で感知していた父の士郎と兄の恭也。

その後帰ってきたと思ったら預かる予定であったフェレットと何故かなのはよりも年上の少年も一緒だったのだ。

そしてそれを見た瞬間に京谷はもしかしたら彼がなのはを連れ出したのではないかと思い、小太刀を取り出して切りかかった。

それに対してナイフ型のデバイスを起動させ、受け止める。

「何をする・・・」

「お前がなのはを連れ出したのだろう!？」

刹那、風の切れる音と共に恭也の姿が消える。目を見開いて驚くハヤト。すると突然風が語りかけるかのように警告を促す。

>右<

「!!」

ほとんど反射的に左へと体を傾ける。シュツと小太刀が突き抜けた。しかしそれが射抜いたのはハヤトの残像であり、数センチ遅れていれば死んでいたかもしれない危険な状況だった。

「「なあ!？」」

それを見ていた士郎、恭也は驚きを隠せない。なのはとユーノに
関してみれば、兄が突然喧嘩を始めたことに戸惑っている。

「俺は何もしていない」

「・・・」

少年の自身を睨む目を見て悪いものではないということを感じ取
る。そしてそうなのかとなのはにたずねると、慌てて顔を上下させ
頷く。

「そうか・・・いきなりすまなかった」

「いいえ・・・では俺はこれで」

いきなりの襲撃に詫びを入れる恭也。別にいいといい、ハヤトは
なのはとユーノを送り届けたことで帰ることにした。

「ちょうどいい、なのはが何をしていたのか聞きたいからね。君か
らも色々聞きたいから中に入ってくれないか?？」

士郎の提案になのはとユーノはあからさま過ぎるくらいにぎくり
としている。ハヤトは渋るがなのはとユーノの懇願するような視線
に負けしぶしぶそれを承諾した。

PHASE 48 初めての我俣 上（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 49 初めての我俣 中

そして現在なのはと隣に座り、ユーノはなのはのひざの上にちょこんと座りながら家族と対面していた。

「とりあえず、まずはなのはを連れてきてくれてありがとう。ええっと名前は・・・」

「ハヤト。ハヤト・ブリッグス」

士郎が聞いてくると淡々と感情のない声でそれに答える。そしてハヤトという名前から以前起きた誘拐事件で娘のなのはを含む3人の少女を無傷で助け出した少年の名前だと気づく。

どんな容姿をしているかまでは聞かされていなかったが、忍から現在月村邸に衣食住を提供する代わりに正規社員として働いていることを聞いていたのだ。

そして娘、妹の命の恩人だと気づくと慌ててお礼及び先ほどの無礼を謝る。気にするなということと言われ、話を進めようと決める。

観察眼の鋭い二人でも、ハヤトの感情をまったく読めない。いや、かすかに読めたとしても、いい加減帰してくれないだろうかという苛立ちにも似たものだった。

それを知ったときには苦笑いしかできなかった。それと同時にハヤトがどこかで鍛え上げられたエージェントにも見えた。

実際先ほどの戦いにおいても初見で神速からの攻撃を危機一髪で

回避するなど常人では語られない動きを見せた。

それにハヤトの目には言葉とは裏腹に悲しみと怒り、それに戦うものとしての戦士の意志が渦巻いていた。

それはただ強いものが持つものではなく、悲しみと厳しさが入り混じる戦いを潜り抜けてきたものでしかもてないそれだった。

士郎自身そしてとなりに座り、彼を睨みつけている恭也もそしていずれ美由希も持つかもされないそれ。

「ハヤト君。君はどこかの軍人かな?？」

士郎はなるべく優しく、それでいて探るように聞く。ちらりと閉じていた紫色のアメジストのような瞳で士郎を一瞥すると再び瞳を閉じ、フウツとため息をつく。

「ああ」

「どこの国かな?？顔立ちは日本人のようだけど・・・」

「『アイオリス』だ」

「!?!」

「「?」?」

驚いているのは異世界から来たユーノであり、高町家のものは皆がどこだそれという表情でいる。

>駄目です!! 異世界のことを知らない人たちに話しては!!<

ユーノは必死で念話にてハヤトに叫ぶがまったく聞こえていないようだ。なぜならハヤトは魔法は使うがそれに必要なものがないかった。

“リンカーコア”

空気中に無味無色であるはずの魔力粒子を自身の魔力に変換する機構のことだ。そのことに気づいていないためユーノは無駄な努力を続ける。

更にアイオリスという名はとある管理外世界の名前であった。ユーノは実際に見たわけではなく聞いただけではあるがその世界はすでに半壊していると。

その犯人がひとではなく異形と呼ばれる生物兵器だったというにとらしい。管理局が出向いたがすでに魔導師にどうこうできる状態ではなかったとも言われている。

それよりもこの地球という世界には魔法文化がない。その現地人に魔法の存在を知られるわけには行かないのだ。

実際ユーノはすでにそのことにより、なのはを巻き込んでしまった。これ以上巻き込むわけには行かないと思っていたのだ。

ワタワタと慌てるユーノに気づいたのはどうしたのかと思うすると耳ではなく直接頭に響いてくるユーノの声。念話で話しかけてきたのだ。

＜まずいよまずいよ＞

＜ど、ど、どうしたの？？＞

＜ハヤトさんが言ったアイオリスって別世界のことなんだよ＞

＜ふえー！？じゃあ、ハヤトさんもユーノ君とは違う世界だけど異世界人なの？？＞

＜そうだよ。いや、それどころじゃない。魔法のことをいわれどと困るよ＞

＜そうだね。お父さんたちを巻き込みたくないの＞

しかしそんな二人をよそに話は続く。

「アイオリスという国も、組織も聞いたことはないな」

「父さんが知らないなら俺達を知るはずはないな」

「そうだね」

高町士郎は表では喫茶店のマスターとしての顔を持つが裏ではボディーガードをこなすなど、裏世界でも有名である。そんな彼もその仕事上世界を回ることもありいろいろ知っているのだがそのアイオリスについては知らなかった。

無論知るはずもないのだが・・・。

「アイオリスは・・・」

「お母さん、お茶欲しいの!!」

「あらあら、もうなくなってたのね」

なのはの注文にすでに全員のお茶の入っていたコップが空になっていたので台所に行く桃子。

「で?? アイオリスとは一体??」

「俺の・・・」

「ねえねえ、明日の天気予報知りたいからテレビつけていい??」

「ちょっと待ちなさいなのは。それに寝る前に確認していただろう??」

「そうだったの、にゃはは」

父士郎に言われてそういえばそうだったと苦笑いなのは。しかし彼女は心の中では焦っていた、これ以上どうやってごまかせばいいのだろうか。

「さっきからどうしたのなのは?? 焦ってるように見えるけど・・・」

姉の美由希が心配そうにいう。

「なのは、何かあるなら言ってみなさい」

「そうだぞ。何もいわなきゃ分からないからな」

「うう・・・」

「・・・」

諭すようにいう士郎と恭也。もはや断崖絶壁、背水の陣、絶体絶命の状態であるのはとそんな空間でも無言を貫くハヤト。

戻って来た桃子はどうしたのだろうかと頭をひねる。

>ユーノくんごめんなの。私だとこれ以上は・・・<

>なのはが悪いんじゃないよ。気にしなくてもいいよ<

>それよりもどうするの?? お父さんたち何か私たちを疑ってるよ・・・<

>ううう・・・ハヤトさんはもう包み隠す気はないようですし・・・<

>でも・・・<

>うう・・・<

なのはたちが百面相している間、ただその様子を苦笑いしながら見つめている両親と兄妹。

ユーノとしては魔法を知られ、なのはの家族までも巻き込むわけには行かないと思っていた。

「ええっと・・・」

なのはただでさえ威圧感の大きい父と兄からじっと見られているのだ、なかなか言い出せないのは仕方のないことだった。

「あのね・・・私」

更に威圧感が増す。

「士郎さん、恭也。少し落ち着いたらどうですか??」

「お父さんと恭ちゃん、ちょっと怖いよ??なのは、怯えて何も言えなくなっちゃうよ」

隣から援軍といわんばかりに桃子と美由希が言う。そうだなと二人は大きく息を吐くとなのはの言葉を待つ。

「さっき出て行ったのは・・・」

それからさっきまで起きたことを話した。最初に今朝見た夢から。その後塾に行く途中ひざの上のユーノが倒れているのを見つけ、アリサとすずかと一緒に病院に送り届けたこと。ユーノを見つけることができたのはどこからか声が聞こえたからということ。夜にまたその声が聞こえて、行かなければいけないと思い、勝手に出て行ったこと。

「僕が彼女を巻き込んでしまいました。すみません」

突然ユーノテーブルに乗ると謝罪する。ぽかんと高町家の4人は

ユーノを見つめ、数秒無音が続く。

「「ふえ・・・」」

「「ふえ??」」

「「フレットが喋った!？」」

PHASE 4 9 初めての我俣 中（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 50 初めての我俤 下

「「あわわわ」」

「・・・」

まともな反応だろう。いくら幾多の戦いを潜り抜けた士郎でも、日ごろから鍛錬に余念がなく師弟同士の恭也と美由希でも、受け止める器量の広い桃子でもさすがに喋る動物に対しては驚かざるを得なかった。

ユーノは落ち着きを取り戻したところで自分もまた異世界から来た人間だということを言う。今はこうしてフェレットの姿ではあるがこれは燃費の問題でこうしているのだということを伝える。

なのはを巻き込んでしまったのは自身が輸送していたものが詰まった船が謎の襲撃に合い、輸送していたものがこの地球に落ちてしまったのを拾いにきたのだが、如何せん、自身に戦闘能力がほとんどないことで返り討ちに会い、更に魔力がなくなってしまうために一人ではどうしようもない状況になったためにどこかに魔力を持つひとがいまいかと必死に念話を飛ばし、助けを求めたということ。それに気づいてくれたのがなのはだったこと。

そして先ほどなのはに救われ、ようやく1つ見つけ、回収する事ができたということだった。

「・・・ということなの」

「・・・ということでした」

言い終えるとそれぞれの表情はさまざまだった。考え込むようにして腕を組み、目をつぶっている士郎。自分の娘がそんな危険な目にあっていたなどとは知らなかったと聞いて生きた心地のしないでいる桃子。姉として心配である美由希も同じであった。そしてあからさまなほどに反応したのは兄である恭也だった。

「貴様！！貴様がなのはをそんな危険な目にあわせたのか！！」

「ひい！！」

小さなフェレットの体がぴんと直立不動してしまいうくらいに恐怖を感じていたユーノ。ここで更に何かをしでかせば一瞬にして先ほど彼が見せた神速で首を跳ね飛ばされるだろう。

なのはもまたこの様にあからさまに殺気を放つ兄の姿を見たことはなかった。子の場での殺気に耐えられているのは彼に御神流を教えた父士郎とそんな恭也と互角に戦えるハヤトだけであった。美由希はなんとか耐えられる状態だが、なのはに至っては恐怖で顔面蒼白である。

「覚悟はできているな・・・」

「あ・・・ああ・・・」

低くそこからうぐる様な声だ。もはや殺気だけで小動物を殺せるのではないかと思えるくらいである。

「そこに直れ！！叩き切る！！」

取り出した小太刀。フェレットを斬るには十分すぎるだろう。

「やめなさい、恭也」

士郎が重く口を開く。

「だけど、父さん!!」

それに対して今にも切りかかろうとする恭也。

「落ち着け!!」

「ぐ……。分かったよ」

一括する士郎とさすがにそんな父に反論できない恭也。彼が本気を出してもまだ父には遠く及ばない、それを知っているために自身の感情を押し殺し、黙り込む。だが睨みだけは絶えずユーノに向けていた。

「なのは」

「は……。はい」

士郎が優しく話しかけるが先ほどのこともあり、いつも以上におとなしくなっているなのは。

そんな彼女を見てやりすぎたとはつの悪そうにする恭也。しかし先ほどの行動は兄として可愛い妹思えばかりのものだった。仕方ないといえば仕方ないのだ。ユーノも運がなかったというしかない。

「黙って出て行ったことは何も言わないでおこう」

「父さん!？」

「落ち着け」

むしろ注意するべきだといいたい恭也。しかし士郎は落ち着けという。そして再びなのはを見る。

「でもなのはがそんな危険な目に会うのはお父さんたちは嫌なんだ」

「うん・・・」

家族なのだから当然だ。家族に要らぬ心配をかけてしまったことを負い目を感じる。

「だからこれ以上その・・・ロストログアや魔法にはかかわらないで欲しい」

それは士郎だけではなく家族全員の意見だった。そんな自分たちの知らない未知の力を娘や妹が得たのを知り、今後彼女にどんな影響を及ぼすか分かったものではない。メリットもあろう、それによって多くのひとが救うことができ、それを専門にしている組織や世界があることを聞いていた。

大きくなればその組織に入りたいとも言いかもしれない。実際魔法について話しているときのなのはの目は欲しかった玩具を買い与えられた子どものようにきらきらと輝いた瞳をしていたのだから。

それを取り上げることはいささか心苦しい。しかしそんな危険か

もしれないものを見過ごすことは彼らにはできなかった。

更にそのロストログアにかかわることで命の保障もできないのだ。かわるなら訓練をきちんと受けているものならいざ知らず、なのはなどまったくの素人がかかわっていいものではない。

“ 才能がある ”

先ほどユーノが話しているときなのはに託した理由の1つでもあるらしい。確かに才能があればその道に進むものは多い。スポーツの才能があるならスポーツの世界に。プログラミングの才能があるなら電子機器の世界に。音楽の才能があるなら音楽の世界に。

しかし才能があればそれができるだろうか。確かに上達は早いだろう。だがなのははまだ9歳の少女である。まだ善悪の判断もろくにできない純粋な存在。

そんな彼女が若くして戦場のようなところに出て行けるだろうか。目の前のものが善か悪か。

命の重さもまだはっきりと知らない少女が……。更に彼女が持つそのデバイスというものははっきり言って凶器である。

魔導師について聞いた。そのことについてはユーノだけではなく実際に戦っていたハヤトにも聞いた。

淡々とだがその危険性について話してくれた。二人はそんなことは無いといったが、どんなものでもひとを殺せる凶器となる。それがたとえ非殺傷という安全装置を付けられたものだとしても、痛いものは痛い。鈍器で叩けば骨は折れるしそれが首だと即死である。

槍でさえ突き刺せば痛い。それによって気絶したまま空から落ちたら即死である。

それを聞いてまだ安全だといえるかといわれた何もいえない。非殺傷がついたデバイスは所詮ゴム弾と同じだという。

それをひとに向かって撃てるのかと。それをする覚悟があるのかと。そんな状況にはならないなどというおうとする二人に対してロストロギアの有用性についていつてやった。

今回のロストロギアであるジュエルシードなど、願いをかなえる危険な代物である。それをみすみす逃しておくものがあるだろうか。

理由は違えど喉から手が出るくらい欲しいものである。更に出会う魔導師が指名手配の魔導師や違法組織のものだったらどうするかと。

こちらがいくら論じたとしても話を聞く相手ばかりではない。むしろ裏組織をしらな過ぎる彼女たち。

「うん・・・」

それを聞いてほっとする家族。しかしきつと覚悟を決めた表情で4人を見つめるのは。

「お父さんたちがいうことも分かるの。でも、でも早く回収しなきゃみんなに危険が及んじやう」

「そういうことは専門家に頼めばいいんだよ。私たち素人が手を出していいものではない」

「そうだけど……。でも専門家の人たちが来るまでに何かがあったら……」

「確かにそうだが、そうだ、ハヤト君はこの手に関しては専門外なのかい??」

「いや??」

「もしよければというよりは私の押し付けになってしまうかもしれないのだけれども」

「代わりに俺がやれと??」

「なににもできないことが悔しいが、なのはが傷つくのは困る。すまないが俺からも頼む」

「お願いします」

「どうか、お願いします」

高町家4人をお願いされ、最初は嫌だというようにいつも以上に不機嫌なオーラが大きかったハヤトだがさすがに断れないのかハアっとため息をつくど了解したと小さく呟くにとどまる。

「なら私も手伝うの」

「あ、僕もです。原因は僕です。最後までやらせてください」

なのはとユーノが食いつく。ハヤトは一応そのような仕事もして

きた。現在は今まで使っていたものではないが並の魔導師なら対術だけでも十分戦えるくらいの技量があった。

それで十分かもしれないが、先の戦いのように役割を分担すればいいのではないかと思っただった。

「いい加減にしろなのは。ボランティア感覚でできるようなことじゃないって分かっているだろう!!」

「分かっているの!!でも、やりたいの!!やっと見つけた私の・・・私の・・・」

徐々に声が小さくしぼんでいく。しかしそれでもなのはが言いたいことは家族には伝わっていた。

彼女はお世辞にも兄や姉と比べて運動神経はいいほうではない。持って生まれた才能もあるわけではない。

しかしそんな彼女がこの世界で持つものは少ない、もしくはないかもしれない力を得る。

有頂天までは行かないがそんな誰も持たない才能があるということとから嬉しいのだ。自分にも何かができるということが、何よりも彼女にとってうれしいことだった。

今まで我侭と取れる我侭を言わなかったのは。ずっと胸の奥底に押しとどめていた。おそらくこれが家族に対する初めての我侭なのかもしれない。

それを無碍にしたくないという思いと共に傷ついて欲しくないと

いう思いがあつた。

「ハヤト君・・・」

士郎が申しわけなさそうな表情で言う。その意図を読み取るハヤトは盛大なため息を吐く。

そうしてなのは主に封印のみの活動でしばらくはユーノからの魔法の訓練を受けることになった。最後まで渋り続けたのは恭也であり、勘弁してくれと言う表情のハヤトがそこにいた。

PHASE50 初めての我俣 下（後書き）

40、000アクセスありがとうございます。

感想お待ちしております。

PHASE 5 1 パニックINプール 上

なのはが始めて魔法を手にしてから数週間がたっていた。

まず始めに魔法の発動する原理からユーノに知識を叩き込まれた。その後公園などに結界を張り、そこで基礎訓練を繰り返した。

魔力弾の作り方、その操作方法ETCETC・・・。

戦うことよりもそちらの方に特化していたためかユーノの指導のおかげで少しずつだが力をつけていた。

そんな今日この夜空の下でもジュエルシードの封印活動が行われていた。毎回というわけではないが異形にジュエルシードが埋め込まれているときもあった。

そのたびに誰かが裏で事を運んでいるのではないかとかんぐってしまう。しかしそんな人影も気配もないためにどうすることもできないでいる。

6本手足で醜い姿の異形。何度か目にしているなのは、ユーノとはいえさすがにグロテスクな姿は子どもにはきついものがあつた。

「結界・・・」

「あ、はい!!」

ハヤトの指示で近隣に被害がこうむらないようにと結界を張る。異形はそんなことお構いなしに鋼鉄の腕を振るい攻撃してくる。

「散開」

「はい」

二手に分かれる。なのはに關してはまだ扱える攻撃手段が少ないためにユーノと連携して攻撃されたいなすことに集中することになっていた。その隙を突いてハヤトの攻撃という作戦だ。

「レイジングハート!!」

『プロテクション』

「ラウンドシールド!!」

桜色と緑色の障壁が現れ異形の攻撃を受け止める。しかし受け止めている二人はぎりぎりの状態であった。

その硬直したところに炸裂弾を打ち込み、異形の体を吹き飛ばす。激しい痛みで悲鳴をとどろかせつつ、後退するのに対しても追撃を打つ込む。腕を吹き飛ばし、回復している隙に間合いに入り込むととび蹴りで顎を勝ち上げると、さらに回し蹴りでこめかみに練りこみ、止めといわんばかりに脳天に踵落としをくれてやった。

大きな地響きと共に顔面が地面に突き刺さり碎ける。辺りには血と共に肉片が飛び散る。なるべく二人には見せたくない血……。

しかしこの手の世界に入るなら避けては通れない世界である。

「う……」

惨状になのはは思わず目を背ける。分からないでもないが・・・。

「封印を」

「あ・・・は、い」

見たくないだろう。しかし彼女がみづから選んだ道である。いまさら嫌で須田などと中途半端に終わらせたくない。

異形の手足を打ち砕き、地面にはいつくばせる。

「レイジングハート、お願い」

『シーリングモードに移行』

通常モードからシーリングモードへと形態変化するレイジングハート。そして見つけた埋め込まれているジュエルシードに向かって封印魔法を放つ。

「リリカルマジカル、ジュエルシード封印！！」

『シーリング』

桜色の光に包まれた異形から青い宝石が現れ、光が徐々に小さくなる。そして最後に恐る恐る近づいてそれに触れ、完全な封印を終えることができた。

いくらジュエルシードを抜き取られ、死んだとしてもまだ幼い彼女からすれば目を背けたい姿である異形。

怖がるのも無理はなかった。

「やった」

今回も無事に終わることができ、嬉しそうなのは。

「よかった・・・」

無事に回収することができ安堵するユーノ。

「・・・」

ハアッと疲れたようにため息をつくハヤト。

今夜も夜遅いということで解散になる。なのはとユーノを無事高町家に送り届けると、ぶらぶらとした足取りで居候先の月村邸へと戻っていくハヤトであった。

PHASE 5 1 パニックINプール 上（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 52 パニックINプール 中

翌朝いつものように4人と居候のハヤトが朝食を取っているときだった。ふと思いついたかのように忍がハヤトに言う。

「そうだ、今日午後からプールに行くのよね。そこでハヤト君も来るわよね?？」

一応仕事は終わることはできるだろう。その後は今日も工場にいつてのMSモビルスーツの点検に行く予定だったのだが・・・。

「一緒に行きませんか?？」

すずかも誘う。

「工場に・・・」

「行きませんか?？」

「工場・・・」

「行きますよね?？」

「工・・・、はあ、了解した。だが俺は水着を持っていない」

服一着で無一文（むしろお金を持っても使えなかったが・・・。現在一応給料で蒸し様なためにかなりの貯金がある。居候している分支払おうと思っていたが笑顔でつき返されたためにそのままだった）できたために水着というものはなかった。むしろそのように

して海やプールといった娯楽で遊ぶなどと、ハヤトはしたことがないので未知の世界であった。

「そっか、なら午前中私達が学校に行っている間ノエルたちと一緒に買い物いつてきたらいいわ。その足ですずかたちを捕まえればいいから」

「分かりました、忍お嬢様」

「よろしく頼む」

「分かりました」

そうして今日も一日が始まる。

ノエルの運転する車に乗り込み三人で鳴海にあるデパートへと来ていた。運転中は矢とは窓際でほおずえをかき、ただ移り行く景色を眺めていた。

こんなにゆっくりと時間が流れていく中で生活したのはいつ以来だろうかと思う。軍の訓練校に入ってからほとんど訓練か学問の勉強でそれぞれの趣味を楽しむ時間などなかった。

たとえあったとしても彼にはそのような興味を引くものはなかった。ただ何のためかも分からず剣を振り続けていた。

「なにか珍しいものでも見つかったのですか?」

後部座席の隣に座るファリンが尋ねてきた。ちらりと一瞥し、す

ぐに外へと視線を移す。

「いや、ただ……」

「ただ……どうしたのですか??」

運転しながら話を聞いていたノエルがたずねる。淡々といつものように答えるハヤト。

「ただ……こんなゆっくりとした時間を過ごしたことがなかったから、拍子抜けしている」

その言葉にはかすかな憂いがこもっていた。

PHASE 52 パニックINプール 中（後書き）

ストックは順調に溜まっています。

おそらくAS編まではスムーズに進むと思いますが、その後が続くオリジナル編はどうなるか。

お気に入りや評価をしていただけると嬉しいです。

ご感想もいつでもお待ちしております。

PHASE 53 パニックINプール 下

今日は土曜日で、授業は午前中だけだった。

「さて、授業終ったの」

使った教科書などをすばやくしまう。

「準備はオッケー」

鞆以外の水着袋を持つ。

「それじゃ、待ち合わせの場所に・・・」

がらりと教室の扉を開け・・・。

「「しゅっぱーっ!!」」

なのは、アリサ、すずかの三人は嬉しそうに外へと向かった。

「泳ぐの好き好き」

「う・・・あたしは美由希さんたちに教えてもらわなきゃね・・・」

水泳は苦手なのか教えを請うつもりなようであるアリサ。

「浮輪使っていいみたいだからだいじょうぶだよ。それにフアリンに持ってきてもらうつもりだから」

「それナイス!!」

「浮輪で浮いてるのもいいよね♪」

さすがは月村家のメイドというのだろう。準備に関してはまったく抜け目がない。今日来るであろう者の得手不得手をよく熟知している。

そんな話をしながら、なのはたちは学校の前で待っていたノエルの運転する月村家の車で新しくオープンしたプールに向かうため、校門前へ向かった。
車にいたのは……。

「すずかちゃん!!」

手を振っているのはメイドのファリンだ。

「あっ、ファリン!!」

すずかもそんな彼女に手を振る。

「アリスお嬢様、なのはお嬢様、お迎えにあがりましたよ」

「ノエルさん!!」

まさにメイドの鏡とも取れる受け答えである。

「ありがとうございます!!」

そしてもう一人誰かがいた。

「あ、ハヤトさん来てくれたんですね」

さすがが言うように、いつも着ていた服ではなく白い半ズボンにアロハシャツとおそらく何かなんだか分からずに手当たり次第に買ったのだろうというのを見て取れた。一応さまになっているのはおそらく一緒に言った二人の尽力のおかげだろう。

サングラスに手元には先ほどまで読んでいたのか小説があった。

（（何故に恋愛小説??））

なのはたち三人はいつものハヤトからはまったく想像できないものを呼んでいることに驚きを隠せなかった。

「来なきや、怒るだろ??」

「もちろん」

そういうハヤトに対して即答するのだった。そして三人を乗せ月村家の車でプールへと向けて出発するのだった。

月村家のメイドであるノエルとファリンも今日は一緒だ。

「美由希さんは現地集合ですか??」

「はい。お姉ちゃんはユーノくんと一緒に来るそうです」

「なのは、ユーノとはすっかり仲良しね」

さまざまな話題が飛び交いながら一同はプールへと向かった。

PHASE53 パニックINプール 下（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 54 パニックINプール 下の上

同時刻高町家リビングでは・・・。

『先日、海鳴市〇〇町で発生した、突然壁が壊れた事件ですが、その後の調べで自動車事故ではないようです。警察の調べでは爆発の痕跡もなかったことから、ますます謎が深まっています。幸い近隣に住む住人には怪我人はなく、最も被害が大きかった榎原動物病院入館地区にも怪我人および怪我動物はいませんでした。しかし依然として近隣の住民は、原因不明の出来事に不安を隠せない日が続いているようです』

美由希の帰りを待つ間、ユーノはリビングでテレビを付けながらなのはが魔導師になったあの日のニュースを見ながらため息をついていた。

自分がこの世界に落としてしまったジュエルシードでなのははおろか彼女の家族まで巻き込んでしまい、終いにはこの鳴海全体にまでそれが広がってしまった。

これは絶対に早急な解決が必要であると思った。

「次のジュエルシードはまだ見つからない・・・僕がもっと頑張らなきゃ」

ユーノは自身が回収作業に入れない代わりに何とか特定だけでもできればと思っていた。欲を言えば自身で回収できればとも・・・。

「ただいま」

丁度その時、学校を終えた美由希が帰ってきた。それに気がついたユーノはテレビの電源を落としたのだった。

彼が人間であり、今は変身魔法を使っていることを高町家の皆知っていた。

「あつ、ユーノ。ただいま」

「おかえりなさい」

周りに一般人がいるときはなるべく喋らずになきごえだけで済ませるが今は家であり、周りには誰もいないために普通に喋ることができる。

「またかごから出ちゃったの?? すっかり放し飼いだね、もう」

「ええつと・・・一応僕は人間なんですが」

何故かユーノを姿から動物・・・言葉は悪いがペットとして扱われることも多々あった亜。それは抱擁であり、一応男の子ということもあり恥ずかしさもあった。

「まあ、いいか。ユーノはいい子だもんね。よしよし。あつ、今日はみんなでプールだよ。私は着替えてくるから、ユーノはここでいい子で待ってるんだよ」

「はーい」

そう言って美由紀は自室に着替えに行き、ユーノは美由希が来る

のを待っていた。

「ああ・・・」

ユーノはどうしてかため息をつかざるを得なかった。

「なんだかどんどんこのフェレットの姿が様になってる気がする・・・」

高町家との会話はもちろんするが、それ以外での行動がまさに動物フェレットそのものであり、むしろそのままでいるともいえるくらい演技力になっていた。そんな自分の立場に悩んでいるユーノの姿があった。

PHASE 54 パニックINプール 下の上（後書き）

フェレット化が進むユーノ。いつ人の姿に戻る日が来るのか・・・。

感想お待ちしております。

PHASE55 パニックINプール 下の中

海鳴市市営温泉プールに着いた一行。新しくオープンした温泉プールのプールサイドでは、子供達の楽しそうな笑い声が響いていた。当然その中には周りを気にせずにはしゃぎまわっている子供もいるわけだ・・・。

するとどこからか笛のなる音がする。そこには・・・。

「はい、周りに気を付けてくださいね」

「「ごめんなさい」」

監視員としてこの市営プールにて働いている高町家の長男恭也の姿がそこにあった。

そんな彼の座っている長いすの下には黒を基調とした水着に先ほども着ていたアロハシャツ、サングラスに何故か恋愛小説を片手に読むハヤトの姿があった。

もともと整った顔つきに鍛えられた肉体を持つハヤトであるために女性たちの目を引く。しかしあとはその場違いである恋愛小説さえなければよかったのだが・・・。

現在女性陣よりも早く着替えが終わった彼は来るのを待つべき、時間つぶしに読書をしていた。

「あっ、恭也さんとハヤトさん」

「アリサか」

先に水着に着替えたアリサが更衣室の方から出てきた。

「アリサ速いな。女性陣の中では一番だぞ」

恭也がアリサを見下ろしながらいう。

「はい。なのはとずずかたちはまだ着替えています」

「そうか」

アリサも下から見上げながらいう。

「恭也さん、なんか監視員姿似合いますね」

アリサがかなりさまになっている監視員姿の恭也を褒める。

「ありがとう」

まんざらでもなさそうにいう。

そしてアリサは次に近くで読書を続けるハヤトに話しかける。以前バニングス家にM^{モビルスーツ}Sの開発において力を貸してくれたことになったアリサの両親に挨拶に行ったときに改めて助けてくれたことに感謝したのだ。

「何でこんなところで読書してるんですか?？」

やはり浮いているのだろうか。

「時間を潰している。恭也がいうにはこのようなところでは女性の着替えは遅いらしいからな」

「そ、そうなの」

まあ、待ちきれずに勝手に遊んでいるような軽い者よりはましだ
と思う。ふと見上げるようにしてハヤトを見る。

アリサよりも身長が数十センチ以上高いために見上げる必要があった。ややくせつけの強い茶色の髪の毛は寝癖のような状態であり、以前聞いた話では月村家ではこれをどうにかしようとあれこれ試したものの、すぐに戻ってしまうためにお手上げになっていた。

サングラスの隙間から見える瞳はまるでアメジストのような紫色である。その瞳には抱えきれずに溢れているような悲しみと後悔があった。

（どんなことをしてきたんだろう……。別世界のことだからぜんぜん想像もつかないけど・・・）

物語の世界だけのものだと思っていた魔法や異世界というもの。しかし実際に見せてもらったりこの世界及びこの時代では考えもつかないようなものを開発している世界であった。

その時は興味と共に恐怖も感じていた。もしその世界がこの世界にやってきたら?? 支配しに来たらどうなるのだろうか・・・。

それと共に彼がどんな人生を歩んできたのか知りたかった。

彼女は世界的にも大きな会社を持つバニングス社のご令嬢である。小さな頃からその立場を理解し、その家の名を汚さぬために英才教育を受けてきた。

元来努力家な彼女と、受け継いだ才能にて将来を約束されたかのように順調な人生を歩んでいる。

仲の良い友達にも恵まれ、毎日が楽しいと思える。それなら元の世界から離れてしまっている彼はとうだったのだろうか。

どこか自分と同じように大きな家の人間だったのだろうか。それともその逆だろうか。軍人であるということは聞いていたがそれは裏腹に誰もが目を疑うほどのプログラミングの早さ。

家に仕えているボディガードたち全員と同時に戦っても勝利するなど年齢に不相応に感じていた。

しかし今の彼がいるのは彼がアリサが努力してきたのと同じようにして努力してきたからだだろうと感じていた。

そんな風に考えていると向こうから声が聞こえた。

「あつ、ハヤトさーん！！アリサちゃーん！！お兄ちゃーん！！」

手を振りながらやってきたのは着替えを終えたのはだった。彼女の後ろには他のみなもいた。

「恭也さん」

「こんにちは」

「こんにちは、恭也様」

「お待たせしました」

「ああ、みんなおそろいだな」

これで皆が揃った。なかでもユーノは以前フェレットの姿から戻れないために美由希に抱きかかえられたままの登場である。役得なのだろう、顔が真っ赤である。しかしそれに気づいたのは恭也とハヤトだけなのだ。

「今年初みんなの水着姿はどう??」

そう言って美由希は水着姿の女性陣へと目を向ける。

「ビシッと決めてみました!!」

評価を求められた恭也。しかしどこかいつもの覇気がない。

「えっと、そのだな・・・」

眼が泳いでいる。

「セクシー??」

覗きこまれながらいわれ・・・。

「うん・・・」

テレながらもいう。一人の剣士とて照れることもあるのだ。いつもとどうしてか様子がおかしい兄を見ながらなのははどうしたのか

と思っていた。

> ユーノくん、ごめんね。強引に誘ったかたちになっちゃって・・・
<

ユーノも人間の姿に慣れればもっと楽しめるのだがフェレットモードを美由希が気に入ってしまい未だ戻ることができないでいた。

> 大丈夫だよ。気にしないで<

> 帰ってから夕方はまたちゃんとジュエルシード探しするから<

最近まったく反応を見せなくなったジュエルシード。彼女たちが気づかないところで反応して、それを見落としていることもあるのだが。それでも何とか早くすべてを回収したかった。

> 確かにジュエルシードもあるけど、今日はせっかくみんなと遊べるんだから、楽しんでよく

> うん。ありがとう、ユーノくん<

> それと、なのはは気づいてないみたいだけど、この場所には微かに魔力の残滓があるんだ。どうやら誰か、強い願いと後悔なのかな?? ジュエルシードがそれに反応しようとしてるのかもしれない<

ユーノが最近ご無沙汰であったジュエルシードの気配を伝える。なのはもまた首から提げているレイジングハートをそつと нада、それに反応するかのようにレイジングハートも薄く点滅した。さまざまな種類のプールがあった。流れるプール、スライダー式の

プール、更には温泉プールと普通の下であつてもかなり深さのバリエーションがありさらに広いということもあつた。

そんなプールでハヤトは浮き輪に寝そべり流れに任せてぐるぐると回っていた。周りから見れば残念なイケメンに映つただろう・・・。

「恭也さん、アレはなんですか？？あのお立ち台みたいなの」

そう言つてアリサが指さしたのはお立ち台のようなものとマイクであつた。一体なんなのだろうかと思つていと。

「そのまんまだよ。希望者が歌つて踊れるステージなんだ」

アルバイトで知っているのだろう説明をくれる恭也。

「「ええ！？」」

それを聞いたのはたちはこんなところで歌？？と考える。

「いや、それが結構人気あるんだよ。ついさっきまで女の子たちが歌つてたしな」

どうやら喉自慢のようなものらしい。

すると誰がうたうのかという話題になる。

「えへへ、誰か歌う？？」

「私はいいいよ・・・」

「私もご遠慮・・・」

アリサが興味心身な様子でなのはとすずかに話題を振る。しかし塔の二人は元来の恥ずかしがりやがたたって遠慮することにする。

そう、というとすぐに向き直り。

「美由希さん?? ファリンさん??」

美由希とファリンに聞く。その顔はなんだか楽しそうだ。しかし二人も遠慮した。

「やはりここは、言いだした方が先陣を切るべきでは?? アリサお嬢様??」

「え・・・」

突然リクエストされたアリサ。まさか自分に降られるとは思わなかったためかなり動揺している様子である。

「アリサの歌を聞いてみたい人!!」

「「はぁーい!!」」

なのは、すずかそしてファリンが思い切り手を上げます。それを見たアリサはそんな場かなという様子であり、それを見ていた恭也は笑いながら受付のあるほうを示し、とぼとぼとアリサはそこへと向かうのだった。

そして、アリサの歌が終わり・・・恥ずかしがっていたわりには
楽しそうに歌っていたアリサ。その歌もすばらしいの一言でありお
立ち台の周りは拍手に包まれた。

「あはは、ちょっと気持ち良かったかも」

すっきりしたという表情のアリサ。

「そうだ!!」

アリサは何かを思い出したかのように手をポン、と叩く。

「どうしたの?? アリサちゃん」

突然のことにすずかがたずねる。

「ハヤトさんに歌ってもらわない??」

「?..?」

アリサの言葉にハヤトはぽかんと読んでいた小説から眼を話して
彼女を見ていた。

「ハヤトさんも歌とてもうまいから」

「そうなんですか??」

「さあ?..?」

「聞いてみたい・・・」

「・・・」

アリサの話になのはは興味心身ですずかも聞きたいといってきた。
ハヤトとしてはごめんこうむりたいのだが・・・。

「それじゃ・・・ハヤトさんの歌を聞いてみたい人!!」

「「はぁーい!!」」

アリサのとき同様にその場の全員が手を上げていた。

「はぁ・・・」

ため息を盛大に吐きつつ受け付けを終えたハヤトがお立ち台の上に立つ。なのはたちはそれを見上げる形で見ている。

マイクを受け取り一度全体を見渡す。やはり容姿からか女性客にはかなり人気があった。先ほどのアリサのときは逆に男性客に人気だったのをここで追記しておく。

そして眼を閉じると音楽が流れてくる。そしてゆっくりと謳い始めた・・・。

く作詞…富田京子 作曲…奥居香 編曲…PRINCESS PR
INCESS 『M』

思い出される少女の姿・・・。

もう戻ることのできない過去……。

伝えることのできなかったあの言葉が今も心に残っている……。

前衛だった自分の背中を守ってくれていた彼女……。歌詞のよ
うに慣れることなどできるのだろうか……。

忘れることなどけしてできないだろう……。今も瞳を閉じれば
その笑顔が浮かび上がる……。

一度だけデートまがいなことをしたこと思い出す……。その時
見た景色はいつも見ているものなのに妙に色鮮やかだったことを思
い出す……。

笑顔、すねた顔、怒った顔、泣いた顔、悲しそうな顔……。こ

ろころと表情が変わるので見ていて飽きない……。そんな小さな変化にも自分は眼が行っていたのかと……。

そう……。あんな日が来るとは思わなかった。いつもいてくれるとばかりあの時ようやく気づいた彼女が今はもういない……。

異形に飲み込まれるまでこちらに向かって向けていた変わらぬ笑顔……。どうしてそんな風に笑えるのか……。今も分からない。

戻ってきてくれるなら……。伝えたい言葉がある。戻ってきて欲しい……。寂しい……。

戻ってきて……。戻ってきてくれ……。そう何度も叫ぶ……。しかし彼女の声はもう……。しない、聞こえてこない。聞こえるのは記憶という名のテープに録音された同じ言葉ばかり……。

記憶に刻まれている名前を優しくなぞる……。実体はない名前だけがそこにある……。

死という存在によって永遠に会えなくなってしまった……。

いまだに引きずる取り戻せない・・・それが過去。それが束縛する鎖となって今もハヤトの身動きを制限している。

歌い終わると自身に違和感を覚えた。暖かいものが頬を伝う・・・涙だった。

「・・・」

割れんばかりの拍手が鳴り響いていた。

PHASE55 パニックINプール 下の中（後書き）

どうだったでしょうか・・・??

自分はこの作品を書いている間にふとこの歌が思い浮かびました。

皆さんは執筆していてこの分にはこの歌が合うんじゃないかって思ったりはしませんでしょうか？

この場面でこの歌が流れるにはどういった文章がいいだろうかなどを考えながらこの作品を書かせてもらっています。

ご感想お待ちしております。

PHASE 56 パニックINプール 下の下

「ハヤトさんって・・・」

「うん・・・」

「あはは・・・」

「これは驚いたな・・・」

／／／

「まあまあ」

「隠れた才能って奴なのかしら?」

（す、すごい・・・）

聞いていた8人は共通してすごいと思った。否そんな言葉では表しきれないくらいのもだった。

今からでもプロにいけるのではないかと思えるくらいだった。それと同時に感じたのは悲しみと後悔だった。

何故そんなにも重いものを背負っているのだろうかと思わざるを得なかった。話してくれとはいえない。

それによって傷に塩を塗りこむようなものだからだ。そんなことをして、更に傷つけてしまえば本末転倒、後の祭りである。

それに興味本位では踏み入ることができるものでもなかった。

ハヤトが歌っている間、お立ち台の周りにいる人も、プールの中で泳いでいる人も、監視員の人たちも動きを止めてハヤトの歌に聞き惚れていた。

戻ってきたハヤトに深くは追求することはせずに、純粹に歌のことを褒めた。表情は変わらないがそれでもうれしそうにしているのだろうと感じ取ったのはアリサとすずかだった・・・。

「さて、それじゃ・・・」

「せっかくのプールですから・・・??」

「泳ぎますか!!」

「「おー!!」」

それからしばらく思い思いのプールで泳ぎ楽しんだ。アリサは美由希たちから泳ぎを教わり、すずかは脅威の身体能力で年上顔負けの速さで泳ぎ、なのははそれを見ながら水にその身を任せて浮かんでいた。

ハヤトはなのは同様にとことなく上の空でプールに浮かんでいた。しばらくしてユーノが気になることがあったのか一旦離れることになった。そしてそれからしばらくたってから何所かで感じた違和感をなのは感じた。

突然慌てたようにユーノとの念話が飛ぶ。

>ユーノくん!!<

>なのは!!ジュエルシールドだ!!<

なのはが感じ取ったのはまさにジュエルシールドが発動するものだった。なのはが慌てている様子からハヤトは来たのかと思い、重い腰を上げる。

>ごめん、せっかくのプールなのに・・・<

そう言ってユーノが謝ってくるが、別にユーノは悪くないので気にしないなのは。それよりも早く対処しなければいけないと思いそれぞれデバイスを持って反応があった場所へと急いだ。

そして、なのはの手に杖状態のレイジングハートが現れると同時に最初に魔導師なった夜と同じように世界から色が消えた。なのはたちがいたプールから走りに走って更衣室近くに行くと更衣室の近くにあったボイラー室が突然大きな音を立てて爆発した。

そこから水色の物が表れた。しかもそれはかなり巨大なものだった。

「うわぁ・・・」

なのはは見上げるようにして呟く・・・。

「おっきい水のお化け!?!」

ぬめぬめとしてそうな水獣が現れる。

「なのはー!!」

すると、別の方向からユーノが走ってやってきた。

「ユーノくん!!」

「何とか展開はできたけど・・・」

しかしどこか申しわけなさそうだ。

「ごめん、切り取り範囲が広くて、何人かまだ人が残ってるんだ」

「ええー!?!」

なのはは驚く。このままでは関係のないひとも巻き込んでしまう。それだけはなんとしても避けたかった。

「場所はさっきなのはたちがいたプールなんだ」

「戻るぞ」

「はい!!」

無言だったハヤトがいつつ走り出すとそれについていくのはとユーノ。そこにはおそらく一緒にいたアリサとすすかがいるだろう。

そして戻ると・・・水のお化けもとい水獣がアリサとすすかの水着を脱がそうとしていた。

「アリサちゃん！？すずかちゃん！？」

二人の姿は生まれたばかりの状態である。

「うわぁ／＼／」

見てしまい顔を真っ赤にするユーノ。無表情であるハヤト。

「命の危険ってわけじゃなさそうだけど……。どうなってるの！？」

「大方恭也がいていた以前ここで逮捕された女性の衣服を盗んでいた男の願望が反応したのだろう」

今になってもその欲望に反応するのだからよほど深いものだったのだろうと思う。すると同時にアリサとすずかの悲鳴が聞こえて、プールに落ちる音がした。そこには水着を脱がされた2人がいて……。さらに声を荒らげているアリサにたいして水のお化けが攻撃を仕掛けようとしていた。

「アリサちゃん！！すずかちゃん！！」

今から二人のと頃に行こうとしても時間がない。どうすることもできないのかと思ったときだった。

『プロテクション』

するとレイジングハートがアリサ達の前に盾を張ってくれたのだ。

「ごめんなさい。少し、眠っていてください」

ユーノが恐らくは睡眠魔法と思われる魔法を使ってアリサとすずかを眠らせた。

「なのは!!」

「うん!!」

『バリアジャケット、展開』

なのはの体が光に包まれてバリアジャケットを纏う。そして、レイジングハートを水のお化けに向ける。

「確かに趣味や興味は人それぞれありますが、人様に迷惑をかけるようなえっちな行動はよくないと思います!!というわけで・・・」

『シーリングモードに移行』

レイジングハートが封印形態に変わるといつものように光の帯が水のお化けの動きを止める。

「リリカル・マジカル。封印すべきは、忌まわしき器ジュエルシード!!」

なのはが詠唱に入る。光の帯が水獣を絡め取る。

「ジュエルシード、シリアル・・・」

しかしここで不測の事態がおきた。

「あれ?? 番号が読めない!??」

以前にはないことが起き、なのはは慌てる。

「そ、そんな!??」

ユーノもまさかの事態に驚きを隠せない。

(シリアルが読めない?? まさかな・・・)

ふと思い当たることがありハヤトは叫ぶ。

「ユーノ、すぐに索敵を開始しろ」

「は、はい!!」

ハヤトの声を聞いて慌てて開始する。その間になのはは封印に入る。

「読めないけど・・・とりあえず、封印!!」

『シーリング』

レイジングハートから撃ち出された光がジュエルシールドに当たると光が辺りを包んで・・・ジュエルシールドがいた場所から出てきたのはジュエルシールド本体ではなく、大量の水着と下着だけだった。

「あ、あれ??」

なのはが困惑したような声を出す。よく見てみるとそこには大量の水着と下着は出てきたが、ジュエルシードが出てこなかったのだ。

「反応も消えてない・・・」

ハヤトにいわれ、索敵をしているユーノがいう。

「まさか、分裂してるのか!？」

まさかのことが起きたようだ。

「ええ!？」

初めてのことになのはも驚く。

「索敵終了しました。北の方向に50メートル」

「了解した。行くぞ」

ハヤトに言われてなのはは急いで走っていく。

「ユーノくん!？どうしたの?？」

突然倒れたユーノ。なのはは慌てて近づく。

「大丈夫。ちょっと、くらっと来ただけ・・・」

明らかにつらいようだ。

「すまないな。無理をして魔法を使わしてしまった」

ハヤトも無理をさせてしまったことに素直に謝る。ユーノは一瞬この無愛想なひとがちゃんと謝れるんだと意外そうな表情になるも、大丈夫ですという。

「魔力の使い過ぎ! ? そうだね。ユーノくん、ボロボロになるまで1人でジュエルシード探ししてて……。それに怪我だって、治ったばかりで……」

そしてなのはは一瞬考え込むようにすると。

「乗って!! !」

「え? ?」

「肩!! !」

あっけにとられているユーノを尻目になるのははユーノを肩に乗せた。

「私の肩は、今日からユーノくんの指定席なの!! ! 行くよ、ユーノくん!! !」

そして二人と一匹は反応のある方向へと向かった。

PHASE56 パニックINプール 下の下（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 56 パニックINプール 終幕

そして到着した場所にはさっきより小さいが水のお化けが大量にいた。

「うわっ！？たくさんいるの！！」

「分裂して増殖してる。まとめて封印しないと、また増えちゃう！！」

「どうすればいいの？？」

なのはとユーノは現在の光景に戸惑う。

「大型の魔力放射砲で強制停止・・・」

ハヤトのデバイスではそれはできず、おそらくそちらが得意分野であろうのはもまだ訓練不足で無理だと判断する。

「複数用のロックオン系魔法はない・・・」

そこまで魔力が持つとは思えない。策はあるのだが・・・。それをやるならなのは視界ない。

「高町なのは」

「ふえ？？はい」

突然話しかけられるなのは。ハヤトはこれに対する策として拘束

魔法ですべてを1つにまとめ、それに対して封印魔法をかけることを打診する。

これができるのはここではないのかもしれないことも。ユーノは魔力不足。ハヤトはデバイス機能にそのようなものがないことが理由だった。

「これには魔力を大量に必要になる。お前の家族からはなるべくお前を前に出すなどいわれているが、このような状況になった以上、悠長なことをいつている場合ではないになった」

「・・・」

「できるか??」

「できます!!」

そう言っただけなのはレイジングハートを構える。

「なのは、魔法はイメージだよ」

ユーノが補助を担当する。とはいっても即興の指導なのだが。

「お化けを一箇所に拘束するイメージ・・・」

レイジングハートから放たれる桜色の魔法。そしてなのはの足元には同じく桜色の魔法陣が現れ、その水のお化けに対してリングがまきつく。

「う・・・」

さすがにきついものがあつた。ここまで激しく魔力を消費したことがないなのは苦しそうに表情をゆがめる。

しかしここで彼女が踏ん張らなければ更に被害が出てしまう。そう考えると彼女はなんとか集中する。

「なのは!!」

「大丈夫・・・捕獲の魔法・・・リリカル・マジカル。捕獲、固定の魔法・・・レストリクトロック!!」

「捕獲対象の完全固定・・・収束系の上位魔法・・・」

「それでそのまま固まって!!行くよ、レイジングハート!!」

『シーリングモード』

レイジングハートが封印形態に変化する。

「リリカル・マジカル。今度こそ!!」

さきほどは不覚を取ったが今度こそ成功させると思う。光の帯が1つにまとまった水のお化けに巻きついてその額に数字が浮かび上がる。

「出てきた、17番!!」

「うん!! ジュエルシードシリアル17、封印!!」

『シーリング』

レイジングハートから撃ち出された光がジュエルシードを打ち抜いて、その中から現れたひし形の宝石・・・ジュエルシードがレイジングハートに吸い込まれた。

「成功・・・なの??」

「うん。今度はばっちり」

するとレイジングハートから煙が出てきた。

『モードリリース』

レイジングハートが赤い宝石状態に戻っていく。

「ありがとう、レイジングハート」

なのはは支えてくれた相棒に感謝する。

『グッバイ』

すると辺りに散らばっていた水着と下着が浮き上がって飛んでいく。もとの場所に戻るのだろう。

そんな中ユーノはやはり元気がなく、なのはは心配だった。

「ユーノくん、ぐったりして・・・疲れた??」

「うん・・・」

そういうユーノであるが内心別のことを考えていた。

（なのはの魔法のセンスってどうなってるんだろう・・・）

ユーノ自身よりも圧倒的なまでの魔力量。

（僕よりずっと大きな魔力に、凄い才能・・・）

少しの手ほどきでまるでスポンジが水を吸い上げるように次々とそれを成功させていくまでの天性の魔法の才能。

このまま順調に成長すれば一体どれほどまでの力を手に入れるのだろうと末恐ろしくも思えた。

しかしユーノはまた別のことも考えていた。

（けど、器用なのか不器用なのか全然分からないし・・・）

少々どじなところもあるなど魔法に関しては器用なのにとどっちつかずの彼女。そして何より・・・。

（見てて、危なっかしくてしょうがないんだよね・・・。なのはを見てるとホントにドキドキする・・・。いつか怪我をするんじゃないかとか）

そんなことはさせない。自分は戦えないがそれでも彼女をサポートすることはできる。そう思いユーノは自分のできることでのんをを守ろうと思った。

すると世界に色が戻ってきた。慌ててなのはバリアジャケット解除する。現実と空間を切り離しているのでこの姿を見られるわけには行かなかった。

するとバリアジャケットが消えて、元の水着に戻る。

「お疲れさま、ユーノくん。バスケットで休憩しててね?？」

「うん・・・ありがとう」

その後戻った二人と一匹は再び平和になったプールにて遊ぶのだった。

PHASE 56 パニックINプール 終幕（後書き）

ようやく長かったプール騒動が終了です。

もう一人の魔導師の少女が現れるのはまだ先になりそうです。

OP2もすでに決定しています。

それではまた、明日。

ご感想お待ちしております。

PHASE 57 後悔 上

着替えと朝ご飯を食べ終えたなのはとユーノは現在、海鳴市内にある河川敷に来ていた。今日はなのはの父である高町士朗がオーナー兼コーチをしているサッカーチーム『翠屋JFC』の試合の日だったのだ。それを、なのはとアリサ、すずかたちみんなで応援しようねって約束していたのだ。

「さて、応援席も埋まってきたようですし、そろそろ試合を始めますか？」

「そうですね」

なのはたちの隣のベンチで士朗と相手のチームの監督の話し声が聞こえて、どうやら試合を始めるみたいだった。

青空の下、高らかに鳴らされたホイッスルの音。試合が開始された。子どもたちが1つのボールを追いかけて、走り回る。

「頑張れ頑張れー！！」

「みんながんばってー！！」

暑い試合に思わず立ち上がり応援する友達や親兄弟。アリサ、すずかが手を挙げて応援している中、なのははユーノを抱きかかえているため、試合を静かに観戦していた。

「これって、こっちの世界のスポーツなんだよね？？」

ユーノが興味を持ったのか話しかけてきた。

>ん?? うん、そうだよ。サッカーって言うの<

なのはが説明する。ユーノと念話で話をしていると先制点を翠屋JFCが入れ、士郎やチームの皆が嬉しそうにしていた。

>ボールを足で蹴って、相手のゴールに入れたら1点。手を使っていいのはゴールの前にいる1人だけなの<

>へえ、面白そうだね<

なのはがユーノに説明をしていると、ちょうどキーパーの子が相手のシュートを受け止めていた。

>ユーノくんの世界にはこういうスポーツとかあるの??<

>あるよ。僕は研究と発掘ばかりであんまりやってなかったけど<

ユーノが前のことをも出だしながら言う。やはり懐かしいのだろう。この事件が解決すればどうなるのだろうかと思う。ユーノにはユーノがいるべき場所がある。いつかはそこに帰らなければいけないのだ。そう思うと寂しく思う。

>にゃはは、私と一緒にだ。スポーツはちょっと苦手かな・・・<

そして、前半と後半が終わってみれば翠屋JFCの試合は2―0で翠屋JFCが勝った。そして、士郎がチームのみなにご馳走をするようなので、なのはたち3人も翠屋に行くことにした。

PHASE57 後悔 上（後書き）

ご感想お待ちしております。

50、000アクセスありがとうございます、これからも頑張りますので、どうぞよろしくお願いします。

PHASE 58 後悔 中

その時同じくして、ハヤトは秘密裏に製造されているMSモビルスーツの開発を手伝っていた。

「パーツをこっちに持ってきてくれ」

「この箇所、訂正があったぞ」

「武装の骨組みはまだか」

「ドライブシステムは？？構築完了は？？」

未だ完成には至らずせいぜい40パーセントほどであろうか。やはり一から作り上げるのはかなり難しいようだ。

それでもハヤトを中心に技術者たちは精魂込めて作業を行っていた。自分たちの手で嘗ての夢のような存在を作り出せるのだ。

心踊らないわけがなかった。

同じくハヤトもまたものすごいスピードでタイピングしている。

（なんとしてでも、ことが大きくなる前に完成させなければ・・・）

時々感じられる不穏な感じ。1つは虎視眈々とこちらの出方を伺っているような感じ、もう1つは何か必死に追いかけているような、焦っている感じであった。

(ジュエルシードを狙う理由はさまざま……。それが悪しきにする善きにしろ、いつかは厄介な奴らが出てくるだろう)

厄介なので一番なのはおそらく管理局だろう。時空の管理といってロストロギアの回収をしているだろうが、生憎魔導師主義の強い組織である。こちらにあるMSモビルスールを危険視するだろうし、更になのはのことも無視できないだろう。

もしかするとこれにかかわった者たちも狙われるかもしれない。なのはの用に才能が開花せずに眠っているひともいるかもしれない。

可能性があるとしたらアリサとすずかだ。

「なんとしてでも完成させる」

「了解!!」

呟いただけなのに聞こえていたのだろうか、周りの人たちが笑顔で言う。思わず口がつりあがっていたのに気づくものはいなかった。・・。

翠屋 屋外席にて……。今現在なのはたちの前にはなのはの母である桃子手作りのケーキとジュースが置かれている。

「キュウ・・・」

「それにしても、改めてみるとこの子フェレットとは少し違わない??」

「「!?!」」

アリサの鋭い指摘になのはとユーノはどきりとする。

「そういえばそうかな?? 動物病院の院長先生も変わった子だねって言ってたよね」

すずかも便乗して言う。なのははなんとかごまかそうと思考をめぐらせる。

「え、えーっと、まあ、ちょっと変わったフェレットってことなんだよ、きつと・・・」

どこか自信なさそうなのはである。

「ほら、ユーノくん、お手!!」

「キュ」

なのはが躡けるように言う。とユーノはそれに従う。もはやペツトと化している人間ユーノ・・・。

「おお!!」

「可愛い!!」

そう言っでユーノを撫でるアリサとすずか。しかしユーノは何所か微妙な顔をしている。

>ごめんね、ユーノ君・・・<

なのははユーノが人間であることは知っているが、そんな彼に対して動物にするようなことをして申し訳ないと思っていたのだ。

>だ、大丈夫・・・<

それからしばらくして翠屋の入り口が開いてチームのみんなはとうやら解散の様だった。

「!！」

そのときなのはほんの一瞬だけジュエルシードの違和感を感じた。感じたのは翠屋JCFのあのキーパーの子とマネージャーの子からだった。

(気のせい、だよね・・・)

ほんの一瞬だったために間違いだったかもしれないと重い気にしないことにする。

「あゝ楽しかった。はい、なのはは」

「ふえ??」

アリサに手渡されたのはぐるぐるに目を回しているユーノだった。一体彼に何が起きたのか、なのはは知る由もなかった。

PHASE58 後悔 中（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 59 後悔 下

しかし、その休息もつかの間の平和だった。しばらくしてから突然発動したジュエルシード。その感じを察知したなのはとユーノは反応のする方向へと走るのだった。発動したジュエルシードを察知した私とユーノは大急ぎで着替えて部屋を飛び出した。その途中でお風呂に入っていた父士郎から「一緒に入るか?」と聞かれたが今はそれどころではないので「また今度」と言っておいた。しかし彼がなのはと一緒ににはいることは今後一切なかったという。

「はあはあはあ・・・」

家を出たなのはたちは近所で一番高いビルの屋上に来ていた。広く見渡せるところだったのだ。

「レイジングハート、お願い!!」

『スタンバイ・レディ。バリアジャケット展開』

なのはが桜色の光に包まれるとバリアジャケットを着たなのはと形態変化したレイジングハートがいた。

「ああ!？」

そして遠くに見える光景を見るとなのはは愕然としてしまった。彼女たちに移っていたのは大樹に埋め尽くされた海鳴市だった。

「酷い・・・」

なのははその惨状を見つめて言う。

「多分、人間が発動させちゃったんだ。強い願いを持った者が願いを込めて発動させた時、ジュエルシードは1番強い力を発揮するから」

相当強い願いがあったのだろうとユーノは言う。それが善きにしてどうにしろジュエルシードは歪んだ形でそれを表してしまう。

そしてその時、なのはの頭の中をよぎったのは翠屋で感じたほんの一瞬のあの違和感だった。

そして次の瞬間激しい後悔にさいなまれる。あの時何故確かめなかったのだろうか。自分だけで解決せず、ユーノに聞くこともできたかもしれない。

「なのは・・・」

責任感が強いことをユーノは今日までのことで感じていた。それがいい場合もあるし、今回のようにすべてを背負い込んでしまうなど、子どもにしては背伸びしているようにするときもある。

一人で抱え込まず、相談すればいいのにと・・・ユーノはそつと思ふのだった。そしてレイジングハートの本体コアが光り始めた。

「なのは!？」

「ユーノくん、こう言う時はどうしたらいいの・・・??？」

「え?..?」

ユーノの見上げたなのは顔は真剣な顔そのものだった。今までは後ろで封印ができるまで待っているなどどうしてもボランティアみたいなものであった。

「ユーノ君!!」

なのはが叫ぶ。

「あっそうだね。封印するにはやっぱり接近しないと駄目だ。最初は元となっている部分を見つけないと駄目だね。でもこれだけ広い範囲に広がっちゃうとどうやって探していいか・・・」

広域を捜せる魔法があればいいが今のなのはにはまだ底までの技量はないだろうし、できるユーノは圧倒的に魔力不足である。

「元を見つければいいんだね・・・」

「えっ??」

なのははレイジングハートを構えた。それを見ているユーノははらはらと見ているしかできない。

『エリア・サーチ』

なのはがレイジングハートを振ると同時に足元に広がる少し大きめの桜色の魔法陣が浮かび上がる。そして、なのはは呪文を紡いだ。

「リリカル、マジカル!! 探して、災厄の根源を!!」

魔法が発動するとなのはのいる場所から無数に放射状に広がって

行く光があった。そしてゆっくりと集中して目を閉じ、光が見た景色を見ていた。そして、その中に1つだけ気になるものがあった。

「見つけた!!」

「本当!?!」

なのはが叫ぶのをユーノは驚きつつ内心感心していた

「すぐに封印するから!」

すぐに封印用のシーリングモードに移行しているのはとレイジングハート。

「ここからじゃ無理だよ!! 接近しないと!!」

ここからでは離れすぎていた。

「できるよ、大丈夫!!」

そう断言するのは。なのははレイジングハートを掲げた。

(あきらめない・・・絶対!!)

「行って。捕まえて!!」

光が集まり、収束した光は一直線にジュエルシードへと向けて撃ち出された。そしてそれは狂うことなくジュエルシードを捕える。

「リリカル・マジカル! ジュエルシード、シリアル10封印!!」

撃ち出された封印の砲撃がジュエルシードを呑みこみ何とか封印に成功することができた。ジュエルシードによって発生した大樹は消えが海鳴市に傷跡を残してしまった。ジュエルシードを取りこんだレイジングハートが長くなっていた柄を戻していた。

「ありがとう、レイジングハート」

レイジングハートが宝石に戻ると同時にバリアジャケットが解除され私服に戻って行った。

（僕にも使えない遠距離魔法。この子、一体どれだけ魔法の才能を持ってるんだ??）

ユーノにはすでに予想を遥かに超えたなのは魔法の才能。鍛え上げればおそらく類を見ない強い魔導師になるだろう。

そんな風に考えているとなのはが呟く。

「いろんな人に、迷惑かけちゃったね」

PHASE59 後悔 下（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 60 後悔 終幕

「えっ?? な、何言ってるんだ。なのはちゃんとやってくれてるよ!!」

ユーノはなのはを励ますが・・・。

「私、気付いてたんだ・・・」

翠屋での微弱な反応。それさえ見落としていなければこんなことにならなくても良かったのにと、自らの未熟さを恥じていた。なのははその場に膝を抱えてしゃがみ込んだ。

「・・・。なのは」

「・・・」

「お願いだよなのは!! 悲しい顔しないで。元々は僕が原因でこんなことになっちゃったんだ。なのははそれを手伝ってくれてるだけなんだから!!」

「・・・」

「なのは。なのははちゃんとやってくれてるよ!!」

なのはにとっては魔導師になって初めての失敗だった。封印には成功したが回りに大きな被害を出してしまった。あの時こうしていればなどと考えるときりがなかった。

「あ」

なのは目の前をジュエルシードを持っていたゴールキーパーの子とマネージャーの子が通り過ぎていく。肩を借りながらもあっている男の子は女の子に笑顔で笑いかけていてそれを見ていると自分のせいであんな怖い思いをさせてしまったとなのは胸を締め付けられる思いだった。

「高町なのは、ユーノ・スクライア」

突然後ろから話しかけられた。そこにいたのは……。

「「ハヤトさん!？」」

額にうっすらと汗が光、手には簡易の銃型のデバイスが握られていた。

「やはりジュエルシード……」

「ごめんなさい……」

「?..?」

「私、気づいてたんです……。今日うちの喫茶店に来ていたサッカーチームの子が持ってたって……」

「……」

「それで、本当にわずかな反応だったから気にしなくてもいいか持ってたって……」

「なのは……。僕も気づかなかった、僕にも責任があるよ」

「ううん……。ユーノくんのせいじゃないよ」

「いや、僕にも非が……。それこそ僕が気づかなきゃいけなかった!！」

「違う!！私がもっとしっかりしていれば!！ユーノくんに相談するとか、園子に聞いてみるとか……。色々できた!！」

「僕のせいだ!！」

「私のせい!！」

「ぼ……」

「わ……」

しかし二人の叫びは言葉にならなかった。その代わりものすごい鈍い音が二発響き渡った。そこには頭を抑えて涙目になるのはと地面に落ちてびくびくと痙攣しているユーノがいた。

「うるさい」

ハヤトが底から湧き出るような低い声で言う。痛みを忘れて二人は恐怖する。

「そうやっていつまでも責任の擦り付け合いをしたいのか?? お前

たちは」

「そ、それは・・・」

しばみつつ言うのは。

「お前たちにはまずやるべきことがあったはずだ」

「「?」?」

「何故俺に連絡しなかった」

「あ・・・」

なのは喫茶店でのこと出の後悔を早く回収しなければいけないということで、ユーノはサポートに徹しようという以前の決心でそのことを忘れていたのだ。

今回は無事に回収できたが、もし暴走して攻撃をしてきたらどうなっていたらどうか。いくら才能があろうと、訓練中である攻撃をぶっつけ本番で相手に通用するなど戦いの世界は甘くない。

「良くて大怪我、最悪死んでいたかもしれないぞ」

それを聞いてしゅんとなってしまう。そう言って歩き始める。もう夜遅いために送っていくというのだろう。

ビルから降り、帰宅の道を歩いている。前方を歩くハヤトにとぼとぼとついていくのはとしょぼんとしているユーノ。

無言の背中が黙ってついて来いといっているようだった。

「はぁ・・・」

「なのは、もうハヤトさんは怒ってないよ。それに、これからまた訓練頑張れば大丈夫」

落ち込むのはを励ますユーノ。

「うん、ありがとうなの」

ようやく弱弱しい笑みだが立ち直ろうとするなのはを見ることができた。

「とはいえ・・・」

ふと呟くハヤト。

「無事で何よりだ」

「「え?」?」

心配してくれていたらしい。しかし今までそんなそぶりを見せていなかったのが驚いた。

「仲間の心配をして当たり前だ」

「なかま・・・?」?

「俺とおまえたちは期間限定とは言え、共に行動する仲だ。それを

仲間と呼ばずに何という??」

ハヤトがたずねるように言う。

「仲間とはお互いの背中を預けあう仲だ。だがどうしたわけかお前はまだボランティア感覚でしかいなかったようだな」

「!!」

「そんなことはありません!!」

なのはは少し思い当たるところがあり、何も言えず、代わりにユーノが反論する。何もできない自分の代わりにここまで傷ついてまで頑張っているなのはを悪く言われるのは我慢できないのだろう。

「生半可な覚悟で一緒にいられば、俺からすれば足手まといだ」

「でも、そうなれば封印は・・・」

「破壊する」

「え?」

「ジュエルシードを破壊する。あれば誰かが何かに使おうとするだろう。ならその根源を断ち切る」

「そ、そんな・・・」

ユーノとしては封印して、管理局に送って欲しいのだろう。しかしこちらの考えからして、危険なものをいつまでも持っているより

だったら根本からなくしてしまったほうが早いのだ。

「戦いにおいて常に被害が出ることを考えなければいけない」

「今回は私がちゃんとしていれば」

「魔導師になって数週間のあまったれが何を大それたことを言う」

「!!」

「はっきり言う。おまえにできるのはただジュエルシードを回収するときに封印することだけだ」

「・・・」

「それ以外、できることなど、今のお前の力では不可能だ」

「・・・うう」

ばっさりと切られるのは。うなだれるしかなかった。

歩いている間もずっと考えていた。自分に覚悟はあったのだろうか。と・・・。今日もうまく封印はできたが戦闘になっていたら更に被害が大きくなっていただろう。

更にばっさりと不可能だといわれ、悔しくもあった。

「ならもっと強くなります」

なのははもっと練習して、自身も今まで以上に頑張ろうと決めた。

「勝手にしろ」

ただそう呟いて再び歩き始める。なのはに魔法を教えるのはユーノであるが、次に呟いた言葉は二人にとって驚くものだった。

「俺が教える」

「「え?」?」

二人にとって確かに並みの魔導師なら素手だけで倒せる戦闘力を持つハヤトである。しかしリンカーコアの持たない彼がどうやって魔法を教えるのだろうかとはなはだ疑問であった。

「俺は嘗て部隊を持っていた」

「あ・・・」

「?」?

そう呟くのを聞いてハヤトがかつていた世界がどんなところなのかを知っているユーノは声にならず、なのはは知らないので首をかしげている。

「隊長兼教導官だ。媒体は違うが実際に使っていたのは魔法だ、基礎なら教えられる。細かいところは実際に魔導師のユーノ・スクライアに聞くんだな」

「分かりました」

「よろしく願います!!」

二人は元気に返事をして、帰宅するのだった。しかし二人にすぐに平穏は訪れず、仁王立ちしていた父と兄によって説教を喰らったのだった。

PHASE 60 後悔 終幕（後書き）

少々強引だったかな？？

ご感想お待ちしております。

次でようやくあのキャラを出せるかな？？

PHASE 61 もう一人の魔導師 上

月村邸にて到着しなのはが呼び鈴を押す。暫くすると扉が開いて出てきたのはメイド服姿のノエルだった。

「恭也様、なのはお嬢様、いらっしやいませ」

「ああ、お招きにあずかったよ」

「こんにちわ」

なのはたちに挨拶するとにつこりと微笑むノエル。なのはの彼女に対する認識は月村家メイド長のノエル。無口な人ではあるが、美人でかつこいというものだった。

「どうぞ。こちらです」

そう言ってなのはたちはノエルに案内され、すずか達が待つ部屋へと向かった。そしてノエルに案内されて到着したのは月村家にあるテラスだ。そこには既にすずかとアリサ、そしてファリンとすずかの姉の忍、月村家の居候ハヤト・ブリッグスがいた。

「なのはちゃん、恭也さん!!」

「すずかちゃん!!」

「キュ!!」

「なのはちゃん、いらっしやい」

なのはに声をかけてきたのはファリンだ。ファリンはノエルと同じくすずかの専属メイドで明るくて優しいお姉さんだとなのはは認識している。

「恭也。いらっしやい」

「ああ」

言葉少なげに返事をする恭也。しかしそれでも彼の考えていることが分かるのだろう。傍に行く忍。恭也と忍は高校の頃からのクラスメートで、今ではとっても仲良しである。

「お茶をご用意致しましょう。何がよろしいですか??」

そう尋ねてきたノエルに対して3人は任せると言った。

「じゃあ、私と恭也は部屋にいるから」

「はい。そちらにお持ちします」

そう言うとノエルとファリンはキッチンへ、恭也と忍は忍の部屋に行った。

「おはよう」

なのははアリサとすずかに挨拶する。

「うん、おはよ」

「おはよう」

「相変わらずすずかのお姉ちゃんとなのはのお兄ちゃんはラブラブだよね」

「ふふっ、うん」

幸せそうな顔をしたすずかは頷くと入口の所にいる恭也と忍へと顔を向ける。そこには幸せそうに腕を組んでいる忍と恭也がいた。

「お姉ちゃん、恭也さんと知り合ってからずっと幸せそうだよ」

すずかはうれしそうに言う。

「うちのお兄ちゃんは・・・どうなのかな?？」

なのはは自身の兄のことを考える。

「でも、昔に比べて優しくなったかな」

なのはもまた嬉しそうにいう。

「へえ」

数年前までは今のようには優しくはなかった。むしろ優しいお兄ちゃんというよりは近づきがたい怖い兄と思っていた。

その理由としては、父士郎が仕事先の事故で大怪我をしてしまい、始めたばかりの喫茶店の切り盛りで母と姉は忙しく、兄もまた男として、剣士として家族を守らなければいけないという使命感から今

まで以上に鍛錬に打ち込んでいたのだ。

そんな兄に話しかけても邪魔だといわれ、まったく構ってもらえなかった小さい頃、おそらくそのことを反省して、今はそこまでべったりなのだろうとふとなのはは考えていた。

しかしシスコンにまで発展してしまっているこの状態を何とかしなければ将来付き合ったり、結婚まで持っていくのにかなり苦労するのではないだろうか。

“なのはとの結婚はこの俺が認めない！！どうしてもというならこの俺を倒して見せろ！！”

（うわゝ……。なんだか言われそうなの）

なのはは来るかもしれない将来のことを考えるとなんだか不安になってきた。自分は無事に結婚することができるのだろうか。最悪な場合、母の手を借りようと、今から考えるのだった。

「よく笑うようになったかも」

そういえば兄のことを話していたのだっと思ったと思い、そう言う。以前よりも笑顔が多くなった。おそらく父の復帰と、それ以上に忍という理解者が現れてくれたことが大きいのだろうと確信していた。

「そういえば、今日は誘ってくれてありがとなの」

「こっちこそ、来てくれてありがとう」

最近あまり三人で集まることがなかったので、なのはにとっては

楽しみだったのだ。同様にすずかも楽しみだった。

「今日は元気そうね」

アリサに突然そう言われて思わず変な声を出してしまう。どうしてだろうかと考えているとそれについてすずかが話してくれた。どうやら最近のなのはどこか悩んでいるとか何かに危機感を覚えていいる、追い詰められているような感じがしていたということらしい。

しかし何も言わずにいつもどおり過ごそうとしている彼女に二人は違和感を覚えていたのだ。なのはにとっては二人がそこまで自分のことを心配してくれていたのだと知り嬉しくもあり、心配をかけてしまったことに申し訳なさもあった。

アリサとすずかには魔法についてはいっていない。彼女たちを巻き込みたくないということからだった。

しかしなのはに知らないところですずかは忍たちと共に居候する前にハヤトから聞いていた。

そしてアリサにはハヤトが月村重工と合同で帰還するためのMSモビルスーツを開発するためにバニングス社にも協力を得られないかと打診したとき、魔法についてや異世界について手をバニングス夫妻に話した時興味を持たれ、協力を得られた。

ちょうどその時一緒にいたアリサも興味があったのか一緒に聞いていた。そのときから彼女たちはすでに魔法の世界に踏み入っていたのだ。

更にハヤトいわく二人はまだか生かしていない力がありそうだと

いう。

「すずかちゃん・・・アリサちゃん・・・」

なのはは自分をここまで心配してくれている親友に心打たれ、思わず嬉し涙を流してしまふ。すると突然どこからかユーノの鳴き声が響いたと思うとなのはたちの足元をユーノくんとすずかの飼っている子猫が走っていた。

「ああ、ユーノくん!？」

命がけで逃走を図っているユーノ。そんな彼を面白そうに追いかけている猫は満面の笑みである。

「駄目だよ!！」

ユーノを助けようと席を立ちあがるなのはと同じく子猫を止めようと立ち上がるすずか。すると運が悪いことにユーノたちが向かっている扉からちょうどファリンがお茶を持ってきていたのだ。

「はい、お待たせしました。ミルクティーとクリームチーズケーキです!！」

ファリンの足元をぐるぐると回るユーノと子猫。当然起こるのはファリンの足元がぐらつくということだ。

「え?？あ?？あわわわわ」

そしてその場でくるくると回り始めて……。目が回ったファリ

ンはふらふらっと倒れそうになる。

「ファリン！？危ない！！」

すずかが危機感を察知して叫ぶ。

「きゃあああ！？」

ファリンの悲鳴が響く・・・が。

「ふう・・・」

「ぎりぎりセーフ？？」

「・・・」

何とかギリギリでお茶の乗ったお盆とファリンを支えることができたのはとすずか。そして、飛んだクッキーの乗った皿をギリギリでキャッチしたのは先ほどまでずっと話に参加することなく読書にふけていたハヤトだった。

「うわああ。あああゝ。ごめんなさいゝ、すずかちゃん、なのはちやん、ハヤト君」

ファリンの声が月村家に響き渡った。

その後、なのはたちはお茶会をするためにすずかの家の裏庭に来ていた。いつものことながらの足元には大量の猫がいた。

「しかし、相変わらずすずかの家は猫天国よねゝ」

自身の家には犬がたくさんいるアリサと同じく猫天国といわんばかりにたくさんいる月村家。

「えへ」

いつくしむように猫たちを見つめるすずか。

「・・・」

いつの間にか猫たちが寄ってたかってハヤトのからだにまとわりつくので読書が中断される。

「にやはは、ハヤトさん毛玉になってる」

「あはは、ホントだ」

「なんだろ、ちょっと可愛いって思っちゃった」

嫌がるそぶりは見せずに猫たちにされるがままになっているハヤト。居候のみであるために月村重工の仕事のほかに、猫たちのからだを洗うという仕事もあるためになつかれていた。

はじめは避けられたり、反抗され生傷も堪えなかったが無言で淡々と作業するはやとの心情というのか心を動物的感覚で察知した猫たちは以前とはまるで違うように寄り添うようになった。

まるで一人にしていると消えていなくなってしまうのではないかと思うくらいに傷ついていると猫だから分かったのかもしれない。

「里親が決まってる子もいるから、お別れもしなきゃならないけど・
・」

「そっか、寂しいね・・・」

やはり可愛がってきた子たちが放れて言ってしまうことは彼女にとってもつらいのだ。

「でも、子猫たちが大きくなっていてくれるのは嬉しいよ」

すずかは笑顔で言う。それを見て二人はそうだねと言うのだった。

すると突然頭に電流の走るような感覚がする。つい慣れてしまっていたがその反応はあれしかなかった。

<ジュエルシード!!>

<ここから近い・・・>

すずか達と話していると突然ジュエルシードの発動を感じる。なのはどうやってここから向かうかと考えを巡らせていると・・・。

「きゅ!!」

突然ユーノが森のほうへと走り出したのだ。

「ユーノくん!？」

「どうしたんだろ?？」

「なにか見つけたんじゃない??」

突然走り出したユーノに驚くのは。向こうが森だと言うことで興味を持ったものがあるのではないかと考えるアリサ。

>なのは、ついて来てく

>あ、うん。分かったのく

「私ちよつとユーノくん探してくる」

なのはは森に入って姿が見えなくなったユーノを探しにいくという。アリサとすずかも行こうとするが一人で大丈夫だといい、ユーノの後を追っていく。

なのはの姿がなくなると後ろから小さく息を吐く音がする。パタンという本を閉じる音と共に立ち上がるハヤト。

その手にはすでに銃型とナイフ型の簡易デバイスが握られていた。

「やっぱりなのはちゃん・・・」

すずかが自分たちも一緒に行こうとしたときに明らかに困っていたなのはの表情を見て確信した。アリサも同様に一瞬だが何かに反応したそぶりを見せたなのはを見ていた。

二人も以前この町で起こっていることを聞いたことがあった。ジエルシードというロストログア。危険な古代の遺物がこの町にあるということだった。

始め研究者として忍もかなり興味を持ったがそれを下手に扱うと世界を崩壊させる危険性もあるということを言うと顔を青ざめてやめるといつていた。

それが無難な選択だと思った。

そしてそれがいつどこで発動または落ちているか分からない。もし二人が見つけたら触れるなど余計な刺激を与えずにすぐにその場を離れて、ハヤトに連絡するように行っていたのだ。

幸運なことにそれについての連絡はなかったので言いのだが……。まさかこんなときに自身の家の森の中で発動してしまったとなるとすずかもなんと云ったらいいかという状態だった。

大事になることだけは回避して欲しかった。魔法に実際に触れたリデバイスを持ったり、はたまた眠っているであろう才能を開花させていない二人は結界が張られたことをまだ気づいていない。

ハヤトは魔法に触れているためになんとかだが雰囲気が変わったということを感じていた。

「行って来る」

そういうと森へと走り出す。

「無茶しないでくださいね」

「なのはをよろしく願います」

すずか、アリサがそういう。聞こえていたかは分からないがおそ

らく聞こえているだろうと思った。

PHASE 6 1 もう一人の魔導師 上（後書き）

フ
エ
イ
ト
運命との出会い。

それが更に少女の人生を大きく変える。

その悲しみに染まる瞳で何を見るか・・・。

PHASE 62 もう一人の魔導師 中

その頃なのははその場から急いで離れた。ジュエルシードへ向けて走っているとジュエルシードの本格的な発動をキャッチした。

「!!」

「発動した!!」

なのはとユーノはジュエルシードの発動をキャッチする。この場所ですぐに何かが起きれば向こうにいるだろうすずかたちにも迷惑が掛かってしまう。

彼女たちを巻き込むわけには行かないと思い、ユーノが行動に出る。

「此処だと人目についてちゃう。結界を作らなきゃ!!」

「結界??」

なのははユーノの言う決壊という言葉をうまく理解できていない様子だ。

「プールの時と同じ空間だよ。通常空間と魔法空間の時間をずらすんだ。それに僕が少しは得意な魔法」

そう言うとユーノは目をつぶり、その少し先に魔法陣が広がる。ユーノは自信の現在回復しつつある魔力と計算をあわせるとあまり広い範囲を結界で覆うことはできないと考えていた。しかしこの屋敷をつつむくらいなら何とかできるだろうと踏み、発動させる。

すると魔法が発動したのか、世界から色が消えていく。なのははこの感覚を確かにプールでの一件で感じていた。そんなことを思っているジュエルシードが発動したものがなのはたちの隣に現れた。

「ニャオン」

そこに現れたのは少し前にユーノを追いかけていた子猫のだった。・・ものだ。現在子猫ということができないくらいに成長している。もはやおとぎの国に言ったように、人間よりも大きくなった猫がそこにいた。なのははもちろん追いかけていたユーノは啞然としていた。それにもしこの大きさで追いかけていたら自分は今頃猫の胃袋の中にいるだろうと思わず怖気がした。余りの変わり様に言葉を無くし、絶句する。

すると子猫だった猫は一声鳴くとズシン、ズシンと音を立てて歩き始めてその光景を未だに絶句して見つめている二人に歩いて近づいてきた。

「にゃんなのあれ・・・」

「たたた多分、あの猫の大きくなりたいてって想いが正しく叶えられたんじゃないかなと・・・」

「つまり、今回はちゃんと願いが叶えられたわけなの」

正しく叶えられたのかどうかは分からない。どこまで大きくなりたかったんだと、それともジュエルシードの影響が強かったのだろうか。

それでも何とかして戻さなければこのまま森を歩けば大変なことになるだろうし、結界が切れればおそろくすずかたちにも迷惑が掛

かる。

ここまで大きな猫などこの世界にはいないだろうから。

「襲ってくる様子はなさそうだし、ささっと封印をするの。じゃあ、レジングハート、お願い」

なのはがレジングハートを起動させようとした瞬間だった。突然金色の光と思われるものが猫に当たった。

「え?？」

何が起きたのは一瞬呆けてしまったがすぐになのはは光が飛んできた方向を見る。見えたのは黒衣と黒いマントを纏った女の子でしただった。

「バルディツシュ。フォトンランサー、連撃」

『フォトンランサー、ファイア』

黒衣の少女の持つ杖から何度も放たれる金色の閃光は猫に次々命中していく。見ているだけだったなのはもすぐにレジングハートを起動させ、バリアジャケットを着る。なのはの足元に桜色の羽が出てき、巨大化した子猫の元に飛んでいく。それと同時に飛んでくる無数の金色の矢。

しかしそれを遮る桜色の障壁があった。

「なに!？」

黒衣の少女が驚きながら言う先に居るのはレイジングハートを構えたのはだった。なのはの障壁によって猫に当たることなくやりは消滅する。

「魔導師・・・」

遠くから見ていた少女が呟くときさらに放たれる光の矢。それが今度は狂いなく猫の足元に着弾し、そのまま猫は倒れて気絶する。

そして危うく一緒に倒れそうになったなのはも飛行魔法で無事に着地する。それと同時に攻撃に備えてレイジングハートを構えた。

先ほどの防御と飛行魔法を見ていたユーノは思う。なのはの魔法を扱うセンスの高さにはもう驚くことはない。

魔法に触れるたびに彼女はその才能を開花させ、魔法を自身のものにしていく。もはやユーノの予想を遥かに超えていたのだ。

するとさっきまで電信柱の上に立っていた少女がなのはの近くの枝に降りて来た。少女を見て驚いた

「同系の魔導師・・・。ロストログアの探索者か」

後ろから声がすると思い、振り向くとデバイスを両手に持ったハヤトがは知ってきた。探索魔法を使えないために先ほどまでの戦闘の音でここを見つけたようだ。

「間違いない。僕と同じ世界の住人だ。そしてこの娘・・・ジュエルシードの正体を知っている」

すると少女の目はレイジングハートの方へと向いていた。

「バルディッシュと同機のインテリジェントデバイス……」

どうやら彼女のデバイスもまたなのはのレイジングハートと同様にインテリジェントデバイスらしい。

「ロストログア……ジュエルシード」

少女が呟く。

『サイズフォーム、セットアップ』

杖が大きな魔力刃と持った鎌になる。少女が振るうと先端が動いてそこから光の鎌が襲いかかる。

「申し訳ないけど……いただいでいきます」

そう呟いた瞬間には黒衣の少女はなのはに向かってきて光の鎌を振るってくる。

しかしそれはなのはにあたることはなく、鈍い銀色に輝くサバイバルナイフ型のデバイスで隣から抑えられていた。

「な!？」

黒衣の少女は驚く。目の前に突然現れた青年。茶髪で寝癖頭とも思えるヘアースタイル、アメジストのような澄んだ瞳を持った青年だ。

PHASE 62 もう一人の魔導師 中（後書き）

ご感想お待ちしております。

追伸 おかげさまでセカンドステージの書き溜め執筆が終了しました。現在サードステージ執筆中です。

PHASE 63 もう一人の魔導師 下

その手に握られているふたふりのサバイバルナイフ型のデバイス。しかしそれからはまったく魔力が感じられない。

そのような形を取る武器だろうか。劣化ものだろうか。しかしそれのような脆さはまったくくない。

「く!!」

バルディッシュを思い切り振って距離を取る少女。すぐさまのはとユーノの前に絶ち、背中で守るように立つ。

「離れている」

「え・・・でも」

相手は魔導師である、確かにハヤトが短い時間ではあるがいつも訓練を付けてくれ、その過酷さを知っているなのは。

ユーノもなのは同様に並みの魔導師など相手にならない強さをもつハヤトなら互角以上の戦いはできるだろうと思っていた。

しかし今は奪われたジュエルシードを取り戻すことが先決だった。更になのはは彼女が何故集めているのか知りたかった。自分と同年くらいの少女である。何かしらの理由がなければそうはしないだろうと今日までのことから容易に想像できた。

「早くしろ。流れ弾が当たっても知らない」

そういつて黒衣の少女に向かって走り出す。なのはも加勢したいがおそらく早との足手まといにしかないだろう。

未だそこまでの力はない。それに少女の攻撃にまったく反応できなかったのだから・・・。

「邪魔しないでください」

「・・・」

退路を阻まれぐるぐると回り続ける少女とハヤト。

（何者？？バリアジャケットもないし、魔力だって感じない。それなのにどうして私の速さについてこれるの！？）

黒衣の少女の最も誇る部分はその速さにあった。ヒット&アフエイ、さまざまな範囲からの攻撃を可能にしている彼女であるがそれをすべていなされ、かわされ、防がれる。

少女は距離を変化させながら魔力刃を放ったり切りかかりたりとさまざまな攻撃をする。

「フォトンランサー！！」

『ファイア』

数本の金色の槍が飛んでくる、それをナイフで次々と打ち砕く、それを陽動として大きく振りかぶった鎌で切りかかる。

（非殺傷だから気絶するだけ）

そうして大きく振りかぶった鎌を下ろす。

「大振りで決めたかったら、相手に身動きをとらせるような状態でするものではないな」

「え!？」

煙がはれると片方のナイフでバルディッシュの魔力刃を受け止め、開いた片方のナイフの柄を使って少女の腹にカウンターを入れる。

「きゃあああああ!!」

加速してきていた少女であったためにそのぶん威力が倍増する。更に拘束で動くためにバリアジャケットも防御性にはあまり飛んでいるものではないためにかなりのダメージを受けた。

その頃ハヤトに言われたとおり、なのはは離れて上空にいた。二人の戦いを見て、なのはとユーノは啞然とするしかなかった。

魔導師でない一般の人間が魔導師の少女を圧倒している。更に講義しながらの戦いであるために少女とハヤトとの実力は圧倒的だった。

「どいてください」

「何故、君はそれを集める」

バルディッシュを振るも何度目だろうかナイフに受け止められる。

「あなたに話したところで・・・」

フォトンランサーを精製すると距離をとるためにけん制として放ってくる。それを次々と回避しながらつつこむ。

「なにも言わなきゃ、分からないの」

更に後ろから飛行魔法で飛んでくるなのはの姿があった。まだ攻撃魔法の練習に入っただけであり、操作も未熟である彼女。

（撃つことならできる・・・）

ちょうど彼女のまっすぐ先に黒衣の少女がいる。そのためになのはレイジングハートを構え、周りに3つの魔力弾を精製する。

「デイベインシューター!!」

まっすぐ放たれるデイベインシューターは高速で黒衣の少女に向かう。しかし彼女にとっては余裕を持ってかわせるものだった。

しかしその回避先を読まれたのか。否なのはのになった魔力弾に誘導され彼女の目の前にはナイフを構えたハヤトが向かってきていた。

「く!!」

（侮ってた・・・。魔導師じゃない、一般人だと、勝手に思い込んでた）

黒衣の少女はハヤトの異常性を己の勝手な思い込みを悔いていた。振るわれるナイフを障壁で防ぐ。

吹き飛ばされながらもなんとか早くここから離脱しなければいけないと思う。これ以上長引けば最悪自分は捕まる。

相手は管理局ではなさそうではあるが今後の活動に支障をきたす恐れもあるために黒衣の少女はバルディッシュをぎゅっと握り締める。

『アークセイバー』

「はぁ!!」

放たれた光の刃はハヤトではなく、なのはの方へと向かってくる。

「!!」

『プロテクション』

レイジングハートがとっさに防御魔法を発動してくれたおかげで怪我をすることはなかった。しかし魔力の塊から出てきた所にはすでに黒衣の少女がバルディッシュを振りかぶってきていた。

「あっ!？」

とっさになのははその攻撃をレイジングハートの柄で受け止める。

「なんで?? 何で急にこんなことを??」

「答えても・・・多分、意味がない」

「!？」

なのは彼女がどうしてジュエルシードを集めているのか知りたかった。そのために聞いてみたものの意味がないと返されてしまう。互いに距離を取った。

バルディッシュは元の斧の形態に、レイジングハートは砲撃形態へと変化し互いにデバイスを前につきだす。

それぞれデイベインバスターとフォトンランサーの発射体制に入る。そしていつでも撃てるようにとお互いににらみ合いながら待つ。

どう見ても自分と同じ年ぐらいの少女である。そんな彼女が強い意志を持ってジュエルシードを集めている。

もしかしたら自分も何か手伝えるかもしれない。なのははそう思っていた。その時猫が気が付いてなのははそちの方に一瞬気がいってしまう。戦いにおいて一瞬の隙が命取りである。すでに体制に入っていた少女から無数の槍が放たれる。

「ごめんね・・・」

『ファイア』

「あっ!？」

なのはが気がついた時には手遅れで砲撃で気を失ってしまった。少女の砲撃で気を失ったなのはは空高く放り出されてしまう。

いくらバリアジャケットがあるからといってあそこまで高いところから落下してしまうと最悪命の保障はできない。

くつと歯ざしりしながら走り、落ちてくるのはを受け止める。怪我もなくただ先程の攻撃をもろに受けたために魔力ダメージが蓄積してしまったのだらうと思えた。

「捕獲」

後ろでは黒衣の少女がバルディッシュをシーリングモードにしながら回収しようとしていた。魔力弾を放ち、猫を気絶させる。最後の猫の悲鳴を聞いて少女はいたたまれない様子だった。

彼女とて無用な攻撃は避けたいのだ。しかし自分が今なさなければいけないことに、邪魔立てするなら容赦はしない。

彼女にも覚悟があった。

「ロストログア、ジュエルシードシリアル14封印」

『イエス、サー』

上空からの光はジュエルシードを取りこんだ猫を包む。少女はそこに近づくと、そこにいたのは気を失った子猫とジュエルシードだけだった。そしてバルディッシュをジュエルシードへと向ける。

『確保』

ジュエルシードを回収した少女はすばやくその場を後にした。後を追ってくるかと思っていたが、ハヤトはユーのと共に気絶したなのはをつれてその場を後にしようとしていたところだった。

PHASE 63 もう一人の魔導師 下（後書き）

感想お待ちしています。

PHASE 64 温泉 上

今日から連休に入った日本。高町夫妻が経営している喫茶店翠屋は基本的に年中無休ではあるが、連休時は他の店員に任せてちよつとした家族旅行に出かけるのがこうれになっていた。

しかし今年は少し違い、なのはの親友であるアリサ、すずか、恭也の彼女である忍とメイドのノエル、ファリン、そして居候のハヤトも来ていた。

「なぜだ??」

本から顔を出して言うハヤト。本来は最終段階に入ったモビルスーツMSのある工場に顔を出す予定であり、泊り込みで完成させようと思っていた。それに自分が行って邪魔になれば悪いだろうということとで断りを入れていたのだが、いやおうなしにつれて来られていた。

「ハヤトさんはいつも頑張りすぎです」

「そうよ、だから今日はゆっくり温泉で疲れを取れば良いわ」

すずかと忍に言われ、仕方なく黙るハヤト。他の面々も快く引き入れてくれている。ならそれを無碍にするのは悪いということの後は何も言わずに読書にふけていた。

「見て見て」

アリサが指差す先には見事に広がる緑があった。

「ほんとだあゝ」

すずかも感激といわんばかりに見つめる。現在車を運転しているのは高町士郎であり、子どもたちは流れていく景色を眼に焼き付けていた。

そんな中で念話を通じてなのはとユーノは話をしていた。

>なのは、なのは。せっかくの旅行なんだからゆっくりしないと駄目だよ<

>分かってるの。大丈夫<

話しかけてきたユーノに対してそういうのはであるが内心焦りでいっぱいであった。最近まったくいいって良いほど反応がなくなってしまったジュエルシード。魔法の訓練は続けているが早く回収しなければいけないという正義感が彼女を焦らせている。更にすずかの家に行ったときに出くわした黒衣の少女についても知りたかった。彼女が一体どんな理由でジュエルシードを集めているのか、もしかしたら自分も何か手伝うことができるかもしれないと思った。

（まだあの黒衣の少女について考えているのか・・・）

ちらりとなのはを見ながらハヤトは思う。

（今の彼女では何もできまい・・・）

いくら才能があろうが訓練の量も質も圧倒的に足りないのは出は同じく才能に溢れ、おそらく小さい頃から訓練してきたのだろう

黒衣の少女にはまだまだ遠く及ばないと考察していた。

（それに誰かの心に踏み込むこと……。それは相当な覚悟がいることkとを彼女は判って言っているのだろうか……。）

誰にしろ知られたくない過去や、自身のことを抱えて生きている。ハヤトも同じである。黒衣の少女があそこまで必死になって集めるにはそれ相応に大きな理由があるのだろう。あまりにかわりたくないというのがハヤトの考えだった。

PHASE 64 温泉 上（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 65 温泉 中

その後一向は無事に温泉旅館につきそれぞれの荷物を持って部屋に行っていた。子どもと女性、男性、カップルと別れる。

そして着替えを持ってなのはたちは温泉へと向かう。

「それじゃあまた後で」

そうして男女に別れて温泉へと向かおうとしたところ。

「おい・・・」

後ろから底冷えするような声が響く。

「ユーノ・・・」

なのはの肩に捕まり女湯へと行こうとしていたユーノがびくつとしながら振り向く。そこにいたのは黒いオーラを発した士郎と恭也だった。

そしてハヤトはまるで汚いを見るかのようにジト目でユーノを見ていた。そしてユーノはようやく自分が今何をしようとしていたのかを自覚し、死を感じた。

ユーノは現在フレットの状態である。しかし高町家はユーノがなのはと同じ年の少年であることを知っている。

女性人はまだそれくらいの年齢なら一緒に入ってもかまわないと

思っている。実際温泉でも10歳までは許される。

しかし彼らというならば話は別である。

「貴様・・・確信犯か??」

どこからともなく取り出した小太刀・・・真剣ではなく木刀であるが。そんなもので叩かれたらフェレットのユーノは首がはね飛んでしまう。

「きゅ・・・」

ここで言葉を発することができないユーノ。突然のことに驚くのはたち。

「なのは、ユーノ君はお父さんたちに任せなさい」

「そうだ、ゆっくりとつかってくるのがいい」

なのは達を見送ったハヤトに士朗、恭也、ユーノの3人と1匹は婦人の湯とは反対の殿様の湯へと入って行く。

「ハヤトくんは温泉は初めてかい？」

士郎が温泉に使っているハヤトに話しかける。

「ないな。こんなことをしている暇はなかったからな」

休みの日でも常に警戒を怠らず、訓練をしていたハヤトはあまり娯楽などについては疎かった。

「そうなのか・・・」

恭也はそう呟く。なのはを覗く高町家にはハヤトは自身の過去を話していた。それを知っている二人だからこそ、どれだけハヤトが闘いの前線にいたのかがよく分かっていた。

彼の世界と比べればこの地球という世界は平和すぎるとも取れた。ユーノも以前フェレットモードで犬掻きならぬフェレット掻きで温泉を堪能していた。

その後、士朗と恭也は先にあがりハヤトはもうしばらく温泉につかっていた。

PHASE 65 温泉 中（後書き）

今回は短かったな・・・。

感想お待ちしております。

PHASE 66 温泉 下

なのはとアリサ、すずかの3人で旅館内の散策がてら、みんなで卓球をするかどうか話し合っていた。

しばらく歩いていると向こうからオレンジ色の髪をした女性が歩いてきた。

「フフ・・・」

小さく笑う声が聞こえたので話しながら歩いていたなのはたちは前を見る。すると前から額に宝石のようなものをつけた女性がこっちを見ていた。同じ旅行者かと思った。すると突然彼女が話しかけてきた

「はぁーい、おチビちゃん達」

「「ん?」?」

突然であつたのでなのはたちは反応に困る。

「ふんふん・・・キミかねえ」

値踏みするような目つきでなのはを見る女性。なのはは自分が探られているような感じがして不快だった。

「うちの子をアレしてくれちゃってるのは」

うちの子という言葉になのははまったく聞き覚えがなかった。そ

ういうと女性なのはの前に移動してきて顔をじっと見つめて来る。

「え、え??」

アップでまじまじと見られる。

「あんま賢そうでも強そうでもないし……。ただのガキンチョに見えるんだけどなあ」

「!!」

女性がそう言うときアリサが前に出てきた。

「なのは、お知り合い??」

少しばかりいらしているようだ。親友を馬鹿にするような話し方で繰る知らない女性だ。もう少し礼儀を持てと聞いたかった。

「う、ううん・・・」

なのはもまったく知らないひとだ。アリサの質問に首を振った。このように特徴のあるひとなら忘れるはずは無いと思い、記憶になるので知らないという。

「この子、貴女を知らないそうですがどちら様ですか!？」

少々怒気をはらんだ声色でアリサが言う。

「アハン」

アリサは女性を睨み、その女性も鼻で笑って腰に手を当てて見てくる。それからしばらくして・・・。

「・・・・。くつく・・・。」

「「?」?」

「あっははははは！」

「えっ?」?

急に女性は笑いだして、なのはたちは何が何なのか分からなくなる。

「ごめんごめん。人違いだったかなあ。私の知ってる子によく似てたからさあ」

女性が笑いをこらえながら言う

「なんだ、そうだったんですか」

どうやら人違いだったらしく、なのはもほっとする。しかしアリサはまだ納得していないらしく、未だ女性を睨みつけている。

「あははっ。可愛いフェレットだねえ」

すると突然女性はなのはの肩につかまっていたユーノに手を伸ばす。

「あつ、はい。ユーノくんっていいいます」

「よしよし、撫で撫で」

先ほどの雰囲気から一変してさわやかになる女性。どうやら悪い人ではなさそうだなのは思った。

>今のところは挨拶だけね<

しかし突然頭に声が響いてきた。念話だ・・・。

「!!」

「あ・・・!!」

>忠告しとくよ??子供はいい子にして、おうちで遊んでなさいね。おいたが過ぎるとガブツと行くわよく<

突然の女性からの思念通話に少しおびえてしまう。すると突然後ろから女性の肩をつかむ手が現れた。

気配なく現れたために思わずお化けが出たのかと思ってしまう。女性も慌ててそこを振り向くとその場にいたのは・・・。

「何をしている??」

「「ハヤトさん(きゅつきゅ)」」

上がったばかりなのか軽く上気した姿は色っぽく、思わず見ほれ

てしまうかのようにだった。

「何をしていると聞いている」

ドスの聞いた声で女性に言う。彼女が一般人なのか、それとも自分たちに何らかの形でかわったものなのかは聞こえてきた話し声で確信していた

「ハヤトさんあのね、この人がなのはと誰かを間違えたらしいのよ」

アリサが説明する。

「そうなんだよ、それよりさあ。痛いからそろそろ離してくれないかな??」

ぎりぎりときしむ音がなのはたちにも聞こえていた。女性も冷や汗を流している。

「そうか、なら悪かったな」

そう言って手を離す。相当痛かったのか、女性もつかまれているところをさすっている。そしてハヤトが女性の横を通り過ぎようとしたとき・・・。

「貴様、あの黒衣の少女の関係者だな??」

「!!」

女性が目を見開く。見抜かれたと思わず心臓がどくどくと鼓動を早める。まるで猛獣に睨まれた獲物のような気分だ。

「今回この世界で起きていることに首をつっこむなとは言わない」

「な!？」

殺されたくなかったら退け、首をつっこむなといわれるかと思っていた。それだけの力があると、女性はどういう感じだった。

「だがな・・・」

そうしてハヤトは言う。

「もし今回の事件、貴様らが歪みであつたら・・・」

「だったら・・・」

何を言われるかたまつたものではない。

「俺が、貴様らを駆逐する」

びくつと体を震わせ、わたわたと温泉の方へと走っていく女性。それを睨み続けるハヤトとむしろ同情の視線を向けている三人がいた。

「なのはちゃん・・・」

「あつ、うん。大丈夫なの」

さすがが気遣い、なのはは大丈夫だという。先ほどの会話は小声で行われていたが、彼女が黒衣の少女となんらかの関係を持っている

るということだけは分かった。

「なあに、アレ!!」

アリサがたまっていた怒りを爆発させる。彼女としては我慢した方であろう。

「そ、その変わった人だったね・・・」

すずかもあれはないかと苦笑いしかできない。

「昼間っから酔っ払ってんじゃないの!？」

ご立腹なアリサ。そう言うアリサは指でお猪口の形をしながらお酒を飲んでいる真似をする。此処は旅館だから確かに昼間からお酒飲んでる人はいるだろうが・・・。

「気分悪っ!!」

女性が立ち去った後すぐさまアリサの怒りの声が上がる。我慢の限界だったらしい。

「アリサちゃん・・・」

「まあまあ落ち着いて。くつろぐ場所だからね、いろんな人がいるよ。さっき見たいな人もその一人だし」

なのはとすずかが落ち着かせようとして話しかける。しかしあり悟史手は節度ちうものがあるだろうということに怒りが収まること

はない。

なのはも彼女の言うことに納得はしていた。しかしそれよりあの女性が黒衣の少女となんらかの関係を持っていることを知り、もう少し話せたかもしれないと思っていた。

そしてその女性がここに着ているということとはあの少女もまたここにきていることを示していた。もしかしたら今度こそはその理由を聞くことができるかもしれないと思った。

「それで、これからみんなはどうするの?？」

腕組みをしながらアリサが聞いてきた。特に何も無いことを告げるとアリサの卓球をして憂さ晴らしをすることになった。

「ハヤトさんもどうですか?？」

そういわれたが・・・。

「悪いが、不参加だ」

ええーっと言う声が三つ上がる。

「散歩だ」

そう言って彼女たちに有無を言わずにその場を立ち去った。しかしそれでもいじじに誘ってくるものだから戻ったら参加するとうことになってしまった。

PHASE 6 温泉 下（後書き）

ご感想、お待ちしております。

追記 おかげさまで、60、000アクセス。ありがとうございます。
す。今後もよろしく願います。

PHASE 67 温泉 下の上

先ほどののはたちと出会っていた女性は温泉につかりながらどこかでジウエ得るシードの搜索をしているだろう主に念話を飛ばしていた

＞あーもしもし、フェイトかい?? こちらアルフ<

＞うにゅ・・・どうしたのアルフ<

おそらく今までずっと休んでいたのだろう。寝起きでまだ意識が朦朧としているようだ。少しは休んで欲しいと思っているアルフであるが、かたくなにそれを断って一日中走り回るフェイト。

いつか倒れてしまうのではないかとアルフは怖かった。

＞ちょっと見てきたよ・・・例の白い子<

アルフが言う白い子とはなのはのことだった。あの日ぼろぼろになって帰ってきたフェイトに驚いた。

その時言った白いバリアジャケットを着た魔導師と、おそらく彼女の使い魔であろう動物、そして同行している青年。

どんな人物なのか、確かめようと思い、話しかけたのだった。

＞そう・・・どうだった??<

話の内容を聞いて完全に目が覚めたようだった。

> うん・・・まあ、どってことないね。フェイトの敵じゃないよ<

アルフは外ではそういつているが、なのはの才能を微弱ながら感じていた。

> そう？こっちも少し進展。次のジュエルシードの位置がだいぶ特定できてきた。今夜にでも捕獲できると思うよ<

そういうフェイトにさすがは自分のご主人様だと言う。

> なら、早めに動かなきゃいけないネエ<

> え？？<

フェイトが不思議そうに言う。

> あたしたちにとっては最悪なことに、フェイトが言っていたあの男がいたんだよ<

> あ・・・<

アルフが言うあの男とはハヤトのことだ。あの日ぼろぼろになって帰ってきたフェイト。今までそんなことはなかったのでアルフは取り乱してしまった。

> 確かにあいつはちよつとどころじゃないけど、やばかったよ<

> うん・・・<

雰囲気を感じただけでもあれなのだ、実際に戦ったフェイトはどれほどの恐怖を味わったか。

魔法が通用しない敵。自身を上回る速さ。まったくの未知の戦いでフェイトは圧倒されたのだった。

＞まあ、勝負は今夜だね。それじゃ、夜にまた落ち会おうく

＞はあいく

そう言って二人は念話を切る。そうしてゆっくりと温泉に浸かって寛ぐアルフ。すると気が緩んだのか、アルフの本来の耳がピョコツツと出てきた。

「おっとつと・・・」

慌ててしまう、周りにひとがいなかったのが幸いした。

PHASE 67 温泉 下の上（後書き）

ご感想と待ちしております。

PHASE 68 温泉 下の中

ハヤトは三人と別れてから近くの森の中を歩いていた。長い間ゆっくりとした時間をすごしていなかったこともあり、こんなときどんなことをすればいいのか分からなかったために恭也たちに聞いてみたところ散歩など自然を堪能するのも言いといわれたのでこうしているのだった。

小鳥のさえずりが木々の間から聞こえてくる。大地を踏みしめるときに落ちている小枝や草を踏みバキッという音やサクッという音が響く。

その音に反応したのか鳥たちが飛び立つはねの音も聞こえてくる。

自然につつまれた空間。懐かしさと悲しみがこみ上げてくる。あの日あの場所で自分たちは確かに共にいた。

彼女と仲間たちと共にこの世界を守ろうと共に誓ったあの日……。

「……」

首からかけられたロケット型のネックレス。カチリと音がなり開けられるとぶっきらぼうな顔と満面の笑みをこぼした二人の男女の写真があった。

「くっ……」

それを見た瞬間に胸がひどく痛んだ……。何かを失ったかのよ

うに心に空虚な場所があった。

「どうして・・・」

どうして自分を殺してくれなかったのだと思った。もしそうならこんなにも苦しむ必要はなかったというのに・・・。

「どうして・・・」

勝手に行ってしまったのだと思った。

「!!」

するとかすかに空気が変わる感じがした。更に小鳥たちのさえずりも、草葉の音色も途絶える。

そしてゆっくり時の影から現れたのは・・・。

「お前は、あのときの」

「ここで何をしているのですか??」

そこには月村邸で戦った黒衣の少女がいた。その手にはデバイスのバルディッシュが斧の形態で握られている。

「ただの散歩だ」

「私たちにかかわらないでください。今度また戦うことになったら」

手加減はできません。そういうのだった。

「個人的には俺はお前たちにかかわるつもりはない」

「なら」

しかしフェイトの言葉はそこで遮られる。

「だが、俺が世話になっているこの世界に危険が及ぶジュエルシードがあるなら、それを回収するまでだ」

「どうしてもですか・・・」

「お前に何があったかは知らない。知りたいとも思わないしな」

「・・・」

「だが、お前たちがゆがみであるなら・・・」

ヒヤツとした感触がフェイトの首筋にあてがわれる。はっとして目を見開き、ゆっくりと何かがいる後ろを振り向く・・・。

「!!」

「俺が、その歪みを駆逐する。ただそれだけだ」

サバイバルナイフ型のデバイスを構えたハヤトがそこにいた。いつの間にかと思う。もともとからだを鍛えていたハヤトは己を鍛えるためということで仕事終わりに高町家の鍛錬に参加させてもらっ

とも多々あった。

一度目は感覚的に神速を見切るといふより感じ取れたが実際に見てみるとほとんど見切ることができなかった。

それでも風の感覚を察知し、なんとか付いていこうとしていた。何度も見て、感じて、イメージすることで瞬間的なものであるが使用が可能になっていた。

しかしそれはやはり特別なものがあるのだろうか。血であろうか。鍛え方であろうか。連続的に使用することはさすがに無理があった。

これを普通に使える御神の剣士を、ハヤトは内心すごいと尊敬していた。

フェイトからナイフを離し、背を向けると元来た道へと戻り始める。その間フェイトはじっとその場に立ち尽くし、見えなくなるまでハヤトの背を見ていた。

PHASE 68 温泉 下の中（後書き）

ご感想と待ちしております。

いつごろOP2を入れようか。

まずは本編すすめなければ。

PHASE 69 温泉 下の下

「今まで何してたのよ!!」

「散歩だ」

「だったらどこまで行ってたのよお!!」

「にやはは、アリサちゃん・・・」

「落ち着こうよ・・・」

「散々探させたわりには、何のんきにくつろいでるのよお!!」

「落ち着け。牛乳飲むか??」

「飲むかあ!!」

「まったくまるで虎だな」

「誰が虎よ!!」

「アリサちゃん、そんなだとまったく説得力ないの」

「あはは・・・」

「ぐぎぎぎぎ・・・」

「ふん」

なのはたち三人が卓球で白熱し戦いを繰り広げて数時間、いくら待ってもハヤトがこないことに業を煮やしたアリサが探しに行こうとあちこち散歩スポットを歩いていたのだが一向にその姿が見当たらなかった。

仕方なく思い一度部屋に戻ろうとしたところ、太めに入った男部屋に浴衣姿で椅子に座りのんきに読書をしているハヤトを見つけた。

その瞬間切れたアリサを筆頭にその後を追うようにして三人が仲へと突撃したわけであった。

「何時間も戻ってこないし、庭にもいないし心配したんですよ?」

そう言って心配していたらしいすずか。なのはも頷き、アリサは怒っているようだがその裏では心配してくれていたのだろう。

その後、なんとか怒りを抑えたアリサ達。ハヤトが帰ってきてから数時間が経って、辺りはもう真っ暗だった。

先ほどまでファリンが本を読んでくれたがすでにアリサとすずかが眠ってしまったのでファリンが電気を消して部屋を後にしていた。

>ユーノくん。起きてる??<

眠ったと思われていたなのはぱちりと眼を開けると暗闇の中一緒の布団に入っているユーノに念話で話しかける。

暗闇にフェレットモードであるためか表情は分からないが美少女

たちと一緒に布団であるためにユーノは人間の姿であればかなり顔が赤かっただろう。

>う、うん。はぁ・・・<

ため息をつくのはこれを知ったら誰かが自分をネタにしてからかうのではないかと不安であったからだだった。

アリサの方から顔を出した。ユーノユーノがアリサの腕の中から出てきたときにため息をついたのはあえて気にしないことにしたなのは。

>昼間の人、この間の子の関係者かな??<

昼間の人というのはなのはたちに話しかけてきた女性のことであり、フェイトの使いみであるアルフの人間形態の姿であった。

>多分・・・いや、そうだね<

十中八九関係があると思った。

>また、この間みたいなことになっちゃうの・・・??<

なのははずすかの家に言ったときのことを思い出し、言う。

あの日から更に訓練に力を入れた・・・。イメージトレーニングにも力を入れた。どうやったらあの少女とお話しができるか・・・。

あのとときの自分は弱かった・・・。魔法を扱ってまだ日が浅いからとか、ハヤトとの行動を共にして、言葉からもそれは甘えでしか

なかった。

なのはの立っているのは戦場である。

そこに立ったら最後・・・、力なきもありも関係ないのだ。

力あるものは有利に戦い、無きものは知恵を振り絞って戦う。なら自分の一番得意な砲撃にどうやったら繋げられるだろうか。

少しでも勝機が見つかるよう、考えてきた。そんな頑張るなのはの姿をずっと見てきたユーノ。

自分もできることはしようと、お互いに決意を新たにした。

>おそろくね・・・<

ジュエルシードを回収する同士である。戦闘は避けられない。

>なのは！！僕ね、アレから考えたんだけど、やっぱりここからは僕が・・・<

ユーノが突然そう言い、自分がやると言おうとしたときだった。

>ストップ！！<

>え？？<

なのはの声に遮られ、突然のことにユーノも驚く。

>そこから先言ったら・・・怒るよ！！<

>・・・<

有無を言わせぬ雰囲気なのはから出ていた。

なのははユーノを見つめて言う。

>ユーノくん・・・『ここからは僕が一人でやるよ。やっぱりなのはを巻き込めないから』とでも言うつもりだったの・・・??<

>ええっと・・・<

ユーノが口ごもる。

>ふざけないでなの!!<

>!??<

なのはが叫ぶ。ユーノはまさかいつもニコニコしている彼女がここまで起これると思えなかったために呆氣にとられる。

>もう私も決意を決めてジュエルシードを集めるって決めたの<

それはあの時初めてジュエルシードを身近にあることを見落とし、自分が住んでいる町に危険を及ぼしてしまったときだ。

もうあんな後悔はしたくない。そう思ったからこそ、もう甘ったれた気持ちは捨てて全力でやると決めたのだ。

>それでユーノがそんなこと言うのは私の決意を無碍にするってこ

とだよ・・・＜

ユーノはなのはをこれ以上危険にたくなかったから言ったのだ。しかしなのはもまた決意を固めていた。

危険なのは承知である。しかし分かっている彼を見過ごすことは彼女にはできなかった。

＞お願いだから・・・もう2度と言わないでなの＜

＞う、うん・・・＜

いつジュエルシードが発動しても言いようになのはとユーノはしばらく眠ることにした。できるなら何も起こらないことを切に願うのだが・・・。

PHASE 69 温泉 下の下（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 70 温泉 下の下の上

どれくらいの時間がたっただろうか……。突如として発動したジュエルシードに向かうためになのはは急いで着替えて旅館を後にした。

男部屋にユーノを突入させハヤトを起こして反応のある場所へと向かった。

「高町なのは」

ハヤトはいつものように軍人時代の服装で走っている。

「大丈夫です、急ごうユーノくん！！レイジングハート、お願い」

『スタンバイレディ、セットアップ』

なのはは纏ったバリアジャケットと起動したレイジングハートを持ってジュエルシードの元へ向かうのだった。

アルフが見つけたジュエルシードの場所に到着したフェイトはアルフと共に発動したジュエルシードを見ていた。

「んふふ、凄いいね、まったく。これがロストログアのパワーってヤツなのかい??？」

「随分不完全で、不安定な状態だけだね……」

アルフが今日の前で起きている現象を見つめながら主であるフェイトに話しかける。フェイトもそれを見ながら言う。

そしてアルフはやや怪訝そうな表情になり、何故こんなものをフェイトの母親は欲しがるのだろうか。

「さあ?？」

しかし、とうの娘であるフェイトもその理由までは知らないらしい。ただ大好きな母親が欲しがっている。なら、その母のために集めなければいけない。そう思うからこそ、この行動を起こしていた。

「わからないけど、理由は関係ないよ」

フェイトはただ大好きな母親に褒めてもらいたいのだ。だからどんなに危険なことでも、母親が求めているものを手に入れるなら何でもやろうと思っていた。

「母さんが欲しがってるんだから手に入れないと・・・」

フェイトはそう呟くと・・・。

「バルディッシュ、起きて!!」

『イエス、サー』

フェイトの手袋についている待機状態のバルディッシュから光が空に上がるとそこから起動したバルディッシュが降ってくる。

『シーリングモード、ゲット・セット』

フェイトがバルディッシュを掲げるとその姿は封印形態へと変化する。

「それじゃあ封印するよ。アルフ、サポートして」

「へいへい」

フェイトの指示にアルフは軽く了解というと行動に出る。

そしてジュエルシードの封印をしたのはフェイト達の方だった。

「これで2つ目・・・か」

途方もない活動である。

早く集めなければいけないと言うのに・・・という焦りの気持ちもあった。

「フェイト!!」

「!!」

そこに遅れて到着したのはあの時戦った白い服の少女・・・高町なのはだった。

PHASE70 温泉 下の下の上（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 7 1 温泉 下の中

なのはたちがジュエルシードの発動場所に着くとそこにはあの黒衣の魔法使いの少女・・・フェイトとその使い魔アルフの姿があった。

「あゝらあらあら」

突然アルフがなのはたちを見つめながら言う。

「あっ!？」

なのはの目に入ったのはあの昼間の女性・・・アルフであった。そしてやはり彼女もまた黒衣の少女・・・フェイトの関係者なのだと悟る。

「子供はいい子でって言わなかったっかい?？」

アルフがなめるような口調で言う。

「それを・・・ジュエルシードをどうする気だ!!それは、危険なものなんだ!!」

ユーノがそれをてにもつフェイトに対して叫ぶ、

「さあねえ?? あんた達に答える理由が見当たらないよ?? それになんだいあんたたちも散々あたしたちの邪魔をしてくれて。それにさあ・・・あたし親切に言ったはずよねえ?? いい子でないとガブツと行くよって!!」

「!!」

アルフがそう言うとその髪が伸びて手が獣の手に変わっていった。そこにいたのはオレンジ色の毛をした狼だった。

そして大きく遠吠えをする。

「やっぱり……アイツあの子の使い魔だ!!」

「そうさ。あたしはこの子に作ってもらった魔法生命。製作者の魔力を受ける代わりに命と力の全てを賭けて護ってあげるんだ。先に帰ってて??すぐに追いつくから」

「うん。無茶しないでね??」

フェイトが心配そうに言うのに対してアルフは了解といい、ハヤトではなくその前にいたのはに向かって飛び掛る。

「あ!??」

突然のことに反応できなかったのは。しかしアルフの攻撃に対して突然なのはの周りを覆うようにシールドが現れた。

>なのは!! あの子をお願い!!<

ユーノからの念話が突然届く。

「させるとでも思ってるのかい!!」

アルフが動き出したフェレット・・・ユーノを止めようと立ちふさがる。

「させて見せるさ!!」

そう言うとユーノとアルフの足元に広がる大きめの魔法陣。それに気づいたアルフは明らかに表情が変わる。

「移動魔法・・・!?!? まずい!!」

その魔法陣が一体なんなのかに気づいたアルフ。急いでその場から離脱しようとする。

「ふっ!!」

しかし次の瞬間には二人は消えていた。

「え??.?え??.?」

「アルフ・・・」

「・・・」

ユーノが何処に消えてしまったのか分からず辺りを見回すのは。使い魔であるアルフの心配をしているフェイト。

そんな彼女たちを傍観しているハヤト。しかしいつでも動けるようにとその手には二本のナイフ型のデバイスが握られている。

「結界に強制転移魔法・・・か。いい使い魔を持っている」

フェイトがなのはに向き直ると褒め言葉を送る。しかし使い魔という言葉がなのはにとっては良くなかったらしい。

「ユーノくんは使い魔ってやつじゃないよ!! 私の大切な友達!!」

「・・・!!」

フェイトに明らかな感情の動きが見えた。それはとても微妙なものであるが友達という言葉に反応していた。

なのははユーノくんの事を訂正する。ユーノはなのはの大切な友達だからだった。

「で、どうするの・・・??」

フェイトがバルディッシュを構え、言う。

「話し合いで、なんとかできるってこと・・・ないかな??」

あくまで平和的に、お互いに傷つけあうことだけはしたくない。そういう思い出なのはは言う。ハヤトはそんな二人を見ているだけだ。なのは自身で彼女と話をしたい。その気持ちを汲み取るのも嘗て教導していたものだから取れた道だ。普通なら力づくでも説き伏せる、それをするつもりでいたハヤトだ。

「私は、ロストログアの欠片・・・ジュエルシードを集めないといけない。そして、貴女も同じ目的なら、私たちはジュエルシードをかけて戦う敵同士ってことになる」

フェイトが紅の瞳でまっすぐになのはを見る。そこには明らかな敵意があった。もし自分の邪魔をするなら・・・容赦はしないという気持ちからだった。

「だから、そう言うことを簡単に決めつけないために、話し合いが必要なんだと思うの!! どうしてあなたはジュエルシードを集めてるの??」

話し合わないと分からないこともある・・・。相手の気持ちを聞き、自分の思いを伝える。それもとくとして必要なのだとなのはは思っていた。なんでもそうやって簡単に片付ける。それではあまりにも悲しすぎるのだ。

「話し合うだけじゃ・・・言葉だけじゃ何も変わらない、伝わらない!!」

次の瞬間に目の前からフェイトの姿が消えていていた。なのはは一瞬背中に悪寒が走るのを感じた。そして反射的に後ろを振り向く。

「あ!!」

「・・・」

フェイトがバルディッシュを横なぎに切りかかってきた。しかしなのはも簡単にはやられないと空に離脱することでその攻撃を回避する。フェイトも同じく飛行魔法にてその後を追う。

「でも・・・だからって!!」

まだ何も話してない。

まだ何も聞いていない。

まだ何も伝えていない。

それなのにいきなり戦うことは・・・できなかった。

「賭けて。それぞれジュエルシードを一つずつ!!」

そう叫びながらなのは頭上高くから襲い掛かってきた。

PHASE 7 1 温泉 下の下の中（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 72 温泉 下の下の下

「サンダースマッシャー」

フェイトから放たれる直射型の高威力の魔力砲撃その攻撃に対し、
なのはもまたレイジングハートの砲撃で迎え撃つ。

「デイベインバスター!!!」

撃ち出される金色と桜色の高威力砲撃が上空でぶつかり合う。見
ているところ威力はほぼ同等だった。

フェイトは以前見たときからかなり訓練がつまれていると見て取
れたが、なのはもまた、今までの訓練をまるで水を吸い取るスポン
ジのように吸収して言った。そこは素直なところが災いしているの
か……。

「レイジングハート、お願い」

『オール、ライト』

なのは思いと言葉に答えるかのようにレイジングハートはデイベ
インバスターの威力を高める。威力が上がったデイベインバスター
がフェイトの放つサンダースマッシャーを押し返す。

「く!!!」

「はあああああ!!!」

そして拮抗していた砲撃はなのはがとうとう押し勝ったのだ。自身の砲撃がフェイトを呑み、これで終わったのかと気を抜いてしまふ。

「サイズ・スラッシュ」

上空から、なのはの頭上から聞こえたのは押し勝ったと思った少女の声。

「え！？あれ！？」

突然のことに慌てて上空を見るとフェイトがなのはに向かって光るバルディッシュを振り下ろす。思わず目をつぶってしまう。しかしその攻撃はなのはに当たることはなかった。その変わりに聞こえたのは激しい金属音だった。

「勝負ありだな」

「・・・」

「あ・・・」

目を開けてみるとハヤトがふたふりのナイフで光の鎌を防いでいた。

『・・・』

すると突然レイジングハートからジュエルシードが一つ排出された。

「レイジングハート、何を!？」

なのはがレイジングハートが勝手にジュエルシードを出したことに驚く。

「きっと、主人想いのいい子なんだ」

しかしフェイトはレイジングハートがなのはを守るために、そうしたのだと分かっていた。そういうとフェイトが手を掲げるとジュエルシードは手の中に納まった。

「あ!？」

「あきらめろ。お前の負けだ。高町なのは」

そういわれてゆっくりと地上に降りていく。そしてフェイトの手にあったジュエルシードがバルディッシュのコアの中へと消えていった。

「もうこれ以上、私たちにかかわらないで」

「・・・でも」

フェイトがなのはたちに対して言う。それでもなのはは分かりあいたい一心で話しかける。

「今度戦うことになったら・・・手加減できない」

「!?!」

あの戦いでまだ手加減されていた。そうなれば彼女と自分の実力の差はどれくらいあるのだろうか、なのはは愕然としてしまう。

「もう、私たちの邪魔をしないで!!」

「!!」

最後の言葉はまるで懇願でもするような感じであった。悲痛な声で、そう叫ぶ。すると転送魔法で別の場所で戦っていただろうアルフとユーノが戻ってきた。形としてはアルフがフェイトとの意識リンクにてジュエルシードを奪ったことを知り、これ以上の戦闘は無駄だと判断したために自身で転送魔法を使い戻ったということだ。

それをユーノも慌てて追って来たということになる。

そして今日の前で起きていることを見る限り、なのはが負けたということになる。才能もあり、訓練をつんできたなのは。確かに實力は当初よりも付いただろうがまだフェイトには遠く及ばなかった。

「お帰りアルフ」

「さっすがあたしのご主人様。あんな小娘に負けるはずがないよね」

アルフも嬉しそうに言う。

フェイトはアルフが無事に戻ってきてくれてよかったとほっとしているようだ。そしてすぐに向き直ると一瞥し、その場を離れる。

フェイトに待ってということもできなかった。たとえ止まってくれたとしても何を言っても先ほどのように返されるだけだと思った

からだ。

ぜんぜん敵わなかった。

砲撃では勝てた。

あれはおそらく次の攻撃に対してわざと出力を上げなかったのだろう。

圧倒的に戦術の面で負けていた。

（なんだろう・・・この気持ち）

胸に生まれるもやもやとして気持ち。フェイトの紅の瞳を見てその感情が生まれていた。

（どうしてあんな悲しそうな瞳をしているんだろう・・・）

ようやく正面から話せたとき、感じ取ったフェイトの雰囲気。

そして思い出されるは嘗ての自分。もしかしたら彼女もまた、自分と同じなのではないかと思った。だからこそこんな気持ちになるのだろうか。助けてあげたい・・・。孤独から助けてあげたい・・・。

そのためにもっと強くなろう。そうすれば彼女と話をすることができるようだろう・・・そう思い、決意する。

夜は遅い。そろそろ戻らなければおそらく気配を察知している士郎たちが心配するだろう。

そう思ったハヤトは帰ることを打診する。

「そろそろ戻るぞ」

結局最後まで手を出さず見ているだけだったハヤト。こうなればやりたいことをとことんやらせるしかないだろうと踏んだ。

なら自分にできるのは彼女が間違った方向に走らないように導くことと、フェイトに対抗できるまでに鍛え上げること、そして悩みを聞いてあげることくらいだと思った。

（色々と厄介なことになりそうだ・・・）

まだ何かが起こりそうだという気配を夜の風が伝えているように感じた。

PHASE 72 温泉 下の下の下（後書き）

そろそろ、物語が大きく動きます。

管理局の登場。

黒幕の登場。

そして・・・。

ご感想お待ちしております。

アンケート第一弾

おはようございます。

いつも魔道新世紀リリカルガンダムを読んでくださる皆さんありがとうございます。始めて目を通してくださった皆様、今後ともよろしく願います。

今回の投稿は、サードシーズン・・・つまりAS編が終了した後、フォースシーズン・・・オリジナル編（SEEDとOO・ファーストシーズン）での採用のアンケートをとりたく、投稿しましたものです。

アンケート第一弾～フォースシーズンのオリキャラ&コードネーム募集～

＊一応自分でも考えているのですが、なかなか納得のいくものがないときもあるので、皆様に協力を請いたくてです。

Qガンダムマイスターの名前とコードネームを募集。詳細も乗せていただけるとうれしいです。

・名前

・性別

・年齢（物語が大きく動くのはなのはたちが15歳のときです。主人公は20歳）

・容姿（イメージキャラを載せていただいても結構です）

・性格

・好きなものや、逆に嫌いなもの等

・備考（過去に何かあってガンダムマイスターになった）

・サンプル・ボイス

＊募集しているのは『ガンダム・デユナメス』 『ガンダム・キュリオス』 『ガンダム・ヴァーチェ』 の三機のMSガンダムです。皆様からのご意見お待ちしております。

＊『ガンダム・ヴァーチェ』 に関してはオリキャラが後のイノベーター（イノベイド）であることが条件です。

＊締め切りはサードシーズン（AS編）終了までです。

たくさんのご協力お待ちしております。

アンケート第二弾（後書き）

たくさんのご協力お願いします。

PHASE 73 現れる管理局 上

温泉に行ってから数日が立っていた。

いつものように、月村工業にてノルマである仕事をてきぱきとこなしているハヤト・ブリッグスの姿があった。

「・・・」

パソコンの演算が追いつかないような速さでキーを叩くハヤト。周りの人々はもはや見慣れたものであるために何も言わない。

始めてきたときから数週間はあまりのことに眼が点になり、上司たちに怒鳴られるまでまったく仕事が手についていなかった。

めまぐるしくモニターに画面が表れては消えていく。

「・・・ふう」

最後の仕事を終え、大きく息をつく。時間はもうお昼に近かった。すると、突然、『ぐうっ』という小さな音が鳴る。

「・・・」

お腹をさする。再び『ぐうっ』と小さな音が鳴る。

周りを見ても食べ物はないさそうである。

「・・・」

尻ポケットから財布を出し、中身を見れば貯まりに貯まったお金が財布を八期螺旋としている。

仕方ないと思いつつ、近くの商店街まで何か買いに行こうと思い、外へと向かうのだった。

会社に勤めているということでスーツ姿のハヤト。このように堅苦しいものはいつも軍服などで慣れていたので良いのだが。

これ服のデザインはすずかであり、作ってくれたのはメイドのノエルとファリンであった。渡されたときは呆気にと取られていたハヤトであるが不器用な笑みをつくり、感謝したのだ。その時笑みを見た4人はこんな綺麗な笑顔ができるならすれば良いのと同じことを思ったのだ。

「ありがとうございました」

商店街の一軒のコンビニにて簡単な昼食を購入する。店員の声を後ろに聞きながら自動ドアをくぐって会社の方に戻ろうとして歩き始める。

昼下がりということでもそままで多くのひとがいるわけでもないが買い物に忙しくしている主婦の姿がちらほらと見える。

すると横から大きな声が聞こえてきた。

「おい！！ぶつかっておいでそれはないだろ！？」

「ええっと・・・すいません」

大の男の声だ。

この時間帯から大きな声をあげているということはどこぞのチンピラか自棄酒して酔った者かのどちらかだろうと思った。

こんな真昼間からよくもまあ、そんな大きな声をあげられるなど、恥ずかしくはないのだろうかと少々哀れみを含んだ視線を流す。

多くの通行人もまた、チンピラの男に迫られている少女を助けたと思うがそれができずにちりり、またちりりと視線を送っては横を通り過ぎるだけだ。

そんな通行人たちを見つつ、上から怒り心頭で睨みつけてくる男を横目で見る少女。彼女の容姿から、小学生くらいに見える。

普通ならもうすでに学校に行ってもおかしくないであろうし、今の時間帯はまだ授業あるいは給食である。

しかし少女が座っているのは車椅子だ。すなわち足が不自由だということだ。そのひざにはスーパーで買った物をしていたのだろう、食材など日用品などが入った袋があった。

大方ふらついたりしたところを男にぶつかってしまい、因縁つけられたのだろうと思った。しかし器量の小さな男だと、同姓としてあきれるしかできなかった。

「ああ?? 謝るだけか?? それだけで俺が許すとも??」

「ええっと・・・あの・・・」

少女は勢いに押されて言葉を紡がないでいる。いよいよ男が何をしでかすか分からなくなる。

少女もまた通行人に視線を向け助けを求めるが、こちらを見るだけですぐに視線をそらしてしまう。男が睨みを聞かせると足早に通過していく。人は結局自分のことが大事なのである。少女は恐怖からからだをちぢこませ、小さく震えている。

「何とか言えやあ!!」

「ひい!!」

なかなか喋ろうとしない少女に対して男は我慢の限界を超えたのか拳を振り上げ、それを振り下ろす。少女は小さく悲鳴をあげ、目をつぶる。しかし聞こえてくるのは自身が殴られた鈍い音ではなく、男がみつともなくあげる声であった。

「ぶへえ!!」

地面をすべるような音を立てて男が吹き飛ぶ。何があったのかとおそろおそろ眼をあけてみるとスーツ姿で回し蹴りを決めた形で男が立っていた。

「あ??え??」

少女は突然現れたハヤトに戸惑っているようだ。

「いてて、いきなり誰だ貴様!!」

「会社員」

怒り心頭で沸点を塔の昔に超えてしまっている男に対してしれっ

とした態度で答える。しかしその受け答えが逆撫でしたのか更にボルトテージが上がった感じがした。

「貴様アアア！！調子乗ってんじゃねえぞ！！」

そう言って拳を構えて走ってくる。めんどくさそうにしながらもその拳を受け止める。

「なあ！？」

男としては本気で打ち込んだ拳を高も簡単に受け止められるとは思っていないく、目を疑う。

「温いな。よくもまあ、そんな拳で小さな女の子を殴れたものだ」

そう言って次の瞬間男は白目をむき、腹を押さえてひざから崩れ落ちる。ハヤトの拳がゼロ距離から腹に打ち込まれたのだ。

全身の力を拳に集めた一撃だ。それが見事に男の腹をドリルのようにえぐる。胃の中を激しくシェイクされ、口からは嘔吐している。

「が・・・はあ・・・」

体を小刻みに震わせ、激しい痛みに耐えているようだ。

「これで懲りてもう二度とするな」

苦々しげに顔を上げハヤトを睨む。しかし激痛と口の中の酸味で表情は歪んでいる。そんな男を無視してこちらを見ている少女に話しかける。

「怪我はないか??」

「はい」

「なにか壊れたり、食材で痛んだものは??」

「ないです」

「ならいい」

ハヤトがいくつか質問し、少女がそれに答える。傷はないらしく、まだ何もされていなかったらしいので内心安心していた。

彼女は買い物の途中であつたようで中身に被害が出ていないかも確認。これも大丈夫らしい。

しかしここで安心して帰ることはできないらしい。

「なめるなこのやろう!!」

男が突然立ち上がり、ハヤトに向かって掴みかかってきた。

「あ!!」

「!!」

背中を向けていたために反応に遅れる。振り向いたとしてもそのときにはつかまれているだろう。

少女も小さな声をあげる。

「なめやがってええ!!」

目前に迫る男。肩越しにちらりと一瞥すると伸ばされる男の腕を

掴み、すばやく間合いに入ると全身をばねのように使い男を一本背負いで道端に叩きつける。

「がはあ!!」

背中から重力にしたがって叩きつけられ、一気に肺の中の空気を吐き出してしまふ。衝撃で一瞬意識を飛ばされる。そしてはっと気づくその瞬間に激しい鈍痛が背中を中心に男を襲う。

「まったく何だ?? いい加減にしろ。大の男がみつともない」
「うっせええ!!」

右に左に拳を振るってくるのを紙一重でかわすハヤト。男はまったく拳が当たらないことに焦りを覚え、大振りになりつつある。

そんな様子を見ていた少女は内心大慌てであった。

（あかん!! あかん!! 私のせいで喧嘩になってもうた!!）

少女は自身がきっかけでまさかここまで大きなことになるとは思ってなかった。

（見てへんで何とかしたらどうや!!）

通行人は道端で喧嘩が起きているのを面白そうに見ているのもちろほらという。子ども一人の声でどうこうできる状況ではなかった。

「がはあ!!」

大振りになった拳を避けながら間合いに入るハヤトが男の顔面の

横をカウンターで殴り飛ばす。米神に突き刺さる一撃は男の意識を二度も奪う。道端に叩きつけられたことで意識が戻るがただ広がる人だかりの前で恥をさらしてしまったことに男の心にはただ憎悪しかなかった。

それは一方通行なものだ。

「このやろう・・・」

激しく荒い息を何とか整えようとよろよろと立ち上がる。

（なめやがって・・・。よくも俺に恥をかかせてくれたな・・・）

男は手をジャケットの中に入れ何かを探す。

「「きゃあああああ！！」」

「「うわあああああ！！」」

喧嘩を見ていた人たちから悲鳴が上がる。男が取り出したのは刃渡りの通常のナイフよりも長いものだった。

鈍い銀色の光が太陽の光で不気味に光る。

「事を荒立てるのが好きな男だ」

「うるせえ！！黙ってやられろ！！」

叫び声を上げながら突っ込んできた男。構えるナイフはまっすぐハヤトを狙っている。怒りからかまったく周りが見えていないのだろう。こんなところで殺人を犯すつもりなのだろうか。

心臓めがけてくるナイフ。

「!!」

それに対して構えを取ると思いつきり横から蹴り上げる。何か
折れる音と共に宙を舞うナイフの刃。

くるくると回って重力に従い地面に突き刺さる。

「・・・・」

突き刺さるナイフの折れた部分と刃のないナイフを見つめる人々。
足でそれを蹴り追ったハヤトを見る男。

みるみる顔が青くなる。

「こっちだおまわりさん!!」

「おい!! 何をやっている、警察だ!!」

ようやくお出ましという警察。誰かが通報したのだろうか。凶器
であるそれを持っていた男はすぐさま拘束される。

その後いくつか質問されるハヤトであったが、解決にこぎつけた
ということでお咎めなしに終わった。

「それでは」

そう言い、警察官が去って行った。

左手に付けられた時計を見るとすでにお昼を過ぎていた。仕事は

終わっているために後は自由時間であるが・・・。

「・・・」

ちらりと袋の中の弁当を見る。激しく動いてしまった代償であろうか中身が飛び出て袋の中がカオスな状態になっていた。

「ち・・・」

あの男のせいだと心の中で毒づく。このままでは喧嘩で促進された空腹に苦しめられる。仕方ないと思い、元来た道に戻りコンビニに行こうとする。

「あ、あの～」

突然後ろから話しかけられた。

「ん?？」

振り向くとそこには先ほどまでいた車椅子の少女がいた。まだいたのかと思いつつどうしたのかと尋ねる。

「その中身、お弁当やったんですか?？」

「ああ」

しかし、もうお弁当と呼べる状態ではないが・・・。

「もしよかったら家に来ませんか?? 御礼もしたいんで」

少女曰く、お昼をご馳走してくれるらしい。しかし見ず知らずの

男を家に上げても良いかと思う。

少女の目を見てもあまりにも純粹すぎる。

「俺と君は初対面だ。そんな男を家に呼ぶとはあまり感心できないぞ」

「せやけど・・・」

正論を言うハヤト。それでもどうしてもお礼をしたいという少女。気持ち嬉しいし別段彼女にどうこうするという気もない。

ハヤトはロリコンではない。というよりも恋愛感情というものを最近覚えたばかりであるためにそんな気はさらさらなかった。

「その気持ちだけで十分だ。家まで送ろう、その荷物じゃきついだろうからな」

淡々と喋るハヤトだがこの世界に来るまでの彼にはない、優しさがあった。

PHASE73 現れる管理局 上（後書き）

アンケートもよろしくお願いします。

一応、あっておいたほうがいいと思ってはやてとの出会いでした。

ご感想お待ちしております。

PHASE 74 現れる管理局 中

荷物を持ちながら少女の車椅子を押して歩いている。一人の少女がしかも車椅子で運ぶにしては少々厳しいものがあつた。

「ハヤトさんはスーツやけど、仕事は何してるんですか??」

「月村重工業に務めてる。プログラミング関係だ」

「エリートさんやんな」

「別に」

他愛もない会話であつた。少女がはきはきと年相応に元気に話しかけ、それに対して淡々と受け答えるハヤト。

少女は自身のことを話してくれた。曰く両親がすでに他界しているらしい。不慮の事故で二人とも帰らぬ人になってしまったのだ。

そして現在彼女はたった一人で過ごしているらしい。

さらに彼女の状態を見て分かるように、足が不自由らしい。一日に家政婦が来て身の回りのことをしてくれるらしいが、それ以外はすべて自分でやっているらしい。

本当に9歳児かと思えるくらいに大人びているところもあった。

しかし両親を失い、たった一人で孤独に過ごしているとなればそうならざるを得ないだろう。

むしろこの状態をほうっておいている役場はどうなのだろうか。体の不自由な少女をたった一人で過ごさせる。

それを聞いたら普通に施設に送るのが当たり前である。一体何をしているのだろうかと思った。

「引受人に、お父さんたちの知り合いの人がおるんや」

どうやらギル・グレアムというイギリス外国人が未元引受人らしい。しかし解せないところがある。

「一緒に住んでいるのか??」

そう聞くと表情を暗くし、首を横に振る。どうやらそのギル・グレアムという人物とは一緒に住んでいるわけではなく、お金だけが送られてくるというだけの形らしい。

「・・・」

こんな状況を役場が知ったらその人物は普通に育児放棄で逮捕ものである。まったくその責任者としての任を果たしていない。

無責任にもほどがあると思った。寂しくないはずはない。この年ならまだ両親に甘えたいだろう。

甘えられないことを必死に我慢する少女。今ともにジュエルシードを回収している高町なのは然り、同じく集めているフェイトという少女。

彼女たちからも同じようなものを感じ取っていた。

“孤独”

嘗ての自分は自らをひとりにしていた。何者にも興味を示さず、ただそこに存在するだけの人形のような存在だったハヤト。

その為か両親は彼を捨て、早くに死んだらしい。今考えると何故そんなことをしたのろうかと思う。

孤独を当たり前と思っていた自分とそれを嫌う少女たち。似ているようでまったく違うように感じられた。

「ここや」

「・・・」

目の前に現れたのは決して小さいとはいえない家だった。明らかに近接する家と比べて大きい屋敷のようにも見える。

「失礼する」

そう言い靴をそろえて中に入る。

（静かだ……。この空間は一人の少女には重すぎる）

そう内心想いつつ、荷物を持ち、少女に先導され進む。

「ここでいいな?」

「ええで、ほんまにありがとうな」

いつの間にか打ち解けているように砕けたように話す。そんなこんなで今に移動しお茶を飲みつつ他愛のないはなしを継続する。

お互いに自己紹介していなかったことに気づき、それぞれ名前を言うことになる。

「私ははやて、八神はやてや。はやては平仮名やで」

「ハヤト・ブリッグス」

「ハヤトさんやね。名前からして外人さんなんか??」

ふとハヤトは本棚にある鎖によって拘束された一冊の本に目が行く。

「八神はやて、あの本は一体??」

この家にまったく似合わない、そんなまがまがしさもある本があった。その本がある場所だけでも空間が断裂しているように、別のものに見えた。

「はやてでええのに。あれ?? 私が小さい頃からずっとあったんよ。何やろうな〜って思って読もうとしても、ご覧のとおり、鎖でつながれてるんや。硬すぎて、結局あきらめたんよ」

手にとってもいいかと聞くと、ええでつと了承を得る。

「・・・」

埃ひとつない綺麗なままの状態である。それも小さい頃からあったということから少々痛んでいても仕方ないと取れるが、それにはまったく傷ひとつなかった。

まるで今しがた買ってきたみたいに真新しいのだ。

（何か嫌な予感がする・・・）

鍛えられた第六感が警戒を放つ。流れてくるのは悲しみという感情ばかりだった。まるでその本自体が生きているかのように・・・。

（これ以上はよそう・・・）

不意に後ろから視線を感じる。はっと後ろを見ると、窓の外にある塀の上にいる猫が眼に入った。

（ね・・・こ??）

黒い毛並みはよく手入れされているのか、そして首には首輪があることからどこかの家で飼われているのだろうと思う。

じっとこちらを向いている。たまたまなのか・・・それとも先ほどさすような視線を送ったのはその猫なのか・・・。

「ありがとう」

「かまわへんよ」

そうして、いろいろと話した後、ハヤトは八神家を後にした。

しかしこの出会いが今後にかかわることになろうとは思いもしなかった。

PHASE 7 4 現れる管理局 中（後書き）

一応このフラグは回収しておきたいと思ってかかせていただきました。

タイトルと内容がかみ合っていない。

この後ようやく管理局が現れます。

現れるのはもちろん・・・。

PHASE 75 現れる管理局 下

時間はかなりさかのぼる。

高町なのはは悩んでいた……。あの温泉地での少女……。フェイトとの戦いから日にちがたっていた。

それから帰宅後ずっと、考えていた。

おそらく自分と同じ年ぐらいで、深くて綺麗な眼をした少女のことを……。会えばまた、きつとぶつかり合う事になるだろうが……。

「だけど……。それでも」

そう、たとえばつかったとしてもどうしても彼女と話がしたかった。彼女と自分は似ている。だからこそ無視してられないのだ。

そんななのはの呟きは家族の誰にも聞こえることはなく、洗面所に消えていくのだった。

教室にて……。

何かものすごい音が教室に響き渡る。教室内にいた少年少女たちは驚き慌ててその音のした方へと顔を向ける。

そこにはいつも仲が良い3人の姿があった。

しかし今の様子を見る限り、何か一発触発な感じがしていた。

「いい加減にしなさいよ!!」

「・・・あ」

教室内にアリサの机を叩いた音がと怒声が木霊する。シンッと静寂が流れる。

「あんた、この間っから何話しても上の空でボーっとして!!」

アリサが叫ぶ。

「ご、ごめんねアリサちゃん・・・」

なのはは申しわけなさそうにして言う。しかしアリサにとって今はそんな言葉はどうでもよかった。

「ごめんじゃない!! あたしたちと話してるのがそんなに退屈なら、ずっと1人でいくらでもボーっとしてなさいよ!!」

アリサは、まったく自分たちが話しかけても別のことを考えているようにぼうーっとしているなのはのことにとうとう我慢の限界だったのだ。

「行くよ、すずか!!」

そう言っアアリサは教室を出て行ってしまふ。残されたのはとすずか。すずかも何かいいいたげな様子だ

「あ、アリサちゃん・・・。あのね、なのはちゃん・・・」

「いいんだよ、すずかちゃん……。どう見ても今のはなのはが悪かったから……」

「なのはちゃん……。そんなことないと思うけど……。とりあえずアリサちゃんもちよつと言い過ぎだよ。私、少し話してくるね」

そう言つて、すずかもアリサの後を追って行つた。

「ごめんね……」

なのははただそう呟くしかできなかった。帰ってきてからのここ最近、ずっとフェイトの事を考えていたからだ。アリサに怒られるのは当たり前なだけども。

「怒らせちゃったな……」

呟くようにアリサに謝罪するのは。しかし彼女の謝罪の言葉は教室内のざわめきの中に消えていった……。

PHASE 75 現れる管理局 下（後書き）

ここはどの作品を読んでも難しいなと思います。

ここには書いていませんが、ハヤトを通してアリサとすずかはなのはが何にかかわっていることを知っています。

前置きが長いな・・・。

たぶん次こそ・・・。

ご感想お待ちしております。

アンケートの募集期間を7月22日までにしたいと思います。早まりましたが、よろしくお願いします。

現在途中経過

・ダイナメス	0票
・キュリオス	1票
・ヴァーチェ	0票

PHASE 76 現れる管理局 下の上

すずかは教室を出た後、先に教室を出て行ったアリサを追いかけていた

「アリサちゃん！！アリサちゃん！！」

そしてすずかがようやくアリサに追いついたのは階段の踊り場だった。

「アリサちゃん！！」

すずかが話しかけると、ぶっきらぼうに何よつと返してきた。すずかに対して返ってきた言葉からして相当怒っているようだった。

「アリサちゃん、なんで怒ってるのかはなんとなく分かるけどダメだよ。あんまり怒っちゃ」

すずかもまた少しはなののはに對して言いたいこともあった。しかし突然アリサがこうして走り去ってしまったので言い損ねたのだ。

「だってムカつくわ！！」

アリサは周りを見無視して叫ぶ。

「悩んでるの見え見えじゃない！！・・・迷ってるの、困ってるの見え見えじゃない！！」

おそらく温泉から帰ってからすぐだ。

あの日一体何があったかは深くは詮索していない。あまり踏み込みすぎるなどハヤトに言われていた。

そういわれると逆に友達としては心配もするわけである。隼人を信用していないわけではない。

それでも友達に何かがあったらと心配なのである。

彼女たちにはなのはと共に戦う力はない。でも支えることはできる。だから何か悩んでいたら友達として相談してあげたい・・・そう思っていた。

しかし彼女はまったく自分たちを頼ってくれない。ごまかしてでももしこうなら・・・などと話してくれてでも良いのと思っていた。

「なのに・・・何度聞いてもあたし達には何にも教えてくれない！」

それを聞いて思わず納得してしまった。悩んでいることなど見え見えなのだ。なのに心配要らないなどというほうがどうかしている。

何故頼ってくれないの・・・。どうして言ってくれないの・・・。そんな不満ばかりが二人には募っていた。だからこそアリサは切れたのだ。

「悩んでも・・・迷ってもいないなんて・・・あんなの嘘じゃない！！」

この時ずかはやっぱりアリサはなのはの親友なんだと改めて思った。自分にとって大切な友達だからこそ悩んでいるなら助けてあげたいという純粋なアリサの気持ちをずかを感じ取っていた。

「どんなに仲良しの友達でも、言えないことはあるよ」

そういうずかもまた、彼女自身にかかわることで友達であるアリサとなのはに秘密にしていることがあった。

だからこそ、何もいえないなのはの気持ちもいたいほど分かった。

聞いて欲しい、だけでもしたら友達が離れてしまうかもしれない、友達に迷惑をかけてしまうかもしれない、友達に危険が及んでしまうかもしれない。

さまざまな理由がずかの頭に浮かぶ。だからこそ、アリサにこういうのだ……。

「なのはちゃんの秘密にしたいことだったら、私たちは待ってあげられないんじゃないかな?？」

「だからそれがムカつくのよ!! 少しは役に立ってあげたいのよ、あたしだって!!」

それは誰もが望むこと。

そして友達であれば一緒に悩むこと。

アリサがなのはのことが好きだからこそ怒れるのだ。親友だと思っているからこそ力になりたいと思っているのだ。

すずかがアリサに、アリサちゃんのはなのはちゃんが好きなんだね
つと言うと、即答した。

「当たり前よ!!」

この時のアリサの顔は赤く、すずかの記憶にしっかりと記録されたそうだ。

そしてふと昔のことを思い出だしていた。自分たちがなのはとで
会わなければこうして一緒に笑ったり、泣いたり、怒ったりできる
友達に離れなかっただろう・・・っと。

彼女があの時現れてくれたから・・・。

放課後になる。下校のチャイムがなり、クラスメイトの多くが既に
下校の準備を進めている。

「じゃあなのはちゃん。ごめんね。今日は私たち、おけいこの日だ
から」

そう言っているいつものしよに帰っている三人。アリサとすずかは
家柄上、さまざまな習い事をしているのだ。

なのはもそれを知っていたので二人に頑張つてという。しかしア
リサはなのはに声をかけることなく、淡々と帰りの支度を済ませる
と教室を後にする。

「アリサちゃん・・・」

アリサの後を追いかけるすずか。不意に後ろを向いて、なのはに大丈夫だからといって、教室を出る。

「うん。ありがとうなの、すずかちゃん」

なのはの言葉を聞いて、すずかは先に行っていたアリサの後を追いかけたのだった。

PHASE 76 現れる管理局 下の上（後書き）

あつれゝ・・・？？

管理局まだかゝ！！

ご感想お待ちしております。

PHASE 77 現れる管理局 下の中

なのはたちが来たのはジュエルシードを探している途中で寄った神社だった。それからして海鳴市内へとジュエルシードを探すべく繰り出した。

それから数時間たって、時間は夜遅くの七時を回っていた。しかし今日のところ、収穫はなかった。

ジュエルシードがここ鳴海市にあることは確かなのであるが、未だ覚醒せずに眠ったままのものがあるということだ。

無理やりにでも起こす方法もあるが、それでは対応が遅れると被害が大きく出てしまう。

なのははそれだけはしたくはなかった。今日のところは仕方ない、ここで終了だろうと思う。

「ううゝタイムアウトなの」

そろそろ帰らないと晩御飯の時間であり何より家族が心配する。なのはの場合眼に入れても痛くないというくらいに可愛がっている父と兄だ。

あまり心配をかけたくないのでここで解散ということだ。するとユーノが突然言ってきた。

「大丈夫だよ。僕が残ってもう少し探してくから」

探索魔法を使い、もう少し広く見てみたいのだろう。

「なら、俺も残ろう。何かあったらお前では戦闘は無理だろうからな」

「ハヤトさんは、晩御飯はどうするんですか?？」

「心配は要らない。連絡をいければノエルが残しておいてくれるだろうからな」

残しておくというよりも、帰ってから作ってくれるだろうとなのはとユーノは思った。

「分かりました。よろしくお願いします」

一緒にいたハヤトも残ることを言う。

「ええっと、二人だけで大丈夫?？」

なのはが心配そうに言う。自分も本当は残って一緒に探したいのだが、どうしても家族には心配をかけたくない。ユーノもまた今では高町家と仲も良くなっているので、家族同然であるが。

「平気だよ。だから、晩御飯取っというてね?？」

さすがにフェレットでもおなかはすぐだろう。たしかに残って探すならユーノの御飯はとっておかないと思ったなのは。

「何かあったら念話で知らせるよ」

「うん」

そう言ってなのはハヤトたちと別れて家へと帰り道を歩き始めた。自分を心配してくれて、稽古を頑張っているだろうアリサとす

ずかのことを考えながら・・・。

フェイトはアルフと一緒に海鳴市のビルの屋上に来ていた。使い魔であるアルフは神社の時から本来の姿である狼の姿でいた。

「大体この辺りだと思うんだけど、大まかな位置か分からないんだよね」

フェイトは探している間にわずかであるがジュエルシードの気配を感じていた。しかし広すぎるここにはたくさんの人がいた。

「ああ、たしかにこれだけごみごみしてると探すのも一苦勞だねえ」

アルフも途切れることのない人の往来を見つめながら言う。確かにこんな人がいるとジュエルシードを探すのも大変だと思った。

だからこうするしかないと覚悟を決め、フェイトはバルディッシュユを掲げた。

「ちょっと乱暴だけど、周辺に魔力流を打ち込んで強制発動させるよ」

フェイトがそう言って魔法を発動させようとする。

「ああ、フェイト待っておくれよ。それに関してはアタシがやるよ」

アルフが代わりを買って出てきた。これはかなり疲れるもののであるために、フェイトも心配そうに言う。しかしラルフはフェイトの使いみである。彼女の今の状態を知らない分けなかった。

彼女はかなり疲弊している。一日中探し回り、ろくに休息もとらない。そんな状態でこれ以上無理をするとからだに支障が出る。そうなれば行動にも影響が出て、更にフェイトの性格だ、また焦って無理をするに違いないとアルフは思っていた。

今回の強制発動はアルフに任せようと思ったフェイト。アルフに微笑みかけた。

「そんじゃあ、行くよお!!」

そう言うときアルフの足元にオレンジ色の魔法陣が現れて、彼女の魔力光の光が空へと放たれた。

PHASE77 現れる管理局 下の中（後書き）

次・・・次こそは・・・。

ご感想お待ちしております。

PHASE 77 現れる管理局 下の下

「あ!？」

「!!!」

ハヤトと行動を共にしていたユーノは空へと放たれた魔力を感じていた。早ともまた空気中に漂う雰囲気というものになにか異分子が流れ込んだような不快感を感じていた。

そして空を見上げると先ほどまで晴れていた空は厚い雲に覆われ始める。

「ハヤトさん!!」

「まさか・・・魔力流を撃ち込んだでの強制発動でもしたのか??」

「おそらく。確かにこんな人がいたらその手しかないでしょうけども。あ、そうだ。結界を!!」

慌ててユーノの足元に翠色の魔法陣が展開し、発動した結界により周囲は現実時間と隔離されていく。

ユーノが念話でなのはに連絡を入れ、すぐに来きてくれるように言う。

「ユーノ・スクライアは高町なのはと合流しろ。俺は先に向かう」
「分かりました」

そうしてそれぞれの向かうべき場所へ向かった。

アルフが魔力流を撃ち込んでから数秒がたった。すると街の一角から光の柱が見つかった。

「見つけた!!」

フェイトが言う。しかし突然結界が張られると同時にアルフが言う。

「けど、あっちの近くにいるみたいだね」

「!!」

アルフがそう言うように街の方を見ると結界が広がって行った。おそらくあの白いバリジャケットの少女、あるいは使い魔・・・友達だと思っていたフェレットがやったのかもしれないと思った。

一緒にいる少年からは魔力を感じなかったために魔導師ではないと思っていた。

「ああ、あの男もいるようだね・・・」

ため息まじりに言うアルフ。アルフ自身はハヤトと戦ったときはないが、発せられる雰囲気からまずいということだけは分かっていた。

「うん早く片付けよう。お母さんのためにも・・・バルディッシュ!!」

フェイトが言うのと反応するかのように発光すると、バルディッシュは封印形態へと姿を変える。

そしてその切っ先に魔力を集め、ジュエルシードが発動したところへと向かった。

なのはは食事を終えてからすぐに掛かってきたユーノからの連絡を受けてから、すでにレイジングハートの起動とバリアジャケットを纏っていた。

>なのは、そこから発動したジュエルシード見える??<

ユーノからの念話が聞こえ、答える。よく見ると光の柱が見えていた。

>うん、見えたし、すぐ近くにいますよ<

>あの子たちが近くにいますんだ<

あの子達を聞いてなのははとしました。ずっと悩んでいた。そしてもう自分にはこうするしかない決めていた。

自分から歩み寄ろう……。距離がありすぎるならその距離を自分から縮めればいい。踏み込みすぎると危険だということは百も承知だ。

それでもこれ以上彼女のことがほうっておけなかったのだ。

>今ハヤトさんが向かってるけど距離がありすぎてぎりぎりになる可能性もある。だからあの子たちより先になのはが封印して!!<
>分かったの<

ここからだジュエルシードまで距離があるのでなのはは嘗てジ

ユエルシードを遠距離から射抜いた様にレイジングハートを砲撃形態に変化させた。

そして狙いを定め砲撃を放つ。しかしそれはまさにフェイトの封印と同時にだった。

「リリカル・マジカル!!」

なのはが詠唱する。

「ジュエルシード、シリアル14」

「封印!!」

金色、桜色の砲撃が同時にジュエルシードへとぶつかり、封印された状態へと移行した。

そしてなのははジュエルシードを見ながら考えていた。喧嘩をしてしまったアリサとすずかであるが、彼女たちとはじめから友達だったわけではない。

あの時アリサとすずかのいざこざに仲裁に入ったとき、少々アリサとの取っ組み合いになってしまったのだ。

その時二人を止めてくれたのはずっと迷っていたすずかだった。

それがあったからこそ、三人は今では中のいい親友なのだ。だからフェイトとぶつかるのはしょうがない。

だがこれを超えて、彼女と友達になれば……。そうなのはは思っていた。

「やった。なのは、早く確保を!!」

ユーノが現れ、その声になのははっとして封印作業に入る

「そうはさせるかい!!」

それを遮るかのように突然空から声がする。上空からアルフがなのはに対して攻撃してきた。

「!!」

「く!!」

しかしアルフの攻撃は何かに阻まれた。突然緑色の魔法陣が現れ、同時にシールドが現れたのだ。ユーノがとっさにバリアを張ってくれたおかげで攻撃は届かなかった。

しかしユーノが張ってくれたバリアが碎ける。そして見上げるとそこには外灯に立ったフェイトの姿があった。

そして同時にハヤトが走って来る姿が見えた。

フェイトを見つめながら思う。確かに自分たちは理由や目的は違えども、ジュエルシードを求めている。

相容れないからこそぶつかり合うのは当然だ。しかし知りたかった。彼女がどうしてそれを集めているのか。

意を決してなのはは一步前へと踏み出した。まさに勇気をあらん限り振り絞っての行動だった。

「この間は自己紹介できなかったけど・・・私の名前はなのは。高町なのは。私立聖祥大付属小学校3年生だよ」

なのははフェイトに自己紹介をした。それで分かり合えたならどれだけ良かったか。しかしこの世から戦いが、争いが、非行が、人を傷つけることがなくならないのはどうしてか。

いくら言葉にしようとも、どうしようもない理由があるから。

相手のことなど関係なく、自身の利益ばかりに眼が行くから。

さまざまな理由があるだろう。

『サイズフォーム』

機会音が聞こえると己の形態であったフェイトのバルディッシュが大きな釜の姿に形態変化していた。

「あ・・・」

フェイトのデバイスであるバルディッシュから聞こえた声に反応し、なのははレイジングハートを構えた。

そして思う。彼女の瞳を見て、何故そんなに悲しそうな眼をしているのかと・・・。

「・・・」

不意に吹いた風が二人の髪をなでる。

「!!」

「あ!!」

先に動いたのはなのはではなく、フェイトだった。外灯の上から上空に飛びあがってそのまま光の鎌を振って来た。

それに対してなのはもまた空へと飛びあがった。それから二人は飛行魔法によってビルの上という上を飛び、魔力弾の応酬になる。

なのはが魔力弾を放つと、盾ではなく、かわすことでフェイトはそれをやり過ぎ。逆に大きな鎌の魔力刃をなのはに向かって切りかかると、レイジングハートの柄の部分でなのははそれを受け止めた。

一流の剣豪は剣と剣で語り合うという。二人は魔導師としてはまだまだ二流以下であるがそれでもそれぞれの覚悟が流れ込んでくるような気がしていた。

桜色と金色の光がぶつかり、空を彩る。なのはの背中を持ち前の高速移動で取るフェイト。それに対してなのはもまた移動魔法によって逆に背中を取る。

そしてなのははレイジングハートを構えた。

「ディバインシューター」

ユーノとの魔法の訓練で教えてもらった攻撃魔法の1つでフェイトを攻撃した。その攻撃もフェイトの防御魔法で防がれたけど、距離が少しだけ離れる。

二人はお互いのデバイスを向け合う。

「フェイトちゃん!!」

不意になのはがフェイトの名前を言う。突然名前を言われたため、驚くフェイト。そしてなのははフェイトに自身の気持ちを話す。

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど・・・」

それは以前フェイトが去り際に言った言葉だ。

「だけど、話さないと、言葉にしないと伝わらないことだってきつとあるよ!!ぶつかり合ったり、競い合うことにあるのは、それは仕方ないかもしれないけど・・・」

人はそれぞれ違う考えを持つ生き物だ。反発するのは当然のこと。

「でもね!!何も分からないままぶつかり合うのは・・・私、嫌だ!!」

これは嘘偽りのないなのはの気持ちだ。

「・・・」

その必死な声が、表情が、フェイトの心を揺さぶる。

「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノくんの探し物だから。ジュエルシードを見つけたの

はユーノくんで、ハヤトさんはその被害で鳴海が危険になるのを防ぐため！！私は、そのお手伝いで、回収しているの！！」

ユーノが困っていたから、それを見捨てられなかった。ハヤトは言葉にこそしていないが初めてかもしれない暖かな居場所を奪われないために、その鳴海市が危機に陥らないように。なのはも自分が住んでいるところが危機に陥るのは嫌だった。

「だけど、お手伝いをするようになったのは偶然だったけど、今は自分の意思でジュエルシードを集めてるの！！」

サッカーの試合の後、見落としてしまったことから鳴海市に甚大な被害をこうむってしまった。

更に連絡を怠ったことでハヤトにも怒られた。

常に最悪のことを考えて行動しなければいけないと知った。もし攻撃魔法が使えない自分に対して襲い掛かられていたらどうなっていたのか。

才能があるからとあまり甘ったれるな・・・そういわれているような気がした。

その日ボランティア感覚でやっていたようなことを突きつけられ、やるならそれなりの覚悟を持って・・・そうでなければただの邪魔なだけだと。

今自分ができることをしたい、だからこそ覚悟を決めてここに来たのだ。

「自分の暮らしている街や、自分の周りの人に危険が降りかかったら嫌だから!!」

家族、親友、知り合い、親友の友達、学校の生徒、先生、その他多くの人……。傷つくことは絶対に嫌だ。

「これが・・・私の理由!!」

まっすぐに、フェイトに対して言ってやった。フェイトもそのなのは覚悟に押されるように一歩たじろぐ。

目の前のなのはがしっかりと話してくれた。そこでフェイトの心に一筋の光が生まれた。彼女になら話しても良いかもしれない。

それでかわって欲しくないが。自分だけ話さないのはなんだか申し訳なくなった。

「私は・・・」

フェイがジュエルシードを探している理由を言ってしまうおうという気持ちになったときだった。

「フェイト!! 答えなくていいよ!!」

「!!」

「あ!!」

突然の声の主はアルフであった。

「優しくしてくれる人たちの所で、ぬくぬくと甘ったれて暮らしてようながきんちよになんか、何も教えなくていい!!」

アルフはどんな思いでフェイトが今の活動をしているかいたいほど分かっていった。だからこそそんなことはまったく知らないのが気に入らなかった。

知りたがり、聞きたがる。

それが人のエゴ。

自分の知らないことは知りたい。それがたとえ相手にとってつらいことだとしても。なぜならそんなこと、知るはずもないのだから。

「えっ!？」

なのははアルフに言われたことに驚きを隠せない。

「アタシ達の最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ!!」

アルフに言われたその言葉にフェイトははっとして自分の目的を思い出した。そして再びなのはへとバルディッシュを向けた。

「なのは!!」

ユーノの心配そうな声が聞こえる。それに対してなのはは大丈夫だという。そしてまっすぐフェイトと向き合った。二人の下ではジュエルシードが輝いている。

そして次の瞬間にはフェイトはまっすぐになのはなど眼もくれずにジュエルシードへと向かっていた。

それを見なのはもその後を追いかけていく。

なのはとフェイトがジュエルシードへと向かったのと同時にハヤトはジュエルシードからの異常なまでの魔力反応を感知した。

感知したというよりも空気が一気に悪くなったと感じたくらいであるが。それでもまずい状況になると思った。

「ちい!!」

あんな状態のジュエルシードに魔力をぶつけてしまったらデバイスの方が耐え切れない。そう思ったハヤトは急いでそこへと走る。

しかし遅かったのかレイジングハートとバルディッシュが同時にジュエルシードを挟み込んだ。

「あ」

「え!?!」

挟み込んだ状態のまま、突然レイジングハートとバルディッシュは本体コアを中心にひび割れを起こした。

デバイスがあまりの魔力の耐え切れなくなっていたのだ。それと同時にジュエルシードからは強烈な光が発せられる。

「「きゃあああああ!!」」

「ちくしょう!!」

最もジュエルシードの近くにいたなのは、フェイト、ハヤトの3人を呑みこむ。そしてその光に包まれる瞬間、ハヤトがなのはと

フ
エ
イ
ト
の
前
に
立
ち
ふ
さ
が
つ
た
。

PHASE77 現れる管理局 下の下（後書き）

アンケートのほうもまだまだ募集中です。

ご感想お待ちしております。

PHASE 78 現れる管理局 下の下の上

光がやむ・・・。

まぶしすぎるくらいの光で思わず目をつぶってしまったのはとフェイト。そんな二人が最後に見たのは光から自分たちを守らんと立ちふさがった背の高い男の背中だった。

その時フェイトが感じたのはもし子どもが危険な目に遭いそうだったらこうした親というのは守ってくれるのだろうかという思いだった。

そのたくましい背中が自分の目で見たことのない、父親のように見えたのだった。

光を見てから数秒が経ち、なのはとフェイトは眼を開ける。

「「!」」

目の前に広がるはところどころが血で赤く染まっているハヤトの倒れた姿だった。

「ぐ・・・うう」

なんとか立ち上がろうとする。ふらふらとだが、しっかりと二本の足でその場に立った。

「あ・・・ああ・・・」

目の前で真っ赤な血でからだを染めている姿を眼にし、敵対しているとはいえ、魔法の使えない一般人を傷つけてしまった。

心優しいフェイトである、申し訳なさでいっぱいだった。

「ハヤトさん!!」

なのはも同様に、協力者であり、ユーノ同様に自身にとっては戦いの師匠である。魔法が使えないというのに自分とフェイトの盾になってこの傷を追ってしまった。

誰かが傷つくのが嫌いなのはである、フェイト同様に申し訳なさでいっぱいだった。

「俺のことより・・・自分のデバイスを気にしろ」

封印したジュエルシードを互いのデバイスで挟み込んだのはとフェイトの2人。双方自分のデバイスを見るとジュエルシードの魔力と干渉しあった魔力は互いのデバイスにひび割れを起こしていた。

あまりの魔力量に、レイジングハートもバルディッシュも耐え切れなかったのだ。

「フェイト!!」

「なのは!!」

ユーノとアルフが互いのパートナーの名前を呼ぶがジュエルシードから発生した光によってその安否はまったく分からない。

光がやみそこにいたのは傷はないがデバイスにひどい損傷が見え

るなのとはフェイト。そしてジュエルシードからの影響を守ろうとして立ちふさがったために大怪我を追ってしまつて倒れているハヤトの姿があつた。

「ハヤトさん!!」

「ちよつとあれはまずいんじゃないかい・・・」

ユーノは倒れているハヤトの名前を叫び、敵対しているとはいえ、あの怪我はまずいと思うアルフ。しかしすぐに立ち上がるハヤト。きらきらと輝くその目はまるで肉食動物のようだった。

二人のデバイス本体のコアにもひびが入っていて・・・そのコアはよわよわしく点滅していた。

「大丈夫?? 戻つて、バルディッシュ」

『イエ・・・ス・サ・・・』

途切れ途切れでノイズが入っているがバルディッシュは答えてくれ、待機状態に戻つた。そしてフェイトは地上へと降りながらも目の前にあるジュエルシードへと目を向けた。

そして意を決してジュエルシードへを走り、手を伸ばす。アルフのやめるように言う声が聞こえたが目の前にあるのにも手に入れないとなると、母に申しわけが立たない。

その声を聞きながらもフェイトはジュエルシードをその手で包みこんだ。

「くあああ・・・あああ」

しかし、ジュエルシードの魔力は想像以上のものだった。触れたところから血が噴出す。苦悶の声をあげながらも、ただひたすら母のためと思い、その激痛を耐える。

「フェイト！！ダメだよ、危ない！！」

アルフが彼女にやめるように叫ぶ。しかしやめられないだけの理由が彼女にはあった。その想いで足元に魔法陣を展開させた。

（止まれ止まれ、止まれ止まれ、止まれ！！）

懇願するようにして心の中で叫ぶフェイト。すると突然横から男の声が聞こえてきた。

「どいてろ・・・」

先ほどジュエルシードの光から守ってくれたハヤトだった。額からは真っ赤な血を流し、まるで流血戦をした状態だった。

「横取りしようってのかい！？」

「何故そんなことをする必要がある？？」

「え、どういうことだい？？」

「ちょっとハヤトさん！？」

ハヤトの言う言葉にアルフとユーノは困惑する。しかし早とはそんな二人の事を無視し、ジュエルシードを掴んでいたフェイトを横に突き飛ばす。突き飛ばすとはいえ、軽く押して、離れさせただけだ。

「何をするんですか!？」

フェイトが起こるのも無理はない。しかし、彼女に対して目を細めながら言う。

「そんな体の状態でよくこんな馬鹿なことができるな」
「!!」

まるで心を見透かされたように言われた。確かにフェイトはここ最近ずっと無理をしていてろくに休息も取っていなかった。

そのためもう倒れる寸前だったのだ。

（とは言え、俺も同じなんだがな・・・）

そう思いつつ、ジュエルシードを苦々しく睨みつけると、それを包み込むかのようにして押さえつける。

「つう・・・」

やはり痛みは走る。素手で触れているのだから皮膚が飛び血が流れる。後ろではなのはがやめたと叫んでいるが無視する。

（いい加減にしろよ・・・）

そう思っていると徐々にジュエルシードが弱まる。口を開けると我慢が解けると思い、目配せだけでフェイトにさっさと封印しろと伝える。

「止まれ!!」

それから少しして、ジュエルシードの暴走は収まった。

「はぁ・・・はぁ・・・」

ふらつきながらも立ち上がろうとしたフェイトであるが魔力の使い過ぎ、そのまま後ろに倒れそうになった。

フェイトが気を失う寸前アルフの声が聞こえた気がした。

PHASE 7 8 現れる管理局 下の下の上（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 79 現れる管理局 下の中

高町家にて……。なのはの机の上には先の戦いでひび割れた状態で点滅しているレイジングハートが置かれていた。

ユーノが言うにはレイジングハートはかなりの魔力にも耐えられるように作られているらしい。しかしそのレイジングハートの今の状態は一体どういうことだろうか。

ユーノはレイジングハートを見ながら考えていた。

（あの子となのはの魔力の衝突??）

初めはそう思った。双方が一気に封印しようということで最大限の魔法を酷使したからお互いに倍の負荷が掛かったのかもしれないと。

しかしそれでは説明が付かないと感じる。それではやはりジュエルシード自身からの魔力によるものだろうか、色々考えてみるもまったく出口が見えない状況だ。

ユーノがいろいろ考えていると部屋がノックされ、飲み物とクッキーを持ってなのはが戻って来た。

「ユーノくん、レイジングハートは大丈夫そうなの?？」

やはり自身の相棒であるレイジングハートのことを心配している。

「うん。かなり破損は大きいけど・・・きっと大丈夫だよ。今は自

動修復機能をフル稼働させてるからね。明日には回復すると思う」

なのははユーノの説明を聞いてほっとしている様子だ。しかしレイジングハートがここまでになってしまったのは自身の責任もあるためになのはは申し訳なさでいっぱいだった。

「なのはは大丈夫?？」

あれだけの魔力を受けたのだ、どこか悪いところがあったら大変だと思いたずねる。

「うん。レイジングハートが守ってくれたから・・・」

暴走したジュエルシードから守ったレイジングハート。なのははそんな愛器に謝罪を入れる。

『・・・』

しかしレイジングハートからは答えは返ってこず、いまだに沈黙しているだけであった。ふとなのはは窓の外を見上げた。

「ハヤトさん、大丈夫だと良いけどね・・・」

「そうだね・・・あのジュエルシードの暴走を止める為とはいえ、生身のからだで受け止めたんだ、なのは以上に危険な状態かもしれない」

「うん・・・」

あの後フェイト達が帰って行った後、こんな状態で高町家に行けば心配をかけるということで近くまでなのはたちを送るとそのまま居候先である月村家へと帰っていった。

たいしたことは無いといっていたが、やはりあそこまで血が吹き飛んだのを見ると心配だった。早く怪我が治ることを、空を見つめながら祈った。

その後、意識を取り戻したフェイトは部屋でアルフに傷の治療をしてもらっていた。治療をもらっている間にフェイトが考えていたのは自分に対して何故ジュエルシードを集めているのかを話してくれた白い魔導師と、魔法も使えない一般人なのに自分とその白い魔導師をジュエルシードの暴走から守ってくれた男性。

さらにジュエルシードを素手で押さえつけるなどの力技をして、かなり傷ついていた。

あの時アルフに言われなかったらおそらく自分は何故集めているのかを話していただろう。何故だか分からないが彼女なら、彼なら自分のことを分かってくれるかもしれないと思ったからだ。

しかし今この状態であればなににもできない。それに後彼女とはかわりたくないとも思っていた。

彼女は優しすぎると思った。だからそんな彼女を理由もなくただ邪魔だからということでは傷つけるのは同じく優しいフェイトにとっては苦痛以外の何者でもなかったのだ。

「つう・・・」

傷にしみたのか、小さく悲鳴を上げる。

「あつ、ごめんよ。もうちょつと我慢して」

アルフがフェイトに謝ってくる。一生懸命に治療してくれているアルフだ。そんな彼女に文句など言えるはずもない。感謝しかフェイトは持っていなかった。

「ありがとう、アルフ。あ、そういえば明日は母さんに報告に戻らないといけないから、早く治さないとね。傷だらけで帰ったら、きつと心配させちゃうから」

しかしアルフは眉間にしわを寄せ、言う。

「そうかい??あの女がフェイトを心配するとは思えないね」

アルフはフェイトの母親であるプレシアのことをあまり好ましく思っていなかった。

「母さんはね、少し不器用なだけなんだよ。そのことは私、ちゃんと分かってるから」

アルフとは違う見解のフェイト。大好きな母親・・・彼女はとても不器用で、自分とどう接したらいいのか分からないからそうなのだと考えていた。そう思ったかった。

「報告だけならアタシが行って来ればいいんだけどねえ・・・」

ため息混じりに言うアルフ。アルフの言うことをあまり聞いてくれないプレシア、そのため報告に行くのは決まってフェイトになっていた。

アルフもそのことは重々承知していた、しかし自分の大好きな主を気に入らないものがいるところに行かせるのが嫌だった。

アルフは救急箱を仕舞いながら、私の傍に腰を下ろした。小さい頃から一緒にいる使い魔のアルフ。使いたの主従を越えた、親子、姉妹、そして家族のような関係だった。

フェイトが覗き込むとアルフのその顔は少し嫌そうな顔だった。アルフの思うこともよく分かる。フェイトはアルフの頭に手を置いた。

「ん」

アルフは気持ちよさそうにして目を細める。

「アルフはこんなに優しくていい子なのに」

どうして分かってくれないのだろうか、自身の母親を思いながら言う。

「ま、まあ・・・きっと明日は大丈夫さ!!」

突然アルフが立ち上がり言う。

「こんな短期間でジュエルシード、4つも手に入れたんだしね!!」

「うん・・・そうだね。アルフ」

アルフもそういうのだからきつと明日は褒めてもらえる。わずかな希望を胸に、フェイトは眠りに身をゆだねるのだった。

PHASE79 現れる管理局 下の下の中（後書き）

・・・管理局の『か』の字も出ていない・・・。

感想お待ちしております。

PHASE 80 現れる管理局 下の下の下

なのはを高町家に送り届けたあと、ふらふらとした足取りで月村家へと戻ったハヤト。玄関に入った瞬間、インターホンを鳴らしたので出てきたファリンが血だらけのハヤトを見て思わず悲鳴を上げてしまったのだ。

その悲鳴を聞きつけた忍、ノエル、そしてすすかが慌ててやってきた。

「ちょっとどうしたの、ノエル??」

「あ、忍お嬢様!! ハヤト君が!! ハヤト君が!!」

「ハヤト君がどうしたって・・・ちょっとどうしたのその怪我!?!? ノエル、すぐに手当てを!!」

「はい、忍お嬢様」

「あ・・・ああ・・・」

「すすかは部屋に戻ってなさい。ファリン、すすかのこと頼める?」

「分かりました、すすかちゃん、行きましょう」

咄然としているすすかをファリンが連れ添っていった。さすがに9歳には流血した姿はきつかっただろう。というよりも部屋に戻るときもちらりちらりとこちらを振り返っていた。その時彼女の表情には

恐怖というよりも何か煌々としたものがあつた。

なんだろうかと思うのはやめにして、忍に連れて行かれつつノエルに治療してもらうことにした。

というのも包帯などを巻かれるくらいなのだが。

「まったく……。で?? 一体これはどういうことなの??」

怪我の原因を追究する忍。

「あれだ、また例のものを探していた」

「あれ……ですか??」

「そうだ」

「それにしても厄介なもの落としてくれたわよね。今のところ誰にも被害がないから良いけど」

一応忍たちには以前の動物病院の事件や森が暴走したために近くがめちゃくちゃになった事件などの詳細については話していた。

危険であるから青い宝石のようなものを見つけたら何もちよっかいを出すことはせずにすぐに連絡を送るようにといっておいた。

もちろんMS開発に協力してくれているバニングス家のほうにも伝えている。今のところアリサもすずかもそのようなものは見つけていないということなのでいいのだが。

「無茶しないでよね。怪我されたらみんなが心配するんだから」

「もう、私たちは家族なんですからね」

「家族……」

失われた言葉だったはずのそれが何故か心にしみた……。

フエイトの手には用意しておいたお土産があった。それを手に持ち、現在マンションのビルの上に立っていた。

これで母親であるプレシアが喜ぶかは分からない、しかしこういうのは気持ちからが大切だと思っていたので用意しておいた。

アルフも疑問を呈していたが、大丈夫だとフエイトは自身に言い聞かせていた。

「次元転移。次元座標　・・・誘いの扉。時の庭園、テスタロッサの主の元へ」

するとフエイトの魔力光と同じ金色の魔法陣が広がり、二人を包み込む。そして二人はプレシアの待つ時の庭園へと転移した。

次元空間内を1隻の次元航行艦が次元の海を航行していた。その戦艦の名前はアースラといい、時空管理局が誇るL級巡航艦である。

「みんな、どう??? 今回の旅は順調???」

そう言いながら下でコンソールを捜査しているクルーに話しかける女性。彼女の名前はリンディ・ハラウン。役職は次元航行部隊提督である。さらに14歳の息子を持つ1児の母でもあった。

「前回の小規模次元震災以来、特に目立った動きはないようですが・・・。2人の搜索者が再度衝突する危険性は非常に高いですね」

「そう」

リンディは2人からの報告を聞くと艦長席へと腰を下ろした。

「失礼します、リンディ艦長」

リンディが艦長席に座ると同時にブリッジへとティーカップを持ってきた青い制服を着ているボブヘアの少女がやってくる。彼女の名前はエイミー・リミエッタ、16歳であり、役職は時空管理局通信主任兼執務官補佐でありアースラの管制官である。

「ありがとうね、エイミー」

そう言ってティーカップを受け取るとそれに口を付ける。彼女たちが現在向かっているのは管理外世界の地球であった。数日前に小規模と言え、次元震が発生したためであった。いくら小さなものでも厄介であり、危険につながるために急いで現場に向かっていた。

リンディはそうして下部にいる黒いバリアジャケットを着た少年へと顔を向けた。

「大丈夫です！！分かってますよ、艦長」

その少年の名前はクロノ・ハラウン。アースラ所属の執務官でリンディの実の息子である。性格はクールで無口、かつ生真面目である。

「僕は、その為にいるんですから」

そう言うクロノは自身の待機状態のデバイスである1枚のカードを指に挟みながら執務官としての顔を見せた。

PHASE 80 現れる管理局 下の下の下（後書き）

ようやく登場か・・・。

しかし、まだ触り程度とは・・・。

血を見たらすずかは吸血衝動に走るように思うんですけどね。さすがにここでは書きませんでした。

一族についてはハヤトは知りません。ただ普通とは違うなという程度のもと、今は認識している程度。

ご感想お待ちしております。

PHASE 81 現れる管理局 下の下の下の上

時の庭園にて……。中から聞こえてくるは乾いた何かが打ちつけられる痛々しい音ばかり。それは途切れることなく何度も何度も響き渡る。

「うっ!?! あぐっ!?! あっ!?! ああっ!?!」

打ち付けられる鞭。その度にフェイトは必死に歯を食いしばり、我慢する。しかしその口からこぼれる痛みによる不明を完全にかみ殺すことはできないでいた。

「たった4つ……」

怒りを瞳に宿してフェイトの母親であるプレシアは魔力で出来た鎖によってフェイトの両腕を縛らせ、身動きのできない状態にし、更につるしに掛かって、そのからだを躡けるように鞭で叩き続ける。

その体には無数の鞭で叩かれたような傷ができていた。

「これは、あまりにも酷いわ……」

彼女が計画していることを進めるには、まったくと言って良いほど数が少なすぎていた。鞭で叩かれているフェイト、うっすらと眼を開けてみるとそこには自身に対して冷たい視線を向けている大好きな母親の姿があった。

「はい……ごめんなさい、母さん」

母を困らせてしまった、それだけがフェイトにとっては悔しいことだった。彼女にとって母親にほめてもらいたいから一生懸命になつて集めてきた、しかし彼女は起こった。そう、まだ自分に頑張りが足りないからだと……。

「いいこと、フェイト……」

プレシアがフェイトに近づき言う。

「貴女は私の娘、大魔導師プレシア・テストロッサの娘なのよ……」

とは言うものの自身の娘だとフェイトの本当のことを知っている彼女は虫唾が走るくらいに感じていた、しかし今彼女に更なるジュエルシードを集めてもらうにはこうして言うしかないと思っていた。

「不可能なことなどあっては駄目なの。どんなことでも……そう、どんなことでもよ。成し遂げなければならぬ」

ただその言葉は彼女に更なる回収を催促するもの意外に他ならぬ。

「はい……」

しかしフェイトにとっては母親が自分に期待してくれている。そうとしか受け取れなかった。褒めてもらいたい、もっと自分を見て欲しい。

「こんなに待たせておいて、もって来たこれだけじゃ、母さんは笑顔で貴女を迎えるわけにはいかない……、できるはずもない。分

かるわね、フェイト」

「はい、わかります・・・」

フェイトにはジュエルシードをしつかりと集めることができればまた褒めてもらええると思っていた。そして今そうしてもらえないのはすべて自分の責任。自分が弱いから。弱いから母を失望させ、そんな母はそんな自分を奮起させているのだと。

「だからよ・・・だから、覚えてほしいの。もう二度と・・・母さんを失望させないようにするためにね」

そうして再びプレシアの握っていたデバイスが鞭の形になる。それを見た瞬間に再びフェイトは叩かれる恐怖にさいなまれる。

そしてそんなフェイト無視してプレシアは再び叩き続ける。乾いた痛々しい音が響き渡る。

小さな小さなフェイトの悲鳴が響く。その頃扉の外ではアルフが壁に寄りかかりながら座っており、必死になってフェイトの苦痛の声を聞かないように耳を塞いでいた。

自身の主のために何もできない自分が恨めしかった。そして同時にそんな主であるフェイトに対して虐待をするプレシアに対して恨みが募る。

「なんなんだよ、あの女・・・!!」

フェイトがどんな思いで集めているのか、何も知らない癖にと毒づく。

（あの女・・・プレシアの異常さとか、酷い仕打ちは今に始まった

ことじゃないけどさあ……。今回のはいくらなんでも、あんまりだよ！！一体何だってんだい！！あのロストロギアが……。ジュエルシードがそんなに大切なものなのかい！？）

アルフが必死でプレシアに対して飛び掛るのを我慢してどれくらいの時間がたっただろうか、ずっと叩かれていたフェイトはとうとうぐったりとしてしまい、虚空を見つめるばかりである。プレシアはそんなフェイト見て、もう叩く必要がないのか、もう叩く力がいいのか、デバイスであるそれを待機状態にする。

「ロストロギアは母さんの夢を叶える為にどうしても必要なのよ。分かるでしょ？フェイト」

「はい、わかっています、母さん」

痛みにとらえながらも答えるフェイト。

「特にアレはね……。ジュエルシードの純度は他の物よりはるかに優れてる」

プレシアの求めているのは高魔力を有しているもの。それにぴったりだったのがジュエルシードというロストロギアであった。フェイト自身プレシアが一体それを何に使うのは書きかされていない。それでもいいと思っていた。母親である彼女がそうして集めればまた自分を褒めてくれる。彼女はそんな愛情に飢えていたのだ。

そしてフェイトが白い魔導師とその隣にいる青年に邪魔をされてうまく回収しきれないことも知っていた。だからこそ彼女に言った。

「貴女は優しい子だから躊躇うこともあるかもしれないけど……」

いくらひどい仕打ちを与えてもプレシア自信は知っていたことだ。フェイトは優しすぎる、だからこんな状況なのだと。だからこそ言っ
てやるのだ、自分の計画を少しでも早く進めるために。

「邪魔するものがあるなら潰しなさい!!」

あの白い魔導師も魔法を使わない青年の方も、邪魔するものは排除しろ・・・そう暗示をかけるように言った。

「どんな事をして・・・貴女にはその力があるのだから」

そうしてフェイトに掛かっていたチェーン型のバインドを外すと、力なくその場に倒れる、そんなフェイトに近づいてプレシアは言う

「行って来てくれるわね？私の娘、私の可愛いフェイト」

「!!はい、行ってきます。母さん」

フェイトは嬉しかった。あの母親のプレシアが自分の娘だと、可愛い娘だといってくれたからだ。それが聞ければ力がわいてくる。大好きな母親だからこそ頑張れる。自分にはそれだけの力がある

「暫く眠るわね・・・次は必ず、母さんを喜ばせて頂戴」

プレシアは元からからだに何かを抱えていた、それは昔からの研究のための疲れからだ。フェイトは思っていた。だからゆっくり休んで欲しいと思った、なら自分ができることはそんな母が望んでいるジュエルシードを集めることだった

「はい」

そうしてプレシアは奥へと姿を消した。それからしてふと気づいたフェイト。持ってきておいたお土産のケーキの入った箱がその場におかれていたのだ、結局食べてくれなかった。ちょっと悲しくもあった。

「あっ！！フェイト！！」

するとフェイトに向かってアルフが駆け寄ってきた。そして傷だらけのフェイトのからだを支えながら涙ながらに何度も何度も誤った。

フェイトはどうしてアルフが謝るのか分からなかった。しかしアルフは自身の主のフェイトがあんなにもひどい扱いを受けているというのに何もできないことが悔しかった。

本当のことならプレシアを殺してでもフェイトを守りたかったがそんなことをするとフェイトの心に傷が付いてしまう。

だから何もできない自分がとても悔しかったのだ。

「どうしたのアルフ？？謝る必要なんてないのに」

そう言って優しくなでるフェイト。

アルフはどうしてこんなにも優しいフェイトにひどいことをするのか、プレシアの頭がまったく分からなかった。

「ごめん世フェイト……。あたしがもっとしっかりしていればよかったのにさあ……。あいつがこんなひどいことするだなんて・

・分かっていればフェイトのことを行かせたりしなかったのに・・・」

アルフは後悔していた。

プレシアに少しでも両親があるとばかり思っていた。しかしそんなことはありえなかったのだ。彼女にとってフェイトはただの都合のいい子までしかない。しかしフェイトはそうは思っていない。

彼女にとってプレシアとは大切な家族であり、肉親である。大好きな母親だ。

そんな彼女から頼まれればなんでもやるだろう。それをうまく使ってプレシアはフェイトを動かしている。アルフにはそうとしか思えなかったのだ。

フェイトは自身を心配してくれるアルフはやはり優しいと思った。使い魔だからではなく、大切な家族だから、フェイトが傷つくのが嫌なのだ。

「酷い事じゃないよ、母さんは私の為を想って・・・」
「想ってるもんか!!」

フェイトがアルフの言うことを撤回しようとしたところ、再びアルフが叫ぶ。

「あんなこと・・・あんなのただの八当たりだ!!」

アルフは憤慨する。しかし当のフェイトは違う。彼女・・・プレシアにとってはジュエルシードがそれだけ大切なものなら、ずっと

不幸で苦しんでいた彼女のために、自分が頑張って喜ばせたい。助けてあげたい、だから頑張るのだと。

親子だから、また笑って欲しいから……。

ジュエルシードを集めて返ってくればまた昔のように優しい母に戻ってくれる、そのためならどんなことでもできると思っていた。

だから誓う……もう失敗しないと。邪魔するものは排除する。そんなフェイトを心配そうに見つめるアルフと共に、時の庭園から転移した。

時の庭園の所から戻ってきたフェイトとアルフは海鳴市にあるビルの屋上にいた。フェイトが手元の大気状態のバルディッシュに状態はどうかと尋ねると大丈夫だいつものように元気な声をあげて応答してくれた。

昨日からずっと自動修復をしていたバルディッシュは元通りになったみたいでフェイトは内心ほっとしていた。彼女にとってはとても大切なデバイス。今はなきもう一人の母親代わりであったプレシアの使い魔の女性が作ってくれたものだからだ。

「感じるね……アタシにも分かる」

するとアルフが何かを感じ取ったかのようにして言う。同じくフェイトにも感じるものがあるらしい。

「うん……。もうすぐ発動する子が、近くにいる」

ここでしくじるわけには行かない。フェイトは一層の決意をする。
フェイトとアルフはジュエルシードの発動まじかの魔力を感じ取った。

PHASE 81 現れる管理局 下の下の下の上（後書き）

ご感想お待ちしております。

まずい、この話だけで10話越してしまった・・・。

PHASE 82 現れる管理局 下の下の下の中

今日も普段どおりの学校生活が終わった。しかしいつもとはいってもなかなか解決しないこともあった。それはなのはとアリサの関係だ。以前よりもアリサがなのはのことから離れるようになっていた。

しかしそれは仕方のないことだろうし、そうするしかないと思っていた。

それに加えてややすずかのほうもよそよそしくなった感じもあった。なのはには分らないが、すずかは家族同然になっていたハヤトがあの日傷だらけで帰ってきたのに驚いた。

ハヤトがなのはと共に以前話したことをしていることをすでに知っていた。アリサには詳しくは言っていないが、やはり身内を傷つけられたことで怒っている感じではあった。

それでも二人の中を少しでも改善しようとしているがまったく効果がないことから少しあきれと諦めがあった。

なんとか早くジュエルシードについて解決したいと思っているなのは。そんなこんなでいつもの場所でスクールバスから降りた

すると丁度そこへユーノが走ってきた。その首には綺麗な状態のレイジングハートがあった

よく見ると傷だらけであった待機状態のレイジングハートであるが今はすっかりと回復し、綺麗な状態にいる。

なのはは一安心し、ほっと胸を下ろす。

「レイジングハート、直ったんだね?？」

『状態良好です』

「また、一緒に頑張ってくれる・・・かな?？私、まだまだ未熟だけどさ・・・」

『もちろんです、マイマスター』

レイジングハートの言葉を聞いてなのはは一瞬驚いたが、とても嬉しかった。レイジングハート自身が彼女のことを主と認めてくれたのだから。どんなに未熟な自分でも一緒にいてくれる。

「ありがとう」

そうなのはは満面の笑みで言うのだった。

そして海鳴市臨海公園の茂みの1ヶ所ではジュエルシードがその魔力を発動させた。そのまますぐ近くにあった木へと沈み、ジュエルシードと同化してしまった木は大きくなりたいたいという願望そのまに巨大な木へと変貌していく。

その反応を察知していたなのはとユーノ、そしてハヤトがやってきていた。

「封時結界、展開!!」

到着したユーノがすぐさま結界を展開に成功したために周囲への大きな被害を防ぐことができた。

それと同時にジュエルシードと同化した木は化け物のような姿へと変貌していく。その姿を見ていたのはたちは一瞬唖然としていたがすぐになのははレイジングハートをジュエルシードへと向けた。

するとなのはが構えると同時に空から無数の金色の見慣れた槍がジュエルシードを飲み込んだ木の化け物へと打ち込まれた。しかしその場にいるものの誰もが目を疑った。いつものなら打ち込まれてダメージが通るはずのものが命中することなく直前で木の化け物が張っただろうシールドに阻まれてしまったのだ。

「「!!」」

「なんだい生意気に、バリアまで張るのかい、こいつは!!」

アルフが今までどおり簡単に行かないことに表情をゆがめる。

「うん。今までのより強いね。それに、あの子もいる」

フェイトも防がれたことを驚いているがすぐに引き締める。そんな暇はなかった、また邪魔されたら困るということもあった。

そこから離れた場所でのなのことを見ていたフェイト。不意に二人の視線が合わさる。すると二人の視線が自身から離れたのかジュエルシードはなのはへと攻撃を仕掛けてきた。

攻撃魔法を使えず、かつ魔力を結界で大幅に使ってしまったユーノはここでは戦闘に参加できない。そのためになのははかわしつつ、ユーノに離れているように言う。ユーノも身の危険を感じたのかすぐさま離れる。

ジュエルシードからの攻撃を飛行魔法で回避したなのはは空へと

飛びあがる。更に多角となのはは指示する。なのはが空へ飛び上がると同時にフェイトはバルディッシュをデバイスフォームからサイズフォームへと変えた。直接攻撃を仕掛ける体制に入る。

「アークセイバー。行くよ、バルディッシュ!!」

『イエス、サー』

『シューティングモード』

「行くよ、レイジングハート!!」

フェイトがバルディッシュをサイズフォームにし、魔力刃を形成すると同時になのははレイジングハートもその姿を砲撃のシューティングモードへと変えていた。

まず先に動いたのはフェイトだった。バルディッシュを振り、魔力刃をブーメランのように回転させながら木の化け物の襲い掛かってきた根を切り裂きつつ、本体へ攻撃を加える。しかしさすがに簡単にはいかずにシールドを展開されて防がれる。

さらに元から才能があったのか、最近になってめきめきと上達している砲撃魔法の準備が完了していたなのは、しっかりと狙いを定め。

「撃ち抜いて!!」

レイジングハートの切先に魔力が集まりだし、それはサッカーボールほどの大きさになった

「ディバイン、バスタアアアアア!!」

現在なのは魔法の中でも最も威力があるディバインバスターを

上空から受けながらもバリアで耐え続けているジュエルシールドめがけて放つ。

しかしかなり硬いバリアなのだろう、それでも打ち破れずに木の化け物は踏ん張り続ける。

「これでどうだ・・・」

両手から投擲されたナイフ型のデバイスがバリアめがけて飛ぶ、突き刺さるようにバリアと共に拮抗する。しかしそれでも敗れない・・・しかし早とはすぐさま銃方のデバイスを取り出すと投擲しておいたナイフに対して粒子弾を打ち出し爆発させる。するとなのはのデイベインバスターとの威力でバリアにひびが入り始める。

それを好機と見たフェイトは手で印を結び、足元に魔法陣を形成する。

「貫け剛雷、サンダースマッシャアアアア!!」

フェイトは、なのはのデイベインバスターに匹敵するような威力を誇るサンダースマッシャをジュエルシールドを取り込んだ木の化け物めがけて放つ。

デイベインバスターとサンダースマッシャという2つの高威力砲撃に流石のジュエルシールドも耐えられないようで、木の化け物を守っていたシールドはなのはとハヤトの攻撃でひびが入っていた分脆く、フェイトン素案ダース末社―で簡単に砕け散った。そして木の化け物を呑み込み、断末魔を上げながらその体からジュエルシールド本体が外に掘り出された。

そして二人はすぐさまそれぞれのデバイスをシーリングモードへと形態変化させてジュエルシールドめがけて急ぐ。

「ジュエルシールド、シリアル7！！」「封印！！」

なのはとフェイトはお互いに封印をかける。

するとジュエルシールドが以前のようにして光を放つ。

その光が辺りを包みこんだ。

しばらくすると光はやみ、封印されたはずのジュエルシールドはなのはのレイジングハートにもフェイトのバルディッシュにも入ることなくその場に浮いているだけだった。そして二人はそのジュエルシーををはさんで対峙する。

「ジュエルシールドには、衝撃をあたえたら、いけないみたいだ」

前のことでフェイトはもうバルディッシュには傷ついて欲しくなかった。それに周りにも迷惑が掛かり、傷つけてしまう。

「う。私のレイジングハートも、フェイトちゃんのバルディッシュもまた傷ついてやったら・・・可哀そうだもんね」

名前を呼ばれて内心動揺する。そしてフェイトは昨日の夜のあの衝撃の事を思い出す。そして目の前の白い魔導師・・・高町なのはもまた、自分だけではなく敵でもあるフェイトのデバイスであるバルディッシュのことを心配してくれるなど、とても優しい子なのだと、思った。

「だけど、譲れないから・・・」

そう、今まさに時の庭園では大好きなhが待っているのだ。自分が目の前にあるジュールシードを持ってきてくれるのを・・・。だから彼女には渡すわけには行かなかった。

そしてフェイトはバルディッシュをバイスモードの戦斧の形態へと変える。

彼女が邪魔をするというならば・・・自分は切り捨てるだけ。それはフェイトのエゴ・・・。

「私は、フェイトちゃんと話をしたいだけなんだけど・・・」

それはなのはのエゴ・・・。

「私が勝ったら・・・ただの甘ったれた子じゃないってわかってもらえたら、お話、聞いてくれるかな?？」

なのはが自身の気持ちを伝えたのはフェイトに話を聞いてもらうためだ。そしてそれぞれのきもちがあるふたりはただ戦うことを選んだ。

そんな二人を見ていたハヤトだが、その場にいる誰も気づいていないことについて考え、そして二人に対してため息をついていた。

（馬鹿が・・・）

そう内心思っているハヤトの視線の先には今にも飛び出しそうな

二人の間にある封印されたばかりのジュエルシード。

（あれだけの魔力を誇る二人だ）

先ほどの戦いを見ていて思う。二人には魔導師としての才能はある。そう、魔導師としての才能だ。しかし魔導師としての才能しかない。それはどういうことか……。それはただデバイスから魔法をバンバンはなってシールドで防いで、かわしてまた攻撃して……。そういうことしかできないことだ。

まったく周りを見れていない。今二人に映るのは目の前のなのはとフエイト、そしてお互いのデバイスだけだろう。

魔導師としては十分すぎるくらいの才能を持つ二人と先ほどの攻撃の威力も考えて、今そこで攻撃を放ったならばどんなことが起きるだろうかということくらい、ハヤトには簡単だった。

（それこそ鳴海がまずいことになる。まったく、世話の掛かる奴だ）

そんな風のため息を漏らしつつ、ついに踏み出した二人に向かって飛び出した。

デバイス同士がぶつかりあおうとした瞬間だった。突然その場に水色の魔法陣が広がった。

同時に飛び出していたハヤトがなのはのレイジングハートを銃形のデバイスで受け止め魔法陣から現れた人物が片方の手に握っているデバイスでフエイトのバルディッシュを受け止めた。

「え!？」

「あ!？」

二人はとうぜん突然現れた二人に驚く。しかし一人は知っている人物である、ハヤト・ブリッグス。だがもう一人は一体誰だろうか。

「ストップだ!!」

まだ声変わりを始めたばかりだろうか、少年の声だ。しかしその声にはしっかりと自身が垣間見られた。

まあ、決められたようなマニュアルの様なものもあるが・・・。

「ここでの戦闘は危険すぎる!!」

確かになと思う。更に目の前にジュエルシードがあるというのに本気になって戦おうとしていた。

一歩間違えればこのあたりは荒地と化していた可能性もなくはない。

フェイトとなのははデバイスを止めたハヤトと人物が急に現れたこと、そして簡単に自分たちを止めたことに驚いていた。

「少し周りを見ろ」

「時空管理局執務官。クロノ・ハラオウンだ!! 詳しい事情を聞かせてもらおうか」

PHASE 82 現れる管理局 下の下の下の中（後書き）

クロノ君登場！！

アンチされがちなクロノだけど、この作品ではそうならないはずの
彼・・・。

うん、そのはずだ。

ちゃんと見せ場をユーノ君と共に与えようかと。

ご感想お待ちしております。

PHASE 82 現れる管理局 下の下の下

突然現れた少年が時空管理局、そしてその局員であり執務官であることを言う。少年の名はクロノ・ハラウンというらしい。

なのはは時空管理局という名前を知らないために首をかしげている。

ユーノはようやくお出ましかという顔である。

しかしフェイトとアルフは明らかに焦っていた。

「まずは2人とも武器を引くんだ」

クロノは手に持っていたフェイトの杖を離しながらなのはのデバイスを掴んでいるハヤトのほうを見ながら言うそして地上へと導いた。

「このまま戦闘行為を続けるなら・・・!!」

クロノがそう言いかけたところではっとした表情で上空を見上げる。なのはもまたそれに釣られて上を見るとそこからオレンジ色の光の矢が数髪クロノに向かって、性格にはその場にいた者たちに向かって、フェイトは除かれていたことから、撃ったのはアルフだった。

だがその攻撃はクロノの作った盾で弾かれた。すかさずアルフはフェイトに撤退を進言。再びアルフが魔力弾を放つと同時に、フェイトがその場から空へと飛んだ。今度は直接攻撃ではなく地面に攻

撃することで視界を悪くした。

「く！！」

「ああ」

アルフの攻撃とつさにを避ける。

土煙によって視界を遮らせ、それに便乗してフェイトは封印がなされているジュエルシードへと向かう。

あと少しで届くというところで突然からだに衝撃が走る。フェイトを襲ったのはクロノから放たれた水色の魔力弾。

威力うんぬんよりも発射される早さがフェイトやなのはのそれを上回っていた。

よほど鍛えているのだろうとハヤトはそれを見ながら思う。

その攻撃でフェイトは墜落してしまう。

「フェイト！！」

アルフが叫ぶ。

「フェイトちゃん！！」

なのはが叫ぶ。

慌てて落下するフェイトのからだをアルフが受け止める。フェイトはぐったりとしているようでアルフの支えがなければ立っていら

れない状態だ。

しかし、そんな中でクロノは再び魔力弾の次弾の準備をしていた。

「だめ!! やめて!!」

それを見てなのはやめたと叫ぶが無常にも警告といわんばかりの魔力弾が放たれる。それはまっすぐフェイトとアルフを狙っていた。

間に合わなかった・・・そう思った瞬間だった。水色の魔力弾に向かって放たれた魔力弾。それは寸分狂いなく数発のクロノの放ったそれを相殺した。

「誰だ!?!」

クロノが突然放たれた魔力弾を売っただろう主を探すとそこには銃を構えるハヤトの姿があった。

「お前か?? 一体何をしたのかわかっているのか??」

クロノは執務官として質問する。彼の邪魔をしたということは公務執行妨害である。

「何を?」

何を言っているのだという表情のまま言う。

「動けないでいる人を攻撃しようとしていたために助けただけだ」
「お前・・・。僕は時空管理局員だ!! こちらに従ってもらおうぞ!

！」

「何を言っている」

ふざけるなというように表情をしかめる。

「ここはお前たち時空管理局が管理する世界ではなからう」
「な・・・」

「それに、勝手にお前たちの法をこの世界に持ち込むな」
「ぐ・・・。だが、管理局の正義は世界の平和のために」
「この世界の誰がお前たちに、守護を頼んだ??」

威嚇するようにしてハヤトは言う。

「う・・・」

するとフェイトがうめく声がする。

「逃げるよフェイト!! しっかり捕まっててよ!!」

そのままアルフは意識が朦朧としているだろうフェイトを抱えて去って行った。その場に残ったのはなのは、ユーノ、ハヤトそしてクロノだけだった。

『クロノ、お疲れ様』

すると突然なのはたちの間に現れた緑色の魔法陣に女性が映し出された。

「すみません艦長、片方は邪魔が入り逃がしてしまいました」

映し出された女性に対してクロノが報告する。その時邪魔をした張本人であるハヤトのことを苦々しく睨みつけながら。

『うーん、まあ大丈夫でしょう』

とは言う艦長である女性であるが笑顔は固い。

『それで、ちょっと彼らからお話を聞きたいから、アースラに案内してくれるかしら??』

彼らというのはハヤト、なのは、そしてユーノだ。

「分かりました。ゲートの方はどうですか??」

『今作ってるからもうちょっとだけ待ってね??』

そう言う女性を写していた画面は消えていった。彼らが言っていたゲートとは一体なんだろうかと思っていると突然何もなかったところに穴が開いたのだ。

魔法にかかわるなのはとユーノのであるがさすがにこのような魔法を見たこともなかったので驚きは隠せない。

「な、何なの!?!これ」

「ぼ、僕にも知らないよ・・・」

なのはの質問にもユーノも返せない。

「この中に入ってくれ。あの人もあまり長くは開けていられないは

ずだから」

クロノが指示する。なのはあの人といわれてもぴんと来なかったが、クロノは合えば分かるといってなのはたちを穴えと入るように再度指示する。しかたがないので決してその穴の中へと入って行った。

穴を抜けて出た場所はやや薄暗かったがまだ目が見えるぐらいの明るさの部屋だった。

>ユーノくん、ユーノくん。ここって一体どこなのかな??<

>さっきのクロノって子が管理局の執務官だって言ってたし、それにあの女性のこと艦長って言ってたからおそらく時空管理局の次元航行船の中だね<

なのはの質問にユーノが答える。しかし管理局の、それも次元航行船などといわれてもその類の知識を有していないなのはにはちんぷんかんぷんであった。

>簡単に言うのだ。いくつもある次元世界を自由に移動する、その為の船ということだ<
>うん。そういうこと<

ハヤトがユーノに代わって答える。その答えであっているとユーノが言うが、なのははそれでも分からないという。

>あまり簡単じゃないかも・・・<

>そうだな、まずなのはが暮らしているこの地球っていわれる世界の他にもまだまだいくつもの世界があるんだ。その挟間・・・次元を渡るのがこの船で、それぞれの世界を干渉し合うような出来事

を管理してるのが時空管理局なのく
＞そうなんだく

歩きながら説明してくれたハヤトとユーノ。そんな話をしていると部屋を出て、クロノが三人の方を見た。

「そうだ、いつまでもその格好というのも窮屈だろう。バリアジャケットとデバイスは解除しても平気だよ」

「そうですか?? なら・・・」

クロノに言われたとおりなのはバリアジャケットとレイジングハートを解除する。宝石の姿に戻ったレイジングハートはなのはの手の中に納まっている。

すると次にクロノはなのはの肩にいたユーノに視線を移して言う。

「君も、そろそろ元の姿に戻ってもいいんじゃないか??」

「ん?? ああ、そういえばそうですね。ずっとこの姿でいたから忘れてましたよ」

そういうとなのはの肩から降りたユーノのからだを光が包み込む。なのはは一体なんだろうかと思っていると光がやんで、そこに現れたのはフェレットではなくなのはと同じ年くらいの少年だった。

「ふう・・・。やっぱりフェレットの姿だと色々大変だからね。そうだ、なのはにこの姿見せるの、久しぶりになるのかな??」

いつも一緒にいるようにして話しかけるユーノ。確かに一緒にいること入るが、その姿ではなくフェレットの姿。

「ふええええ!?!」

なのはの悲鳴が船の中に響き渡った。

隣にいたハヤトは何も言わなかったが黙って指を耳に押し当てている。よほどのさかっただろう。

「な、なのは??!」

ユーノはどうして彼女が驚いているのか分からないでいる。

「ユーノくん??! あれ??! ユーノくんってえフェレットで、でも目の前にいるのは人の姿で、ええ!?! えええ!?!」

なのははあからさまに驚いている。

「なんだ??! 君たちの間で、何か見解の相違でもあったのか??!」

「残念ながら、そうなるな」

やれやれというようにいうハヤト。

「あ、あれ??! なのはと初めてあったときってこの姿じゃなかったっけ??!」

「違う、違うよ!?! さ、最初っからフェレットだったんだよ!?!」

しばらくユーノが記憶を手繰り寄せるかのように考えていると・・。

「ああ、ああ!?! 確かにそうだったね。ごめんごめん。最初に会ったときはもうフェレットだったね」

「だよね、そうだよね!! よかった。びっくりしたよ」

二人でようやく納得したらしい。すると後ろから大きな咳払いが聞こえる。恐る恐るなのはユーノが振り向くとそこにはいらいらしているのが見て分かるクロノがいた。

「あゝその、ちょっといいか??」

「「あ」」

そう眩くなのはとユーの。頭からすっかりクロノのことが抜け落ちていたようだ。

「キミたちの事情はよく知らないが、艦長を待たせているのでできれば早く話を聞きたいんだが・・・」

クロノがやれやれといわんばかりに言ってくる。

「あ、は、はい。すいません」

「すみません」

「案内してくれ」

「では、こちらへ」

クロノに案内するように促すハヤト。ようやくかと、クロノは三人を案内する。しばらく歩いていくと艦長室に突き当たる。

そして中に入る。

「艦長、件の三人に着てもらいました」

なのはたちは中を見て嘖然としてしまった。まず先に眼に入った

のは盆栽・・・作動に使われると思われる道具類・・・そして何故か中であるというのに存在している鹿威しなど、まさに一言で言えば日本風の部屋だった

しかしはつきり言おう。これはおかしいと・・・。

「お疲れ様。まあようこそ、三人ともどうぞどうぞ。楽にして?？」
「・・・」

あきれてものも言えないというハヤト。あまりの出来事に固まってしまっているのはとユーノ。

世界が違うハヤトとユーノはそれぞれの家にて日本についていたり調べたりしているのである程度は知っている。その知識に当てはまらないのだ。

「それじゃ、座って頂戴」

促されるままに三人は座り込む。

座っている図式としてはなのはの隣にはユーノそしてハヤト、その前には艦長らしき女性とクロノが座っている。

それからして三人は艦長達になぜ自分たちがジュエルシードを集めているかを話した。

「なるほど、そうだったのですか・・・」

艦長である女性は納得したように言う。

「あのロストログア、ジュエルシードを発掘したのは貴方たちスクライア一族だったんですね??」

「はい。それで・・・僕が回収しようと」

「立派だわ」

艦長である女性が言う。

「だけど、同時に無謀でもある。それに現に君はその二人を危険に巻き込んでいる」

「そんなこと!!」

ないと言おうとした所で隣に座るハヤトが手で静止させ、首を横に振る。彼女が望んで魔法に手を出したことは確かであるが、もともとユーノがもう少し考えて行動すればなのは・・・魔法を使わない現地人を巻き込むことはなかったのだ。

「・・・」

クロノの一声でユーノは黙り込んでしまった。やはり心の奥では後悔しているのだろう。そんな中、なのははさっき出た言葉が気になった。

「あの・・・」

なのはが恐る恐ると聞いてみる。

「ロストログアって何なんですか??」

「ああ、遺失世界の遺産って言っても分からないわね・・・。そうね、えっと」

何かを操作しようとする横からクロノが助け舟を出す。

「僕がデータを出します」

「ありがとう、助かるわ」

そう言うとなのはたちに見えるように先ほどのように空中に画面が出てきて映像が流れ始めた。

「次元空間の中にはいくつもの世界があるの」

それについては先ほどの話で聞いていた。この地球という世界のほかにもさまざまな世界があるという。

それは例えばこの地球のような似て非なる世界。

人がまったく住んでおらずに、まるで原始的な世界。

言語や文化がまったく違う世界。たとえばいうなら地球という世界にある国々がそれぞれの世界を持っているようなものだ。

その世界の中には魔法を扱う世界もあるらしい。

「それぞれに生まれて育って行く世界があるのだけれど、ごく稀に進化しすぎる世界があるの。技術や科学、進化しすぎたそれらは自分たちの世界を滅ぼしてしまう。そしてその後に取り残された失われた危険な技術の遺産……」

愕然としてしまった。そんな危険なものを今まで自分は集めていたのかと。

ハヤトは思う。人の求める進化・・・革新、その果てにあるのは破滅だけなのだろうか・・・。

「それらを総称して“ロストロギア”と呼ぶ」

女性の言葉を引き継いでクロノが言う。

「使用法はまったくの不明だ。しかし、その使い方によっては世界どころか、次元空間さえ滅ぼすほどの力を持つこともある危険な技術なんだ」

しかし逆も然りだ。使いようによっては莫大な恩恵を齎せるものもある。

「然るべき手続きを持って然るべき場所に保管していなければいけない品物」

然り手続き・・・それは封印？？然りべき場所・・・それは管理局？？

「あなたが探しているロストロギアであるジュエルシードは“次元干渉型のエネルギー結晶体”というの」

聞いてみる名前だけでも物騒なものである。どうやらそれは1つだけだと小規模なものでも、いくつか集めて起動させることでその空間内に次元新を生み出し、最悪の場合次元断層というものも巻き起こす危険なものらしい。

よくもまあ、そんな危険なものを発掘したスクライア一族。度胸があるのかなんだろうか。

それにそんな危険なものを一人で集めようとしたユーノもまたユーノである。

「君とあの黒衣の魔導師がぶつかったに発生した振動と爆発・・・あれ先ほど言った次元震だよ」

そういわれてなのははぞっとした。自分たちの行動でもしかしたらなる身だけではなくこの地球という世界がなくなっていた可能性もあるのだから。

そしてレイジングハートとバルディッシュが大きく破損したときの衝動を思い出していた。

「たった1つのジュエルシードの・・・それも全威力の何万分の一の発動だけでも、あれだけの影響があるんだ。複数個集まって動いた時の影響は、とんでもないが計り知れない」

クロノが頭を抱えながらいう。嘗てもあったらしい。次元断層が起こり、隣接する平行世界が軒並み崩壊したという・・・歴史に残る悲劇が。

その話をするクロノと艦長の顔はとても辛そうだった。

「繰り返しちゃいけないわ・・・」

「え!？」

「うう・・・」

「・・・」

そう言いつつ艦長の女性が手元にある抹茶に入れ始めたのはいく

つもの砂糖だった……。2本を知っているのははおろか、それについての知識を月村家で叩き込まれたはやとはいえない、日本を侮辱していると思ってしまうのはここだけの話だ。

しかしその抹茶を普通に飲んで行く艦長……。そして一息入れると口を開く。

「これより、ロストログア“ジュエルシード”の回収については時空管理局が全権を持ちます」

当然だろうなと思うハヤト。しかし等の二人は驚きを隠せないらしい。

「「えっ!?!」」

「君たちは今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻り元通りに暮らすといい」

「そうだ、高町なのは、ユーノ・スクライア。後は時空管理局に任せていればいい」

「でも、そんな」

「まだ分からないか?? 今回のジュエルシードは次元干渉……つまりは一歩間違えれば世界が滅ぶ危険なものだ。俺はともかくお前のような民間人、素人が介入するようなレベルではない」

「でも!?!」

なのははそれでも食い下がる。ずっとジュエルシードを集めてきてそれを急にそこまでといわれて納得がいかなかったのだ。さらにここで終わってしまったらフェイトとも話をすることができない。

「まあ、急に言われても気持ちの整理もつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて、3人で話し合ってそれから改めてお話をしまし

よう??」

艦長である女性がそういう。その言葉に違和感を感じたハヤトが口を開く。

「艦長のあなた」

「どうしたのかしら?? あと、私はリンディ・ハラウン。リンディで良いわよ」

「ならリンディ・ハラウン、お前の今の言葉に矛盾があるのだから??」

「「??」」

「どういふことかしら??」

クロノを含む子ども組みはどういふことだと言う表情だ。リンディは硬い笑みのまま、ハヤトを見る。

「そこにいる執務官、クロノ・ハラウンはこの件にはかかわるなといった」

「ええ」

「ならなぜ、リンディ・ハラウン。お前は高町なのはとユーノ・スクライア、そして俺に対して考える時間を与える」

「「あ」」

「・・・」

それに気づいた子ども組み。無言のリンディ。

「管理局については多少のことだが知っている。おまえがそのような発言をしたということは、この艦にいる魔導師として現場に出られるのはそう多くないだろう」

「・・・」

「無言は肯定取るぞ。確かにそのクロノ・ハラオウンはその年にして執務官とは相当優秀なのだろう」

「ええ・・・自慢の息子ですから」

「だが、クロノ・ハラオウンと同等の力を持つものはおらず、あまつさえ、戦える人員はそう多くない」

「否定できないわね」

「艦長!!」

明らかに一般人に話しても言い訳でない情報まで普通に話してしまっている。クロノはまじめな性格であるためにそんなリンディに對して注意するように言う。姓からも分かるように彼らは親子である。

「俺から見ても高町なのは魔導師としてはおそらくそこにいるクロノ・ハラオウンよりは才能の面においては上だろう」

「なに・・・」

クロノは見ず知らずの男に自分と比べられ、あまつさえ劣っているといわれた。怒って当然であろう。

「広い次元世界の管理・・・それはとてもじゃないが簡単なことではない。それに咲く人員が圧倒的に少ない」

「無視するな!!」

「ちょっと黙りなさい、クロノ」

「ぐ・・・、すみません」

無視されたことが侵害だったのか怒鳴るクロノだが、母親でもあるリンディに威喝されるとしぶしぶ黙る。

「そこで高魔力もある高町なのは協力をあおり、よかんば、高町

なのはを管理局に引き込もうという算段か??」

「バカな!! そんなことありませんよね、艦長」

恐る恐るリンディの顔を覗き込みながらいうクロノ。しかし彼の願いは虚しく小さくため息をつくリンディによって壊される。

「そうね……。あなたの言っている通りよ」

「そ……。そんな」

リンディの言葉に愕然とするクロノ。管理局とは力のないものたちを守るための正義の組織ではなかったのか。

一般人に協力を請う、更には引き入れるだなんて行為を、まさか自分の身内がするとは思えなかった。

「お前はこんな幼い少女を戦場に出すことを、何にも感じないのか??」

「そんなことは……」

やや口ごもる。彼女とて子供を戦場へと送り込むことは反対だ。小さな可能性が無限にある命を簡単に散らせて欲しくないから。

だが、管理局として動くためには人員が少なすぎる。そのためには行して才能がある子供を勧誘するしかないのだ。

「あ……。あの」

するとなのはがおずおずと口を開く。

「私……。手伝います」

「・・・」

「「!」!」」

なのははっきりと自身の意志でそういった。自身の命云々の前に、怪我をするとうことの前にはフェイトと話をしたい。それだけのために、ジュエルシードの残りの回収を望んだ。

「なのはさんの協力は嬉しいです。しかし、もう一度考えた上で、後日またお話ししよう」

リンディの言葉を聞き、この場でお開きとなった。

PHASE 82 現れる管理局 下の下の下（後書き）

どうなんだろうなってリリなのの小説を書いたり読んでいて、思います。

9歳から命を懸けるような仕事・・・。

私自身は管理局のことをあまり好きではありませんね。

アニメのほうでも第三期の作品は突っ込みどころ満載だと思うので、個人的に。

その所は、今作品の中で突っ込み（アンチ）していこうと思いますね。

アンケートのほうもお待ちしております。

ご感想お待ちしております。

PHASE 83 現れる管理局 下の下の下の上

その後クロノに送ってもらい、なのはたちは帰宅することになった。転送された場所は場所はさっきまでフェイトと戦っていた海鳴臨海公園だった。

「とりあえず、帰ろっか」

「そうだね。ええっと・・・同い年なのかな?？」

なのははユーノに聞いてみる。ユーノもおそらくそうだろうとは言う。それよりも突然人間に代わり驚かせてしまったことに謝罪する。

なのはも大丈夫だということと特に何もなかったが・・・。

ユーノが人間であることは以前の会議の時に分かっていたことなので、現在は特に驚くこともなく、本当の彼の姿を知る事ができたということだった。

ユーノは少し申し訳なさそうにそういうが、なのはは気にしていなかった。同い年で数少ない男友達ができたのだから、むしろ嬉しいくらいだった。

「と、とりあえず」

するとユーノはいつものフェレットの姿に戻っていた。

「やっぱり普段はこっちの姿でいる方が便利だろうしね」

突然人間として現れれば、家族のほうも驚くだろう。なのは大丈夫だろうとは思っているがユーノもまた相手に迷惑をかけるのが極端に嫌だと思うほうである。とりあえずは帰宅することを進言する。

「そうだね、みんなも心配知れるかもしれないし。晩御飯食べてから、これからのこととか、考えないと」

そういうのはであるが心の中ではすでに決まっていた。フェイトとのかかわりがなくなるのは嫌だった。それにまだ何も話をしていない。ハヤトが色々アドバイスというか忠告をしてくれるがそれでもなのは今自分がしたいことをしたいと思っていた。

ユーノもまたなのはの気持ちに汲み取っていた。彼女のことだからあの黒衣の少女、フェイトを追いかけるだろうということ。

自分には戦うべきが多くない。だがそれでも彼女をサポートすることはできる。だから彼の気持ちもおのずと決まってくるのだった。

なのはたちを送り届けたクロノが帰って来た後、アースラの管制室でなのはとフェイトのデータをクロノとエイミィの2人が見ていた。

「凄いや」

どこか陽気な声をあげるエイミィ。そしてそのデータを見るクロノはややご機嫌斜めである。

「どっちもAAAクラスの魔導師だよ！！クロノくん」

「ああ」

先ほどの階段においてハヤトが言ったとおり、2人の魔導師ランクの凄さにエイミィのテンションは高く、クロノは内心驚きを隠せなかった。確かに管理局にはAランクやAAランクの魔導師は良く見かける。

というよりもそれくらいのランクを持つものが多くいないと自分たちの世界だけではなく、他の世界まで股をかけて正義を名乗ることなどできやしないからだ。

しかしなのはやフェイトとおなじAAAクラスの魔導師となれば圧倒的に少なくなってくる。更にそれよりも上の魔導師であるSランクの魔導師となれば指で数えられるくらいに少なくなる。

そのためのこのように、高魔力を持つ魔導師を勧誘するのも当然といえば当然なのだ。更に管理局は万年人材不足。それは世界を管理する数を増やし続ける限りは解決されるはずもなく、それらの問題は管理局の自業自得なのだが・・・。

「こっちの白い服の子は、クロノくん好みっぽい可愛い子だしね」

エイミィがからかうように言う。

「エイミィ！！まったく・・・そんなことはどうでもいいんだよ」

からかわれてそういうクロノであるが、顔は赤かった。

「魔力の平均値を見てもどちらの子もクロノくんを魔力だけなら上回っちゃってるね」

「魔法は魔力値の大きさだけじゃない!!」

珍しく声を大きくして言うクロノ。やはりぽっと出の子どもに、それに年下と比べられるのが嫌なのだろうか。

「大切なのは状況に合わせた応用力と、的確に使用できる判断力だろ!!」

熱く語るクロノ。うんうんと頷きながらそれを聞いているエイミィ。完全にかかわれていることをまったく自覚していない様子だ。

「大丈夫大丈夫、それはもちろん信頼してるよ。アースラの切り札だもんクロノくんは!!」

「んゝ・・・」

そういわれてクロノはむすっとした顔になる。実際エイミィがクロノよりも彼女たちの方が魔力は多いといっているが、クロノとそれほど変わらないのだ。おそらくハヤトが言うように才能の面ではクロノはなのはたちよりも劣る。

しかし実際に戦ってみればどうだろうか。圧倒的に経験が少ない彼女たちと、管理局員ということから、しっかりと訓練をこなしてきたクロノ、結果は自明の理だ。

するとそこへ艦長であるリンディが管制室へと入って来た。

「あつ、艦長」

「ああ、さっきの2人のデータね」

「はい」

そしてリンディは展開されているモニターへと視線を移す。それを見ると顔付きが変わり、思わず手にかけている椅子を握り締める手に力が入る。

「確かに、実際に見てみても思ったけれど凄い子たちね・・・」

その高い魔力に眼を見張る。

「やはりこれだけの魔力がロストログアに一気に注ぎ込まれれば当然次元震が起きるのも頷けます」

クロノがあの時なのはとフェイトがお互いのデバイスで封印しようとしたときの光景を思い出す。

更にあのジュエルシードをかけての戦いにおいては目の前にあるというのに自分たちの力をまったく理解していないように戦いを始めようとしていた。

自分ともう一人の男が出なかったら最悪次元震が再び起きていたかもしれない。

「あの子たち、なのはさんとユーノくんたちがジュエルシードを集めてる理由は分かったわ。あの男性、ハヤト君だったからしら、あの人はただ二人に協力という形を取ってるらしいけど・・・」

明らかにやめさせようという動きを見せていた。戦場に子どもを出すのをなんとも思わないのか・・・。

明らかに戦いを言うものを見てきたものが言う言葉である。それは殺し殺される戦場。

「そしてこっちの黒衣の少女の方だけれども……。何でなのかしらね……」

「ずいぶんと……必死な様子でした。何か余程強い目的があるのかでしょうか……」

まだ分からない黒衣の少女。ただ分かるのは何か焦っているということだけだった。

PHASE83 現れる管理局 下の下の下の下の上（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 84 現れる管理局 下の下の下の下の中

時空管理局に突然横槍を入れられたために撤退したフェイトとアルフ。アルフはぐったりとしたフェイトを急いでマンションに連れ帰っていた。

「つう・・・」

魔力弾をもろに受けてしまったフェイトは度重なる疲労とあいまってかなり傷ついていた。

「ダメだよ、フェイト。時空管理局まで出てきたんじゃ、もうどうにもならないよ!!」

アルフはこれ以上の回収は無理だと判断していた。今までだって何とか見つけて回収しようとしてもなのはたちの介入によってなかなかままならなかったのだから、更にプロである時空管理局が入ってくることによってもはや絶望的なものでしかなかった。

「もう逃げようよ・・・2人で遠くにさ・・・」

アルフはもうこれ以上フェイトが苦しむ姿を見たくなかった。それくらいならプレシアを裏切ってまでフェイトと共にどこかで静かに暮らしたいと思っていた。

しかしフェイトはそれを否定する。

「それはダメだよ・・・アルフ」

ここで自分が逃げ出したら残された母親はどうなるのだろうか。今のきつと自分がジュエルシートを持ってくるのを待っているだろう。

「だってさ!!!いくら管理局だからって底辺のクラスだったらなんとかなった世!?でもさっきの奴は明らかにエリートだ!!!そんなやつらが現れたい穢、本気になったらいつでもあたしたちだったら捕まえられるよ。そうになったらフェイト・・・あたしたち。それにあの鬼婆だ・・・。フェイトの母さんだって訳分ないこぼっか言うしさあ!!!それにフェイトに酷い事ばっかするし、まったく信じられないよ!!!」

「アルフ・・・あんまり母さんのことを悪く言わないで??」

フェイトはアルフをいさめるがアルフの怒りは止まらない。

「言うよ!!!だってあたしは何よりフェイトの使い魔だ!!!今だってそうだよ・・・フェイトのことが心配なんだよ・・・。それにフェイトが悲しむとあたしだって悲しくなる・・・。フェイトが泣いているとあたしだって思わず泣きたくなるさ!!!そうやって分かるんだよ・・・だからフェイトが悲しむのは・・・もう、嫌なんだよ・・・」

アルフは涙を浮かべながらそう言ってくれる・・・。フェイトはそれが何よりも嬉しかった。

使い魔とその主は精神がリンクしているためお互いの感情が分かる。そう、分かってしまうのだ。そのため隠し事ができない。

「あたしは、フェイトに幸せになってもらいたいのさ。もつと笑って欲しいのさ。そんなに傷ついたりしないであ・・・。でも、どうして分かってくれないのさあ・・・」

アルフはその目に大粒の涙を溢れさせている。彼女を泣かせてしまっているのは紛れもなくフェイト自身だ・・・。

「ありがとう、アルフ」

だからこう言うしかないのだ。

「でもねアルフ。私は母さんの願いを叶えてあげたいの」

これはフェイトの嘘偽りのない気持ちだ。大好きなプレシアのためになんとしてでも集めたいのだ。

「母さんのためだけじゃない。私自身の為にね」

そうすればプレシアに褒めてもらえる。それが彼女にとっての幸せだった。

「だからね、後もう少し・・・、本当に最後までもう少しだから、私と一緒に頑張ってくれるかな?？」

一人ではできない。そう、今までだってそうだった。アルフもいてくれたからこそずっと我慢して頑張れたのだ。

「約束しておくれよフェイト・・・決してあの人の言い成りなんかじゃなくてさ・・・フェイト自身の為に頑張るって。それならアタシはいくらでもさ、必ずフェイトを守るから」

懇願するように言ってくるアルフ。それだけ自分のことを心配してくれているのだと思うと嬉しかった。

だからフェイトが言う言葉は一つだけだ。

「うん」

PHASE 8 4 現れる管理局 下の下の下の下の中（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 85 現れる管理局 下の下の下の下

『ということだから、僕もなのはもそちらに協力させていただきたいんです』

そういつているのはユーノである。現在ユーノはなのはから借りたレイジングハートを介してアースラと連絡を取っていたのだ。

「協力・・・ねえ」

どうもクロノは乗り気ではない。管理局員として、一般人には怪我をして欲しくはないという思いがあった。確かに彼らが一緒にいてくれれば助かることも多いだろうが・・・。

『僕はともかく、なのはの力は管理局側にとっても有効な戦力だと思いますよ』

「うむ・・・」

クロノはやはり渋る。戦力は欲しい、それでも・・・。

『ジュエルシードの回収、あの子たちとの戦闘においてもどちらにも戦力として使えますよ??』

使えるとなど言うのはおかしいかもしれない。それでも何とか協力させてもらうにはそういうしかなかったのだ。

『協力して欲しいのは本当ですし、そちらから申し出をしてくれるのでしたら、まあいいでしょう』

『か、母さ、じゃなくて艦長!?!』

危うくいつもプライベートで呼んでいる「母さん」と呼びかけ、慌てて艦長と呼びなおす。

仕事上このような公の場では親子ではなく上司と部下として接しているのだ。仕方ないとは家、母としては少し寂しくもあった。

『手伝ってもらいましょう。こちらとしても、クロノ、切り札であるあなたはできるだけ温存したいもの』

『はい』

クロノも承諾するようだった。

『それとこちらが提示する条件は2つよ。なのはさんとユーノくんの両名とも身柄を一時時空管理局の預かりとすること。それから指示を必ず守ること。いいですか??』

ここにハヤトの名が出ていないのは事前の連絡でどうしても離せないことがあるということで、アースラから提示された艦にいないといけないということから辞退したのだった。

リンディとしてはなのは同様に戦力となるハヤトが欲しかったがやんわりと辞退されたために強くは出られなかったのだ。

そして強く言われたことがあった。もし高町なのはとユーノ・スクライアに何かがあったら全力で叩かせてもらおう・・・ということだった。

つまりは子どもを戦場に出すのだったら責任を持って管理しろということだった。それが大人のすること、仕事だと。

『分かりました』

ユーノがそれを承諾し、アースラ組みとの通信は切れた。

なのははその時ちょうど夕食を終えて母親の桃子と一緒に食器洗いの手伝いをしていた。するとなのはに念話でユーノから連絡が来たのだ。

>なのは、決まったよ<

>うん、ありがとうなの。ユーノくん<

それからしてようやく洗い物が終了した。

「さあ、これでおしまい」

「うん」

片づけが終わると桃子がなのはに向き直り言う。

「さてなのは、お母さんに話したい大事なお話って何かしら?？」

それからテーブルを挟んで対面し、なのはは桃子に対してこれらのことを話した。なのはが魔導師になったことは周知である。一緒にいるユーノが人間であることも知っている。ジュエルシードというユーノの落とし物を一緒に集めていることも知っている。なのはがはなしたのは集める途中で出会った少女のことだった。どうしてもほうっておけない。話をしたい。その為に少し家を開けないといけないことだった。

「もしかしたら、危ないかもしれないことなんだけどね・・・」

むしろ今まで大きな怪我を負わなかったことが不思議と考えた方がいいかもしれない。うまく行き過ぎていると思ってもいいかもしれない。それくらい危険なロストログアを集めていたのだから。

「でもね一度決めたことだから、最後までやり通したいの！！」

まっすぐ桃子を見つめて言うのは。

「うん」

その桃子は頷くだけだ。

「みんなには心配かけちゃうかもしれないんだけどね・・・」

1番なのはが気にしているのはそれだ。誰かに迷惑をかけるのが嫌だと思っていた。だからいい子になろうとした。

「それはもう、いつだって心配よ」

親の誰もが子を持てばその子どもを心配しないわけがない。無論桃子も同じだ。

「お母さんはお母さんだから・・・、やっぱりなのはの事が凄く心配」

桃子は手で顔を覆いながらいう。まだ9歳の娘が命を欠けるような危険なところに行かなければいけないとなるのだ。

普通の親なら止めるべきだろう。

「でもね・・・、まだなのはが迷っているなら絶対に危ないことは駄目よ。・・・って言うてももう決めちゃってるだろ浮けど」

「うん・・・」

なのはは呟く。もう決めているのだ。絶対にフェイトと話をするのだと。どうしてそこまでしてジュエルシードを集めようとしているのかと。

「決めちゃったんだよね?? なのはがあったその女のこともう一度話して見たいって・・・」

「・・・うん」

「じゃあ、行ったらっしやい。なのはの後悔しないように、やりたなこと、なのはの望むことをしてきたらいいわ。大丈夫、お父さんとお兄ちゃんはお母さんがちゃんと説得（OHANASI）しといてあげるから!!」

「にやはは・・・。うん・・・。ありがとうなの、お母さん」

桃子の説得という名のOHANASIに聞こえたためにやや引きつった笑みを浮かべるなのはだが、それでも母が背中を押してくれた。ようやく前に進めると思った。

それからなのはは部屋に戻りリュックに必要なものを詰め込んでいた。そして大切な仲間であるレイジングハートを首から下げて、家を出た。

それから家から走り続けて到着したのは海鳴臨海公園だった。

臨海公園にはなのはを待つ姿があった。執務官の制服を着たクロ

ノ・ハラオウンだった。

「いいのか?? 今ならまだ引き返せるが・・・」

「大丈夫。覚悟はできてます」

「分かった、そこまで言うなら僕がとやかく言う資格はないな」

「ありがとう」

「なら、行こう。アースラへ」

そうしてなのはたちのアースラでの生活が始まるのだった。

PHASE85 現れる管理局 下の下の下の下の下（後書き）

ようやく・・・ようやくです。

次からはいよいよ敵^{モビルスーツ}MSの登場か???

PHASE 86 謎のガンダム 上（前書き）

新オープニングテーマ

OP 2 儚くも永久のカナシ

PHASE 86 謎のガンダム 上

戦艦アースラは次元空間内に漂っていた。現在ブリーフィングルームにて新たな協力者との顔合わせが行われていた。

初めてのことになのはもユーノも緊張した面持ちである。

「先ほども説明したとおりです、本日0時を持って本艦全クルーの任務はロストログア“ジュエルシード”の搜索と回収に変更されます」

『はい!!』

クルーたちが揃って返事をする。そしてリンディはなのはとユーノに視線を向けながら言う。

「また本件につきましては特例として問題のロストログア“ジュエルシード”の発見者であり、結界魔導師でもある・・・」

「あ、はい。ユーノ・スクライアです!!」

リンディがユーノを紹介し、ユーノが自己紹介する。

「それから彼の協力者でもある現地の魔導師である・・・」

「はい、た、高町なのはです!!」

そしてなのはを紹介し、なのはも遅れながらも自己紹介する。目の前にはほとんどが大人であるためにかなり緊張してしまう。

身近に大人がいてくれればよかったのだが、生憎ハヤトはここに

はいない。

「以上の2名が臨時局員の扱いとして、今回の事態に当たってください」

「「よろしく願います!!」」

そうしてなのは新たな生活が始まった。

それからどれくらい立っただろうか。突然アナウンスが流れてきた。

（来た・・・）

フェイトが来るかどうかは分からない。それでも、ジュエルシードを追っていけばおのずとあえる、そう思っていた。

『なのはさん、ユーノくん。ジュエルシードが発見されました。すぐに現場へ向かってください。現場は、海鳴市郊外です』

「「分かりました」」

すぐに転送され、なのははセットアップする。

「レイジングハート、お願い」

『スタンバイレディ、セットアップ』

光に包まれ、バリアジャケットを身にまとい、そしてその手には杖と変わったレイジングハートを握んでいる。

そして現場にはなのはたちの目の前に大きな鳥がいた。

「なのはが魔力弾で牽制して。僕が隙をみてバインドで捕獲するか
ら」

「うん」

ユーノの指示になのはは頷き、上空に飛び魔力弾で鳥に向かって
攻撃し始めた。

「デイベインシューター!!」

魔力弾を撃ち、ジュエルシードと同化した鳥へと攻撃をする。し
かし、今までのものとは違い、攻撃を受けるとすぐになのはに向か
って反撃してきた。

「キャッ!?!」

「なのは!!」

放たれた攻撃を寸のところでバリアによって防ぐことに成功する。

「なのは、大丈夫?」

「う、うん」

「なら良かった」

なのははすぐに体勢を整え再びジュエルシードへと向かっていっ
た。動きがすばやいジュエルシード。しかし、しっかりと魔力弾を
誘導し、確実にダメージを与えていく。

「そこ!!」

誘導弾をうまくぶつけるとジュエルシードが少しの間怯む。

「ユーノくん!!」

「任せて!!」

すぐにユーノが捕獲魔法でジュエルシードを捕まえる。

「捕まえた!! なのは!!」

「うん。レイジングハート!!」

『シーリングモード、セットアップ』

レイジングハートはなのはの言葉に呼応するかのように封印形態に変える。それと同時に光の帯がジュエルシードを捕えてその額に8の数字が浮かびあがった。

「リリカル・マジカル!! ジュエルシード、シリアル8。封印!!」

光が大きな鳥の体を貫いてジュエルシードと分離をさせる。何とかうまく封印を済ませることができなのはもユーノもほっと一安心していた。

そしてなのはがジュエルシードを回収しようとしたときだった。

『マスター!!』

「ふえ??」

突然機械音ではあるが明らかに警戒している声をあげたレイジングハート。なのはは一体なんだろうかと思った瞬間だった。

突然なのはとジュエルシードを阻むかのようにして魔力砲とも取れるものが飛んできた。

「きゃ!?!」

「なのは!!!」

なのはは驚いて後ろに飛びのいてしまう。

なのはがジュエルシードを封印を終えたところ、アースラにいたりンディ達もその迅速な動きと連携を見ていた。

「無事確保。お疲れさま、なのはちゃん、ユーノくん」

ほっと一安心するリンディ。そしてすぐに転送ゲートを生成し始める。

「うーん、やっぱり2人ともなかなか優秀だわ。このまま欲しいくらいかも」

リンディは画面に映ったなのはを見ながらそう呟いていた。

同じ頃管制室ではエイミィとクロノはなのはと同じくフェイトのことにについて話をしていた。

「この黒い服の子、フェイトって言ったっけ?」

エイミィが以前クロノが介入したときに聞いたフェイトの名前を呟く。

「フェイト・テストロッサか……。かつての大魔導師と同じファミリーネームだな」

クロノが何かを思い出すかのように言う。エイミィはそうなのかと驚きながらもたずねる。

「とは言ってもだいぶ前の話だよ……。確かミッドチルダの中央都市で魔法実験の最中に次元干渉事故を起こして、追放された大魔導師……。だったかな」

「なら、そのフェイトちゃんって子は、その人の関係者??ってことなのかな……」

そう考えるのだ妥当かもしれないが、あまり深追いはしないほうがいい。ためにエイミィはフェイトの居場所を探そうとするが、かなり周到にジャミングをかけているのかまったく発見することができない。

クロノ曰く、使い魔が協力しているからだろうという。そうして映し出されるアルフ。

「まったく、おかげでもう2個もこっちが発見したジュエルシードを奪われちゃってるよ……」

まったくもうつとエイミィは愚痴をこぼす。

「まあ……。しっかり探して捕捉してくれ。君のことは頼りにしてるんだからな」

クロノがそういうと、はにかみながら言う。

「はいはい」

そういうのと同時に新たなアラートがなるのだった。

PHASE 86 謎のガンダム 上（後書き）

ようやく後半。そろそろ主人公も活躍させなければと思う。

PHASE 87 謎のガンダム 中（前書き）

OP 2 儚くも永久のカナシ

PHASE 87 謎のガンダム 中

なのはとユーノの前に現れた突然の敵。それはなのはが合いたかったフェイトではなかった。

「なんなの・・・あれ」

なのはが震える声で言う。明らかに異質。自分が今まで見てきたものとは違うもの。道のものに恐怖していた。

それは全身が機械装甲だった。

ツインアイ
双眼は金色に光り、V字のアンテナが二本見える。

配色は全身が黒。

武器らしいものはその両手にある盾とライフルのようなもの。おそらくそれから先ほどの攻撃を放ったのだろう。

両腰には何やら棒が二本見える。

「あー!!」

ユーノの声に反応すると、それと同時にその異質のものがジュエルシールドを掴もうとしていた。

「だめ!!」

なのはがそう叫んだが止まることをしない。仕方ないと再びデ

バインシューターを数発生み出し放つ。まっすぐ飛んで行くそれは直撃かと思われた。

しかし腰にライフルをマウントするとすぐに腰から取られた棒から桜色の魔力刃のようなものが飛び出し、サーベルの形になる。

「！！！」

打ち出したなのはもそれをみていたユーノも驚きを隠せなかった。ディバインシューターを一閃してすべてを叩き落したのだ。

それだけでは終わらずにまっすぐになのはと撃墜しに飛び出した。

「く！！！」

距離をとりつつ魔力弾でけん制するが先ほどの鳥のように避けることはなくすべてを叩ききる。

そのために徐々に距離をつめられる。

「なのは！！！」

ユーノが放ったバインドによって、両腕を縛り上げられる。

『なのはさん、ユーノくん！！』

「リンディさん！！アレは一体なんですか！？」

突然画面が現れるとリンディが現れる。なのはは一体なんなのかとリンディにたずねる。

『アレに関しては後で教えます。はつきり言います、今のあなたたちでは相手になりません』

「く!!」

『アレは魔導師ではありません。使用するのも魔法とはまた違ったもの。たとえ非殺傷でも一体どんな影響があるか分かりません』

「ならどうすれば・・・」

『今、転送ゲートを開けます、すぐに戻ってきてください』

「ジュエルシールドを奪われちゃったんですけど」

『今回ばかりは仕方ありません。さあ、早く』

明らかに焦っているリンディに催促されながらもなのはとユーノは急いで転送ゲートの現れたところへと急ぐ。

すると突然小さな粒子弾がなのはたちとゲートを阻む。そのほうを見るとちょうどバインドを破壊し終えた異質がいた。

「く!!」

『早く!!』

まさに危機一髪だった。ライフルを構えた異質から放たれた粒子砲が着弾したときにはその場になのはたちの姿はなかった。

逃げたと思い、異質は手にあるジュエルシールドを握り締めるとその場から粒子を放ちながら離脱した。

急いで追いかけようとしたがジャミングがひどく、失敗に終わったのだった。

PHASE 87 謎のガンダム 中（後書き）

動き出した歪み。

今だ眠りから醒めぬか・・・、ガンダム！！

PHASE 8 謎のガンダム 下（前書き）

OP 2 儚くも永久のカナシ

PHASE 88 謎のガンダム 下

ジュエルシードを封印し他が突然現れたい室によって奪われてしまったなのはたち。ゲートから現れた二人ははつきり言って顔面蒼白だった。明らかに自分たちは殺されそうになった。もう少しで自分たちはおそらくその場にはいつくばっていただろうと思うと身震いした。

そんな二人を気遣うように、リンディは指示して二人を医務室へと移動させるのだった。

それから数時間がたっていた。なのはとユーノが比較的落ち着いていたところでリンディたちの待つブリーフィングルームへと足を運んでいた。

「失礼します」

中に入るとリンディ、クロノ、そしてエイミイがいた。

「二人とも大丈夫かしら??」

「はい・・・」

「大丈夫です」

そうは言うがまだ顔色は良くない。突然死を突きつけられたのだ。そうなるのは当然である。ましてやまだ9歳である。

「それでは先ほどの未確認についてだけど・・・エイミイ」

「了解です」

そういうと画面が現れる。そこに書かれているのはMSモビルスーツだった。

「アレはとある管理外世界において中心的に生産、運用されている
パワードスーツ。通称MSモビルスーツよ」

なのはもユーノも一体なんだろうかと首をかしげる。

「彼らは魔導師じゃないの」

「え！？そんな」

「だったらあの攻撃は一体？？」

なのはもユーノも信じられないと言う顔だ。

「彼らにはリンカーコアがないの。魔導師として魔法を使うには、
それが必要だってことは知ってるわね？？」

「はい」

リンディがなのはにたずね、なのはは肯定する。それに関しては、
ユーノから聞いている。空気中に漂う粒子を変換するための器官の
ことだ。

「彼らのそのリンカーコアに当たるのがこれ」

リンディが画面の視点を変え、背中にある円錐状の推進部をさす。

「これはなんですか？？」

ユーノがたずねる。

「これはGNドライブだ」

「GNドライブ？？」

なのはが鸚鵡返しに言う。

「この光りがGN粒子・・・まあ、簡単に言えば空気中に漂う魔力粒子だと考えればいい。今だその原理が説明されていないんだ」

魔導師が放った魔法の後には残量粒子としてそれが残る。つまり推進として使われる粒子もまたそれと似たものなのだ。そしてその原理が説明されていないといわれ、なのはたちは驚く。そのために彼らもまた、その粒子を魔力と同じと考えなければいけなかった。

モビルスーツ
「MSといいましたが、それは普通の魔導師とどう違うんですか？」

モビルスーツ
「MSは魔導師が纏うようなバリアジャケットよりも耐久性が圧倒的に強いです」

「「!!」」

つまりはちよつとやそつとの攻撃では倒れることはないらしい。もちろん機械装甲であるために実弾などの質量兵器もほとんど通用しない。

「さらに武装の種類も多いです」
「?」

よく分からないようで、疑問符を頭に浮かべる。そこに説明に入るはクロノだ。

「ああ、例えば君や僕は杖を使うが、フェイトという子のような鎌や斧は使わないだろう?」

「うん」

なのはは頷く。遠距離からの砲撃は得意だ。しかしフェイトが得意とする高速戦をやれといわれてもはつきりいって無理だとなのは言える。

それは自身の運動神経云々の前に、デバイスをの問題もあるだろうし、もし剣などを使ってみろといわれてもまったく使いこなせないだろうと思っていた。

そういうのにも、合う合わないがあるのだろう。

「僕も剣を使えといわれてもはつきり言って無理だ」

「私も無理です」

「僕もだね」

もともと戦闘では補助に特化したユーノだ、攻撃するためのデバイス是不慣れであろう。

「しかしMSには先ほども見たように銃、剣など複数の武装を搭載、そして使用できる」

「「!」」

驚きを隠せない二人。武装によっては不慣れなものもあるかもしれない。それでも豊富な武装があるということはそれだけ距離にあった戦いができる。オールラウンドな戦いができるということだ。なのはの様な砲撃タイプは大抵近接距離が苦手だ、その場合はあのと看みたいにサーベルを使用する。フェイトのように近接が得意な遠距離からの射撃だ。

「それにあれは管理局のものではないな」

「管理局でも扱ってるんですか??」

「少数だな……。やはり管理局はどうしても魔導師主義に偏り気味だ」

「それでも戦果を上げているのはMSモビルスーツなのよね」

比較的活躍しているらしい。それでもやはり、魔導師がまだ優遇されているらしいが……。

「とにかくいえることは、次に合ったときは決して一人では戦わないことだ」

「クロノが行くか、もしくはすぐさま撤退するかのどちらかね」

「はい、分かりました」

そうして話し合いは幕を閉じるのだった。

PHASE 8 謎のガンダム 下（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 89 謎のガンダム 上の上(前書き)

OP 2 儚くも永久のカナシ

PHASE 89 謎のガンダム 上の上

「フェイトちゃん・・・現れないね」

なのはにとってジュエルシードを集めることも大切だが、それよりもフェイトと話をしたいというのが大きく割合を占めていた。

「そうだね。たぶんこっちは別のルートでジュエルシードを集めてるかもしれないよ。絶対に1つしか反応を示さないってわけじゃないからね」

ユーノがそういうと、なのはも力なく頷く。そんな中、なのはの気持ちは早くフェイトに会って話をしたい、それだけだった。

「大丈夫だよ、なのは。あきらめなければいずれ会えるさ。それに残りのジュエルシードも残り少ないしね」

そうだ、今まで自分たちが集めたものと、フェイトたちの集めたものをあわせると残りの数は指で数えられるくらいになっていた。

そのために、遅かれ早かれ、発動すればフェイトにあえるということだった。

「ユーノくん・・・」

「だから、頑張ろうよ。僕も協力するから」

「うん!! ありがとうなの」

そのときのなのはの笑みは輝いて見えた。思わずユーノが顔を赤らめてしまうのも無理は無いということだ。

なのはたちがアースラにて生活を始めて一週間以上がたった。それからしていくつか回収をしたり反応があったりとしていたがなのはたちが先に来て回収するか、フェイトが回収した後だったと課などでなかなか会う機会がなかった。

そしてとうとう残りのジュエルシードは6個と残り少なくなっていた。アースラのクルーたちも必死になって反応を探しているがなかなか見つからないようだ。

「残りのジュエルシードはどこにあるのかな・・・??」
「そうだね」

なのはとユーノが並んで椅子に座っている。

「海鳴市は山と海に囲まれた街だから、有るとすれば山の中か海の中かな??もしかしたら海の中かもしれないな」

それを聞いてなのはやや嫌だなあという表情になる。泳がなければいけなくなると、彼女の運動神経からして足手まといになるかもしれないからだ。

「あむ、今日も空振りだったね・・・」

食堂でクッキーを砲張りながら言うのは。

「うん、結構長くかかるかもね。なのは、ごめんね??」
「ふえ!??」

突然ユーノが謝ってきたために驚いてしまうなのは。どうして彼が謝るのか、分からなかったのだ。

「なのはは、家族とはなれて寂しくない??」

なのははまだ9歳の小学生である。年齢的にもまだまだ甘えたい年頃だろう。

「別に、ちっとも寂しくないよ」

きっぱりというなのは。

「ユーノくんやクロノくん、エイミィさんに、リンディさん、たくさんクルーの人たちと一緒にだし、一人ぼっちでも結構平気だよ」

そう言って何かを思い出すかのようにして喋る。

「それに・・・ちっちゃい頃は、よく1人だったから」

そういうなのはが思い出すのは昔のことだった。父である高町士郎が仕事におおけがをってしまったときのこと。

その時は喫茶店を始めたばかりであり、始めた当初であるからそれほど知られているわけでもあらず、客足も少なかった。そのために桃子も恭也も美由紀も皆忙しくしていた。仕事と寝たきりの士郎の看病等でまったくなのはにかまって上げられなかった。そのため割と最近まで家で1人であることが多かった。

今まであれだけ暖かった家族が急に反対に寂しくなってしまった

のだ。家にいても料理は作り沖されているだけでたった一人で寂しく食事を取るしかできない。遅くまで帰ってこないために一人で眠ることが多かった。そんな寂しい生活が父が元気になるまでずっと続いていたのだ。

「だから、結構慣れてるの」

そういうのはであるが、悲しみの色は隠せない。

「そっか」

ユーノもあまり深くは言わない。

「そういえば私、ユーノくんの家族の事とかあんまり知らないね。ハヤトさんの家族のことも」

「ああ、そういえば言っていなかったね。ぼくは元々1人だったんだよ」

「そうなの??」

ユーノがもともと一人だったということを聞き、なのはが聞き返した。

「両親はいなかったんだけど、部族のみんなに育ててもらったから。だから、スクライアの一族が僕の家族ってわけ」

「なるほど・・・」

なのははそのことを聞き、一言呟くにとどまる。自分以外にも寂しい思いをしている人がいる。

それはもしかしたらフェイトも同じなのではないか。そしてここに

いない、ハヤトもまた。

「そうなんだ・・・そうだユーノくん。いろいろ片づけたら、もつと沢山いろんなお話しようね」

まだまだ話していないこともある、趣味とかそういうものの類を・・・。

「うん、いろいろ片づいたらね」

そういうものには一抹の不安があった。いろいろ片付いたらどうなるのだろうか・・・。自分たちが出会えたのはひとえに魔法というものがあつたからだ。そんなときはどうなるのだろうか。考えても答えは見つからない・・・。

すると突然艦内に響き渡るアラート音。

『エマージェンシー！！捜査区域の海上にて、大型の魔力反応を感じました！！僧院は直ちにそれぞれの配置についてください』

とつぜん館内に響きわたったエマージェンシーのコール。大型魔力反応と聞いてもしかしたらフェイトが来たのかもしれないとなのはは思った。

「なのは、ブリッジに行こう」

「うん！！」

今度こそ話をしたい。そういう気持ちを胸になのはたちは急いでブリッジへと向かった。

PHASE 89 謎のガンダム 上の上（後書き）

いよいよ海上での戦い。

謎のガンダムの襲撃。

死への危険。

そんな危機から守れ、ガンダム!!

PHASE 90 謎のガンダム 上の中 (前書き)

OP2 儚くも永久のカナシ

PHASE 90 謎のガンダム 上の中

「アルカス・クルタス・エイギアス・・・」

フェイトが海上にて詠唱を始める。

「煌きたる天神よ、今導きの下降り来たれ・・・」

大型魔法を使用する準備だ。

「バルエル・ザウエル・ブラウゼル・・・」

フェイトは海上にて転校操作・儀式魔法を発動させようとしていた。これはかなり魔力の消費をするが、それでもかなりの威力を持って市内とおそらくはかなりの数が眠っているだろうジュエルシードを起こすことはできない。

「・・・おそらくジュエルシードは海の中だ・・・。だから、海に電気の魔力流を叩きこんで強制発動させて位置を特定する・・・てわけだね。フェイト・・・そのプランは間違っていない・・・だけど。」

アルフはフェイトのからだの方を心配していた。連日はずれが続き、焦りからか不眠で探し続けている彼女のからだはすでに限界が近かった。

たとえ発動させられたとしても、とてもではないがすべてを封印できるとは思えなかったのだ。

フェイトの発動させた天候操作の魔法によって曇っていた空から

雨と雷が降りそそぐ。

「撃つは雷、響くは轟雷・・・アルカス・クルタス・エイギアス！
！」

そして最後の呪文を紡ぐと魔法陣の上に巨大な魔力スフィア生成される。準備は整った。

「はあああああ！！！」

フェイトの掛け声とともに剛雷が海へと撃ち込まれた。そしてその威力はすさまじく、海は大きくあれ、そしてその中から六つの光の柱が空へと突き刺さる。

「はあああ・・・はあ」

肩で大きく意気をするフェイト。大きく魔力と体力を消耗してしまった。

「見つけた、残り6つ・・・」

ふらふらとしたからだのままバルディッシュを構える。そんなフェイトの姿を見てアルフは焦っていた。

「――こんだけの魔力を撃ち込んで、さらに全てを封印してだなんて・・・。こんなの、無茶を通り越して無理だ！！」

アルフがそう思っているとは裏腹にフェイトはすぐにアルフにサポートを頼む。

「アルフ、空間結界とサポートをお願い!!」

「ああ、任せといて!!」

そういうと同時に心の中では誰が雇用ともフェイトを守ってみせるといふ覚悟をしていた。

そうしてアルフはジュエルシードへと向かい、フェイトはバルデイッシュと見つめながら。

「頑張ろうね、バルデイッシュ」

そう言って、自身もまた、ジュエルシードへと向かうのだった。

PHASE 90 謎のガンダム 上の中 (後書き)

感想お待ちしております。

PHASE 9 1 降り立つ天使 上（前書き）

OP 2 儚くも永久のカナシ

PHASE 9 1 降り立つ天使 上

ここはとある製作工場だ。

一人の青年がモニターに眼を向けながらカウントダウンをしている。周りには多くの人が立っている。

白衣を着込んだ研究者たち。これの開発に協力してくれた会社の責任者。そしてその家族。

「3、2、1、システム機動」

プシューっと言う煙が吐き出される音と共に、何かが入っている扉が大きく音を立てながら開かれていった。

「つ、ついに完成か・・・」

「小さい頃夢見たものが・・・」

「今、現実・・・」

まるで子どものようにはしゃいでいる研究者たち。それを見ている協力者たちはほほえましく見ている。

「一体何を作ってたのかしらね」

そういうのはバニングス社のご令嬢、アリサ・バニングスだ。

「うーん・・・お姉ちゃんたちに聞いても当日のお楽しみって言うてたけど?？」

月村重工の娘である月村すずかだ。

白い煙が霧散すると人々の目の前に現れたのは青と白のツートンの天使を模した人型のものだった。

「天使・・・??」

アリサとすずかはその背中にある翼を見てそう呟いた。

「GN-001エクシア・ヘブンズソード」

そういうは立ち上がったハヤトだ。

「皆のおかげで無事に完成させることができた。協力、感謝する」

そう言って頭を下げる。

「いやいや楽しく研究させてもらったのはこちらですよ」

「そうそう、こうやって絶対に無理だと思ってた小さい頃の夢がかなったんですから」

「むしろこちらが感謝したいくらいだ」

そういうはかかわった研究者たちだ。

「私たちも娘を助けてもらった身だ。これくらいのことはお安い御用だよ」

「そうそう、それに異世界の技術も知ることができたしね」

そういうはアリサの父親であるデビットとすずかの姉である忍だ。

すると突然異変を感知したようで、何でも鳴海臨海公園付近の海上にだけ不審なゆがみがあるということだった。

これはMSモビルスーツを開発するに当たって魔法や粒子を察知するような機能をつけた探知機を製作していたのだ。

おそらくだが、ジュエルシードを回収しに来たのだろうと踏んだハヤト。そこにはもちろんフェイトもフェイトを追いかけているのはとユーノ、そして時空管理局も出るだろう。

本当ならかわらずともいいのだが……。

「GN粒子??」

一人の研究員がそういう言葉が聞こえた。一体どうしたことだと重いモニターを見ると確かにそこに示されているのはGN粒子だった。

「どういことでしょうか……」

「……」

自分以外にもこれを開発していたものがあるか……管理局から着たのか……それとも……。

「敵か??」

断定できる証拠がなさ過ぎる。しかし、ざわざわとした感覚だけがある。それはまさしく危険だということを知らせている。

「出撃する」

「「ええ!？」」

完成したばかりでまったく調整をしていない状態での出撃。今まで使っていたものよりも遥かに高性能なエクシアをいきなり使うとなればはつきり言って無謀である。

しかし行かなければなにか危険な感じがする。そういうとしばらく考え込んでいた研究員たちはすぐさま準備に取り掛かる。

ハヤトはすぐにエクシアの前に躍り出る。パイロットスーツはない。それでも出るつもりだ。

「俺の・・・ガンダム」

そう言って手で触れる。きらりと粒子でつまれると次々と装甲がからだを覆っていく。そしてそのまま外へと出る。

「GN-001、エクシア。発進いつでも良いですよ」

アナウンスで聞こえる声に。

「了解。エクシア、ハヤト・ブリッグス。出る!!」

一気に粒子を放ち、空へと飛び立つのだった。

PHASE 91 降り立つ天使 上（後書き）

ようやくです。

感想お待ちしております。

PHASE 92 降り立つ天使 中（前書き）

OP 2 儚くも永久のカナシ

PHASE 92 降り立つ天使 中

「何とも呆れた無茶をする子だわ!!」

アースラのブリッジにてフェイトたちの行動を観察していたリンディ・ハラOWNが言う。その表情から取れるのはあきれである。

「無謀ですね・・・」

一緒に見ていたクロノも冷静に観察する。

「間違いなく自滅しますね。アレはどう見ても個人が出せる魔力の限界を超えている」

クロノの言うとおり、フェイトの表情は苦しそうだ。ジュエルシード6つの封印など、一人でできることではないのだ。

遅れて到着したなのはたちが見たのは封印をしようとしているフェイトの姿だった。しかしなのはの眼から見ても、フェイトは明らかに無謀なことをしようとしているようにしか見えなかった。

「フェイトちゃん!!」

「あんなの無謀すぎる!!」

フェイトがこのまま封印に移っても最悪大怪我を追ってしまうかもしれない。そんなことがあれば話ができない。何より彼女には傷ついて欲しくない。そう思ったのは決心をしよう。

「あの、私急いで現場に・・・」

行きますと言おうとしたところにクロノの声で遮られた。しかしクロノの発する言葉はなののも止めているものではなかった。

「その必要はないよ。放っておけばあの子は自滅する」
「え・・・」

クロノの言葉はなのには現場に行かなくてもいいということだった。フェイトはどう見てもいずれ自滅するだろう。それはなののは眼からも明らかだ。また時空管理局にとってはフェイトたちは犯罪者である。これが管理局という・・・組織としては当たり前前の行動、最善の手なのだ。

「仮に彼女が自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところを叩けばいい」

クロノの言葉になのはとユーノはぞつとしつつ、なののがなおも食い下がる。

「でも!!」

「今のうちに捕獲の準備を」

「了解」

クロノはなののはの言葉を無視して、指示に回る。

「・・・」

それでもなのはは納得で機内という表情だ。そんななのはに気づいたのか、リンディが話しかける。

「なのはさん……。私たちはね、常に最善の選択をしないといけないわ」

それは分かる。分かるのだが、納得できない自分がここにいる・・。

「確かにあなたから見れば、残酷に見えるかもしれないけど、これが現実なのよ・・・」

「でも・・・」

なのははそれでも納得ができない。目の前に話をしたかった、会いたかったフェイトがいるのだから。

>なのは、なのは<

すると突然ユーノから念話が飛んできた。

>どうしたの?? ユーノくん<

>僕がなんとかする、だからなのははフェイトのところに行つて<
>でもそんなことしたら・・・<

>なのははどうしたいの!? フェイトと話をしたいんじゃないの?
? それともフェイトがやられるのをこのまま見てる?? <

>それは・・・<

>怒られるなら一緒に怒られよ。僕だってそれくらいの覚悟はできているよ<

>ユーノくん・・・<

何故自分はここにいる?? 母親に話をして、許可を貰い、その覚悟を持ってここに着たのではないのかと。

何故ここに来た?? 人湯は友達の落し物を回収するために。自分の住む町を守るために。そしてフェイトと話をするために来たのではないのか。

>うん・・・お願いできるかな??<
>もちろん<

そうしてなのは意を決して走り出す。

「ちょっと、なのはさん!?!」

「おい!! どこに行くつもりだ!!」

リンディとクロノは突然走り出したのはとユーノに対して止まるように叫ぶ。しかし、二人は止まることはない。

そして二人の足元にはユーノが発動させた転移魔法の魔法陣があらあわれる。

「ごめんなさい。私、高町なのはは、その命令を無視して、行動させてもらいます」

そうしてなのはたちの姿はアースラから消えた。

二人が転移してきたのは結界内の雲の上だった。なのははすぐにレイジングハートを起動させる。

「行くよ、レイジングハート」

そうしてなのははこれからの決意を体現するかのようにしてレイジングハートの機動パワードを紡ぐ。

「風は空に、星は天に、輝く光はこの腕に。不屈の心はこの胸に！
！レイジングハート、セットアップ！！」

『スタンバイ・レディ』

なのはバリアジャケットを纏い、レイジングハートをその手に握りしめる。そして雲を突き抜けるとなのはとフェイトの目があった。

すると突然なのはたちに向かってくる影があった。

「フェイトの・・・邪魔をするなああああ！！」

「アルフ！！」

突然向かってきたのはフェイトの使い魔であるアルフだった。アルフ八個に来る前に、絶対にフェイトの邪魔をさせないと決めていた。だから今まで散々回収の邪魔をしてきたのはたちが現れたので撃退しようと向かってきたのだ。

「僕たちは2人の邪魔をしに来たんじゃない」

遅れてやってきたユーノが言う。さらにそこへクロノから通信が入る。

>バカな、何をやってるだ君たちは！！<

彼が怒鳴るのは当然である。組織として動く以上はすべてを合理的に動かなければいけない。更に上からの命令には基本的に聞かなければいけない。

>ごめんなさい<

なのはの謝罪の声が入る。しかし彼女とて、組織云々以上に成し遂げたいと思っていることがあった。それは彼女が今この場所にいる意義でもある・・・。

>命令無視は後でちゃんと謝ります！！だけど・・・フェイトちゃんをほっとけないの！！<
>な！？<

クロノがなのはの言う言葉を聞き唾然とする。組織という垣根を越えてまでも敵である彼女をほうっておけない。

自分なら考えられないことだと思った。なおもなのはは言う。

>フェイトちゃんはきつと、一人ぼっちなの！！<

あの紅の瞳にあるのは悲しみと寂しさだけだ。どこかで安心感を求め続けている。嘗て自分がそうであったように、だからなのははいたいほどフェイトの気持ちが分かっていた。

>1人きりが寂しいのは私、少しは分かるから！！<

なのはは最後にそう言い残して、再びフェイトのところへととんだ。

「フェイトちゃん！！手伝って。一緒にジュエルシードを止めよう」

突然現れたなのはの存在に驚いているフェイトであるが声も出るのがきついのだろう、明らかに魔力が不足していた。

しかしなのはが自信のデバイスであるレイジングハートをフェイトのデバイスであるバルディッシュに向けると桜井の魔力がバルディッシュに注ぎ込まれていった。

バルディッシュがレイジングハートから受けた魔力にて回復し、今にも消えそうだったバルディッシュの魔力の刃が蘇っていたのだ。

「・・・」

フェイトはただなのはを見つめているだけで無言を貫く。何故敵であるはずの自分に魔力を分けてくれたのか・・・。

ここで自分を逮捕すれば、今後の管理局としては動きやすいはずであるのに・・・。

「2人できっちり半分こ。ユーノちゃんとアルフさんが止めてくれるの！！だから、今のうちだよ。」

『シューティングモード』

なのはがフェイトのそう言い残して、空へと飛び出すと同時にレイジングハートを砲撃形態へと姿を変える。以前ジュエルシードの力によって生み出されている蒼い雷を交わしながらなのはは上空へと駆け上がる。

フェイトならきつと来てくれることを信じて・・・。

PHASE 92 降り立つ天使 中（後書き）

主人公がまた空気に・・・。

感想お待ちしております。

PHASE 93 降り立つ天使 下（前書き）

OP2 儚くも永久のカナシ

PHASE 93 降り立つ天使 下

なのはから魔力を貰い、魔力刃が蘇ったバルディッシュを見ながらフェイトずつとは空へと上がっていくなのはを見つめていた。

何故自分を助けてくれたのか。何故半分こ等と言ったのだろうか。考えれば考えるだけ頭が混乱する。

『シーリングモード』

突然にバルディッシュが自分の意思で姿を変えた。その様子を見ていたフェイトはただただ驚くしかなかった。

何故マスターである自分が何も行っていないのに形態変化したのだろうか。

「バルディッシュ・・・」

フェイトは形態変化したしーりんづモードのバルディッシュを見つめてつぶやく。迷っている自分よりも先に、デバイスであるバルディッシュは覚悟を決めたのを見せるかのように形態変化した。

立ち止まっただけは何もできない。むしろ自分たちにはそんな時間すらないのだから。きつと覚悟を決めたフェイトはバルディッシュを握り締め、なのはの待つ大空へと向かうのだった。

暴れまわるジュエルシードに対してユーのとアルフのバインドが放たれる。

「「チェーンバインド!!」」

動きを制限される。

「フェイトちゃん、2人でせーので一気に封印!!」

なのはが隣に立つフェイトに笑顔で言う。

「ー良かった……。来てくれて。」

なのはは信じていた通りにフェイトが来てくれたことが何よりも嬉しかった。だからこそ、このジュエルシードの暴走を止め、半分ずつジュエルシードを手にしたと思った。

「「なのは（フェイト）今^{だよ}!!」」

補助をしていた二人から声が掛かる。なのはとフェイトはそれぞれレイジングハートとバルディッシュを構える。

「せえーのおお!!」

なのはの掛け声と共に大きな砲撃が放たれる。

「サンダァ……。レイジイイイ!!」

「ディバイーン……。バスタァアアア!!」

なのはとフェイトの同時の高威力魔法が発動した。その威力は計り知れなく、六つのジュエルシードが発動しているにもかかわらず、その魔力を押さえつけるほどの威力だった。そして二人で何とかすべてのジュエルシードをここで封印することができた。

「フェイトちゃん……」

「……」

封印を施されたジュエルシードを中心になのはとフェイトが視線を合わせる。なのはは合えたことを嬉しく思い、フェイトの名を呟く。

不意の沈黙がとてつもなく違和感をかもし出していた・・・。

アースラブリッジにてなのはとフェイトによる教導のジュエルシード封印が無事に完了したことが確認される。

「ジュエルシード、6個すべての封印を確かに確認しました!!」

「な、なんてでたらめな砲撃だ・・・」

力ですべてをねじ伏せるといっても過言ではない二人の合わされた砲撃を目の当たりにしてひどく驚くクロノ。

「・・・でも凄いわね」

リンディも圧倒的といわせん二人の力にあきれるほかなかった。なのはとユーノは確かに組織としてはやってはいけない命令違反を犯した。

自分たちのとった行為は組織としては最善の手である。しかし人の道としてはどうだろうか??

正義の管理局と謳っている自分たちの組織としては、そんな小さな身で犯罪を行う子どもを救うことこそ、使命なのではないのかと、そう思えてならなかった。

しかし安心できるとは限らなかった。

「あの未確認の反応はどうかしら??」

「はい、今のところは已然として反応はありません」

「そう・・・でも、警戒だけは怠らないで。あの数を奪われたりしたら・・・」

「艦長・・・」

「・・・お願いできるかしら??」

「分かっています」

そう言つてクロノはいつでも出撃できるように、準備を始めるべくその場から離れる。リンディはその後姿を見送りながら内心はクロノだけでなく、なのはたちを出すのは戸惑われた。

あの時乱入した未確認は魔道戦士ランクに加算してもA A Aランクはくだらない反応があった。

それは自分たち魔導師の魔導師ランクとしてみれば限りなくSに近く、限りなくSであったのだ。

そんな危険な敵、先ほどこう威力の砲撃を放ったあの二人が対処できるとは思えず、二人の補助をする二人はアルフは戦えるといつてもあの装甲に素手で戦いは無謀と取れるし、ユーノは防御や補助は完璧でも攻撃ができないとなれば逃げる道を作るくらいだ。

できれば着て欲しくない、こちらの管理局でもなかなか開発が進まないというのに新型が出てくるとなると・・・。

「頭が痛いわね・・・」

そう呟くりンディ。しかし敵というのは着て欲しくないときほど

来るものだ。リンディの願いを裏切るかのようにして、けたたましいアラートが鳴り響いた。

ジュエルシードの封印を終えてなのはとフェイトはお互いを見つめていた。二人の間には封印を施された六つのジュエルシード。

同じ気持ちを分け合えること・・・、それは寂しい気持ちも悲しい気持ちも半分こにできるということだ。

そしてようやくなのはは分かった。何故自分がこうしてフェイトと話をしたかったのか・・・。それは彼女と分け合いたいのだ・・・。つらいことも、楽しいことも・・・それが、友達だから。

「・・・」

「友達に・・・になりたいんだ」

「!!!」

これは嘘偽りのない、なのはの純粋な気持ち。それがフェイトにまっすぐと届いている。いつの間にかあれだけ降っていた雨はやんで、まるでフェイトの心が晴れ渡るかのように雲の隙間から太陽が照らしていた。

しかしひどいほどの無音は逆に場の空気を不気味なものへと換えていく。突然レイジングハートとバルディッシュのコアが点滅し、警戒するように言う。

『マスター』

『サー』

「「!!」」

上空から雲を突っ切って二人に降り注ぐ無数の粒子弾。紅蓮の粒子をほとぼしらせながら再び姿を現せたのはあのときの黒い未確認のMSだった。モビルスーツ

「あのときの!!」

「なに・・・あれ」

なのははあのときのことからあれが危険だということを知っているが、フェイトに関しては始めてみるものであるために何がなんだか分かっていないようだ。しかし感覚的にはあれは味方では無いということだけが分かっていた。

「なんなんだいあれは!？」

「一旦撤退だ。今の僕たちじゃ相手にならない!!」

困惑するアルフと何とか冷静に状況を判断しているユーノ。

「・・・」

無言のままライフルを腰にマウントすると腰からサーベルを引き抜くと4人に向かって振り下ろしてきた。

「か、回避なの!!」

なのはの声に慌てて散開する。その時とつさに手を伸ばすのはとフェイトの手にはそれぞれ三つずつのジュエルシールドが握られる。

「・・・」

金色の光る眼がぎらぎらと4人を睨みつけている。この中で比較的魔力の残っているのはなのである。

それでもいつもよりかなり残りは少ない。

アルフとユーノはこの戦闘ではまったく相手にならない。

フェイトはなのはから供給を受けたとは言え、それをほとんど先ほどの砲撃に使ってしまったために中では最も残りが少ない。

つまりは攻撃も防御もろくに取れる状態ではないフェイトが格好的となるのだ。一気に加速して接近してくる。

「く・・・」

歯噛みしてバルディッシュのサイズフォームを構えるフェイト。それでもいつ魔力刃が砕け散るか分からない。それでも彼女には譲れないものもある。

「――あれはジュエルシールドを狙っている……。でも絶対に渡せない、これだけは・・・お母さんのためだから!!」

疲れた体に鞭打って、フェイトはバルディッシュを振るう。

「アークセイバアアア!!」

「!!」

加速していたそれはフェイトのアークセイバーを交わすことをせずに左腕に装備されている盾で受け止める。

やや加速が弱まったかと思いきや、それでも間合いに入られたフェイトに向かってサーベルを振り下ろす。

「はあああああ!!」

「・・・」

魔力刃と粒子がぶつかり合い、激しくスパークする。しかしまだ9歳くらいであろうフェイトとMSでは圧倒的に力が違う。

純粋な力にて徐々に押され、表情が曇る。

「フェイト!!」

「ア、アルフ」

押されているフェイトを見てまずいと思い、離れていたアルフが駆けつける。

「フェイトから離れな!!」

そう叫びながら、アルフはその拳を叩き込む。しかし相手は機械装甲、更に特殊な加工をされ散るのかへこまないばかりか純粋にその拳を跳ね返す。

「つう・・・」

アルフは傷めた手をさすりつつ、距離をとる。フェイトもアルフの牽制で一旦距離をとることに成功していた。

「フェイトちゃん!!」

上から声がすると突然未確認のからだに緑色のバインドが装着される。

「なのは、いまだよ!!」

ユーノが放ったバインドだった。なのはのぎりぎりまで収束した砲撃を受ければ大抵の敵は倒れる。

その算段からユーノはそれまでの時間稼ぎとしてありったけの魔力をバインドに込めていた。

「ディバイイイイン・・・」

桜色の巨大なスフィアが生成される。未確認もその危険性を察知したのは一層激しくバインドの破壊を行う。

「くう・・・なんて力だ。あんな力、人間業じゃない」

苦悶の表情のユーノ。自身の全力のバインドでありながら今にも破壊されそうなのだから。

「バスタアアアアア!!」

巨大な砲撃がまっすぐに未確認へと向かい・・・飲み込んでいった。

「はぁ・・・はぁ・・・」

なのはは肩で大きく息をしている。隣に立つユーノもまたすでに限界が近い。自分たちの全力をつぎ込んでしまった魔法だ。あれだけ大きな爆発を起こせば、なんとか戦闘不能に追い込めるだろう。

＞それにしても、どうしてあの人はジェルシードを集めてるんだろう・・・＜

＞人が乗ってるなら何か言ってきたもおかしくないけどな・・・＜

なのはとユーノの念話での会話が続く。

＞というよりもずっと反応がなかったね・・・＜

なのはたちはそれぞれのデバイスからの警告を聞くまでまったく反応すら感知できなかった。

デバイスたちもわずかな歪みを探知して警告したに過ぎず、何が来るのかまでは把握し切れなかった。

むしろ管理局から何もこないというのがまたおかしい話だ。

＞リンディさん?? クロノくん?? エイミーさん?? ＜

念話を飛ばすがそちらからの応答はない。というよりも雑音が頭に入ってくるだけだ。とても気持ちが悪い。

「な・・・なんなの??」

「なのは駄目だ。突然念話がでなくなった」

この距離でも念話を通じなくなった。何か魔法を阻害するものがあるのだろうか。

その異常な状態はなのはただけではなくアースラのブリッジ内でも起きていた。突然鳴り出したアラートに総員は慌てふためいた。すぐさま落ち着くように諭され、それぞれの作業に入る。現れたのはあの時と同じように全身が黒い未確認。

あの時と多少の違いは右の背中半身に巨大なバスターランチャーのようなものを装備して、左肩には粒子ミサイルポッドが装備されている。

後は以前と同じく両腰にはビームサーベル二本と、右手にビームライフル、左腕には盾があった。

「一体どこから！？すぐに調査を！！で、クロノ」
「分かってます、艦長」

すでにバリアジャケットを展開し、クロノのデバイスであるS2Uを手につく。危険であることは承知である。

しかし管理局員として、協力者を傷つけるわけには行かず、更にロストログアの不法所持を見逃すわけにはいかない。

捕まえて問いただすこともできる。それはフェイトたちも含まれている。

「気をつけなさい・・・」
「了解しました」

そう言ってクロノの姿は転送ゲートを通り、消える。

「艦長・・・」

エイミーが心配そうな声で言う。他のクルーたちも同じだ。誰が好き好んで死地へと息子を送り出すだろうか。

いるはずがない、最悪あの未確認はあの場にいるものたちを殺すだろう。もしかしたらアースラもろとも・・・。

「あの未確認のコンタクトできるかしら??」

「先ほどからやっていますが、どういうわけか、まったく反応がないんです」

反応がない、というよりもこちらからの発信が何かによって阻害されているというのだ。周りにはそのような反応の魔法がない。ということはあるとしたらあの未確認が何かをしているというのだろうか。未だ管理局が総出で研究に勤しんでいるにもかかわらず解明できないもの。

その恐ろしさを突きつけられているような気がした。

「エイミー・・・悪いけどあの未確認に生命反応があるか調べてくれる??」

「!! 艦長・・・それはどういことですか??」

「いいから・・・、私のカンが外れていなければ・・・」

リンディが何かを最後に呟いたとき、なのはとユーノの連携による砲撃が未確認を包み込んだ・・・。

PHASE 93 降り立つ天使 下（後書き）

ご感想お待ちしております。

次回予告

譲れない思い。

分かり合いたい思い。

二人の思いが交錯する空の下、そこに突然現れたモビルスーツ。

そのモビルスーツが狙うはジュエルシード。

その出現によって辿る運命^{フエイト}は一体どんなものか。

そして、遂に完成した新たな剣^{エクシア}が舞い降りる。

次回、起動新世紀リリカルガンダム、舞い降りる天使 上の上

悲しみの運命^{フエイト}を切り裂け、エクシア！！

PHASE 9 4 降り立つ天使 上の上（前書き）

OP 2 儚くも永久のカナシ

PHASE 94 降り立つ天使 上の上

「おい、無事か??」

転送ゲートにて現れたクロノがなのはたちのところへと向かう。
そこにはいつの間にか来ていたフェイトとアルフもいる。

ここで逮捕することもできる。しかしまだまだ10代といってもクロノは執務官。素人の彼女たちよりも、その場の空気が依然として重いことを感じていた。

それはほんの少しでも十分だ。彼の本能が言っている。逃げろと・・。

「ここでの話し合いは危険すぎる」

クロノの言うとおり、今だけ無理の中から何も反応がない今、危険なところにとどまるのは自殺行為だ。

「君たちも一緒に来てもらう。色々と聞きたいことがあるからな」

執務官としてフェイトとアルフを見て、言う。

しかしそのときだった。

「「!」」

突然煙の中から太い赤色の砲撃が飛んできたのだ。

「か、回避だ!!」

クロノの叫びに反応し、それぞれが慌てて回避行動に出る。煙の中からはまったくの無傷の状態の未確認。

そしてその未確認を包み込む紅い球体のようなもの。その中に、未確認はいた。

「一体何・・・あれ」

フェイトが弱弱しく言う。なのはの砲撃を隣で見、そして先ほど遠くで見っていた。それだけで分かる。自分よりも砲撃に関しては彼女が上であること。その威力は計り知れないこと。

しかしそれを受けてなお砕けないフィールドを展開しているそれ。すぐに消えるもまったく傷がない。

「やば過ぎるよ・・・あんなの勝てっこない」

魔力が十分ならどうだ?? しかし今ここでまともに戦えるのはクロノだけだ。すると突然アースラからの通信が入る。何かに疎外されていたとは言え、一瞬だけが入ったのだ。

『クロノくん!!』

「エイミー!？」

『今すぐ、転移ゲートを出すから、戻っ・・・』

しかしそこで再び阻害される。散開したそれぞれに対してライフと粒子ポッドからの攻撃が繰り返される。

「ち、誘導弾か」

クロノを追い回す粒子ミサイル。上下左右に逃げてもそれはすぐに方向を変えて追いかけてくる。

「く、ブレイズキャノン!!」

まとめて破壊するクロノ。その間にもなのはたちに攻撃が放たれ続ける。

「何とか転移ゲートに……」

クロノはS2Uを握り締め、接近する。なのはたちに向けてライフルを構える未確認。それに対して注意をひきつけるかのようにしてクロノは攻撃を放つ。

ちらりとクロノを見るとすぐにその攻撃に対して盾で受け止める。しかしここで違和感があった。

「……何故僕の攻撃を盾で受け止めた?? あれの強度なら、以前のあの白い魔導師の攻撃を受け止めているはずだ。」

先ほどののはのはなったディバインバスターを以前その盾で受け止めていた。しかし先ほどは恐ろしいほどの強度を誇るフィールドにて受け止めた。

まるでデータを収集しているかのように。

「……待てよ……。以前の奴の武装とはまったく違う。」

以前の未確認の武装はそれと酷似しているが、背信部のGNドライブがむき出しになっている。以前のはそれを隠すかのように、更に移動速度を上げたバーニアを装備していた。だから逃げる事ができる。

以前のものだったら今頃叩ききられていたかもしれない。

「デイバインシューター!!」

魔力弾を生成し、未確認へと放つのは。これでもう何度目だろうか。それは回避も盾も使わずに、ライフルを連射してそれを破壊する。

「アークセイバアアアアア!!」

フェイトが体を酷使して攻撃する。ここで逃げてもすぐに追いつかれる。転移魔法もおそらく使用中に攻撃される。

何より敵は殺傷設定である。

フェイトの放ったアークセイバーをなのはのデイバインシューターとは違って盾で受け止める。

「――なんて硬い盾・・・」

「――デイバインバスターもクロノくんの攻撃も、そしてさっきからずっとフェイトちゃんの攻撃も受け止めてるって言うのに・・・」

自分たちの生み出す盾とは違う、強固なもの。依然として自分たちにその恐怖を与え続けている。

すると突然なのはたちの近くに来るときに使用した転移ゲートが現れる。通信が無いということは阻害を解除することはできないということだった。しかし今は撤退するしかない。

すでになのはとフェイトにはそれぞれ三つずつのジュエルシードがあるのだから。

「急げ！！ここは僕が食い止める」

そう言ってデバイスを構えるクロノ。しかしそのときにはすでに転移ゲートに向けて固まっていた五人に対してバスターランチャーが構えられていた。

「ま、まずい・・・」

誰がそう呟いたのだろうか・・・。装置が起動する前に放たれた砲撃。まっすぐにこちらに向かってくる。

飲み込まれようとしたのはは思った。自分のやりたいようにがんばるようにと送り出してくれた母。無理はして欲しくないといってくれた。自分が死んだら悲しむだろう・・・。そんな思いは母だけでなく、家族みんなにして欲しくないのにと思った。

飲み込まれようとしたフェイトは思った。せつかく自分から信じられそうな少女と出会えたのにと。母にこのジュエルシードを渡さなければ、褒めて貰えない、母を悲しませてしまう。もう一度褒めてもらいたい、そう思った。

目の前に近づいた砲撃。目をつぶる・・・。少しでも痛みを感じまいと思ったからだ。ものすごい轟音が鳴り響く・・・。

「・・・」

しかし一向に痛みは来なかった。

「あれ?? 私たち・・・」

「生きてる・・・??」

「どうして・・・??」

「一体何がどうなっている??」

「ちよっとなんだいあんたは!??」

それぞれが疑問を呈する中、アルフの声に全員が視線を向けた先には・・・。

「天使・・・??」

誰が呟いたのだろうか。しかしそれを見れば誰もがそう思っただろう。白と青のツイトンの配色の人型の全身機械装甲。2本のV字のアンテナ、緑色に光るツインアイ双眼、右腕には両刃剣、左腕には盾が装備されている。そして何よりも、推進部から放たれるGN粒子の光と共に広がる三対六枚の純白の羽があった。

「エクシア・・・」

どこかで聞いたことがある声。いつもはそばで色々と世話を焼いてくれた男性の声だった。

「ハヤトさん??」

その人物の名前を呟く。

「ハヤト・ブリッグス・・・」

両刃剣を構える。

「目標を・・・駆逐する!!」

翼を羽ばたかせ、未確認へと突撃を開始した。

PHASE 94 降り立つ天使 上の上（後書き）

ご感想お待ちしております。

次回予告

舞い降りた翼。

対峙する二つのモビルスーツ。

天かける天使の強さは一体。

次回起動新世紀リリカルガンダム 降り立つ天使 上の中

その手に持つ剣で、敵を斬れ・・・エクシア。

＊注意 この作品に出てくるモビルスーツ^{モビルスーツ}は若干のオリジナルが含まれることで、原作よりも実力が上であったり、若干の改造があったりします。それにつきましてはご了承ください。

PHASE 95 降り立つ天使 上の中（前書き）

OP2 儚くも永久のカナシ

PHASE 95 降り立つ天使 上の中

ハヤトが現れると同時になのはたちは転移ゲートにてアースラに回収された。はつきり言って誰もが生きた心地がしない。

しかしすぐに立ち上がりブリッジへと急ぐ。今も戦っているハヤトが心配だった。

「艦長!!」

先頭になって走ってブリッジに駆け込んだのはクロノだ。バリアジャケットの解除を忘れているあたりは、まだ混乱が残っているのだろう。

「クロノ!! ああ、よかった」

仕事中だということを忘れてわが息子を抱きしめる。ワタワタと慌てるクロノ。相手がいくら母親だからといって年頃の男の子である。リンディの女性たちのうらやましがる体にて抱きしめられるのだ、顔を真っ赤にしている。

「か、か、母さ・・・じゃなくて艦長!!」

「そうだったわね、ごめんなさい」

「あ・・・いえ」

慌ててクロノを介抱するリンディ。ようやく介抱されたクロノは息苦しそうにしているが、それでも心配をしてくれたのだと思うと嬉しいのは当然だった。

「それにしてもあの乱入してきた未確認は一体誰かしら??」

リンディが疑問に思うとそれに答えたのはなのはだった。

「あれはハヤトさんです」

「「!?!」」

「あ、僕たちと一緒にいたあの男性ですよ」

そうユーノが説明する。そういわれるとなるほどと納得するリンディたち。魔導師じゃないと思っていたがまさかあの未確認と同じ存在だったとは、そんなこと露も思わなかったフェイトたち。

モニターに映されているはまさに未確認といわれている二人の戦いだった。

「まったくどこにあんなものを隠していたんだ、あの男は」

明らかに怒っているクロノ。管理局員としては、ここ管理外世界にてあってはならないものを持ち込んでいるハヤトは十分に罰則をなすことができるのだ。

「今はそういつてられないわ。ハヤト君が来なかったらあなたたちは今頃あの世逝き……」

「分かっています……、でも」

「分かっているわ、クロノ。この事件が終わったら、交渉してみましよう」

そう話し合っているリンディとクロノ。するとエイミーからの通信が入る。あの黒い未確認は生命反応は無いということだった……つまりは無人機。

エクシアが完成してからわずか数秒で先頭に出なければいけないという異例の事態になった。

しかし、ハヤトはそこから湧き上がるこのMS^{モビルスーツ}・・・エクシアの力をからだで実感していた。

「・・・これが・・・エクシア。」

今までの戦闘経験のすべてを盛り込んだ、ハヤトのためのハヤトだけのMS^{モビルスーツ}。

エクシアの右腕にあるGNソードをライフルモードにする。

「まずは貴様を駆逐する」

銃口から次々と粒子弾が放たれる。左腕の盾で防ぐ未確認。回避できるようにわざとそのようなものを放っているがどういうわけか回避せずに受けに回っている。

「・・・データ取りか・・・。」

お互いに空を高速で移動しながらライフルを打ち続ける。それらは確実に相手の急所を狙って放たれている。

しかし、ハヤトはそれを紙一重ですべて回避し、未確認はそれを盾で受け止める。宙をまるで舞うように動き回り、ライフルが火を噴く。

すると新たな動きを未確認のほうから見せ始める。ライフルを腰にマウントするとビームサーベルを抜き取り推進力を上げて爆発的な加速を見せる。

それに対してハヤトもまたライフルモードからソードモードに戻し、サーベルを受け止める。

おなじくGNドライブを加速させ、押されないように激しくスパークが起きるなど、鏝迫り合いが続く。

「……」

ビームサーベルの方が実体がない分振りが早い、次々にさまざまな角度から攻撃が飛んでくる。それをなんとかGNソードで受け止める。

再び上から切りかかるそれを左腕のGNシールドにて受け止め、かち上げて隙を作り出し、その右腕を根こそぎ振り上げたGNソードで切る。

切られた未確認の腕は上空高く飛び、重力にしたがって海に落ちていった。無人機ということでは予めインストールした動きしかできない。人が纏っていない分、人を超えた早さや力強さを出すことはできるが、しかしそれもまたパターン化されている。

すべてはデータを取るため。なのはの攻撃をGNフィールドで受けたのも以前盾で受けていたので別の防御手段をとったに過ぎない。フェイトとクロノ、そしてハヤトのエクシアは初めての戦闘ということとで盾で受け止めることを中心に相手の威力を測っていた。

左腕の盾を投げ捨て、再び残った左手にサーベルを握る。すでに邪魔となったバスターランチャーは捨てられ（パージされ）ている。

しかし、以前のものよりも動きは格段に遅い未確認。互いに高速接近して剣とサーベルを振る。

それに対して、エクシアを駆るハヤトが目視で確認できないくらいの剣捌きを見せ、サーベルを持つ左腕、更に頭部のメインカメラを破壊する。

もはや録画を不能になったそれ。更にライフルモードにて粒子弾が両足を吹き飛ばす。推進部のGNドライブからの粒子が消え、それが重力にしたがって海にまっさかさまに落ちていく。おそらくデータは常時送られているのだろう。使い捨てということになるう。

しかし、それをすぐに追いかけたハヤトがGNソードを粒子化して消した右手でそれを掴み確保する。

「擬似ドライブ・・・一体誰が??」

それは擬似ドライブとは言え限りなく本物に近いものだった。質としてはエクシアのものよりも上である。

「く・・・」

もしこれに自分やそれ以上のものが載っていたらどうなっていたか。モビルスーツ結局MSの性能だけではなくそれを使いこなす人間によって決まってくる。そうになると、まだまだ弱いと痛感させられる結果となった。

「管理局の執務官、クロノ・ハラオウンだ。君の名前はハヤト・ブリッグスで間違いないな?」

「あのときの執務官」

「戦闘の後だが僕についてきてもらえるか?」

「理由は??」

「当然君のMSモビルスーツの使用、そしてその破壊された未確認が理由だ。十分だろうか?」

まあ、確かにそうなのだが。するとクロノの後を追ってきたのだろうかのは、ユーノ、そしてフェイトとアルフもやってきていた。

後者二人は逃げる算段でもつけているのだろうか・・・。すると不意に空気が痛く感じた。その感覚は何か鋭いもので貫く幹事であった。

すると突然1発目の紫の雷が海上へと落ちた。

「母さん!」

フェイトがそう呟き、空を見上げると空は紫に光っていた。そしてそこから降り注ぐ紫電はまっすぐフェイトに向かって落ちてきた。

フェイトは動けなかった。どうして自分に向かって母の攻撃が落ちてくるのかが分からなかったからだ。

「フェイト!!」

アルフの声が聞こえる。それでも動けない。

――どうして?? どうして??

目前にまで迫ったところで突然フェイトは横に衝撃を暗い、吹き飛ばされる。

――え・・・??

一体誰だろうと思うと目の前に純白の羽が広がる。そして紫電に對して左腕のGNシールドで受け止める。

「つあああああ!!」

シールドで受けきれない電流が体を襲う。幾分か緩和されているとは言え、すべてを受けられるようにはさすがのMSモビルスーツはできていない。

フェイトの体はなのはの方へと押し出されている。突然のことに受身を取れなかったフェイトだが、なのはがしっかりと受け止めたために特に大事には至っていない。

しかし、フェイトには分からなかった。何故目の前にいるMSモビルスーツが自分を救ってくれたのか。

自分はずっと敵として、あるときは刃を向け合ったときもある。そんな自分を守っている。

そして、とうとうシールドに大きなひびが入る。それでも耐える。そしてシールドを横にそらすことで紫電を反射させ攻撃をいなしたのだ。

しかし、シールドが耐えられなかったのか、大きな爆発と共に煙につつまれる。辺りに無音が残り、やや重い空気になる。

しかし、煙が霧散するとそこにはややこげて機体の装甲が黒くすすが付いているエクシア、ハヤトの姿があった。

ほっと安心するなのはたち。その中にはフェイトの姿もあった。

>フェイト、フェイト<

>アルフ??<

>今のうちだよ、連中の気がそれているうちに<

>う、うん<

そうしてアルフの転移魔法が発動し、フェイトはその場からいなくなる。突然のことだったためにクロノとなのはは反応できずに逃してしまった。

その後話を聞くということになり、ハヤトはエクシアを駆り、アースラへと向かうことになった。

PHASE 95 降り立つ天使 上の中（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 96 降り立つ天使 上の下（前書き）

OP2 儚くも永久のカナシ

PHASE 96 降り立つ天使 上の下

ハヤトをつれて戻ってきたのはたち。それぞれなのはとフェイトでジュエルシードを分けていたということで今回回収することができたのは三つだった。

突然紫電の次元跳躍魔法による攻撃を受け止めていたはやとは一応のために精密検査を受けに医務室へと向かった。

そんなこんなで現在なのはとユーノは艦長リンディ・ハラオウンにじきじきに説教されていた。

「なのはさん、ユーノくん。指示や命令を守るのは、個人のみならず集団を守るためのルールです」

すべてが自由なら統率が行き届かずに、できることもできなくなる。全員が同じ重いとは限らないからだ。

実質このアースラ内にもフェイトたちを助けるべきだと思っただけのものもある。しかしそれを言うては上司に齒向かうことになる。

「その勝手な判断や行動があなた達だけでなく、周囲の人たちを危険に巻き込んだかもしれないということ、言わずとも、それは分かれますね??」

「はい・・・」

有無を言わせぬ威圧で二人に説教するリンディ。今回の件でうまくいけばすべてのジュエルシードを回収し、更にフェイトたちの保護、その活動の理由を聞き出すことができたのだ。

しかしそれをなのはたちの勝手な行動のせいですべてがなしにな

ってしまった。なんとか三つを回収することができたが最悪あそこで封印できずに4人とも撃墜され、次元断層ができていたかもしれない。

なのはたちの行動というのは一瞬でこの世界を吹き飛ばしてしまっていたかもしれない危険なものだったのだ。というよりもフェイトがことの発端なのだが・・・。

「本来なら、二人にはそれ相応の厳罰に処すところですが、結果としていくつか得るところがありました。よって今回の事については不問とします」

リンディの言葉にほっとする二人。しかしすぐに釘をさすように、二度目は無いといわれ、しゅんとしてしまった。

「すみませんでした」

なのはとユーノはリンディさんに頭を下げて、謝った。そしてこの場にいないハヤトのことを聞く。

「彼なら今は精密検査をしているわね。あれだけの電流をもろに受けたんだから・・・」

機体そのものにはそれほど目立った破損はなかったが、人体に何かがあればいけないということだ。

医務室にて精密検査を受けていたハヤト。

よく分からない機械に入れられ、色々とデータを取られている。まるで自分が実験動物になったような気分だった。
モルモット

確かにあの時盾で受け切れなかった電流を受けてしまった。激しい激痛と痺れで一瞬気を失いそうになった。

よく持ちこたえられたと、機体の予想以上の性能のよさと自身の運のよさに感謝していた。

「体に特に以上は見当たりませんね」
「了解」

カルテを見ながら医務院の女性が言う。ちらちらとハヤトのほうとカルテを言ったり着たり視線が泳ぐ。

鍛え上げられたからだは無駄のない筋肉で引き締まっている。さまざまな魔導師を診てきたがここまでの体付きをする魔導師は少ない。

「今日はあまり無理な運動は控えてください」
「分かった」

そう言って上着を羽織る。

「そうそう、クロノ執務官があとでデバイスルームに来るようにと
いってたわ」

「了解した」

するとドアをノックする音がした。入室を許可するとクルーの一人が中に入ってきた。どうやらハヤトをデバイスルームに案内する役らしい。

ゆつくりと腰を上げて一礼してお礼をいい、案内役について、医務室を後にした……。

デバイスルームにおいて人型の約二メートル近いMSモビルスーツが異彩を放ってそこに立っていた。

それを見上げている少年……執務官のクロノ・ハラオウンだ。

「見たこともない型だな」

一応彼もまた男の子だ。このようなものには興味もあった。自分には必要は無いとしても、自分のような魔導師ではないそれが陰では活躍している。

しかし今回の件でまったく歯が立たなかった。それも5人がかりでまったくである。

「それをたった一人で……」

無意識に握りこぶしを作ってしまう。別に憎いわけでもない。むしろ救ってくれたことに感謝しなければいけない。しかし彼も男の子だ。負けず嫌いなところもあるのだ。MSモビルスーツについては訓練校にてもあまり大きくは取り上げられなかった。

別段大きな脅威にはならないだろうと思われていたからだ。そこがもしかしたら管理局の甘いところなのかもしれない。

魔導師主義。それがあある限り、力のないものは防衛という仕事に付くことはできない。最近になって管理局においてもMSモビルスーツの開発と

研究がなされているらしいが如何せん、今まで誰も遣ったことのないものを使えるものがあるだろうか、否いない。

そのためにあまり多くは実用化されていない。それを自在に操って見せたハヤト・ブリッグス。

あの未曾有の世界崩壊の危機にまで瀕した事件の『アイオリス』出身の軍人。それも大尉であり、自身の部隊も持っていたらしい。

それをあの事件ですべてを失った。友も、教官も、地位も、そして・・・愛する者を。もし自分がそのような状況になったらどうだろうかと考える。

「いやいやいや・・・、絶対にそうはなら・・・」

無いといったかったが、世界はいつもこんなはずではないでできている。自分がそう思っている隣で何かが起きている。

自分はまだ強くなれる・・・。そう思い、握り締めていた拳を解く。するとそれと同時にデバイスルームの扉が開けられた。

「失礼します」

「失礼する」

そこにいたのはクルーの一人と先ほどの話題にもあった男性、ハヤト・ブリッグスだった。

「ハラオウン執務官、ハヤト・ブリッグスさんをお連れしました」
「ありがとう」

連れてきてくれたクルーにお礼を言うと、一礼してそのクルーは戻っていった。今部屋にいるのはクロノとハヤトの二人だけだ。

「まずはお礼を言わせてくれ、皆を助けてくれてありがとう」

「別にいい、気にするな」

そうかと呟くクロノ。そして本題に入る。

「まず聞きたいのはこの未確認、モビルスーツMS発祥の地とっていい『アイオリス』出身の君からして、どう思う??」

アイオリスという単語にやや眉間にしわを寄せるなど、露骨な反応を弾めて見せたハヤト。どうやらいまだにそのトラウマを抱えているらしい。というよりもあれを忘れるという方が酷というものか・・・。

「俺達が使っていた量産型よりは性能は上だ」

「ふむ・・・」

いまは四肢と頭部を切り刻まれ、無残な姿となった鉄の固まりを見て言う。くろのたちはこれを含めてもうひとつの未確認と戦闘をした。正確にはなのはとユーノなのだが・・・。

「俺達が使っていたのは第二世代、これはそれを一步進化させた第三世代といったところか・・・」

「性能的には具体的にどこが??」

「武装など見た目は変わらない」

「そうか・・・」

「今回のバスター、データを見たがエール。そしてまだ見ていないがあるだろうな、ソードだ」

「それらは距離によっての交換が聞く万能型ということか??」

「そうだ。今回のバスターは中遠距離の火力を生かした殲滅戦が得意だ。一対多に良く用いられる」

「なら以前のエールは??」

「GNドライブに更にブースターを装着させることで他の二つより子高速移動を生かした戦いに特化している」

バスターがなのは様な砲撃を中心とした遠距離方のMSとすれば、エールはフェイトのようなヒットアンドアウェイのような戦い方だ。

「なら残りのソードはというと、言わずとも分かるな・・・」
「よく分かった」

ソードは近接距離に特化したもの。ここにいる魔導師のどれにも当てはまらない。早とのエクシアはソードに似ているが、どちらかというとオールラウンド、エールに近い。

「これらに対抗するにはどうすればいい?? MSモビルスーツどうしなら先ほどのようになんとかかなりそうだが・・・。僕たち魔導師ではあれには歯が立たなかった」

悔しそうにしているのが見て取れる。

「GNドライブといってもオリジナルはこの世に今のところ4つしかないらしい」

「な!??」

驚愕に染まるクロノ。ならこれは擬似ということになるのかと言いたげだった。

「オリジナルなら半永久的に動き続けられるが、擬似はあくまでも擬似。残量に限りはある」

「ならどれくらいなんだ?？」

「魔導師と同じでSまである。尽きない限りは停止はしないな」

それはかなりの消耗戦となるということだ。装甲がバリアジャケット以上の防御力があるということからも、魔導師にとってはかなり厳しいものだ。

「話は変わるが、これは君のMSでいいんだな?？」
モビルスーツ

「ああ」

無き剣を得るために協力を要請して作り上げた立った一振りの剣。どれだけの思いが詰まったものだろうか。エクシアを駆っている間、その思いがふつふつとわきあがってくる感じがしていた。

関わった研究者たちはまるで子どもに戻ったかのように楽しそうにして開発に乗ってくれた。

アリサとすずかの家族はそれを快く受け入れてくれ、援助を申し出てくれた。感謝しても仕切れない。

「なら一体どこに隠していた?？はつきり言ってこれはこの世界には異質だ」

「隠していたんじゃない」

「なら・・・」

「この世界の協力者に頼んで、開発した」
「な!？」

クロノは驚愕する。それは当然であろう。基礎理論も確立していないこの世界の誰がそれを開発できるだろうか。

しかし、ここにいるハヤト・ブリッグスはそのような機械化学などの分野においては天才的なものを持っている。

この世界においては現在居候している月村家の忍のそれをも上回るくらいである。それが幼き頃の忌まわしい過去につながるのだが・・・。

そんなこんなで基礎理論などは軍事学校にて開発部などに忍び込んだときに色々とデータをハッキングし、それを頭に叩き込んだいたので後は必要な材料などがあれば何とかなったということだった。

「それがどれだけ危険なことだか・・・分かっているのか君は!!」

執務官としては見過ごせない、管理外世界における危険物の製作。しかしハヤトとしてはどこ吹く風である。

というよりも裏の世界にも精通している夜の一族。忍たちは日常的に銃器などを開発している。それは日々進化し続けているのだが・・・。

それと比べるとまあ、こちらの方が危険度は高いが、見つからなければ何ぼのものである。

それを外の勝手な方によって取り締まられるなど、もってのほかだ。ここは管理外世界。それ相応の法律は国ごとに決められている。

だからそちらにはこれを引き渡すということとはしない。そう決め

ていた。何よりこれはみなで生み出された、いわば子どもである。我が子を奪われたとなればアースラ組員たちに何が起こるか・・。

「はぁ・・・、申し訳ないとは思いますがこれは管理局に差し押さえということに・・・」

なるというところで突然クロノに対して何かが突きつけられた。タラリと伝う嫌な汗。目の前にあるのはなんだと思うとそれは銃だ。

そして突きつけているのは紛れもなく、今話しをしていたハヤトだった。アメジストのような紫色の瞳がまるで射抜くような鋭い視線をクロノにぶつけている。

「何のマネだ・・・」

「今の発言を撤回しろ。それは俺達のものだ」

「これは危険なものだ。そんなものをみすみす逃してなるものか。後にこれで何が行われるか、まだ君の考えが分からない以上、それは叶わない」

それでも引かないクロノ。管理局員として引き下がることはできない。後にそれが管理局にとってマイナスとなることになれば、その責任は大きい。

後悔に繋がらないためにも、自分はここで最善の行動を取らなければいけない。そう思っていた。

「そうやって、また（・・）俺から大切なものを奪うのか・・・」

何を言っているのかと思う。しかし明らかに感じられるそれは怒

りである。

「そうやって貴様ら管理局は奪っていくのか！？俺達の世界を、仲間を、家族を、友人を、恋人を、技術を！！」

「な、なに・・・」

あまりの剣幕にたじろぐクロノ。なんなのかと慌ててやってきたのはリンディを戦闘になのは、エイミィ、ユーノだった。

「クロノ、これは一体何の騒ぎ！？」

「クロノくん！？何かすごい声が聞こえたけど何なのこの騒ぎは？」

慌ててデバイスルームに入ってくる。

「母さ、じゃなくて艦長。それにエイミィも」

突然現れたことに驚くクロノ。しかし彼女立ち退いたブリッジにまで聞こえてきた大きな声、お互いに怒声であったために何かあったのではないかと思われ、ここまで飛んできたのだった。

そしてリンディが仲立ち役となり、話を聞く。曰く管理局にエクシアを差し押さえろとなり、それに対して管理局はまた奪うのかというのだという。

組織に所属するに当たり、あまりに大きすぎるそれは裏で何をしているかは分からない。どれほど正義を振りかざそうとも、如何せん人が運営するものであるために、絶対に黒がないわけではない。むしろ人であるから必ずそのような部分が出てしまうのだ。

アイオリスも然り、管理局にとってはかなり危険な存在であった。主だった坑道を示さないために裏で何かをしているのではないかという疑念。魔導師とMSモビルスーツの戦力的大きな差。

もしかしたら反抗運動に出られる戸までに恐怖があったのかもしれない。そのために異形の排除という面目の上でアイオリスを破壊し、機能停止にまで追い込もうとも考えたのかもしれない。

実質ほとんどの機能を失ってしまったているだろう。あの後少しばかり荒地を見たが、もはやあのときの原形などどめていなかったのだから・・・。

そのことはおいおいとして、クロノの話を聞いてリンディとしても管理局員としてはこれを差し押さえて、局へと送りたいとも思っていた。危険性への危惧と共に、更に研究がすすめられる、材料にもなると思ったからだ。

しかし、隣で射抜くような視線をぶつけてくるハヤト。おそらくこのアースラを破壊してまでも守りたいものなのだろう。

更にここでエクシアを失うと今後あの未確認が再び現れたとき、対応が難しい。協力して撃退できればいいが、まともに戦闘ができるのはクロノくらい、才能があるといっても戦闘に関しては経験が少なすぎるなのは。サポートに徹するしかないユーののもまた経験不足だ。そしてこの三人に共通して足りないもの、圧倒的にここにいるハヤトそして昔は自信も前線に出ていたリンディと圧倒的に差がある部分、それは命のやり取りである。

そのためにここでハヤトから剣を奪ってしまえば今後の活動に支障が出る可能性もある。この中で最も命のやり取りに長け、戦闘セ

ンスのあるのは間違いなくハヤトだろうと思っているリンディ。

民間人に更なる協力を請うのは管理局人としてどうだろうかとは思ったが、うまく行けばこちらに引き入れられるかもしれないと考え、それについては今回の事件におけるハヤトの行動しだいと決めた。

「分かりました。まずはこちらが勝手に決定しようとしたことに対して、謝罪します。すいませんでした」

「か、艦長!？」

突然こちらの非を認めるリンディに対してクロノは慌てる。むしろこちらの取った行動は正当なものだと。確かにそうかもしれないがリンディとしては今は貴重な戦力を引きたくないと考えていたのだ。

それをクロノに念話で伝えるとしぶしぶというように引き下がる。

>話をあわせなさい、今はこの事件を解決するのに少しでも戦力がほしいの<

>う、つく……。分かりました<

しょうがないと引き下がるクロノ。しかしそういわれると確かに戦力としては十分すぎ、更に自分たちでは相手^{モビルスーツ}にできないMSの相手をしてくればそれで助かると思った。

「しかし、それが危険なものであることには代わりありません。そのためにこちらの条件にしたがってもらえれば、この件に関しては不問にしたいと思います」

「・・・」

リンディからの提案に対して、眉間にしわを寄せ考えるかのよう
に目をつぶる。

ハヤトとしては剣を失うわけには行かない。それは守るための権を失うことにもなるし、大切な人たちに思いを無駄にすることになるからだ。

あまりに一方的な条件であると、割に合わない。

「条件次第だ」

それは暗に条件次第では無理にでもここを出て行くということを示していた。

「ありがとうございます。こちらとしてはまた未確認が現れかねないので、その撃墜ともしよければ回収をお願いしたいと思います」

これ以上の譲歩はないだろう。そう思い、小さくため息をつくと目を開き。ただひところ、了解したというのだった。

PHASE 96 降り立つ天使 上の下（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 97 降り立つ天使 中の上（前書き）

OP2 儚くも永久のカナシ

PHASE 97 降り立つ天使 中の上

フェイトはプレシアから言われたはつきりとした拒絶の言葉を聞き、今まで疲弊し、いつ崩壊してもおかしくなかった心がとうとう音を立てて壊れてしまった。

倒れてしまったエイトを慌ててなのはが支える。しかし覗き込んだのはに映ったのはすでに光をともししていない、まるで本当に人形になってしまったかのようなフェイトだった。

ハヤトもその光景を見て、思わず手を握り締めていた。そして見えない本当のゆがみ……。プレシア・テストロッサもまた、そのゆがみにつかまり、人生を狂わされてしまった一人の犠牲者に過ぎないのだ。

そして、倒れてしまったフェイトもまた、その歪みの犠牲者である。まだ何かが間に合うような気がする。二人が家族としてまだもう一度分かり合える気がする。

そしてプレシアの攻撃で傷を負っていた武装隊の回収活動が完了したという報告が走る。しかしすぐに更なる出来事が起こってしまう。

『艦長！！大変大変です！！モニターを見てください！！時の庭園内に魔力反応多数！！』

エイミイの慌てた声に皆はそちらに眼が行く。

『なんだ！？一体何が起きているんだ！！』

クロノの叫ぶ声が聞こえる。そして皆が見ているブリッジに表示されたモニターには魔力反応を示す表示がどんどん大きくなっていくのが見て取れた。

すると時の庭園を映し出していたモニターに次々と何かが現れた。それはよく見ると聖洋の騎士が身に付けているような鎧の人形であり、それらの手にはそれぞれ剣や斧と言った武器が握られていた。

そして突如として時の庭園内が大きく揺れだしたのだ。

「時の庭園内にAクラスの魔力反応あり！！数、増加中です！！」

モニターの写された魔力反応の点が次々と増加していた、60, 70, 80・・・否もつとだ。

「プレシア・テストロッサ……。あなたは一体何をするつもりなの！？」

プレシアはアリシアの入ったそのカプセルを魔法で浮かせながら、自身の後ろを付いてくるようにする。歩き出したプレシアに対して、リンディがモニター越しに問いかける。そのリンディの問いかけに対して、プレシアは鬼気迫る勢いにて叫び、答える。

『これ以上あなたたちに私たちのこれからのたびを邪魔されたくないのよ！！そうよ・・・私たちは

取り戻すための旅に出るの！！忘れられた都・・・そう、アルハザードへ！！』

そう言いながらプレシアはその手にあったジュエルシードに対し

て魔力を注ぎ込み、それら9個のジュエルシードを強制的に全て発動させるのだった。

リンディはその都の名前を聞いて絶句した。それは遠く昔にすでに廃れたはずの魔法文化の発祥とも言える都。そして現代科学でも未だ解明できないオーバーテクノロジーの宝庫とも言える都。

そして、プレシアがそこあるかどうか、そんな可能性が0に近いところに向かう理由は失われたアリシアとの時間を取り戻したいからであった。

そして、その間にもジュエルシードの輝きは更に広がっていき、とうとう次元にも干渉し始める。そしてそれによって次元浸が発生する。

「次元震発生！！その大きさ中規模以上！！」

「すぐにディストーションシールドを！！」

「ジュエルシード発動！！次元震の拡大、確認！！」

「常に転送可能距離を維持しつつ、次元震の影響の少ない空域まで移動して！！」

リンディの指示に操縦士たちは慌てて返事をしつつ、アースラを移動させる。その間にも次元係数が拡大し、次元断層が発生する危険性も高くなる。

その間、なのはは心を完全に閉ざしたフェイトをぎゅっと抱きしめていた。

ハヤトは黙ってモニターを通して狂ったように笑い続けるプレシアを見ていた。表面上は狂ったように笑っている彼女であるが、心

の中では涙を流し、泣いていると感じ取っていた。

「さらに次元震発生！！震度の拡大が止まりません！！」

「このままでは次元断層発生まで30分ありません！！！」

「あのときの庭園の駆動炉も反応からジュエルシードと同系のロストログアと判明しました！！おそらくそれも暴走、発動させて足りないジュエルシードの出力の足しにしているのだと思います！！」

プレシアは初めからアルハザードに行くつもりで全ての準備を淡々と進めていたのだ。回り道のない、ただ一方通行で……。そして隠れてその準備ができるということ。で時の庭園を隠れ家にし、そしてフェイトを鍛え上げ、ジュエルシードを集めるようにしたということだった。

なのはがぐったりとしているフェイトのことをずっと抱きしめていた。その間に聞こえてくるアースラのクルーたちの声。

「なのは、フェイトを医務室につれていくんだ」

「う、うん」

なのははクロノからそういわれて、頷いてフェイトのことを連れて行くこうとする。するとヒョいっとフェイトのことを背中に負ぶさるのが見えた。

「ハヤトさん」

「こういう類は男の仕事だ」

「アルフも行こう。君がフェイトのそばにいたほうがいいよ」

「そうだね。分かったよ」

そうしてハヤトがフェイトのことを背負ってなのはたちと共にア

ースラのブリッジを後にし、医務室へと移動した。

しばらくして廊下をデバイスを持ったクロノが走ってきたのだ。突然鉢合わせになったのはたち。クロノに対して、一体そんなに慌ててどこに行こうとしているのかと聞くなのは。

「僕はこれから時の庭園、現地へ向かう。この事件を解決するには何よりもプレシア・テストロッサという元凶を叩かないといけない!!」

そういうクロノはやはり先ほどのプレシアの攻撃を受けて傷ついてしまった武装隊たちのことから、早急にこの事件を解決しなければいけないということと、これ以上長引かせてしまえば次元断層によっ

てこちらも、更に被害が拡大するかもしれないという危機感を感じての行動だった。

「私も行くよ!!」

「僕も!!」

クロノが行くといい、それを聞いたなのは、そしてユーのまた一緒に行くという。なのはあのプレシアが彼女のために精一杯頑張っていたフェイトの全てを否定したことが何よりも許せなかったのだ。

クロノはそれを聞いて少しの間黙ったが、戦力は少しでも多いほうがいいと判断し、付いてくることを許可した。

「アルフはフェイトに付いていてあげて」

「うん、それがいいね。フェイトちゃんを支えて上げられるのは、

今はアルフさんしかいないから」

「う、うん。ありがとうね」

「俺も装備の最終点検が終わり次第、そちらに向かう」

「分かった。できれば早く着て欲しい」

「わかっている。今は着ていないが、嫌な予感がする」

クロノとハヤトがはなしていることがなのはやユーノ、アルフにも聞こえていた。そして確かにあの時現れた未確認の姿はまだ見ていない。

あの未確認のMSはどこでどんな風に一体誰が作り出し、送られてくるのかかさっぱり分からない。あれは管理局も増してやアイオリスも知らないものだ。

というよりも現在のアイオリスの現状を知るすべがないためにどうしようもないのだが……。もしそれがアイオリスからのものだったら管理局と敵対することになる。それが一体どう理由からなのかは考えられないわけではないが……。

それでもまだ不明の域を出ないのだった。しかし用心していいだろう。アースラにいないにいる魔導師たちはどうしてもMSとの戦闘になれていない。なら必然的にハヤトが戦うことになる。現在今日完成するはずだった新たな武装が現在点検中だということからしばらく時間が掛かる。

「よし、行こう！！これ以上被害を拡大させてはいけないからな」

「「うん！！」」

そうしてなのはたちはクロノの言葉に元気よく返事をしてついで行き、医務室を後にする。そしてアースラの転送ポートへと向かう

のだった。

すると廊下を走っていると突然リンディからの通信が聞こえてきた。その様子からひどく慌てているようだった。

『クロノ、なのはさん、ユーノくん！！ことを窮することになったので私も同行して現地に出ます。私が次元震を止めているので、その間に貴方達は早急にプレシア・テストロッサの逮捕を頼みます！！』

「了解（分かりました）！！」

リンディの指示に対して返事をしてすぐになのはたちはバリアジャケットをまとうと、転送ポートを使用して時の庭園へを転移していくのだった・・・。

PHASE 97 降り立つ天使 中の上（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 98 降り立つ天使 中の中

なのはたちが転送ポートによって時の庭園へと転移して言ったと同時に、医務室へと向かったハヤト、ハヤトにおぶられているフェイト、そしてアルフ。

フェイトをゆっくりとベットに横にさせる。

アルフはフェイトを心配そうに覗き込む。しかし今までとは打って変わってその人っ身には光が灯っていなかった・・・。

まさにプレシアがいていた通りの人形・・・。操るための糸が切れてしまったか、その操る人がいなくなってしまったために魂が抜けてしまったような状態であった。

そして、3人のいる医務室の中にあるモニターにはちょうど時の庭園に単位したのは、クロノ、ユーノの姿が映し出されたのだった。

なのはたちはプレシアが魔法を使っているのか、雷の轟音が鳴り響いているときの庭園へと転移した。

そして、待ち構えていたように、先ほどアースラ内のモニターでも見たロボットがたくさんいた。その中には空を飛んでいるものや、剣、斧などの武器を持ったものがいた。

「なんだか、たくさんいるの・・・」

不気味なまでの雰囲気をかもし出しているそれらを前に、レイジングハートを握り締めるのはが言う。

クロノ曰く、まだまだこの数は序の口であり、おくにはまだまだ多くのロボットがいるという。

「クロノくん、このロボットって・・・」

「ただの機械でできたロボットだ。近くに來た侵入者を攻撃するようにならされているらしい」

「そっか・・・、なら、安心なの」

なのはだけでなくクロノもユーノも身近に機械装甲のMSモビルスーツを使用している協力者、なのはにとっては親友の関係者であり、命の恩人でもある。

そのためのそのロボットの中に人が入っているとしたらどう戦えばいいのかと考えていた。それを聞いて、戦えると思ったなのはレイジングハートを構える。しかしそれを横からクロノに手で止められる。

「え!？」

突然のことになのはは驚く。

「この程度の相手に、無駄弾は使う必要なんてないよ」

そういうとクロノは自身のデバイスを構える。

「ステインガー・スナイプ」

詠唱するや否やクロノは勢いよく前に踏み出す。するとクロノの反応を察知したロボットが勢いよく

クロノに向かっておそいかかってきた。

しかし、クロノはそれに対して落ち着いた様子で破壊していく、そして先ほどはなった魔法が勢いよく上空へと駆け上っていく。

それを見ていたのはただただ無駄の少ないクロノの戦い方に驚きを隠せずに見ているしかできなかった。

「スナイプショット!!」

勢いよく上空へと駆け上がっていた魔力を的確に操作してロボットたちのからだをつぎつぎとつらぬいてく。

しかし、一体だけ、入り口付近を守護していたロボットのうちで一番巨大なそれには決定打を与えられなかったようで、いまだこちらに向かって攻撃してこようという動きを見せていた。しかしそれに対してクロノがそのあたまりもさらにうえへととびあがりそれに対してデバイスを突きつけると・・・。

「ブレイク・インパルス!!」

そのロボットの内部から破壊する攻撃にて残っていたそのロボットも破壊することに成功した。

さすが切り札といわれていることはあった。戦いが始まってからわずかな時間で入り口を守護していた全てを倒してしまったのだから。

そんなクロノのことを二人ですごいと思いがらばうっとしていたところ、クロノに注意されて、慌てて中へと急ぐのだった。

門を守っていたロボットたちをクロノが一相して、なのはたちはクロノの後を追って中へと走って

いく。すると中は廊下やいろんなところが穴だらけであった。かなり走っているためかなのはは軽く息切れしていた。

「はあはあ・・・」

「なのは、その穴にあるような黒い空間がある場所には十分気を付けてね!!」

「ふえ??」

なのはが突然ユーノから注意するように言われたものの、一体どうしてなのか分からないという表情。

するとユーノが隣で説明してくれたのだが、その黒い空間というのは虚数空間というもので、あらゆる魔法が発動することもできなくなるという空間らしい。

それはつまり非行魔法もつかえないということで、後は重力に従って奈落のそこへと落ちていき、後は死を待つしかできないということだった。

「き、気を付けるの!!」

なのはは慌ててそういうのだった。落ちてしまったら戻ってくるというって待てくれている家族や親友、そしてフェイトにも会えなくなってしまうのだから・・・。

そして、更に奥に向かっていくとそこには大きな扉があった。その大きな扉をクロノがけり破り扉の向こうにもやはりかなりの数の

ロボットが待ち構えていた

「ここからは二手に分かれて行こう。君たちは最上階にある駆動炉の封印のほうを頼む!!」

「それじゃあ、クロノくんは!？」

「プレシア・テストロッサの元へ行く!!それが執務官としての、僕の仕事だからね。僕が道を作るからすぐにそこに向かうんだ!!」
「うん、わかったの!!」

なのははクロノの言葉に頷く。そしてなのははクロノがデバイスを構えると同時に飛行魔道を発動させつつユーノを抱え込む。

「ブレイズ・キャノン!!」

クロノが放った砲撃『ブレイズ・キャノン』によってロボットたちを吹き飛ばし、会談までに道ができた。そして、なのはたちはそのまま上の階までに飛ぶ。なのははたった一人残ったクロノに対して、気を付けてと声をかけるとクロノは不適に笑みをつくり、それはまるで大丈夫だといっているように見えた。

そして、クロノのおかげで道ができたなのはたちはうえの階を目指す。そしてそこにはやはり同じようにたくさんロボットたちがなのはたちの前に立ちふさがる。

「もう!!一体どれくらいいるの!？デイベイン・シュータアアアアアア!!」

なのはは巧みに魔力弾を誘導して、ロボットをたおしていく。隣のユーノもまた魔力弾によってなのはを援護していた。

「確か、アースラで計測したら80対以上入るって行ってたって、
なのは!!! 危ない!!!」

「え・・・??」

なのはがユーノの叫びを聞いて振る向くとなのはに向かって武器を振り上げた機会兵がいた。なのははその攻撃をレイジングハートで防ごうとしたが驚きのほうが大きかったのか体が動かずに振り下ろされてくる光景がゆっくりに見えた。間に合わない・・・そう思ったときだった。

突然機械兵の横から何かが飛び掛り、それを破壊したのだ。一体何が起きたのだと思ったら、そこにいたのはフェイトの使いまでであり、医務室にいたはずのアルフであった。

「アルフさん!??」

なのはが突然のアルフの登場に驚いている間にもアルフは雄たけびを上げてその拳で機械兵たちを殴り倒していく。

「アルフさん、どうして?? フェイトちゃんと一緒に医務室にいたはずじゃ・・・」

「あいつから言われたんだよ。あんたらを助けてやってくれないかって」

「ハヤトさんが!??」

「あいつもすぐにくるって言ったたよ。でも、今は早く最上階に行くんだろう??」

「うん」

そうして、なのはとユーノはアルフと合流して最上階へと向かったのだった。

アルフがなのはたちと合流する前のことだった。医務室ではいまだに返事を返してくれないフェイトのそばにいるアルフと医務室の椅子に座り込み、武装の点検が終わるのを待っているハヤトがいた。

医務室にあるモニターに映し出されているなのはたちの戦い。クロノの攻撃によってなのはとユーノはスムーズに進めている。あまりクロノの戦闘は見えていなかったが、執務間にふさわしい戦いだと思っていた。そして、再びクロノの砲撃が決まり、なのはたちが二手に分かれる。クロノはプレシアの元へと向かい、なのはとユーノは最上階へと向かう。

「なんだか、あの子達・・・心配だね。ちょっと、手伝ってこようかな」

そう言ってアルフは立ち上がりながらも、いまだに光がともっていないフェイトの目を見ながら、頬を優しくなでる。

「大丈夫だよ、フェイト。あたしはすぐに戻ってくるから。そうしたら、ゆっくりで言い、あたしが大好きな、本当のフェイトに戻っておくれよ」

それを聞いていたフェイトは本当の自分といわれてもぴんと来なかった。その本当の自分というのは母が言う、アリシアなのだろうかと思った。

なら一体自分は何なのだろうか。そう思うと心にまたひびが入る。このままずっと眠っていたい、そう思った。

「これが終われば、フェイトの時間は、全部フェイト自身のために使っていいんだから」

そういうとアルフは医務室を出ようとする。すると後ろからハヤトの声が掛かる。

「すまないが、俺はまだ行けそうに無い。代わりに高町とスクライアを手伝ってくれないか?？」

「言われなくともそのつもりだよ。要らない心配はしなくていいさ」「そうか、すまない。よろしくたのむ」

「ああ。それと、フェイトのこと、よろしく頼むよ」「了解した」

アルフが医務室を出て行った。それから数分後だろうか、はたまた数秒しかたっていないだろうか……。ゆっくりとフェイトの瞳に光が戻ったのだ。

「・・・」

フェイトの視線の向こうには見知らぬ白い天井が見えた。すると自分以外にも人の気配があることに気づき、鉛のように思いからだを無理やりに動かし、その気配のほうに視線を向けると、黙って据わったまま目をつぶっているハヤトの姿があった。

近くのテーブルには待機状態の翼を模したネックレスがあった。するとフェイトの動いたのに気づいたハヤトが目をあけ、フェイトを見る。

「目が覚めたか」

「こ、ここは?？」

起き上がれないために寝たままハヤトの方に視線を向けつつ言う。
声に力がない……。

「アースラの医務室だ。君が倒れたのでここに運んできたんだ」
「あ……」

その言葉から、自分がどういう経緯をたどって気絶してしまったのかを思い出したらしい。

その証拠に、フェイトの目じりからは涙がこぼれていた。

「今しがた、君の使い魔が出て行った」

「アルフが……?」

「先に行った高町やスクライアたちの手伝いを頼んだ。俺もあと少しで出ることになる。いつあれが出てくるか分からないからな」

そういうハヤト。そしてフェイトに向き直ると。

「単刀直入に聞く」

「え?」

突然言われてフェイトは戸惑いの声をあげる。

「お前は誰だ?」

「え……?」

「だからお前は一体誰なんだ?」
「アリシア・テストロッサなのか?」
「それとも・フェイト・テストロッサなのか?」

「あ……」

ハヤトに曾質問されても、フェイトには即答できなかった。なぜなら彼女は母親にアリシア・テストロッサになりきることを強要されていた、しかし彼女の望むような結果にはならなかった。そしてフェイト・テストロッサという名の操り人形として、プレシアに扱われていた。

そして、プレシア・テストロッサにとってはアリシア・テストロッサこそ全てであり、フェイト・テストロッサは見ていなかった。

それを突きつけられてしまった今、彼女はどうしていいのかわからなかった。

「アリシア・テストロッサになれないからといって、その影を捨てるだけでなく、フェイト・テストロッサの名すらも捨てるつもりなのか??」

「・・・」

「お前はお前、フェイト・テストロッサなんじゃないか?? アリシア・テストロッサという存在ではなく、フェイト・テストロッサというただ1つの存在。それにお前は捨てられたと思っているかもしれないが、お前の存在を、フェイト・テストロッサという存在を認めているものもいるんだぞ??」

「あ」

フェイトはそういわれて今一度自分のことを思い返していた。自分の名前はフェイト、フェイト・テストロッサだということを。それに関しては誰がなんと言おうと変わることのない事実である。フェイトはフェイトであり、他の誰でもない、ただ一人の人間としての存在なのだ。

しかし、フェイトの母親であるプレシア・テストロッサは、愛娘

であるアリシア（・・・）に向けたような笑顔をフェイト（・・・）には向けてくれなかった。

フェイトが生きていたと思ったのは何よりも母親であるプレシアから認めてもらいたかったからだろう。それはおそらく、アリシア（・・・）・テストロッサではなく、フェイト（・・・）・テストロッサとして・・・。

そのためならジュエルシードが足りないということに怒鳴られたり、ひどいことをされたとしても、それに耐えられた・・・。

ただただ、昔の母のように笑っていてほしかったのだ、ただそれだけなのだ。そして今こうしてはつきりと捨てられても、いまだに母親にしがみついているフェイト自身がいる。

そうして、ものすごい音が聞こえてきた。モニターを見るとフェイトの使いみであるアルフがちょうどなのはとユーノと合流したところだった。アルフ・・・フェイトの使いみであり、主従の関係を超えた、家族である彼女。ずっとそばにいてくれた、そして言うことを聞かないフェイトのために、彼女もまた悲しい思いをしていたのだらうと、今思うと相当彼女に心労をかけていたのだと分かる。

そして、ジュエルシードを巡って何度も何度もぶつかった、白い魔導師の少女。初めて会ったばかりであったにもかかわらずにフェイトと対等に、そして何よりもフィルターを通してでなく、ありのまま、まっすぐに向き合ってくれた少女。

始めて会ってから、それから何度も出会い、そのたびにぶつかり合い、それでも何度も、何度も、アリシアとはなくフェイト自身の名前を呼んでくれたのだ。

そして、それに気づかせてくれた目の前の青年。始めてあったときはぼこぼこにされ、怖い雰囲気で、近づきがたかったが、今はそんな雰囲気は感じられなかった。

フェイトの瞳から涙が流れ落ちた・・・。

フェイトは今まで、母プレシアに認めてもらうために生きてきた。それはつまりそれ以外に生きる意味は無いということだった。そして何より、そうでなければ、自分は生きてはいけない、存在してはいけないのだと思っていた。

しかし、白い魔導師の少女は戦う前に言っていた・・・。

“捨てればいいってわけではない”

“逃げればいいってわけでは・・・もったない”

白い魔導師の少女とその友達だといっていた少年、そしてアルフと一緒にになって機械兵たちを倒して進んでいる。あれだけ敵対していたというのにもうあれだけのコンビネーションを見せていた。

そんな三人を見ながらフェイトはぼろぼろになっているバルディッシュを自身の手のひらの上に乗せる。

バルディッシュはすでに本体のコアにまでひどいひびが入っていた。それはまるでフェイトの心を表しているように見えた。

「ねえ、バルディッシュ・・・。わたしの・・・私たちのすべては、まだ始まってもしなかったのかな・・・??」

『ゲット・セット・・・』

ひび割れた状態で、今にも壊れそうなバルディッシュであるがそれでもフェイトの声に反応してくれた。そして、その声はしっかりとフェイトの心に届いていた。

それを聞いてさきほどからずっととまらなかったなみだが、まるでダムが決壊したようにとめどなく溢れてくるのだった。

「そうだよね……。そうだったんだよね……。バルディッシュも今までずっと一緒にいてくれたんだもんね……。お前も……。このまま何もできずに終わるだなんて、嫌だよね……。！！」

『イエス・サー』

「うまくできるかどうかは分からないけど……。一緒にがんばろ！！」

そうして、フェイトは持っている手に魔力を集中させる。そして、その魔力がバルディッシュを包み込むと、光の中から新品同様のバルディッシュに蘇った。

『リカバリー』

フェイトたちの全てはまだ始まってもない。今こうしてスタートラインにようやく立とうとしているのだから……。そして、フェイトはバリアジャケットを纏った。

「だから、本当の自分を、これから始めるために！！そして、そのために、今までの自分を……。終わらせよう。それに、母さんを助けに！！！」

フェイトの足元に、金色の魔法陣が現れ、そして時の庭園へと転

移していった。そしてエクシアの全ての準備が整ったと同時に、未確認のMSモビルスーツが現れたという通信が入る。

ハヤトはすぐさま、ブリッジへと向かい、エクシアを起動させる。そして転送ポートによって同じく時の庭園へと転移したのだった。

「ハヤト・ブリッグス。出る！！」

PHASE 98 降り立つ天使 中の中（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 9 降り立つ天使 中の下

なのはたちは最上階の駆動炉へと向かっており、そして現在は長い階段のある部屋で機械へいたちによって足止めを喰らっていた。

強さ的にはそこまでではないのであるが、如何せん、圧倒的な数でまるでなだれのようなのはたちに襲い掛かってくるのだ。

なのはは通路に立って、レイジングハートで迎撃している、アルフは狼の姿になり、次々と機械兵たちを壊していく。

なのはたちとは別の場所ではユーノが機械兵を鎖型のバインドによって拘束していた。

「く・・・早く何とかしないと」

拘束したバインドの鎖を掴んでいるユーノが苦しそうに言う。このままではただ魔力を消費しているだけで、突破ができないからだ。

「あー!! しまった、なのは!!」

ユーノが拘束していた機械兵がそれから逃れて、それに気づいていなかったなのはに向かって持っていた武器を振り上げた。

「あ・・・」

「なのは!!」

ただ呆然としてみているしかできないなのは、ユーノの声が聞こえたが、その攻撃がひどくスローもうシヨンのように見えた。そし

てなのはにその武器が迫ろうとしたときだった・・・。

「サンダー・レイジ！！」

なのはに振り下ろそうとしていた機械兵に向かって金色の雷が落ち、目の前で爆発した。慌てて案尾は立ちはその雷が落ちてきた方向を見上げるとそこにはバルディッシュを構えて、バリアジャケットを展開しているフェイトの姿があった。

「サンダアアアア・・・レイジイイイイ！！」

フェイトの足元に展開された魔法陣からは無数の金色の雷が放たれ、それがまわりにいた機械兵たちを全滅させた。

なのははフェイトが元気になってくれたことに安堵していた、そして着てくれたことがとても嬉しかった。

「フェイト！？一体どうしてここに？？」

アルフは先ほどまで医務室に眠っていたフェイトが突然現れたことに驚いていた。しかし、すぐにフェイトの瞳に生きる意志があるのを見て、笑顔になる。

フェイトはなのはたちの前に下りてきた。恥ずかしいのか、顔を合わせずらそうにもじもじとしていた。

そして、そこに空気を読まないまた別の機械兵が壁を破壊しながら現れたのだ。しかし今までのものとはまったく違うもので、巨大な姿形、強力なバリアを持ちながらも背中には大砲を二つ背負っている。それがすでにエネルギーのチャージを開始していた。

普通ならあきらめてしまふところであるが、なのはとフェイトはお互いに目を合わせる。

「でも、二人でならできる!!」

「!! うん・・・!! うんうん!!」

フェイトが言ったのはなのはと一緒に2人で倒そうと言うことだった。それはあの6個のジュエルシードを封印したときのように協力するように・・・。

「行くよ、バルディッシュ!!」

「こっちもだよ、レイジングハート!!」

お互いにデバイスの形態を変化させる。なのははレイジングハートをシューティングモードに、フェイトはバルディッシュをデバイスモードにそれぞれ形態変化させるのだった。

「サンダアアアア・・・スマッシュアアアア!!」

初めにフェイトが渾身の力ではなったサンダー・スマッシャーがロボットのバリアとぶつかりあう。

拮抗しあうが、それでも更にフェイトハア更なる魔力を注ぎ込み、砲撃の威力を上げる。バリアを破るだけで言い、後は後ろに控えているなのは似すべてを託せばいいのだから。そう思うフェイトは自然と笑みを作れていたのだ。苦しくはない、むしろ心強い見方がいてくれるのだから・・・。

そして、とうとうバリアが破壊された、これでもう、機械兵を守るものはない。そして待っていたといわんばかりに、なのははあり

ったけの砲撃を放つ。

「デイベイイイイイン・・・バスタアアアアア！」

桜色の砲撃が機械兵へと向かっていく。そしてフェイトがバリアを破壊したためにもはやそれには防ぐ余地がない、堪えられるかと考えれば、不可能だった。なのはのデイベイン・バスターを受けた機械兵は受けたところから次々と装甲がはがれだし、爆散した。

「フェイトちゃん!!」

「・・・」

なのはがフェイトのほうを向きながら名前を呼ぶとフェイトもなのはの砲を向いてくれた。

「フェイト・・・。フェイト・・・!!フェイト!!」

するとそこに人型に戻っていたアルフがフェイトのところには知ってきて嬉しそうに腰に抱きついてきた。目じりには嬉し涙が浮かんでいた。

「アルフ!!心配かけてごめんね・・・。でも、大丈夫だよ。今度はちゃんと自分で終わらせて、それから始めるんだ・・・本当の私を、フェイト・テストロッサを」

フェイトはそうアルフに優しく言う。アルフもそれを聞きながら頷いている。なのはとユーノはその様子を見て、思わず涙が目じりに溢れているのを感じていた。

そして、なのはたちはフェイトの母親であるプレシアのいる最深

部につながっているだろう扉を見つめ、その部屋を目指していくのだった。

途中、フェイトと分かれることになった。フェイトはプレシアの元へ、なのはは溶動炉の封印をしに……。暫くの間、なのはたちの間に無言の空間ができていた。するとなのははレイジングハートを壁に立てかけるとフェイトに近づく。

そして、少しばかり何かを考えるようなしぐさをしていたが、まっすぐにフェイトを見つめて言う。

「え、えっとね。私あまりうまいこと、言えないんだけど・・・頑張って!!」

「うん!!」

なのははフェイトの手を包み込みながら言うと、フェイトも笑顔でその手を包み込んでくれた。

PHASE9 降り立つ天使 中の下（後書き）

ジュエルシード編もいよいよ終わりに近づいてきました。

感想お待ちしております。

PHASE 100 降り立つ天使 下の上

クロノはやはりきたかというように思った。ジュエルシールドがここに集まっている今、あれだけジュエルシールドが発動するたびに現れてたあれが来ないわけが無いと思っていたからだ。

「な、なんで!？」

フェイトが叫んでいる。まさか座標を知らないそれがここにくるとは思っていなかったのだろう。プレシアも、アルフも同じである。

しかし、今までのとは姿が違っている。肩のそうこうは角ばっており、左腕には立て、右手にはライフル、背中には今まで装備して出てきていたものの全て、バスターランチャーとバスターソードがマウントされていた。

そして、案の定その未確認はプレシアの持っているジュエルシールドを見ている。

「運命は変わらない・・・」

「「?」?」

謎の未確認が喋る。機械的な声。

「あ、あなた、一体どこから・・・」

「この世のすべてである私が、高々座標を調べずとも来ることは簡単だ」

「この世の全て?? 一体どういうことだ」

「言葉のままだ、クロノ・ハラオウン」

「な!?! 何故僕の名前を」

「簡単なことだ。私が世界の全て、つまりはこの世界を本当の意味で統べているのだから」

「そ、そんな奴がいること、管理局は知らないぞ」

「当たり前だ。姿を現さずして、どうやってその存在を知る??」

「・・・」

クロノは意味が分からなかった。突然現れた未確認が世界の全てであること、管理局には知られていない、何かがいること。そしてそれが何かとてつもなく危険なものであるということだった。

そして、ゆっくりとプレシアとフェイトのほうを見る。フェイトは戦えないプレシアの前にバルディッシュを構えて立つ。

その言葉の通り、フェイトはプレシアを守ろうと構えていた。

「取り戻せない・・・それが過去^{カコ}」

「!?!」

それを聞いてプレシアの体がビクンと震えた。その場で1番傷ついているのはプレシアなのだから。

「逃^{ジブン}れられない・・・それが自分」

「!?!」

フェイトとプレシアが同時に震える。プレシアはフェイトを生み出したとき、アリシアであることを求めた。しかし、生まれたのはアリシアの容姿、記憶を持ったものでもフェイト・テストタロッサと^{ジブン}いう自分を持った存在であった。

それからを否定したプレシアと逃れられないそれから逃げていたフェイト。

「そして、変わらない、変えられない・・・それが運命^{フェイト}」

そう言ってフェイトと後ろにいるプレシアに向かって右手のライフルを構える。それを見たフェイトはまずいと感じてバルディッシュをサイズフォームにすると飛び掛る。

「母さんはやらせない!!」

「私が手を下さずともいずれプレシア・テストロッサは死ぬ!!」

ライフルを解除し、サーベルを展開するとそれでバルディッシュの魔力刃でできた鎌を受け止める。すさまじいスパークが両者の間で起きる。

「そんなことない!! 母さんは、母さんは!!」

「変わらない、変えられないのだよ、フェイト・テストロッサ!!」

一旦上にサーベルを勝ち上げて、バルディッシュを持つ腕を上げさせると無防備になったフェイトの腹にけりを打ち込んだ。

「ぐふ!!」

「フェイト!!」

「!!」

けりを喰らって地面に叩きつけられたフェイト。思わず声をあげてしまったアルフ。

「この野郎!! よくもフェイトを!!」

アルフは狼の姿となって飛び掛る。しかし、すばやくスラストーを動かす未確認についていくことがままならず、攻撃を放つ時間さえ与えられない。

「は、早い!?!」

「遅い!?!」

すぐさま背中に戻る未確認。アルフもなんとかからだをそちらに向けるも標準を向けられているのは腰から構えられたバスターランチャーだった。

「な!?!」

「逃げて・・・アルフ!?!」

けりを入れられ地面に叩きつけられていたフェイトは何とか小さなクレーターからからだを起き上がらせて、アルフに叫ぶ。

「くそう!?!」

収束されかかっていたそれを蹴って、なんとか離脱する。

「なかなかやるではないか。まあ、いい。さっさと旅立つが良い、プレシア・テストロッサ」

「!?!」

「アルハザードを目指したとしてそれはすでに失われたもの。貴様に待つはただの破滅だけだ」

「違う!?! アルハザードはある、あるわ!?! ごほごほ、ごほ」

激しく咳き込むプレシア。更に血を吐く。もはや彼女には一刻の

猶予もなかったのだ。

「世界の全てを統べる私が言うのだからそれはかくていされたこと。さっさと、そんな幻想を抱いて死に行け。それがお前の運命だ」^{フレイト}

すでにプレシアの後ろの方からは時の庭園が崩壊を始めていた。崩れたものは全て虚数空間へと落ちていく。

そして、プレシアとそばにあったアリシアの入ったポッドに向けて、未確認がバスターランチャーを構える。

「そんなことさせると思ったか!!」
「いくらあいつがむかつくからって、フレイトを悲しませることはさせないよ!!」

クロノがデバイスを構え、アルフと共に飛び掛る。しかし、先ほどここまで来るのに機械兵たちと戦っていたクロノはすでに魔力が切れ掛かっている寸前であり、アルフも先ほどの攻撃で肋骨の数本が持っていかれていた。

二人が向かってくると、まず右手にあるライフルを連射して、まずクロノの手にあったS2Uをはかいする。

「な!？」

完全崩壊までは行かないが、飛行魔法は使えたとしても、攻撃魔法などを使えば一瞬にして碎けてしまうような損傷をこうむってしまう。

更にそれを見て驚愕する黒のの間合いに一気に入り込むと、ライ

フルを粒子化して、サーベルを展開すると、横なぎに一閃、殺傷設定であるためにバリアジャケットを切り裂き、そのまま横一線に傷を与える。

「がああああああ!!」

浅かったためかひどい出血ではないが、地面に着地した瞬間苦しそうにして、悔しそうな表情を向けていた。

アルフに対してもその拳を回避して、カウンターのサーベルを背中に叩きつけた。障壁を展開していたがそれも脆くも破壊され、ぱつぱつと切られる。

「うわあああああ!!」

「アルフ!!」

地面に叩きつけられるアルフ。フェイトは悲痛な叫びを上げる。

「全ては決められた運命……」
フェイト

「何を……」

「アリシア・テストロツサがあ的事件で亡くなるのも、貴様がそれを発端にプロジェクトFに手を出すのも、ジュエルシードを巡って事件が起きることも、そして、貴様が最後にその死骸と共に虚数の墓場に沈むこともな」

「あ、あなた……、アリシアをそんな風に言わないで!!」

蝕まれた体に鞭を打って、プレシアは紫電の魔法を放つ。しかし、それは楯によって簡単に防がれる。

すでにそこまでプレシアの体は弱っていた。そこにいるのは嘗て

大魔導師と呼ばれたプレシア・テストロッサではなく、ただ愛する者を失ってしまい、狂ってしまった哀れな母親であるプレシア・テストロッサであった。

そして、未確認は言った、全ては決まっていたことだと。取り戻したい過去はもう手に入らないことを。

そして再びバスターランチャーを構える。すでにプレシアには逃げる気力も体力もなく、それを防ぐ魔力もない。

「虚数の塵芥となり果てろ！！」

急速に収束されたバスターランチャーが放たれようとした。

「いや・・・かあさああああん！！」

フェイトの叫びが木霊する。

「死ねえ！！」

そうして引き金が引かれようとしたその時だった・・・。

「なにぃ！？」

突然粒子弾が未確認が構えていたバスターランチャーを貫き、爆散させたのだ。一体誰がこんなことをと思い慌てて粒子弾が飛んできた方向を全員が向けた。するときりと光る白い流星。

そして、一気にその影が大きくなると大きな三対六枚の白い翼を羽ばたかせたMSのエクシアが舞い降りたのだった。

PHASE100 降り立つ天使 下の上（後書き）

ようやく主人公登場。

オリジナリティを出しつつ完結へと向かいます。

PHASE 101 降り立つ天使 下の中

「エクシア・・・、また貴様か。運命フエイトのイレギュラー」

「俺が何かは関係ない。それでも、お前がこの歪みの一部だということだけは分かる!!」

目の前にいる未確認はその一部に過ぎない。もっと大きな塊のようなのだが、ここにはいない何かであると、なんとなく感じ取っていた。それは信憑性にかけるもの。それでも、明らかなのは、今回の事件の発端であるプレシアもまた、被害者であるということだ。

「変わらない、変えられない、それが宿命、運命フエイト!!」

未確認が機械音で喋る。

「この事件も起こるべくして起こった。全ては太古から決まっていた運命フエイト。変わることなく時間が過ぎ、そして、起こった。アリシア・テストロッサは自身の母親の実験によって巻き込まれ、死亡」

「!!」

それを聞いていたプレシアの体が震える。彼女はそれを突きつけられた。彼女の参加していた、彼女が進めていた実験によって愛娘の命を失ってしまった。つまりそれは・・・。

「わ、私が・・・アリシアを」

「殺した」

「!!」

未確認がライフルで粒子弾をプレシアの足元に放つ。吹き飛ばさ

れたプレシアはなすすべもなく壁に叩きつけられる。

「が！！」

言うことを聞かない体。経緯はどうであれ、裏はどうであれ、彼女は紛れもなく、自身の手で愛娘を殺したことになるのだ。殺して、そして嘆いて、そして今度は蘇生させようとしている。

「どこまで傲慢だ。アリシア・テストロッサの命を生贄にしてまで完成させたものから生み出したのだろう？？そこにいるフェイト・テストロッサを。そして、あまつさえそのフェイト・テストロッサを人形扱い。そして捨てる。どこまで命をもてあそぶ、プレシア・テストロッサ」

「「！！」」

プレシアはうつむいたままで、それを聞いたフェイトは驚愕する。

「それもまた運命^{フェイト}。全ては決まっていたこと。貴様がたどる道は後は破滅だけだ」

「あ、アリシアだけは、アリシアだけは蘇生させて見せる！！アルハザードに行って！！」

「無駄だ、貴様の運命^{フェイト}はすでに死という破滅だけだ。虚数の塵芥となる、それが貴様の末路、決められた最後^{フェイト}！！」

「そんなことない！！母さんは死なせない！！私が守るって言ったから」

フェイトがバルディッシュを杖代わりにしてプレシアを庇う形の前に立つ。

「貴様の運命^{フェイト}もすでに決まっている。すべて！！」

「違う!!」

ハヤトはそう叫ぶとすばやくGNソードをライフルモードに切り替えると粒子弾を放つ。謎のものが操作する未確認は小刻みに動いて、ハヤトに的を絞らせない。更に右肩越しにマウントされているGNバスターソードと左手に持ち帰られたGNライフルを巧みに操ることでラフ・ファイトのような戦い方で、ハヤトとエクシアを攻め立てる。

バスターソードの斬撃が来たと思ったらすぐに粒子弾が放たれ、粒子弾が放たれたと思ったら、次には接近してきて渾身の蹴りを放つなどまったく予測不可能な変幻自在の戦い方に、ハヤトは翻弄されて徹底的に守勢に立たされ、一向に攻勢に出ることができないでいた。

流れるような動きで粒子弾を放ってくる未確認の攻撃を楯を使ってシールドを展開し、何とかその豪雨のような攻撃を防いでいるハヤトに対して未確認から言葉が放たれる。

「何が違う、どう違う!?!」

そう叫びながら未確認がGNライフルから粒子弾を放ちながら一気に接近戦に入ってきた。気づいたときにはすでにその右手にGNバスターソードが握られていた。

「違う!! そんなことは絶対に違う!!」

「ふははは、違うとは一体何が違う!?! 全ては決まっている、そう、全て!!」

ハヤトは素早くライフルモードからソードモードに戻すと、接近

してきた未確認に向かってGNソードを振り下ろした。それに対して未確認も右手に握られたGNバスターソードによって受け止める。受け止めるだけでなく、振り切られ、勢いに負けてGNソードはエクシアの右腕から弾き飛ばされる。

「な!？」

まさかの力負けにハヤトは驚愕する。そんなこともお構い無しに、未確認は更に襲いかかる。振り下ろされたGNバスターソードをGNシールドで受け止める。しかし、それを巧みに動かされ、シールドを左腕から吹き飛ばされてしまう。更にその勢いのまま、ハヤトの首を落としに掛かる。すんでのところで顔を動かして吹き飛ばされるのを回避する。

お互いに距離をとった隙を突いてすばやくハヤトはエクシアの新装備であるGNロングブレイドとショートブレイドを両腰から抜き取り、構える。そして一気に加速するとそれらをクロスさせるように薙ぐ。しかしその剣先が届く前にそれを予測していたかのようにバックステップで回避される。

「く!!」

「甘い、甘すぎる!!」

再びGNブレイドを構えて上空にて二人はにらみ合う。

「何が違う!! 運命は決まっている。ジュエルシールドがこの世界に落ちることも、高町なのはが魔導師になることも!! フェイト・テスタロッサと出会うことも!!」

未確認がGNバスターソードを構えて突進してきた。

「違う!!」

その攻撃をGNブレイドによって受け止める。

「そんなこと、絶対に違う!!」

しかし、再び力に押し切られGNショートブレイドが吹き飛ばされる。しかし、先ほどのように驚愕する時間は与えられない。それにハヤトはその未確認の言葉を必死に否定していた。

「運命は、決まったものではない!!」

しかし、終にGNロングブレイドも弾き飛ばされ、更に未確認によって背後を取られる。

「理解不能だ。やはり、イレギュラーの考えは、理解不能だ」

そうして未確認がGNバスターソードを構えたのを感じ取った。それ以上に感じられたのは圧倒的な死の感じ。冷たく、どこまで逃げてでも逃れられない触手に絡め取られるような感じ……。

これも以前感じたことがある……。あれは確か……。

――カオル……。

アイオリスにて異形との戦いで、疲れから気を抜いてしまったハヤトに襲い掛かった攻撃をその未で庇った一人の少女のことを思い出した。

もしかしたら彼女が助けてくれたから、自分はこの場所にイレギュラーとしていないかと思った。彼女の存在が、彼女の行動が、彼女がハヤトの運命フュイトを変えたのだ。

「……そうだ……運命フュイトは変えられる……。カオルができたように……。カオルがしてくれたように……。俺も、俺達も……。俺とガンダムも……。」

「死にさせ！！イレギュラー！！」

未確認が横なぎにGNバスターソードを振るった。

「俺に、俺達フュイトに運命を変える力を……。ガンダアアアアム！！」

誰も知らないところで、その叫びに反応する存在があった……。

PHASE 101 降り立つ天使 下の中（後書き）

ご感想お待ちしております。

奇跡を起こせ・・・ガンダム!!

PHASE 102 降り立つ天使 下の下

未確認が振るったGNバスターソードがハヤトに当たることなく空を切った。理解不能なことが置き、未確認は動けずに呆然と空をきった剣先を見つめている。

「な、なに・・・」

未確認は呆然とした声で言う。

確かに目の前には一方的にあしらわれるハヤトとエクシアがいた。しかし、確実にしとめたと思ったそれらが目の前にいなく、そして、振るったGNバスターソードにはその感触が、手ごたえがまったくなかった。

ハヤトとエクシアの姿がない代わりに、そこには粒子の残量が光輝いて、そして、消えていくだけであった。ハヤトとエクシアの姿など、どこにもないのだ。

かわされた・・・、その考えが理解できないという単語と共に現れる。完璧に計算ずくされていたはずだった。完璧に未確認の必勝の間合いであって、絶対に交わされるはずが無いと思われていた。

しかし、事実目の前にはハヤトの姿もエクシアの姿も、その視界のどこにも認めることができないのだ。すると、突然だった。未確認のメインカメラの端に光る何かがよぎるのが映った。

「！！そこにいるか！！イレギュラー！！」

その方向に向きながら未確認はその手に構えられたGNライフルを放つ。しかし粒子弾がその光に届く前に、それは先ほどまでいたところからすでに離脱していた。その光の後を追うようにして身確認は動き、旋回してGNライフルを連射し、それに向かって粒子弾を放つ。

しかし、次々と放たれるその粒子弾はまったく光に当たることなく虚しく軌跡を描き続けるしかない。

「理解不能だ！！一体何をした、イレギュラー！！」

突然未確認の横を光の軌跡が迸る。慌ててそれにあわせるようにしてGNライフルを連射する。しかし、光は・・・否ハヤトとエクシアは残像が残るほどの速さでGNライフルの連射を軽やかにかわし続ける。そして、両手に腰から取り出したGNビームサーベルを握り締め、一気に加速して接近してくる。

「な、何故当たらないのだ！！そんな動き、できるはずがない！！」

混乱する未確認。何度計算をしてもその動きをできるだなんて答えが出ないのだ。直後に背中にもすごい衝撃が走る。エクシアが未確認に向かって蹴りを放ってきたのだ。背中をけられた未確認は前方にはじき出されながらもなんとか体勢を立て直す。

そのまま後ろにいるはずであるハヤトとエクシアに向かってGNバスターソードを振舞わしてきりつける。しかし、それもまた空を切る。そして、その代わりにハヤトのGNビームサーベルによって右手を切りつけられ、斬られることはなかったが、衝撃でGNバスターソードを弾き飛ばされてしまい、追撃のかかとお年を暗い、まっさかさまに時の庭園の地面に叩きつけられる。

地面に叩きつけられ、そのままの体勢で上空を見上げると、そこには手に二本のGNビームサーベルを携えて、そこに無様に寝転がっている未確認のことを貼るか高みから見下ろす天使のように見下ろしていた。

「リ、理解不能だ・・・」

空に舞う天使のようなエクシアが、まるで地上の人間を戒めるべく、胸に抱く激情を発散させるかのように、その全身から赤い輝きのGN粒子を放っていた。

PHASE102 降り立つ天使 下の下（後書き）

ご感想お待ちしております。

発動したそれがお分かりですよね??

トランザアアアアム!!

PHASE 103 降り立つ天使 上の上の上

「こ、これは一体・・・??」

ハヤトは今まで長くモビルスーツMSを纏ってきたが、このような不思議な感覚になるのは初めてだった。

未確認にまったく歯が立たず、武装を次々と弾き飛ばされ、そして、背後からGNバスターソードによって切り殺されそうになったときだった。ハヤトとて簡単に殺されるつもりはなく、すばやくその剣閃を回避して応戦しようと考えていた。例えば体にどんな傷を負おうとも・・・。

そして、そんなハヤトの思いに、否、思った以上の速さ（スピード）でその思いに反応してくれたのだ。自らが瞬間的にその場を移動したかのような感覚を覚えるほどの移動速度。スピード想像や考えることはできても、できるかどうかは未知数であり、不可能だと思っていた全身の動きを体現してくれていた。

普段は感情を表に出すことは少ないハヤトであるが、この驚くべきスペックの高さに興奮を感じぜざるを得なかった。この興奮は始めてイザナギを纏ったときと同じだった。きっとここにカオルがいたらあの時と同じことを言うだろうと思った。

すると突然響いてくる声がした。

「見つけた・・・」

「見つけた見つけた・・・」

「ようやく我らの安住の場所・・・」

「歪んだ澱みを浄化する安住の場所・・・」

「暖かい・・・」

「暖かい・・・、心清められる・・・」

それはハヤトとエクシアの後ろにある何かだった。振り向くとそこにはプレシアの手にあったはずの9つのジュエルシードであった。それが青く今までのようにまがまがしい青い光ではなく、薄く、透き通るような美しい光を放ち、時の庭園を包み込んでいた。

そうして、ゆっくりとそのジュエルシードがエクシアの推進部である劣化GNドライブの中へと溶け込む用に入っていた。すると目の前のモニターに現れた文字・・・。

“TRANS—AM”
トランザム・システム

そして、それを見たハヤトはためらうことなくその名を叫んだ。

「トランザム!!!」

その瞬間GNドライブから放たれるGN粒子の両が今までの何倍ものものに膨れ上がり、背中にある三対六枚の翼を包み込むようにして更に光が翼の形になって、ものすごい速さで伸びていく。

まるで時の庭園を包み込むかのように現れた天使のような姿であった。赤色の大きな翼を羽ばたかせるエクシア。

それを見ていた未確認。

「理解できない。しかし、消えうせろ!!!イレギュラー!!!」

いつの間にかに拾われていたGNバスターソードを構えて突進してきた未確認。そして、振りかぶられ、一刀両断するかのように振り下ろされた。しかし、殺気の籠もった気合を持って振り下ろされたそのGNバスターソード。しかし、その攻撃もまた、目標であるハヤトとエクシアにかすることなく空を切る。

そしてその直後、ものすごい衝撃と共に、未確認は蹂躪される。赤色の光輝に身を包むハヤトとエクシアに、その体が拳で殴り飛ばされ、足で蹴り上げられ、そのまま蹴り落とされる。

「イ、イレギュラアアアアアア！！」

そう未確認が叫ぶもハヤトとエクシアはすばやく両手にGNビームサーベルを構えて蹴り上げられた未確認に向かって飛翔する。

「はあああああー！！」

そして、振り上げられたGNビームサーベルを無抵抗の未確認に向かって振り下ろし、X字に切り裂いた。四肢を切り裂かれ、体を細切れにまで切り裂かれた未確認はすでに機能停止になっていた。やはり遠隔操作だったのか中には誰もいなかった。つくづく手の汚いものだと思った。

そんな鉄屑と成り果てた未確認を悠然と見下ろすようにして、滞空するエクシアの光の翼は更に拡大し時の庭園を包み込み、幻想的な風景を作り出していた。

PHASE 103 降り立つ天使 上の上の上（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 104 降り立つ天使 上の上の下

『く、クロノくん!!! 時の庭園の光の翼から放たれてる粒子から魔力反応・・・EX!!!』

「な、なんだって!？」

ありえないほどの純度と量のGN粒子が溢れている。するとそこに役割を終えたなのはとユーノがなのはの砲撃で天井を打ち破って現れた。

「フェイトちゃんって、ふえええええええ!？」

「こ、これって・・・一体?？」

なのはとユーノはいきなり目の前に広がる幻想的な世界に驚きを隠せない。そして光の粒子が発生する上空を見上げるとそこには悠然と佇む天使の姿があった。

「綺麗・・・」

なのはがそう呟くと、ユーノも黙って頷き、同感だと思う。

『ハヤトくんのGNドライブからジュエルシード反応あり・・・って、ドンドン弱くなっていくんだけど!!! これってどういうこと?』

「僕に聞かれても、これだけで戸惑っているんだ」

ジュエルシードの反応が徐々に弱まり、そしてGNドライブと同化していく。ハヤトの運命^{フレイト}を変えたいという願いに、ジュエルシードが反応したのだった。しかし、どうして歪んだ形で発動しなかつ

たのかはわからない。

それでも管理局が回収していなかった9つのジュエルシードはハヤトの持つエクシアのGNドライブと完全に同化し、劣化GNドライブであったものを覚醒せ、世界に数個としかないはずのオリジナルのGNドライブにまでその性能を引き上げたのだった。

「一体なんなの??」

体を蝕む苦しみを忘れてプレシアはただその幻想的な世界に目を奪われていた。こんな光景を、もしここにアリシアがいたらどんなことを言うだろうか、どうせなら一緒に見ていたかったと思った。

『・・・さん』

ぼうっとしていたためにアリシアの声の幻聴でも聞いたのかと思った。

『・・・シア、・・・イト』

どこからか嘗ての自分の使い魔であり、横で同じく光景に見ほれているフェイトの養育係であったリニスの声もする。

「ねえ。母さん」

フェイトが声をかける。

「今ね・・・リニスの声がしたの」
「え・・・」

フェイトにも何か声が聞こえていたというのだ。するとまたどこからか懐かしい二人の声がする。

『母さん』

『プレシア、フェイト』

光の向こうに人がけが見える。一人は女性だ、そしてもう一人は少女の姿をしていた。彼女たちのことを見まごうことがあるはずはない。一人は自身の養育係であり、もう一人の母といってもいい女性。

「リ、リニス??」

『はい』

そしてその隣にいる少女。プレシアが眼に入れても痛くないといえる、愛してやまない愛娘の姿。すがりつくように手を伸ばし、そのプレシアの伸ばした手を優しく包み込む少女の手。実体がある、そしてぬくもりもあった。

「あ、アリシア・・・」

『母さん』

「アリシアアアアアア!!」

プレシアは涙を流し、アリシアに抱きつく。実体がある。温もりがある。あの時、小さいときのアリシアそのものだった。すがりつき、もう離さないといわんばかりにしがみつく、そんな子供のようになくプレシアのことをアリシアはまるで母のように優しく抱きしめてなでてあげる。

「リニス!!リニス!!」

フェイトも、そしてその光景を見ていたアルフも駆け出して、そんな自分たちの母的存在である彼女に抱きつく。

『フェイトも、アルフも相変わらず甘えん坊ですね』

「リニスだ!! リニスだ」

「もう、一体どこ行ってたんだい。私もフェイトも心配したんだよ」

リニスに抱きついて涙する二人。ある日突然忽然と姿を消してしまったりニス。プレシアに聞いてもどこかにいってしまったとしか聞いてなかったのずっと心配していたのだ。しかし今思えば彼女は使いまであるからどこかに居るとは分かるはずである。それはつまり彼女はもう、この世にはいないということが分かった。

『ごめんなさいと謝っても許してもらえないかもしれません。でも、あの時は仕方なかったんです。あなたたち二人に悲しい思いをさせたくなかったから・・・』

二人はリニスが自分たちを思っていてくれたことなのだとわかっていて。しかし勝手にいなくなったのはやはり心配だった。何せ自分たちに死を見せたくなかったのだから。しかしどれだけつらかっただろうか。どれだけ孤独に震えただろうか。たった一人で誰にも見つかることなく、ひっそりと死んでいった彼女はどんな思いだったのだろうか。

『母さん、どうしてフェイトにあんなひどいことをしたの??』

「え???」

まるでアリシアの言うことはプレシアが彼女が亡くなってからしてきたことを全て知っているかのような口調であった。

『私、ずっとそばにいたんだよ?』

「え、そんな・・・」

アリシアは自分が死んでからずっと自分の死の生で狂ってしまった母のことが心配だったのだ。

『やめてって何度も泣いたし、叫んだ……。でもぜんぜん母さんに伝わらない・・・』

アリシアは死後もプレシアのことが心配でずっとそばにいて見守っていたのだ。しかし、アリシアという愛娘の死は彼女にとって人生を全て覆されたといっても過言ではなかったようだ。それから彼女は狂ったように研究に没頭し、とある人物の確立していた理論を元に完成させた、プロジェクトFによってアリシアのクローンであるフェイトを作り出したということだった。

アリシアはプレシアが彼女に対してフェイトと名づけたことから、一人の娘として育ててくれるのだと思っていた。新しい道を見つけたのだと思った。そして、自分の妹に当たるフェイトに幸せがくることを何よりも願った。

『でも、母さんはやっぱりおかしくなってたね』

「あ、アリシア?」

自分の娘から怒られていることに困惑を隠せないプレシア。それでもアリシアは話を続ける。

『リニスにフェイトが魔法とかを習ってるときの顔、見たときある?』

「・・・」

そういわれてプレシアは黙る。ずっと研究室にこもって、フェイトの表情なども見ていなかった。あの時どんなことをしていたのか、どんな様子だったのか、どんなことをいつていたのかもぜんぜん知らない。

初めこそは自分の娘のように見ていたプレシアであるが、ある日を境にしてそうしなくなっていた。

『フェイトはね、ただ母さんに褒めてもらいたいからって、つらい特訓とかにも音を上げないで頑張ってたんだよ？？それを知らないで・・・』

そして、プレシアがフェイトを使って何をしていたのかも全て知っている。プレシアは愛娘からいわれる言葉を聞いて唾然としている。ずっとそばにいたのに、そしてあの時アリシアはたった一つだけ大きな我儘を言った。

“妹が欲しいな。そうすれば、寂しくないから”

自分がいないとき、彼女が寂しくないはずはなかったのだ。だからこそもう一人誰か、遊び相手がいてくれれば、少しでもその寂しさが和らぐと考えたのだ。もしアリシアが生きていて、その後にはプロジェクトFが完成し、それによってフェイトが生まれていたら、きっと二人はいい姉妹になっていただろう。

そうでない今でも、アリシアにとってはフェイトは可愛い妹なのである。細胞レベルはほぼ一緒、しかし、決定的に違うのは魂という人の根幹を成すレベルであった。だからいくらフェイトに対して

アリシアの記憶を転写したとしても、フェイトはフェイトである、アリシアにはなれないのだ。

『でも、母さんはフェイトを傷つけたよね』

「あ、アリシア、あれはね・・・」

プレシアの言いたいことはアリシアには分かっていた。しかし、分かっているにも許せないこともあるのだ。

『母さん、私を蘇らせたっていうのはわかるよ?? でも、私はそんなことは望んでない』

「そ、そんな・・・」

プレシアは面と向かっていわれて愕然とする。

『アリシア・・・』

『うん、わかってるよ、リニス。でもね、今まで伝えられなかったことを伝えないと』

リニスが気遣わしげに話しかけてくるのに答えるアリシア。

『フェイトにひどいことをしていたのは、この後のことを考えてのことだったんだよね??』

「!!」

「え?? ど、どういうことなの・・・えっと、姉さん??」

『そう呼んでくれるんだ、フェイト』

嬉しそうに笑うアリシア。きっと生きていたらこんな笑顔を見せてくれるのではないかと思った。

『うれしいよ、本当なら、生きている時に言ってほしかった』

「な、ならアリシア。大丈夫よ、すぐにアルハザードに行って・・・」

『母さんはいつからそんな御伽噺を信用するようになったの??』

「あ、アリシア??」

『母さんは科学者だよね?? アルハザードだなんて、もう失われてからどれだけたってると思ってるのかな??』

「そ、それは」

『プレシア、あなたもそろそろ目を覚まさなければいけませんよ??』

「り、リニス。あなた、死んだはずじゃ」

『はい、確かに私は、死んだ身です』

しかし、何故ここにそんなリニスやアリシアが現れたのか。確信はないがいまだにGM粒子を放っているハヤトとエクシア、そして、覚醒したオリジナルのGNドライブが原因だということがわかった。

『科学者のあなたは信じられないかもしれませんが、これは奇跡の何者でもありません。そして、これがおそらく、あなたの運命の分岐点なのだと、私とアリシアは思っています』

『このままじゃ、本当に母さんもフェイトも悲しい運命をたどっちゃう。私はそんなのは嫌なの』

「アリシア・・・リニス・・・」

死してなお彼女たちはプレシアたちのことを心配していたのだ。

彼女たちが望むこと、それはプレシアとフェイト、アルフが幸せに暮らしてくれることだ。確かにすでに病が末期に近いプレシアが生きていられる時間はもう少ないだろう。しかし・・・。

「私にはもう・・・」

『確かにあなたが生きられる時間は早々長くないでしょう』

「そ、そんな。母さん・・・」

フェイトは聞きたくなかった事実を突きつけられた。母を助けたとしてもはや助かる見込みのないところまで病は進行していたのだ。

『それでも、あなたはしなければいけないことがあるでしょう??
アリシアをよみがえらせるためにアルハザードへと行くこと以外に
です』

「・・・」

『もしまだ、母さんがアルハザードに行くっていうなら、ここでは
つきり言っておかないといけないかもね・・・』

アリシアが少し悲しそうな表情になり、どうしたのかとプレシアは思う。まだ、彼女の胸の置くには、アリシアと失われた過去を未来を手に入れたいという思いがあったのだ。しかし目の前にその愛娘であるアリシアが現れ、そして自分はそんなことを望んではいないというのだ。

むしろ死してなお、母であるプレシアのことを心配し、生きていたら本当に妹になっていただろうフェイトのことを姉として心配していたのだ。

もしかしたら、ずっとそばにいてくれていたアリシアのことを、むしろ自分は追い詰めて、悲しい思いをさせていたのではないだろうかと思うのだ。

『もしまだ母さんがそのことを望んでいるなら、私はたとえ蘇ったとしても・・・』

そして、その次にいわれる言葉はプレシアにとっては残酷なもの以外何物でもなかった。

『そんな母さんは嫌いになる……。うん、きっとそう』

「そ、そんな……。アリシア……」

『母さん、分からない?? 命は一人にたった一つあるから人は生きていけるんだよ??』

『蘇りが全ての人にとっていいとは限らないのです。現にアリシアはそのことを望んでいません。そして、私もそう思います』

リニスは確かに亡くなったが、そこには後悔の色はなかった。病に苦しむプレシアからの魔力の供給を受けられなくなるのが目に見えて分かっていた。そのために残された限りある時間をフェイトのための教育に費やしたのだ。

そして、母という存在からの愛情、母性に飢えているフェイトのために、母親の代わりをした。

そして、フェイトが一人前になったということで、とうとう魔力の供給が途切れ、一人こっそりと姿を消し、静からところでその一生を終えたのだ。

しかし、後悔はしていない。最後の最後にフェイトとアルフの笑顔を見る事が来たのだから。そして、彼女たちに最低限のことをして上げられたことで満足感でいっぱいだったのだ。

『私は、母さんの子どもでよかったよ』

「え?？」

『忙しくても、疲れていてもいつも笑ってくれていた、そんな母さんが好きだったんだよ。だけどやっぱり無理させたくないし、寂し

いかったけど、極力我慢した。でもやっぱり寂しかった、だから
ったの・・・』

“妹が欲しい”

『母さん、このまま悲しい終わりなんて、私嫌だよ?? フェイトが
悲しい思いでこのまま生きていくのも、母さんの本当の気持ちを知
らないまま、ここで別れるだなんて・・・』

「アリシア・・・」

「母さん・・・お姉ちゃん・・・」

『悲しい運命フェイトはもうおしまい。変えようよ、運命フェイトを・・・』

「ええ、ええ・・・」

プレシアはただアリシアに抱きついてそう呟く。そして、ゆっく
りとフェイトに向き直る。そのとき見たフェイトは思った。あれだ
け怖いと感じた母から、そんな雰囲気が消えていたということに。
そして向けられているのは、申し訳なさで染まった顔だった。

「フェイト・・・」

「!!」

母がそう呼んでくれた。アリシアでなければちゃんと自分の名前
である『フェイト』と・・・。それがどれだけ彼女に衝撃を与えた
か・・・。

「ごめんなさいね・・・」

「え??」

突然謝罪を入れるプレシアと驚きを隠せないフェイト。そんなフ
ェイトを見たままプレシアは嘘偽りなくフェイトに気持ちを伝える。

短い期間であつたがフェイトに対して見せていた母としての顔は本物だということを。最初はアリシアの蘇生ではなく、フェイトを一人の娘として育てていこうとしていたこと。それでもどうしても二人に違いが大きすぎることから、アリシアのことが忘れられずに研究に走ってしまい、科学者としては笑いものである、御伽噺にまで手を出してしまったということを。そしてひどく当たっていたのは、フェイトから嫌われて欲しいという思いからだったということ

を。

「ど、どうして・・・??」

「私がいなくなったら、あなたが悲しむと思ったからよ」

もしプレシアが虚数空間に飛び込んで、フェイトが助けられないという運命をたどっていた場合、普通に接していたらフェイトはきっと後悔し続けると思っていたのだ。そんな後悔し続けて、人生を棒に振られるよりだったら、完全に自分とのつながりをけして、生きて欲しいと思ったのだ。

「本当にごめんなさい、ごめんなさいね、フェイト」

「母さん、いいんだよ。母さんは私のためにしてくれてたんだから・・・」

すると粒子の放出量が少なくなる。それにしたがってアリシアとリニスの姿が足から徐々に消えていく。

『そろそろ、時間かな・・・??』

『ええ、そうですね・・・』

少々寂しそうな表情になる二人。

『変わったんだよ、母さんも、フェイトも』

『プレシア、あなたが残された時間で、フェイトにしてあげられる事はすべてしてあげてください』

「分かってるわ・・・、この子だって、私の娘だもの」

「母さん・・・」

フェイトはそんなプレシアの言葉が何よりもうれしかった。そしてアルフも一緒に5人で抱きしめあった。

ちゃんと温もりを感じる、母プレシアの、もう一人の母であり教育係であったリニスの、姉になるはずであったアリシアの、家族であるアルフの。

ようやく家族になれた・・・。本当の意味で、仲直りでき、家族になれたのだ。

『私たちはずっと・・・』

『みんなのそばにいます・・・』

そうして粒子が消えると同時に手を伸ばすも、二人の姿は消えていった。そして今まで活動が停止していたことが不思議であったときの庭園の崩壊が始まった。ぐらぐらと大きく揺れ、次第に床が崩れて虚数空間へと落ちていく。

「早く、逃げるんだ!!」

クロノの叫びを聞いて、なのはたちも撤退を開始する。

「母さん、早く!!」

「あ、まだ、アリシアが」

フェイトがプレシアの手をとり逃げるようにいうが、プレシアはポッドに入ったまま、その場にいるアリシアの遺体を見ている。

こんなところに一人置いていくことなどできないと思ったのだ。

フェイトも同じ気持ちであるが、ずっとこの戦場で魔力が残り少ない。ポッドを動かしながらは厳しいものがあつた。

すると突然空から飛来した何かがそのポッドに手をかける。

「え?？」

「この子は俺が連れて行く。早く脱出しろ」

「わ、わかったわ」

「ありがとうございます」

アリシアの入ったポッドをハヤトがつかみ、もって行く。プレシアとフェイト、アルフは急いで時の庭園から離れ、出口を目指す。しかし途中……。

「ゴホ!!」

「母さん!!」

突然吐血したプレシアと、プレシアを支えていたフェイトの声が聞こえ、前方を飛んでいたハヤトは足を止めた。

見ると吐血したためか、プレシアの足元には大きく血だまりが作られていた。

「だ、大丈夫よ・・・」

そういうプレシアであるが明らかに顔色が悪い。

「無理をするな」

「え?？」

そういうとハヤトは背中にプレシアを背負い、片手でアリシアの入ったポッドを持ちながら急ぐ。

そして見えてきた入口と転移魔法陣のところにいるリンディだった。そしてすぐに転送システムが起動され、ハヤトたちが転移してから数分後、時の庭園は完全の崩壊し、全てが虚数空間へと飲み込まれていった。

時の庭園が完全に消滅したことを、アースラのブリッジでも確認が取れていた。

「庭園崩壊が終了しました。全て虚数空間に吸収されたことを確認」

「次元震停止。断層発生も確認されません」

「了解。現時点を持ってここを離脱。巡航航路に戻ります」

PHASE 104 降り立つ天使 上の上の下（後書き）

悲しみの運命は回避された。^{フエイト}

しかし、そう簡単に運命を大きく帰ることはできない。^{フエイト}

別れは刻一刻と近づいていた・・・。

感想お待ちしております。

PHASE 105 変わること、変えられぬこと 上

なのは達と共にアースラに戻って来たリンディはそれぞれ事後処理の報告を受けていた。その頃なのはたちは医務室で治療を受けていた。

時の庭園から戻って、なのはたちはアースラの医療室にて治療を受けていた。中でも一番ひどかったのは一人であの数の機械兵を相手にしていた黒のだった。頭から血を流すなど少々大きな怪我であったために、代表してエイミィがクロノの治療をしていた。なのはも激しい戦いの途中でくじいてしまった足をユーノに治療してもらっている。

「あれ??とところでフェイトちゃんは今どこに??」

なのはは姿の見えないフェイトを探す。

「彼女は一応事件の重要参考人でもあるからね。申し訳ないけど、しばらくはアルフと一緒に隔離されることになるね」

それについては仕方のないことであるが、それでもなのはには納得できないものがあつた起き上がろうとしたときにずきりとした鈍い痛みが足に襲い掛かり、またベッドに座り込んでしまった。

ユーノは慌ててなのはは似じつとしているように注意する。なのはもそれに関しては申しわけなさそうに従う。

「事実、今回の事件は一步間違えれば最悪次元断層を引き起こしかねなかった、重大な事件だったんだ」

そのことを考慮すれば、十分にフェイトたちに問題が出てくる。

すると隣でクロノの治療をしていたエイミィが満面の笑みで言うのだ。

「できた。うふふ、クロノくん可愛い」

まじめな話をしているクロノの隣でしっかりと頭に包帯は巻かれているのだが、最終的にリボンのようになっていたためにシリアスのムードが台無しになっていた。

「今回時空管理局としては、フェイトたち関係者の処遇について、慎重にならざるをえないんだよ。そこは、分かってくれるよね??」
「う、うん」

そう言うのはであるが納得できないところもあった。確かに危険なことにもなりかけたりしたが、仕方ないではまだ幼い彼女には納得しがたいところがあった・・・。

「ということだ、ってエイミィ、これは何だ?? やり直し」
「ええ、せつかく可愛くできたのに」

完成度がなかなかであったのをうれしそうに見ていたエイミィであるがすぐにクロノに、やり直しを言われると、口を尖らせてしぶしぶやり直すのだった。

すると突然、こことは別の医療室で眠っているプレシアの担当していたものの突然通信を送ってきたのだ。

>提督!! リンディ提督!! <

「一体どうしたの?? そんな血相を変えて??」

リンディもその担当医の焦りようが半端ではなかったので、何かあったのだと思った。プレシアの病進行はあの時エクシアのGNドライブから放たれたGN粒子によって留まっていたはずだ。

しかし、止まっていただけで、彼女の病がこれ以上進行しないというだけの話。もはや彼女の体は限界であったのだ。それを聞かされたリンディたちの間に、冷たい空気が流れる。

おそらくプレシアはもう長くは持たない。そんなからで良く興まで持ったものだ、担当医は呟く。ただただ娘のアリシアを蘇生させたい一心で、その子を思う母親の愛情がもしかしたら彼女を支えていたのかもしれない。そしてもしかしたら、彼女自身がその手を汚してでも、妹としてアリシアに紹介していたかもしれないフェイト。

彼女が来るたびに、胸の中ではずっと泣いて誤っていたのだ。こうするしかできない馬鹿な母親ですまない。そうするしか彼女にはできなかったのだ。

更に彼女の容態が危険領域に入ったらしい。どうするべきだろうか、担当医の様子からして、もはや治療は無理であることが分かっていた。

「彼女を・・・」

「え??」

突然口を開いたハヤト。リンディに対してハヤトはこういった。

「彼女を、フェイト・テストロッサとその使い魔を、プレシア・テストロッサの元に」

おそらくフェイトがプレシアと話ができるのはこれが最後だろうと、ハヤトは思ったのだ。リンディも一瞬考えるそぶりを見せるが、すぐに決心する。彼女とて一児の母親である。もし自分が死ぬ間際であれば、そばにいてくれればいいのは息子である。

「分かりました。ハヤト君たちはどうしますか?? 付いて来てもいいですが・・・」

「親子だけのほうがいい、無粋なマネはしたくない」

「私も、中には入りません。でも外で待ってます」

「僕もなのは同じです」

三人は中には入らずに待っているということになった。

PHASE105 変わること、変えられぬこと 上（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 106 変わること、変えられぬこと 下

それから、とある一室に隔離されているフェイトとアルフ。

フェイトの手元には今はバルディッシュはいない。おそらく逃げ出しはしないだろうが、一応ルールであるために取り上げられていた。フェイトもその気はないが、それでもルール出することは理解していたので、それに従った。

今は黙ってベッドに横になって休んでいた。ひどくいろいろあったので心身ともに疲れていた。アルフも人間形態になって横になっているフェイトの頭を優しくなでている。

静かな部屋に突然声が入ってきた。

>フェイトさん?? アルフさん?? 今すぐ治療室に行きますので一時的に釈放します<

「え??」

「医務室って、あの鬼婆に何かあったのかい??」

「アルフ」

「あ、ごめんよ」

声の主はこのアースラの艦長でもあるリンディであった。フェイトはそれを聞いてびくっと体が震えた。ははプレシアはずっと不治の病を患っていた。あの時見た綺麗な光によって進行が止まったと聞いたときはうれしかった。しかし、突然治療室といわれて、最悪の未来を想像してしまったのだ。アルフはプレシアの気持ちをようやく分かったのであるが、今までのこともあってか、彼女の呼び方が時々それになってしまふのだ。今回もそうってしまったので、

フェイトに注意される。

部屋から出される二人。アルフの首には首輪のようなものが嵌められており、最低限の魔力しか供給できないようにする拘束具のようなものであった。

「あ・・・」

「フェイトちゃん・・・」

フェイトが部屋から出ると、そこにはハヤト、ユーノ、そして自分にずっと声をかけてくれていた自分の本当の気持ちに気づかせてくれたなのはの姿があった。

しかし、今は治療室に行くのが先決であった。リンディとクロノのつれられてそこに向かう。そして治療室のドアの前に立つ。

「それじゃあ、あなたたちはここで待っていてね」

といってリンディはフェイトとアルフを中に連れて行く。三人が中に入っていくのをずっと後ろで見ていたハヤト。

親との別れ・・・。

それは等の昔のことである。もう親の顔など覚えていない。覚える気もなかったのかもしれない。あの時は生きているのか死んでいるのかも分からない、あやふやなところにいたのだろう。

目をつぶるとぼんやりと小さな自分に向かって話しかけている男性と女性の姿が見えた。しかし、顔が見えない。どうしてなのかは分からない。記憶にないのか、自分が覚える気がなかったのか。

小さな自分は一体何を見ているのだろうか。その透明な眼は穢れや濁りはないが、まったく特徴じみたものではなかった。

「フェイトちゃん・・・」

なのはは自分の父親が、最悪死んでしまうかもしれないという状況に陥ったときがあったので、そのときの気持ちたちが蘇ってきた。そして、フェイトもこんな気持ちなのかもしれないと思った。

自分の父は助かった。しかし、彼女の母はもはや助かる見込みはないというのだ。せっかく仲直りで来たというのに。どうしても、世界はうまくいかないのだろうか、ふとそう思ってしまった。

ハヤトもあの時の光景は生涯忘れられないと思った。粒子の雨を浴び、奇跡というものがおきたのだから。プレシアの病の進行が止まったと聞いて、内心は、これで人助けができたとほっとしていた。

しかし、今この状況はどうだろうか。

結局彼女のことを助けることができなかった。いつも自分はそうである。あの時結局自分が守られ、大切な存在を失ってしまった。だからこそ、後になって激しい後悔に襲われた。あの時ようやく人らしくなれたのかも知れない。そして、少しでも人助けができればいいと思った。

だが、今回も、結局後一步の所でハヤトの手からそれが零れ落ちそうになっている。握り締める拳。悔しさを表には出さずとも、心の中では激しい悔しさを感じていた。

リンディと共に治療室に入るフェイト。そこにはベッドから上半身だけを起き上がらせたプレシアの姿があった。

「あ・・・」

フェイトは彼女を一目見ただけで、もう時間がないのだと分かってしまった。それほどまでに彼女の姿は先ほど時の庭園で見たときとは違って細く見えた。まるで止まっていた時間が一気に進み、そのぶんだけ年を取ったみたいにな・・・。

「いらっしやい、フェイト・・・」

弱弱しい声であるが、それでも母の声であった。その声を聞いてゆっくり徒歩をすすめるフェイト。

「お母さん・・・」

「ごめんなさいね、フェイト・・・」

フェイトの頬をなでる。その手からは確かにプレシアの母親としての愛情が伝わってきた。すると突然フェイトの瞳からダムが欠陥したようにぼたぼたと涙が零れ落ちる。アルフも使いみであるからフェイトの今の感情が流れ込んでくる。その感情は・・・。

“喜び”

ずっとフェイトが求めていた、プレシアに母親として褒めてもらえること、甘えさせてくれること、そして愛情である。

「アリシアとリニスに怒られたわね・・・。まさか娘と使い魔に怒られるなんて思わなかったわ・・・」

「お姉ちゃんと私ってやっぱりクローンだからそっくりだったね」

「ふふ、そうね……。もしアリシアが生きていたら……。あな
たたちは双子ってことだったかもしれないわ……」

「そうだったらよかったね……」

「本当ね……」

IFのこと。もしあの時自分が無理にでも実験を中止していたら、
それから自らの手を汚しでも、フェイトを生み出していたならば。
今頃自分はどんな人生を歩んでいただろうかと考える。

きっと笑顔で溢れている家庭だったかもしれない。お姉ちゃんぶ
るアリシアとちよつと気弱な妹のフェイト。二人の姉のような存在
であるリニスに、そのリニスを姉として慕うアルフ。そんな彼女た
ちを見つめて笑っている自分。

——本当に、「この世はこんなはずじゃなかった」だわ……。

プレシアはIFのことを考えていて、ふとあの時自身に対してク
ロノが言った言葉を思い出していた。

それからぎゅっとフェイトのことを抱きしめる。フェイトも一瞬
驚いた表情になるが、すぐに自身もプレシアの細くなってしまうた
からだを優しく抱きしめる。ずっと昔に感じていた母の体温と香り
である。

「ごめんなさいね……」

痛かったわよね。そう言ってフェイトを抱きしめる力が強くなる。
それでもフェイトにとってはそれは微々たる物だ。それでもフェイ
トにとっては更に抱きしめられている気がしてうれしかった。

「大丈夫だよ・・・、うん、大丈夫」

気丈に振舞う。確かに痛かった、でも母のことを思えば耐えられた。母が失望するのが何よりも嫌だったからだ。

フェイトがそう思っているのと同じく、プレシアも辛かった。こうでもしなければ、あの時虚数空間へと落ちた後、フェイトが自分の足で立って生きていけないと思ったから。本当の母親になりたいという気持ちを捨てて、偽りの仮面をかぶり、虐げ、嫌われようと自分の心を傷つけていた。

プレシアは自身のからだから毒気などのあらゆる穢れが抜けていくような気がした。心につつかえていたものが一気に流れていくような気がした。

「さっきも言ったけど・・・」

フェイトの耳元で、はっきりとプレシアは自身の嘘偽りのない、思いを告げる。

「あなたは確かに、私の娘よ。フェイト・テストロッサという、私の大切な娘」

「おかあさん・・・」

フェイトはプレシアの患者服に顔をうずめて泣く。

「どうしたの?? フェイト。大丈夫よ、あなたは強いわ。それにあなたが倒れそうになったときでも、支えてくれる人がいるでしょ?」

「・・・うん」

ようやくできた友達という存在。あの時なのはと共に戦ったとき、こんなにも支えられることが頼もしく感じられるのかと思った。

プレシアもまた、自分が後何を残せるだろうかと考える。

目に見える形で残せるものはない、なら、残せるものはただ一つ。それを置いておく場所は、フェイトの心の中だ。

自分のからだなのに自分のからだではないくらい、軽く感じる。それは徐々にしに近づいているからだと分かっていた。それでも最後に、そう、最後にこれだけは言っておきたい。一度もフェイトに對していつて上げられなかった言葉だ。

一度ゆっくりとフェイトを代きしめる力を緩め、体から引き離す。そして、正面でお互いを見詰め合う。雰囲気は似ていなくとも、見た目はアリシアそっくりである、二人の一緒に元気に走り回っている姿を見てみたかった。

それが唯一の心残りであった。

でも、それももう終わり。いいのだ、最後にアリシアとリニスに会え、フェイトとも仲直りができた。

ふと、入り口にフェイトの使い魔であるアルフの姿があることに気づいた。

「アルフ・・・」

「え??? あ、なんだい」

一瞬にらむように見たアルフであるが、すぐに普通に戻る。そう見られるのも仕方ないと思えた。あれだけ彼女の大切な主であるフェイトを傷つけていたのだから。

謝っても、謝りきれない。

「こんな私が言うのもなんだけど・・・」

一番そばにすることが多い彼女にプレシアが頼めること。それは・・・。

「無茶をする子のこのこと、悪いけどよろしく頼むわ・・・」

「あんたに言われなくとも、あたしはフェイトの使い魔さ。フェイトを支えるのは、当然だよ」

「ふふ・・・、そうだったわね」

あの時余計な感情など必要ないといったが、けしてプレシアはそう思っていなかった。主に対しても、真っ直ぐな気持ちをぶつけられる、ただ主従だけの関係でないそんな関係の使い魔こそが、すばらしいのだと思っていた。

無茶をしそうになったときは、必死になって止めようとする。それは感情があり、何より主を大切に思っていなければできないことである。アルフにはそれができる。だからこそ、こうしてお願いしているのだった。

そして再びフェイトに向き直る。フェイトもまた、目の前のプレシアから生気が抜けていくのが、なんとなくだが分かっていた。

綺麗な母親が、それ以上に若々しく綺麗になっていくように見えたのだ。死ぬときはまるで化粧をしたようにきれいになるというが、まさにそれであった。

それに徐々に体が軽くなっていくのも分かる。まるで余分なものが全て消えていつているからであるかのように。

「ごめんなさいね、もう・・・無理みたいね」

「そんな・・・」

強烈な眠気に襲われる。不思議と病の痛みはなかった。徐々に痛みなく体が死んでいくのが分かる。あれもあの光のおかげなのか、それはわからないが、最後に満足していける。だからこそあの青年には感謝しなければいけないと思った。

「最後に言っておきたいことがあるの・・・」

フェイトはもうぼろぼろと涙をこぼしている。せつかくの綺麗な顔が台無しじゃないかと、頭を撫でてあげる。もっとうろくしていたかった、学校に通って、受験に四苦八苦して、恋人を作って家に連れてきて、それを見てはらはら見守って、成人時には綺麗な服を着せて、結婚式には出席して、孫が生まれたなら・・・。

――ああ、どうしてこうも気づくのが遅いのかしら・・・。

いつだって幸せはそばにあったのに・・・。プレシアは、そう思いつつも最後の力を振り絞り、フェイトに言う。

「フェイト・・・、こんなお母さんだけど、生まれてきてくれてありがとう」

「!?!」

そういったプレシアは笑顔であった。それはフェイトが今まで見たこともないくらい、綺麗な笑みであり、フェイトは思わず綺麗だと思ってしまった。

そして、それ以降プレシアはけして口を開くことも、眼を開けることもなかった。フェイトは分かっていた。プレシアは姉とりニスのもとに行ったのだと。

「お母さん・・・うわああああ!!」

もう抱きしめてくれることはない母のからだに抱きつき、フェイトは泣いた。その声は外にいるハヤトたちにも聞こえていた。

やりきれないなと思い、目を伏せているハヤト。なのはとユーノは泣いている。どうしてこうなのかと。せっかく仲直りできたのだと。

こうして、プレシア・テストロッサの起こしたPT事件は幕を閉じたのだった・・・それはフェイトにとっては始まりでもあったのは確かである。

PHASE106 変わること、変えられぬこと 下（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 107 出会いありて、別れあり 上

それから数日が立っていた。現在なのはたちは会議室に集められていた。

「今回の事件解決に及びまして、御三人方には、事件解決のために大きな功績があったものとして、略式ではありますが、ここに表彰します」

時空管理局の上官の人からなのはたちに感謝状が贈られることになった。このために頑張ったわけではないが、それでも自分の頑張りが認めら得たのはうれしかった。

「ハヤト・ブリッグスくん、高町なのはさん、ユーノ・スクライアくん。ありがとう」

アースラの艦長であるリンディから賞状を手渡され、会議室は拍手に包まれた。

そして表彰式を終えてなのはたちは廊下を歩いていた。そしてその歩いている途中になのはは足を止めて、これからのフェイトの処遇について再度クロノに聞く。

「ねえ、クロノくん……。フェイトちゃんは、本当にこれからどうなっちゃうの??」

「彼女にも色々事情があったとは言え、彼女自身が次元干渉の犯罪の一端を担っていたのは紛れもない事実だからね」

「!!」

どうかこうとも、フェイトは事実、犯罪者なのである。しかるべきところで、しかるべき法によって裁かれ、罪を償っていかなければいけないのである。

「彼女のしたことは、どう考えても重罪だからね、最低でも数百年の幽閉が、普通なんだけど・・・」

「そんな!？」

なのはが反論するのは当然のことだった。しかしそれは子どものがままだ。罪を犯してしまったところで、すでにフェイトは犯罪者なのだ。いくら彼女が優しい子であろうとも、世界はそれを認めてはくれない。それが世界であり、現実なのだというのを知るのはまだまだなのはにとっては先であった。

しかし、次のクロノの言葉は救いでもあった。

「なんだが!!」

なのはの反論を遮る形でクロノが言う。

「今回フェイトの場合であるけど、その状況が特殊であり、犯罪行為を自分の意志で加担したというわけでもない。彼女の母親、プレシアの件に関してもすでに裁判が始められているから、それほど重い罪にはならないはずだ。後は、どう上層部を説得するかだね」

なのははその話を黙って聞いている。

「なにも知らされず、ただ一途に母親の願いのために一生懸命だった子を罪に問うほど、時空管理局は冷徹な集団じゃないよ」

それを聞いて、なのはいつもの仕事中心に考えているクロノが固い人であると思っていたが、ここまでの話を聞いていて、とても優しい人物なのだと分かった。

「もしかして、クロノくんて、すごく優しかったりする??」

なのはがそんなことを言うと、クロノは驚いたように声をあげ、顔を真っ赤にする。クロノの様子を見ていたなのはは一体どうしたのだろうかと思った。そんな二人のやり取りをハヤトは黙って、エイミィはニヤニヤとクロノの弱みを握ったような笑みを見せ、ユーノは苦笑いをしてんでいた。

「ぼ、僕はし、執務官として当然のことを言っただけだ!! 僕の私情なんて入っていない!!」

そう言って顔を更に紅くしているクロノであるが、褒められて嫌な顔はしていなかった。知れどもからかわれていることには変わりなく、そこには笑いが絶えなかった。

アースラの食堂にてなのはたちはリンディと一緒に食事をしていた。

「次元振の余波は、もう大分、静まったから、なのはさん達の世界へ、あと1日で帰れるようになるわ」

「本当ですか!!」

「ええ、ただ、ユーノ君のミットチルダへの次元は、まだ安定していないの、だからもう少し時間がかかりそう」

「まあ、スクライアは、遺跡発掘で、流浪してる人ばかりですから、急いで帰る必要はないんですが、それまで、この船にお世話に、

なりっぱなしはどうかかと、思いまして」

「なら、家に来ればいいよ」

「いいのなのは？」

「私はいいよ。みんなもきつといいって言ってくれると思うの」

「ならお世話に、なります」

するとクロノとエイミィが入ってきた。

「君はどれだけ寝るんだ」

「だって3日も徹夜だったんだもん」

クロノの言うとおり、エイミィの目じりにはしっかりと隈ができていた。お疲れ様といたいとなのはとユーノは思った。

「あ、艦長と一緒にして、いいですか？？」

「私はいいけど、なのはさん達は？」

「かまわない」

「大丈夫ですよ」

「大丈夫です」

リンディはハヤト、なのはとユーノに聞くが、3人はもちろんと
いうことで皆で食事にする事になった。

「なら一緒にさせて、もらおう」

それから、クロノたちを混ぜて色々な話を話した。

「き、君は、魔法の知識0で、やっていたのか！？」

「0って言っても、ハヤトさんとユーノくんが、ある程度教えてくれましたから」

クロノはなのはが魔法を知らない段階から使うことができ、それから少しずつハヤトとユーノに教えてもらってから恐ろしいくらいのスピードで成長し、最終的には力の差がかなりあったフェイトを打ち破るまでになっていた。

「少しで、魔法の知識を教えられてる、フェイトちゃんに勝つのは、すごいよ」

エイミイが賞賛する。

「確かに、すごい才能よ」

リンディはその類まれなのはの魔法の才能を高く評価する。

「そんな、才能なんて」

「とまあ、なのはとユーノは、アースラでは最後の食事となるだろう」

「うん」

「素直じゃないな、なのはちゃんいつでも遊びに来てもいいんだよ」

「ありがとうございます」

「エイミイ、アースラは遊び場じゃないんだぞ」

「まあ、巡回途中はヒマなんだから、いいでしょう」

「艦長まで」

母親のリンディとエイミイの気楽な言葉にあきれつつ言うクロノ。彼も色々と気苦労が耐えないらしい。

食事を終えてからハヤトはクロノとエイミーと共にデバイスルームに来ていた。管理局ではいまだ魔導師主義がはびこっているためモビルスーツにMSはそれほど普及していないらしいが、一応の設備があるという事で今回の謎の現象について調査することになっていた。

ありえないほどの量のGN粒子と死者との対話などという摩訶不思議な現象が起きたためのものだった。魔法では到底証明しきれない現象。いまだに謎に包まれているGN粒子であるために、調べたと手大きな成果は得られないと尾思われていた。

調べていくと以前は劣化中の劣化品であったGNドライブがジュエルシードと同化することで覚醒、まさにオリジナルのGNドライブとなっていたのだ。性能面でもまったく同じと、まさに奇跡の形でここにあった。

「何てことだ・・・完全にジュエルシードが同化するだなんて・・・」

まさかの事態にクロノも頭を抱えている。現在管理局が抑えているのはGNドライブと同化してしまったもの以外の12個。残りのものも回収したいが完全に安住の地に同化してしまっていて、とてもではないが無理やり取り出すのは危険と判断した。

「でも不思議だよね。まさかロストログアに意志があるだなんて」

エイミーもモニターを覗き込みながら言う。それには同感だと頷くクロノ。確かに魔道書の管制人格となれば別であるが、このような個体物が持つとは今まで聞いたこともなかった。

「だが、現にジュエルシードは意志を持っていた。それに変わりは無い」

「ああ、でも何故GNドライブに同化などを?」

「もしかしたら、それらも歪みにとらわれた存在から解放を願っていたんじゃないか?」

「願いをかなえるジュエルシードが願いを持つか・・・、なんだろう、でも叶ったってことなのかな?」

「それらが、そう思っているならそうなのかもしれない。一概には言えないが・・・」

「しかし、これを僕たちが差し押さえるということは・・・」

「断らせてもらう。これには俺以外にも許しを得なければいけないからな。だからといって許しを早々くれる人たちではないだろうな」

「はあ・・・、だろうと思ったよ」

「また、報告書が増えたね。クロノくん」

「そう、簡単に言わないでくれ。まだ終わってない物だってあるんだからな」

クロノの表情にはまだ疲れが見えていた。プレシアとフェイトの罪を何とか軽くするために報告書のまとめなど執務官としての仕事はまだまだ山積みであったのだ。

こればかりはさすがのハヤトもどうしようもない。しかし帰ってから彼女たちになんて説明したらいいだろうか。

この現象を話したら更に研究にのめりこむ人物もいるのだから。しかしここまでスペックが底上げされるとは思わなかった。更に謎のシステムである『トランザム・システム』^{モビルスーツ}。MSの性能を三倍近くも底上げするそのシステム。未確認の計算をも上回るその規格外さには驚かされた。しかし時間制限とその後の性能の一時的な低下があるなど、諸刃の剣であることは否めなかった。

それでも少しでも運命^{フェイト}を変えられた。そしてエクシアはハヤトの

求める剣となってくれた。だからこう言おう・・・。

「ありがとう」

その言葉に心からの感謝を込めて・・・。

PHASE107 出会いありて、別れあり 上（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 108 出会いありて、別れあり 下

そしていよいよ速人たちがアースラから地球の自分の家に戻る日が来てしまった。見送りにはリンディ、クロノ、エイミィが着てくれた。まだまだ仕事があつて始祖が詩いと頃の合間をぬってきてくれたのだ、感謝しなければいけないと思った。

「三人とも、本当に今回はありがとう」

「協力に感謝する」

「えへへ」

それぞれ握手を交わす。

「フェイトの処遇は決まり次第におつて連絡する。なあに、心配することはないさ。消して悪い様にはしない」

そう優しく言ってくれるクロノに感謝するのは。

「ユーノくんも、帰りたくなったら連絡してね?? アースラのゲートをいつでも使わせてあげるから」

リンディの言葉に、ユーノは感謝する。

「それじゃ」

名残惜しいがここまでのようだった。三人が手を振って見送ってくれた。そして光がハヤトたちを包み込んで、そしてアースラから鳴海市に戻るのだった。

ハヤトたちがアースラから転移してきた場所は、アースラに始めていったときの場所である鳴海臨海公園であった。

なのはは目をつぶり、今日までのこの公園で起きたことを思い出した。フェイトとの戦いの途中で現れたクロノと初めてであり、アースラに言ったこと。そして何よりフェイトと最初で最後の本気の勝負をした場所なのだから。

「そろそろ戻るぞ。家族が心配している」

そういうのはハヤトである。ハヤト自身、自分が戻る場所はもう無いと思っていた、しかし、今はこうして、月村邸という居候ではあるが、まるで家族のように接してくれる人たちがいる。だからこそ、そこが帰る場所なのかもしれないと思えるのだった。

「ただいま」

なのはは転送された鳴海公園からまっすぐに家に向かった。

「お帰りなさい、なのは」

「ただいま、お姉ちゃん」

「帰ってきたのか、なのは」

「お兄ちゃんただいま。あ、お父さん、ただいま」

「お帰り、なのは」

帰って元気よく挨拶すると最初に姉の美由紀が兄の恭也がそして父親の士郎がそれぞれで迎えてくれた。そして向こうから母親の桃子もやってきて笑顔で迎えてくれた。

「あら、なのはお帰り」

「ただいま、お母さん」

こうして、なのはの魔法とはかけ離れた平凡な毎日は戻ってきた。

学校においては久しぶりに通うことになった。学校に行くと久しぶりに会う親友の二人の姿があった。

「なのはちゃん」

「なのは」

「ただいま、すずかちゃん、アリサちゃん」

なのははこうして考えるとなんだか、一瞬の様な感じがするけど、この胸には、辛かったこと、必死だったことの他に、色々残っていることがあることを感じていた。

それでも今は戻ってきた平和な子の日常を楽しもうと決めたのだった。

それから平凡な日々が数日流れてある朝に突然なのはのケータイに、着信があった。誰からか見ると・・・時空間管理局からだった。さらにその相手は・・・。

「はい、高町なのはです」

「おはよう、なのは」

「おはよう、なのはちゃん」

クロノとエイミィからだった。

「おはようございます」

「フェイト達は正式に本局へ移動で、そこで事情聴取と裁判があるが、フェイト達は、ほぼ確実に無罪だ」

「本当!？」

「あれから、クロノ君ずっと、証拠集めをしていたからね」

「え、エイミー」

よかったとほっと胸をなでおろす。

「ありがとう、クロノ君」

「それだけじゃなくて」

クロノが尽力してくれたおかげだとなのはは感謝する。するとクロノがさらに話があるらしく、それを告げた……。

フェイトは今待っている。そう自分を助けるために何度もぶつかった子を……。

「フェイトちゃん」

その子が……やってきた。

なのはが待ち合わせ場所にいくとそこにはフェイト、アルフ、クロノがいた。プレシアの姿がないことからまだ病院に入院しているのだろうかと思った。

「僕とユーノとアルフは、向こうにいるよ」

クロノがそう言ってこの場から、離れた。どうやら二人きりにし

てくれたらしい。そんなさやかな心遣いにそつと感謝するのだった。

「フェイトちゃんに色々話したいことがあったのに、変だな、フェイトちゃんの顔をみたら、何を話したかったか忘れちゃった」

「私も、なんだか言葉にできないや」

なのはもフェイトもお互いが何を話そうかと色々考えていたが、面を向かった瞬間合えたことの嬉しさのあまり忘れてしまったようだ。

しかし、何かを話すことよりも・・・お互いにまた会えたことがとても嬉しかった。最初はジュエルシードをお互いに集めていたために敵として・・・しかし最後にはお互いに協力し合うこともできた。

話し合うことだけでは何もできなかった。だからお互いにぶつかり合った。しかしそれが結果的にお互いのことを分かり合えたことに繋がった。

「でもね、嬉しかった、私達に真っ直ぐ向き合ってくれて」

「私もフェイトちゃんと友達になりたいって、思ってたからでも、この後、お出掛けしちゃうんだよね」

「うん、少し長い旅になる」

お出かけ・・・それは長く長く・・・それでも短いお出かけ。フェイトにとってはとてつもなく長く感じるかもしれない。

「また、会えるよね」

「うん、少し悲しいけど、やっと始められるんだ、本当の私を。そして今日来てもらったのは、私が返事を伝えたいから」

返事と聞いて一体なんだろうかとなのは思う。

「君が、言っていた、友達になりたいって言っていたよね、その返事をしたんだ。でもね・・・私はどうしたら、友達になれるか、知らないんだ」

その時の、フェイトの顔は悲しそうだった。今までただ母親のために必死になってジュエルシードを集めるしかしてこなかったフェイト。そしてそれをできるくらいまで魔導師に成長するために必死で修行してきたフェイト。そんな彼女が友達がいるとはあまり思えなかった。だからなのは、友達になるための、簡単なことだけど、大切な事を教える。

「友達にはね・・・簡単だよ」

なのはは笑顔で言う。

「どうやるの？」

「なまえを呼んで」

なのはは疑問じみた表情のそれでも友達ができることで嬉しそうに表情をしているフェイトに言う。

「友達になりたい人の目を見てね・・・なまえを呼ぶんだよ。初めは、それだけでいいんだよ。私は高町なのは。なのはだよ」
「なのは」

フェイトが名前を呼んだら、なのはは、涙を流していた

「分かった事がある、友達が泣いてると、こっちまで悲しくなる」
「私達がまた会った時に、またなのはの名前を呼んでいいかな」
「もちろんだよ」

フェイトも涙を流していた

「また会ったら、なのはの名前を呼ぶから、なのはも、私の名前を呼んで」

しばらく泣きあっているとやはりやってくる分かれの時間。どれだけ待ってくれとイッタも決して時間は待ってくれない。

時とは時に残酷なものである。それでもまた会える。そうお互いに伝え合うことができた。それなら心配は要らない、しばらくの間の分かれである。だから二人は思えた大丈夫、また会える。

「すまない、時間だ」

クロノがゆっくりと話しかけてきた。やはり彼も少しでも長く二人に話をさせてあげたかったのだろう。それでも彼は管理局員である。これ以上は引き伸ばせない。

「うん」

「フェイトちゃん」

なのはは自分の髪をむすんでいた、ピンクのリボンをフェイトに手渡した。それは自分がそばにいつでもいるという思いを込めたのことだった。

「こんなものしかなくて」

「なら私も」

フェイトも、自分の髪をむすんでいた黒いリボンをなのはに渡した。彼女もまた、いつでもそばにいたいということを込めて。ふたりは交換をした、また会う証として……。

「はい、これ」

ユーノをなのはの肩に乗せた。

「アルフさんも元気で」

「なのは達も、元気でね」

別れの時が来た。転送準備に入ったようだ。

「じゃあね、クロノ君、フェイトちゃん、アルフさん」

その時、フェイトちゃんが手を振ってくれて、なのはも手を振った。そして光が広がり、フェイト達は、いなくなっていた。

「なのは……帰ろう」

「うん」

それから、なのは達は普通の日々を過ごしてく、前と違うのは、魔法のことと、なのはの髪をむすんでる黒いリボンだけだった。

きっとまた会える、それが叶うのはもう少し後になってからだっ
た……。

（完）

PHASE 108 出会いありて、別れあり 下（後書き）

読んでくださった皆様。本当にありがとうございました。これにて魔道新世紀リリカルガンダムのカンドステージが終了します。

やや、なのはが主人公として活躍したところが多かったですが、それでもこの作品での主人公「ハヤト」を今回はサポートという形で活躍させられたと思ってます。もちろん、表舞台にて自身も戦うというところで主人公らしさは出せたのではないかと思います。

最後にご感想をいただければうれしいです。そして、次のサードステージ『闇に染まりし魔道書編』もお楽しみに。次回はやや主人公チートなどところが出るかもしれませんが、お楽しみいただければうれしいです。

それではまた。

PHASE 109 始まりの夜

とある少女は家の下に行く、理由は電話が来たからだ。しかし、下に行っても電話には出られなかった。少女が行くのが遅くて、電話がメッセージを記録していた。なぜ、そんなに遅いのか理由は簡単・・・彼女の足が悪く、車イスだからだ・・・。

メッセージの内容は、少女の足の治療で行っている病院の主治医の先生が明日、彼女が誕生日だから、治療のあと、どこか行こうという内容だった。そう今日は6月3日・・・明日は少女の誕生日だ。

しかし、祝ってくれる家族はいなく、今は、親の知り合いの人の仕送りで生活していた。メッセージを聞き終わって、少女は上に戻り、ベットに横になって本を読んだ。

どれくらいの時間がたっただろうか・・・少女が気づくと、もう11時59分・・・あと1分で私の誕生日になる。たった一人の寂しい誕生日。

11110、9、8、7、6、5、4、3、2、1、12時になった・・・。

時計がとうとう重なり合う時間となる。

「ハッピーバースデー・・・はやて」

一人そう呟くと突然、少女の机の上にあった、本が怪しく光はじめた。その光は彼女に幸福を齎すのか・・・それとも更なる不幸を齎すのか・・・。

物語は始まる、悲しみに染まった一冊の魔道書が見せる優しい（
かなしい）夢。それを変えられるのは一体何者だろうか。

PHASE 109 始まりの夜（後書き）

お久しぶりです。

実家に帰っていましたので、しばらく投降できませんでした。

手直しをくわえるなど、サードステージも楽しんでもらえればうれしいです。

たくさん感想と、アドバイスなどありがとうございました。

今後とも、泉海斗をよろしくお願いします。

PHASE 110 平和なひと時

12月を前にしてやや肌寒さを感じさせている。これから本格的に寒くなるだろうこの季節・・・海鳴市のある公園。

少女高町なのはは鳴海公園にて魔法の連中に明け暮れていた。そんな魔導師の彼女だが、少し前までは平凡な小学3年生だった。

しかし、とある事が切っ掛けで、魔法を使えるようになってしまった。そしてそこからある事件があり今は、遠くにいるけど友達も出来た。

その事件も無事に解決し、今は平凡に戻ってしまったが魔法の練習は続けていた。彼女のデバイスは、なのはに魔法を教えたユーノ・スクライアからもらったレイジングハートである。

そして、今はデバイスを起動させずに、魔法を使う練習をしている。現在はこうして自主練しかできないが、自分にもとりえができたということが嬉しく、将来は管理局に入局してたくさんの人を助けたいと思ったりもしていた。

事実彼女には魔導師としての資質があり、すぐにでも引き抜きたいとも言われるほどだった。しかしとある人物がそんなことは絶対にだめだということでそれはうやむやになったのだ。

確かにまだ義務教育も終わっておらず、色々と学校やプライベートのことも忙しいこともあった。それでも彼女はあきらめられないものだった。

せっかくできた自分のとりえ・・・それを話したくなかったのだ。彼女にとって魔法とはさまざまなことを教えてくれたり、つながりを深めたり、新しい友達を齎してくれた。

「それじゃあ今日の練習の最後に、シュートコントロールをやる。レイジングハートも、それでいい？」

『問題ありません』

「じゃいくよ。リリカルマジカル、福音たる輝き、この手に来たれ、導きのもと、鳴り響け」

なのははディバインシューターを1個出した。そして、缶を上に向けて・・・。

「ディバインシューター、シュート」

この練習は、デバイスなしで操作魔法を使用し、上に上げた缶を落とさずに、100回連続で当てる、練習であり、けっこうきつい。

しかし、このような地道な基礎訓練を行うことで彼女は魔力弾の精密なコントロールを身に付けようとしていた。いくら強力なものを作ろうと。いくら早いものを作ろうと、魔導師自身がそれをコントロールできなければまったく意味を成さない。

とある人物の場合は正確な射撃と共にその砲撃は直線であっても早いためにはなかなか交わすのは難しい。所謂質量兵器における弾丸のようなものだ。

『96、97、98、99、100』

レイジングハートが終わりを告げてくれた。なのはは最後に缶を

ゴミ箱の中に入れようとした。

「フィニッシュ」

しかし、残念ながら今回はゴミ箱の淵に当たって地面に落ちてしまった。仕方ないとなのは拾って捨てた。

「レイジングハート今日の私は何点？」

「約80点です」

「そっか……。もっと練習して頑張らないと」

『その意気ですマスター』

なのはは決意を新たにし、レイジングハートはそんななのはを支えたと誓うのだった。

高町家にてなのはは学校のその準備を済ませて、今は、朝食の準備を手伝っていた。

すると玄関から戻ってきた兄の恭也がなのはに何かを渡した。

「なのは郵便が届いてるぞ」

「本当!!」

「海外郵便、差出人は、フェイト・テストロッサだっさ」

「ありがとう、お兄ちゃん」

なのはは恭也からその郵便の品を受け取りながら礼を言う。フェイト・テストロッサ……。なのはが魔導師になったきっかけでもあるジュエルシードをお互いに競い合って集めた。

なのはここにはいないがユーノのために、そして鳴海市が危険にさらされないようにするためだった。そしてフェイトは自分の母親であるプレシアのために集めていたのだ。

プレシアは数年前に亡くなっていた愛娘を蘇生させるために伝説ともいわれるアルハザードへと行くためにジュエルシードを集めさせた。

そしてフェイトを母親として捨て、そのまま虚数空間へと落ちていくはずだった……。しかし、そんな運命を変えてのはなのはと同じくその事件に関わったハヤト・ブリッグスであった。

彼は魔導師とは違う魔道戦士……。魔力がないためにデバイスは使えないがその代わりにモビルスーツというなのはからすればロボットアニメを見ている感じだったが実際それはロボットなのだろう。

しかし、彼が使っていたのは魔法とは違う不思議な力。制限も多いがそれでも魔導師と同等の……。否それ以上の力を持っているのだろうかと思った。

何故そのようなものが生まれたのか……。小さくとも人が少ないからではないかと思った。なら自分も少しは力に慣れるのではないか……。

そんな小さな正義感が……。彼女の心に生まれていた。

「また、ビデオメール??」

「うん、きつとそう」

姉の美由希がなのはとその郵便物を見比べながら言う。

「もう半年以上も続いてるな」

父親の士郎もなのはに新しく仲のいい友達がそれも外国出身のこ
とできたことがうれしいらしい。

「フェイトちゃんたち今度遊びに来てくれるのよね」

「家に来たら、うんつと歓迎しちゃう」

母親の桃子もなのはが友達を作ったことが嬉しいらしく、フェイ
トをいつか歓迎したいという。

「ユーノも本当の飼い主が見つかってと言うか、忙しいからね、め
つきり寂しいしね」

「にやはは、お姉ちゃんユーノのこと可愛がってたもんね」

「また変身してくれるかもしれない」

高町家に以前はいたフェレットモードのユーノであるが、一度ス
クライア一族に戻るというのだった。

そのために一時ここを離れなければいけなかったのだ。美由紀に
とっては可愛がっていたユーノがいなくなってしまったことに少々
落ち込んでいるようだ。

彼のことをフェレットとして大変かわいがっていたのは美由希で
あるために、今度来たときにはフェレットになって貰おうと小さな
企みを立てていた。そうすればどうなるか、ユーノには申し訳ない
が、姉にとってはうれしいだろうとなのは苦笑いをしながらもそし
て思われるのはフェイト、アルフ、クロノ、エイミィ、リンディ、

ユーノのことだった・・・。

同刻アースラのブリッジでは・・・。

「管理局本局へのドッキング準備完了です」

「予定は順調、いいことね」

「失礼します、艦長、お茶のおかわりいかがですか??」

ようやくの長い遠征が終わり一息つけるだろうと思っていたが、如何せん、これからが本当の戦いなのだ。何しろ今回のロストロギア事件は簡単に済まされるような代物ではないからだった。

ジュエルシード・・・安易に扱ってしまえば世界の1つは簡単に吹き飛ばしてしまう危険なものだった。今回はそんなことが起きなかったがもし起きたら歴史の繰り返しになるところだったのだから。

「ありがとうエイミィ、いただくわ」

エイミィがお茶を注いでくれる。

「本局とドッキングしたら、やっとアースラも私達も一休みできるわ」

「ですね」

リンディはお茶に砂糖を6個入れて、ミルクを注いだ。それを見たクルーたちはずっと目線をそらす。何故あんな甘いものを吞めるのだろうかとは皆はリンディの特殊な味覚に疑問を持った。

しかし、彼女にしてみればこれが普通なのだから不思議でしょう

がない。

「子供達は？」

子供たちというのは今回の事件にかかわり、裁判に出る予定であるフェイトとアルフのことだった。

「今は休憩を？？」

「さっきまで、クロノ君&ユーノ君VSフェイトちゃんをやっていたんです」

「そう、明日は裁判の最終日なのに、マイペースね」

リンディはお茶の付け合わせの羊羹をエイミィにすすめる。

「はい」

エイミィはそれを受け取って一口口へと運ぶ。

「まあ、勝利確定の裁判ですからね。それにしてもスザクさんが突然出発するといったときはびっくりしましたよ。モバイルスーツって次元空間も移動できるんですね」

「まったく便利なものが生まれたものよ。でもそのおかげで管理局も少しずつだけ変わりはじめてるわ。」

アースラの食堂ではクロノとフェイト、アルフが裁判における最終チェックを行っていた。今回は完全に勝利できるものなのだが万が一のこともあったら元も子もないということで確認を行っていたのだ。

「じゃあ、最終確認をするぞ。まずフェイトは、裁判長に内容どおり答えること」

「うん」

「アルフも今日は被告人席に入ってもらおうよ」

「わかった」

さすがに何度も打ち合わせなどをしていてのために落ち着いて対処している。フェイトたちにとって今回の裁判は勝ちが決まっているのだが取りこぼしをしまえばせっかく頑張ってくれたクロノたちに申し訳が立たないと思っていた。なくなってしまったプレシアの遺体はすでに納棺されているようで、これが終わってから時間をとって火葬をしようということになっていた。あの後もずっと泣いていたフェイトであるが、ようやく分かった母の気持ちを胸に、またがんばろうと新たに踏み出そうとしていた。アルフもまた、主であるフェイトが傷つくことがなかったことに喜んでいた。

「僕とそのフェレットもどきは証人席へ。質問の解答はそこにあるとおり」

「分かったって、おい！！誰がフェレットもどきだ誰が」

ユーノが自分をフェレットモドキといったクロノに心外だといわんばかりに憤慨して言う。

「君だが何か？？」

しかし、言ったクロノはどこ吹く風といわんばかりにユーノの怒りの矛先をかわす。

「た、確かに動物形態でいた事は多かったけど、僕にはユーノ・スクライアっていうちゃんとした名前が・・・」

「まあ、ユーノ」

「クロノ、あんまりユーノをいじめちゃダメだよ」

「大丈夫、場を和ませる、かるいジョークだ。そんなことよりも事実上、無罪数年間の保護観察は確定だが、受け答えははっきりと」

「はい」

「ちよと話をそらすなよ・・・ってわかったよ」

まったく相手にされなかったためにしぶしぶユーノはそれに従うのだった。

アースラのブリッジではリンディの元に連絡が入る。

＜お疲れ様、リンディ提督、そちらは順調？＞

「ええ、レティ、そっちは問題ない？」

＜ええ、ドッキング受け入れと、アースラ整備の準備はね＞

しかし次にリンディの元に再び事件の情報が流れてきたのだ。

クロノは艦長・・・つまり母親のリンディに話があってブリッジにくるとようにと通信していた。

＜こっちでは、あんまりうれしくない事が起きてるのよ・・・＞

「うれしくない事？？」

レティの表情が優れないということでは何か大変なことでも起きているのかと思った。

＜ロストログアよ、一級搜索指定されてる、超危険物・・・いくか

の世界で痕跡が発見されて、捜索班は、大騒ぎよ>

「そう」

<捜査員を派遣して、今は、その子達の報告待ちね>

「そっか・・・」

リンディは何か底知れぬ不安を感じていた・・・。

PHASE 110 平和なひと時 (後書き)

いよいよ物語が始動します。

PHASE 111 動き出す影

ここはとある執務室。やや年をとっているがそれでも何か強い意志を持つ男性と猫耳と尻尾のある2人の少女・・・おそらく使い魔であろうがいた。

「お父様・・・とうとうあれが発動してしまいました」

少女の一人が言う。それを聞くお父様と呼ばれた男性はそうかと弱弱しく呟くだけだ。あれというものは相当彼にとっては因縁深いものらしい。

「それでお父様、手はずどおりにことを進めるのでありますか??」
「そうだな。なんとしてでもあれを封印しなければ・・・」

私の気持ちが治まらない・・・そう続けた。彼女たちから見て、お父様と慕う主はともではないが見ていられないほどに疲れていた。

あの時から彼の時間はもしかしたら止まってしまったのかもしれない。そして勝手な逆恨みかもしれないそれをただ晴らすことでしかその止まった時間を動かすことができないのではないかと思った。

すると突然ドアがノックされたために少女の一人が戸をあけた。すると中にはパイロットスーツのようなものを着た三人の男女が現れたのだ。

「失礼する」

「しゃゝす」

「しっつれい♪」

なんとも個性的な三人の男女が現れる。

「何だよ後の二人の態度!!」

少女の一人があまりの無礼な態度に憤慨する。

「すまない。弟と妹が失礼した」

1番まじめそうで感情の変化が少ない男が言う。

「え??? 弟??? 妹???」

少女が疑問をこぼす。よく見ると確かに似ているようで似ていない。

「はい。私が一番上の兄アインです」

「俺がツヴァイだ。すっかりしまじで猫耳尻尾の奴がいるとはな」

「かゝわいい。あ、私が一番下のドライよ」

それぞれ自己紹介をした。

「遠いところをわざわざすまないな。私が依頼主のギル・グレアムだ」

「私はリーゼ・アリア」

「私がリーゼ・ロツテ」

同じく自己紹介をする。

「それで今回は私たちにどんな以来を??」

アインがグレアムに質問する。ここに来たら話すというくらいなので、相当なものなのだろうと思っていた。

「それはだなどある魔道書が発動してしまい、それを最終的には封印したいのだ」

「ふむ、その魔道書とは一体??」

「闇の書だ」

「「!!」」

グレアムの言うその魔道書の名を聞いた瞬間にトリニティの三人は目を見開いた。

「おいおいそれはまじかよ。しゃれになんないぜ」

「以前私が直接かわったときには仲間を犠牲にしてアルカンシエルを使用したのだが・・・」

「吹っ飛ばしたけどまた再生されちゃったってことでしょ??」

グレアムが沈痛な面持ちで言う言葉をネーナが気楽な口調でつなげる。それに対してグレアムたち三人は少しむっとしかめっ面をする。

「こら、ドライ。それで、その闇の書を最終的に封印といいました。がそれまで我々は待機ですか??」

「いや、あれには守護騎士たちもいるが彼女たちだけでは対処できない場合もあるだろうし、邪魔が入るかもしれない」

「なぐるほどね、俺達はそいつらに降りかかるひのこを払えばいいってことだな??」

「ああ」

ツヴァイの言葉にグレアムは頷く。

「了解した。ギル・グレアム。その案件、承諾した」

「ありがとう、報酬は後で送っておく」

「さんきゅ」

「やった〜♪」

まじめにことを話すアインと、かなりの額が振り込まれることに喜ぶツヴァイとドライだった。

彼らの正体は一体何者なのだろうか・・・。

PHASE 111 動き出す影（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 112 小さな出会い

風芽丘図書館の前で車から降りたのは月村すずかだった。彼女は図書館で読みたい本を借りようと友達と途中で別れてきたのだ

「じゃあまた明日ね」

「バイバイ」

「じゃあね」

彼女はアリサの家の車から降りた、理由は図書館に用があるからだった。図書館内ではたくさんの人が静かに読書にふけている。すずかは本棚にある読みたいを探していると本の隙間から必死に本を取ろうとしていた子がいた。

それを見た彼女は助けに行った。助けに行くと、本を取ろうとしていたのは女の子で車イスだった。危ないと思ったすずかは女の子が取ろうとした本を取り手渡した。

「コレですか??」

「はい。ありがとうございます」

それから彼女と話し込んでいると意外と馬が合った

「そっか同い年なんだ」

「時々見かけていたんよ、あ、同い年くらいの子やって」

「実は私もなんだ。えっと、私月村すずか」

「すずかちゃん、八神はやてっていいいます」

「はやてちゃん」

「平仮名ではやて、変な名前やろ」

「そんな事ない、きれいな名前だと思うよ」

「ありがとう」

「それに、私の友達にも、名前が平仮名の子はいるし」

しばらく話し込んでいたすずかとはやて。すずかははやてと一緒にきていた彼女の家族のいる所まで車イスを押した。

「ありがとうございます」

「ありがとう、すずかちゃん、ここでええよ」

すずかがその家族と思われる人にはやてと車椅子を預ける。その女性はずずかにお礼を言う。

「それじゃあ」

「お話してくれて、おおきに、ありがとうな」

「うん、またねはやてちゃん」

はやてはすずかと喋ることができうれしかった。初めて友達という存在ができたのだから当然だった。

「はやてちゃん、寒くないですか？」

はやての乗っている車椅子を押す女性が彼女を気遣う。

「うん、平気。シャルも寒ない？」

はやてはシャルという金髪の女性を気遣う。

「私は全然」

シャル大丈夫だということを伝える。はやてとシャルという女性が歩いていると駐車場ではもう一人の女性が待っていた。

「シグナム」

「はい」

「シグナムとシャルは、晩ご飯何食べたい？」
「そうですね、悩みます」

シグナムというピンク色の髪を腰まで伸ばし、それをポニーテールにしている女性ははやてからの質問に律儀に手を口に当てながらうんうんと唸りつつ考える。

「スーパーで、食品を見ながら決めましょうか」

はやての作る料理は彼女たちにとっても楽しみであり、とてもおいしいということは何を食べたいかと聞かれても迷うのだ。

「そやね。そういえば、ヴィータは、またお出かけなんか??」

「そうですね」

「外で遊び歩いています、ザフィーラが傍にいますからあまり心配はいらないと思います」

「どうやらここにはいないもう二人の家族がいるらしい。なんとも笑顔が耐えない家族に見える。」

「なら、早めに買い物済まそうな、あの子無口やから、わからへんけど、1人で寂しいかもしれへんしね」

「はい、我が主」

PHASE 112 小さな出会い（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 113 突然の襲撃 上

とある日のことだった。いつものように仕事に出かけていたハヤトは以前のようにまた、昼食を忘れたと言うことで弁当か何かを買いに商店街へと足を運んでいた。

コンビニに入り、適当に手軽なものを手にとって飲み物と共に購入する。栄養が偏るのを避けるためと言うことで購入されたのは某バランス栄養食品のフルーツ味であった。

彼女たちに知られれば文句を言われるかもしれないが、最低限の空腹を紛らわせ、栄養を取ればいいと思っていた。

「ありがとうございました」

定員から元気な挨拶を受けて、袋を片手にもと来た道を歩いていった。しばらく歩いていると、こんな真昼間から、それに平和なこの空間においては似つかわない視線と言うものを感じていた。

「付けられているのか・・・??」

周りの雰囲気敏感になるようにして、神経を研ぎ澄ます。すると周りの空気を通して感じられるのはまるでとぎませたさっきの刃で切りつけられるような感触であった。ひりひりと痛む肌。それが実体であつたら切り傷だらけであろう。

「――こんな殺気を出せるものがあるのか・・・??」

ハヤト自身が知っている人物たちでも数少ない。今世界に来てか

ら感じる事ができたのは高町なのは父親である高町士郎となのはの兄の恭也くらいであろうか。

恭也とは違い、どちらかと言うと士郎と似ているその感じ。それの差は、死の境目を通ってきたかどうかと言うものであった。

この鳴海市にそんなことをしてきたものがあるとは知らなかったと、この町は少々異常なのではないかとも感じていた。

すると突然後ろから声をかけられた。はきはきとした、明るい声。やや関西弁の訛りの入った少女の声であった。

「あ、ハヤトさんや」

「ん??」

声が聞こえたので、振り向く。そこには以前会った少女があのと、きのように車椅子に乗ってこちらを見上げる形で見ていた。

「八神はやて」

「お久しぶりやな。あの後はちゃんとご飯食べてますか??ちゃんと栄養とらんと、体調に悪いで」

そこには関西弁で元気に放しかけてくれる少女・・・八神はやての姿があった。彼女とは、以前チンピラに因縁をつけられていたところを助けたことで知り合っていた。

あれ以降は会うこともなく、やや記憶から薄れてきていた人物であったが、今日こうしてまた会ったことで、思い出した。

しかし、そこにははやて以外の姿もあった。ピンク色の髪をポニ

―テールにした凜とした女性の姿が会ったのだ。彼女は疾風の乗っている車椅子を押しているらしい。それにしても以前はいなかった彼女。それに、あの時家にお邪魔したときもいなかった。

―――親戚だろうか・・・??

そう思いながらも、ハヤトは目を細めながら、そんな謎の女性を見る。女性のほうも、睨みつけるようにして、ハヤトの事を見ている。

―――いや・・・、八神はやては日本人だ。そしてこの女性は明らかに日本人離れしている。親戚と言うのもあるかもしれないが、どうして今になって・・・??

ハヤトがそう感想を持つのは当然のことだった。目の前にいるはやてと言う少女は、この世界においてはありえない家庭環境におかれていたのだ。

身元引受人からは毎月必要以上に金銭が送られてくるだけで、彼女は彼に会ったことはないと言うのだ。まったく育児放棄もいいところであると思ったハヤト。そう思っていたが彼一人ですることとできず、更にはなのはたちとのジュエルシードの回収があるなどという多忙で、それどころではなかった。

そして忘れていたところにまた出会った彼女のそばには見知らぬ女性が一人居たのだと言うことだ。

「ああ、久しぶりだな」

そう言うのと、少しは表情を付けたほうがええでとアドバイスをもらってしまう。内心そうしたほうがいいのかと思うが、どうしたらいいのか分からないと言うのが現状だ。感情に乏しき彼が、ようやく自覚し始めたのが余りにも遅かったのが原因である。

それでも以前よりも近づきがたい雰囲気が消えたのは確かである。

「ところで、八神はやて」

「はやてでええのに、まあ、ええんやけど、なんや?? ハヤトさん」
「その女性は?? 以前は見ない顔だが・・・」

ちらりと視線をはやてから後ろにいる女性に向ける。おそらく横を通り過ぎる男性が1

0人中10人振り返るだろうと思うような美しい容姿をしている。

「そやった、まだ紹介してないんやったな。私の親戚のシグナムや」
「シグナムだ、以前は主はやてを助けてくれたと聞く。それについて、お礼を言わせてくれ」

「気にするな。それと俺はハヤト・ブリッグス・・・」

自己紹介をしないのは失礼だと思い、ハヤトも名前を言う。対するシグナムからはやてを助けてくれたことについて、かなり日がたっていたが、それでも礼を言わせてくれと言うことで、受け取ることにした。

「ところで、お前は外国かどこか出身なのか??」

「ま、まあ、そんなところだ」

表情は変わらないが、内心どきりとしたシグナム。目の前に立つハヤトの発する雰囲気からして、只者ではないと言うことは感じ取

っていた。先ほども、ふと周りの人とは浮いていると言うわけではないが、雰囲気が一だけ異質だと言うことで、危険かもしれないと言うことでやや敵意のこもった目で監視していたのだ。たまたま二人が向かう方向に歩いていたので、都合が良かったが、できれば主であるはやてから離れてほしいと言うように思っていた。

「ハヤトさんはまた昼食の買い物なんか?？」

「ああ、また以前と同じく忘れてきてしまったからな」

ちらりと中に入っているのが某携帯栄養食品であることを見て、あきれたような視線を向ける。そうされても、自分はこれで十分だと、言っておいた。

「お前のほうはどうなんだ?？八神はやて」

「私はちよっと散歩や。な、シグナム」

「はい、今日は比較的天気がよろしいので」

はやてに話を振られても、彼女は落ち着いた様子でそれに答える。雰囲気からして、姉妹などの関係よりも、主従に近いように感じられた。それも、はやてに仕えるシグナムというように、ハヤトはそう感じていた。

「あの時お邪魔したときはいなかったが・・・」

「あ、あの時は・・・」

「色々都合があって、来るのが遅れたのだ」

そういうことにおこうと思った。これ以上、余り深く詮索するのは彼女たちのプライバシーの領域に踏み入ってしまうと言うことだった。しかし、明らかに異質だった。突然現れたと言う親戚、そして明らかに日本人離れたその容姿。そしてはやてをまるでハ

ヤトのことから守ろうとしているように感じられるその視線。

これ以上ここにいたとしても、更に警戒心を強められるだけかもしれないと思ったために、仕事があるということとで分かれることにした。もう少し話をしたかったと彼女は言っていたが、後ろに立つシグナムという女性から発せられる殺気が周りにも影響しているのか、先ほどからこちらを向く人たちはすぐに視線を逸らして通り過ぎていく。ちゃらちゃらした男性たちもまた、近づこうとしていたのをあきらめて退散していくのが見えた。

「ほな、また今度」

「ああ、また今度・・・」

今度は彼女がいないときならもう少し話ができると思うが、おそらくはそうはならないだろうとなんとなくだが、そう思った。

シグナムは八神はやての守護騎士として、闇の書から召喚された魔法生命体である。見た目は人間のそれと同じであるが、構成しているのは純粹までの魔力であった。そんな彼女だけではなく、ここにはいないが他にも三人の守護騎士が召喚されていた。それぞれは自分たちの思い思いの一日を過ごしていると言うことで、ここにはいなかった。

――とはいえ・・・。

そう心の中でつぶやいているシグナム。彼女と主であるはやてが見ている先を歩いていく男性に対して、彼女は明らかな危険を感じていた。それと同時に莫大なまでの魔力も探知していた。

しかし、それは自分たちの母体とも言える闇の書のようにロストロギア独特の雰囲気ではなく、それに近いことは近いのであるが、純粋なまでの暖かさに包まれたそんな感じがしていた。

――なぜあの男からそんな反応が・・・??

もしかすると、ハヤトがロストロギアに順ずる何かを所持しているのかもしれないとシグナムは思っていた。

そうなれば、最悪の場合、ハヤトから主であるはやてから禁じられている本来の彼女たち守護騎士の役割である行動を移すだけだ。

しかし、格好の標的であると同時に、最も危険視しなければいけないと感じていた。それを感じさせる雰囲気とともに、自身の観察する視線を感じ取っていたその鍛えられた五感、そして殺気に耐えるその強さがあったからだ。

おそらく彼女でなくとも、他の守護騎士であれば多少の差はあれども危険性を察知していただろう。微妙な魔力の残量も空気にまぎれて流れていることは、この土地にも魔道師がいると言うことであった。

――行動に、そろそろ移るべきだろうか・・・。

ちらりと自身の前に車椅子に乗りながらも、けなげに笑顔を振りまいている少女・・・主である八神はやてを見ながらそう思う。

彼女に対してじわりじわりと迫る影が見えていた。彼女のような主は記憶をたどってみてもいない。二度とないだろう、この平穏な

日常を壊さないためにも、彼女と、ここにはいない守護騎士たちは誓うのだった。

そして、その日は意外にも早かった・・・。

とある日の夜。

ハヤトはいつものように、夜の鍛錬と言うことで、スポーツジャージ（ファリン作）を着て鳴海の町を走っていた。

モビルスーツでの戦いのほかにも、生身の戦いにも慣れておかなければいけなかったのだ。それに体力は長時間の戦闘にも必須である。軍人時代から欠かさぬそれが、ハヤトの下積みとなっていた。

もちろんのこと、エクシアの気状態であるネックレスは首から下げられている。極力どうかしたジュエルシードの反応が出ないよう加工されているが、それでもまだ完全ではない。もう少しすれば、完全に同化、その反応は消えるはずなのだが。

そんな風にして、まだ真夜中の鳴海の道を走っていた。やや肌寒くなっているが、まだまだ冬ではないのは回りの景色を見れば分かる。

そんな風邪がほほをなでる。

「っー！」

不意に肌を切るような感覚が走る。思わず立ち止まり、手をかざ

してみても、そこには傷はない。しかし確実に薄く刃が触れたようなそんな研ぎ澄ませた痛みが走ったのだ。

――何かがある……。

そう思わせるのは鍛えられた感覚と今までの経験だ。

いつでも動けるように身構え、最悪はエクシアを使うだろうと、準備させていた。そのときだった。突然どこからともなく強大な力、胸がわしずかみにされると思われるような圧迫感を感じた。

とっさにその場から前方に飛び出すことで、先ほどまで自分の立っていたところに大きな質量がたたきつけられたのを回避することに成功する。

「置、奇襲は失敗か……」

土煙の奥に見えるはおさげの紅色の髪をツインテールにしている少女の姿であった。しかし、その少女の姿にはまったく合わない、鉄槌を地面にたたきつけており、そこは大きく陥没していた。

それに驚いていたのが悪かったのか、珍しく隙を作ってしまう。それに対して、上空から突然普通の人間のようには見えない、獣の耳と尻尾を持った筋骨隆々な男性が突然こぶしを振り上げてハヤトに対して攻撃してきたのだ。

「ぐ!?!」

「む!?!」

早とは腕をクロスさせてその獣人のこぶしを受け止める。依然彼

の共感であった男性もまた筋骨流リュウな人物であったが、そのとき受けたものと同等、否それ以上の威力があった。骨が碎ける思いであったが、なんとか後ろに飛ぶことで威力を軽減させる。

獣人もコンマの時間でそれをされたのに驚いていた。後ろに地面をすべるようにして後退するハヤト。その少女と獣人をにらむがすぐに背中から迫る何かに感づき、慌てて横に避ける、しかし、胸の辺りに何か違和感を感じた。

「な！？これは・・・」

自身の胸から得体の知れない誰かの手が生えていたのだ。いつもはクールなハヤトであっても、さすがに戸惑いを隠せない。しかし、その手にも変化があり、何かを探しているようであるが、その目当てのものがいないのか慌てているようだ、どこからか女性の泣きが入った声が聞こえてきた。しかし、そんなことの前に、この手をなんとかしなければと思い、まだ慌てているその手をへし折らんと握り締める。

「きゃあああああ！！」

苦痛に苦しむ声。まさにへし折らんとする力で握り締めたのだから当然である。更に細い指だと言うことから、その手が女性のものであることが分かった。その女性の仲間なのだろう目の前の少女と獣人の表情が見る見る怒りに染まっていく。そして、また別の仲間が現れたようにして、背中に対して何かが振り下ろされそうになった。

しかし、そのつかんでいた手を離すと、その手はすぐに引っ込み、消える。それと同時に危険と感じて横に可否するとその背中があっ

たところに対して剣が振り下ろされたのだ。啞然としつつも、カウンターとして回し蹴りを放つも、相手は魔道師なのだろう。何か障壁に防がれた。

「く・・・」

歯噛みしながらも後退するが、いつの間にか現れて痛もう一人の人影を合わせて4人の謎のものたちに取り囲まれていた。

「おい、シャル、大丈夫なのかよ??」

「ちよっと痛いけど、大丈夫よ、ヴィータちゃん」

赤毛の少女はヴィータ、そして金髪の女性はシャルというらしい。そして獣人がハヤトの後ろに立つ。

「どうした?? リンカーコアの蒐集を失敗するとは珍しい」

「そ、それがね・・・ザフィーラ」

シャルが戸惑いながら言う。どうやらその獣人の男性はザフィーラと言うらしい。こちらをにらみつけながら、まるで観察するようになっているのが分かる。

「その人に、リンカーコアがなかったのよ!??」

「「な!??」」

「・・・」

シャルが言うリンカーコアは魔道師の生命線とも言えるものである。空気中の魔力素を実際に魔力に変換する器官でもあるそれ。

事実それがなければ人は魔法を行使することができない。そして

シャルが言うように、ハヤトにそのリンカーコアがないというのは当然である。ハヤト自身魔道師ではないからである。

そして、早とのまさに数メートルしか離れていない前方に立つのは女性であった。しかし、その女性のシルエットはどこかで見たことがあった。

すると後ろに立つヴィータと言う少女がその前方の女性に対して何か文句を言っている。

「おい、シグナム。こいつから魔力が感じられるからって聞いたから来たのに持ってねえじゃないかよ」

「な・・・、シグナム、だと?？」

「こんなところで、また会うとは、お前も不運だな。あのときからうすうす気づいていたが、やはり警戒しておいて正解だった」

シグナムはヴィータに対して、ハヤトはロストログアを持っていると言う。確かにロストログアと同化したGNドライブを持っている。しかし、すでにジュエルシードは同化してしまい、原形をとどめていない。おそらく魔力と言う結晶体ではないだろう。微量に付着していた高密度の魔力の欠片からの反応から追ってきたのだろうと思う。

それでもハヤトにとって目の前にいるのが、つい最近あったばかりのシグナムという女性だと言うことならば、内心焦らないわけなかった。顔に出さないのは鍛錬のおかげであろうか。

警戒しておいて正解だった。つまりは以前から何かしらの行動をとるために、マークされていたのだと理解する。そして彼女たちの目的は、魔道師の生命線であるリンカーコアであることが分かる。

――一体何をしようと・・・??

リンカーコアを・・・蒐集して、一体何をしたいのか、余りの情報が少なすぎるためにまったく分からない。それはそうとして、以前早との不利な状況には変わらなかった。先ほど女性の手をひねりつぶそうとしたが、寸でのところでかわされてしまった。

それぞれ武器を構えている様子が見える。どうやら見逃してくれそうにはないらしい。穏便に終わらせたいと言うことで口を開く。

「まずは聞きたい、お前たちは一体何が目的だ?? なぜリンカーコアを求める??」

ハヤトの質問に答えたのはヴィータと言う少女である。しかし、彼女の口からは到底答えとはいえないものが飛び出す。

「誰が敵に教えるか!!」

敵……。いきなり現れて、一方的に敵と言うカテゴリーに分けられる。

「待て!! 俺は戦う気などない!!」

やりすぎたかもしれないが、先ほどの正当防衛のはずだ。しかし、彼女にしては、仲間がやられそうになったのを見て、ハヤトのことを自分たちに危害を加える敵だと思っただけらしい。

「シャマルに怪我させておいて、今更そういうのかよ!!」

そういつて鉄槌を振りかぶってきた。後ろに下がろうにも、剣を構えるシグナムの姿があり、更には周りの景色が変わっていることから、結界を張られたと思う。更には獣人もそれに続くようにしてこぶしを構えている。そこまでしなければいけないくらい、自分は警戒されていたのだと、少々まずい状況に歯噛みする。

だからと言って負ける気はない。簡単にやられるわけにはいかず、更にはこのGNドライブを奪われるのもごめんこうむると言うものだ。

そのために首からかけられているネックレスを握り締める。そして呼ぶ、ハヤト自身の剣を。

――来い、エクシア!!

その瞬間に振り下ろされる鉄槌。

「うおおおおお!!」

彼女とて完全につぶす木はなく、ただ気絶させる程度でとどめて、魔力を収集してやろうと思っていた。しかし、彼女の鉄槌とハヤトの間に何かが現れ、その鉄槌を防ぐ。それとぶつかることで激しい金属音が耳を劈く。

「な!？」

一体なんだと重いながらも目の前のはやとを見る。すると次々にバリアジャケットや時運たちのような騎士甲冑とは違うまさに全身を覆い尽くす機械が体を覆っていくではないか。最後に顔を隠すと、三対の翼を持ったモビルスーツ・・・エクシアが現れる。

それは自分たちが今まで見てきたものとは明らかに異質。長い年月で重ねられた経験と言うものが、全身に対して危険であると伝えていた。

しかし、彼女たちには下がれない理由があった。そのため、一瞬金縛りにあっていて鏢迫り合いのところから一気に力を込める。

「――な、何だよこいつ!!」

鉄槌に力を込めるヴィータであるがまったく後退する気配がない目の前の異質であるエクシアを見て思う。更に先ほどから背中から飛び出している緑色の粒子が気になってしょうがない。

「おおおおお!!」

更に円錐状の突起から緑色の粒子がほとぼしる。その感覚はまるで自分たちは知らないが、母に包まれているような暖かなもの。しかし、対してヴィータはその打ち込んだ鉄槌もろとも自分が一気に押し切られたのが信じられないと言う表情をしていた。

その後ろから来ていた獣人・・・ザファイラはその様子を見て一瞬驚いていたが、すぐに鋭い視線を向けながら、拳を叩きつけてくる。

それを左腕のGNシールドで受け止める。かなりの衝撃であるが、耐えられないものではない。そして開いた腹部に対してGNソードで切りつける。しかし、とっさに作り出した障壁とは思えないほどの硬さがあり、剣が阻まれる。

「硬い!?!」

「盾の守護騎士をなめるな!?!」

ハヤトはその障壁の硬さに驚きの声を上げると、ザファイラはそれくらいは当然だと言つてのける。このままの出力では無理だと思ふと、一気に出力を上げ、徐々にその障壁を切り裂いていく。当然のように即効の障壁から今はしっかりとした構えで防御していたザファイラはその光景に目を見張る。自分の最高の盾が切り裂かれようとしてるのだから。

まずいと思ったのか、その足でエクシアにけりを入れてきた。会費が送れて、懇親の一撃ではなくとも強化されたけりはかなり聞いた。それでも生身には衝撃のみで、装甲がやや削れた程度である。

むしろ装甲の硬さでザファイラのほうにダメージが言っているようだった。むしろ儲けたくらいかもしれない。

「ザファイラ!?!く、やはり警戒しておいて良かったぞ!?!」

「ありがた迷惑だがな」

広報からきりつけてくるシグナムの両刃剣をGNソードで受け止める。先ほどの突然手が生えたことや、今はまったく戦闘に参加していないシャマルのことを考えると、どうやら彼女たちにはそれぞれ役割があると見た。

前衛のヴィータ、防御のザファイラ、後方支援のシャマルとくれば、シグナムはオールラウンドに動くポジションだろうかと思った。

剣と剣がぶつかり合う。斬り合う中で見ていた彼女の表情はまるで強敵に出会えたことをむしろ誇らしく思っているような顔であつ

た。

「危険視していたが、まさかここまでとは！！久しぶりに血が騒ぐぞ」

「そこまで熱くなるのが分からん」

「はあああああ！！！」

その瞬間葉莢がロードされる。そして一時的ではあるが、ものすごい魔力の上昇が感じられた。そして刀身には炎が走る。

「我が剣を受けよ、紫電・一閃！！！」

抜刀の要領で斬りつけてきたそれを粒子をまとったGNソードで受け止める。激しい火花が散る。お互いの力と力、剣と剣がぶつかり合う。不意に感じた違和感。押し合うこともできる。しかし、彼女はそうしてこない。先ほどのヴィータのを見て、地から比べでは勝てないとふんだのか。しかし、それならば色々やりようはある。それでいて彼女はいつこうに罅迫り合いをやめない。まるでハヤトをその場に足止めさせるために……。

――足止めをさせる……、まさか！！

そう思った瞬間に後ろから迫る得体の知れない違和感を感じた。目の前にいるシグナムに対して回し蹴りの要領でけりを入れて後方に吹き飛ばすと自身も、急いで上空へと回避する。先ほどまで自分がいたところから、やはり手が見えていた。隙を突いて、GNドライブに入り込もうとしていたのだろう。その策が失敗したと言うことで彼女たちは苦い表情になっていた。

ハヤトはすばやく腰からGNソードをダガーにしてその手に投擲

する。すぐにその手を引っ込めたので突き刺さることはなかったが地面に刺さり、小規模な爆発が起きる。

その煙ははやとだけではなく彼女たちの視界をも逸らすことになる。ハヤトはこれ以上の戦闘をしても、こちらにはプラスはなく、むしろ事理必打と思い、煙にまぎれて撤退することにした。おそらく未だに解析の進んでいないGN粒子。彼女たちがデバイスにて索敵したと手それは無理だろうと判断し、スピードを維持しつつその場を離れることにした。

煙が晴れたそこには、エクシアとハヤトの姿はなく、ただ4人は呆然と見ているしかできなかった。

PHASE 113 突然の襲撃 上（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 114 突然の襲撃 下

そこに小さなクレーターができているのを見て4人のヴォルケンリッターたちはただ呆然としてそれを見ているしかできなかった。爆発と同時に撤退しただろうハヤトがそう遠くに、更に結界からは逃げられないと思われていたが、その結果意を何かしらの方法で突破、おそらくはあの特殊な粒子と剣で何とかしたのだろうと、ありえないと思うがそれしかないとそれぞれ考えていた。

「それにしても、確かにあれだけの強さを持った魔道師は久しぶりだ。シグナムが警戒していたのはうなずける」

ゆっくりと近づいてきた獣人の男性ザフィーラが言う。それには激しく同意だと言うようにヴィータとシャルも集まるようにしてやってくる。

「あたしたち4人がかりで蒐集できなかったのはちよつと痛いな・・」

ヴィータが落ち込むように言う。

「大丈夫よ、ヴィータちゃん。このあたりにはちよつと劣るけど高魔力を有する魔道師がいるようだから」

シャルが娘をあやすようにして、ヴィータを慰める。子ども扱いするなど怒るヴィータであるが、まんざらではなさそうだ。

「だが、これ以上手詰まりに陥るわけには行かない」

4人のリーダーであるシグナムの言葉に3人の表情も真剣なものになる。これ以上長引かせれば、最悪自分たちの大好きな主が死んでしまう。そんなことをさせないためにも戦わなければいけないと思っていた。例えその場合に騎士としての誇りを捨てなければいけないとなったとしても・・・。

「今夜にも行動に移るぞ」

その言葉に反対するものはいなかった・・・。

PHASE 115 幸せの終わりと悲しみの始まり 上

その日の夜だった。高町なのはは帰宅したあといつものとおり夕食などを済ませ勉強をしていた。すると突然愛機であるレイジングハートが警告を発したのだ。

『マスター警告。緊急事態です』

「！！どうしたのレイジングハート」

なのはが一体何が起きたのかとレイジングハートに聞こうとしたその時何かが広がる感覚がした。

「これは・・・結界!?!」

『マスター。対象、高速で接近中』

「近づいて来てる・・・こっちに」

「・・・どうしよう・・・でも話し合うしかない!!」

そう決心したのははレイジングハートをもってはとあるビルの屋上に来た。

『来ます』

レイジングハートの声と同時に突然なのはに向かって攻撃が降ってきた。

『誘導弾です』

レイジングハートのサポートを聞きなのははシールドで防御した。

「くう!!」

なんとか防ごうとしたが誘導弾であるにもかかわらず相当の威力があったのか押されてしまい、なのはも苦悶の表情になる。

「うおおおお!!」

さらに反対からも攻撃がくる。それもしっかりと反応しシールドで防御した。よく見ると自分と同じくらいの女の子がハンマーみたいなので攻撃してきたのだ。しかしなのはは防ごうとしたが防ぎきれない。

「きゃああああ!!」

なのはの張ったシールドはまるでガラスが割れたかのようにあっけなく破壊される。そして衝撃をもろに受けてしまったためにビルから落ちる。しかし・・・。

「レイジングハート、お願い」

『スタンバイレディ、セットアップ』

なのははすぐにレイジングハートを起動させて、バリアジャケットを身につけた。

「どこの子、何でこんなことするの?」

なのはは必死に説得を試みる。しかし以前のフェイトと始めてあったときのように、相手はまったく聞く耳を持たない。

「うおおおお!!」

女の子は彼女のデバイスであろうハンマーで攻撃してきた。しかし先ほど自身のシールドを軽がる破壊されたためにもろに受けてはいけないと思い回避を選択する。

「フラッシュムーブ」

なのはは、すばやくよけ、そして反撃をする。

『シューティングモード』

「話さないと、わからないってば！！ディバインバスター！！」

なのはは桃色の砲撃を放つも相手の女の子はディバインバスターを避けた。そしてその時見た少女はとっても怒ってるように見えた。

「アイゼン、カートリッジロード」

『ラケーテンフォーム』

なにやらデバイスから葉きょうのようなものが射出されると女の子のデバイスの形が変わった。

「ラケーテンハンマー！！」

女の子がなのはに突っ込んでくる。なのはも回避は無理と判断するや渾身の魔力で先ほどと同様に吹き飛ばされないようにとバリアを張る。しかしそのシールドも簡単に破られてしまう。

「きゃああ」

なのはは衝撃で吹っ飛ばされる。ビルの中に吹っ飛ばされた。

「うう……。れ、レイジングハート??」

なのはは慌ててレイジングハートを見ると大きく傷つき大破していた。

「うおおおお!!」

再び女の子が突っ込んできた。あわててなのははバリアで守ろうとする。しかし彼女に衝撃は来なかった。ゆっくりとなのはは眼を開けてみるとそこには真っ赤に燃え上がった四枚の翼を持つものがハンマーを振り下ろしてきた少女の攻撃を盾で防いでいる後姿だった。

「間に合ったか……」

そこにいたのはエクシアを起動させたハヤト・ブリックスだった。

PHASE 115 幸せの終わりと悲しみの始まり 上（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 116 幸せの終わりと悲しみの始まり 中

あの戦いから数ヶ月が経っていた。ハヤトはあれから再び月村邸に居候させてもらうことになっていた。初めはすでにある程度のお金が溜まっていたのでどこかに部屋を借りてそこから通勤すればいいと思っていたのだが、4人の笑顔で却下されたために今までどおりの生活に戻っていた。

朝早く起きて、トレーニングウェア（ノエル作）を着て、鳴海の町をランニングする。その後は買ってきていた木刀にて素振り、更にエクシアのシュミレーションシステムを使つての射撃訓練や剣を使った武術訓練をしていた。

それだけやればかなりの汗も出る。すでに上着はシャツ一枚であり、淡々といつもの日課をこなしていた。あのときの戦い、『トランザム・システム』があつたから勝てたものの、長くMSモビルスーツを扱っていなかったからといういいわけぐるしいが、素の戦いでは未確認に圧倒されていた。

――明らかに俺の実力不足だった・・・

アイオリスではエースとして活躍していたハヤトであるがそのわずかにあつたプライドすら打ち砕かれてしまった。今鍛錬しているのも、まだ自分が弱いということを突きつけられたからだった。

慢心していたつもりはない。

しかし明らかに劣っていたのだ。このままではいつ何がおきてから誰かを守ることができない。自分がやられてしまっても意味はないのだ。体と心を守ってこそ、本当に守ったということにな

るのだから・・・。

イメージの中に流れ込んでくるターゲットを次々と射撃と剣撃で破壊していく。場所は変わって月村邸の中庭である。真剣な雰囲気をかもし出しているためか、いつもはなついてハヤトにくつつきに行く猫たちも空気を呼んで黙ってその様子を見守っているのだった。

そんなハヤトと猫たちの様子を家の中から見ていた、月村すずか。見慣れた光景であるが、ほほえましい絵が彼女の目には映っていた。

「おはようございます、すずかお嬢様」

「あ、おはようノエル」

そこに現れたのはメイドのノエルであった。その手にはタオルと着替え、そして飲料水の入ったコップがお盆の上にあった。

「今日も一段と精が出ていますね、ハヤト様は」

「うん。大きな事件が終わったのはいいんだけど・・・」

しばらく家を開けていたハヤト。月村家の中は以前の4人となったのだがどうしたわけか違和感があった。猫たちも頻繁に家の中をうろろろするなど、今までなかった光景がすずかたちには映っていたのだ。

その原因というか理由というのが今庭で訓練の真っ最中であるハヤトにあるということだった。彼が戻ってきてから最初の夜にはその事件で何があったのか、あまり公にできないこともあるらしく濁らせて話していたが、かなりシリアスなものだった。

しかしそこで出てきた自分たちが作り出したMSモビルスーツに変化がでたと

いうことだった。GNドライブが劣化中の劣化品であることは誰もが知っていたが、その事件の間でやられると思ったときに、件のものと同化し、オリジナルのものとなったということだった。

どういう意味なのだろうかと最初は思っていたが食事を片付けた後に地下の研究室にてそれを調べた結果、今までのものの性能を何倍も上回る数値をたたき出していたのだ。現存する科学ではこれ以上は無理だと思われていたそれを解決させたロストロギア『ジュエルシード』。初めは取り出して調べて見たいと思っていたが、完全に同化していたのでそれは叶わずに忍は悔しがっていた。

そして時間はまた元に戻る。眼を開けたハヤトから突き詰めた雰囲気が消えると一気に雪崩のように猫たちがハヤトに向かって走り出す。

「あはは、またハヤトさん、毛玉になってる」

「相変わらず、猫たちに好かれていますね。ハヤト様は」

突撃されて倒れていたハヤトが起き上がり、からだに引っ付いている猫たちの首根っこを掴んではがしていた。

「それではわたしはこれをハヤト様にお渡ししてきますので」

そういつてノエルが離れようとしたときに、ノエルを呼び止めるすずか。どうしたのかと振り返る。

「私が代わりにもって行く」

「ですが、すずかお嬢様」

「大丈夫だから」

「そうですか、では私は朝食の準備に取り掛かりますので。よろし

くお願いします」

「うん、任されて」

そうしてノエルから受け取ったそれらを持って、すずかは中庭へと急ぐのであった。

「おはようございます」

「ああ、月村・・・」

「すずかでいいと何度も言ってるじゃないですか」
「分かった」

「はい、これノエルから預かってきました」

「助かる」

「そういう時は『ありがとう』って言うんですよ」

「・・・ありがとう」

「ふふ、どういたしまして」

ハヤトは猫たちをひきはなすとノエルから預かってきた着替えや飲み物などをすずかから受け取る。渴ききったのどの潤いが染み渡るのを感じる。

あの事件からあまり大きなことはおきていない。いつものように朝早くに鍛錬して、朝食を月村でご馳走になり、弁当を受け取っていざ出勤。その後午前中で仕事をすべて終わらせ、その後はまた鍛錬。夕方になると、なのはに対する簡単な教導、夜も月村で取り、就寝という形だった。

隣に座って空を眺めている少女・・・月村すずかもハヤトがかかわった事件について簡単に聞いていた。更にその事件で関係者である少女とビデオレターを続けている親友の高町なのはがすずか、そ

してアリサ・バニングスと一緒に数ヶ月それを続けていた。

自分たちと同じ年の少女がそんな危険なことをしていたなんて想像できなかった。しかしそれが母のためだったということを知り、純粋な少女なんだと思った。もし会えるとしたら早く友達になりたいと思った。むしろもう、友達なのであるが。

「フエイトちゃん元気そうですよ」

「そうか」

「はい。いつ会えるか分からないけど、色々お話したいです。本の紹介とか、猫たちと遊んだり」

「仲良くなれるといいな」

「もう仲良しですよ」

「そうか」

そうして、今日も一日が始まる。

時間があいたと言うことで、機械弄りなどサイエンティストな面で天才的な才能を持つ月村忍は、現在も自宅の居候しているハヤトのモビルスーツである『エクシア』の機体チェックを行っていたが、はつきり言って頭を抱えなくなるようなものであった。

「これはひどいわね・・・」

以前戻ってきたときにすぐさま調べたところ、以前の原動力ともなっているGNドライブの性能が何倍にも跳ね上がっていた。それはあのジュエルシードと言うロストログアのせいだということもすでに知らされている。

まだわずかに魔力の放出があるということで、それを抑える機能を搭載したが、つい最近夜討ちにあったというのだから、機体の早期整備を頼むのも無理はないと思った。

しかし、そうしのぶがつぶやくのも無理はなかった。前回の事件では完成したばかりで、ろくに整備もせずに飛び出していったのだから最悪空中分解してもおかしくなかった。更にその新システムであるトランザムを使用したために、更に機体への負担が大きかったのだ。

武装は良いとして、機体そのものへの負担がまだ取り除かれていない。最悪このままもう一度トランザムを使用したらその瞬間に期待は空中分解、空の下にほうられてどうしようもなくなる。

「一応、応急処置はできるけど・・・」

所詮できるのはそれくらいだ。ここでモデルスーツは作れるが、専門ではないために、細かいところまで調整することはできないのだ。

これで少しは気体の負担は取り除けるだろう。しかし、今まさに最後の武装として開発しているそれを使ったとき、果たしてこの機体は持つのだろうか。

一抹の不安を抱えながらも、研究者としての腕になると忍はそれに没頭するのであった。ゆっくりとこの鳴海市に近づく闇の影に、まだ誰も気づいてはいなかった・・・。

その日の夜だった・・・。

いつものように夕食を終え、それぞれのことに勤しむ。すると突然鳴海全域に配置してあるセンサーの一部に反応があったのだ。

「「!」」

慌てて地下室へと走り、モニターで確認する。1つはハヤトの知る魔力色、しかもう1つはまったく見知らぬものだった。

「桜色・・・高町なのはか」

「なのはちゃんが!? なら、この紅色のは、一体??」

「分からない、しかし明らかに高町なのはが逃げ、それを追っている形だ」

「なのはお嬢様・・・。忍お嬢様、いかがしますか??」

「どうするって言われても、私たちには魔法なんて使えないし、ハヤトくんのエクシアの新装備も・・・」

エクシアの最後の新装備であるその完成がまだ終わっていなかったのだ。それにはかなり苦戦している様子である。それは圧倒的な火力を有するそれを、武器自体が耐え切れないのだ。更にそのまま使ってしまうえばエクシア自体にも反動が大きいということであるとかそれを回避できないかと試行錯誤をしている段階であるのだ。

更に、機体への調整もまだぎりぎり終わっていないというところ。何かの拍子に機体がオーバーヒートしたらとんでもないことが起きる。

しかし、だからといってこのまま彼女を見捨てておくこともできない。更には月村として、この町で勝手されるわけにもいかないというわけである。

「で、でもこのままじゃ・・・」

「分かってるわ・・・」

そう悩んでいると・・・。

「エクシアで出る」

「「え!？」」

「彼女を守るように、以前言われているからな。分かっているながら動かないわけには行かない」

「・・・そうね、お願いできる?？」

「了解した」

一瞬渋るような表情を見せた忍であるが、このまま見ているわけにも行かない。そう言っただけでさまたち地下室から外に出るとネットワークに待機していたエクシアを起動させる。すぐに全身を機械装甲で覆うと、白い翼を羽ばたかせ、飛翔する。

「エクシア、ハヤト・ブリッグス。目標へ飛翔する」

夜天の空へ、天使が舞い上がった・・・。

PHASE 116 幸せの終わりと悲しみの始まり 中（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 117 幸せの終わりと悲しみの始まり 下

ハヤトがリーダーにそって夜天の空を飛翔する。そうして件のものがあるところについたとき。今にも止めを刺されそうな少女がいた。高町なのは。

ジュエルシード事件通称PT事件（プレシア・テストロッサ事件）の解決に尽力した一人である。

魔導師としての資質は高く、今すぐにも管理局側としてはスカウトしたいだろう逸材である。

まだやりたいことや社会的に将来どんなことをやりたいのか決まっていないうちに目先のことで将来を決めるのは後になって後悔しても遅いということを味わって欲しくないからだった。

そんな彼女が一方的にやられていた。見ても分かるようになるのはのバリアジャケットは相手の攻撃を受けたためかなりダメージがある。

しかし、一方で相手のゴスロリチックな紅いバリアジャケットを着た少女は、ほぼ無傷といってもいいだろう。そしてなのはに対して再び攻撃しようとしていた。

あの体勢から、そして今のデバイスと彼女の状態から長くはもたない判断し、加速してその間に割って入り、盾で防ぐ。

――重い……。

少女の攻撃を受け止めたときそう思った。未確認と戦ったときはまた違った重み・・・これは。

――何か強い信念を感じる・・・思いの重さか・・・。

何か重い何かを背負っている。

その分だけ彼女の背中を押しているのだろう。

「なにものだ！？って、あの時の！！」

「やはりあの時の・・・」

確かヴィータであったその少女は再び突っ込んでくる。そのハンマーを今度は受け止めるのではなく盾でいなすことでヴィータの体勢を崩す。

「わわわ」

急にぐらりと体勢が崩れたために慌てる少女。

その隙を突いて。腰からGNビームサーベルを抜くと少女に向かってきりつけた。

「くっそお！！」

バリアジャケットの背中部分を切りつけられ、追撃をかわすために後退する。

――なんだってんだよ、あいつの着ているものは。あたしたちの知っているものとはぜんぜん違う。

ヴィータは目の前に現れた未確認のもの・・・ハヤトとエクシアに無意識に恐怖を抱いた。自分の攻撃を受け止め、次にはいなして見せた。

そして追撃にビームサーベルできりつけられる。

――何だあの雰囲気は・・・あたしはそれを知っている。

少女はその雰囲気を知っている。大きな戦いを経験しそれ生き抜いたというつわものの雰囲気。自分たちもまたそのように生きてきたためにそれが痛いほど分かった。

お互いに距離を縮め早い動きでサーベルとハンマーがぶつかり合い交錯する。

「ならこれはどうだ!!」

少女が魔力弾のような物・・・4つの鉄球を魔力を付加させハンマーで放ってきた。

「甘い!!」

すばやくGNビームサーベルをしまうと、右腕に装備されているGNソードをライフルモードに変え、次々と粒子弾を放ち鉄球を爆散させる。

正確無比な射撃。自分の攻撃を真っ向から受け止めいなす技術。そして冷静な状況判断。

「……これはまずい……」

以前戦闘したときもそうであったが、あの時4人がかりでも軽くあしらい、逃走できた実力を持つのだ、ただ一人で戦うのは悔しいが、簡単に蒐集はさせて貰えないだろうと判断し、ヴィータはいったん引くことを選択。

牽制に再び鉄球を放ち撤退していった。それをライフルで打ち落としたハヤト。するとその時突然転送システムによって送られてきた人物たちが現れた。

「なのは」

「よかった間に合った」

「間に合った」

以前の事件であるPT事件で知り合ったフェイト、アルフそしてユーノだった。

突然現れたフェイトたちであったが、すぐに彼女たちを見てハヤトは指示を飛ばす。おそらくここにはヴィータだけではなく、他のメンバーも来ているだろうと思っていたのだ。あの時自分に対して4人がかりであったにもかかわらず、なのはに対してはヴィータ一人だけ、それぞれ分かれているのだろう。

「ユーノ・スクライアは高町なのはの治療をアルフはその守りをフェイト・テストロッサは俺と来い」

「一体何が起きたんですか??なんで、なのははケガを??」

「高町なのはが何者かの魔導師に攻撃された。そしてそれに俺が介入しただけのことだ。」

ハヤトの指示にその場にいた者たちは同意した。

「行くぞ、フェイト・テストロッサ」

「あ、はい」

ハヤトのGN粒子を迸らせて飛んでいく後に慌てて追いかけるフェイト。

「なのは、行ってくるね」

「気をつけて、あの子の魔法なのか、違うから」

「わかった。なのは、待っててね」

久しぶりに会った二人であるが、緊張や、会えたことを感じていられる状況ではないということを幼いながらに自覚してたのだろう。

PHASE 117 幸せの終わりと悲しみの始まり 下（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 118 幸せの終わりと悲しみの始まり 上の上

そしてフェイトもまた外に飛んだ。ハヤトとフェイトは合流して撤退して言ったヴィータのことを探していると、すぐ近くにいた。

「目標を捕捉」

ライフルモードによる射撃にて牽制し、またあえて避けさせ、闘争ルートを粒さんと移動する方向を変更させる。

「何だよまたお前か!!」

ハヤトの放った粒子弾によってその所に移動させたら・・・。

「く、しまった」

その少女にこっそりとフェイトに仕掛けてもらった設置型のバインドを発動させた。それによって少女は三重ほどのバインドに捕まり身動きができなくなる。

「名前と、出身世界、目的を教えてください」

フェイトがそのように尋問しようとした。ふとその時何か感じた。明らかにこちらに対して敵意を持ったもの。

「――まずい!!」

そう思ったハヤトの次の行動は早かった。

「防御体勢に入れ!!」

「え??? っく!!」

突然何者かによってフェイトが攻撃された。その突然の攻撃に対してなんとかフェイトはバルディッシュで防御していた。そして突然攻撃してきた犯人であろう、1人女性が出てきた。

「――シグナムだな・・・。」

それにしても、どうしたわけか、このような戦いにおいて、女性が多めに現れるのではないかと場違いなことを考えるハヤト。

すぐに忘却の彼方へと葬り去る。しかし、以前同様にひしひしと感じていた。目の前に現れた女性・・・シグナムもまた、隣にいるヴィータ同様に強者であるということが。

シグナムが突然現れたということでハヤトとフェイトは一旦後ろに下がる。お互いに視線をぶつけ合っている。不意に現れたシグナムに対して追ってきていたヴィータが話しける。

「シグナム・・・」

ヴィータが現れたシグナムの名前を言う。やはり、現れたのはピンク色の髪の毛をポニーテールにしている騎士、シグナムであった。

「ヴィータ、お前は油断しすぎだ。未確認が、あの男が簡単に隙を見せるはずないだろ」

「あなた達はいったい??」

フェイトがバルディッシュを構えて再び質問する。

「すまん、答えられない。レヴァンティン、カートリッジロード！」

すると剣から葉莢のようなものが射出されると同時にシグナムの魔力が上昇するのが感じられた。そして彼女の剣型のデバイスに炎がともる。

「――あれは!？」

以前戦闘になったときも使用したその謎のシステム。それが一体何なのかは分からないが、それでもモニターに映し出される、シグナムの魔力が上昇したのは分かった。恐らく一種の即効性のドーピングみたいなのだろうかと思った。

「――あの葉莢のようなものが魔力を上げたのか?？」

そう思っているとシグナムがフェイトに向かって距離を縮め、剣を振る。

「紫電・一閃」

紫色の炎の灯った剣撃がフェイトに向かって放たれた。

「!! バルディッシュ」

『ディフェンサー』

その攻撃に対して、慌ててフェイトはバリアを貼るが、そのバリアごとバルディッシュが斬られ下に叩き落とされた。

「テストロッサ!!」

下へと叩き落されたフェイトを助けるために地面を蹴って、大きな翼を羽ばたかせ、加速して彼女を追う。

背中を見せたということでヴィータとシグナムもそれぞれ武器を構えてハヤトを追う。

「仲間を助けに行くことは褒めてやる」

「だが、戦いで相手に背中を見せたとき。それは敗北しかない!!」

二人が追いすぎるのをちらりと肩越しに見るハヤト。このままフェイトを助けられてもすぐに二人に攻撃されてまずいことになる。

「なめるな」

そう呟くと、ハヤトはすつと肩越しの突起に手を伸ばす。それを見て、何がくるのかと身構えるヴィータとシグナム。

そしてハヤトは一気にそれを引き抜くとそれは短いビーム刃を展開させた短刀となる。

「ハアアアアア!!」

構えを取っていたシグナムとヴィータに向かって右左と2本をダガーのように二人に向かって投擲する。

「く!!」

「なんの!!」

向かってきたGNビームダガーのそれぞれをグラーフアイゼンとレヴァンティンでそれを弾く。しかしそれは陽動でしかなく、二人が視線を向けたときにはすでに目前にハヤトとエクシアがGNロングブレイドとショートブレイドを構えている姿があった。

そして振り切られた武器を持つ二人に対してその二本から放たれる斬撃が襲いかかる。

「しまった!!」

シグナムがそう呟いたときにはすでに遅く、剣先が届こうとしていた。

『パンツァー・アイゼン』
『パンツァー・ガイスト』

それぞれのデバイスがシールドを貼る。しかしGN粒子を切り裂くというコンセプトの基に作られたGNブレイドである。二人の張ったシールドに徐々に食い込んで、シールドにひびが入る。

「何だこいつ・・・」

「重い・・・」

なんとか直撃は免れたがフェイトの救出と安全の確保、そしてヴァイタたちの魔力の大幅な消費を成功させた。

「ヴァイタ、2人でやるぞ。それとカートリッジの補給だ」

「サンキューシグナム。これだと思いつき暴れられるお前、ただじや済まさねえぞ」

それぞれデバイスを構える二人。ハヤトの隣にはシグナムに攻撃されダメージを追っていたフェイトが再び空へと飛んでいた。

「怪我は??」

「はい。助けてもらいありがとうございます」

どうやらもう大丈夫らしい。

「それで、どう戦いますか??」

「奴らが今回の歪みであれば、駆逐するまでだ」

彼女たちが一体どういう目的でリンカーコアを狙っているのかは分からない。ただ、それでも歪みになりえるのなら、駆逐するまでである。

オールラウンドの戦いができるハヤトとフェイトであるためにハシマーのヴィータ、剣のシグナム、どちらとも戦える。

「なら・・・私にシグナムと戦わせてください」

「・・・」

「やられっぱなりは嫌ですから」

「・・・そうか。了解した」

「ヴィータは、あの翼を持つものを、あの男は厄介だぞ」

「おう、分かってる」

そういうと二人もまたそれぞれ相手にするほうへと飛ぶ。フェイトはバルディッシュを斧の形態の状態でシグナムと対峙するべく飛び、ハヤトもまた再びGNブレイドの二本を構えると大きく翼を羽ばたかせ、加速しヴィータへとつつこむ。

「エクシア、ハヤト・ブリッグス。目標を駆逐する!!」

PHASE 118 幸せの終わりと悲しみの始まり 上の上（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 119 幸せの終わりと悲しみの始まり 上の中

ハヤトとフェイトがヴィータ、シグナムと戦闘を開始しているのと同じ時刻。ユーノが治療をしてくれたおかげで、なのははだいぶ楽になった。

しかし、なのはよりもデバイスであり相棒のレイジングハートの方の損傷がひどかった。

「レイジングハート、大丈夫？」

『心配ありません』

レイジングハートはそういうが見るだけでわかる。ひどく傷つき・・ボロボロだった。それでもマスターであるなのはに心配をかけまいとしていた。

「ごめんよ、なのは、遅くなって」

「フェイトの裁判が終わったから、連絡しようと思ったら、なのはとの連絡がつかないから」

「ありがとう、ユーノ君、アルフさん。そうだ、屋上に行こう」

2人は驚いていた。まだ体調が完全でないこの状態。更にデバイスのレイジングハートがこの状態ではいつ攻撃されてもおかしくない今、なのはに戦うすべはないのだ。

「なのは、危険だよ」

「そうだよ、なのははボロボロじゃないか」

それを分かっているユーノとアルフはなのはを止める。

「私が戦えなくても、応援はしたいから」

なのはの頑固なところは折り紙つきであり、そのことをずっとそばで見してきたユーノはそのなのはを止めるすべをもっていなかった。

「はー、仕方ない、それじゃあ屋上に行こう、アルフ手伝って」
「はいよ」

仕方ないと小さくため息をつくとなのはをつれてユーノとアルフは一緒に屋上にいった。屋上にで見たのはすごい光景だった。

「はあああああー!!」
「ラケーテン・ハンマー」

大小二本の剣とぶつかり合い、火花を散らせる鉄槌。

「ハーケンスラッシュ」
「紫電一閃」

雷の魔法と炎の魔法のぶつかり合いをしていた。

「ユーノ君、アルフさん、ハヤトさんとフェイトちゃんを手伝いに行ってください」

「分かった、なのはは設置型回復魔法をかけておくから、そこにいて」

「なのは、待ってなよ」

ボロボロのなのはには、悔しいが、今は応援しかできないのだ・・・。

「紫電一閃！」

「プラズマスマッシャー」

「っく」

シグナムは内心喜びと焦りがあった。強いあの2人は強いと思っていた。あの少女の方は今はデバイスの性能と経験で勝っているがそれさえ同等になればいい好敵手になるだろうと思った。

更にあの未確認を操る人物・・・ハヤト・ブリッグスと言う青年。その姿は異形であり、全身が機械装甲のもの。

更に、背中の円錐型の動力炉みたいなものから放たれている粒子は魔力を感じられない。あんな摩訶不思議な力と、デバイスがあるのだろうか？シグナムは疑問に思う。

そんなバリアジャケットや騎士甲冑があるのだろうか？と、長年闘ってきた彼女でも困惑は隠しきれない。

そして明らかに先ほど転移してきた他の魔導師たちも含めても、戦い慣れしているというか生死の境を歩いたものしか出せない独特の雰囲気というものをかもし出していた。

しかし、彼女は・・・彼女達は負けるわけにはいかないのだ。

「レヴァンティン」

シグナムの声とともにレヴァンティンから葉莢が射出される。

「紫電・一閃」

再びシグナムが攻撃をしてきた。しかし回避が間に合わない。なんとか受け止めようとしたが・・・。

「はあああああ！！！」

再び葉莖が射出されると急に剣の強さが変わった。そしてとうとう押されてしまった。その勢いでフェイトはビルに叩きつけられる。

「きゃあああ！！！」

なんとか立ち上がろうとするもからだに痛みが走り立ち上がれない。さらにバルディッシュもまた、今の攻撃を受け止め切れなかったためか、ひどい損傷だった。

しかし、そんな彼女に止めを刺そうとシグナムが迫る。

「終わりだ」

フェイトはやられると思った。

しかし、いっこうに痛みはこなかった。閉じていた眼をゆっくりと開けるとシグナムの

剣であるレヴァンティンを受け止める、シールドがあった。

そこには駆けつけていたユーノ・スクライアの姿があった。

「ユーノ！？！」

「ま、間に合った」

相当急いでいたのだろう。肩で息をしていた。

「あなたがしている事は犯罪ですよ」

バルディッシュを杖代わりにして立ち上がるフェイトが言う。

「知ってる、しかし、時には法を破っても成さなければならない事があるのだ」

しかし、対するシグナムはというと、分かりきっていることを言うなど、そして、自分

たちには手を汚してでもやらなければいけない理由があると、斬り込んできた。

「はああああ!!」

しかしその攻撃をユーノが防いでくれた。

「ユーノ、ありがとう」

「うん、ところで、この人は??」

「2人か、しかし、私は負けない」

そうしてシグナムの剣レヴァンティンが炎をまとう。

「紫電・一閃」

紫色の炎が飛ぶ……。

PHASE 119 幸せの終わりと悲しみの始まり 上の中（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 120 幸せの終わりと悲しみの始まり 上の下

ヴィータと相手をしてるハヤト。一撃一撃は強いが、しかし、攻撃が一直線すぎだ。

「アイゼン」

『了解』

再びグラーフアイゼンから葉莢が射出され、ヴィータの魔力が上がる。

「ラケーテン・ハンマー!!」

巨大なハンマーを構えて突っ込んでくるが・・・。

「甘い!!」

そう叫ぶや否や、すつとすばやくハンマーによる攻撃を横に避ける事でかわすと両手に構えていたGNブレイドで襲い掛かってきたハンマーの柄の部分から真っ二つに切り裂いた。

「な!?!」

真っ二つにされた自分のデバイスを見て驚愕するヴィータ。

「く!! リカバリー」

『了解』

すぐにデバイスをリカバリーさせ、再びハンマーを構える。このと

きヴィータはこの謎の機体の性能に対して恐怖していた。

自分たちを圧倒するような性能を持つ・・・ここでは自分たちの範疇にて考えるためにデバイスとしておこう。そのデバイスの性能は明らかに自分たちの持つデバイスや今まで見てきたデバイスとはまったく違う。

ひとつのデバイスに形態変化があるのは良くあることだ。例えば身内であればシグナムのレヴァンティンだ。しかしあの機体の武器は明らかに始めからすべてが展開されている。

そしてあれだけたくさんの武装がありながらそれを自在に扱うその魔導師の技術の高さ。

「・・・あたしはベルカの騎士だ。それにここで立ち止まるわけには・・・行かない!!」

「アイゼン」

『シュワルベフリーケン』

「うおおおおお!!」

そうしてヴィータは再び4個の鉄球をハヤトに向かって飛ばした。それに対して2本目のGNブレイドを構えると、迫る鉄球に対して一閃二閃と剣を振るう。十字に斬られた鉄球が下方へと落ちていった。

そして再び翼を大きく羽ばたかせ、一気に加速して2本のGNブレイドをクロスに振るいヴィータに切りかかる。モロに食らったヴィータは後方のビルに飛ぶ。

煙が立ち上り、吹き飛ばされたヴィータがどうなったかは分から

ない。

しかし、確実に分かるのはまだ彼女は立ち上がり、再び攻撃してくるだろうということだった。

そして、ゆっくりと煙が晴れると、そこにはバリアジャケットがややぼろぼろになりながらも立ち上がったヴィータの姿があった。

「まだ立つか」

「たり・・・めえだ！！アイゼン！！」

『了解』

再び葉莢が射出され、ハンマーは更に巨大化し、更にはドリルまでついていた。

「――さっきのとは違う・・・。威力が桁違いだな。真正面から受け止めるのはまずい！！」「ギガント・シュラアアアアアアアク！！」

大きく振りかぶって重力と共にハヤトに襲い掛かるヴィータとグラフアイゼン。しかし、いくら威力が上がろうと、姿が見えていたり、さらには得物が大きすぎることで早さがない。

ときどき、高町家にて恭也たちと鍛錬することもある。それは一重に自身の武装に剣が多かったからだ。彼らと比べて姿や攻撃の早さが無いということではやく間合いに入って再びその武器、グラフ・アイゼンを叩ききる。

「くう！！」

一度ならずとも二度までも同じような手を喰らってしまい、ヴィ

ータは悔しそうにハヤトを睨む。しかしハヤトの攻撃はそれだけに終わらなかった。

「な!？」

驚くヴィータの目に映ったのはGNブレイドをマウントしてGNソードをソードモードにして向かってくるハヤトの姿だった。

体制が崩れている今、とっさに張ったシールドでは先ほども受けた攻撃を見れば破壊されることは必至であった

――シールドで受け止めるのは無理だ・・・かわすしかない!!

振り下ろされたGNソードを何とか体をそらして回避する。

しかし、脇から覗いていた柄のようなものがヴィータに向けられている。それに気づいた瞬間、ものすごい勢いで淡いピンク色の刀身がヴィータに向かって伸び、襲い掛かってきたのだ。

目前に迫るそれに対して防御を取れないでいるヴィータはやられると覚悟を決めた。

しかし、彼女の前に突然影が入り、その攻撃を受け止める。

「うおおおおお!!」

突然の奇襲のビームサーベルの突きを受け止めた。すると突然、筋骨隆々な体つきをした男の人が突っ込んできた。

「増援か?? あいつは・・・」

突然飛び掛ってきた男性・・・ザフィーラの拳を後退することで回避し、拳を突き出しているザフィーラに対して、GNソードをラィフルモードにして粒子弾を放ち、牽制を加えるがかわされる。

当たったとしても硬い防御で防がれる。突っ込んできたザフィーラ、よくを見ると頭に人ではない耳があった。

「使い魔か??」

「我は、使い魔ではない守護獣だ」

「ザフィーラ、来たのか」

「シグナムは、1人で十分と言っていてお前の方の魔導師が強いと聞いてな。助けに来た」

「け、私1人で、できたさ」

「なら、2人で素早く終わらせよう」

「おう」

どうやら二人掛かりで来るらしい。攻撃に特化したヴィータ。防御に特化したザフィーラという男性。これは相手にとっては理想的な陣形だと思う。攻撃をザフィーラに受け止められるとその隙にヴィータが来るだろう。

その時また誰かが近づいてきた。

「なんだいまた一人増えてるようだね」

そこになのはのそばにいたはずのアルフが現れた。

「なぜここに??」

「なのはが行ってと言ったからね。あの子は結果以内に回復中だよ」

「高町なのはが・・・。そうか、了解した」

「あっちも増援か、ヴィータまた、一対一だな」

「どちらかが、早く終らせりゃいい」

「そうだな」

「そう簡単にいくと思うな!!」

「行くぞ」

そうしてそれぞれの戦いが始まった・・・。

PHASE120 幸せの終わりと悲しみの始まり 上の下（後書き）

やや口調が・・・。

それでも頑張ります。

ご感想お待ちしております。

PHASE 121 幸せの終わりと悲しみの始まり 上の上の上

今のなのは先のヴィータとの戦いで一方的にやられてしまいボロボロで応援しかできない。それしかできない自分あまりに無力に思われ、歯がゆく感じた。

見ているところハヤトは先ほどののが戦った少女を圧倒的ともいえる強さで押していて、アルフとザフィーラという男性は互いに拳をぶつけ合い、互角に見える。

フェイトが一時ピンチになったときは思わず叫んでしまったがそこに現れたユーノが間一髪助けに入って、大事には至らなかった。そして加わったユーノと共にシグナムという女性と戦っていた。

――何か・・・何か私に出来ることはないのかな？？

なのはは悩んだ。ここで待っているように言われたが、見ているだけなのは嫌だった。

「私は今、何が出来るかな」
『マスター、スターライトブレイカーを使いましょう』

突然レイジングハートがそう言ってきた。

「ダメだよ、そんなボロボロじゃ、それに、私が制御をミスちゃうとレイジングハートが・・・」

なのははぼろぼろの状態であるレイジングハートを気遣う。大切な相棒であるためにこれ以上傷ついて欲しくないのだ。

スター・ライト・ブレイカーはなのはの持つ魔法の中で最も威力の高い最強の収束砲撃魔法。最悪の場合、レイジングハートがその衝撃に耐え切れずに崩壊してしまうかもしれないのだ。

それをなのはは何よりも心配していた。

『私はあなたを信じます。だからあなたも私を信じてください』

しかしレイジングハートはマスターであるなのはが制御を失敗するということは考えていなかった。まだあって一年もたっていないのに二人にはすでに固い絆が生まれていた。

「レイジングハート・・・。うん分かった、私もレイジングハートを信じるからレイジングハートも、私を信じて」

『勿論です』

そうしてなのはは全員に念話でこれから砲撃を放ち、結界を破壊することを言う。始め

は全員が無理をするなというが、なのはは大丈夫だといい構える。

『シューティングモード』

そうしてなのははスターライトブレイカーの準備をする

「レイジングハート、カウントを」

『カウントダウン、10、9、8、7、6、5、4、3、3、3』

レイジングハートが赤く点滅していた。

「レイジングハート・・・、大丈夫」

さすがに心配になる。

『問題ありません』

しかしレイジングハートはそんな自身が危険だということを露も
かもし出さない。

『カウントダウン、3、2、1』

しかしなのはがスターライトブレイカーを撃とうしたときだった・
・。

突然なのはの体から手が出てきたのだ。あまりのことになのはは
何がどうなったか分からなかった。一度手は引っ込むが、また手が
飛び出したと思ったら今度はその手に光る何かを持っていた。そし
て急に光が小さくなっていき、なのはは自身のからだから魔力がだ
んだん抜けてく気がした。それと同時にどんどん意識が薄れていく。

それでも皆を助けられないという気持ちではな等としていたが、
最後は気を失ってしまった。

その様子を見ていた全員がなのはを助けようと向かうとなのはは
倒れていた。

「なのはしっかり!!」

「なのは、なのは!!」

「なのは、しっかりして」

皆も集まり、敵も集まってくる。

「残りのお前らからも魔力いただくぞ」

グラーフアイゼンを肩に担いだヴィータが言う。バリアジャケットは続行されていた戦いにおいて、かなり傷ついていた。

「姿を隠している仲間がいるようだな」

そういうとすばやくその姿なき敵の仲間を探すべく飛び上がる。姿を現さずになのはに攻撃を与えたとなればその能力はかなり厄介だと感じた。翼を大きく羽ばたかせ、立ちふさがるヴィータに対してライフルモードの粒子弾で牽制すると、避けたところを横を通して探索をしながら飛んでいった。

「待てこの野郎!!」

ヴィータは遠ざかっていこうとするハヤトを追おうとしたがそれを遮る影が現れ、ヴィータはハヤトを追うことができなかった。

金色の髪を持つ女性が旅の鏡で白い女の子のリンカーコアを抜いて魔力を闇の書に蒐集させた。それにしてもすごい魔力によって二十ページは楽に埋まった。

それをこの眼で見たために、すごいとしかいえなかった。ここまですごい魔力が多い魔導師は早々いないからだ。

先ほどのような魔導師がたくさんいてくれれば楽に蒐集ができるが
早々魔導師ばかり狙っていると管理局に目を付けられ、最悪自分た
ちと主もろとも殺されてしまう。

せつかく得られた平穏……。それを壊されてたまるかという気持ち
だった。ふと女性が空を見上げるときらりと何かが瞬いた。星か
と思ったが、それは夜天を舞う天使であった。

「あれは!？」

大きな翼を羽ばたかせこちらに向かってくる未確認。あれは人間な
のか?？と思ってしまう。しかし、近づくにつれて、あれが依然先
頭にて、自分たちヴォルケンリッターの4人がかりでも逃げられた
人物であることが分かった。

「見つけたぞ!!」

「く!!」

「――早い!!」

とっさにソードモードにしたGNソードで女性に向かって斬りかか
る。女性はとっさの判断、ステップで回避するが、すばやくライフ
ルモードに移行し、距離の離れた相手に対して粒子弾を放つ。

「きゃあああああ!!」

もともと後方支援、攻撃手段もそれほど有していない彼女は戦闘
力が低いことが、前回の闘いで知っていた。

もろに喰らってしまった攻撃。防御がままならなかったために吹
き飛ばされる。そして追撃に回し蹴りを喰らい女性は吹っ飛ばされ

ビルに突っ込んだ。

シグナムは焦っていた。あの青と白の・・・ガンダムを・・・ハヤト・ブリッグスを探そうとしても今まさに斬りあっているフェイトが邪魔をしてなかなか行動に移せない。

その方向に行こうとすると次々と電気を纏った槍がシグナムの進行方向を妨げる。

――あのガンダムは強い・・・。

装思わせるほどの力や覚悟、そして何より経験がハヤト・ブリッグスとエクシアから感じられていたのだ。

それと比べて目の前のフェイト然り、先ほど仲間によってリンカーコアを蒐集されたなのは然りであるが、明らかに経験不足なのだ。

年が若いことも災いしてか、戦い方が明らかに素直すぎるのだ。それは魔法を使うようになるものなら当たり前のことだが、それは明らかに戦い・・・ここで言う戦いとはお互いの力を見せ合う模擬戦というわけではない。

戦い・・・それは彼女たちベルカの騎士が生死を分ける戦いに身を投じてきたからいえることだ。人を殺す、人に殺される。そういう命のやり取りの戦いには明らかに彼女たちは疎いのだ。

年のせいもあるか、それともこの世界は平和なのか・・・明らかに戦いという言葉の意味をしらな過ぎるのだ。そのために謎のガンダムと魔導師二人を比べると圧倒的にガンダムの方が危険なのだ。

何とかして早く見つけ出さなければ先ほどヴィータからの念話によるとあの青と白のツートンのガンダムがまだ見つかっていないシャルのほうに言ったということだった。

戦闘能力が自分たちよりも低い彼女の場合、あのガンダムとの交戦は明らかに危険だった。自分たちでさえ隙をつかれたとはいえ苦戦したのだ。

なんとか一撃を放ちシャルの応援に行こうとしたときだった……。大きな爆発があり、よく見るとシャルが放たれた射撃に包まれ、追撃の攻撃を受け、後方のビルに叩きつけられる様子だった。

シャルは目の前のガンダム……。ハヤトとエクシアとの戦いの中で、明らかに自分たちとは違う存在であることを感じ取っていた。

戦闘能力にしろ状況判断にしろ明らかに自分たちを超えていた。彼女自身戦闘の前線というよりも後方支援型であるために、ここでは攻撃する術をもたないためにかわすか、クラールヴィントでシールドを張るか、バインドなどで動きを止めるかするしかない。

ビルにめり込んでいる彼女に対して、その場から一気に加速し、GNソードを構えたハヤトが、シャルに対してそれを上段から斬りかかる。

「くー!! 防いでクラールヴィント」

『了解』

空気を切り裂くようなその攻撃に対してシャルはシールドを張り、

防ごうとするが徐々に剣がシールドを切り裂き、その部分からひびが入りこれ以上は無理だと判断し、その場を離脱する。

魔力の供給がなくなったシールドは切り裂かれ、ガラスを割るようにして砕け散る。あれだけの魔力を込めたシールドがいつも簡単に破られた。

その力の脱帽するしかなかった。

しかし、その隙を生んだのが悪かったのだろう。気づいたときには目の前に大きな翼を開いたハヤトとエクシアが再び、シャルルの目前に向かっていた。GNソードを構えるハヤト。

――しまった――！！

シャルルがそう思ったときにはすでに遅かった。

シールドを貼る時間も与えられずに近接距離に入られ、抵抗できずに剣が彼女の腹に食い込み、そのまま振り切られる勢いそのままに、シャルルは吹き飛ばされた・・・。

シグナムはフェイトとの交戦の途中大きな爆発音を聞き、いったん後退してその音がした方を見る。騎士として戦いの間に余所見をすることはしてはならないのだが、如何せん、今は仲間を助ける必要があった。

そして煙の中からバリアジャケットがぼろぼろになったシャルルが無抵抗のまま吹き飛ばされてきた。

「シャルル――！！」

とっさに現れたヴィータがシャルを受け止めた。どうやら慌てて追いかけてきて、飛んできたらしい。ほっと胸をなでおろすが、すぐに気を引き締める。

「シャル、何があった」

シャルは指を差しながら苦し紛れに言う……。

「あれは……あの青と白いものは……危険よ」

とシャルがそう言った瞬間にブンと何かを振る音と共に煙が吹き飛ばされる。そこにはGNソードを構えたまま、じっとこちらを見ているハヤトの姿があった。

「貴様ら、一体何をしようとしている??」

「お前が、お前がシャルを!!」

「ヴィータやめろ!!」

シグナムの静止を無視して怒りのあまり切れたヴィータは突っ込んだ。

「うおおおお!!アイゼン、ぶち抜け!!」

「交渉決裂、戦闘を続行する」

そういうと剣を構え振り下ろされてくるグラフ・アイゼンに備える。そして、炎を纏うとアイゼンとぶつかり合う。

「ギガント……シュラアアアアク!!」

剣とハンマーがぶつかり合い、すさまじい火花と金属音が響く。重量的に押されるハヤトであるが、オリジナルのGNドライブを更にフル稼働させる。

押されつつあったハヤトは少しずつであるがGNソードがグラーフ。アイゼンを押し返す。押し返されているのに驚愕の色で染まるヴィータ。そして、終にヴィータを一気に押し飛ばす。

そこからハヤトは早かった。すばやく肩の突起をつかむとすぐに抜き、GNビームサーベルを構える。

「そんなところにまで武器が!？」

ヴィータは鎧の突起がまさかビームサーベルは思っていなかったための驚きそのせいで一瞬気を向けてしまう。それだけでも十分な隙であった。

「隙だらけだ」

その2本のサーベルでヴィータを一閃二閃して地上へと叩き落した。その場にいたシグナム、シャマル、アルフから振り切ったザフィールはヴィータを軽くあしらったハヤトを睨みつける。

「うおおおおお!!」

拳を握り締めたザフィールが飛び掛る。ザフィールに対して近づけさせまいとライフフルモードで粒子弾を放ち牽制する。

しかし、さすがは盾の騎士であるのかまったくダメージが通っていない。

「はあああああ!!」

「ぐ!!」

拳が盾にぶつかり衝撃がハヤトを襲う。更に蹴りを放つとそれが横っ腹にもろに来てしまい、思わず肺の酸素をすべて吐き出してしまふ。

「があああああ!!」

ビルに激突し、よろよろと立ち上がる。そんなハヤトに対して好機だと、再び追撃を加えようと突撃するザフィーラ。

「俺は、俺達は・・・」

負けない。そう思い、立ち上がると再び突起を掴み、GNビームサーベルをダガーモードにしてザフィーラに投擲する。それに対して叩き落そうと拳を振り上げた瞬間にすばやくライフルモードによる精密射撃でダガーを狙い撃ち、ザフィーラの拳が当たる寸前でダガーが大爆発を起こし、それをもろに喰らったザフィーラも地上へと落ちる。

「ぐあああああ!!」

「貴様!!」

シグナムがシャマル、ヴィータの次にザフィーラまでもやられてしまい、ここまで仲間を傷つけられることにもはや我慢の限界だった。

レヴァンティンを構え特攻する。それに対してハヤトもライフルモ

ードからGNソードをソードモードに戻すと、構えてそれを迎え撃つ。

「ぬあああああ!!」

「うおおおおお!!」

剣と剣がぶつかり合う。空戦能力がある二人は空を高速で動き、交錯しつつ剣をぶつけ合う。

ハヤトはエクシアの翼を利用し大きく推進力を生み出して、加速し、シグナムに切りかかる。

重い一撃を受けるもなんとか持ちこたえるシグナム。そしてカードリッジをロードすると一気に魔力を高め、いったん後退すると・・・。

「レヴァンティン、シュランゲン・フォーム!!」

『了解』

葉莢が飛び出すとレヴァンティンの形態が変化し、シグナムの周りを浮遊する連結刃へと変わる。それにはやはり彼女のレアスキルである魔力変換資質の炎熱効果があった。

「飛龍一閃!!」

連結刃が炎を纏ってまるで鞭のようにしなりながらハヤトに向かってきたのだ。かわしきれないと思い、盾で撓る連結刃を押さえつけ、そのまま間に合わないにも刃を戻そうとしているシグナムに向かって、GNソードで斬りかかる。

シグナムは対応が間に合わず、やられると思ったが途中で横から魔力弾が飛んできて、GNソードを振り切ろうとしたハヤトに着弾した。

「一体なんだ!?!」

自分たちのほかに仲間はいないはずだ。しかし明らかに今の攻撃はまっすぐガンダムに向かっていった。

「!?!」

そうしてシグナムと共にハヤトは魔力弾が飛んできた方向を見ると思わず目を見開いてしまった。

最初は援軍であろうかと思い、目の前の女性を含む4人のほかにも魔導師がいるのだと思っていた。しかし、ハヤトの目に映るは、三つの全身機械装甲の機体であった。

背中から紅い粒子を出しているのはハヤトのエクシアが出していた緑色のものとは違っているものだ。

しかし、それは紛れもなく……自分の相棒と同じ……。

「何故そこにある……ガンダム!?!」

PHASE 121 幸せの終わりと悲しみの始まり 上の上の上（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 122 現るトリニティ 上

その空中に滞在する3体のガンダムを見たハヤトは思わず叫んでしまった。さらにその粒

子は明らかに自分のガンダムとは違う。

珍しく困惑するハヤト。すぐに明らかに自分と敵対するものだと理解する。そして何故彼女たちを味方するのか・・・。

「何者だ、貴様ら。何故ガンダムに乗っている」

「私はアイン。そしてこれはガンダムスローネ・アインだ」

「ガンダム・・・。やはりそれもガンダムか」

何故彼らがこの場所に、さらにMSモビルスーツを起動させているのか分からなかった。そしてハヤトたちと敵対している4人の援護射撃。彼女たちは協力関係なのだろうかと思った。しかし、隣にいるシグナムの様子からしてそれはありえないと思った。

「俺はツヴァイ。そしてこいつはスローネ・ツヴァイ」

「ツヴァイ・・・2か。ならそいつは」

「そう、あなたが考えているとおりよ。私はドライ。そしてこれはスローネ・ドライよ」

「数字・・・。お前たちは兄弟か??」

「ええ」

「そして何故俺を撃った」

「依頼主からの指示ですから」

「依頼主・・・??俺を殺すということか??」

「殺してしまってもいいんだけどよお」

「あんまりことを荒立てるなっていわれてるから、いたぶるだけで勘弁してあげる♪」

どうやらこのトリニティと呼ばれる彼らの後ろには今回何かを企んでいる黒幕がいるらしい。その黒幕の目的は何か。何故シグナムを援護したのか。

それでもまずは、傷ついたなのはたちをいったんアースラに戻すために時間稼ぎをしなければいけないと思った。すでに動いているのはたち。なら自分の役割を果たすのみ。

「エクシア、ハヤト・ブリックス。防衛ミッションに入る」

ライフルモードのGNソードを構え、牽制の射撃を始めた。

リンカーコアを抜き取られ、気を失っているなのはを急いでフェイトたちが乗ってやってきたアースラへと戻るべく急いでいた。

現在アースラは管理局本局の病院へ向かってる。アースラ内は、暗く重い空気が充満していたリンディは病院への手配。クロノとエイミーはさきほどの戦闘データを解析。なのはとさらに意識不明のスザクはアースラの医務室でまだ起きず、アルフ、ユーノはアースラ内での手伝いをしている。

フェイトたちも傷ついてしたがそれ以上に相棒であるデバイスはレイジングハートとバルディッシュの大破とゆう状態だった。じぶんたちを襲ったシグナムヴィータはどんな理由で襲ってきたのだろうかとフェイトは考える。しかし今の彼女に知るすべはなかった。

そうしてアースラはミッドチルダに帰還し、なのはは本局の病院へと搬送された。

管理局本局の病院では・・・。

リンディの表情には疲れが見えた。彼女はもう大変だった。なのはが倒れた。そして今はそのなのはは診察を受け終わり結果待ちである。

「リンディ艦長、なのはちゃんの、診察の結果が出ました」

診察結果の書かれたカルテを持ってやってきたのはエイミィだった。

「なのはさんは、どうなの??」

やはりアースラ内から見ていた光景はあまりいいものではなかった。

「なのはちゃんはケガは軽いのですが・・・。魔導師の魔力の源のリンカーコアが小さいとゆうことです」

「つまり、一連の事件ね」

最近起きていた魔導師だけではなく魔力を内包しているつまりリンカーコアを持ち合わせている生物たちが次々と襲われ、その魔力を奪われているという事件だ。

「はい、おそらくは」

リンディの推測にエイミィも肯定の頷き。

「なのはさんの容態は分かったわ」

「しばらくは絶対安静ってことね・・・」

「はい・・・」

フェイトたちが休んでいる部屋にリンディとエイミィが来た。

「なのはさんの結果でたわよ」

リンディがそれを言ったとたんにフェイトは勢いよく立ち上がり聞く。

「フェイトさんまず落ち着いて。なのはさんのケガはたいしたことないそうよ、ただ魔法が少しの間使えないだけだけど・・・」

「なのはは丈夫なんですね??」

ユーノも心配そうだ。あの時なのはから離れなければと後悔もあった。しかしそれをなのはに言ったとしてもアン尾羽はそれを責めることはしないだろう。高町なのはとはそういう人間である。

「ええ、大丈夫よ」

そう言われるとフェイトたちは安心したようだ。

なのはは目が覚めると目の前には知らない天上があった。

「なのは!!」

突然声が出たと思ったらフェイトが慌てて病室へとはいつてきた。どうやら自分が倒れてしまったのでかなり心配をかけてしまったらしい。

「ここは何処??」

なのはの記憶の中じゃこんな部屋は知らない。

「ここは、時空管理局の本局の病院の病室だよ」

フェイトにそう言われるとはつきりしてきた。自分が襲われ、皆が守ってくれ、そんな自分も何かして皆を助けようとスターライトブレイカーを放とうとしたら……。突然体から手が出てきて魔力がなくなっていく感じがしてスターライトブレイカーを撃とうとしたけど撃てなかった……。

それから数分が過ぎてから……。

「改めてなんだけど、フェイトちゃん久しぶり」

「久しぶり、なのは」

あの時は謎の魔導師たちとの戦闘でそんなことを行っている暇はなかったためによくいえたことに二人は笑顔になる。なのははベットから起き上がり、フェイトの所まで歩こうとするが……。

「キャ」

まだそんなに回復してなかったようでなのはは転びそうになる。

「なのは、大丈夫??」

しかしそんななのはをフェイトが支えてくれた。

「ありがとうね、フェイトちゃん」

「どういたしまして」

病室からなのははフェイトに支えられながら歩いた。おぼつか

い足取りだが、またあえたことがとても嬉しかった。

「なのは、フェイト、すまんがアースラに集まってくれ」

なのはとフェイトが歩いていると途中でクロノが話しかけてきた。どうやらあの魔導師たちとの戦いについての会議が開かれるのだろうと思った。本当はクロノにもなのはを連れて行くのに手伝ってほしかったのだが彼自身会社からの話があるということどこかへいつてしまった。

会議室に行くと、クロノ、アルフ、ユーノがいた。

「皆に集まってもらったのは今回の戦闘のデータがあるのでそれを見ましよう。それじゃあ、エイミィ、お願い」

「了解です、艦長」

リンディが、言うのと映像がでてきた。

「これはアースラによって保存された映像です」

スクリーンに映し出された。映像はハヤトがなのはを助けに来た時からだった。

負傷したなのはとフェイトを背負ったアルフたちがアースラへと帰還する時間を作るためにハヤトは突然現れた未確認のガンダム三機と戦うことになった。

ガンダムスローネアイン、ツヴァイ、ドライというらしい。

アインがドライとドッキングするとハヤトに対してGNランチャーを向けてきた。

「GNランチャー・・・発射」

「消えちゃえ♪」

抑揚のないアインと物騒な言葉を嬉々と言うドライ。赤黒い砲撃が放たれる。しかしそれを軽く回避するとライフルモードで反撃の射撃を放つ。

しかし、それをGNシールドで受け止められ、ドッキングを解除するとそれぞれ回避し、GNライフルにて反撃してきた。

更に追い討ちとしてツヴァイの猛攻が襲う。

「行けよ！！ファング！！」

6機の自立高機動型武装のファングが嵐のような魔力閃を放ってくる。

「く！！」

なんとか加速して嵐の攻撃の中を潜り抜ける。

「まだまだまだ♪」

ドライの豪雨のような連射を掻い潜りながら、アインの砲撃をGNシールドで受け止める。

「余所見してんじゃねえよ！！」

後ろからGNバスターソードを振り下ろしてきたツヴァイ。なんとかぎりぎりで半身になることで交わすことに成功する。

ーく、まずい。個々の実力が高いだけでなく、それぞれの連携もかなり研ぎ澄まされている……。気は抜けない。

三人が近くに集まったところを見越してライフルモードによる射撃を連射する。

「「!!」」

固まっていた三人がそれぞれ回避行動に移る。なんとか回避しようとして左右に移動するが、その際にアインのGNランチャーを打ち抜き、爆散させる。

「くう!!」

「「アイン!!」」

装備が破壊され、衝撃を浴びたアインは苦悶の声。それを聞いて叫ぶツヴァイとドライの二人。

いったんお互いにそれぞれ後退する。お互いに遠近両方戦えるが、アインとドライはどちらかというと遠距離を、ツヴァイはGNバスターソードとGNファングによる中近距離が得意に見える。

しかし三人の誰もが高い戦闘能力を有しているためにやや分が悪い。

「ちよろちよろうぜんだよ!! ファング!!」

再び6機のファングが襲い掛かる。

「!!」

嵐のような攻撃が再び降り注ぐ。必死に回避行動を取るが数発被弾してしまう。

「くう!!」

激しくからだに衝撃が走る。

「あたれ!!」

ドライの射撃が飛ぶ。GNシールドでいなしながらも回避する。

「はああああ!!」

GNランチャーを失ったためにアインがGNビームサーベルを構えて切りかかる。それに対して腕を蹴り上げることで軌跡を外し二発三発とライフルモードによる射撃でアインにダメージを与える。

装甲が少しはがされた状態でいったん下がるアイン。忌々しげにこちらを睨む。

「アイン!! よくもおお!!」

ドライの叫びと共に乱射されるGNビームライフル。その豪雨のような粒子弾の間を華麗にかわしながら近づき……。

「な・・・!?!」

一気に目前まで迫る。

「・・・」

ずっと肩の突起をつかみ、GNビームサーベルを構えると・・・。

「ハア!!」

一瞬で何閃もの斬撃を繰り出しドライの持つ武装をすべて切り刻む。

「きゃあああああ!!」

ついでとして、回し蹴りを繰り出し、ドライをビルに叩きつける。

「てめえ!!ドライまで!!」

「落ちて着けツヴァイ!!」

ドライがやられたことに切れたのかツヴァイが叫ぶ。それをいさめようとするアインであるが、その静止を聞かずに特攻する。

「行けよ・・・ファング!!」

再び縦横無尽に動き回り射撃してくるGNファングに対してハヤトは的確にライフルモ

ードで丁寧に射撃でGNファングを撃墜していく。

「なんだと!?!」

フアングが撃墜されたことに驚きを隠せない。

「ちっくしょおおおおお！！」

三人で戦っているのにかかわらずまったく落とすことができないことにとうとう我慢ならなかった。マウントしているGNバスターソードを構えるとハヤトを真っ二つにせんと振り下ろしてきた。

猛然とうなりを上げて振り下ろされるGNバスターソードに対してGNビームサーベルで受け止める。

「このやろおおおおお！！」

「はあああああ！！」

お互いに弾き、後退する。そしてもう全と再び加速してGNバスターソードとGNビームサーベルを構え、切り合う。

鏝迫り合いのたびに火花が散る。力は互角。ここまでオリジナルのGNドライブに対抗できるとは一体どんなものを搭載しているのかと思いたくなる。

交錯しあうたびにGNバスターソードとGNビームサーベルがぶつかり合う。しかしお互いに決定打にならない。

お互いに距離をとるとツヴァイはGNハンドガンにてハヤトはライフルモードでお互いに打ち落とそうと粒子弾を放つ。

しかし、お互いの粒子弾は機体にかすることはするも一瞬の動作で直撃をかわすという荒技にて決定的なダメージは与えられていなかった。

「ちい、このままじゃ、埒があかねえ」

苦々しく目の前を高速で移動し続けるハヤトとエクシアをにらみつけるツヴァイ。向こうから放たれてくる粒子弾をかわし、反対にGNハンドガンにて粒子弾を嵐のように浴びせる。

しかし、その粒子弾の間をぬって一気に距離をつめられる。

「ぐ!!」

そのまま蹴りを横っ腹に受け、吹き飛ばされる。

「ぐが!!」

吹き飛ばされながらもなんとか空中に踏みとどまるツヴァイ。しかし、今けられたことなどですでに頭に血が上りきっていた。上りすぎていた。

「なめるなああああ!!」

獣のような咆哮上げて、残っていた数基のGNフアングを放つ。牙がうなりを上げてハヤトとエクシアに襲いかかる。

「そんなもので」

次々と多角度から放たれる牙^{フアング}であるが、その攻撃を掻い潜り、ライフルモードの砲口を噴かせ、そのGNフアングを粒子弾によって沈黙させる。斜めから放たれたビームをGNシールドで受け止めるとそれに対してまず一発。そして振り向きざまに、今まさに放たれ

ようとしたところに粒子弾を打ち込み撃沈させた。

上がりきっていた血がゆっくりとだが下がり始めた。いな、すぐに沸点を超える。ぎりぎりとうなる握りこぶしを解放すると、すぐにマウントされていたGNバスターソードの柄に手をかける。

そう言いながら、バスターソードを振り上げ、ハヤトに向かって突進する。それを見たハヤトもすばやく、ライフルモードからソードモードへとGNソードを変更する。そして、振り下ろされるバスターソードに対して下から切り上げるようにしてGNソードを振るうハヤト。

「いい！」

それはツヴァイの振り下ろしたGNバスターソードだった。

驚愕するツヴァイ。完璧に打ち負けた。そう思っているツヴァイはそのときすでに決定的な隙を見せてしまっていた。ぞくりと背中

Nソードを折りたたみ、GNビームサーベルを持つハヤトがいた。そして、ツヴァイが回避も何もできないうちにその二本のサーベルから放たれて感激が機体を大きな衝撃で襲う。

「グアアアアア!!」

ツヴァイもまた同じく衝撃に押されてビルへと吹き飛ばされる。ビルを突き破る音と共に粉塵が上がる。

「ツヴァイ!!」

アインが叫ぶ。

しかし一向に声が返ってこないことから、気を失ったのかもしれない。ようやく一対一になった。

「少し痛みつけるだけにしかかったが・・・」

未だ動く気配のない二人の兄妹を見つめながらいう。

「弟と妹をやられたならば、いくら私でも我慢ができないな」

GNビームライフルを構えられる。

その照準はまっすぐに頭を狙っていた。

装甲を破壊し、直接叩き込めば殺傷設定なら殺すことができるだろう。激戦での精神と体力の疲弊による一瞬の静止、その一瞬のハヤトの隙を見逃さないアイン。すぐさまGNビームライフルを構え、

射撃する。

なんとか回避しようとするが、間に合わない。なんとか、GNシールドで防いでいるが反撃の糸口が見つからない。

「く。このままでは」

粒子弾を防ぎながら、ライフルモードで反撃しようとするも、先ほどの二人のように無謀にもつつこんでくるということはせずに、冷静に距離をとりつつ攻撃をしてくる。

次々と左手にもたれたビームライフルから放たれる攻撃で牽制され、それを交わしてもすぐに追いつかれビームサーベルで切りかけられる。

「落ちろ!!」

「ちい!!」

サーベルと盾が激突し、ものすごいスパークが走る。眼を閉じたくなったが何とか細めることで視界を失わないようにする。

GNシールドの耐久レベルもすでにレッドゾーンに達している。次に防げる時間はほんのわずか、次の瞬間には真つ二つになりハヤト自身にダメージが来る。

「ハアアアアア!!」

ハヤトは体をひねりサーベルによる攻撃はかわしたが、それを読んでいたのかアインはけりを思いつき腹に叩き込む。

酸素を一気に吐き出し、腹の中から何かが上ってくるような不快

感が感じられた。しかしなんとかそれを抑えるが、バランスを崩し、地面を滑って倒れてしまう。

「ふう・・・」

しかし、そんなことをしている暇はなかった。

「死をもって、世界に償いをしろ・・・“イレギュラー”」
「!!」

今なんと言っただろうか・・・。

“イレギュラー”

それは以前の事件において現れた未確認のMSモビルスーツが言った言葉である。その言葉をアインが言う・・・。

それが示すことは・・・ただ1つ。

「お前・・・たちはあのときのやつ仲間か!!」

「何のことか分からないが、君はこの世にはならない存在だ」
「なに?？」

生きとしいけるものの存在を決めるのは一体何か。その定義づけがあいまいである以上。ハヤトにとっても誰にとってもそれを決めることは難しい。しかし、ただ一人だけでも、言ってくればそれでいい。

“あなたは、ここにいていい”

それだけで・・・。

「お前たちがどれだけ俺を否定しようとも、俺自身は存在し続ける！！俺に生きろといってくれた奴がいたから、どれだけおまえたちに言われようとも、それは変わらないことだ！！」

「果てろオオオオオ！！」

GNビームサーベルを着きたてようと空中から切っ先を向けたまま落ちてくる。それがあまりにも遅く見えた。

死ぬ寸前とはこのような状態なのかもしれないと、ふと一瞬思ってしまった。

——死んだら、お前のところにいけるのか・・・カオル。

もし彼女がいたらどんなことを言うてくるだろうか。簡単に分かる・・・馬鹿というだろう。

——俺は生きている、ここにいる・・・存在しているんだ！！

「うおおおおお！！」

そして起動する、新たな力・・・。

『TRAN—SAM・機動』

GNビームサーベルを付きたてようとした瞬間、目標であったエクスアが赤く光りだした。

一体なんなのかと思いつながらも、躊躇なくそのサーベルを突き立

て・・・たはずだった。

「な・・・」

———一体、何が起きた!?

アインは困惑していた。

確かに付きたてたはずであった。エクシアはガンダム・スローネ・アインによってGNビームサーベルで串刺しになったはずだった。はずだったのに、切っ先はただ地面をつきたてているだけである。

———エクシアは!?イレギュラーは一体どこに!?

慌ててあたりを見渡すアイン。しかし、どこにもその機体の姿はない。そして、はっと

気づいたように上空の遥か彼方を見つめる。

そこにはきらりと光り赤い流星のようなものを夜天の夜に見た。

———まさか・・・まさか!!

その流星が徐々に大きくなってきた。そしてその流星の本性こそ、トランザム・システムを起動させたハヤトとエクシアであった。

「はあああああ!!」

GNロング・ブレイドとGNショート・ブレイドを構えたエクシアが呆けていて、一瞬行動を起こすのが遅れたアインに対してその切っ先で切りつける。

「ちい!!」

舌打ちをしながらアインがバックステップで回避行動に移る。しかし、一瞬送れたためかその剣先が腕を切り落とす。

そこからは血が噴出すことなく、そのままボトリと地面に落ちた。

「遠隔操作・・・、やはりあの時と同じか」

「己・・・よくも」

残った右腕に握られたビームサーベルを振るってくる。しかし、トランザムを起動している間、その剣筋は見切られ、まるで泊まっているようにハヤトには見えていた。

——時間は少ない・・・一気に決める!!

再び二本のGNブレイドを構えると加速する粒子を迸らせ、一気に紅い流星のごとき速さでガンダム。スローネ・アインの四肢を蹂躪していく。

アインもなんとか反応しようとするも視覚で確認できたのはすでにその場にいない残像のエクシアであった。

残っていた右腕とビームサーベルが切り上げられ、両足を横なぎに吹き飛ばされる、そして止めといわんばかりにその機体に二本のそれらを突き立てる。

——ば・・・馬鹿な・・・。

アインには理解できなかった。

くしくも嘗て同じくハヤトとエクシアに敗れ去ったあの未確認と同じように。その赤く美しい光を放っているからだを持ち、三対六枚の翼を広げている姿はまさに天使だった。

そして理解できぬまま、スローネの機体3体は同時に爆散したのだった・・・。

PHASE 122 現るトリニティ 上（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 123 現るトリニティ 下

「私が気絶してから、そんな事があったんだ」

圧倒的な強さを見せるハヤト・・・。

突如として現れた謎のガンダム。

そして激しい戦闘を繰り返すハヤトとその三機。

「あれが・・・戦い」

自分たちも闘いに出るならそうなることを覚悟しなければいけない、それはつまり殺される覚悟。

いつ自分の命を落とすか分からないという恐怖がいまさらになって襲い掛かってきた。

それでも彼女たちが何故なのは魔力だけでなく、そのほかの魔導師や魔法生物たちから魔力を奪おうとしているのか・・・知りたかった。

その後なのは達はある部屋に向っていた。その部屋はデバイスルームだった。入るところには、ユーノ、アルフ、そして傷ついたレイジングハート、バルディッシュがいた。

「なのは、お久しぶり」

「お久しぶり、なのは」

「お久しぶり、ユーノ君、アルフさん」

三人は笑顔で再会する。そしてなのははレイジングハートを見つめて心配そうにいう。

「ユーノくん、レイジングハート達の様子は」

「自己修復をかけてるけど、終わったら起動させてから、パーツを交換しないと」

「それにしても、あいつらが使ってた、魔法はなんか違ったよねえ」

かなりのダメージを受けてしまったデバイスたち。それは彼女たちに敗北という二文字を突きつけていた。まったく分からない未知の敵との戦い。自分たちとは違う・・・デバイスの機能、覚悟、そして何より大きいのは経験だった。

「あれは、ベルカ式だよ」

「ベルカ式??」

アルフの疑問に博識であるユーノが答える。フェイトはそのベルカ識というのが分からないために頭の上にはてなマークを浮かべている。

「ミットチルダ式と争った魔法文明でアウトレンジやミドルレンジをある程度無視をして、クロスレンジに特化した文化さ。さらにベルカ式の特徴は、デバイスにカートリッジシステムという圧縮した魔力を使い爆発的な力を得るのが特徴なんだ」

「カートリッジってのは、銃弾みたいもの??」

なのははヴィータとの戦闘のときに見せたあの葉莢を思い出した。

「まあ、そんなかんじだね」

その後クロノに呼ばれたのはとフェイトはその後についていった。途中、本局のモビルスーツの調整ルームにいたハヤトと合流して、歩いていた。

ハヤトはミッドチルダに来るのは初めてであり、今住んでいる鳴海市や以前の故郷であるアイオリスもそれほど変わらない町並みを見ていた。

それからして、クロノにつれられて、とある部屋に入ることになった。

「失礼します」

「クロノ、久しぶりだな」

中に入ると椅子に座っている男性がクロノに言う。

「グレアム提督、ご無沙汰してます」

今日はフェイトの保護観察の面接というらしい。そうしてグレアムの部屋で面接が始まった。しかし、面接というほど、重い空気ではなかった。

「保護観察官といっても名ばかりだ。フェイトくんの性格などほりンディ提督から聞いているよ」

グレアムはフェイトを気遣うように優しく話を進める。

「ありがとうございます」

グレアムが資料を見てると何かに気づいたかのように視線をあげ、
なのはに向ける。

「ん、なのはくんとは、日本出身なんだね」

「は、はい」

なのはは突然グレアムに話を向けられたので少し慌ててしまった。
そんななのはを見てくすりと笑うグレアム。そこまで緊張する必要
は無いというが、なのはにとっては管理局でも上の局員と会ってい
るので緊張は隠せない。

「私も、君達と同じ世界出身でね」

「どこの国に住んでたんですか？」

「私はイギリスに住んでいたんだ。それに魔法の出会い方はなのは
くんに似ている」

「私とですか？？」

「そう、私の場合は局員だったがね・・・」

どこことなくグレアムは過去を懐かしむような表情になる。それは
決して戻れない過去。それでも確かに子の足で歩いてきた道。

「さて、フェイトくんは、なのはくんの友達なんだね」

「はい」

グレアムの質問にフェイトは力強く答える。自分に代わるきつ
けをくれた戴せるな友達だから。

「私から出す条件は1つだ。君達を信頼する人を絶対に裏切っては
いけない、これが守れるなら私は君達の行動に制限はつけない。守

れるかい??」

「はい必ず」

フェイトは力強くそれに答えるのだった。

「それから・・・」

そしてなのはとフェイトから視線をその後ろに立っていた、明らかに異彩を放っている青年・・・年はクロノと同じなのであるが、身長からして、かなり年上に見られるようだ。

「君が、以前の事件にもビルスーツで協力を申し出てくれた・・・」
「ハヤト・ブリッグスです・・・」

いつもは名前だけであるが、さすがに本局、更には階級もかなり上のものだということで、最低限の敬意は払う。

しかし、ハヤトはその男の名前がギル・グレアムだと知ると、鋭い目つきで彼を見ると言うよりも、にらみつけている。

「――この男が・・・」。

以前はやての家に行ったとき、彼女の保護責任者であると言うものの名前がギル・グレアムであり、外国のものだと言うことは聞いていた。

そして、今しがた彼が地球出身であり、更に日本から見たら外国であるイギリス出身だと言うらしい。

これらのことから、彼がはやての保護責任者であると言うことが分かる。

「――この男・・・、魔道師だからあの違和感のある本を持つ八神はやてを引き取ったのか。」

以前ハヤトは日本だけでなく、世界中に広い情報網を持つ月村の力を借りて、ギル・グレアムと八神はやての細かな関係性から洗いざらい調べて貰っていた。

そして出てきた結果は、グレアムがそのイギリスにいると言う経歴が途中から途絶していること、そしてなにより、はやてとの血縁的なところから、その家族との交流すらないと言う。

そんな彼女が彼女を保護する利益はない。かわりのないのだから、同情というものもない。残りはひとつ・・・、八神はやてが何らかの彼らにとって重要なものを持っていると言うことだ。

そして、ある程度の予想はついている。あの時猫がじっとこちらに視線を向けていたとき、ハヤトが手に持っていた、あの本である。

「それに関して、地球を守ってくれた君にも感謝しなければいけない。ありがとう」

「別に、俺は世話になっている人たちが傷つかないようにしたかっただけだ」

「お、お前、失礼だぞ!!」

そんな上のものに対する言葉づかいではないはやとに対して、クロノはやはり、自身の上司だからということ、にらみつけ、そういう。

「まあ、クロノ。私は気にしていない」

「し、しかし・・・」

「いいから、今は彼と話をさせてくれないか??」

「わ、分かりました。すいません」

クロノはさすがにグレアムからそういわれるなら、下がらざるをえない。しぶしぶと言う表情で下がる。

「話がそれてすまないね、ブリッグス君」

「・・・」

「意外と難しい性格のようだね、まあいい。無理を承知でお願いしたいのだが、今回の事件の早期解決にはやはりモビルスーツの投入が必要なのかもしれない。だが、私の権限だけではアースラに一機をのせることも難しい」

「だろうな、未だに管理局は魔道師主義にすぎり付いているからな」

「お前、管理局を!!」

「ハラオウン執務官!!」

「!!」

グレアムがまた口を挟むクロノの対して口をつむぐように上司としてのにらみを利かせる。クロノから見ても、彼もまた管理局員であるから、ハヤトの言葉には我慢できないだろうと言うのが見える。

しかし、ハヤトの言葉もまた然り。モビルスーツのデータを奪っていったのは紛れもなく管理局。それを知るのはごく一部のみ。

組織の裏を知らぬ光の下で育ったものにしてみれば、一方的に冒涇されたとは思えないのだろう。

「それについては私も承知している。だから管理局のため……いや次元世界の平和のために、君のその機体『エクシア』の開発データと技術者を貸して貰えないか?？」

「……何かと思えば管理局のためか……」

誰にも見えないくらいの小さなため息をつく。

エクシアをとると言うことはこのオリジナルのGNドライブを奪われることになり、更に解体されるだろう。そして何より、月村家やバニングス家、彼らにかかわりを持つこのエクシアを開発にかかわったものたちの未来までも奪ってしまう、むしろ彼らの未来を狭めてしまっているのではないのだろうか、今この瞬間もまた……。

「……何故こうなってしまった……。いや、分かっていたはずだ。エクシア（こいつ）を開発することによって、関わりのあるものたちの未来を奪ってしまうことを……」

そして、今こうしてまた、彼らの未来を天秤にかけてしまっている。

しかし、絶対にそれだけは決められない、否決めてしまっただけはない。彼女たちはこれ以上戦場に出してしまったら、血で手を染めるものを作り出したりしてはいけないのだ。

「……あのマッドであれば、やめないかもしれないがな……」

などと、一心不乱になってコンソールを叩いている女性の姿が頭に浮かんだ。なら、ハヤトにできること、それは少しでも彼らに時間を作ることだ。

「事件解決には協力する」

「本当か、それは良かった」

「しかし、後の件については、断らせて貰う」

「・・・それなりの理由があるのかい??」

「正直な話、そんなことで彼女たちの未来を狭めたくないというのが本音だ」

「そ、そんなことは・・・。次元世界の平和をそういうのは君が始めてだ・・・」

グレアムはさすがに、苦笑いを浮かべざるを得ないようだ。ハヤトの後ろに立っているのはとフェイトもまた、そんなことを言うハヤトに対して困惑の表情で見ている。彼女たちは知らないかもしれないが、エクシアの開発には彼女たちの親友が関わっているのだ。関わったばかりに彼女たちの未来を勝手に決めてしまい、管理局に引き入れてしまえば、はっきり言って人生そのものを奪うことになる。それでも満足するものが一人だけいる、アリサとすずかはまだ小学生であり、それに彼女たちにはまだ目覚めぬ魔法の力が宿っている。

それを知ったらおそらく、管理局は彼女たちをも引き入れようとするかもしれない。それだけは彼女たちの意志であるが・・・。

――でぎれは戦場には出てほしくない・・・。

ハヤトがそう思うのは、当然戦場など任務で出て行けば、死と常に隣り合わせになる。それによって命を簡単に散らせてほしくない。それは嘗ての悲劇からそう思わせていた。

「彼女たちにとって、次元世界などに関わる必要がない。何ももビ

ルスーツの開発など、それが彼女たちの将来の夢じゃない。そう簡単に決めることは俺にはできないし、する気もない。そういうことは直接本人に言うべきだ」

「君はつまり・・・、彼女たちを守りたいと言うことか」

「居候を許してくれ、恩人でもある彼らを、簡単に売れるものか。俺を買いかぶるな、ギル・グレアム」

そういつて鋭い視線をぶつける。クロノからの話で、目の前の成年は今だ14歳であり、少年の部類に入る年齢であるらしい。しかし、その存在感はその年齢をはるかに超えているものであると、グレアムは感じていた。

「なら、エクシアのデータだけでも・・・」

「悪いが、それも拒否させて貰う」

「その理由は・・・」

「簡単だ、管理局が信用ならない」

「いい加減にしろ!!」

突然つかみかかってきたのはクロノだ。さすがに上司に対する態度、言葉遣い、そして何よりも自分が信じてやまない正義の組織である管理局が信用できないと言われて、もはや彼にハヤトに向けられていた苛立ちは沸点を超えていたのだ。

勢いあまってハヤトは後ろに倒れそうになる。しかし、掴み掛かっていたクロノの腕をつかむと、地球の武道で言う一本背負いを放ち、中央にあったテーブルに向かってクロノをたたきつけた。

ものすごい音が執務室に響き渡った。テーブルは壊れることはなかったが、クロノは激しく背中を打ったために悶絶するようにのた

打ち回っている。

なのはとフェイトはそんなクロノの元に歩み寄り、大丈夫かと声をかけている。グレアムもクロノのそばに行き、しゃがみこみながらもハヤトのことをにらみつけていた。

しかし、ハヤトは自身に忠実に行動したまでだ。アイオリスをあんな眼にあわせたのは管理局である。そんな異形生物を扱っているふざけた組織を信じるつもりはない。

「失礼する・・・」

何事もなかったようにして立ち去ろうとしているハヤト。そんな彼に声をかけられるものはいなかった。歯車は動き出していた・・・。

PHASE 123 現るトリニティ 下（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 124 小さな主と騎士たちの覚悟

シグナムたちヴォルケンリッターたちは戦闘を終え、八神家に帰宅した。

「シグナム、シャマル、ボロボロで一体何してたん??」

二人の様子を見て心配そうに聞く家主の八神はやて。

「主はやて、私は少し剣道場で熱くなりまして・・・」

などと嘘を言うつ。

「私は買い物帰りに坂で暗くてドジを踏んで転がり落ちちゃったんです・・・」

などと同じく嘘を言う。

「なら、しゃあないなあつきからはきいつけてな」

「はい」

どうやらお風呂が沸いたらしい。はやてが一緒に入ろうと誘っている。

「シャマル、ヴィータはいるうか」

そうしてはやて、シャマル、ヴィータがお風呂に入ってく。シグナムたちはハヤトとの戦闘中、謎のガンダムに介入された。彼女らはどうやらハヤトと敵対しているらしかったので、その隙を突いて

気絶している三人を回収し戻ってきたのだった。

その後傷などはあらかたシャルの残りの魔力で治癒することはできたがかなり疲労があった。なのはからの蒐集である程度闇の書が埋まったが、最悪なことに管理局に目をつけられてしまった。

「さすがに、危なかったな」

「ああ、あの翼を持った魔導師は危ない」

あの強さは異常だった。

闇の書の守護騎士を圧倒する力。束になっても冷静な判断で各個撃破してくる。あの時シグナム自身がやられていたらきつと今は管理局に捕まっていたかもしれない。そうなると誰も主を守護することができなくなり、守れない。

そう思うだけでぞっとする。

今までの主たちとは違う八神はやてという少女。自分たちをただのプログラム、道具とは扱わず、普通の人間、自分の家族だと思ってくれている。

それがどれだけ嬉しいことか。今までそんなことがあったらどうかと記憶の海へと思いをはせる。

「シャル、ザフィーラ。今後は主はやての近くにいてくれ。それにしても管理局から目をつけられた以上魔導師からの魔力の蒐集は止めた方がいいだろう」

「ではどうする??」

魔導師からの収集は管理局が神経を尖らせて見張っているのかつに手は出せない。それは最悪の場合の非常手段として、今のところは相手の気を別の方向へと向かせておかなければいけない思っていた。

「違う世界の魔力を持っている生物にしよう」

魔導師がだめなら魔力を持つ生物しかない。なるべく多くの魔力を持つものを選別して倒していくしかないと思った。

「そして行くのは、私とヴィータだ」

戦闘能力にたけた二人が行くのがベストだろうと思った。

「気をつけろよ」

「ああ、分かっている」

ザファイラが気をつけるようにいう。あの時は謎の紅い機体が割り込んだために助かったが、またあの翼を持った魔導師が現れるとそれさえも危うくなる。

しかし、彼女たちは主の為に止まるわけにはいかないのだった・・。

PHASE 124 小さな主と騎士たちの覚悟 (後書き)

ご感想お待ちしております。

追記 先ほど誤字を発見し修正しました。

PHASE 125 新しい生活 上

なのは達はリンディに呼び出され集められた。なんでも、リンディが大切な話があるということ。ある人を含めて話すそうだ。

「さて、アースラスタッフの皆」

リンディの言葉は真剣みが漂っていた。それだけ今回のロストロギアは危険なのだろう。

「私達の任務は、ロストロギア闇の書の搜索、魔導師襲撃事件の捜査です。しかしアースラは整備中なので、動かせません、そこで、事件の中心の世界のなのはさんの所に臨時本部を置きます。場所はなのはさんの保護をかねて、なのはさんの家の近くね」

つまり、フェイトと近くということだった。なのはたちは海鳴市のマンションにやってきていた。フェイト達のマンションはなのはの家のすぐ近くにあった。

——これなら行きも帰りも一緒なの。

そう思うと嬉しくなった。なのはたち4人はベランダにいた。

「私の家が見えるよ」

「どこなの?? なのはの家は」

嬉々として今まで離れ離れだった関係が一気に近くなったことにフェイトは嬉しそうだ。そのごなのは達は、リビングに移動すると。そこには、フェレット状態のユーノと子犬形態のアルフ。

ユーノがいた。彼はまたなのはの家に居候させてもらうらしい。

アルフがいた。彼女はフェイトの使い魔であり、大切な家族だから。

「なのは、フェイト、友達が来たぞ」

クロノが話しかける。

「「はい」」

なのはとフェイトが玄関に向かう。ドアの向こうには・・・。

「こんにちは」

「来たわよ」

親友の月村すずかとアリサ・バニングスが遊びに来ていた。

「アリサちゃん、すずかちゃん」

「初めましてかな」

なのはとフェイトは笑顔で迎える。

「ビデオメールで何回も挨拶してるからね」

「これからよろしくね」

彼女たちは実際に会うのは初めてであるがこれまで何度もお互いにビデオメールを送っていたために養子や性格などを知っていたのだ。

「あら、お友達?？」

奥からリンディがやってくる

「「こんにちは」」

アリサとすずかは挨拶する。二人に対してリンディたちも彼女たちのことを知っている
ので挨拶する。

「確か、アリサちゃんとすずかちゃんだったわね、ビデオメールを見させてもらったわ」

「「はい」」

リンディはフェイトがビデオレターを作るのに当たって色々協力してくれていたのと一緒に見ることもあり、アリサとすずかのことは知っているのだった。

「皆でお茶してきたら」

「そうね、親睦を深めるのもいいかもしれないわ」

「なら私の家でやろ」

「それなら私たちも行っって挨拶しないと、ちょっと待ってね」

リンディが、準備の為家の奥に行った。

「あの人がフェイトのお母さん?？」

「きれいな人だね」

「うん」

翠屋では皆が集まりお茶とケーキを楽しみながら色々話した。鳴海市のこと、自分たちの学校のこと、趣味や習い事のこと、フェイトの住んでいる外国のこと。なのはとフェイトの出会いについてなどだった。途中リンディがあるものを持ってきた。何かが箱に入れてあって中に入ったのが・・・。

「お、お母さん。これは一体何!？」

中に入ったのはなのは達と同じ学校の制服だった。どうやらリンディはなのはの両親である士郎と桃子に挨拶をしていたみたいだ。

「転入届出しといたから、明日から、なのはさんたちと同じ学校よ」

これから義理とはいえ娘のフェイトにはたくさんの友達を作ってもらい、楽しい思い出を作って欲しいと思っていた。彼女は小さい頃から自分やアルフ、もういなくなってしまったプレシアや彼女の使い魔であったリニスとしか話したことがなかった。

そのためもあってかやや引っ込みじあな性格になってしまったらしい。しかしやり直しをかけているフェイトたち。そんな彼女には幸せになってほしかった。

「お、これはフェイトちゃんも同じ学校か」

「よろしくね、フェイトちゃん」

士郎と桃子にとってもなのはに友達が増えることは嬉しいことだった。それに近くだということで家族ぐるみの交流も増えるだろうということ自分で自分たちも楽しみであった。

「あの、よろしく願います」

緊張気味であったが嬉しそうに言うフェイト。さっそく明日からフェイトはなのは達と同じ学校に行くことになった。

待機しているエイミーは本局のデバイスルームにてなのはたちのデバイスの修理や補強を担当していたマリエル・アテンザから連絡が来ていた。どうやらなにか問題が出たらしい。

「あとまだ問題が・・・」

「どうしたの??」

「先輩が預けたインテリジェントデバイスがエラーコードが出てるんですよ」

「エラーコード??? どんなのこっちに送って」

困惑気味にいつてくるマリエルの言葉を聞いて、エイミーはこちらにデータを送るようにという。そうして数分後にそのデータが来た。

そしてそれを見てエイミーは驚いた。それはレイジングハート、バルディッシュがカートリッジシステムを搭載してくれと訴えていたのだから。デバイス達が力を求めてきたのだ。ただそれは自分たちのマスターを守りたいという気持ちからだった。

PHASE 125 新しい生活上（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 126 新しい生活 下

なのはたちが翠屋にてフェイトのお眼で塔の小さなパーティーをしているのと同時刻。月村邸の地下室にある研究室には展開されたエクシアの姿があった。それを見ている使用者であるハヤトと、コンソールを叩きながらモニターを見ている月村忍と、専属メイドのノエル姿もあった。

彼らがここにいるのは、エクシアの調整と武装の実験であった。

しかし、今回の出勤において、ハヤトはトランザム・システムを使用してしまっていたので、入念な調整が必要とされていた。

今日戻ってくる前に、忍に対してトランザムを使用してしまったことを言うと、すばらしいくらいの笑みで、その後ろには得体の知れない黒い物体を見たハヤト。無意識に怒られると身構えてしまった。

当然のごとく、月村邸に着くや否や、エクシアを強制展開され、いたるところにケーブルを差し込まれてしまっていた。

モニターに映し出される各部分の破損率などであるが、かなり歪みが大きくなっているのが見えた。小さくため息をつく忍であるが、そうでもしなければやられていたのかと思うと、仕方のないことなのかもしれないと思う。

それにしても、これから実験する武装にしても、もしかしたら、空中分解の危険性も考えられなくなる。

それについてはハヤトも百も承知である。

しかし、どうしても最後のこの開発中であるこの武装がかぎになりそうだというのがぬぐえなかった。

「はぁ・・・、これくらいならなんとかなりそうだけど・・・」

小さくため息をついて振り向く忍。研究できることはうれしいが、余りは損を進めてほしくないというのが表情から見て取れた。

それに対しては、ムムムっと小さくうなるしかできない。

それに対しての反論はできない。無論それに関することははやとでもできる。しかし、設計図はできても、それ以降ができないとなれば意味はない。知識があっても、腕がない。まさに頭でっかちなのである。

それと比べて彼女はまさに天才であった。だからこそ、彼女にはエクシアに関しては頭が上がらないのであった。

「戦闘に出られるくらいまでなら補修はできるわ、でも、絶対にトランザムは使わないこと」

「了解した・・・」

「もし使ったら、あなたの命はないと思ってね」

「善処する・・・」

忍に有無を言わせぬような口調で言われるために、ハヤトはそれを受け入れるほかなかった。今後彼女たちがどう動くか、また大きく物語が動くのではないかと、そうハヤトは不思議と感じ取っていた・・・。

PHASE 126 新しい生活 下（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 126 それぞれ平和な一日

ゆっくり瞳を開けるシグナム。どうやらもう朝になっていることに気づく。どうやらリビングで寝てしまっていたようだ。

「おはようシグナム」

朝食を作っていたはやてがシグナムが起床したことに気づいて挨拶する。それに対してシグナムも返す。

「おはようございます、主はやて」

主であるはやては自分たちを人としてみてくれている。今までの主とは違っていたために最初はシグナムもほかの三人も戸惑いを隠せなかったがそれでも温かみを感じつつ、今はもう本当の家族のよう暮らしている。

「また夜更かししたん」

「はい、すみません」

夜遅くまで立ち回っていたために寝る時間が遅くなっていた。しかし泣き言を行っている暇はなかった。そう、主であるはやての命にかかわることなのだから。はじめはシグナムとヴィータだけだったが、ザフィーラとシャルが援護をし昨夜は異世界のリンカーコアを持つ人以外の生物から蒐集を行っていた。管理局に目をこれ以上付けられたくないために魔導師は襲わないことにしているが逆に魔導師に襲い掛かれたら魔力を蒐集していいことにしていた。

「みんなお寝坊さんやね」

「すみません、主はやて」

たとえばやてに起こられようと彼女たちにはやらなければならないことがあるのだ。自分たちにとって大切な主を守るために……。

高町家の近くにテストロッサ家とリンディ、クロノがすみ始めた日から翌日、フェイトが今日からなのは達と同じ学校に通うことになった。フェイトは留学生として来る予定らしい。さて今は朝のホールーム中である。

「さて今日は外国からの留学生が転入してきます」

なのはたちは機能のうちにフェイトが転入してくることを知っていたが、それでも新しく来る友達であるために楽しみにしていた。

「フェイトちゃん入ってきて」

担任の教員がフェイトを呼ぶと恥ずかしそうに返事をしたフェイトがやはり穂を紅く染め、緊張しながらも中に入ってきた。

やはりこのように大人数で集まるところになれていないのだろう。

「フェ、フェイト・テストロッサ・ハラオウンです。よろしく願います」

緊張しながらの自己紹介だった。恥ずかしかったと思ってるうちに、休み時間がきてフェイトは今質問攻めにあってる。

「向こうの学校ってどんなところ？」

などと色々質問されてフェイトがオドオドしてると・・・そこに救いの手が差し伸べられる。

「ちょっとみんなフェイトが困ってるじゃない。質問は順番に1人ずつ」

クラスのリーダーであるアリサが助けてくれた。

「ありがとう、アリサ」

こんな感じで初めての学校は終わったその後4人でフェイトの歓迎会を開いたりもして、充実した一日になった。

現在なのはとフェイトは高町家のなのはの部屋にいた。

「私はすぐに倒されちゃったからあまり分からないな・・・」

現在二人で子の前の戦いについて考えていた。突然襲い掛かってきた魔導師。まったく歯が立たなかった。

「フェイトちゃんはどう？色々話してたみたいだけど・・・」

なのははシグナムと話をしたフェイトに聞く。

「私は少なくとも、あのシグナムって人からは、邪念みたいなのは感じられなかった」

剣と剣を交えることで感じられたそれ。シグナムだけでなくなの

はと戦ったヴィータも、なのはから魔力を奪ったシャルも、アルフと交戦したザフィーラもまた自分たちの行動が犯罪であることを知りながらも何か確固たる物のために戦っていることを感じていた。

「私は話を聞きたかったけど、そんな話を聞ける雰囲気じゃなかったから」

なのはの話をしたという言葉にまったく聞く耳を持たなかったヴィータ。彼女の必死な表情から何か追い詰められているようにも見えた。

「一度自分の意志を固めると他の人の声ってなかなか入らないから・・・」

私もそうだったからと付けくわえられるフェイトの言葉を聞いてはっと思いきこされる。なのはとフェイトの初めての対面・・・それはまさしく敵同士だった。

なのははユーノの手伝いと鳴海市に被害が出ないようにするために魔導師として戦った。対してフェイトは自分の母親であるプレシアのためにジュエルシードを集めるために魔導師として戦った。

自身も思い出したのかフェイトの目が悲しみに染まってる。

「でも私はなのはの言葉を聞いて、かなりゆれたから」

あれだけかたくなに敵対することを通していたフェイトが最後は一緒に戦うところまで心を開いてくれた。

「だから、なのは言うのは無駄じゃないよ」

今度もきつと・・・それに今回は二人なのだから。

「うん」

なのはもフェイトがいてくれることで心強かった。すると突然なのは携帯電話にメールが届いた

「それが携帯電話??」

フェイトはものめずらしそうにして携帯を見つめる。

「うん、そうだよ」

どうやら送り主はクロノらしい。

「クロノ君からのメール」

「どんな内容なの??」

クロノ君からのメールの内容はデバイスの修理はあと一週間もすれば完了するということらしい。後はフェイトに夕食まで帰ってくるようにということだった。

PHASE 126 それぞれ平和な一日 (後書き)

感想お待ちしております。

PHASE 127 真実への序章

暗い空間だった。何も見えないただただ真っ暗な闇が覆い尽くしているような空間。他事か自分はエクシアの補習を見てから、部屋に戻り、ベッドに入っていたはずだ。

「ここは・・・どこだ?？」

ハヤトは周りを見渡して言う。

「俺は確か・・・あいつら、ガンダムスローネと戦って」

思い出される鳴海市での新たなるロストロギア事件。

「ドライを倒し・・・」

ビルへと蹴り飛ばしたのを覚えている。

「ツヴァイを倒し・・・」

相手の感情的になったところについてビルに吹き飛ばした。

「アインと倒した・・・」

あの時と同じ未確認のように、遠隔操作していたらしい。アインに続いてツヴァイも、ドライも爆発し、消え去った。今は自分が生きているのか死んでしまったのかは分からない。そんな不思議な感覚に陥っていた。

「しかしここは一体・・・」

今まで体験したことのないような光景にやや戸惑いを持つ。

「・・・」

「ん??」

どこからか声がしたような気がした。

「ダレモガ・・・ワタシノソンザイヲヒテイスル」

嗚咽にも似た涙声を出している女性のようだ。

「誰だ。誰かそこにいるのか??」

ハヤトは覗き込むようにして闇の奥を見つめる。

「ダレダ・・・ココニコレルニンゲンナドイルハズガナイノニ・・・」

「

フツと闇から現れたのは銀色の長い髪、透き通るような青い瞳、
長い黒色のバリアジャ

ケットを着た女性だった。

「お前は・・・」

眼を見開いたハヤトであるが、その瞬間に押し寄せてきた黒い物
体によって後ろに流されていった。

PHASE 127 真実への序章（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 128 新たなる力 上

時空管理局にて今日は修理に出していたなのはとフェイトのデバイスが帰ってくる日でもあった。あれから1週間がたった。あれから自分たちに何ができるかを考えていた。やはりできるのはちゃんと言葉を交わしてどうしてそんなことをするのかを知ることだった。

前回の戦闘で魔力を奪われたなのはは病院で診察を受けに行っている。そのためユーノ、フェイトは先にはデバイスを取りにいった。

「ありがとうございました」

どうやらもうリンカーコアには問題はないようだ。お礼を言っ
てその場を退出すると。

「なのは」

そこにユーノ、フェイトが来た。

「なのはどうだった?」

やはり負い目があるのだろう。あの時自分がその場を離れなければなのはがぁんなことになることはなかったのに……。それを引きずっていてもなのはは気にするなというだけだろう。高町なのはとはそういう人間である。

「バッチリ、レイジングハート達は?」

自身のこともそうだが、やはりあそこまでぼろぼろになってしま

ったデバイスのことを心配するのは当然であろう。

「こっちも無事に」

なのはの言葉にほつとする。そうしてユーノは、レイジングハート達を出した。傷は完全に修復されているようだ。

「なのはは、レイジングハート」

「ありがとう」

それから、なのは達は転送ポートで帰る途中にエイミーから呼び止められた。

「なのはちゃん達、今どこ」

エイミーがあわてて通信をしてきたのだ。

「どうしたんですか??」

エイミーの慌てっぷりから何か大きなことでも起きたのだろうかと思った。

「闇の書の守護騎士達が確認されて今交戦中なんだけど、相手が強くてクロノ君しか相手にならないの、だから行ってくれる」

「行きます」

こうしてなのは達は、再び守護騎士達と戦うことになった。次は相手の戦う理由を知りたいという確固たる決意を持って・・・。

クロノたちは苦戦していた。否もはやクロノは苦戦しているといった方がいいかもしれない。現在進行形で戦闘は繰り広げられているがS2Uを構えるクロノの周りには撃墜され、気を失っている魔導師たちが倒れている。

あれだけの数がいたにもかかわらず守護騎士たちにまったく歯が立たずに撃墜された。

――強い……。守護騎士達は強すぎる！！

クロノ自身今のところ足止めというより彼女たちの蒐集活動を邪魔することしかできていない。倒すなどクロノ自身無理だと思っていた。

「うわあああああ！！！」

また一人局員がやられた……。クロノ以外の局員は結界を張っている人以外はやられたようだ。

更にあの謎のモビルスーツも現れており、そこには一体スローネ・ツヴァイがいるだけであるが、一騎当千の強さを見せ付け、守護騎士たちの蒐集活動を守りながらも、迫る武装隊たちに対してファングを放ち、縦横無尽に動き回るファングが武装隊たちの死角からビームを放ち、次々と意識を刈り取っていく。

「行けよ、ファング！！」

再び放たれたファングにおびえて魔力弾を花粒総体。しかし、その速さについてけず、打ち落としたとしても、その隙に間合いを取られたものたちはGNバスターソードによって撃沈させられる。

「何だよ、つまらねえええなああああああ！！」

一人また一人と、振られるその大剣によって意識を刈り取られる。そこから離れている場所にて……。

「この程度かよ、時空管理局の局員は」

「我らの前では、いないに同じ」

クロノの前には、今は紅いバリアジャケットの少女と男性しかない。

しかし二人の言葉通り、自分以外の局員たちは倒され、さらには蒐集されてしまったようだ。

「雑魚ばかりだけどかなり頁は埋まったな」

「あの黒服を倒したらより一層頁がうまる」

まさに自分を倒さんとする二人に対しても戦意はそがれることなくクロノはデバイスを構える。すると突然連絡が入る。

「クロノ君、大丈夫??」

エイミーから通信だった。

「僕以外の戦闘できる局員はいない」

「安心して、超強力な助っ人がそっちに行ったから」

「え??」

思わず変な声を出してしまった。強力な助っ人??とそう考えた

時転送魔法が発動したのだ。

「なのは、フェイト!？」

やってきたのはその二人だった。

「クロノ君、後は私達に任せて」

長期の戦闘を行っていたためにクロノは魔力も体力も尽き掛けた。そこに頼もしい援護が着てくれたため、正直助かったと思った。

「いくよ、フェイトちゃん」

「うん、いこう」

なのはの言葉にフェイトが答える。二人は自分達の相棒を出して叫ぶ。

「レイジングハート」

「バルディッシュ」

その時、いつもと違っていた……。

「なんなの……これ??」

なのはたちのバリアジャケットが展開がなく代わりに魔法陣が周りに展開した。

「みんな落ち着いて聞いて」

エイミーからの通信だ。

「その子達は、自分で望んで新しいシステムを入れたの。だから、その子達に新しい名前をあげて」

新しいシステム。それはデバイスたちが自らマスターを守るために得た力。

「レイジングハート・エクセリオン」

「バルディッシュ・アサルト」

「セットアップ」

「バリアジャケットが違う・・・」

「私もだ・・・」

なのはたちは自分たちの変化したバリアジャケットに一瞬目を奪われた。溢れんばかりの力。デバイスたちが臨んで手にした力。なら自分たちはそれをしっかりと受け止めなければいけない。今の彼女たちの目的は目の前の守護騎士たちを倒すことではなく何故そんなことをしているのか、理由を聞きたかった。

「あなた達は、なんで闇の書を完成させようとするの」

「私達に戦闘の意志はありません」

二人はまず目の前にいる少女に話しかける。

「ベルカの諺に、和平の兵は槍を持たないってのがあるんだよ」

いきなり遠回りの言葉と言ってきた。なのはとフェイトは理解できないため首をひねるだけだ。

「つまり、和平の兵は武器を持たないとゆうことだ、バーカ」

「いきなり攻撃してきたのが言うセリフなの!？」

なのはが叫ぶがそれは正しい。なのはに対していきなり和平も減った暮れもなく攻撃してきたのは目の前の少女なのだから。

「ヴィータ、それは小話のオチだ」

ザファイラが冷静につっこむ。

「変わんねえよ」

変わらないのかどうかは分からないが・・・。

「つまり、和平は決裂ってこと？」

「だから、そうだって言ってるじゃねえか」

「気をつけるヴィータ、ザファイラ、奴らからは以前はない力を感じる」

雰囲気から察したのか突然あらわれたシグナムががいう。なのはたちのデバイスの性能と圧倒的な経験の差であった。それを見たとシグナムたちは自分たちと同じカードリッジシステムが搭載されていることを知る。

「強化してきたか」

以前戦ったとき完膚なきまでに叩きのめした彼女たちだが、勝てたのはデバイスの性能と圧倒的な経験の差であった。それさえなくせば彼女たちとも互角以上の戦いができる才能を持っていると感じていた。

強い相手・・・いつもなら嬉々として戦っているだろうが今はそうもしていられる暇はなかった。

「なのは、私はシグナムと戦う」

「あたしはザフィーラって奴を」

「分かったの、私はヴィータちゃんと」

こうして戦闘が始められるのだった。

PHASE 128 新たな力 上（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 129 新たなる力 中

なのははヴィータとの戦闘を開始していた。

「結局戦うんじゃないかよ」

ヴィータがつっこむがそれは彼女がまったく聞く耳を持たないためでもあるが、一応彼女

女の台詞ももつともだと考えられる。

「私が勝ったらお話聞かせてね」

「知らねえよ」

ヴィータは4つの鉄球で攻撃してくるがそれをなのはは空を飛行し回避する。

『マスター、アクセルシューターを』

「わかったの、アクセルシューター!!」

なのはの周りには10個のアクセルシューターが作られる。今まで以上の数である。

「そんな数、操れるわけねえだろ」

確かにいきなりこの数は無理だろうと鷹を括るヴィータ。確かについ最近搭載したシステムを簡単に扱えるわけがないのだが……。

『マスターならできます!!』

レイジングハートの言葉に励まされ、アクセルシューターを放つ。

それは寸分狂いなくヴィータへと襲い掛かる。

「ちー!!」

ヴィータはバリアを全方位にして防御に集中した。

「ちーなんて数だ……。しかも威力もある。」

まさかこの数を扱えるなどとは思っていなかったなので内心焦る。

「ちー才能か……。確かにあたしたちよりも強くなるだろう……。だけど。」

「こつちにも譲れないものがあるんだ!!」

ヴィータがなのはの攻撃をしのぎきる。しかしさらになのははカードリッジをロードして魔力を挙げると……。

「ディバインバスター!!」

。凌ぎきったところにヴィータに対して桃色の砲撃が放たれた……。

フェイトはシグナムと対峙してるがいくらカードリッジシステムを搭載したからといって剣術や経験のさがありシグナムは強い。

「「はああああ!!」」

レヴァンティンとバルディッシュがぶつかり合い火花が散る。フェイト歯磨きが掛かった高速移動によってシグナムの資格から攻撃を仕掛けるが、シグナムは気配を察知したり、微妙な空気の流れを呼んでフェイトの攻撃を受け止めて反撃する。

フェイトは移動スピードはあるがどうしても攻撃力が足りない。そこは魔力性質変換によって補われているが、どうしても素の状態ではシグナムに遅れを取る。

フェイトは罅迫り合いからいったん後退すると。

「バルディッシュー!!」

『プラズマランサー』

「ファイヤー!!」

電気を纏った槍を数発シグナムに放つ。それを回避するシグナムであるが。

「ターン!!」

交わしたはずのそれが向きを変えて再びシグナムを襲わんと向かってきた。その攻撃を避けきるのは無理と判断したのかシグナムもまた剣を構える。

「レヴァンティン、カードリッジロード!!」

『エクスプロージョン』

魔力変換した炎の斬撃でそれらを打ち消した。しかし、打ち消す時の爆風を利用して、フェイトは切り掛かる。しかしシグナムもま

たレヴァンティンを変形させて防いだ。

なのはとフェイトが新たな力を得て、ヴィータとシグナムに戦いを挑んでいるのを見てスローネ・ツヴァイはつまらなそうにして、それを見ていた。

ここにいつも一緒にいるはずの、ハヤトの姿がいないためであった。

「ち、つまらねえな。本気で殺しあうから面白いって言うのに・・・」

ツヴァイたちトリニティとしては、手っ取り早く殺してしまったほうがいいのである。更にこのツヴァイ、かなりの戦闘狂であり、ただの戦いではなく、本気での殺し合いが好きであるから殺さずに倒すというのを依頼人から言われていたのでかなりストレスがたまっていた。

だからといってもビルスーツに火殺傷の魔法が聞くことはなく、戦うとなれば、殺す覚悟で殺傷設定で来なければ意味がないのである。

だからといって彼女たちがそうしてくるとは到底思えない。

「何せ、甘ちゃんの管理局員だからな」

基本的に管理局では相手を傷つけずに捕まえるために非殺傷設定を使う。しかし、それではモビルスーツの装甲には傷を付けられない。それが管理局やアイオリスなどが所有するもビルスーツであれ

ば非殺傷でもダメージは通るだろう。

しかし、相手はそれをも上回る性能を持つ、ガンダムである。それに彼女たちはこちらのことに気づいていない。ここからファングで攻撃することで、一瞬で沈めることもできる。しかし、ぎりぎりまで彼女たちには動いて貰わなければいけないので、うかつに戦いを仕掛けることはできないでいた。

そのときだった、突然アラートが鳴り響き、何かとセンサーに反応があった方向を見る。すると転移してきたのか、そこにはエクシアを起動させたハヤトが現れた。

「来たか・・・」

思わず舌鼓をしてしまう。これであの時一方的にあしらってたお返しができると言うものだ。

「スローネ・ツヴァイか・・・、あの武装隊たちをやったのはお前か」

ちらりと倒れている武装隊たちに眼を向けながら言う。しにいたような傷はない。あの戦闘狂であるツヴァイが容赦をしたと言うことは、彼らよりも上のクライアントがいるということだ。

対するツヴァイは当然のことながら、悪びもなく言う。

「倒したのは俺もだが、蒐集はできないぜ。最終的にやったのはあいつらだ」

彼らからは微弱しか、リンカーコアの鼓動が感じられない。それを完治できるのは、それようなレーダーを装備しているからであり、魔道師でないハヤトが個人で感じられるものではないのだ。

「もう一度問う、お前たちの目的は何だ」

GNソードの切っ先を向けながら言う。まったくひるむことなくツヴァイはまっすぐ視線をこちらに向けながら、言う。

「さあなあ！！俺に勝ったら教えてやるよ！！」

そう叫ぶや否や、スカート部分から6機のGNファングが飛び出し、エクシアの周りを飛び回ると、豪雨のごときビーム砲を放つ。

「くー！！」

機体を旋回させてその攻撃を回避する。

そんなエクシアに対して、接近したツヴァイが構えたバスターソードを振り下ろしてきた。それをいくらかファングの攻撃を受けつつも、GNソードをソードモードにて受け止める。

そのまま鏖迫り合いのまま空中をぐるぐると回り続ける。お互いに力を入れて引き離すと、ツヴァイはすぐさまGNファングを再び向かわせる。

そう簡単に何度も受けられないと、ライフフルモードにて狙いをつけ、ファングを打ち落としていく。元来射撃は得意というよりは並程度であるために、すべてを打ち落とすことはできなかった。

しかし、わずかに減ったファングの攻撃に穴が生まれ、それを見つけて攻撃を次々と回避していく。遠距離から、GNライフルにて射撃を向けてくるが、それをGNシールドで防ぐなどして、機体ダメージを最小限にしている。

トランザムを使えば簡単に終わるかもしれない。否、こちらが有利になるだけだ。相手はそう簡単にやられる敵ではない。十分モビルスーツ乗りとしてはエース級である。そんな相手に、わざわざ機体に負担をかけるようなこの状況で使うわけにはいかなかった。

ここに来る前に、エイミーからお蔵的多座標を打ち込んでいた隼人に忍は消してトランザムを使うなと釘を刺した。それは何度も言われていたことであるが、何度も言っておかないと、おそらく使ってしまうだろうという予想があったのだろう。負けそうになったら撤退する、それも立派な作戦でもあるのだから。

”了解”

ただそう言って転移した。

そしてこの世界において、現在スローネ。ツヴァイと呼ばれるガンダムとの戦闘を繰り広げていた。性能的にはエクシアと同等、しかし、殺気から相手からは発せられる言葉にさっきがない。更に生命反応がないということは、これもまた遠隔操作によるものにだけ分かる。

――相変わらず汚いやつらだ・・・。

そう思いながら何度目かの鏖迫り合いが繰り広げられる。激しい

火花が散る。

「まったくめんどくさいもの作りやがって!!」

エクシアの存在が彼らにとってはイレギュラーであった。その性能は以前使用していたストライクダガーやイザナギを超えている。もちろんのこと、スローネもまたガンダムと呼ばれるように、その機体性能はエクシアと同等である。

「てめえが真実を知る必要はないんだよ!!」
「く!!」

振りぬかれたバスターソードを受け止めるも、威力に押されて吹き飛ばされる。なんとかGNドライブをフル稼働させ、体勢を立て直す。

しかし、目の前に一気に詰め寄っていたスローネ・ツヴァイ。すでに振りかぶられていたバスターソードが勢いよく振り下ろされると、エクシアの胸部の装甲を盾に切り裂く。きられたところから、装甲内のハヤトの着ている戦闘服がちらりと見える。そこまで深くは斬られていないまでも、権勢は不利である。

しかし、突然表れた二機の紅いガンダムの出現によって、一気に流れは別の方向へと変わっていくのだった・・・。

PHASE 129 新たな力 中（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 130 新たなる力 下

ヴィータとシグナムがなのはたちと戦闘を開始した。その様子を遠くで見ているシャル。彼女は後方支援や穂所が主な役割であるために前線で戦うような役割はなくそのすべもない。しかしみんなが苦戦している……。なんとか助けたいけども思っていた。

「時空管理局、クロノ・ハラOWN執務官だ、こちらに投降しろ、今なら弁論の余地もあるぞ」

いつの間にかシャルは執務官のクロノに後ろをとられてしまった。万事休すかと思っていたら突然空から赤黒い粒子弾が飛んできた。それがまっすぐにクロノに命中する。

「な……。なん……。だと」

ゆっくりとどこから撃たれたのか分からないままクロノが倒れた。はっとシャルが空を見るといつかの紅い二機の機械装甲が飛んでいた。巨大な砲口を持った機械装甲がライフルで撃ったらしい。

「早く蒐集したらどうだ?？」

「え?。?。ええ、分かったわ」

シャルはスローネアインからいわれて慌てて倒れているクロノから蒐集する。

「我々がその結果を破壊する。今日は撤退したほうがいいだろう。これ以上蒐集はできない」

「余計な魔力使っても仕方ネエしな」

「そういうこと♪」

二人と合流したツヴァイとアインとともに現れたドライがそれぞれいう。するとアインにドライがドッキングしGN粒子を補給する。それを見たシャルは慌てて念話で伝える。

>みんな!!今からあの機械装甲が結界を壊すから撤退をして!!<

>!!分かった<

>了解した<

>おう<

>それと闇の書を持ってるのはザフィーラ??<

>そうだが??<

>撤退が完了したら私のところに来てくれない??蒐集対象がいるから<

>わかったそちらに向かう<

念話が終わるとすでにスローネアインがGNメガランチャーを構成していた。

「GN粒子、供給完了」

そうして結界に向けてどす黒い砲撃を放ったスローネアイン。その結果意は数秒も持たずには解される。

「さあ、行け。我々の仕事も終わった」

「あなたたちの目的は一体??」

突然現れては自分たちを守るようにしている三機の機械装甲。しかし素性も分からず理由も不明である。ありがたいが信用できない。

「我々は依頼主にあなたたちに協力・・・つまりは闇の書の完成が目的です」

「私たちには完成させる理由がありますがあなたたちには一体何の理由があるのですか?？」

「我々にはないが依頼主にはあるらしい。とはいえそれが一体何のためかは分からないが」

「そうですか。とりあえずお礼は言っておきます」

そうしてシャルもまた撤退していった。

「なあ兄貴。最近俺達暴れてないよな」

ツヴァイがつまらなさそうに言う。

「あいつらぶっ飛ばしてきてもいいか??」

クロノが倒れているのを見つけ慌ててそこに向かっているのはたちの姿があった。

「私もあいつら超むかつく。なんか幸せですって顔してるから」

ドライもいう。

「我々のことを必要以上に知られるわけには行かない。だから我慢しろ」

確実にこちら側に流れが来ていることを感じていた。完成の形はどんな形でもいい。彼らにとっては誰がどのような犠牲になってもいいのだ。

「我々の真の目的のために動き出すのはまだまだ先になる」

「しっかしいつになるんだかな」

「まあ、気楽に行くしかないんじゃないの??」

そうしてトリニティもその場を離れていった。

シグナム達はトリニティのおかげで結界を破壊したすきに家に帰ったが大切な用事を忘

れていたことに気づく。今日ははやてがその友達のすずかと食事だったのだ。そして今現在シャルがはやてにお詫びの電話をしている。どうやらはやてはすずかの家にいるようだ。

あと少しで完成する闇の書。そのために彼女たちは戦う。それがどれだけ卑怯なことであっても、周りから疎まれようとも主のために……。

シグナムたちとの戦闘を終え、現在なのはたちはフェイトの所にいる。クロノが倒されて病院に行ってしまったために本当はクロノのお見舞いをしたいと思っているのだが……。

「僕の事はかまわず君たちは事件を解決させることを考えるんだ」

とさすがの正義感の強い執務官である。自身のことよりもなのはたちに闇の書の解決を急がせるのだ。現在これからの事や、新しいレイジングハート達の説明を受けてる。

「いい、レイジングハート、バルディッシュに組み込まれたカートリッジシステムは、本

当はこの子達みたいなインテリジェントデバイスに入れちゃいけない

かったんだけど・・・」 「だけど??？」

エイミィのいいにくそうな様子を見てなのははどうしたのだろうと思う。

「この子達がもっと力をもって望んだの」
「「!!」」

なのはたちは驚いた。自分たちのデバイス自身がその力を得ることを求めたのだ。

『マスター、私はあなたのことを守ることができませんでした』
『サー、私も同じです。サーのことを守りきれなかったことを後悔しました』

「レイジングハート・・・」
「バルディッシュ・・・」

自分たちの事を思ってくれているデバイスたち。本当に優しいと思った。感謝しても仕切れない。

「それじゃあ、各デバイスのモード説明をするよ。まずバルディッシュ、バルディッシュはアサルト、ハーケン、ザンバーの3つのモード」

フェイトがバルディッシュを手に取り見つめる。

「次にレイジングハート。レイジングハートはアクセル、バスター、エクセリオンの3つ。それとなのはちゃんに注意があります」
「何ですか？」

エイミイの真剣な表情からなのは何かレイジングハートもしくは自分にあるのではないかと心配になった。

「レイジングハートはまだフレームの強化が終ってないから、フルドライブの、エクセリオンは禁止ね」

「分かりました」

それからなのは達はこれからの事を話した。結果としては説得はするが聞かなかったら戦う。結果としては以前の事件と同じ形になった。

はやてがずかの家に泊まっているということとでシグナムたちは2人一組で代わる代わる見張りをした。そのかいあってか無事に朝が来た。

「はやてちゃん、そろそろ帰るって」

シャルが電話でそのことを聞いたらしい。

「そうか」

シグナムははやてが無事であることを確認し、ほっとしている。彼女だけでなく、三人もまた同じである。

「そういえば、私達がここに来て半年以上たったのね」

唐突にシャルが言って来た。よく考えてみるとそうなる。

「そのようだな」

シグナムもあつという間に過ぎてしまったときの速さに感慨深く思う。

「はやてちゃんが私達のマスターになって色々あったわね」
「色々とな」

シャマルの言葉にシグナムもふと思い出に浸る。今までの主とはまったく違う八神はやてという少女。自分たちを便利な道具としてではなく自分の家族のように見てくれる。そんな彼女を死なせるわけには行かない。もしかするとこんな幸せに、人として生きられるのは最後かもしれないからだ。

「なら、我らがなすべきことは・・・」
「早急に闇の書を完成させることね・・・」

空はこんなにも青いのにな、どうして高も心がざわつくのか分からなかった。

PHASE 130 新たな力 下（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 131 家族

はやては今家に帰るところだった。昨日すずかの家に泊まった。彼女にとって初めてのお泊りだった。そのためか前日から楽しいでしようながなかった。今はすずか専属メイドであるノエルに送ってもらってるところだった。

「ご親戚と一緒になんですか??」

親戚とはシグナムたちヴォルケンリッターのことである。

「はい、家族が多くて毎日楽しいです」

両親を失い。足が不自由な状態での孤独な生活だった。

「家族が多いいと賑やかで楽しそうですね」

「はい、毎日が楽しみです」

そんな彼女に突然誕生日プレゼントのように家族ができた。よく考えてみるとシグナムたちが来て半年になるのだった。

はやては思い出していた誕生日の日になった瞬間に突然黒い光が包み込んだのだからベッドの上で驚いたことは今も覚えている。

その光はよく見るとある一冊の本から出ていたのだった。それは物心ついた時にはあった本であったが、鎖があったためにまったく呼んだためしなかった。

はやてはあまりの光に一度目を閉じた。そうして光がおさまり目を開けるとそこには知らない人達がいたのだ。

「闇の書の起動を確認しました」

「私達は、闇の書の守護騎士、ヴォルケンリッターです」

「我々は、主の刃であり、盾でもあります。主に襲い掛かる、脅威を盾となりて防ぎ、刃となり打ち払います」

「何なりとご命令ください」

はやては最初に聞いたときには一体何のことだかさっぱり分からなかった。

「そのここだとあれですから、下に行きましょう」

はっと気を取り直して話しかける。

「主の命令とあらば」

シグナムはそう答えた。異動してからそれからはやては色んな話を聞いた。まず物心ついた時にはあった本は「闇の書」っていう事。次に闇の書について。最後に自分達は何者かを話してくれた。

「つまり、私が新しい闇の書の主で、あなた達は主と闇の書を守るためにいるって事んsんか？」

「はい」

「主の命令があればすぐに蒐集を開始しますが??」

収集という言葉聞いた瞬間はやてはそれを拒否した。

「蒐集はあかん、人様に迷惑がかかるから絶対にあかん」

他人の魔力を奪うという蒐集。そのときには多少なりとも苦痛が

あるというのだからはやてはそれを禁じた。たとえそのことによつて自身のからだが蝕まれようとも・・・。

「では、主は何を望みますか?？」

「私の望みは、みんなで暮らすことや」

ザフィーラが聞くとはやては即答した。

「みんなとは?？」

シグナムはどこにそんな人がいるのだろうかと聞く。

「今の私の望みはヴォルケンリッターと平和に暮す事や」

それは目の前の彼女たちをプログラムではなく人としてみていることでもあった。

「どういう事でしょうか?？」

如何せん、初めてのことにシャルも戸惑いを隠せない。

「つまり、私の家族になってくれへん?？」

それを聴いた瞬間守護騎士たちは困惑した。今までこんなことを言われたためしなかったからだ。

>シグナムどうするの?？<

シャルがリーダー格であるシグナムに聞く。

＞皆の意見を・・・＜

どうやらさすがにシグナムも初めてのことにどう返答したらいいのか分からないらしい。

＞主が家族になる事を望んでるから、家族になったほうがいいのかと思うが？？＜

＞私はどっちでもいいぜ＜

＞私はザフィーラ達と同意見＜

＞主がそれを望むなら・・・＜

どうやら決まったようだ。

「主の望みは私達が家族になる事ですか？」

「そうや、家族になってくれへん??」

「分かりました、主の望どうり、家族になります」

はやてはそれを聞いた瞬間とても嬉しかった。誕生日プレゼントが家族という今迄で1番嬉しいことだった。ずっと孤独だった彼女が一瞬で暖かい家族に囲まれた。それが何より嬉しかった。

「家族やったら、まず自己紹介せなあかな。まずは私からや。私は八神はやて。はやてって呼んでほしいんよ」

「私は盾の守護獣、ザフィーラです」

「鉄槌の騎士ヴィータだ」

「湖の騎士シャルです」

「そして、4人をまとめる烈火の将シグナムです」

はやての自己紹介に始まりそれぞれヴォルケンリッターたちも自己紹介する。

「ほんならよろしくな、ザフィーラ、ヴィータ、シャマル、シグナム」

はやては今までにないくらいに輝いた笑顔だった。

「はい、よろしく願います、主はやて」

今までの主とは違うことを感じつつ、シグナムはいった。自分たちは主を守る守護騎士だという誓いを忘れずに……。それからだろうか、彼女たちに変化が起きたのは……。

いつもぶつきらぼうだったヴィータに喜怒哀楽が現れ始め、シャマルが料理が苦手だったことが発覚したり、その被害者が毎度ザフィーラだったり、そんなザフィーラを介抱し、シャマルに説教をするシグナム。それを笑いながらも手伝う主であるはやてがいた。それから楽しい日々はすぐに去っていったそう……。言葉どおりの意味ももって……。

八神家に置いて変化が起きたのはある日の主であるはやてが通う病院で診察を受けた後のことだった……。

「ちょっとよろしいですか？」

唐突にシグナムとシャマルが主治医に呼ばれた。そこで二人は残酷な事実を告げられた。

「はやてちゃんの足が動かないのは神経のマヒと前にもお伝えしましたね」

「はい、確か原因不明と」

彼女たちが現れる前から足は不自由だったと聞いている。

「実はここ2、3ヶ月でその麻痺がだんだん体の上に広がっています」

主治医の石田の表情は暗い。医者として小さな女の子のことを助けてあげられない自分が齒がゆいのだ。まだ手はないわけでもないかもしれないが彼女という人間の範疇ではまったくその方法が分からなかったのだ。それを聞いてシグナムとシャルはふと思った。2、3ヶ月前といえば丁度、自分たちがはやての所に来た月だということを・・・。

「はやてちゃんはとうなるんですか??」

「内臓までマヒが到達して、最悪の場合死んでしまいます」

死という残酷な言葉が突きつけられた。

「なんとかできないんですか!??」

シャルがすがるように言うが石田の表情は優れない。

「原因不明なので・・・」

何故彼女の足が麻痺しているのか・・・医者である彼女でさえ分からないのだ。

「しかし、諦めたりはしません、何かはやてちゃんを救う手立てがあるはずです」

医者として人として命を見捨てることはできないからだ。

「なので皆さんもご協力をお願いします」
「分かりました」

その後はやてが図書館に行っている間にヴィータとザフィーラにもこの事を話した。

「ちきしょう!!」
「くそ!!」

悔しそうな表情の二人。せっかく手に入れた優しい主と平和な日々。それが一瞬にして壊されたのだ。

「なぜ今まで・・・」
「ごめんなさい」

思わず謝るシャマル。ヴォルケンリッターの中で最も医学に精通しているのは彼女なのだから。

「謝るな!! 私には自分を責めているのだ」

シグナムは今まで気づかなかった自分がにくかった。主は誰だ・・はやてしかない。そして自分たちははやてのリンカーコアからの魔力を供給して存在している。しかし彼女は謎の病氣持ちである。おそらくリンカーコアに何らかの負担が掛かっているのだと思った。そして彼女たちが出現したことではやてにさらなる負担がかかったのだ。

「はやてが苦しむのは闇の書の呪いなのか?？」

「そうだ!!」

「なら、闇の書を完成させるしかない・・・」

「そうだよ、闇の書は完成すれば大いなる力がはやてに与えられるんだ!! 完成すれば麻痺なんて消えるんだから」

「でも、はやてちゃんも蒐集はするなって・・・」

「ならば判断はシグナムに任せる」

「私にか??」

「シグナムは我らの将、我らは主を抜いたらシグナムに従う」

「シグナム、はやてを助けよう」

しかしシグナムは即決しなかった・・・否でなかった。以前はやてから1番ヴォルケンリッターの中でえらいのはシグナムということで、決して蒐集はするなといわれ、それを剣に誓ってもやらないということを書いてしまったのだ。

「シグナム!!」

ヴィータの悲痛な声にとうとうシグナムの覚悟は決まった。たとえ主が望まないことでも自分たちは主を見殺しになどできないということを・・・。

「――主はやて、すみません・・・」

シグナムは初めて主に背いたのだ・・・

そして今にいたる・・・。

「あと少しではやてを救えるんだ・・・」

ヴィータの期待に満ちた声で言う。

「ああ、皆頑張ろう」

「「おう!!」」

彼女達は止まるわけにはいかない主であるはやての為に……。

ユーノはクロノに頼まれて本局に来ていた。

「アリアとロッテがいらない??」

どうやらクロノは誰かを探していたらしい。

「はい、ただいまリーゼ・アリア、リーゼ・ロッテの両名は任務中でして」

係員が詳しくクロノにその理由を伝える。任務となれば仕方ないとクロノは礼を言う。

「そうか、ありがとう」

「クロノ、どうしたんだ??」

戻ってきたクロノにユーノが聞く。

「いや、ちょっと協力をしてほしい2人がいなくてね……」

「その2人がいないとできないの??」

「いや、僕は執務官だから使えることは使えるんだが」

「ってか、どこに行くんだ?? まだ説明されてないぞ」

「これから行くのは無限書庫だ」

「無限書庫!??」

その単語を聞いてユーノは驚く。無限書庫は世界のあらゆる情報

があるところである。あらゆるの為その数は膨大で、目的の情報を探すのに苦勞するのだ。それでもスクライア一族の一人であるユーノは興奮を隠せないでいる。

「だから、アリアとロッテに協力してほしかったんだ」

確かに自分たち二人だけだとあんな膨大な量の中から確定要素を見つけるのは大変だろう。それがたとえスクライア一族のものでも・・。

「まあ、とゆうわけでユーノのスクライアの力はあてにしてる」
クロノがユーノを呼んだのにはこのような理由があったのだ。

「――なんか大変な事になりそう・・。」

そう思いつつも自分のできることをやろうと思うユーノであった。

PHASE 131 家族（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 132 雷炎

フェイトの携帯を購入し、ハラウン家にいたのはたちだったが突然アラートがなったことでアースラの司令室に来ていた。状況を確認するとシグナムが異世界で蒐集をしていたのだ。

「シグナム・・・私が行きます」

「了解、お願い」

フェイトは転送ポートでシグナムがいる世界に移動した。異世界の砂漠ではフェイトが到着するとシグナムがその世界の生物の尻尾でつかまっていた。

「――助けなきゃ!!。」

フェイトはバルディッシュを構え、そこから放ったフェイトの攻撃は生物にあたり生物は悲鳴を上げ、そのまま倒れた。シグナムは突然割って入ってきた攻撃を知っていた。この攻撃をするのは・・・。

「フェイト・テストロッサか・・・」

「はい」

「貴様らのせいで蒐集対象がいなくなってしまった」

そう言いながらカードリッジを入れるシグナム。その言葉を言う声は低く、意識して怒りを抑えているようだった。

「私達の役目は悪人を捕まえる事ですから」

「そういえば私達は悪人だったな」

自嘲気味に言うシグナム。シグナムはレヴァンティンをフェイトはバルディッシュを構える。

「一人か?? 仲間を連れてくればいいものを」

現在子の世界にいるのはシグナムとフェイトだけ。更にフェイトにはまだアースラに残っているなのはがいるが、シグナムにはヴォルケンリッターの三人がいない。圧倒的に不利だった。そう・・・一対多なら・・・。

「やはりあなたに負けてばかりじゃ嫌だから・・・」

「その心意気はいいが、力が無くては」

「あなたに私は勝ってみせます」

そうしてフェイトとシグナムの戦いが始まった。

司令室ではエイミーが頭を抱えていた。捕まえに行ったのはいいがなのはを呼ばずにいきなり一騎打ちを始めたからだ。負けたくないのは分かるがこれが仕事だということを忘れていないのではないかと思った。そう思っていると突然二度目のアラートになる。どうやら違う世界でも反応があったらしい。

「なのはちゃん、行ってくれろ!!」

「了解しました」

なのはは転送ポートで移動した。

現在無人世界の砂漠ではフェイトとシグナムが戦闘をしている。

「ハアアアアア!!」

お互いのデバイスであるレヴァンティンとバルディッシュをぶつけ合う2人。戦況ではスピードではフェイトが上だ。しかしそれを力と経験で対抗するシグナム。

『ブリッツ・アクション』

身体強化をしてフェイトはシグナムの後ろに回り込むが・・・。

「ハアアア!!」

わずかな空気の変化を感じ取りシグナムが防ぐ。

「く!!」

うまく背中を都ってつもりだったが見事なまでに防がれてしまったことに悔しく思う。フェイトは一旦体勢を立て直した。

「レヴァンティン!!」

『シュラングフォルム』

「バルディッシュ」

『ハーケンフォーム』

お互いにカードリッジをロードしシグナムはレヴァンティンを連結刃に変形させ、一方のフェイトはバルディッシュをハーケンフォームに変形させる。

「ハアアア!!」

シグナムの方は鞭のようになっていて、効果範囲がフェイトのハーケンフォームより広い。シグナムは連結刃でフェイトを囲んでいく。

「ハーケンセイバー!!」

フェイトは魔力刃を放つ。

「ハアアアア!!」

鞭のようにしなるレヴァンティンでフェイトを攻撃する。シグナムは放たれたハーケンセイバーを上に乗って避けるのが。

「ハア!!」

それを読んで上で待ち伏せをしていたフェイトがバルディッシュを振り下ろした。その瞬間フェイトは勝ったと思ったが・・・。

「甘いなテストロッサ」

そう言いながら煙の中から現れたシグナムはバルディッシュをレヴァンティンの鞘でガードしていた。

「鞘で!?!」

まさかの鞘で防御されるとは思わなかったフェイトは一瞬動きを止めてしまった。それは歴戦の騎士であるシグナムにとっては十分な時間であった。

「ハア!!」

隙を見せたフェイトに対してシグナムは斬ろうとするがそれにすぐさま反応したフェイトはバルディッシュでガードした。しかし遅れてしまったためにその分その衝撃で下に落ちる。

『プラズマランサー』

ただでは落ちないと言わんばかりのプラズマランサーをシグナムに呈して放つ。さすがにそれにはシグナムも予想外だったみたいでまともに当たってしまう。まさに一進一退の戦いだった。

「プラズマスマッシュー!!」

「飛竜一閃!!」

お互いの魔力がぶつかりあう・・・。

PHASE 132 雷炎（後書き）

ご感想お待ちしております。

PHASE 133 驚愕と怒り

ヴィータは焦っていた。突然ザフィーラから連絡が来たと思ったらどうやら一人で無人世界に行っていたシグナムのところに管理局が現れて現在交戦中だということだった。

そのために急いでその場に行きたかったのだが彼女の行く手を阻む人物が現れる。どうやら管理局の転送システムを使ってきたのだろうと思った。

「またお前か・・・」

いい加減にして欲しいと思った。

現れたのは・・・。

「私は高町なのは。なんで闇の書を完成させるのか理由を教えてくださいない??」

レイジングハートを持った白いバリアジャケットを着ている高町なのはだった。しかし闇の書の蒐集は同じ魔導師からはできない。

そのためになのはと戦っても意味は無いと踏んだ。それよりもシグナムの事が気になる。だからシグナムの所へ行くと決める。

「お前らをぶちのめすのは後だ!! 唸れアイゼン!!」

ヴィータがそういった瞬間周りが強く光った。目眩ましをしたのだ。なのはが目を開けるとすでにヴィータはかなり遠くにいた。

「レイジングハートやるよ」

『了解しました』

なのははレイジングハートを起動させた。

「レイジングハート、久しぶりの長距離砲撃いくよ」

『了解しました。ドライブ・イグニッション』

レイジングハートから空の葉きょうが射出される。そして一気に魔力が収束される。

「デイベインバスター!!」

ここまで来ればいいだろうと思っていたヴィータ。しかしそう思ったらピンクの壁がせまってきた。

やられた、そう思ったら目の前に仮面を被った男が立っていた。

「お前は早く仲間の所へ行け」

一体誰だと思っていると・・・。

なのはがはなったデイベインバスターの光の壁が迫っていた。

「くそ!!」

男はしたうちをしてシールドを張るが・・・。

「そんな、そんなバカなあ」

男の言葉通りシールドは粉々にされ仮面を被った男は消えた。しかし、時間が少しできたためヴィータはシグナムの所へ行った。

異世界の砂漠では現在もシグナムとフェイトの戦いは続いていた。早さでは勝ってるけどミドルレンジ、クロスレンジは負けてる。フェイトが何か覚悟を決めたと同時にシグナムもまた覚悟を決めた。終戦は近かった。

決着がつくかと思った時瞬間……。フェイトの体から手が出てきた。仮面を着けた男がフェイトの体を貫いたのだ。

「貴様!!」

シグナムが叫ぶ。

「早く蒐集をしろ」

そういわれると、はやてを助けるためということでシグナムはフェイトの魔力を蒐集した。

「あああああ!!」

苦しいだろうが、シグナムはただ純粹に戦いを申し込んできてくれたフェイトにこんなことをしてしまうことに申し訳なさでいっぱいだった。

しかし、今は騎士としてではなく、はやての家族としてはやてを助けるために動いていた。

そして増援が来る前に撤退するために転移魔法を使う。

「すまない・・・」

そう言い残して・・・。

PHASE 133 驚愕と怒り（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 134 真実

またある日、眠りについていたハヤトは夢を見ていた。

暗い空間にハヤトは目の前にいる女性と視線を合わせていた。この空間に人が入れることはないということらしい。くるとすれば自身の主になるかもしれない人物だけらしい。

「主・・・??」

「そういうお前はどうかんだ??」

突然主などという身におぼえもない言葉を言われて、首をかしげる。女性が一体何者なのか、聞いてみた。

「私は・・・闇の書の防御プログラムだ」

「防御プログラム??」

闇の書・・・、そして防御プログラムとまた分からない単語が飛び出してくる。すると疑問が顔に出ていたのだろう、その防御プログラムと言う女性が説明を始める。

「私はすべてのページが埋まったとき、管理人格者と共に現れることになっている・・・」 最後はどうか尻すぼみしてしまった。
「何故闇の書が現れるたびに大きな被害が出ている??それはそのときの主のせいでもあるのか??」

「いえ、書の事件の結果はすべて私にあります」

「どういうことだ??」

強大な力を持った狂った主がその力を見せ付けるために力を暴走させたのではないらしい。なら一体何故だろうかと思った。

「暴走の原因はすべて私にあります」

「防御プログラムのお前に?？」

「はい、歴代の主を私は主と認めたことはありません」
「な!？」

驚いてしまった。

まさか守護騎士たちが主と認めていようと彼女だけは認めていなかったのだということに。

「力なき主は暴走を止められず、逆に力に振り回され・・・自滅したのです」

「その結果が世界を破壊したり、甚大な被害を齎したということか・・・」

「はい・・・」

なかなか、書を扱うのにふさわしい主が見つからない。そうして時を重ねるに当たって使いやすいようにするために歴代の主たちは書に細工をするなど工夫をしたらしい。

しかし、それをして一向に改善できず、更には人間の歪んだ欲望が夜天を汚し、闇の書へと変えてしまったのだ。

決して闇が悪いわけではない。防御プログラムが悪いわけでもない。なら一体何が悪いのだろうか・・・。

「なら今回の主はどうなんだ?？」

「・・・」

「だめそうか?？」

「・・・今回の主はこれまでのように力は求めていません」

「珍しいな。というよりも、この世界には魔法はないからな」

力を求めたとしても使い道はない。

「それに・・・この力を扱うのには程遠いでしょう・・・。」というよりも、もともとこれは誰にも扱えないようになっていたのかもしれませんね」

「製作者が・・・力だけを求めたということか??」

「そうなのかもしれませんね・・・」

遠い昔のことであるために彼女が覚えているかは分からない。

それでも彼女は今も鎖につながれたままなのだ。世界を破壊する魔道書、不幸を呼ぶ魔道書として忌み嫌われているのだ。

「ダレモガワタシヲヒテイスル・・・」

彼女の声は悲しみに包まれている。

「ワタシヲツクッタノハニンゲンナノニ・・・」

どうにかしてあげられないだろうかと思った。

「コンドモマタ・・・オナジヒゲキヲクリカエス・・・」

「駆逐する・・・」

どういうことだと、彼女がハヤトを見つめる。

「俺が・・・いや、俺とガンダムが、その歪みを駆逐する」

何かが変わった瞬間だった・・・。

PHASE 134 真実（後書き）

ご感想と待ちしております。

PHASE 135 悲しみの加速

病院では倒れたはやてを心配しているヴォルケンリッターたちがいた。

突然家で倒れる音がしたと思い上に行ってみるとはやてが倒れていたのだ。慌てて病院へと搬送された。

「みんな大げさや、めまいと腕と胸をつっただけやって」

気丈に振舞うはやてだが、顔色は悪い。我慢しているのが見え見えだった。シグナム達に心配をかけまいとしていた。

「無事でよかったわ、検査とかしたいからもうちよつとゆっくりしてね」

「ハイ」

石田がそういうとはやては元気よく返事をする。笑顔を見せて石田が病室を出ようとしたとき、すぐに表情を変え、シグナムとシャルを呼ぶ。

「それから、シグナムさん、シャルさんちよつと・・・」

その表情から、なにか深刻なことが起きたことは間違いないと思った。

「検査では何も出てませんが、つっただけはないと思います」

「やはり麻痺が拡がっているのでしょうか?」

「おそらく・・・。何時発作がおこるか分からないので入院をして

ほしいんですけど」

「お願いします」

シグナムは手を握り締め、それが怒りなのか自分のふがいなさを嘆いているのか、震えていた。

それを見るシャルも悲しそうだった。

自分たちができること・・・それは、はやてのそばにいて彼女に不安がられないようにすること。

そして一刻も早く蒐集を終えることだった。それさえできれば彼女の死を回避できるのだから・・・。

シグナムたちは話が終わってから再び病室へと戻り、入院をすることをはやてに伝える。

「入院か・・・」

もう何度も病院に来ているがとうとう入院ということになってしまった。彼女自身、自分の体が危険な状態になっていることは知っていた。

「検査とか、色々やりたいしね」

「主はやて、石田先生もそうおっしゃってますし」

シグナムがいうと。

「でも、私が入院したら誰がみんなのご飯作るん?？」

それに対してシャルがすぐさま自分が作るといったが速攻で却下された。病室の隅でなんでよと縮こまってしまったのを見てはやては苦笑いだ。

「我々のことは心配なさらずとも大丈夫です」

「そうなんか?? すぐかちゃんからにのメールでないしょ・・・」

「私が返信しておきますから」

いつの間にか復活していたシャルが、それならできるといつてきた。

「なら、休暇を少し貰うわ」

それに対しては誰も何も言わなかった。

「主はやて、ゆっくり休んでください」

「はやてちゃん、心配しなくても大丈夫ですよ」

「毎日、お見舞いに来るよ」

「毎日じゃなくてもええよ」

みんながはやてを守りたいと思っている。はやてもみんなと幸せに行きたいと思っている。彼女たちに残された時間はあまりにも短い・・・。

PHASE 135 悲しみの加速（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 136 夜天の書と悲しみの始まり

クロノとエイミィが闇の書についての調査をしていると突然通信が入った。誰からだろうと思ったらエイミィが調べるとユーノからだ。ユーノのとは別ルートで調べていたために彼が何かを見つけたのでは泣きかと思ひ通信とつながる。

「あ、ユーノ君からの通信だ」

「繋げてくれ」

何か有力な情報があればなんとか対策がとれる。そこまで力を入れるのは彼の過去にも原因があったのだから……。

「クロノか。とりあえず、報告する事がある」

「闇の書について何か分かったのか??」

「うん。まず闇の書は正式名じゃなくて本当の名を夜天の魔導書という各地の偉大なる魔導師を研究するために作られた主と旅する魔導書なんだ。破壊をしだしたのは過去の主がプログラム改造してからなんだ」

「どこの時代にも、力を求める人はいるとゆうわけね」

一緒に作業をしていたリーゼ・アリアがため息を漏らしている。力を求めるものはいつの時代でもいるがそれをどう行使するかでその人物が英雄か大罪人になるかということに分かれる。

「無限再生は、そのためか??」

闇の書……夜天の書を破壊したとしてもそれは無限に復活し、次の主のところへと転移する。そのために完全にそれを破壊するの

は無理なのではないかと思われていた。

「多分」

ユーノも断定はできないかもしれないが、おおよそはそれであっているという。

「封印方法は分かったか?？」

もっとも彼らが知りたいことだった。

「それは今調べ中・・・」

申しわけなさそうに言うユーノ。そう簡単に見つかったならば今頃闇の書による事件など起きていない。それだけ難しいものなのだ。

「そうか、なら引き続き調べてほしいのだが」

しかし希望がないわけではない。

「分かった、調べとくよ」

ユーノも俄然やる気を見せる。そうして通信を終了した。

「ユーノって子すごいね」

「無限書庫で1人で探しているなんて」

アリアとロッテは感心を隠せない。あれだけの膨大な情報からそれだけのものを引き出しているのだ、それだけ処理能力に優れていることだ。おそらくそこにいるものたちはユーノを手放したくない

と知っているだろう。ユーの自身もまんざらでもなさそうであるし・
・・。

「あいつはスクライアだからね」

それだけではなく、ユーノ・スクライアが少しでも皆の役に立ちたいという気持ちからも来ているのだった・・・。

なのはたちははやてへのサプライズクリスマスプレゼントを渡すために病院へ行ったのだが、そのはやての病室には、ずっと敵対していた守護騎士たちの姿があった。

そのことによって一時は病室内に敵意が充満し、息苦しい時間があった。

何とか念話を使って、ここではいったん休戦しようということになった。

プレゼントを渡すとはやては喜んでくれたので持ってきた甲斐があったとなのはたちも嬉しかった。

それから数時間がたってからだだった。現在なのは、フェイト、そして守護騎士たちは病院の屋上に来ていた。

「はやてちゃんが闇の書の主・・・」

病室にて彼女たちがそばにいたということから確定的になっていた。そしてはやての足の麻痺は闇の書ののろいによるものだという
ことも・・・。

「我々の願いは後もう少しで達成できるのだ」

それははやてのことを救うことだ。

それがたとえ誰かを傷つけてしまったとしても、それをはやてが望まないことだとしても。彼女たちは今の平和な日常を守りたいのだ。

主であるはやてがいて、彼女のそばに自分たちがいて、そして平和に生活しているそんな普通の生活を・・・。

「邪魔をするなら、はやてちゃんの友達でも・・・」

つらいのは分かる。

しかし、その日常が永遠に失われてしまっってはそれこそつらい。

「でも闇の書は完成させたら・・・」

なのはが何かを言おうとしたところに突然フェイトが叫ぶ。

「！！なのは危ない！！」

「ウオオオオオオ！！」

ヴィータが突っ込んできた。フェイトの声に反応して紙一重でヴィータの攻撃をかわす。

「あとちょっとではやてを助けられるんだ・・・邪魔するな！！」

瞬間、ヴィータのデバイスから炎がでた。そして大きく振りかぶったハンマーがなのはに向かって振り下ろされた。

炎で焼き払ったのだから無事ではすまないだろうと思っていた。
しかしその瞬間になのはバリアジャケットを展開し炎の中から出てきた。その姿を見たままの感想を言った

「悪魔め・・・」

「悪魔でもいいよ・・・」

目を伏せているために見えないが、底から沸きあがるような声である。

「悪魔なりのやり方で・・・」

レイジングハートをヴィータに向かって構える。言葉で分からないなら力で・・・。

「話を聞いてもらうから!!」

フェイトはなのと同じくしてシグナムと対峙していた。

「シグナム、闇の書は過去の主によってプログラムを改悪されているの」

フェイトはユーノたちが調べ上げた情報から真実を告げようとする。

「私達はある意味闇の書の一部だ」

「だから闇の書を1番知ってるんだ」

しかし彼女たちは当然反論する。

彼女たちの主張通り、彼女たちはずっと闇の書・・・、しかし本当の名は・・・といたのだから。認められないのは当然である。

「じゃあなぜ本当の名前で呼ばないの」

どうということだという風に訝しげにこちらを見てくるヴィータとシグナム。

「闇の書はその破壊活動から、つけられたでも破壊活動する前には違う名前だったの」

「あなた達が本当に闇の書を理解してるなら、闇の書の本当の名前を知ってるはずですよ」

「名前などどうでもいい、主はやてを救うためなら、騎士の誇りも捨てると決めた」

「私達は止まれんのだ」

シグナムもまたレヴァンティンをかまえる。

「私が止めます」

フェイトもまた、バルディッシュを構える

「私達があなた達を止めます！！」

『バリアジャケット展開。ソニックフォーム』

フェイトがバリアジャケットを身に纏うが普段のとは違い、軽量化を重ねた姿だった。圧倒的なスピートを求めた彼女だからこそそのフォーム。

しかし、それにもデメリットはある。

「さらにスピードを求め軽量化をしたか……。だがしかしそれでは防御力はあまりないぞ」

しかし、フェイトの目には覚悟の色があった。彼女達を止めたい、そして力になりたいと……。

「当たらなければどうってことはありません」

絶対はないが負けないためには戦うしかない。

「少しでも当たればアウトだぞ正気か??」

「強いあなたに勝つためにはコレしかなかった」

彼女の今持つ全力でぶつかるつもりだった。

シグナムとフェイトの戦いは幾度もぶつかる剣の音が響き渡っていた。

「「ハアアアア!!」」

フェイトはスピードを駆使してシグナムに挑み、シグナムは技術を駆使してその挑戦を受ける。お互いの1番をぶつけ合った。

「ウオオオオオ!!」

気合十分にヴィータは突っ込む。

「アクセルシューター」
『シュート!!』

数十個ものアクセルシューターによって懷に飛び込めない。なのはが巧みに操作することによって一定の距離感から変化が現れず。にらみ合いが続く。

ヴィータのはやてを助けたいという純粹な思い。そしてなのはの闇となった魔導書の完成によって引き起こされる悲劇を止めようとする正義感からの思い。

そんな2人の思いがぶつかっている。

しかし、そんな時突然どこからかバインドが飛んできた。

「何、これ!？」

なのはは突然バインドをされたことに困惑する。それをしたのはどうやらヴィータでもないらしい。彼女も同じくバインドに拘束されているからだ。

見ると、なのはとヴィータだけじゃなく、みんなにバインドが掛かっていた。

「捕らえたぞ」

突然仮面の男が来た。

「遅かったな」

「準備に手間取った」

そして仮面の男がもう一人現れ2人になる。

「貴様達はなんなんだ!!」

突然のことに蒐集活動の邪魔をされたため、シグナムは当然のように怒りをあらわにする。

「プログラム風情に知る権利はない」

そういうと仮面の男の手には夜天の魔導書があった。

「それは!!」

シグナムたちの戦闘を見ていたシャルはいつの魔に奪われていたのかと困惑する。

「闇の書の最後の頁はお前達が埋めるのだ」

それを聴いた瞬間、ぞっとするような悪寒がヴォルケンリッターに走る。

「奪え」そういうと・・・。

「蒐集」

魔道書が意志を持つようにして言葉を発すると光が伸びてシグナム達のリンカーコアから魔力を奪っていく。

「ウワアアアアア!!」

「キャアアアアア!!」

魔力を抜き取られる苦痛。必死に耐えるが2人とも消えてしまった。

「チクシヨウ・・・」

最後に悔しそうに男達を睨みつけヴィータも消えた。

「ウオオオオオオ！！」

なんとか残っていたザフィーラが反撃しようと拳を握り締め襲い掛かる。

「お前もいたな」

しかし男はなんとも思わず、ほとんど力を失っていたザフィーラの拳をシールドで受け止めると、それに驚愕したザフィーラに生まれた隙について蒐集した。

「グアアアアアア！！」

苦痛の声と共にザフィーラも消えてしまった・・・。

PHASE 136 夜天の書と悲しみの始まり（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 137 夜天の目覚め

シグナムたちが蒐集されたとき、病室に板はやては胸に苦痛を感じていた。今までにない痛みにも声を殺してなんとか耐えていた。

すると突然光に包まれ思わず目をつぶってしまう。

そしてなにやら風の音が聞こえるということでもゆっくりと目を開けると目の前にボロボロのヴィータ、無傷なのは、フェイトがいた。その様子を見た瞬間一体何が起きているのかとはやては呆然としてしまう。

「はやてちゃん、君は病気なんだよ」

突然なのはがはなしかけてきた。しかしあの親しげに話しかけてくれた彼女とは違う、どこことなく冷たい声で・・・。

「闇の書の呪いというね」

フェイトが続いて言う。

——闇の書・・・呪い??

「例え完成しても治らない病気なんだ」

グサリと何かが胸に突き刺さる感触があった。しかしそれは胸では泣く彼女の心にだった。

「だけどこの子達は完成させようとしたんだよ」

「ヴィータ・・・なんでボロボロなん」

どういふことなのかと困惑した声色で聞く。

「悪い事をしたからお仕置きをね」

何でそこまでひどいことをするのかと思った。

「他のみんなは??」

あたりを見渡しても家族であるシグナム、シャル、ザフィーラの姿がない。

「消えちゃったよ」

刹那、ヴィータが光なって消えた・・・その瞬間、はやての中の何かが発動した・・・。

はやてから光が溢れる。その光が普通の光だったら、それはまるで少女は天使と思う人もいたかもしれない。

しかし、はやての身から出るその光は天使など程遠い、黒く歪んだまがまがしい光だった。

「それじゃあ」

「頑張ってるね」

なのはとフェイトの偽物がどこかへ行くけど今はそれどころでは

なかった。

「夜天の魔導書が完成した・・・」

誰かがそう呟いた瞬間。

「闇の書の完成を確認、管制プログラムを発動」

はやての声で何者かが呟く。はやては不可解な言葉を言うとその姿が変わった。茶髪の幼いはやての姿から銀色の髪をした大人の女性に・・・。

「またこうなってしまった・・・これが運命なのか??」

女性は悲しみの混じった声色で言う。

「あなたは誰ですか??」

「私はお前達が闇の書と呼んでいた魔導書の管制プログラム。主は望んでいる、皆が消えた世界は夢であってほしいと。だから私は主の願いを叶える」

そういうと女性の手に黒い魔力が集まってくる。まがまがしいまでの闇色の魔力色だ。

「遠き地にて、闇に沈め・・・ディアボリックエミッション」

女性から放たれた攻撃に対して何とか耐え切り、一時戦略的撤退を余儀なくされたのはとフェイト。

「なのは!!」

「フェイト!!」

二人を呼ぶ声がした。振り返ってみると……。

「ユーノ君」

「アルフ」

本局にいたはずのユーノとアルフが来たのだ。

「助けに来たと言いたいんだけど……」

「何が起こっているの??」

来たばかりで現在の状況が分からないでいるユーノとアルフ。

なのはとフェイトがはやてに対してサプライズプレゼントを渡すために病院へ来たこと、そこで偶然にもシグナムたちと鉢合わせてしまったこと、その場では静観していたがその後屋上に着てからは戦闘になったこと、突然仮面をつけた男たちが現れ、シグナムたちが蒐集されて消えてしまったこと、はやてが突然現れそして闇の書が発動し女性が現れたこと、その女性が自らを管理人格者と名乗り、攻撃してきたことを伝える。

ユーノは遅かったかと悔しそうにしている。

なんとか救う方法を探していたが、見つからなかったのだ。しかしここにいる全員はあきらめたわけではなかった。まだ短い付き合いだからといって友達を見捨てるわけには行かないと思っていた。

「みんな、はやてちゃんを助けよう」

なのはの言葉に3人は頷いた。

「来たよ!!!」

ユーノの声に反応すると女性が背中にある翼を羽ばたかせ飛翔してきた。

「ハアアア!!!」

フェイトが先制攻撃を仕掛け、切りかかる。しかし女性は軽くひらりとそれを回避する。更に回避と同時に反撃する。それを予め予測していたフェイトは機動性を生かしてすぐさま回避に移る。そして女性が攻撃をしようとした時、突然からだに二色のバインドが掛かる。ユーノとアルフだった。

「!!!。無駄だ、バインド・ブレイク」

しかし少し魔力を強めるとすぐにバインドは破壊された。しかしその場インドは時間稼ぎであったためにそれほど魔力刃込めていない。そのバインドで稼いだ時間で距離をとったフェイトと予め収束のために隠れていたなのはが同時に攻撃を放つ。

「プラズマスマッシャー!!!」

「ディバインバスター!!!」

桜色と金色の2つの砲撃が女性を挟む形でせまる。普通の魔導師ならたまったもんじゃないが……。

「盾」

女性がそう呟くと障壁が出現したのはとフェイの砲撃を受け止める。1人で2人の砲撃を防ぐ姿には、なのはとフェイトに驚きを与えた。

「刃以て、血に染めよ・・・ブラッティダガー」

反撃といわんばかりに赤黒い短剣を作り出し、なのはたち4人に向かって投擲してきた。短剣を4人は防御するが僅かだが隙ができてしまった。

一本一本の力はなくとも嵐のような攻撃に防御が押される。そしてそこに生まれてしまった隙を感じ取り、女性は詠唱と共に足元に魔法陣が現れる。

彼女が使用するベルカの魔法陣とは違い、それと対極に位置する魔法陣・・・ミッドチルダ式の魔法陣が浮かび上がったのだ。

一体何をしようとしているのだろうかとう来る攻撃に対して構えていると・・・。

「星よ集え・・・」

そう言うのと女性の所に桜色の魔力が集まっていく・・・。それはなのはの魔力色と同じであった。そして女性がはな等としているのはなのはの持つ砲撃の中でももっとも強力なスター・ライト・ブレイカーだった。

それを生身で受けたときがあるフェイトは直感的に危険を察知し、

なのは抱えて走り出す。

「みんな距離をとるよ!!」

大急ぎで距離をとる・・・しかもかなりの距離を。

「フェイトちゃん、こんなに距離をとらなくとも防御すればいいでしょ?」

なのはが慌てて距離をとるフェイトに対して言う。確かに受け止められればいいが、彼女はまだあれの威力を知らないでいる。

「近くだと防御しても貫かれる!!」

「なのははもう少し自分のことを知ったほうがいいよ!!」

なのははなぜか怒られたことに対してさめざめと泣いている。すると突然バルディッシュのコアが光フェイトに伝える。

『サー、左方向に一般人がいます』

なのはたちはそれを聞いて慌てては距離をとりながら一般人を探した。なのはとフェイトが一般人を探しながら距離をとっている間狙われているのはなのはとフェイトのためアルフとユーノは別ルートで距離をとっている。

砲撃のスター・ライト・ブレイカーは、チャージ時間が長いため距離をかなりとれた。そして今は一般人を探しているのだった。

なのはたちは急いでその一般人を探す。すると建物の角に女の子2人組がいたのを発見したので慌ててその場に行く。

「危ないので動かないでください」

なのはが二人に対して言う。

「もしかして、この声は」

なのはにとってもその女の子にとってもお互いの声は聞き覚えのあるものだった。なのはが言うとなの子2人組が振り返った。その2人組は・・・

「なのはちゃん、フェイトちゃん?」

月村すずかと・・・。

「なのは、フェイト?」

アリサ・バニングスだった。

PHASE 138 誘い

すずかとアリサははやてに対するプレゼントを渡し終えて帰宅する途中だった。どういうわけか今日はゆっくりと帰リたかったので途中まで徒歩だった。すると突然何かが通る

感覚がしたら周りから人が消え、すずかとアリサの二人だけになってしまった。

一体何が起きたのかと未知の体験に困惑する二人。

「すずか・・・やっぱり誰もいない」

「どうしよう?？」

あたりをくまなく詮索してみたがまったく人が見当たらなかった。しかし彼女たちが希望を失うことなく探せたのは時切なる轟音とも取れる音だった。なにかドンパチでもやっているのだろうかと思っていた。二人が空を見上げると桜色の光があった。

「逃げよ、すずか!!」

アリサが直感的に危険を察知し逃げてきたら、なのはとフェイトが変な格好をしていたのを見た。そして、なのはたちにとっても見られてしまったことで困惑とこれからのことに不安がよぎる。

彼女たちに一体道説明すればいいだろうか。軽蔑されないだろうか。これからも友達でいられるだろうか。色々な不安が頭をよぎる。しかし今はあの女性をとめ、はやてを助けなければ行けない。そしてアリサとすずかを守らなければいけない。それが今彼女たちがやらなければいけないことだった。

「とりあえず2人ともこの中にいて」

フェイトが設置型のバリアを出して2人を守るようにした。

闇の書の管制の女性が集めた魔力は、なのはのスター・ライト・ブレイカーを超えていた。

「スター・ライト・ブレイカー」

スター・ライト・ブレイカーが発射された。着弾した所から広がる爆風。その間に割って入ってきたのはあの未確認の三機のガンダムだった。

すでにアインとドライのドッキングがなされ、GNランチャーが構えられていた。

「アイン兄、準備オッケーだよ」

ドライの声が聞こえてくる。

「分かった、GNランチャー、圧縮粒子解放」

砲口から光が漏れる。

「発射!!」

赤黒い砲撃が放たれ桜色のスターライトブレイカーと激突する。なのはとフェイトはなんとか障壁を張ってアリサとすずかを守っているが、あまりの衝撃に吹き飛ばされそうになった。

「なのは、大丈夫?？」

衝撃でかなり削られたために疲れを見せるフェイト。

「私は大丈夫。だから早くアリサちゃんとすずかちゃんの避難を」

>ユーノくん、アリサちゃんたちの転移お願いできる??<
>分かったよ、なのは<

なのはの表情にも疲れが見える。しかし念話でユーノに二人の避難を要請する。

「なのは、フェイト。あんたたちやっぱり・・・」

アリサが慌てて聞くが、しかし、なのはの返答を待たずとして二人は転送された。だが、二人はまったくアリサの言葉を聴いていなかった。その言葉からして、このときより前から魔道師として活動していたことを知られていることを簡単に連想できるはずなのに・・・。

「見られちゃったね・・・」

フェイトが二人が転送されてから肩を落しながら言う。秘密にしておきたかったこと。しかしこんな形で知られてしまったとなるともう後戻りはできない。

「でも、今はあの人を止めるのが最優先だね」

なのははまだ空中に滞在している女性を見つめながら言う。

「その通りだね・・・」

フェイトも気を取り直す。

＞ユーノくん、二人のことお願いねく

＞アルフもお願いく

＞分かったく

＞無茶をしないでよく

「まずはあの人を説得してみよう」

なのは達は説得を試みる。

「夜天の書の管制さん、止まってください。ヴィータちゃん達を傷つけたのは私達じゃないんです」

「はやてだってこんなこと、望んでいません。だからこんなことはやめてください」

なのはとフェイトは必死に女性に対して説得を試みる。誰もが言葉で納得できるなら今頃争いというものはない。それが無理だから争いが起きるのだ。彼女たちでもそれは百も承知である。それでも彼女たちは女性を説得したかった。誰もが悲しまず、幸せに終われる。まさにハッピーエンドにしたかったのだ。

「我が主は、自分の愛する騎士達が消えたこの世界が悪い夢であつてほしいと願った・・・」

悲しみに染まった声だ……。そして夜天の書の管制の女性は語る。

「我はただ、それを叶えるのみ。主には穏やかな眠りのうちで永遠の眠りを。そして、愛する騎士達を奪ったもの達には・・・・永遠の闇を・・・」

女性の足元に陣が発動する。それは魔法使用の目印だった。

「あなたはそれでいいんですか!？」

なのはは叫ぶ。すると突然地面より何かの生き物達が表れなのは達を捕縛した。

「私はただ主の願いを叶えるだけだ」

悲しみの染まったその声でいうがその言葉に二人は反応した。

「願いを叶えるだけ?? そんなこととしてはやてちゃんは喜ぶの!？」
「心を閉ざし、ただ自分の主の願いを叶えるだけだの道具になって、あなたはいいですか!？」

二人は必死に説得する。

「我は魔導書・・・ただの道具だ」

自分は道具だという意見は変えない。フェイトは思った・・・彼女は昔の自分だと。ただ母親の言いなりとなって道具のようにジュエルシードを集めていた自分。自分の気持ちを押し殺していた自分だと。彼女もきつとこんなことをしたいのではないのだと思った。

しかし、彼女ではどうする事もできないのだと・・・。

「あなたは道具でいいの!?!? 心があるでしょ!?!」

嘗て自分にも当てはまる言葉だ。

「道具ならおかしいですよ、なんでそんなに・・・悲しい瞳で泣いてるんですか!？」

そう・・・夜天の書の管制の女性は涙を流していた。それが一体何を示すのか・・・。

「この涙は主の涙・・・我は道具だ」

それが自身から流れる、嘘偽りのない悲しみを感じている涙だとは認めず、なお否定する。

「バリアジャケット、パージ」

フェイトは、バリアジャケットをパージすることにより、自分達を捕縛した生き物を吹き飛ばした。

「悲しみなどない?? そんな言葉・・・そんな悲しい顔と声で言われても誰も信じはしない!!」

「あなたの主のはやてちゃんはきっとそれに答えてくれる、優しい子だよ!!」

「だからはやてを解放して、武装を解除して、こんな悲しい事は終わりにして下さい!!」 「・・・」

刹那、女性が沈黙した。時同じくしてなのはたちも沈黙する。しかし突然、地響きが起こった。そして至る所から、火柱が立つ。

「はやいな・・・」

まるでこうなる事が分かっていたように言う。それにはあきらめ

のようなものも含まれていた。

「もう崩壊が始まったか。私もいずれ・・・意識をなくすだろ」

それは世界の崩壊。自分たちの住んでいたこの世界が消えてなくなる・・・消滅する。

「そうになったら暴走が始まる・・・」

彼女の力ではもうどうすることもできないらしい・・・。

「そうなる前に、私は・・・主の願いを叶えたい」

彼女の瞳には決意が会った。たとえ幾万もの命がなくなろうと彼女はただ主のためを思っているのだ。それははたから見れば美しいまでの主従関係。しかしある面から見れば世界を危険にさらすゆがみでしかないのだ。そう言うと、なのは達の周りに再び真紅の短剣が展開された。

「闇に沈め」

そうして短剣が一斉に襲い掛かる。ものすごい爆発が起きるが二人は回避をした。

「話を聞いて!!」

フェイトが特攻をかけて切りかかる。

「お前も悲しみを背負いし者、私の下で眠るといい」

夜天の書を2人に向ける。しかしフェイトは構わず突っ込む。

「ハアアアアア！！」

フェイトは攻撃をするが防がれた。そしてその瞬間にフェイトの体を光が包み込む。そして光に包まれたフェイトは消えてしまった。

「フェイトちゃん！！」

「全ては・・・安らかな眠りのうちに」

なのはとただ呆然とするしかなかった。

フェイトが飲み込まれた様子を見ていたトリニティはいたって普通だった。彼らにとって任務中に起きることは仕方がないことと片付けられる。

むしろ彼らは管理局員ではない。依頼人の命だけを聞いていればいい。まあ、今の仕事もまた来るべきものへの閑話休題にしかならないのだが。

「まじかよ自分から飲み込まれにいつてやんの」

ツヴァイは彼女たちがいる方向に指を向けて笑っている。

「自殺願望者?? 何も考えなくて感情的になって突っ込むだなんて・・・ばっかみたい」

ドライもそれに賛同している。

「我々に課された任務を遂行するにはまだ早いか・・・」

時が来るのを待つ。この後どのようなのか・・・まるで計算なくされているようにも見える。

「今のうちに粒子の回復を行う」

「了解」

時は来る・・・それは悲しみの終焉と共に悲しみの始まりだとも知らず。それを切り開くのは・・・一体何なのか。

PHASE 138 誘い（後書き）

ご感想お待ちしております。

PHASE 139 夢

――私は・・・一体どうなったんだろう??。

フェイトは何かに包まれる感触を感じ意識が覚醒しながら先までのことを考える。自分は夜天の書の管制の女性に切りかかったがや天の書に飲み込まれたところまでは覚えていた。目を開けると、知らない天井があった。

「フェイト、おはようございます」

とつぜん声が聞こえた。しかし確かにフェイトを呼んでいた。だがその声は彼女が知っている中で1人しか知らない。更にその人は・・・もういないはずなのだから。それでもフェイトは名前を呼ぶ。今の声が嘘で無いと信じたいから。「リニス?」

「そうですよ、フェイト」

フェイトの目の前にリニスがいた。よく見るとフェイトの隣にはアルフともう1人・・・いないはずの人がいた。

「アリシア、起きて下さい」

リニスが優しく起こす。アリシア・テストロッサが寝ていた。

「・・・うん・・・あと5分」

なんともベターな台詞である。カップラーメンが出来上がってし

もう時間である。

「フェイトはもうすっかり起きてますよ、お姉ちゃんのアリシアが妹のフェイトに負けちゃいますよ」

まったくもうと腰に手を当てて言うリニスは母親にも見えた。

「ここは、どこ?」

思わず聞いてしまう。

フェイトの記憶にこんなところはないからだ。しかし対するリニスは頭を抱えて言う。

「ハア・・・宣言撤回します。フェイトはまだ寝ぼけていますね」

「フェエエエ!?! そんなことないよ」

「そんなことないではありません。さあ、早く顔を洗いに行きましよう」

するとアリシアはぱっと起き上がってパタパタと走って洗顔をしに走る。

「アリシア!! まだ着替えていませんよ!?!」

しかし、聞こえていないらしく返事がない。

「全く、困ったものです」

そう言うリニスはではあるが微笑みは絶えない。幸せそうだ。

「アルフも起きなさい」

「・・・おはよう、リニス、フェイト」

もぞもぞと起き上がるアルフは目をこすりながらおはようの挨拶をした。

「おはよう、アルフ、私は少しフェイトと話す事があるのから、先に食堂に行っていて」

「うん・・・分かった」

そうアルフは言うのと部屋を出ていった。そのアルフをリニスは笑顔で見送った。

「さて、フェイト話を聞きましょうか??」

リニスは顔は笑っているがフェイトは恐怖以外何者でもなかった。

アリシアは着替えを終えて来た。

「お母さん、おはよう」

「おはよう、アリシア。アリシア、さっき会った時に挨拶しなきゃダメよ」

「はい」

笑顔で謝る。それを見たプレシアは反省したのかしらと苦笑いを浮かべる。それでもアリシアを見つめる眼は慈しみを溢れている。

「おはようプレシア、アリシア」

アルフも来た。

「おはようアルフ」

「おはようアルフ」

アルフに二人が言うとりニスがひょっこりと戻ってきて言う。

「プレシア、今日は雪か嵐になりそうです」

戻ってきていきなり意味の分からないことを言う。どうしたのだろうかと三人は疑問に思う。

「なんでなの？」

アリシアが切り出した。

「フェイト、出てきて」

リニスが言うどひょっこりと顔を出すフェイト。どうやらフェイトは柱の裏に隠れていたみたいで、リニスが呼び掛けたら出てきた。

「フェイトは悪い夢を見たせいでここが夢か現実か分からなくなっているみたいなんです」

「フェイト勉強のやりすぎじゃない?？」

「ありえる」

「2人があまりやらないだけよ・・・」

プレシアがやれやれという風にいう。

「いらっしやい、フェイト」

頭を上げたプレシアはフェイトを呼ぶ。おずおずとフェイトはプレシアの所に来た。そうするとプレシアは顔に手を伸ばしてきた。

「!!」

思わずフェイトは叩かれると思ったのか身を硬くする。しかしプレシアがした行動はフェイトの予想を大きく反していた。

「フェイト安心して、ここには母さん、アリシア、アルフ、リニス
が傍にいるわ」

安心させるかのようにフェイトの頭を優しくなでる。

「ご飯を食べたら怖い夢も忘れるでしょう」

「そうね、ご飯にしましょう」

食事をしながらフェイトは思った。これは夢であると。フェイト・テストロッサが嘗て夢見たまさしく願望を映し出した夢。暖かであるがどうしてもぬぐいきれない違和感のある夢・・・。

現実世界にプレシア・テストロッサもアリシア・テストロッサもない。ミッドチルダに行ったとき、墓場に収められたのだ。フェイトはそこに行ったときアルフと一緒に声をあげて泣いた。

一緒に来ていたリンディもクロノもエイミィも泣いてくれた。

そしてここにいるリニスもういない。母プレシアの使い魔であったがプレシアの病気の進行により、リンカーコアが弱まったことにより魔力の供給がうまくできなくなっていた。リニスがリニスのままでいられる時間が短くなったときフェイトを一人前の魔導師に

鍛え上げるまで契約するという面目上生きていた。

そしてその契約が満たされた時、ひっそりと息を引き取ったのだ。

フェイトはそのときの姿を見ていない。ただリニスがいなくなってしまったということ。幼いながら分かったのだ。彼女はいなくなってしまった。永遠に会えないのだと・・・。

しかしこれはフェイトがずっと欲しかった日常だ。一人こっそりとは泣いた。

闇の書の外ではなのはが消えてしまったフェイトの事を必死に呼んでいた。しかし効果はまったくなく聞こえてくるのは世界の崩壊だけ・・・。

「夜天の書の管制さん、フェイトちゃんをどこにやったの!？」

「あの少女なら、私の中で眠っている・・・。2人が望む世界の中で」

「なのはちゃん」

エイミィからの通信がきた。

「その話は本当だよ。フェイトちゃんのバイタルは健在。どうやって助けるかはこれから検討するよ」

「お前達も眠ったらどうだ??？」

まるで甘い誘惑に誘うかのような言葉だ。

「私の中で眠れば、望みの世界があるのだぞ??？」

それは永遠に続く理想郷。しかしそれはそれでしかない。

「いくら望どおりでも、それはただの夢だよ」

確かにそれはとても聞こえはいいものかもしれない。それでも、
なのはにはこの世界を犠牲にしても自分だけ永遠の幸せという名の
夢を見続けることはできなかった。

「それに私達は、悲しみの連鎖を止めなくちゃいけないの」

「お前達に悲しみの連鎖を止める事はできない・・・」

「止めるよ・・・必ず！！はやてちゃんは・・・絶対にこんなこ
とを望みはしないから！！」 「しかし、主は望んでいるのだ」

何度説得しても女性を考えを変えようとはしない。このままでは
どうしようもなく、世界の破滅を見ているしかできない。すると突
然レイジングハートが話しかけてきた。

『マスター、私に考えがあります』

「なんなの？？ レイジングハート」

なのははさすがのように聞く。

『エクセリオンモードと言ってください』

レイジングハートはただそういった。

「ダメだよ」

それを聞くとすぐになのはは却下した。

「あれはフレームの強化が済んでからじゃないと・・・。それに私

が魔力のコントロールをミスしたら、レイジングハート壊れちゃうよ」

『私はマスターを信じます』

しかし、レイジングハートはどこまでもなのは信じる。ならなのははその信頼にこたえなければいけない。

「……いくよレイジングハート」

『了解、マスター』

「モードエクセリオン！」

『エクセリオンモード』

なのはがそういうとレイジングハートが形を変えた。通信からエイミーが止まるように説得するがなのはは止まらない。世界を守るならいくらでも無理をしてやろうと思ったのだ。

「夜天の書さん……止まる気はないのですね?？」

再度なのはは聞く。

「何度も言うように、止まるつもりはない」

すると突然空からバスターソードを振りかぶったガンダムが女性に襲い掛かる。

「少しは楽しませろよ!! 闇の書!!」

スローネ・ツヴァイだった。

しばらく静観しているつもりであったが好戦的な彼はどうしても

戦いタイということで無理をしない程度ならいいといわれてきたのだ。

しかし、彼に無理をしない程度という加減はできない。

「少しは張り合いが無いと依頼が達成できネエじゃネエかよ!!」
「くう!!」

大型のバスターソードの攻撃に対して盾を召喚し防ぐが押されているのは女性のほうだ。しかし破壊するには行かない。

>そろそろ時間だ・・・<
>了解だぜ兄貴<

「さすがに硬いな・・・。おいそのガキ!!」
「にゃ!!? 私なの!?!」
「ほかのどこにいるんだよ」

ツヴァイはなのに対して叫ぶ。

「あの防御を崩せるか!?!」
「・・・ACSなら」
「いよし、それを撃て。俺が時間を稼ぐ・・・。行けよ、ファング!!」

腰からGNファングが飛び出し、次々と高速移動しながら女性の死角からの攻撃を放つ。女性はなんとか反応して盾で防いでいるがなのはに対して収束する時間を与えている。

「レイジングハート・・・いくよ!!」

先端に桜色の魔力が集まった・・・。

フェイトとアリシアは外にいた。フェイトはこれが夢であってもわずかな幸せをかみ締めていた。

「フェイト、雨が降りそうだよ？？帰ろう」

アリシアの言葉に空を見ればいかにも雨が降りそうだった。今フェイトたちは木の下にいる。

「ごめんね姉さん・・・私はまだ残ってるよ」

「なら私も残って2人で雨宿りしよ」

笑顔のアリシアがフェイトの傍に來手座り込んだ。

「姉さん・・・ここは夢なんだよね」

しばらくしてから雨が降ってきた。フェイトは口を開くと現実を言う。

「・・・」

やはりアリシアも知っているようだ。ここにいるアリシアはフェイトが望んだアリシアであり、生きていた頃とまったく変わらないアリシアである。

「・・・」

「ねえフェイト、夢でもいいじゃん・・・」

アリシアはずっと妹が欲しかった。

しかし、あの時幼いアリシアは事故に巻き込まれ、帰らぬものとなってしまった。なくなった後もずっとフェイトと自分を蘇らせようと必死になるプレシアの事を見ていたのだ。鳴いているのにも声が届かない。

ずっとやめてといっているのに聞こえない。それがどうしてもどかしかった。

「ここにはフェイトが望んでた日常があるんだよ?？」

アリシアはずっとフェイトにここにいて欲しいと望んでいる。ずっとここで幸せに暮らそうと・・・

「私は・・・」

フェイトは迷った・・・。

——眠い、眠い・・・。

少女はひざを抱えて眠っていた。幸せな偽りの現実という名の幸せな夢を見ながら・・・。

「主、そのまま眠っていてください」

優しく語り掛ける管制人格者。

「主の願いは私が叶えます」

少女・・・八神はやての目の前には銀色の髪をした女性がいた。

「あなたは、誰や??」

眠いのを我慢し女性を見つめてたずねる。

「私は闇の書の管制プログラムです」

闇の書の管制プログラムと聞いてもぴんと来ないはやて。

「私の・・・願いつてなんや??」

はやてはふと思った。彼女に何か願っただろうか。

「健康な体でいたい、愛しい者達とずっと暮らしたい・・・」

確かにそう思った。

足にある麻痺などに苦しまず、シグナムたちと幸せに、そう、普通に暮らしたいと。

「眠っててください主、夢の中で全ては叶います」

その聞こえはとても幸せそうでもいいかもしれない・・・。

「どんな願いが叶ってもそれは夢や。今までの事は不思議と分かっ
とる。でも私は破壊なんて望んでへん、あなたもそうやろ??」

はやてはゆつくりと立ち上がり、女性の元へと歩く。ここではどうやら麻痺は関係ないらしい。

「私の心は守護騎士達とリンクしています」

管制人格者であるためでもある。

「なので守護騎士達と同じようにあなたが愛しい」

それを聞いてはやては嬉しくなった。やはり家族でよかったと。

「しかし、闇の書の暴走によって破壊活動は止まらず、あなたを侵食し殺してしまう事も・・・」

「・・・覚醒の時少し分かったんよ」

はやてに隠れて蒐集活動をしたのも、そして破壊活動が進んでいることも知っている。蒐集活動したのはシグナムたち守護騎士が皆はやてを好きだからだ。

「シグナム達も悲しい事をいっぱい経験してきた事を」

それは嘗ての主たちの元での彼女たちの行動である。

「・・・でもな忘れたらダメや」

「!」

はやてはゆつくりと闇の書の管制プログラムの女性の顔に手を優しく添える。

「主の言うことは聞かなアカンよ」

そうしてはやての下に白いベルカ式が展開された。

「私は戻らなきゃ」

フェイトはまっすぐアリシアを見つめて言った。アリシアは少し残念そうだったがすぐに笑顔になり、言う。

「そっか・・・、なら行っておいでフェイト」

アリシアは手を差し伸べた。その手にはフェイトの愛機であるバルディッシュがあった。フェイトはそつとバルディッシュを受け取った。そしてアリシアはフェイトに抱きついてきて言う。

「現実でもこんなふうに話したかったな・・・」

もう叶うことのないこと。もう会えないのだ。永遠の別れ・・・。

「ごめんね姉さん・・・」

フェイトもアリシア同様に涙を流す。

「いいよ私はお姉ちゃんだし、待ってるんでしょ?? 強い子が・・・」

「・・・うん」

そうしてアリシアは消えてしまった。

はやてが手を差し伸べたて優しく添える。女性の瞳から流れる涙。

「私が名前をあげる……。闇の書とか呪いの魔導書とか私が言わせへん。私は管理者や、それができる」

「ダメです、自動防衛プログラムが止まりません。管理局が戦っていますか……」

「……止まって」

はやてはそう願った。世界を破壊させないため、もう一度幸せな日常に変えるために……。

すると外でなのはたちが防衛プログラムが戦闘していたが、防衛プログラムの動きが急に鈍くなる。どうしたのだろうと思ったそのときだった。

>外で戦ってる管理局の皆さん。私は……。その子の保護者の八神はやてです<

はやて自身の声で念話が発信された。

>は、はやてちゃん!?!<

>なんだ?!?ガキの声?!?<

>どうやら、PHASE3が終わったらしい。次に移るぞ<

>やっと私たちの出番ね♪<

>なのはちゃん……。みんな!?!とにかく……。なんとかその子を止めてくれへん?!?夜天の書のコントロールから切り離れたやけどその子が行動していると管理者権限を使えへん。そこにいるのは自動防衛プログラムだけやから<

>なのは、今から僕が言うことができればはやてだけじゃなく、フエイトも助けられる<

>ユーノくん、どうするの?!?<

＞とにかく魔力ダメージでノックダウンさせて、手加減なしの全力全開で！！！！＜

そうだなのはは思った。フェイトと仲良くなるために戦ったときもいつも全力だった。ならばやてたちを助けることにおいてもやることは1つしかなかった。

「さすがユーノ君分かりやすい」
『まったくです』

なのはとレイジングハートはユーノを褒める。自動防衛プログラムは防御に専念していた。それを突破できるのは今のところなのはとスローネアインのGNランチャーだけである。しかしアインは一向に動こうとしない。ならなのは自身が動くしかない。

「いくよレイジングハート」
『了解。マイマスター』
「AC Sスタンバイ」

レイジングハートから羽がでる。
「アクセルチャージャー起動・・・ストライクフレイム」
『オープン』

レイジングハートの先になのはの魔力光色の槍が出てくる。

なのはたちが戦っている間、はやては管制プログラムの女性に名前をつけていた。今までただの道具としか見られていなかった彼女。しかしようやくめぐり合えた優しい主。

「夜天の書の主の名において、汝に新たな名を送る」

ようやく認められた。

「祝福の風、リインフォース」

与えられた瞬間胸に熱いものがこみ上げてきた。それは喜び。ここに祝福の風が誕生した。そして周りが輝きだした。

その輝きが照らす奥でじつとリインフォースを見つめる女性があったことはやては気づくことなく、リインフォースは申しわけなさそうにはやてと共に外へと出た。

「マタ・・・ワタシハヒテイサレタ」

悲しみに染まった声が虚しく消えていった・・・。

「バルディッシュ、ザンバーフォームでここから出るよ。いけるね??」

フェイトが戻ってきた愛機にたずねると。

『イエス、サー。ザンバーフォーム』

もちろん待ってましたといわんばかりだ

「いい子だ」

バルディッシュが形状を変えて大きな魔力剣になった

「エクセリオンバスター・・・ドライブ」

なのはは自動防衛プログラムに突っ込んでいく。そしてレイジン
グハートの先の槍が防御を抜いた

「ブレイク、シュート！」

強力な零距离砲撃を放った。

闇の書の中でフェイトのザンバーが雷を帯びる。

「雷光・・・一閃！」

フェイトが空間を切り裂いた。

「管理者権限の使用が可能になりました」

なのはのゼロ距離砲撃が見事に貫いたのだ。しかしまだ危機は去
ったわけではなかった。

「しかし防御プログラムの暴走が止まりません。管理から切り離さ
れた膨大な力が暴れだしてしまいます」

「それはなんとかしよう」

主として、しっかりとけじめをつけなければいけないと思ったの
だ。はやての前に現れ
る夜天の書。

「行こか、リインフォース」
「ハイ、我が主」

光が2人を優しく包み込む

PHASE 139 夢（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 140 闇の終焉と否定された者

フェイトが闇の書から見事に脱出し、なのはのゼロ距離砲撃によって防御プログラムが切り離された。みんながパッピーエンドかと思ったが、急な地響きがおこる。

一体何が起るのかと思った。

「闇の書の反応があるよ、まだ終わってない」

エイミィからの通信が入る。戦いの中に地響きがしているさなか、突然黒と白の球体が生まれた。

「なのは」

「フェイト大丈夫かい」

「私達は大丈夫だけど」

「あれは・・・一体」

ユーノとアルフが駆けつけた。

「みんな、聞こえてる?？」

「エイミィさんあれは・・・一体なんですか?？」

エイミィからの通信が着たのでなのはが黒い物体について聞く。

「黒い方は、闇の書の防衛プログラムだと思う。それとクロノ君が向かってるから黒い方にちょうつかいださないでよ」

エイミィが釘を刺すと分かりましたとなのはもフェイトも言う。

「じゃあ白の方はなんなの？？」

フェイトが聞くと。

「夜天の書の主だと思うよ」

「はやてちゃんだ！！」

なのはがそういうと白い球体の中では……。

「……管理者権限発動」

「防衛プログラムの進行に割り込みを掛けました。数分間の程度ですが暴走の遅延ができます」

「うん……それだけあったら十分や」

はやての周りに4つの小さな光ができる。それは彼女の大切な家族たち。今もう一度呼び戻す。また一緒に楽しく暮らしたいから。

「リンカーコア送還……守護騎士システム破損修復」

光の輝きと大きさが増す。

「おいで……私の騎士達」

はやてはまるで我が子をいつくしむかのように言う。4つの光は外に飛び出し白い球体を囲む。その時、白い球体が強い光を放った。光がおさまると、夜天の書の守護騎士達が小さくなった白い球体に背を向けて囲んでいた。

「我ら、夜天の主の下に集いし騎士達」

シグナムが。

「主在るかぎり、我らの魂尽きる事なし」

シャマルが。

「我ら力あるかぎり、主を守りし盾と槍になり、この身に命在るかぎり、我らの主の下に」

ザファイラが。

「我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に」

ヴィータが姿を現す。まるであの夜始めてあったときのように・・

「リインフォース・・私の杖と甲冑を」

「はい」

はやては目をつぶるとはやては甲冑を身にまとう。目を開けると瞳の色が変わり、杖が現れる。はやてが杖を手にすると白い球体は壊れて外から見ると白い球体からはやてが現れた。

「夜天の光よ・・我が手に集え、祝福の風、リインフォースセツトアップ」

今宵、夜天の王が降臨した。

「はやて・・・はやて!!」

「はやてちゃんごめんなさい」

「ええよ、みんなそれに細かい事は後回しや」

主であるはやてを守りきれなかった。それどころか悲しみを繰り返すところだった。それが彼女たちにとっては悔いが残る。

しかし、はやてはそれについて気にしてはいなかった。

「お帰り・・・みんな」

ただいつものように、みんなが家に返ってきたかのように笑顔で言うのだ。

「はやて!!」

耐え切れずにヴィータははやてに泣き付いてしまった。なのは達も近くに來た。

「なのはちゃん、フェイトちゃんごめんなあ、うちの子達が迷惑かけて」

申しわけなさそうに言う。

「いいよ別に」

なのはは気にしてないという。

「大丈夫」

フェイトも同様だ。それに初めて会えたのだから・・・自分の姉とそして再会できたのだからリンスと・・・。

「すまない、水を差してしまうのだが」

先の戦いで魔力を蒐集され、休んでいたクロノが戦線復帰のごとくやってきて言った。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラOWNだ。今から数分後に防衛プログラムが暴走する

がその対策を皆に聞きたい。現在プランは2つしかない」

「どんなものなの？」

なのはが聞く。

「一つ、極めて強力な氷結魔法で停止させる。二つ、軌道上に待機している艦船アースラの魔導砲アルカンシエルで消滅させる。これ以外にほかにいい手はないか？闇の書の主と守護騎士に聞きたい」

「ええっと、最初のはたぶん難しいと思います」

それに対してシャマルが手を上げてクロノに進言した。

「主の無い防衛プログラムは魔力の塊みたいなものですから」

「凍結させてもコアがある限り、再生機能は止まらない」

さすがに守護騎士であるのでそのところはよく熟知している。これによって一つ目に手は消滅した。

「アルカンシエルも絶対駄目！こんなところでアルカンシエル撃つたらはやての家までぶっ飛んじゃうじゃんか！！」

ヴィータがそう言うアルカンシエルがどういうものなのかとな

のはとフェイトが気になったようだ。

「そんなにすごいのか?」

フェイトが気になったために聞いてみる。

「着弾地点を中心に100数十キロ範囲の空間を歪曲させながら反応消滅を起こさせる魔導砲っていうと大体分かる?」

それを聞くとなのははすぐにクロノに向かって言う。

「あの、私もそれ反対!!」

「同じく絶対反対!」

なのは達はアルカンシエル使用について反対意見を述べた。当然であろう。撃った瞬間に鳴海市は消滅してしまう。ここには大切な家族や友人たちがいるのだ。それに無関係な人たちの命を奪ってまで止めるのは避けない。しかし時間がない。このままでは自分たちも巻き込まれてただ世界の崩壊を待つしかなくなってしまう。

「僕も艦長も使いたくない。でもあれの暴走が始まったら被害がそれよりはるかに大きくなる」

あれの恐ろしさを知っているからこそ早く止めたいのだ。自分たちの手で・・・過去を払拭したいのだ。

「暴走が始まると触れたものを侵食して無限に広がっていくから」

それこそ子の世界を消滅させるまで止まらないだろう・・・。

>はい、みんな。暴走臨界点まで十五分切ったよ。会議はお早めに！！<

なんとも気楽な口調で言ってくる。エイミーから時間がないと通信が入る。

「何かいい方法はないか??」

「すまない。我らも暴走に立ち会った機会はほとんど無いのだ・・・

」

シグナム達も言い案が浮かばないと残念そうに言う。過去の主において暴走したときも彼女たちはすでに蒐集されてしまっていたのだから。

「はい、ちょっといいかな??」

「「!!」」

突然空から声が掛かる。そこにはトリニティの姿があった。

しかし、皆からすれば管理局でもないものが何故もビルスーツに乗っているのか分からなかった。

更に味方かもわからず、更にヴォルケンリッターたちに協力していたとなると見過ごせなかった。

「貴様らは一体何者だ!??」

クロノが叫ぶ。

「わー、おっかない。そんなに怒るとすぐはげるよ?? マッククロク

ロスケ君」

「僕はクロノだ!!」

「シロノ??」

「黒だ!!」

なんと漫才をやっていると見かねたアインが言う。

「私の妹がすまない。我々はあなた方時空管理局のある人物から依頼されたものです」

「ある人物?? 一体誰だ??」

>それは私だ、ハラOWN執務官<

「グレアム提督!？」

突然モニターが現れるとそこに映し出されたのはリーゼ姉妹と一緒にいるギル・グレアム提督だった。

「私が彼らに闇の書の封印を手伝ってもらうことを依頼したのだよ」ということです。信用していただけましたか??」

「あ・・・ああ」

クロノがまさかグレアムが出てくるとは思っても見なく、更に面識のあるのはたちも驚いていた。

ヴォルケンリッターはじめ警戒していたがグレアムが信用のあるものだということを言われ、従うことにした。

「それで何か手はあるのか??」

「ええ、あなたたちの戦艦である『アースラ』が宇宙にあることはグレアム氏から聞いています」

「ま・・・まさあ」

それを聞いてクロノは口をあんぐりと開けてしまう。まさかその手があったとは考え付かなかったからだ。どういふことだと皆は不思議そうにしているが……。

「簡単なこったコアを別のところに送ればいいんだよ」

それを聞いてなるほどと思った。

「そうか!! クロノくんアースラのいる空間は??」

「軌道上、宇宙空間だ」

「なるほど管理局のテクノロジー、なめてもらっちゃ困りますよ。撃てますよー宇宙だろうがどこだろうが!!」

そして、エイミーからどこでも撃つ事が出来ると以外にノリノリに自信を持って報告される。

「みんな大丈夫?」

リンディからの通信が入る。

「リンディさん」

「その計画に賛成よ」

「か、艦長まで」

まさかこの様な個人の實力が試されるばくちにも似た作戦に実の母親が賛成するとは思っても見なかったのだ。

「計算上でも可能だからよ。ただ個人個人の力に頼る形だからギャンブルになりますので現場指揮はクロノに任せます」
「了解しました」

クロノもこれ以上頭をひねっても最善の手が浮かばないので自分たちの力を信じてやるしかないだろうと重い決心を固める。

「防衛プログラムのバリアは魔力と物理の複合五層あるな・・・まずはこのバリアを抜いて」

「そして私達の砲撃でコアを露出」

「最後にユーノ君達が転送魔法で転送して」

「アルカンシエルで蒸発させる。いい作戦よ。私達はアルカンシエルの準備に入ります」

そう言ってリンディは通信を終了した。

「暴走まであと10分」

「一応私が保険として砲撃に加わる。いいか??」

アインが言うところクロノたちも了承する。彼の砲撃が軽く自分たちのものを超えていることを感じ取ったからだ。

「えっと、みんな名前紹介をしない??」

シリアスなこのときに突然なのはが言った。

「なのはは、こんな時に何を・・・」

クロノがあきれた表情で言う。

「みんながみんなの事を知っていた方がいいと思って・・・」

緊張をほぐそうと思ったのだろう・・・。

「私もそれに賛成や。少しは息抜きもせんとな」

その後、みんなが同意したのでそれぞれ自己紹介をすることになった。

「私は高町なのは」

「ユーノ・スクライアです」

「フェイト・テストロッサです」

「アルフだよ」

「八神はやてや」

「シグナムだ」

「シャルです」

「ヴィータだ」

「・・・ザフィーラ」

それぞれ簡単な名前紹介をし終えた。

「後五分だよ!!」

エイミィの通信越しの声が聞こえてくると緊張した空気が流れる。

「なのはちゃん、フェイトちゃんケガしとるな」

二人は先の戦いまでで大げさにするほどではないが身体中に傷を負っていた。

「シャルお願いや」

はやては湖の騎士のシャルに指示する。

「はい、2人の治療ですね」

「クラールヴィント本領発揮よ」

『了解』

「静かなる風よ、癒しの恵みを運んで」

シャマルが詠唱するとなのは達の傷が治っていく。

「湖の騎士シャマルと風のリング『クラールヴィント』は癒しと補助が本領です」

早速回ってきた仕事をこなせて嬉しそうだ。

「すごい」

「ありがとうございます」

球体の周りから次々と上がる黒い柱。そしてその周りに闇の書の闇が作り出した生き物達がうごめいている。それを見つからして暴走が始まった事を意味しているといいだろう。そして黒い球体から闇の書の闇がまるでさまざまなものが交じり合ってきたキメラとして出てきた。

「作戦スタート!!」

クロノの声で作戦が開始される。

「チェーンバインド」

「ストラグルバインド」

「縛れ!! 鋼のくびき」

3人がバインドを発動させ周りの生き物達を倒していく。

「ちゃんについてこいよ、高町なのは」

「ヴィータちゃんもね」

トップとしてヴィータとなのはだ。

「鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーフアイゼン」

ハンマー方のデバイスを構え、カードリッジをロードした。

「鋼鉄粉碎・・・」

アイゼンが巨大なハンマーになった。

「ギガント・シュラアアアアアク！！」

そして大きく振りかぶると勢いよくバリアにぶつけて一層目を破壊。

「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン、いきます！！」
『ロードカートリッジ』

なのはが砲撃の発射体勢になる。しかしそんななのはの構えを見て危険と判断した闇の書の闇は砲撃を撃たせないように生き物で邪魔しようとする。しかしそれに対してレイジングハートがうまく対応する。

『バレルショット』

それを衝撃波により粉碎して時間を稼ぐ。

「エクセリオン・・・バスター!!」

なのはの放つ、2つの大威力砲撃により二層目も破壊される。

「次、シグナム、フェイトちゃん」

「剣の騎士、シグナムの魂、炎の魔剣レヴァンティン、刃の連結刃につづくもう一つの姿」

シグナムは鞘をレヴァンティンの下につけると鞘がレヴァンティンと合体して弓の様な形になった。シグナムや矢を出して構えた。魔力によって形成された矢を構える。

「駆けよ隼!!」

『シュトゥウムファルケン』

その矢をバリアに向け放たれる。バリアにぶつかりと爆発が起きて2層目も破壊することに成功する。

「フェイト・テストロッサとバルディッシュ・ザンバー、いきます」
フェイトは剣を振るい衝撃波で生き物を斬っていく。

「撃ちぬけ雷神」

『ジェットザンバー』

巨大な魔力でバリアを切り裂く。守るものがなくなったために闇の書の闇は反撃とばかりに生き物を使用して砲撃をしようとする。

「盾の守護獣、ザフィーラ、やらせわせん、鋼のくびき」

ザフィーラが止めに入るが数が多く、わずかに逃してしまう。

「たく、仕方ねえな。行けよ、ファング！！」

しかし、それらもまた突然表れたツヴァイから放たれた赤いファングによって次々と撃墜される。

「はやてちゃん」

「彼方より来たれやどりぎの枝、銀月の槍となりて撃ち貫け、石化の槍ミストルティン」

上空から白い光が闇の書に刺さり石化していく。しかし石化しているのに再生していく。

「並の攻撃じゃ再生しちゃう」

石化しているところから徐々に再生し、もはや原形をとどめていない化け物と化している。それを見つめているリインフォースはただただ見つめるしかできない。

あの中でずっと助けを待っている。声が聞こえる。助けてと・・・。

しかし、誰もその声をリインフォース以外聞こえない。聞こえたとしても、もはやどうすることもできない。バグを取り除く何かがあればいいとしても、そんなもの今から要しても時間がない。もはや世界が崩壊し始めている。

「でも確実に効いている、計算変更はなしだ、いくぞデュランダル！！」

クロノはグレアムから託されたデュランダルを構える。

「悠久なる凍土、凍てつく棺のうちにて永遠の眠りを与えよ、凍てつけ!!」

『エターナルコフィン』

氷結魔法により闇の書の闇の再生を止める。その威力は闇の書の闇の周りの海も凍った。

しかし、氷の中にいるそれが今にも打ち破らんともがいている。

「いくよ、フェイトちゃん、はやてちゃん」

「うん」

「集え星・・・全力全開、スターライトブレイカー!!」

「雷光一閃プラズマザンバー!!」

桜色と金色の砲撃が放たれた。

――・・・ごめんな。

はやては涙を流しそう呟く。ずっと否定されていた闇の書の闇を今開放してあげようと思う。

――・・・お休みな。

そうして杖を構える。

「響け終焉の笛、ラグナロクブレイカー!!」

3つの光が強く輝き光の柱が闇の書のの闇に降り注ぐ。瞬間にも
のすごい大爆発が起きた。しかしまだしぶとく生き残ろうとする闇。

しかし、彼女たちに焦りはなかった。保険をかけていたからだ。

「GNランチャー、目標セット」

「GN粒子供給率100パーセント」

「任務遂行により、破壊する。GNランチャー、発射!!」

赤黒い砲撃が放たれた。まっすぐそれは闇に向かって走る。直撃する瞬間に皆が見た白い流星は一体なんだったのだろうか。ものすごい爆音と共に煙が発生した。

PHASE 140 闇の終焉と否定された者（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 141 覆される運命（やてん）

砲撃に包まれる前、明らかに異形の中にいる防御プログラムの姿が見えていたリインフォース。そこには彼女と瓜二つ、瞳の色が赤か青かの違いだけだ。

>タスケテクレナイノ??<

闇のにとらわれ必死に手を伸ばし助けを求める防御プログラム。

「星よ集え・・・スターライト・・・」

>マタワタシヲヒテイスルノ??<

涙が頬を伝う。

しかし、リインフォースには彼女を助ける力もすべもないのだ。今彼女もろとも捉えている闇・・・暴走したバグを止めなければこの世界が崩壊してしまう。主たちが必死になって守りたいというこの世界を守らなければいけない。

>すまない・・・<

ただそういうしかなかった。そう呟いた瞬間防御プログラムの女性・・・リインフォースの半身である女性は絶句した表情になる。

>私にはお前を助けだせる力もすべもない・・・<

これはいいわけだ。

ずっと改変されてから狂い続けた夜天の書。その影響が守護騎士や自分に及ばないように必死に防御プログラムという名の下に守護してくれていたのだ。

だが、今自分たちがしようとしていることは一体なんだろうか。何百年という長い年月をかけて守ってきた彼女に対して与えるのは感謝ではなく仇である。

「電光一闪・・・プラズマザンバー・・・」

>ワタシハステラレルノ・・・??<

自分だって夜天の書の一部である。なのに自分だけ切り捨てられる。嫌だ嫌だ嫌だ。まるで捨てられた子どものように泣き叫ぶ。彼女の感じているのは恐怖。死への恐怖。

>ワタシハケツキヨクミトラレナイソンザイ・・・<

主は守護騎士たちを認めた、管制人格者を認めた、しかし防御プログラムである自身を認めてはくれない。

「ごめんな・・・お休み・・・ラグナロク」

光が包み込んだ。しかしかろうじて彼女は生き残っていた。しかし力はほとんどない。おそらく次の一撃を喰らえばコアが射出されるだろう。そうすれば話どおりにアルカンシエルで破壊され、永遠の眠りにつくだろう。

赤黒い砲撃が向かってきた。最後の最後までわずかな光にすぎる。

あの時絶対に踏み入れることができない自身の領域に生身で踏み込んできた青年。助けるといつてくれたときは嬉しかった。しかしその青年の姿はない。

＞サイゴニ・・・マタアイタカッタ＜

最初で最後の自分を認めてくれた人だと思ったから。飲み込まれるとき白い翼が舞い降りたのを見た。そして、それよりも砲撃に飲み込まれる・・・。

「対象の確認、現在ジャミングがひどくてできません」

煙が悶々と立ちこめ、エイミィはタイピングを繰り返すが何かしらの影響からかジャミングが発生し、闇の書についてわからない。

「アースラは引き続き観測を」

後はシャルがコアを取り除き宇宙空間へと送れば後はアルカンシエルで終わる。そう誰もが思っていた。しかしゆっくりと煙がはれると同時に黄金色の粒子がまわりに待っているのが見える。

そして、ようやくジャミングが緩和されたところで・・・。

「艦長！！闇の書の反応付近に未確認が！！」

「ええ！？」

エイミィの叫びにリンディも驚きを隠せない。あれだけの砲撃の中、一体どうやって防ぎきったのか、空中に舞う虹色の見知らぬ粒子。

＞一体何が起きたんですか！？＜

なのはの念話が飛んでくる。

「気をつけて！！そこに未確認が現れたから！！数・・・1！？」

エイミィの驚愕とも取れる声。

ゆっくりと煙がはれるとそこには虹色の粒子を発してはやての黒い翼とは対照的の、天使の様な純白の3枚の大小の翼を持ち、白と青のツートンのMSモビルスーツ・・・ガンダム。

そこにいたのは・・・。

「ガンダム・エクシア・・・」

PHASE 141 覆される運命（やてん）（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 142 天使の審判

「なにするんだよ、てめえ!!」

突然乱入してきたガンダム・エクシア・・・ハヤトに対してツヴァイは叫ぶ。驚きを隠せなかったのはたちだが、闇の書の闇の破壊を邪魔されたために、警戒してデバイスを構える。

「ハヤト・ブリッグス!! 君は一体何をしたのかわかっているのか!!」

クロノがデュランダルを構えて言う。もう少しで全てが解決するところだった。悲しみの連鎖が止まるはずだったのにもかかわらずに、それを邪魔されたのだからたまったものではない。

「なに?? まさか、手柄を横取りしようって言うの??」

ドライが茶化すように言ってくる。

「ふざけてるんじえねえぞ。てんめえええ!!」

「やめろ、ツヴァイ!!」

エクシアにGNバスターソードを構えて襲いかかるツヴァイに静止するように叫ぶアインであるが遅かった。

「おらああああ!!」

上段から振り下ろされたGNバスターソード。相手を真っ二つにせんと唸りを上げる。それを左腕に装備されている、GNシールド

で受け止めると、すばやく右腕に握られている新武装GNバスターライフルをツヴァイの腹に押し付ける。

「へ・・・?？」

ものすごい粒子反応に、アインは散開するように叫ぶ。慌ててなのはたちもその場を離れる。

「破壊する・・・」

そして躊躇なくそのトリガーを引く。虹色の粒子がツヴァイのからだを蹂躪する。

「があああああ!!」

「ツヴァイイイイイ!!」

アインの悲痛な声が聞こえる。巨大な粒子砲によって跡形もなくスローネ・ツヴァイの姿がなくなっていた。

「・・・」

その光景を目の当たりにしたなのはたちは啞然とするしかなかった。明らかに放たれた粒子砲はなのはの全力に匹敵する威力であった。そんな攻撃をゼロ距離から受けて、消えてしまったツヴァイ。

「よくも、よくもおおお!!」

ドライが切れたように怒りの咆哮を上げてGNハンドガンで次々と粒子弾を放ってくる。

しかし、その攻撃も俊敏な機動能力によって次々と回避される。なかなか当たらないことに業を煮やしたドライはハンドガンをマウントすると、GNビームサーベルを持って接近戦を仕掛ける。

「よくも、ツヴァイを!! よくもおおお!!」

迫るドライのビームサーベルを、左手に持ったGNビームサーベルで受け止める。激しいスパークが起きる。

視界を一瞬遮られるが目の前にいることは分かっている。すばやくないすと前のめりになったドライのGNビームサーベルが握られている右腕を跳ね飛ばす。

「あああああ!!」

遠隔操作であるが痛みはそちらにかかるらしい。悲痛なまでの悲鳴が夜天に響き渡る。更に右手に握られたGNバスターライフルを構える。

「や・・・いやあ・・・」

「破壊する・・・」

「いやあああああ!!」

ドライの悲鳴が爆音によってかき消される。

「ドライイイイイイ!!」

爆発して欠片も残っていない煙に向かって手を伸ばしているアイン。ゆっくりと右手にGNバスターライフル、左手にGNビームサーベルを握っているエクシアがなのはたちをにらんでいる。

「どうして、どうしてそんなひどいことをするんですか!!」
「そうだよ。二人とも協力してくれていたのに!!」

なのはとフェイトが叫ぶ。その目には怒りがあつた。

しかし、その程度で引くようなやわなハヤトではない。どこ吹く風の程度である。

爆発して生まれていた煙が霧散する。今後ろでは障壁のなくなっている闇の書の闇・・・捕らえられた防御プログラムがいる。

「お前たちには聞こえないのか?」

「一体何のことや・・・? もう少してこの子達は解放されるのに!! どないして、邪魔するんや!!」

はやてはその手にシュベルトクロイツを握り締め、矛先をエクシアに向けたまま言う。大切な家族がもう少しで助かるというのに、それを邪魔をしたのがあのとときの青年だということを知って、どうしたわけか裏切られたような気がした。

ヴォルケンリッターたちもそんな主の気持ちを察してか怒りの視線をぶつけていた。するとガチャンという音と共にGNランチャーを構えたアインがいた。

すでに標準をエクシアにあわせている。

「殺してやる・・・。ツヴァイとドライの敵だ」

粒子が圧縮される。

それを見てエクシアも左手のGNビームサーベルをマウントすると背中からもう一丁のGNバスターライフルを左手に持ち、あわせることGNツインバスターライフルへと変形させる。

「あのまま運命の流れを任せるべきだったのだ！！それを貴様は！！」

「まだそんなことを・・・」

やはり目の前のアイン然り、以前の未確認然り。この世界の進む運命を何らかの手段で把握しているのではないかと思ってしまう。

もしくは計算上でこうすればこうなるなどと完成された何かで未来設計図が作られているとも考えられた。

確かにあのまま防御プログラム後と吹き飛ばしていれば、防御プログラム以外の助かっただろう。

しかし、今彼女は助けを求めているのだ。それが聞こえていない。

——何故だ・・・、何故分らない。

「人の進む運命は決まっている。そうやって、運命に抗おうとする貴様は、イレギュラーだ！！世界の異端、歪みそのもの！！」

「違う！！」

ハヤトは叫ぶ。

あの時自分が死ぬはずだった。アイオリスでの異形との戦い。一瞬の緩みによる終焉。しかしそれを覆したのは幼馴染であり、初恋

の相手だった。

彼女は死を持って運命を覆した。彼女に与えられた今の存在。それを否定されるのは我慢ならなかった。

ハヤト自身、以前のPT事件において、プレシア・テストロッサ虚数空間へとアリシアと共に落ちていく運命をたどるはずだったプレシアの運命を変えた。

それが彼女にとってどうだったかは分からない。

それでも・・・、それでも、最悪の運命をたどることは無いと思った。だからこそ、今回の事件も悲しい運命をたどらせてはいけない、そう思ったのだった。

「すでに決まった運命。何故それに抗う。辛く、傷つくそれをどうして貴様は平気で行う！！」

「辛さも、痛みも伴う。それが戦いだ、破壊だ。それに、俺は破壊するしかしてこなかった」

アイオリスにいたときもただたん単に任務をこなし、あの時だって異形を破壊し続けるしかできなかった。

守ることもできず、ただただ大切な存在がその手からすり抜けていく。

———そんなことは・・・もうたくさんだ！！

救える存在を助けられるなら、いくらでも破壊し続けようと思った。それが未来につながることであれば、甘んじてその罰を受けよう。

「未来も、明日も、今も、過去も、全てが決まっている。それを受け入れろ！！そして貴様の運命も、ここで終わりだ！！」

「違う！！明日を作るのは、運命じゃない！！」

「何を！！塵芥となり、果てろ！！エクシア！！」

「ふざけるなあああああ！！」

GNランチャーからの砲撃とGNツインバスターライフルからの砲撃がぶつかり合う。ものすごい衝撃波がその場から離れてみていたなのはたちのほうにも襲いかかる。

「「きゃあああああ！！」」

その場に立っていられずに、後方へと吹き飛ばされる。

「く、なんて威力だ。なのはのスターライトに匹敵するぞ」

そんな二人の砲撃を見て、悪寒を感じているクロノ。あんなものをくらったらひとたまりもない。さらにエクシアには隠された機能もある。

”TRAN—SAM”
トランザム・システム

——あれを使ったら一体どうなるんだ……。

想像しただけで恐怖を感じた。

「なんだよ……なんなんだよあいつら！！」

「落ち着け、ヴィータ！！」

「けどよ、シグナム！！」

「分かっている」

エクシアとアインの砲撃のぶつかり合いを見ていたヴォルケンリッターも恐怖を感じ是ざるを得なかった。

共闘したなのはスターライトでさえ強力な収束砲であったにもかかわらず、エクシアとアインはそれを連射しているのだ。

ぶつかり合うたびに衝撃波が襲い掛かってくる。それだけでもバリアジャケットと騎士甲冑が傷つく。

「でもどうして?? 何で私たちの邪魔をしたの??」

「だが、奴は我々に何かを言っていた。『聞こえないのか』とな」

「せやけど、一体何が聞こえないっちゅんやろ」

「もしかしたら、夜天の書にかかわることなのかな??」

「でも、ハヤトさん。書について全然知らないはずだよ。あの後だつてすぐ家に帰って戦いにも出てこなかった」

「リインフォース、何か知らんの?? 何か知ってるんやったら教えてほしんやけど」

現在のはやてとユニゾンしているためにはやてのほうを見るのはたち。夜天の書について最も知っているのは管制人格者であるリインフォースなのだから。

ユニゾンしているリインフォースは悩む。彼女たちに話してもいいのだろうか。この悲しい、夜天の書の真実を……。

そのとき何度目かの衝撃波が襲いかかる。そして彼女たちが向けた先では終にツインバスターライフルから放たれた粒子砲がスローネ・アインを貫いていた。

「たった一人で何ができる・・・」

「違う・・・俺にはガンダム（・・・）がいる。俺達が、変えてみせる」

「く・・・次こそは・・・」

そう言い残し、爆散した。

そしてゆっくりとバスターライフルを下ろす。なのはたちはころあいを見て近づいていく。もちろん警戒は怠らない。

「何故、彼らを消した」

「あいつらは、以前の未確認と同じ存在だ。それに、あれは遠隔操作だ」

「「!?!」」

「ば、ばかな、痛みだって感じていただろう」

「なら、血は出ていたか?」

出ていなかった。

「以前よりもより人間的な動きができるようにしていたのだろう。以前の未確認よりも動きが早かった。連携も取れていたからな」

しかし、何故ハヤトが自分たちの邪魔をしたのかはわからなかった。そう尋ねられると視線をはやてに・・・否はやてとユニゾンしているリインフォースに向けた。

「それは、奴がよく知っているんじゃないか?」

ハヤトがそういうと一斉にはやてに・・・否リインフォースに視線が集まる。

「リインフォース・・・」
『・・・』

はやての言葉にも無言のままである。

——このまま、真実を話してもいいのだろうか……。だが、そんなことをすれば主や小さな戦士たちは後悔する。自分たちが一体何をしようとしていたのかと・・・。

リインフォースはまだ年若い主と主の親友の二人のことを心配して何もいえないでいたのだ。

きつと後悔する。そう思ったからだった。

しかし、そんな彼女に主であるはやてが話しかける。

「リインフォース」
『主・・・』

はやては表情は見えないリインフォースに話しかける。たぶん、彼女は悩んでいるのだろうと思った。それだけ重い話し、自分たちに背負わせたくないからだと・・・。

それでもこのままでは本当に、世界が崩壊してしまう、早く何とかしなければいけない。

「大丈夫や」
『主?？』

「私たちは大丈夫矢で。どんなはなしでも、私たちは受け入れるで」

ちらりとなのはとフェイトを見るはやて。

二人は頷く。

それを見ていたリインフォース。悩みつつ、守護騎士たちのほうを見る。どうすればよいのかと。彼女たちですら知らないこの事実を……。

しかし、彼女たちも黙って頷いた。なんとしても、悲しみの鎖を切らなければいけないからだ。

『分かりました……。全て、お話します』

信じてみよう……。そう思ったのだった。

PHASE 142 天使の審判（後書き）

ご感想お待ちしております。

PHASE 143 聖夜の奇跡

あまり時間が無いということで本当にかいつまんで話をした。

もともと夜天の書は人に扱えるようなものではなかったということ。あまりにも強力すぎたその防御プログラムに、認められる主はいなかったのだ。

しかし、その夜天の書の力を使いこなすことができれば、類を見ない力を手に入れる事ができる。だからこそ、歴代の主たちは、夜天の書自身にさまざまな細工や工夫を凝らした。

しかし、それをこらしても夜天の書を扱うことはできなかった。それどころか、無理な細工などによってプログラム事態の障害になってしまっていた。

それは守護騎士のシグナムたちや管制人格者のリインフォースにまで影響を及ぼそうとしていたもの。

しかし、今時分たちに以前とは変わらない能力と形がある。その理由をリインフォースは告げる。

『彼女が・・・私の半身である防御プログラムが私たちを守ってくれていたのです』

それを聞いた守護騎士たちは啞然とするしかなかった。自分たちにそんな危険が及ぼうとしていたことを。そして自分たちが今こうして普通にいられるのは全て自分たちが先ほど倒そうとしていた防御プログラムのおかげだったということ。

なのはたちも驚きを隠せなかった。自分たちは今さっきまで、そのずっと夜天の書の全ての悲しみを抱えていた防御プログラムを殺そうとしていたのだから……。

しかし、どうすればいいのだろうか。

「何とかならへんの?? あの子も私たちの家族や……。助けて上げられへんの??」

『申し訳ありません、主はやて』

「え……」

『もうすでに私と防御プログラムは切り離されている以上。どうしようもありません』

「そ、そんな……。なんで……。なんでや……」

どうしてそこまで彼女が苦しまなければいけないのか。生まれてから認められず。否定され、傷つけられ、恐れられ……。絶望して闇へと変わった魔道書。

もう、無理なのか……。そう誰もが思った……。

しかし……。

「俺が……。俺とガンダムがやる」

「「え??」」

「まさか……」

「お前たちは結界の維持に集中している」

「え、それってどういう」

「トランザムを使用する」

「「?」」

「「!!」」

はやてとヴォルケンリッターたちはそれが一体なんなのか分からないという表情をし、以前の事件でそれを見ているのはたちはまさかという表情。

「おい、何だよそのトランクスっていうの」

「トランザムやて、ヴィータ」

「ああもう、そのフレンチトーストってなんだよ」

「ヴィ、ヴィータ??」

『お気を確かに、主はやて』

なかなか正しい言葉にならないヴィータに頭を痛めているはやてと気遣うリインフォース。

『もう時間がないよ!!』

「!!」了解した」

「おい、ちょっと待て!!」

「クロノくん!!」

「な、なのは??」

「今はハヤトさんを信じよう??」

「だ、だが、そんな博打を」

「やるって言ったらやってくれる人だと思う。それに、私も彼女を見捨てたくない」

「フェイトまで・・・」

『それで行きましょう』

「ああ、じゃなかった、艦長まで!??」

『リンディ提督・・・それは』

『グレアム提督。私も恨みが無いというわけじゃありません。でも、私たちは管理局員です。救える命がそこにあるなら、救わないでど

うするんですか??』

『む・・・』

『それに、あなたが一体何者と手を組んでいたのか、お分かりですか??』

『ああ、よく分かったよ・・・。何か大きな存在が世界に入るらしい・・・』

『そのはなしはまた後日。ハラOWN執務官、その場の指揮を続行、結界の維持に集中してください』

「分かりました」

そうして、通信が切れる。

「皆、聞いていた通り、結界の維持に努めてくれ。最悪結界の崩壊する危険がある」

「ば、馬鹿な」

「そんなことがあるんですか??」

シグナムとシャルが尋ねてくる。

「最悪だが、あのシステムは謎が多すぎる」

あの時の摩訶不思議な現象もあるし、更にエクシアのGNドライブにはロストログアのジュエルシードが9つも同化していたのだ。完全解放した状態の場合、魔力に加算したら一体どれくらいの数値を出すか、分かったものではない。

全員で結界の維持をすることが決定した。

そのこと上空に上がり、真っ直ぐに防御プログラムがいるだろう黒いうねりを見ていたハヤト。そこには異形の形のものがいた。

「!」

まっすぐ見つめる先には鎖にからみとられ、身動きの取れないリ
インフォースと瓜二つの女性が見えた。

——まだ希望は捨てていないようだな。

ハヤトはGNツインバスターライフルを構える。真っ直ぐその鎖
と共にいる彼女に銃口
を向ける。彼女の破壊ではなく鎖の破壊であった。

——やる・・・。

『タスケテ・・・』

——ああ、今助ける。

『ワタシハココニイル・・・』

——ああ、よく見える。

『マタヒテイサレルノ・・・??.?』

——そんなこと、させない。

『マタ、アイタイ・・・』

——俺も、会いたい。

『ダカラ・・・』

——だから。

『タスケテ!!』

——助けてみせる。

「TRAN—SAM!!」

トランザム・システム

『TRAN—SAM起動』

その瞬間にエクシアの機体色が赤く染まる。そしてGNドライブからとてつもない量のGN粒子が放たれた。

そして、その翠色のGN粒子は背中にある推進機能の役割も持つ三対六枚の純白の翼と合わさって、巨大な虹色の翼へと変化していく。

『う、宇宙空間で観測できる!? 地球を覆いつくすほどの大きさです』

『な、なんですって!?!』

エイミーからの言葉にリンディもさすがに驚きを隠せない。モニターに映るは鳴海市を中心に、空へと伸びていく翠色の光の翼が地球全体を包み込んでいたのだ。

そのあまりにも美しい光景に、結界を維持しているのはたちも思わず見とれていた。まるで聖夜の夜に光臨した、天使のように見えただ。

狙いを定める・・・。

そして・・・。

「破壊する・・・」

銃口から巨大な光が溢れんとする。

「俺達が、破壊する！！」

そして躊躇なくそのトリガーを引く。トランザム・システムによって何倍にも向上した機能によって威力はすでに魔力に加算するとEXクラスにまで到達するものであった。

それが真っ直ぐに異形のよどみに向かって放たれ、飲み込んでいく。

『アア、カンジル・・・。ヤクソクヲ・・・マモツテクレタ』

体の自由を奪っていた鎖^{バグ}が消え去っていくのを感じる。光に包まれる彼女の表情は自由の扉が開かれたように幸せそうだった。

世界が鳴海市を中心に光に包まれた瞬間だった。そしてこれが後々鳴海市の観光促進につながるとは誰も知らない・・・。

PHASE 143 聖夜の奇跡（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 144 クリスマスプレゼント

ハヤトは真っ白な光に包まれた世界にいた。

「ここは・・・」

摩訶不思議な空間。今までの経験では決して証明できないそんな世界にいた。ハヤトはここに来るまでのことを考えていた。

まずは、完成した最後の武装である『GNツインバスターライフル』を受け取り、装備した。その後、説明を受け、飛翔した。

魔導師が集まっているところにレーダーをたどっていくと今まさに防御プログラムを破壊しようとしている様子が見えた。

まずい。そう純粋に思ったハヤトは急いでそれを防御する。

もちろん、突然のことであつたし、何故そんなことをするのかと誰もがそう思ったであろう。実際にそうだった。

そして当然襲い掛かってきたスローネ・ツヴァイ、ドライを撃破。それを見て切れたスローネ・アインも撃破した。

そして、防御プログラムの悲劇が語られ、彼女を救うべく、作戦を実行するのはハヤトとエクシアになった。

そして発動させた切り札であり諸刃の剣である『TRAN-SAM^{システム}』。光の翼を発動させ、その鎖を破壊するべくGNツインバスターライフルのトリガーを引いたのだった。
トランザム・

そして光に包まれて、現在この不思議な世界を漂っている。まるで光を飲み込む雲の中に迷い込んだような、そんな感じである。

気がつくといつの間にか来ていたはずの服の着心地も、握っていたGNツインバスターライフルの感触も全てがなくなっていた。

そう、まるで生まれたばかりの状態に、全てをさらけ出したような感じであった。そう、全てが解放されている、そんな感じである。

まさか、ここは死後の世界であろうかと思った。しかし、そんなまがまがしさを感じさせるものではない白の世界。それに本能的に、そうではないといっているのが分かっていた。

なら一体この世界はなんなのだろうか。するとゆっくりと目の前に光が集まり人型の輪郭ができる。

「あ・・・ああ・・・」

そんな声しか出せない。

情けないと思えない。目の前に現れた人物を見て、どうしても、言葉が出なかったのだ。

そこに現れた人物・・・少女。見まごうはずがない・・・。

「か、カオル・・・」

「ハヤト・・・」

手を伸ばすと、カオルもそっとその伸ばした手を受け取ってくれ

た。温もりがある、柔らかさがある、あの時のカオルの感触が伝わってくる……。

「な、なんで……」

アイオリスでの異形の事件でハヤトを庇って死んだはずのカオルが現れたことにうれしさと共に驚きがあった。

しかし、そんなカオルは微笑んだまま、そっとその手を包み込んでくれる。

「これはね、たぶんGNドライブの起こしていることだと思うの……」

「GN……ドライブが??」

ふと思い出される光景があった。あれは数ヶ月前のときの庭園でのことだ。初めてのTRAN—SAMトランザム・システムを起動させたとき、光の翼が現れ、プレシア・テストロッサの使い魔であった、リニスト、愛娘であるアリシア・テストロッサが現れたということだ。二人ともすでに死者であったにもかかわらず、まるでそこにいるかのように、感触も、温もりもあったということだ。

「まさか……」

「私も見てた……、たぶん、その現象と同じだと思う」

ちよつと違うところもあるがと、付け加えるが。

抱きしめてくれると、そのカオルの変わらない温もりを感じ、思わずこみ上げるものがあった。

——俺は、カオルの好意に、甘えてばかりだった・・・。

後悔がハヤトを過去へと押しもどす。

ハヤトが人付き合いが苦手だということで積極的に仲立ち役になってくれた。そんな優しさに無意識のうちに甘えて、自分から同行しようという行動を移そうとしていなかった。男たちが多い軍の中において一輪の可憐な花のようにそこにいたカオル。

そんな彼女と自分なんかがつりあうだろうかなどと今思う。

どうしてあの時気を抜いてしまったのだろうか。あの時自分が死ぬはずだったはず。それを彼女が身代わりになって。なんてことをしてしまったのだろうか。彼女にだって素晴らしい未来や明日があったはずなのに。

どうして・・・。

どうして・・・。

暖かな温もりのある掌が、ハヤトの頬をそつとなでる。嘗て弱さと孤独の塊であったハヤトに光を与えてくれた掌が・・・。

「泣かないで・・・」

「だが・・・俺は・・・」

「私は後悔していない・・・。あなたを守れたのだから・・・」

「それでも・・・お前にだって・・・」

「それでも、ハヤトが今幸せなら・・・」

「カオル・・・俺は、何もお前に・・・」

「そんなことないよ・・・」

「え・・・??」

「ハヤトがドンドン良い方に変わってくれた、今も変わってくれてる。それがうれしい。私がハヤトのために何かができただって・・・そう思えるから」

「カオル・・・」

「大丈夫・・・守るから」

「カオル・・・」

「私の想いが・・・ハヤト、あなたを守るから」

ずっと掌が離れていき、温もりが薄くなる。カオルがゆっくりとハヤトのそばを離れていく。待ってくれと手を伸ばすも届かない。

「待ってくれ!! 俺は、俺は!!」

「ハヤト・・・大丈夫、大丈夫だから」

「俺は・・・お前のことが、好きだった!!」

ようやく言えた。あの時ようやく気づいたその想いに。そして自身の言葉で・・・それを聞いたカオルは微笑むと・・・。

「うれしい。ようやく聞けた・・・」

ずっと光の粒子になって消えた。それと同時に、ハヤトの視界も真っ白な光に包まれた。聖夜の夜・・・闇の書事件は完全に解決したのだった。

PHASE 144 クリスマスプレゼント（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 145 残るものと去るもの

闇の書事件が解決してから、それにかかわったものたちはアースに戻り、それぞれ休息に勤しんでいた。

危うく世界の崩壊に直面した事件であったために、今までにない激戦、すでに心身とも疲労困憊であった。

現在ここは医務室である。先刻の戦いにおいて、初めて魔法を使ったためか、リンカーコアへの極度の負担と慣れない激しい運動からの疲労ではやてが眠っている。

その仕切りの向こうにも、先刻の戦いで最後の最後で負担の大きいことをしたハヤトがあの後ぐったりとして倒れたところを慌てて向かったなのはたちに助けられ、アースラの医務室へと緊急搬送されたのだった。

気を失ったのははやて同様に、からだへの負担の大きいことだった。

そして、はやての周囲を守護騎士とリインフォース、そしてリインフォースと瞳の色が藍色である以外は瓜二つの防御プログラムが囲むように立っている。

「ふう・・・」

リインフォースが小さくため息をつく。それは夜天の書の破損が致命的な部分にまで至ってしまったのが原因であった。

そのことを先刻自身と防御プログラムで調べたところ、そのこと

の重大さが分かりリインフォースが静かに語るのだった。

その言葉に固唾を吞んで聞いていた守護騎士たちであるが、聞き終えると暗い表情にならざるを得なかった。せつかくすばらしい主とめぐり合え、長い年月の悲しい連鎖をようやく断ち切ることができたと思ったのに・・・。

「防御プログラムは、私がここにいるように暴走は止まった」

リインフォースと瓜二つの女性が言う。初めて見るのではないかと、守護騎士たちはそのまったく双子なのではないかと思う彼女とリインフォースを見比べている。

そしてもしハヤトが来なかったら彼女を殺していたかもしれないのだ。確かに、聞かされたときは自分たちの無力さを呪うしかできなかった。

「しかし、歪められてしまった基礎構造までは修復できなかったよ
うだ」

あの時の光である程度の修復はなされたが、如何せん、応急処置程度にしかならなかったというのが実情だった。

このままでは再びゆがみから別の防御プログラム・・・当然暴走体が生成され、行動し始めることは自明の理だった。

リインフォースと防御プログラムの表情は無表情のように見えるが、そういう防御プログラムのほうの言う言葉には悲しみが含まれているように聞こえた。

「やはり、そうなのか・・・」

それを聞いて、呟くように声を漏らすシグナムは、やはり険しい顔をしていた。

「どうしても・・・修復は、できない??」

シャルが悲しい表情をして前にいる二人を見て言う。

しかし、リインフォースは首を横に振るしかできない。

「残念ながら私無理だ・・・」

悔しそうにして言うリインフォース。それを聞いて望みがたれたように、絶望の色を見せる守護騎士たち。

「管制プログラムである私の中からも、すでに『夜天の書』の本来の姿は・・・消えてしまっているからな・・・」

リインフォースは今代そして、おそらく最後の夜天の王であるまだとし若き幼い少女・・・八神はやてを慈しむように見ながら応える。

「『夜天の書』自身の本来の姿が分からねば、戻しようもない・・・ということか」

人間形態の状態で腕組みをしながらザフィーラが静かに語る。

「ああ、そういうことになる・・・」

ため息をつくようにして、リインフォースは答える。そんな彼女の瞳の母やての姿が映っていた。少しでも長く、最後に愛した主の姿をその瞳に映して起きたかったのだ。

「それで、主はやては・・・その、大丈夫なのか??」

ベッドに横になって眠っているはやてを見つめながらシグナムが言う。はやてについては始めての魔法行使で疲れてしまったということのリインフォースが言うとしグナムはほっとする。

「当然、私からの麻痺の侵食も完全に止まっている。リンカーコアも正常に稼動している」

麻痺による不自由な足も時間が経てば自然と治癒するというリインフォースの言葉。もう少しではやても思いつきり外を走り回れるということらしい。

そうはなしている間、決してはやてから目を離さないでいるリインフォース。何かを考えているような様子であった。

それを聞いてヴォルケンリッターたちは安堵する。

「なら、良しとしましょう」

はやてが助かるということを聞いて、顔に明るさが戻るシャマル。

「ああ、もう・・・心残りはない」

同様にシグナムも表情が和らいでいるようだ。

「防御プログラムの意志があれば魔道書の完全破壊は簡単だ。それに、破壊しちゃえば、二度と暴走することもない……。変わりに、あたしたちが……。消滅するけどな」

1番心配していたヴィータが口を開いていった。やはりその言葉には悲しみがある……。

「すまない……。ヴィータ」

申しわけなさそうにして、シグナムがヴィータに声を掛ける。それに対してヴィータは一瞬驚いた表情をするが、もともとその可能性があった以上、彼女だけではなく皆がわかっていたこと。今までと同じように、それでも今後二度と悲しみは起きない……。それでも二度とすばらしい八神はやてという主と会うことはできないが……。

ヴィータの表情が曇る。

「いいや、違う」

その沈黙していた空気をリインフォースが破り、守護騎士たちが、彼女に視線を向ける。リインフォースの瞳には決意の色があった。

「お前たちは残る」

「「!!」」

どういふことだと言う表情に一瞬なるが、すぐにまさかという視線を向ける。

「逝くのは……。わた」

自分が犠牲になるといいかけたところで、隣にいた防御プログラムに遮られる。

「その必要はなおさらない」

「どうということだ??」

それ以外に方法があるというのかという視線を向けている。リインフォースに向き直り、防御プログラムは言う。

「彼のおかげで私は一時的とは言え正常に稼働できている。おそろく以ってあと一日だけだ」

「それはつまり・・・明日の夜には」

シャマルが恐る恐る聞いてくる。彼女だけでなく、守護騎士たちにとっては始めてお目にかかる姿であり、最も上位に位置する書の管理者である。

さらに、目の前にいる防御プログラムのおかげで自分たちは今まで狂うことなく正常に守護騎士としての役割を果たすことができていた。

「お前・・・まさか」

リインフォースが言うと、コクリと頷く。

「私がすべてを終わらせる」

変わった運命と変え切れなかった運命が交錯する・・・。
同時刻のアースラの食堂にて、クロノからなのはたちに同じ頃、防

御プログラムがリイン

フォースと守護騎士たちに伝えたことと同じことを話していた。

「魔導書の・・・破壊?? そんな・・・」

クロノの言葉を聞いてフェイトは驚いた顔をしている。

「そうだよ、クロノくん。どうして?? ハヤトさんのおかげで、防御プログラムさんは助かったんじゃないの?? もう、すべて終わったんじゃないの??」

なのはもそんなと言う啞然とした表情をして、言う。そんなのおかしい・・・。そこにいる誰もがおもっていたことだ。

「魔導書の・・・正確に言えば、防御プログラムからの進言だ。今頃守護騎士たちにも伝えられている頃だろう」

クロノも悔しさを我慢しながら、ゆっくりと言葉を紡ぐ。しかし、なのはたちは納得できない。何故書を破壊しないといけないのかと。

「うん、それはね・・・」

ゆっくりとユーノが話し始める。

「書の防御プログラムの暴走の原因だった欠陥や歪みを多少だけど修復できたらしいんだ」

「なら」

そんなことをしなくてもいいのではないかとフェイトが言う。しかし、ユーノはその言葉に対して、首を横に振る。

「でも、あまりに長い時間をかけてできていた歪みなどは、さすがにハヤトさんの力でも、一時的な応急処置くらいにしかならなかったんだ。何とか方法があればと思ったんだけど・・・」

見つからなかった。ユーノのその限のひどい表情を見れば分かる。ぎりぎりまで必死に探して、見つからなかったのだ。

「今は止まってる欠陥や歪みだけど。すぐにまた暴走しだすらしいんだ。そうするとまた書自体が再生しちゃうんだ・・・」

そうユーノが静かに語った。それを聞いた誰もが無言にならざるを得なかった。

夜天の書には無限の再生能力と転生機能があるために、今現在では眠っている状態のそれも、明日には再び児童ではそんな修復プログラムを実行するだろうということだった。

そのことから夜天の書の完全な破壊は困難だということだった。さらに、書が完全の再生されれば再び主である八神はやてに危害が及ぶ。そう・・・その書がある限り。

世界をひっくり返す力を得るために手を加えられ続けられた夜天の書。晴れ渡った夜天の空は、いつのときにか人間の欲深さによって真っ黒に染め上げられてしまったのだ。闇より深い、人間の無限の欲望。人は結局自身さえよければ、いくらでも他人を踏み台にして生きていく生き物なのだ。

いくら本人が否定しようとも・・・、今日もどこかで誰かが泣いている・・・。

主であるはやてにこれ以上の負担を残したくない、それでもようやくできた家族を失わせるわけにはいかないということから、防御プログラムがそれを買って出たのだった。

「そんな・・・」

「それだと・・・シグナム達は?？」

どうなってしまうのか……。なのはとフェイトは最悪な結末にからだをこわばらせる。しかしそんな彼女たちの背中に声がかかる。

「いや・・・」

突然聞こえてきたその声の主は、ヴォルケンリッターの将シグナムだった。その後ろからついてくる守護騎士たち。そしてリインフォース、いつの間にか起きていた。

「は、はやてちゃん!？」

「大丈夫なの?? はやて」

なのはとフェイトはあれだけリンカーコアを酷使させたはやてが起きていたのに驚く。ややまだ疲れた表情をしているが・・・。

「まだちょっと体がダルインやけど。なんとか平気や」

笑顔で言うはやてを見て、ほっとする二人。そのはやてが座っている車椅子を押しているのはリインフォースであり、その後ろに彼女と瓜二つの姿をしている防御プログラムがいた。

「私たちは主はやての元に残る・・・」

シグナムは静かに語るがその瞳は悲しげだ。

「シグナム・・・」

その表情を見た何度も剣を交えたフェイトも同様に悲しい顔をしている。

「あの時の光で、一時的な暴走、欠陥の広がりを抑えられ。さらに防御プログラムと共に、

我等守護騎士プログラムも本体からは解放されたようだ・・・」

静かにザフィーラが語る言葉を息を吞んで聞くなのはたち。

「それで・・・」

不意に声を漏らすなのは。

「防御プログラムさんは一体どうなるんですか・・・」

「そうだよ・・・。せっかく助かったのに・・・」

「なのはちゃん・・・フェイトちゃん・・・」

真実を知ってしまったはやて。彼女とはほとんど話したことはなくとも、夜天の書のものであれば家族同然だ。それにシグナムたち守護騎士やリインフォースにゆがみによる影響が行かないように必死に今まで一人で抱え込んでいたのだ。

ようやく夜天に光が戻ったというのに・・・。

最初にそれを見ざめて聞いたとき、絶対に駄目だといった。

しかし、彼女はなんと言っただろうか。

“私がいつお前を主と認めた”

それを聞いた瞬間誰も何もいえなかった。いつもであれば主を愚弄されたならば守護騎士たちが何か反論するだろうが、しかし、彼女に対しては何も言えなかった。いえるはずもなかった。

実質彼女が全てを決定する権利があったのだ。もともとこの書を人が扱えるはずがない。そして今代の王であるはやてであっても、結局暴走させてしまい、彼女も妒とも、ハヤトが来なかったならば消し飛ばしていた。そうなる则彼女の代わりに犠牲になるのはリインフォースであったことを伝えられる。

「そんな・・・」

そういうしかできなかった。変えられた運命。それは夜天の空に光が戻ったことだった。そのおかげでリインフォースや守護騎士たちが助かることができた。それに、消えるはずであった防御プログラムの彼女もまた、わずかであるがこの世界に出てくることができた。

“これが世界か・・・”

初めて書から出る防御プログラムにとって、彼女たちからしてはきにしないことも全てが新鮮だった。どれだけ長き時を悲しみの中で過ごしていたのか。はかり知ることなどできない。

「明日の夜0時を以って、私が書と共に消滅することによって、こ

れ以上の被害が出ないようにしようと思う」

「それでいいの!？」

「そうだよ、せっかく助かったのに!!」

そういう二人であるが、なら何か手はあるのかとにらまれると蛇ににらまれたかえるのように縮こまってしまう。はやてがいるのにどうして決定が覆っていないのか、ようやく二人は理解した。はやてがいくら主だからといって……。守護騎士たちが彼女を認めたとしても、防御プログラム自身は彼女を認めていないのだ。

それを知って悲しく思う。さらに例え認めたとしても、もはやどうにもならないところまで来ていたのだ。これ以上周りに被害をこうむらせるよりは、一層のことすべてを終わらせようということだった。

それを言われると、はやても頷くしかできなかった。しかし彼女は最後の権限だろうか……。

「なら、せめて。一日だけは幸せに過ごしてほしいんやけど……」

しかし、言いたいどうすればいいのだろうか。それがその場にとみな悩んだ。すると突然ガタンという音が聞こえた。慌ててそのほうに向くとそこには、患者服のまま壁を伝って歩いてくるハヤト・ブリッグスの姿があった。

「ちょっと、何してるんですか!？」

「無理をするな」

慌てて力の1番あるザフィーラが倒れこむハヤトのからだを支える。

「つう・・・」

体に残る痛み表情を珍しくゆがめる。慌ててハヤトのもとに集まるのはたち。あの光が収まると突然事切れたかのようにして地上に落ちていったので慌てて救出に向かい、すぐに医療室に搬送された。

さらに絶対安静、目を覚ますのは数日かかるといわれていたからだである。ここまで来るのも奇跡である。

「お前が言ったそのこと・・・」

「本当だ・・・」

「・・・そうか」

——変えきることとはできなかったのか・・・。

大きく運命を変えるには至らなかった。彼女をどうしても救いたかった。しかし、目の前にいる女性はあと24時間もすればこの世から消えてしまう。

——どうして・・・。俺には力がないのだろう・・・。

支えられている状態のハヤト。悔しそうに目をつぶり、顔を背ける。謝ることしかできない・・・。助けられなかったことを・・・。

「そんなことは・・・ない」

「な・・・」

いつの間にか目の前に来ていた防御プログラムがその柔らかな、確かにそこにいることを示している、暖かな温もりのある手で、ハ

ヤトの傷ついたその大きな手を包み込んでいた。

「そんなことはない。あなたのおかげで、私はこうして外の世界を見ることができている」

「だが・・・」

つぶられた目から流れ出る涙。

「「!!」」

今まで見たこともない、あのクールで表情の変化が少ないハヤトの涙になるのはたちは驚きを隠せない。今までそんなことがなかった分、衝撃は大きかった。

「だから言わせてくれ・・・」

「・・・」

目を開けて、彼女の顔を見る。ああ、そこにいる。そこにいるは今までずっと孤独に震えていたただ一人の女性。

「ありがとう」

それだけで救われるような気がした。

それからしばし沈黙があった。その沈黙を破ったのははやてであった。

「あの・・・」

みな視線がはやてに集まる。

「その子と一緒に、明日一緒にいてくれへんかな・・・って思った
んやけど」

PHASE 145 残るものと去るもの（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 146 夜の女神（ニクス）

空気がぴりぴりとしているためにさすがにはやても声量が小さくなる。

「その子、きっとハヤトさんのこと、好きなんやと思うんです」

「「!」」

「?」

「／／／」

突然の爆弾発言に目を見開くものたち、小さく困惑しているハヤト、的をいていたのか顔を朱に染める防御プログラム。

「初めは、何でリインフォースを助けるためにもう少しだったのに邪魔したんやって思ったん・・・」

それは当然であろう。ハヤトを知るものでも、知らないものでも怒りや反発新をもつのは当然であった。

「でも、あれは防御プログラムのことを助けるためやったんやて知ったとき、なんてことしてもうたんやって・・・」

裏切り者ではなく、一転して、命の恩人になったハヤト。そんな彼に対して彼女たちは怒りの矛先、敵意を向けてしまった。事情が事情で、その場においてはリインフォースとはやとしか、防御プログラム之声を聞くことができなかったので、仕方が無いといえばそうなのだが・・・。

「ほんまに、ごめんなさい」

はやてが頭を下げて謝る。するとそれを見たシグナムをはじめとするヴォルケンリッターも、なのはたちも謝る。

ハヤトにとっては別にどうでもいいのだが、彼女たちからすれば耐えられないのだろう。気にするなと言言っておいた。

「でも、ハヤトさん。その体で・・・」

GNツインバスターライフルのほか、TRAN-SAMを使ってしまったために体への負担が今までにないくらい大きさがあった。本当は安静にしていなければいけないのだが。

「シャマル、何とかならへんかな??」

「任せてください。伊達に風の癒し手と呼ばれてないですよ、はやてちゃん」

「そうだな、シャマルの力で、なんとかなるかも知れない」

うんうんと同感するようにヴィータとザフィーラも頷いている。どういうわけか彼らの知らないところで勝手に話が進んでいる。

「で、俺は一体・・・」

「あ、あの・・・」

「ん??」

何が起きているかさっぱり理解できないと、表情は変わらないが、明らかに困惑しているハヤト。そんな彼に突然声がかかる。誰だろうと思ひ、顔を向けると、顔をやや赤く染めた防御プログラムだった。

「初めての外の世界・・・、最後は、救ってくれたあなたと一緒に見ていきたい・・・」

懇願するように言ってくる。

「駄目だろうか・・・??」

そんな瞳をされたらどんな状況でも「NO」は言えないだろう。周りの視線も期待と裏切るなどというのが含まれたものが向けられている。やや目つきが鋭く、クールで感情を表に出さないはやとであるために、周りからは冷たいものだと思われがちであるが、そこまです薄情な性格はしていない。

「了解した」

「駄目だよ。ハヤトさん」

「ん」

「そうだよ、そんな返事だと、任務みたいで従ってるみたい」

「そうなのか??」

「「そうだよ（なの）」」

なのはとフェイトにもう少し乙女心を知ったほうがいいと暗に言われているハヤト。もう一度防御プログラムのほうに向かいなおすと。

「分かった。そうすれば、待ち合わせは・・・」

「必要さなそうだな」

「ああ」

お互いに今夜はアースからは抜けられまい。ハヤトは一日は絶対安静、防御プログラムもゆっくりと空を眺めたいだろうし、休み

たいだろう。

「ところで・・・」

そのこえにいろいろと話が弾んでいたのが静かになり、視線をハヤトと防御プログラムに向ける。

「防御プログラムと街中で言うのはどうかと思うのだが」

「「あ・・・」」

「・・・」

一番大切なことを忘れていたという表情のなのはたち。リインフォースは闇の書の中ではやてからようやく名を貰うことができた。しかし、防御プログラムの場合は違う。今日ようやく外の世界に出られた彼女には名がなかった。

「八神はやてが付けてや・・・」

付けてやれという途中にはやての言葉に遮られる。

「ハヤトさんが付けてあげてくれへんかな?？」

何故にという表情ではやてを見る。彼女は夜天の書の主である。彼女が名前を付けてあげなくてどうするのか。

「この子を助けてくれたのは、ハヤトさんや。それに、好きな人に着けてもらえるって言うのもなかなかええもんやから」

「八神はやて・・・お前」

ハヤトの隣にいた防御プログラムは顔を真っ赤にさせながら、は

やてのことをにらみつけていた。そんな隣ではまじめに悩んでいるのか目を閉じているハヤトの姿。それに気づいた彼女も期待と不安の色が混じった表情で見ている。

やはり今までにないことなので緊張しているのだろう。まるで子供のような彼女を見て、ほほえましく見ている。

そして、数十分かけてようやく名前が決まったようだ。その間、かなり緊張の雰囲気の中だったために、椅子に座って飲み物を手に持っても誰も口を付けられなかった。腕組みをしながら目をつぶって考えていたハヤトが目をやつくりと開け、目の前に座っている防御プログラムを見つめる。彼女の小さく体が緊張からか震える。

「ふう・・・」

ここまで頭を悩ませたことは今までであったか分からないというように、いろんな意味で疲労したハヤト。もしかしたら、子どもに名前をつける親というのはここまで悩むものなのだろうか。そんな風に考えながら、今は亡き両親の背中を思い出しながら、思うのだった・・・。

——素敵な名前をありがとう・・・。

今までの自分だったら言えないことだろう。色々なことがあって、それがハヤトを色々と変えているようだ。

「お前の名前は・・・」

真っ直ぐに彼女を見つめて言う。ゴクリと誰かが生唾を飲み込むのが聞こえた。

「ニクス」

「ニクス・・・か」

ハヤトの行った自身の最初で最後の名前をつぶやくように復唱する。

「この世界で言う・・・『ニクス』とは、夜の女神であり、最初の神の一人らしい」

その名前の由来を言う。

「夜天と夜・・・、確かに繋がりがあるな」

うんうんと首肯して言うシグナム。

「私たちを見守ってくれていた・・・、まさに女神ですね」

シャマルが言う。

「いい名前がもらえてよかったな」

リインフォースが自身の半身である防御プログラム・・・否今はニクスか・・・。

「ああ・・・」

目をつぶり、その目じりには涙が、うれし涙があった。それを聞いていたなのはたちもほっとして、よかったよかったと笑顔を見せている。

「なら、ハヤト。明日は・・・」

よろしく頼む。そういうニユクスに対して、もしかして初めてか
もしれない。

「ああ、こちらこそ・・・」

小さな微笑を浮かべたハヤト・ブリッグスがいた。

PHASE 146 夜の女神（ニュクス）（後書き）

感想お待ちしております。

PHASE 147 夜天は空へと帰る（前書き）

あとがきで今後の執筆について報告があります。

PHASE 147 夜天は空へと帰る

今日は12月25日である。

つまりはクリスマスということだ。昨日の夜、つまりイヴとは打って変わって平和な雰囲気が漂っていた。

鳴海市の商店街もまた、クリスマスだということでカップルや家族連れで店が繁盛していた。

そんな商店街を歩いている二人の男女の姿があった。一人は茶髪にアメジストのような紫色の瞳をした美青年。やや髪型がファッションなのかどうか寝癖頭であるが。その青年の横には銀色の腰まで届く髪をして、サファイアのような青色の瞳をした美女が歩いていた。

彼の名前は、ハヤト・ブリッグス。

彼女の名前は、ニュクス。

今日は最初で最後の外の世界を楽しもうということで、ニュクスを案内することになったハヤト。本当はこの手のことは女性のほうが得意だろうが、はやてが彼女の胸のうちを察したように、ハヤトにこの役をお願いしたのだった。

そんな二人は寒くないようにグレーと黒のコートを着て、1つの大きな赤いマフラーを巻いている。その手はしっかりと握られており、感情を表に出さないハヤトとは別に、ニュクスのほうは恥ずかしさからか、顔を赤らめていた。

「今日は・・・」

そう何かを呟こうとしたハヤトの唇に、人差し指を当ててニュクスはそれ以上は駄目っと言って、腕にしがみつく。

悲しいことは一切なし。たった二人で聖夜まで一緒にいたい。それが何よりもニュクスが望んでいることだった。

「ああ」

それを察したように、短く返事をするハヤト。

「ふふ、早く行くぞ」

小さく微笑むと、進むことを催促する。走っては地面が凍っているからと、この日のために急いで繕った服などが転んで汚れてしまっただけでもない。

二人はゆっくりと歩き出した。

初めての外の世界はニュクスにとって、何もかもが新鮮だった。それも店に飾られているクリスマス用の装飾の色鮮やかな電球やら、お菓子店での売りこの人たちが着ているサンタクロースの服装。中央に置かれている大きなクリスマスツリーを見たときには興奮してまるで子どものようにはいしゃいでいた。

お年頃な男女が行くといったらアクセサリーショップだとか頭になかったハヤト。色鮮やかな宝石たちを前にして綺麗だと一つ一つ見つめながらニュクスは言う。

何か思い出になる、物的物もほしい。そう思った、ハヤトはふと近くにいた女性店員に尋ねる。

「ちょっとすまない」

「はい、どうしましたか??」

ニクスがそばにいることを確認しつつ、店員に言う。

「彼女にプレゼントをしたいのだが・・・」

それを聞いてぱあっと笑顔になるその女性店員。その後色々話をしをして、ニクスに少し待っていてくれるように言って、件のものを購入することにした。なかなかの値段であるが、月村重工業で働いているハヤト。使い道がなかったので懐が厚かった。

ニクスは隼人から少し待っていてくれといわれて店の外で待つことにした。マフラーを借りているので寒くはないが、無性に寂しさを感じていた。

——ようやく手に入った安心感をこうも身近にいないと寂しさに押しつぶされそうだ・・・。

隣に誰かがいてくれるという安心感を知ってしまった。

——なんて情けない……。夜天の書の中にいたときはこんなのはどうってことなかったはずなのにな……。

自分が弱くなってしまったのではないかと思うくらいの変わりようだった。もしかすると守護騎士たちや管制者・・・リインフォー

スも同じだったのではないかと。あの時自分がいなかったら守護騎士の代わりに、リインフォースが犠牲になっていた。それが彼女と自分が換わっただけだと思うが、それでも、強烈な寂しさと恐怖に襲われた。

——イヤダイヤダイヤダイヤダイヤダイヤダイヤダイヤダイヤダイ！

ここへ来て、刻々と近づいてきている死の時間が彼女に恐怖を与える。体が震える。今までにない恐怖を感じている。

——これが本当の恐怖……。

ただ一人に書の中で悲しみと恨みを背負っていたニユクス。そんな彼女は今まで感じたことがなかった死への恐怖。誰かをしに追いやったことがあったが、それでも自分が死に至るとは思わなかった今まで。

そうとなつて今はどうだろうか。まさに雪が降ってくる時間、電球が点滅する時間、人が歩く時間、その時間が彼女の生の時間を削っていく。

[illegible]

隣にいないハヤトを求めて周りを見渡す。

——サムイサムイサムイサムイサムイサムイサムイサムイサムイサムイ！

からだではなく心が急激に冷えて、震えている。いくらコートを着ていようと、いくらマフラーや手袋をしていようと、その寒さを暖かさでなくしてくれるのは・・・ただ安心感だけだった。

ザッザッという雪を踏みしめる足音。来てくれたのだと思い、振り返る。しかし、そこにいたものを見て、彼女の笑顔は徐々にこわばっていく。

「え・・・??」

そこにいたのは3人の男。ニヤニヤと不気味な笑みを浮かべながらニユクスのことを取り囲む。

「へっへっへ・・・」

ねとりとした笑い声をもらしながらしたから覗き込むようにしてニユクスを見上げる。ちゃらちゃらと身に付けているイヤリングやら、ピアスやら、金属類がうるさく感じる。

周りの人々もかわりたくない 것처럼と見るがすぐに足早に去って行く。すると突然ニユクスの肩に触れる男。

「ねえちゃん、こんなところで一人かい??」

「もしかして、振られちゃった??」

「あはは、だったら俺達が慰めてやるよ」

いつの間にか手を腰に回して、連れて行く気満々である。他の男たちもまた後ろと横に立って逃げられないようにしている。

「待っている人がいる・・・。離してくれ」

「ああ?? そんな奴、待つより俺達と一緒にどこか行かない??」
「そうそう、こんな寒いところに一人で待たせてる奴なんてさ、どうだっていいじゃない??」

「俺達だったらそんなことしないぜ?? あつためてやろうか?? 体温で」

男たちが笑い出す。不愉快極まりない。明らかに表面だけでニュクスのことを見ている。確かに彼女は顔立ちも美人であり、スタイルもいい。右側がさびしい男たちにとってはかっこのターゲットかもしれない。

ニュクスもまたな逃げにこの男たちが下心丸出しで迫ってきているのは分かっていたので抵抗する。しかし、大の男三人につかまれ、女性の力と比べれば力のさが大きすぎる。さらに魔法を使えばなんとでもなるが、ここは魔法文化が低く、管理外世界であるために、むやみに使うこともできないということであった。

「やめろ」

そう言って抵抗したときにひじが男にぶつかる。

「っ」

男はぶつかった頬に手を当てて、ニュクスをにらみつける。

「いってゝな……。ちょっと可愛いからっていい気になるなよ?? ああ??」

やはりこうなる。自分たちの思い道理にするために、下手に仕立てから出てきて、こうやって拒否されると脅迫まがいなことをして

くる。二人の他の男たちも先ほどのニヤニヤという笑顔から切れた表情に変わって肩を握る力を込める。ぎりぎり細い肩が痛む・・・。

そうして無理やり連れて行こうと、腕を引っ張る。

「きゃあ!!」

小さく悲鳴を上げるニュクス。さっさと歩けと怒鳴る男はニュクスを引っ張りながら歩こうと足を踏み出すと、突然目の前の何かにぶつかった。

「いった・・・。んだあ??」

男が鼻を押さえながら目の前にある何かを見つめる。そこにあったのは・・・意泣いたのはグレーのコートを着込んだ青年だった。

「ハヤト・・・」

ニュクスがよかったと安堵の表情を見せる。

「俺の連れに何か用か??」

淡々と言っているが、男たちは思わずびくっとしてしまう。鋭い目をさらに細めるために、にらまれているようにしか見えないのだ。

「何だお前??」

震える声で何とか虚勢をはる。

「この女のなんだって言うんだよ」

ハヤトとニュクスは今日一日だけの関係である。そういわれても友達・・・というよりは助けた透けられた関係、知り合いという関係であろうか。

男たちにとってはそれが満足の行く答えであろうとなかろうと、力づくでも連れて行けばどうでもいいのである。しかし、彼女にとってはどうか。彼女とて、初めての外の世界とは言え、一人の女性である。異性からどう見られているか、たった数回しか顔を合わせたことのないお互いでも、気になるものは気になるのだ。

「彼女は・・・」

「ああ・・・??」

男がしたから覗き込むように因縁をつけてくる。ふと手に握られた小さな箱を見つめる。そしてその答えが見つかったようで・・・。

「俺の女だ」

「!!」

体に電気が走ったような気がした。脳から足の先まで一直線に雷に打たれたような感じ。しかしそれは痛みよりも心地よさがあった。胸がどきどきする。ただその言葉だけで、胸がここまでときめくものなのかと。ニュクスは初めてのこの体験に新鮮さをかみ締める。

男たちはならばと略奪を試みるべくハヤトに向かって殴りかかる。それをすいすいとからだを傾けることで拳を交わすと、一人の男の背中を蹴り飛ばし、壮大に雪の降り積もる道路にダイブさせる。

「へブ!!」

ニュクスを掴んでいた男二人が揃って挟み撃ちをするように殴りかかるも、それをしゃがんでかわすと男たちの拳は目標を失ったように虚空を気って、お互いの顔を仲良きフレンドリーファイアする。顔を抑えている間に男たちの首からかかっていたネックレスのチェーンを掴むと思いきり遠投するようにして最初に吹き飛ばした男めがけて投げる。なげたときにチェーンが分ちっと切れた音がしたが、どうでもいいとおもった。残っていた男も同じようにして、ネックレスが無かったので、着ていたコードの襟首を掴むと投げる。ちょうど起き上がったいた男に向かって同じく二人が激突し、痛い激突音がして、三人は仲良く気を失う。

「すまない」

「ホントだな」

そのままにしておけば凍死するということで蹴っ飛ばして起こすと男たちは恐怖に引きつって走って逃げていった。きっちりとセツトしていた髪も、身につけていた装飾品もひどいようになっていた。

遅くなったことで危ない目にあわせてしまったことに謝罪する。
すねたようにして、そのことを肯定するニュクス。

しかし、いつまでもこうしていると時間が無くなる。周りを見渡すと向こうに映画館があるということでは何かやっているかと見てみると、月村邸でテレビを見ている忍が絶賛していた恋愛ものの映画が在ったので、これを見るかと聞いてみて、頷いたことを肯定と受け取り中へと入っていく。

人気があるのか、かなりの人が、それもカップルで来ている男女

が多かった。はたから見ればハヤトとニュクスもカップルのように見えるかもしれない。入場する前のお互いに飲み物とポップコーンはもはや当たり前である。

そして1番見やすい席を確保することができた。ゆっくりと時間が過ぎて行き。あたりが暗くなると映画が始まった。

映し出される映画。絵が動いていると始めてのニュクスは最初そう思った。そして時間が刻まれるに従って物語りもクライマックスに進む。

それはまるで自分たちを表しているようである。男は消え行く女を抱きしめ、泣き叫んでいる。それでも女性は幸せそうである。ただ1つの贈り物を胸に抱きしめて消えて行き、空へと帰っていった。

エンドロールが終わり、映画館を後にする。外はすでに真っ暗になっていた。雪は少しばかりではあるが、クリスマスの夜を彩っている。

街中にある電球たちの色鮮やかな光が雪とあいまって幻想的な世界を作り出している。時間はすでに0時に近くなりつつあった。ゆっくりと二人は向かうべき場所へと歩いていく。すでに体がバグによって蝕まれ、思うように動いてくれない。

足がふらふらする。顔を上げているのだけでも苦痛になってきた。体の奥底から再びバグが生まれようとしている。長き年月押さえ込んでいたものの他に、守護騎士や管制人格者をも、飲み込もうとしていたものだ。

たった一人でそれを抱えているニュクス。一人で立っていられない

い状態である。彼女はすでに立っているのではなくぐったりと最後の力でハヤトにお姫様抱っこで抱かれている。

「もう歩けないな」

「ああ」

ゆっくりと降り積もった雪を踏みしめる。たどり着いたのは目前に大海原が広がる鳴海海浜公園である。

もっと力があつたら彼女を助けられたらと思うハヤト。力がないばかりに、あの時も大切な存在を失ってしまった。そして今の腕に抱いている彼女という大切な存在も、存在が消えていくように軽くなっていくのだ。

鳴海臨海公園に来ていたのはハヤトとニクスだけではなかった。高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやて、ヴォルケンリッターたちであった。

夜遅いということは今の彼女たちには関係なかった。長い年月を共にしていた仲間が消えようとしているのだ。無性に自分たちの無力さ、それを知らなかった過去の自分たち、半身である彼女を犠牲にして生き残る自身を恨めしく思う、主として、何もして上げられないことを悔やむ。

雪がやんでいた。ハヤトはニクスを抱いて、高台に上り、一緒に海を、海の上にある、夜天を見上げる。

夜天を彩る星星が輝いている。クリスマスの夜をまた独特の光でにぎやかにさせている。それをニクスと共に眺める。

「綺麗だな・・・」

「ああ」

ここでお前も綺麗だよなどといえればいいのだろうが、如何せん、彼にはそこまでの知識は有されていなかった。それでも抱きしめられているところから温もりを感じるニクスはそれでいいと思った。

「今の夜天の書も、こうやって輝いてるだろうか・・・??」

「それは八神はやてたちの今後に掛かっているだろうな」

夜天がこの聖夜の星星で輝いている空のようになるか。はたまた力におぼれ、混沌の晴れなき闇の空へと戻るか・・・。それは彼女たちが今後どんな信念において力を扱っていくかにかかっているだろうと思った。

安心するこの温もり。今までどんなに求めても決して手に入らなかったそれ・・・。

書の中から見ると守護騎士たちに嫉妬した。自分がずっと苦しんでいたにもかかわらず、それを知ることもなく、知ろうともせず、まあ、知らせようとも思わないのだが。それでも自分たちの幸せの裏で、悲しみや苦しみに悩むものがあることを知らないで、ただその平和に使っている守護騎士たちに嫉妬し、憎しみを持った。

―――どうして、お前たちだけ・・・。

おいしい、おやつを貰って満面の笑顔のヴィータに嫉妬した。

騎士道、武士道につうづるということで時代劇にを趣味に持ち、道場では人に教える楽しさを知ったシグナムに嫉妬した。

下手は下手なりに楽しく料理をして、みんなを困らせ、それでも雰囲気^{きんぎ}を和ませているシャルに嫉妬した。

主に抱き枕にされたり、今までとはまったく違った生活を謳歌しているザフィーラに嫉妬した。

——私だって・・・私だって・・・。

歪みに身を狂わされ、歪にシステムが狂わされ、力なき人間に時を重ねるたびに手に渡ってはまた世界を破壊し、それによっていつの間にか人々の憎しみや悲しみ、力のみを欲する人間^{あるじ}の欲望などの負の感情に困って夜天は汚れ、闇と化す。

そんな時、魔道書の主でしか入り込めない空間に現れた男性と出会う。どうして彼がここにやってこられたのかはわからない。しかし、どういうわけか素直に自身のこと、この書の本当の真実を教えることができた。教えたとしても、結局は以前のように否定され、破壊されるだけだとあきらめていた。

そして破壊され、新たな主の元へと飛ばされる。自分は守護騎士や管制人格者に影響が出ないように歪みを一身に浴び続けるだけだと思っていた。

それが運命なのだと思っていた。しかし、心の中で消えかかっていた心が言っていた、別の運命^{こたえ}が欲しいと・・・。

そんな彼女に対して、現れた青年。後で聞いた話、ハヤト・ブリッグスはまだ14歳だということだった。

明らかに170センチ後半があったためにつきりもつと年上だと思っていた特にクロノは同じ年だと聞いて、身長の違いがあまりにも理不尽だと涙を流しては知っていたのは別のはなしだ。

ハヤト・ブリックスはいってくれた……。助けると。

“俺が・・・俺とガンダムが！！”

幻想だとして思えなかったのだろうか。その真っ直ぐな目に思わず信じたいと思ってしまった。

——私を名前で呼んで・・・。

防御プログラムであった彼女には名前がなかった。夜天の書に飲み込まれ、眠りについていた八神はやてが目覚まし、リインフォースと管制人格者に名を与えた。しかし彼女は防御プログラムであり、夜天の書の一部である彼女の存在にすら気づかなかった。はやてとリインフォースが書の中から出て行く様子が見えた。追いかけてきたかった。自分も一緒に空が広がる所の外へと。しかしからだに巻きつく鎖で身動きがとれず、リインフォースもただ同情のような悲しそうな表情を向けるだけで書の中から出て行った。

——裏切られた??？嘘だ!!！嘘だ!!！嘘だ!!！

『作戦スタート!!！』

クロノの声で作戦が開始される。

『チェーンスバインド』

『ストラグルバインド』

『縛れ!! 鋼のくびき』

3人がバインドを発動させ周りの生き物達を倒していく。

『ちゃんとついてこいよ、高町なのは』

『ヴィータちゃんもね』

トップとしてヴィータとなのはだ。

『鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーフアイゼン』

ハンマー方のデバイスを構え、カードリッジをロードした。

『鋼鉄粉碎・・・』

アイゼンが巨大なハンマーになった。

『ギガント・シュラアアアアアク!!』

そして大きく振りかぶると勢いよくバリアにぶつけて一層目を破壊。
壊。

『高町なのはとレイジングハート・エクセリオン、いきます!!』

『ロードカートリッジ』

なのはが砲撃の発射体勢になる。しかしそんなのはの構えを見て危険と判断した闇の書の闇は砲撃を撃たせないように生き物で邪魔しようとする。しかしそれに対してレイジングハートがうまく対応する。

『バレルショット』

それを衝撃波により粉碎して時間を稼ぐ。

『エクセリオン・・・バスター!!』

なのはの放つ、2つの大威力砲撃により二層目も破壊される。

『次、シグナム、フェイトちゃん』

『剣の騎士、シグナムの魂、炎の魔剣レヴァンティン、刃の連結刃につづくもう一つの姿』

シグナムは鞘をレヴァンティンの下につけると鞘がレヴァンティンと合体して弓の様な形になった。シグナムや矢を出して構えた。魔力によって形成された矢を構える。

『駆けよ隼!!』

『シュトゥウムファルケン』

その矢をバリアに向け放たれる。バリアにぶつかりと爆発が起きて2層目も破壊することに成功する。

『フェイト・テストロッサとバルディッシュ・ザンバー、いきます』

フェイトは剣を振るい衝撃波で生き物を斬っていく。

『撃ちぬけ雷神』

『ジェットザンバー』

巨大な魔力でバリアを切り裂く。守るものがなくなったために闇

の書の闇は反撃とばかりに生き物を使用して砲撃をしようとする。

『盾の守護獣、ザフィーラ、やらせません、鋼のくびき』

ザフィーラが止めに入るが数が多く、わずかに逃してしまう。

『たく、仕方ねえな。行けよ、フアング!!』

しかし、それらもまた突然表れたツヴァイから放たれた赤いファングによって次々と撃墜される。

『はやてちゃん』

『彼方より来たれやどりぎの枝、銀月の槍となりて撃ち貫け、石化の槍ミストルティン』

上空から白い光が闇の書の闇に刺さり石化していく。しかし石化しているのに再生していく。

『並の攻撃じゃ再生しちゃう』

石化しているところから徐々に再生し、もはや原形をとどめていない化け物と化している。それを見つめているリインフォースはただただ見つめるしかできない。

——助けて!! 助けて!! 助けて!!

しかし、誰もその声をリインフォース以外聞こえない。聞こえたとしても、もはやどうすることもできない。バグを取り除く何かがあればいいとしても、そんなもの今から要しても時間がない。もはや世界が崩壊し始めている。

『でも確実に効いている、計算変更はなしだ、いくぞデュランダル
!!』

クロノはグレアムから託されたデュランダルを構える。

『悠久なる凍土、凍てつく棺のうちにて永遠の眠りを与えよ、凍て
つけ!!』

『エターナル・コフィン』

氷結魔法により闇の書の闇の再生を止める。その威力は闇の書の
闇の周りの海も凍った。しかし氷の中にいるそれが今にも打ち破ら
んともがいている。

『いくよ、フェイトちゃん、はやてちゃん』

『『うん』』

『集え星・・・全力全開、スターライトブレイカー!!』

『雷光一閃プラズマザンバー!!』

桜色と金色の砲撃が放たれた。

——・・・ごめんな。

はやては涙を流しそう呟く。ずっと否定されていた闇の書の闇を
今開放してあげようと思う。

——・・・お休みな。

そうして杖を構える。

『響け終焉の笛、ラグナロクブレイカー!!』

3つの光が強く輝き光の柱が闇の書のの闇に降り注ぐ。瞬間にも
のすごい大爆発が起きた。だが、まだしぶとく生き残ろうとする闇。

しかし、彼女たちに焦りはなかった。保険をかけていたからだ。

『GNランチャー、目標セット』

『GN粒子供給率100パーセント』

『任務遂行により、破壊する。GNランチャー、発射!!』

赤黒い砲撃が放たれた。まっすぐそれは闇に向かって走る。

——ああ、また否定される。

しかし、目を開けると目の前には天使の姿をした彼がいた。約束
を守るために、今ここに駆けつけた。そして目の前にいたM^{トリニティ}Sを次
々と沈める。

ただその圧巻を見ているしかできなかった。どうしたわけかその
光を浴びていると体が軽くなっていくのを感じていた。

そして自身に向けられたGNツインバスターライフル。しかしそ
の光からは恐怖は感じられなかった。

『破壊する……。その鎖を!!』

そして放たれた巨大な粒子砲。それは防御プログラムの彼女に傷を
つけることなく鎖とバグだけを破壊していく。感じた、彼の心から

小さく、それでも必死に芽を出そうとしている優しさを・・・。

———ありがとう。

そして最後の一日と一緒に過ごせると聞いたときは胸がときめくようだった。そして何よりも望んでいた最初で最後の名前。

『お前の名前は・・・ニクスだ』
『ニクス』

夜の女神の名前から取ったという。まさに自分にぴったりだと思うと、うれしさが増した。

そして今ここに二人だけの世界がある。

そっとハヤトの頬に弱弱しくなってしまった手で触れる。外にいたはずなのに暖かさが残っている。これが温もりなのかと、何度も触れていたと思う。

———ああ・・・ああ・・・。幸せだ・・・。

その頬に触れた手を握り締めてくれる手の温もりを感じている。そして不意にハヤトがコートのポケットから何かを取り出す。何か小さな箱である。

———これは確か・・・。

アクセサリーショップに入ったとき、少し待っていてくれといわれた時のことを思い出す。おそらくあの時買ったものなのだろうと重い、それと同時にうれしく思う。

「まだ、渡していなかったな」

慣れない事をしているために珍しく戸惑っている様子にニュクスは思わず噴出す。なんだとむすつとした様子でいるが照れ隠しであると分かっていた。

あける力も残っていないために、ゆつくりと目の前でハヤトが箱を開けてみせる。そこには青い光、ニュクスの瞳の色と同じ12月の誕生石で作られた指輪があった。

思わず頬を伝う暖かなもの・・・涙。

——あれ・・・?? どうして・・・。

そう思うニュクスであるがその涙が何を意味しているのかはしっかりと理解していた。これは悲しみからではなく、心からの喜びによって生み出された涙だということを。

「女性に何かを送るってことは・・・。その・・・なんだ??」
「ふふ」

戸惑っている様子がいつも大人びているハヤトを強烈に子どもっぽく見せる。まだまだ人生10数年である。何百年と生きている彼女から見ればまだまだ子どもであった。

それを掴んでゆつくりとニュクスの指に嵌めてやる。どうせだったら左手に結婚式のように付けて欲しかったと剥れながらもいうと、すまないといってやり直してくれた。

そんな見せてくれる優しさが今日限りで終わってしまうだなんて残念でならなかった。

——もっと一緒にいたかった。力になりたかった……。

魔導師でないハヤトであるが、別の意味で戦う存在であるために、何か役に立てることがあったのではないかと思った。

しかし、それももう叶うことはないだろう。しかし、今後彼に何かがあっても、守りたいと思った。

「ありがとう」

「いや……。別に」

お礼を言うニュクスから恥ずかしそうに顔をそらす。内部から徐々に自身の存在が消えていくのを感じていたニュクス。もう時間はない。それは目の前にいるハヤトも分かっていたことだ。時計を見ると二本の針が12を指そうとしていた。

ニュクスは心に溜め込んでいたものを吐き出さんと意を決してけなしの力を使い、早との顔に近づく。驚いた表情のハヤト。

しかし、彼女の考えを察したのか目をつぶりそれを受け入れる。

「愛しています……。この身がなくなろうとも……。あなたの目に映らなくとも……。」

「分かっている」

「安心してください……。私のこの想いが、あなたを守ります」
「！……ありがとう」

その言葉はあの夜以前の最愛のものから受け取ったものと同じ言葉であった。

そしてお互いの唇を触れさせる。本当に大切なものを扱うように優しく・・・、本当に優しく・・・。

するとニクスとハヤトはゆっくりとお互いの唇を離す。何秒立っただろうか、何分立っただろうか。時間は分からなかった。しかしはっきりと分かるのは自身の体の崩壊が最終局面に入っていることと、抱きしめている女性がひどく軽くなってきていることだった。そして不意にニクスはその顔をハヤトの硬い胸板にうずめる。

突然のことだったので驚いてしまったが、黙って温もりと香りに身を任せた。

「行くな・・・」

ぎゅっと抱きしめられる。消え行くにもかかわらず、恐怖は不思議となかった。それ以上に喜びと安心感があった。最後の最後で大切な男性に出会えたのだから。

「大丈夫・・・守りますから」

まるでなく子供をあやすように優しくいう。目の前では目をつぶり涙を流しているハヤトがいた。

「行くなよお・・・」

「大丈夫・・・」

そしてゆっくりと光の粒子につつまれていくニクス。目を開けて

啞然としているハヤト。駄目だ・・・駄目だと首を横に振りながら言っている。

「私の想いが・・・あなたを守ります。だから・・・」

大丈夫。

そう笑顔で言ったニユクスのからだは粒子へと変わっていき、渡した指輪も共に空へと消えていった。

「あああああ!!」

消えてしまったニユクスがいたことを証明するわずかな温もりを抱きしめてハヤトは空に向かって叫ぶのだった。この夜長い年月を経て、闇の書の悲しい物語は終わった。ただ一人の犠牲を伴って・・・しかし彼女は幸せであった。最後の最後で幸せになれたのだから・・・。

(完)

PHASE 147 夜天は空へと帰る（後書き）

サードステージまで読んでいただきありがとうございます。

現在フォースステージを執筆中ですが、まだ書ききっていないことと、修正をする必要なところも多いので、一応書き上げてからの投稿をしていきたいと思っています。

そのため書き上げるまでの間、以前短編として投稿しました『インフィニット・ストラトス』怒れる瞳』を投稿していきたいと思っています。

しばらく掛かるとは思いますが、それまで待っていただければうれしいです。

PHASE 148 始まりは別れから

季節は冬・・・。

鳴海市の町でも冬という季節だということで、たくさんの雪が降り積もる。しんしんと降りそそぐ、白い雪は木々や街並みを白くデコレーションしていく。

そんな冬という季節、欠かせないのがクリスマスという定番の行事である。大通りでももちろんクリスマスシーズンということで大きなモミの木にさまざまな装飾がされ、お踊りのど真ん中に置かれている。

歩き行く人々がそれを見て、そして恋人のいるものはそこを待ち合わせ場所になっている。サンタクロースの格好をした男性女性がその店の商品を購入してもらおうと必死に呼びかけをしているのが見える。

親子連れは子どもたちが両親の手を引っ張ってあれ買ってや、あれ食べたいなどと、この季節にしか食べられないものをねだっている。

それを見ている両親ははいはいいいながらそれを買って込んでいく。幸せそうな家族の姿があちこちで見られる。

恋人同士があちこちで見られ、お互いに幸せそうに腕を組んで女性指差す方を見て男性が色々感想を言う。そして、事前に色々調べてきていたのかもしれないが、何かを伝えたと女性のほうもうれしそうに密着して男性を慌てさせている。

なんともほほえましい光景がそこにあった。

しかし、そんな幸せそうな人々の笑顔の裏では世界が今未曾有の危機に瀕していた。それ時はクリスマスの日から一週間ほど前のことだった。

宇宙空間から巨大な隕石が崩壊せずにまっすぐに地球へと重力に惹かれて近づいているという報告が入っていたのだ。重力に引かれたその隕石はあまりに巨大だということで崩壊が間に合わずにそのままの形を維持して地球に落下するかもしれないという予想が立てられていた。

しかし、そんな予想はばかばかしいということで国際連合及び、各国の首脳たちはまったく相手にしていなかった。

ところが、時間がいくらたってもその隕石の軌道、及び、大きさは変わることなく、更に加速度を上げながらも地球へと向かってきていると突然の連絡が観測を続けていた宇宙ステーションを通して、NASAへ、そして各国首脳と国際連合へと伝えられた。

そして、ここからが問題であった。上位国に依存していた国々は一斉にその国の首脳たちを罵倒した。

『どうして、こんな世界が終わるような事態になるまでこの件を放置していたのかと』

彼らは基本的に国家権力も、財力も、兵力もその上位国たちに比べたらほとんどないに等しい。

そんな国々が揃ってまったくこの件に関して虫を決め込んでいたということが分かった今、一斉に責任をなすりつけ始めた。

むしろ当然のことだと思う。予想が立てられていた以上、何らかの手をうたなければいけなかった。たとえそのために核兵器を使用するとしても・・・。

そして詳しい計測の結果、打ち出されたものは、その隕石の落下最終地点と、落下した場合の最悪の結末であった。

最悪なことに落下するのは大海原であった。そんなところに落ちてしまえばどうなるだろうか・・・。大質量と加速にてもともの質量をはるかに越える衝撃を海にたたきつけるということで巨大な津波が起きてしまう。その規模は世界をほぼ飲み込んでしまうくらいのものであることが予想され、もともとその金塊に歩くにはまさにジ・エンドということだった。

更に、海底の奥底などにはいまだ稼動している、そして今にも弾かれそうなあまたのプレートが潜んでいる。その隕石が落下したら、その衝撃にて、稼動が一気に加速、地震の多発、最悪地割れが起きる。さらには眠っていたり、今にも活動しそうであった火山もまた活動を活発化させてしまう可能性があった。

つまりは、津波で生き残ったとしてもすぐに次なる脅威が襲いかかるということだった。更に悪いことは重なるものだ。火山の噴火に伴って発生する火山灰などが大気中に舞い、太陽の光をシャットダウンしてしまうということだった。

太陽の光がなくなってしまう。それはつまり急激な温度低下を齎すことになる。それによってまず1番弱い立場の草木が育つことが

できなくなる。そしてその草木から恩恵を得ている草食動物たちが育たなくなる。

そして次にそれらを食酢肉食動物、それには人間も含まれているかもしれない。

つまり隕石1つで全ての食物連鎖が崩れてしまい、最終的に示されるのは地球滅亡、氷河期である。

それを聞いた各国の首脳たちは顔を青を通り越してすでに死人と化していたものもいた。それぐらい衝撃的であり、もはや手遅れ寸前のことだった。

彼らの宇宙空間にてそれを破壊する力はない。更に大気圏などの突入してからの核ミサイルによる攻撃を仕掛けたとて、それによって生まれた放射能がどこまで広がるか、分かったものではない。

『核ミサイルを使い、隕石を破壊するべきだ!!』

『何を、馬鹿なことを言っているんだ!!』

『そうだ、そんなことをしたら一体どこまでの国に甚大な被害が出てしまうか。貴国は自身たちが助かればいいとでも思いなのか!!』

『わずかな国の犠牲で多くが助かるのだ!!』

『そうだ、地球が滅亡するくらいならそのほうがいい!!』

『ふざけるな!! 貴様たちは、我々に死ねというのか!!』

『なら、どうすればいいというのかね!!』

『そうだ!! みすみす人類の滅亡を待てというのか!!』

そのような終わらない議論が続けられていた。そして幸せ気分であるはずの世界中も混乱の渦に巻き込まれていた。

「バカなこと言わないで!!」

ここは以前MSモビルスーツを開発したバニングス社経営の巨大工場である。
その工場に響く声の主は月村忍の声だった。

彼女の叫びをまっすぐに受けたのは年16になる長身の青年。ハヤト・ブリッグスであった。その場には彼女の妹である月村すずか、専属メイドのノエルとファリンの姿もあった。

さらに、すずかの親友のアリサ・バニングス、そしてアリサの両親とこの工場にてエクシアの開発に携わったものたちだった。

「あの隕石を破壊しにくって・・・、あなた一体何を考えているの!!」

居候であった彼もすっかり月村の家族になっていたために、年下の弟のように見ていたハヤトが馬鹿なことを言い出したために怒っていた。

ハヤトはこういった・・・。

“エクシアを宇宙に出す”

それはつまりこの世界の兵器ではとてもじゃないが、犠牲無しで破壊できない隕石を破壊するには他世界の力を使うしかないということだった。

しかし、管理局に今から連絡したとてここに来るには時間が掛かる。更に管理外世界である地球よりも、他の管理世界などでの犯罪者た

ちの逮捕、ロストログアの回収の方が優先される。

あまたの世界のうち、管理外世界が1つ滅びたとして組織の上層部にとってはどういうことはないのだった。

「ならどうする?? 国の首脳ははっきり言って使い物にならない」

お互いの国の存命にこだわる続ける限り議論がまとまることはない。テレビ中継で行われている真っ最中であつた。それを知った人々はすでにクリスマスを楽しむどころではなかった。

いつ自分たちが死ぬのか、わからないというのだから……。せっかくのクリスマス。現在囑託魔導師として仕事に行っているすずかとアリサの親友たちが戻ってきてからパーティーをしようと決めていたというのに……。

あちらへの連絡まだいっていないのだろう。

「このまま地球と共に死ぬか??」

そんなのはごめんだというのがこの場にいる者たちの共通の思いである。まだまだ遣り残したことがあるし、人生半ばにも行っていないものもいる。みすみす命を差し出すなどできない。

「なら、俺が行く」

「ハヤトさん!!」

「ちよっと、あなた死ぬ気!??」

すずかとアリサが止めようとする。彼女たちから見れば、兄のような存在であり、いつも護衛をしてくれるやや年の離れたお兄さんの

ような存在である。

最初は怖い人だと思っていたが、2年もたって少しずつやわらかくなったと思っていた。

親しいものが今にも死ににいくというのだから止めないはずはなかった。

「他に方法はあるのか?？」

はっきり言って、手の内用がない。最悪いくつかの国を犠牲にして生き残るしかないが、それでも可能性的には低いのだった。

欠くして決定は覆せない。生きるためには、それしかなかったのだから・・・。

「お疲れ」

「うん、お疲れ」

「お疲れさん」

無事に任務が終わったということで、よかったという安堵の表情を浮かべている三人の少女がいた。高町なのは、フェイト・テスタロッサ、八神はやての三人だ。彼女たちは管理局の魔導師として、その任務についていた。

低級ロストログアの回収とは言え、一歩間違えれば甚大な被害につながってしまうために、気は抜けなかった。

本局に戻ってきていた少女たち。興は彼女たちの故郷であり、現在

住んでいる場所の第97管理外世界地球でクリスマス・パーティーの予定なのだ。

はやての家族であるヴォルケンリッターたちも、古代ベルカにかかわっている聖王教会からの依頼任務で彼女たちとはまた別行動をしていた。

そのために双方それぞれ帰宅し、なのはの実家で経営している喫茶翠屋にてパーティーをすることになっていた。

「今から戻れば十分間に合いそうだね」

「うん、クロノたちも後で行くって言うってた。ユーノはどうするって?? アルフはもう手伝いに言ってるはずだけど」

「必死に仕事を終わらせようとしてるらしいの。色々注文が多いらしくって・・・」

フェイトからの質問になのは今頃ヒィヒィ言いながら検索している自身の友達の姿を想像してみた。

「うちの子たちも、みんな楽しみにしてるんよ」

特にヴィータがと、八神家の末っ子のことを思っているはやて。2年前に悲しみの連鎖を断ち切った彼女たち。

そこにはただ一人の犠牲者がいたということを知っているのはその事件にかかわったものたちだけだが・・・。

「プレゼントも事前に購入してるんよね??」

「うん。色々立て込んでたから、時間なくなると思ってたね」

「私もなの」

小学生という立場でありながらすでに働き始めている彼女たち。無理はせずに、できることをするように言われているために、あまりハードスケジュールは立てられない。立てたとしても三方の家族に止められるだろう。

小学生であることをまず自覚しろ・・・ということであり、自身の体調も図れないものが人を守るはずも無いということを言われていたからだ。

特に今年に入ってのなのはの無理なスケジュールが眼に留まっていた。何度も心配になったフェイトたちが言っても『大丈夫』や、『私、丈夫だから』などといってまったく止まる気配がなかった。

しかし、それを不意に不安から口から零したすずかの言葉を聞いて、ハヤトが忍経由で恭也に相談。

彼も含めて高町家はなのはのことを心配していた。しかし彼女が大丈夫だといっているために、それと彼女がそれを望んでいるということであまり大げさには気にしていなかったようだ。

しかし、その詳しい内容と、彼女の戦い方がどれだけ、まだ歳若いこの頃に負担がかかるかということの説明。

最近になって体調の優れないということや、学校の学力の低下というのがその無理が影響しているのではないかということにつながる。

それからして、高町家総員での家族会議。なのははかたくなに大丈夫だと言い張るが、以前も彼女のような状態に成ったことがある恭也にも分かる。

そして、その無理がどれだけ自身に大きな害となるかも。ちょうどその日は金曜日であり、翌日から二日間学校も任務も無いということで、仕事でいったん席を離れた士郎と桃子以外の三人での話し合い、夜になればまた家族での話し合いになった。

不意に質問した。

“なんで、そこまで無理をするのか・・・”

そしてその答えを聞いてた士郎たちであるが、明らかにそれは嘘だと見抜いていた。もし家族そろってこのような会議を開いていなかったら絶対に気づくことができなかっただろう。どこまで平和に浸りきっていたか・・・そう感じぜざるを得なかった。

『本当のことを話してくれないか?? なのは』

『本当だよ。それに、任務だってちゃんとできてる』

『それでも、これは以上だよ』

『そうよなのは。あなたがここまでやる必要があるの??』

なのはは悩んでいた。

その頃から、管理局へと入局し本格的な仕事が始まっていた。しかし、それからは授業の途中とは言え、仕事の時間となれば抜けることも多くなり、さらに○一日連続で休むこともあった。

親友の助けもあって勉強になんとか着いていこうとしていた、しかし仕事の疲労から帰ってからはずぐに寝てしまうなど、それに手をつける時間が徐々に少なくなってきた。

どちらかというと努力で補っていた部分が大きかったために徐々

に勉強についていけなくなってくる。更にテストでの点数はもちろん下がる一方であった。何とか勉強のほうを取り戻さなければいけないと思っただけでもそこに局からの仕事が入ってくる。

そこまで忙しくなっているのもまた彼女が悩んでいるのを何とか吹っ切りたいためのものだった。

元来高町なのはは孤独が嫌いであった。

その理由として、幼き頃に父士郎がボディーガードとしての仕事において大怪我を負ってしまった時の事だった。

その頃から開店させていた喫茶店の切り盛りに母と姉は忙しく、その合間をぬっての大怪我でまったくからだを動かせない父の看病をするなど多忙であった。今では鳴海でも有名になった喫茶翠屋であるが開店当初は当然のことながら僅かな客いなかったためになんとか確保させるためと大変であった。

兄もまた、家族を守らなければいけない、そのためには強くならなければいけないということで一心不乱で鍛錬に打ち込んでいたためになのはに構ってやることができなかったのだ。

幼かったなのであるが、賢かったのが逆に災いしたのかわがままを言わず。ずっと待ち続けていた。

“ いい子 ”

そのいい子を演じていればきっとみんなに心配させることはない。その当時から誰かに心配をかけることが嫌いであった彼女。

そのために家族がみんな揃っている今になっても、いい子を演じ続けようとしていたのだ。

いい子であれば、みんなが見てくれる。嫌いにならない。そう思い込んでいたのだ。

ただでさえからだに負担のかかる砲撃を中心とした戦闘スタイルであるのは。それにくわえてのエクセリオンモードとカートリッジシステムの多用。確かに威力のあるものを使えば任務などで大きく貢献できるだろう。

そうやって信用を勝ち取っていけば友達も見捨てずに、自分のそばにいてくれる。なのはにとつて魔法とは始めて自分のとりえとなつたものであり、フェイトをはじめとしてはやて、ヴォルケンリツターたちと知り合いになれた大切なものであった。

しかし、その魔法がそんな大切なものたちが自分から離れていかないうようにするための鎖のようなものとして扱うようになっていた。当然彼女は自分の力があればたいいのことはなんとかなるという、少々うぬぼれた優越感を感じていた頃だった。

自分の砲撃を受ければ大抵のものは落ちる。それを自覚し始めたとき、初めて自分が優位に立てると感じるようになっていた。

しかし、目に見えないところで、彼女のからだには負担が掛かっていた。それも影響があつてか彼女の体調などに支障を来たし、それを読み取ったハヤトが高町家のものに進言し、こうなっているということだった。

“寂しい”

“怖い”

それは自分が必要とされているのかという不安からのことだった。自分がいい子じゃなかったら家族に必要なにされないのではないか。

その翌日、突然入った任務になのはは自らの体に鞭を打って参加した。前日に家族会議をしたが、それでもなのはには不安は消えてくれなかった。そんな彼女の痛々しい笑みを見て、見送る家族は心配そうに見送るしかできなかった。

管理局に勤めるのはなのは数少ない家族に対してのわがままであった。闇の書事件が終わってから数日が立ってからであった。

突然家族会議を開かれ、家族に対してなのはがそう打ち明けたのだ。自分は管理局に入りたいと。自分の力でたくさんの人を救いたいと。

そしてなのはが任務に出ていたその日。突然高町家に悲報が届いた。

”高町なのはが危篤状態”

それを聞いた母桃子は顔面蒼白にし、耳に当てていた受話器を取り落としてしまう。すぐさま転送装置にて、案内された4人が本局の集中治療室の中で見た娘の、妹の姿が、まさに慢心相違、体中が血で真っ赤に染まった包帯でくるまれた姿であった。

その姿を見た瞬間、桃子は気絶。美由希も膝から崩れ落ちるしかなかった。

それから意識が戻ったなのはに突きつけられたのは、最悪二度と空を飛ぶことも、歩くことも、そして……

”魔法を使うこともできない”

と言う最悪の現実を突きつけられた。

その瞬間のなのはまさに絶望に突き落とされ、悲鳴を上げて泣いた。御神の剣士である3人が押さえつけようにも、小さななのは体から想像もできない力で暴れていた。このままではまずいということで、担当医がすぐさま鎮静剤を討った。

それからして、どうしてなのはが無理をしていたのか、ポツリポツリと話し始めた。それを聞いて家族を始め、親友たちはそれぞれ思うことがあった。

そんな風に悩んでいたことを気づくことができなかったことが悔しく思う、兄恭也。

妹に何もして上げられなかったと、後悔と悔しさを感じている、姉美由希。

そして娘のなのはを抱きしめ、泣いている、母桃子。

それは自分が勉強でいい点を取って、いい子でなければ、それは自分が魔導師として有能性を証明しなければ友達に必要とされず、離れていってしまうのではないかということからだった。

馬鹿にしないで。それは眼を真っ赤にしてなのはを叩くアリサからの言葉だった。みんなアリサに同意している。そんなことで友達を

やめたりするほど、自分たちとの絆は薄くないし、薄情でもない。

何故話してくれなかったのか。自分たちにはあれだけ言葉にしなれば分らないと、伝わらないといっていたなのは自身がどうしてそうしないのか。

自分の言葉には責任を持て。自分たちがそれほど信用ならないのか。そうさまざまな言葉がなのはに放たれた。泣きながらそう言われた。

そんなことない・・・そんなことない・・・。

それしか言えない。

それからじつくりと話し合って、ようやくなのも受け入れることができた。そうだいたいと思う・・・。

それから精密検査の結果、なのはのリンカーコアはひどい状態という診断をシャルマルから受けた。更にひどいことにエクシードモードとカートリッジという負担の大きいそれらの使いすぎからだにも大きな影響を出しており、疲労が半端ではなかったらしい。

眼が覚めてからはずっと落ち込んでいたなのは。それでももう一度空を飛びたい。その気持ちでリハビリをすることを決心したのだ。

元来の性格からなのか、リハビリでも早く直したい、空を飛びたいということ、根を詰めることがあった。

そのたびに注意され、説教を受けるなのは。少しずつではあるが、足の状態も良くなり、奇跡的ではあるが、2年がたち、再び空を飛ぶことができるようになったのだ。

あれからもう4年がたっていた。

すると突然、ここにいないはずのクロのからの通信が入る。

『すぐに、モニターを見てくれ』

そういわれてなのはたちは、テーブルの近くにあったモニターに視線を移す。そこには何故か三人が住んでいる第97管理外世界の地球の番組が流れていた。

しかし、三人が唖然としている理由としてそこに流れているニュースの内容だった。

“地球に巨大隕石接近。地球滅亡の危機”

そのように説明しているニュースキャスター。大画面であり、更にミッド語に訳されて放送されているために他に局員たちも見ている。局員たちの口からは同情の言葉が漏れる。しかしなのはたちの耳にはまったく聞こえていない様子だった。

その隕石がもう1週間ほど前から観測されていたにもかかわらず、まったく対策を採られていなかったというのだ。

そこには各国の国民たちがデモを作って首領官邸などお偉いの所へと抗議に言っている様子が見えた。

「そ、そんな・・・」

「嘘やろ・・・」

「なんでこんなことに・・・」

自分たちがそこを離れていた時間、知らないところではそんなことが起きていたなんて露も知らなかった。

更にまだ地球には大切な友達や華族、知り合いがいる。しかし、今からでは到底無理なはなしだった。

家も、家族も、友達も、知り合いも、全てが無に帰してしまう。

——嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！

大切な家も、家族も、友達も、知り合いも、全てが無に帰してしま
う。

しかし、彼女たちにも誰にもすでに何をするともできずに黙って地球が滅亡するのを見ているしかできない。

なのは隣の見ていたフェイトとはやてがアースラならやアルカンシエルを使えばなどといっているが、通信を開いているクロノがそのどちらももう間に合わないといっている。今現在地球付近の世界に停泊している次元艦はないし、更にアルカンシエルを使用するには上層部への許可を取り付けなければいけない。

今にも地球に墜落しそうな隕石。その向こうから何かが地球から飛んできているのが見えた。モニターが拡大されると、そこには4つのブースターから盛大に炎を噴いている白い物体が映し出されていた。

「なに・・・あれ??」

モニターに映し出されるその白い巨大な物体を指差して言うフェイト。

「まさか、隕石を破壊するためにミサイルなんていうんやないかな」

地球に宇宙空間で物体を破壊するために兵器等ないはずだと知っているはやても引きつった笑みで言う。

「でも一体・・・」

なんなのだろうかとなのはが言おうとしたそのとき、突然未確認^{アンノウン}に動きがあったのだ。

慌てて巨大スクリーンに映し出されているそれに対して目を向け直す。

あつという間に隕石の目前までたどり着いたそれは、ものすごい速さで移動するために取り付けられていただろう巨大な球体型のブースターが切り離される。そして何かを包み込んでいたかのように見える白い物体が幾つかパージされ宇宙空間の後方へと流れ飛んでいく。その場その白い包み込んでいるものが左右に開かれると白と青のツートンの装甲をもつ姿が露わになる。

「「!!」」

その姿を見た瞬間に思わず目を見開いてしまう。背中にある6枚の翼。どうやら白い装甲だと思っていたものは翼であつたらしい。

それを見ていた誰もがその姿を見て思っただろう……。

「天使……?？」

モニターに映し出されたその姿は、まさに天使そのものだった。局員たちが呆気にとられてスクリーンを見つめるなか、その突然現れた未確認は大きな白い翼を羽ばたかせると一直線に地球に墜落せんとしている大気圏に突入した隕石に対して装備していた巨大なバスターライフルを構える。

「な、なんだあれは!!」

モビルスーツ
「MS!？」

「なんで、管理外世界にあるんだ!!」

局員たちは口々にそういつているが、なのはたちにとってはそれよりも問題なことがあった。現れたのがエクシアであり、それを操作しているのが、自分たちの知り合いであるからだった。

そして、エクシアは真っ直ぐに隕石に向き、地球を背にバスターライフルをあわせる。なのはのスターライトと同等、否それ以上の威力があるツインバスターライフルを構える。ここでは非殺傷などという甘ったれた感情は捨てているだろうと思っていた。

一撃目が放たれた。銃口から放たれた粒子砲が真っ直ぐに隕石を突き抜ける。しかし、それを受けて壊れたのは後ろの僅かな部分だけ。

「そ、そんな……!!」

なのはの悲痛な声。

エクシアの装甲がバラバラと宇宙空間へと流れ出していたのだ。数々の事件でその力を遺憾なく発揮していたエクシア。しかし、その装甲が限界に達していたのだ。

儚く散る花びらのように装甲が一枚、また一枚と宇宙に放たれていく。

——駄目!! もうやめて!!

自分に対しては決して無理をするなどいつていたにもかかわらず、今彼がしているのは無理を通り越して無謀である。

たった一人でそれを破壊するなど……。その場にいた誰もが無理だと思っていた。そんな重いとは裏腹に、エクシアの構えたツインバスターライフルから二発目が放たれた。粒子砲が再び隕石を寸分狂いなく打ち抜く。

それでも一向に壊れない。もう駄目なのかと思った。いくらMSモビルスーツが宇宙空間でも戦えるとは言え、巨大な隕石を人間一人が壊せるわけが無いとあきらめの気持ちが生まれていた。

しかし、突然エクシアの機体が赤くなった。トランザム・システムを起動させたのだ。更に翠色の粒子が三対六枚の白い翼と合わさって、地球全体を包み込むような巨大な光の翼を形成した。

「綺麗・・・」

誰が呟いたかはわからない。しかし、現在見ているものたちはきつと同じように思っただろう。まるで人類に鉄槌を下すものから人々を守らんとする救世主のように見えた。そして三度目の砲撃の構

えに入る。

光の翼を羽ばたかせ、先ほどのものとは比べ物にならない、巨大な隕石をも飲み込む砲撃が放たれ、隕石はその濁流に飲み込まれるかのようにして、砲撃によって屑と化して地球落下の危機は免れた。

しかし、次の瞬間・・・。

「だ、駄目!!」

「あかん!!」

「やめて!!」

三人の叫びも虚しく、大爆発に巻き込まれた、エクシアはその光の翼と共に、宇宙の藻屑と化した・・・。

デビット・バニングスの協力のおかげで宇宙空間へとエクシアを放つ算段がついた。耐熱の翼につつまれ、更に足りない部分を新たに確か装甲で覆われていく。巨大ブースターと接続されたエクシアと装備しているハヤト。

モニター越しから、心配そうなアリサとすずかの顔が見えた。彼女たちにとっては血のつながりはなくとも、兄的存在であった。色々と助けられたことも、逆に助けたことも多々ある。

まるで死に行くようなこの状況。最悪だった一人の犠牲者になるかもしれない。ただ祈るのはエクシアがもってくれることだけだった。

「いい?? 最大出力で打てるのは約3発よ」

「了解した」

「それ以上は・・・分かってるわよね」

「もちろんだ」

開発などに携わった一人である月村忍からの連絡を聞いているハヤト。そして告げられる。

“必ず戻ってくるように”

「みんなに悲しい思いを絶対にさせちゃ駄目よ。それに、あなたが帰ってくる場所もちゃんとあるんだから」

「了解した」

そして視線を帰るとそこには心配そうな二人がいる。

「か、必ず、戻ってくるのよ」

「気をつけてね。後、必ず戻ってきて」

そういう二人の顔からは不安は消えない。それでも信じて待つというのだ。

「了解した」

そうして発射体勢になる。

球体型の巨大ブースターが稼動する前に、ある程度の高度までは付属の小型ブースターで大丈夫だということだ。それでも普通の航空機並だというのだからすごい。

「射出タイミングを、エクシアに譲渡します」

「了解。エクシア、ハヤト・ブリッグス。ミッション行動を開始する」

そう言って不安と人類の滅亡の待つ青空へと飛びだったのだった。
。。。

飛行場を飛び立ち、隕石が向かっているだろう宇宙へとまっすぐに飛んでいく。成層圏をこえ、大気圏をこえ、とうとう後ろには青い地球が見えていた。

——変えてみせる・・・運命を。

すでに成層圏に入ってから小型ブースターを外しているために今は巨大な球体型のブースターでものすごい速さで隕石の元へと向かっていた。

それから数分が立っていた。ものすごい早さであるがMSであるためにそれほど負担はなかった。それでもある程度のG（重力）は感じていた。

「来たか・・・」

そう呟くとスーパーカメラによって捕らえられたものすごい速さで地球に向かってきている隕石が映る。

嘗てなのはは言葉を通さずに、フェイトが寂しそうにしていると感じ取っていた。それは彼女自身も孤独を嫌っていたからの他ならない。

生まれが普通の人とは違ったとしても、人ではなくプログラムだからといっても、その存在が認められていなくても……。そこに存在しているのは確かなのである。そして誰もが自由に、生きてもいいのだ。

大切な母親のために、大切な主のために、自身が傷つくことを厭わない。しかし、自分たちが行っていたのは過ちである。それをこえて、ようやく気づくことができたものもある……。優しさだ。相手を思いやる優しさ……。

否定され続けていたものが、光と闇の狭間で、ようやく見つける事ができた強さ。

暗闇で、そして消え行く中で誓い合い、重ねた約束^{ねがい}。

それぞれの進み行く未来での、無限の夢を信じて消えていったものがある。思いを託していったものがある。

消え行く最後に、残されるものたちへの愛しさを、祈りに変える……。抱きしめていたからだ徐徐に消えていく。

消えるなど何度行ってもそれは止まってくれない。大丈夫だからといってくれた。本当の気持ち、守ってくれるからといって……。

遠くに行ってしまった者たちに、伝えたい、この鼓動の正体を……。自分の思いを……。

傷つけあうだけでは何も生まれない……。誰も喜ばない、何も

手に入れられない……。そう叫び続けた少女がいた。

何をしたいのか、何のためにそうしているのかを問い続ける。何
度傷ついても、決してくじけず、立ち上がって……。

だから、純粋な気持ちが通じたのかもしれない。

悩んでいた少女の力になろうとしたときもある。自身の存在について悩んだ少女の力になろうとしたときもある。孤独の恐怖に悩んだ少女の力になろうとしたときもある。それは一寸のよどみの無い
とまでは行かずとも、それでも穢れのない未来を歩んで欲しいから。
その優しさはまるで木漏れ陽のぬくもりのようだった。

あつという間に隕石の目前までたどり着いたハヤトは、ものすごい
速さで移動するために取り付けられていた巨大な球体型のブースターが切り離す。

そしてエクシアを包み込んでいた白い物体が幾つかパージされ宇宙
空間の後方へと流れ飛んでいく。

その場その白い包み込んでいるもの……三対6枚の純白の翼が左
右に開かれると白と青のツートンの装甲をもつ姿が露わになる。

ガンダム・エクシア。その両手にはGNツインバスターライフルが
握られている。それを見ていた誰もがその姿を見て思っただろう・
・。

その姿は、まさに天使そのものだった。大きな白い翼を羽ばたか
せると一直線に地球に墜落せんとしている大気圏に突入した隕石に
対して装備していたGNツインバスターライフルを構える。

そしてエクシアは真っ直ぐに隕石に向き、地球を背にGNツインバ
スターライフルをあわせる。ここでは非殺傷などという甘ったれた

感情は捨てている。

「破壊する・・・」

一撃目が放たれた。銃口から放たれた粒子砲が真っ直ぐに隕石を突き抜ける。しかし、それを受けて壊れたのは後ろの僅かな部分だけ。

「!!」

——く……。点でせめても駄目なのか……。だが……。

しかし、あれを使ってしまえば……。おそらくだが約束は守れないだろう。そう思っている間に、体に激痛が走る。

「ぐ、があ!!」

体が焼けるような痛みを感じている。肉を引き裂かれたような痛みを感じている。エクシアの装甲がバラバラと宇宙空間へと流れ出していたのだ。

白い装甲には、はがれた肉片の血も付着している。数々の事件でその力を遺憾なく発揮していたエクシア。しかし、その装甲が限界に達していたのだ。

儚く散る花びらのように装甲が一枚、また一枚と宇宙に放たれていく。肉片と血がまるで装甲を赤いバラのように見立てていた。

たった一人でそれを破壊するなど……。誰もが無理だと思うだろう。それでもハヤトは……。エクシアの構えたツインバスターライフルから二発目が放たれた。粒子砲が再び隕石を寸分狂いなく打ち抜く。

それでも一向に壊れない。もう駄目なのかと思った。いくらMSモビルスーツが宇宙空間でも戦えるとは言え、巨大な隕石を人間一人が壊せるわけが無いとあきらめの気持ちが生まれていた。

——まだだ・・・まだ手はある。

そう思って、ハヤトはそのシステムに手を伸ばす。しかし、不意に手が止まった。必ず戻るという約束はどうなる。

おそらくだが、それを使えばエクシアごと、ハヤトは宇宙の一部になるだろう。もはやエクシアは補修していたが、限界であつたらしい。

だが通常の砲撃でも威力は半端でないにもかかわらず隕石を壊すには至らない。このままでは何も守ることもできずに地球が破滅するのを見ているしかできない。

——変える・・・変えてみせる。運命は変えられる。

そして戸惑いなく、それを起動させる。すると突然エクシアの機体が赤くなった。

TRANS-AMトランザム・システムを起動させたのだ。

更に翠色の粒子が三対六枚の白い翼と合わさって、地球全体を包み込むような巨大な光の翼を形成した。

その光の翼は大きく広がり地球全体を包み込む暖かな粒子の光を降りそそいでいた。興はクリスマス。奇跡の日・・・。

そしてハヤトは・・・エクシアは三度目の砲撃の構えに入る。

——カオル・・・、ニクス・・・、俺もそっちに行くかもしれない・・・。行ったら、温かく迎えてくれるか??

似合わないことを思いつつ構える。しっかりと狙いを定める。すでにロックシステムは破損し、目視でしかできない。それでも十分だった・・・、もう点ではなく面で打ち抜くからだ。

光の翼を羽ばたかせ、先ほどのものとは比べ物にならない、巨大な隕石をも飲み込む砲撃が放たれる。隕石はその濁流に飲み込まれるかのようにして、砲撃によって屑と化して地球落下の危機は免れた。

——やったのか・・・??

ハヤトにはもう分からなかった。自分の体がもう自分のからだではないように感じていたのだ。

痛覚がもう行かれてしまったのかも痛みはなかった。それでもやったという消え去った感触だけは確かにあの時感じていた。

目の前に広がるは虹色の粒子が地球を包み込む幻想的な光景。

——ああ、・・・やった、これでようやく・・・。

そして、それを最後にハヤトは大爆発に巻き込まれた、エクシアはその光の翼と共に、宇宙の藻屑と化した・・・。

PHASE 148 始まりは別れから（後書き）

週一の投稿になりそうです。

誤字脱字やご感想がありましたらよろしくお願いします。

ネタはもちろんあれから取ってきました。

PHASE149 動き出したソレスタル・ビーイング（前書き）

オリキャラを提供してくださった皆様。どうもありがとうございます。

一週間ぶりですが、投稿したいと思います。基本的に00（ダブルオー）の世界で、そこにSEEDネタを込めていくと言う形にします。

ご感想をいただけるとうれしいです。

PHASE 149 動き出したソレスタル・ビーイング

とあるよく晴れた昼下がりであった。

ここでは管理局の開発部と共に、管理世界にて急ぎで開発が進められているMSの披露会が成されていた。

とは言っても動力は貯蔵された魔法ということで、あくまで魔法に縋るのは管理局の魔法至上主義に反さないためであった。

ターゲットからは魔力弾が放たれる仕組みになっていた。銃身が突然現れた疲労されるはずのMSに向かって向けられる。

そして、次々と銃口からは魔力弾が放たれる。

「へへ、そんな攻撃が・・・俺様に通用すると思ったのか!!」

なんとも自信家な男の声が聞こえるや否や、その男は言葉通り、放たれてくる魔力弾を次々と回避してみせる。

その動きには無駄がなく、むしろスムーズである。見ているものたちはその性能の高さに納得するように頷いているのが見える。

そしてターゲットの1つに対して、右手に握られている粒子ライフルでそれを寸分狂いなく打ち抜く。

「んあ?」

横から次々と現れた銃口から魔力弾が放たれる。

しかし男は焦ることなく、落ち着いてそれを左腕の盾で受け止めると、狙いを定めて横に現れたターゲットを破壊していく。

さらにそこから球加速して、飛び上がり、壁を蹴り上げると、空に浮かんでいたスフィアに向かって連続で粒子弾を放つ。

その三つ並んでいたスフィアも無駄なく打ち抜かれて霧散する。そこから空中で一回転して体勢を立て直すと、地上に現れたターゲットとスフィアを次々と打ち抜いていく。

それを見ていた各世界の上官たちや開発部の者たちは感嘆の声をあげていた。

「「おお」」

そんな派手なデモンストレーションをしてくれたMSを見つめながら一人の男が口を開いた。

「MS『イナクト』……。管理世界の1つが開発したようなものだけど……」

そう言っていると後ろから足音が聞こえてきた。

「その管理世界もいよいよ魔導師適正のある人が少なくなってきたいるからね。他の世界よりも管理局からの守護が薄くなっている。なんとか自世界の力を誇示したいんだろうな。そうでもないとその世界に次元犯罪者がはびこるだろうから」

そこに現れたのも、年若い青年であった。整った顔つきに輝く金

色の髪の毛だ。

「おい、いいのかい君のような、管理局きつてのエースがこんなところで油を売っていて」

「ふん、もちろん、よくはない」

茶髪の青年が彼に話しかけると、その青年はコートのズボンポケットに手を入れながら歩きながらそれを聞き、ゆっくりと隣の席に座る。

茶髪の青年は24歳、天才的な技術力でMS開発に取り組んでいる科学者、リオン・ハーベイ。

そしてそのリオンの隣に座った管理局MSのエースである金髪の青年は、同じく24歳リオンの開発しているMSを使用するグラン・オーヴァンである。

グランは今は普通のスーツを着こなしているが彼にはそれは似合わないというのがリオンの見解である。彼にはまさに武士・・・鎧が似合うというのが本音である。

事実彼は第97次管理外世界地球の日本という国の武士道をこよなく愛するものである。よくそこまでのめりこめるなと思うが、自信も研究となれば周りが見えなくなるので同じかと内心苦笑いする。

彼らがであったのはちょうど管理局でリオンが開発していたMSのテストパイロットをするというときに、テスト候補者としてきていたグランが他を凌駕するような点数をたたき出したためにお互いに求めているものが似ていたということから共感して、こうして仲が良くなっていた。

またグランの人柄もあるかもしれない。その武士道とか言う理念に感化され、どうしても、なんとも前時代的な口調を好むようなそのグラン。しかし、それがとても似合っているというのがまた面白い青年なのであるが。

一言で言えば変わり者というのが当てはまるだろう。

しかし、そういうのならリオンもまた変わり者かもしれない。いい年になってもまだ恋人一人いないというさびしい人生。今は、まさに研究そのものが恋人なのかもしれない。

そういう変わり者同士、何かが共感したところもあったのだろう。

「それにしても、この管理世界も相当慌ててるようだね」

「ほお、それは、どういう意味だ??」

ヘリオンに視線を戻していたリオンがそういう。そのリオンが見ていたヘリオンはちょうど全てのターゲットを破壊し終えて、地面に着地するところであった。

「管理局の傘下に入ってからちょうど50周年という、おめでたいこの日に披露会を開くだなんて、それに新型だ。喧嘩をふっかけているようにしか見えないさ」

対抗心が丸分かりだという風に感じていたリオンがそういう。家も知れないなと思ったグランであるが、それよりも、目の前のMSはどうなのだろうかと興味を引いていた。

「君はどう見る??あの新型のMSを」

「はぁ・・・」

小さくため息をつく。

「どうもこうもないよ。あれはうち（管理局）の猿真似だよ。まあ、技術者じゃないと分からないだろうけどね」

肩をすくめさせて、リオンが言う。

独創的なのはデザインくらいではないかというのが彼の意見であった・事実、目の前にあるMS『ヘリオン』は管理局の量産型MS『フラッグ』を参考にして作られたものである。彼の意見は当然のものだった。

『おい！！その！！聞こえてるぞ』

ヘリオンを展開したまま向こうから使用者であるラスト・ブライスマンの怒り心頭の叫び声がスピーカー越しに聞こえてきた。

その対象である二人は指を指されている。

『今何だったあ！？』

小さく笑みを浮かべるグランは隣にいるリオンに話しかける。

「どうあら集音声は高いらしいな」

「らしいね」

リオンもそれに苦笑い交じりに言うのだった。

そのころ空からものすごい勢いでその披露会が開かれている訓練

所に向かって何かが飛来しようとしていた。

それはMSであった。青と白のツートン。背中には天使のような白い翼が三対あった。それに登場している人物が口を開く。

「アヴァランチエクシア、目標地点を視認。GN粒子の散布、目標地点到達と同時に終了させる」

そしてモニターのハイパーカメラによって映し出された、先ほどまで披露会に使われていたMS『ヘリオン』が映し出される。

「目標対象、確認」

徐々にそれとの距離が縮まってくる。

「予定通り、ファーストフェイズを開始する」

終に動き出した、組織が明るみに出ようとしていた。

それに反応が管制塔でも確認されていた。突然のことだったので管制官の男性は戸惑いながらも司令官に報告する。

「接近する機影を確認」

「なにい??」

戸惑った声が聞こえる。座っていたものたちも、同様な表情を見せている。

「方位は3時の方角です」

管制者たちは慌ててその調査に急ぐ。

「どこの機体だ?? 予定には入っていないはずだぞ」

まさか誤って紛れ込んでしまったのだろうかと思う。しかし、今はまだ演習中であるために、入らせるわけには行かない。下がらせるように指示が出される。

「レーダー反応・・・ありません」

驚いたような声上がる。

「カメラで追うんだ!!」

ハイパーカメラを使用して慌ててその謎の機影を捕捉しようとする。そしてその機体の正体がモニターに映し出されると管制者たちは驚きの声をあげる。

「な、なんだ・・・あの機体は」

司令官の言葉はもったもなかった。あんな機体、どこの世界にも開発されていないものだったからだ。

赤い無数の文字羅列につつまれた空間に漂う男性がいた。瞳を閉じ、何かを読み取るようにして、落ち着いている様子である。

「ついに、始まる・・・」

不意に眼を開き、そう呟く。

そして場面は演習場に戻る。

司令塔からの連絡が演習者であるラスト・ブライスマンにも聞こえていた。なんでも上空から接近する未確認^{アンノウン}の機体がいるというところで、待機しているようにということだった。

「ああ?? 未確認^{アンノウン}の機体ダア??」

一体どこの世界の機体だよと内心毒づく。せっかくの自分のすばらしい活躍を披露できると思っていた矢先のことだったために、少々お怒りである。

「だがよ、何でこんなときにつて・・・おい!!」

突然スピーカーからは雑音しか聞こえなくなった。司令塔との連絡が取れなくなったのだ。一体何が起きているんだと頭を捻るラスト。

そして不意に接近するなにかの音を聞き取り、空を見上げると、そこには白い天使の羽を持った青と白のツートンカラーのMS^{モビルスーツ}がこちらに向かって飛んできていた。

それを見ていたのはラストだけではなく、観客席にいたものたち全員であった。その中で、リオンはその機体の姿を見て驚きを隠せないでいた。

「すごいな・・・もう一機新型を隠していただなんて」

ドッキリイベントでもしようとしたのかなと思った。

「違う・・・」

不意に隣にいたグランが呟く。

それは武士道というそれを貫いてきた彼の鍛えられたカンがそう
いていた。

「あの・・・光は?？」

その向かってくる機体の推進部のようなものから放たれている、
緑色の光は一体なんだろうかと、不思議に思う。今まで見たことも
ない粒子である。自分たちが使用している魔力の粒子とはまた違っ
たものである。

そしてゆっくりと空から演習場へと舞い降りたその機体の姿はま
さに天使と呼んでもおかしくないものであった。

そしてゆっくりとイーグルを展開しているラストのほうを向く。
V字アンテナと青色の双眼ツイン・アイからして、その機体はガンダムタイプで
あると取られた。

その姿を目の当たりにして、観客席の各国の上官たちはざわめく
ことしかできなかった。

そしてその中で一人の男性が慌てて胸ポケットから連絡端末を取
り出すと、どこかへと通信を入れる。

「ラスト!!聞こえているか、ラスト」

どうやらイナクトの使用者、ラストの上官らしき男性である。

その様子を横目で見ているリオン。隣にいるグランは黙ってそのガンダムタイプの未確認のMSモビルスーツを見ていた。

「ラスト!! くっそ!! 通信ができない」

その言葉を聞いて慌てて書く世界の上たちも連絡を入れるがどの端末からでも連絡を取ることができない。

「どうなってる・・・」

「一体何が起きてるんだ??」

周りからは困惑の声が聞こえる。

「通信ができない??」

その言葉を聞いてリオンも訝しげな顔になる。

「皆さん!! 誘導にしたがって、避難をお願いします。ここは危険です」

武装をしたものが現れ、指示を放っている。ざわざわと立ち上がるものたち。

「味方ではないのか??」

リオンがその未確認を見ながらそう言う。

「一体、どこの機体だ??」

それは目の前でその未確認と対峙しているラストも同じく考えていた。

「おいおい、まじで、どこの機体だよ。管理局か??それともアイオリスか??」

にやりと笑みを作りながら、真っ直ぐに未確認を見る。

「ま、どちらにせよ。人様の領土に勝手に土足で入ってきたんだ。ただで済むと思うわけねえよなあ!! ああ!??」

右手に構えられたライフル。左腕に構えられた盾。腰には二本の魔力刃を展開できるサーベルの柄がマウントされている。

そんな戦う気満々の部下であるラストに対して、非難していた上官は頭を抱える。どうしてこうも好戦的なのか、勝気なのか。

「あの馬鹿・・・」

相変わらずの部下にそう毒づいた。

「一体何をしようと。あの機体だけに一体どれだけの金がかかっていって思ってるんだ」

いくら真似た機体だからといって、一からそれを作り出すには莫大な費用がかかった。更にそのまねたそれ以上の性能を出すためということ、更なるチェーンなっぷにも費用が上乗せされたのだった。

しかし、後ろを歩いていた、同僚からの言葉。

「なあに、大丈夫だよ。これでヘリオンの性能の高さを証明できる。これもまた、一興さ」

なんとも簡単に言ってくれると内心思うが、それでも性能の高さを証明できれば自世界の管理もまたよくなると思っていた。

「それに、ラスト・ブライスマンは我が軍のエースだ」

後ろの性格には少々問題があると付け加えられるが。それでも軍をきっての強者であるために、一応かけてみてもいいかもしれないと思った。

モニター越しに目の前のMSを見ている。

「貴様ア・・・、一体俺が誰だか知ってんのか??」

相手に聞こえているかはわからないが、それでも自分を持ち上げたいばかりの言葉が続く。

「前線部隊のエース、ラスト・ブライスマン様だ。模擬戦でも負け知らずの、スペシャル様だ!!」

身近らを鼓舞するような発言。

しかし、まったく目の前の機体は無言を貫き、無視を決め込む。

「しらねえとは、言わせねえぞオオオオオオ!!」

すばやく構えたライフルから魔力弾を放つ。至近距離から放たれた魔力弾。

——瞬殺だ。

そう思ったらストだったが、その攻撃を最低限の横への移動で回避すると、先ほどまで未確認がいたところを魔力弾が通過していく。

「な!？」

さすがに簡単にはおわらないかと思いつながら、次々とライフルから魔力弾を放つ。しかし、それを次々と、到来のMSでは考えられない機動性を見せて、全てを紙一重でかわしてみせる。

——狙ってかわしてやがる!!

驚愕という感情を覚える。狙ってできるものではない。相手は慌ててかわしているのではないので、機体のバランスは失われていない。

そして、一気に間合いをつめられた。

——い、いつの間に!?

一瞬で目の前に現れたかのような速さで現れる未確認。その機体を操っているものが何かを呟いている。

「エクシア、目標を・・・駆逐する」

そして目の前にいるラスト操るイーグルを前にして、青色の二つ

の目が光を放つと、右手に装備されていた、折りたたみ式の実体剣『GNソード』を展開する。

そして、一閃。

そう、ただ一閃しただけだった。

下から切り上げられたそのGNソードによって切り飛ばされた、イーグルの腕と装備されていたライフルが宙を舞う。

「な、なんだと!?!」

それを観客席から見ていたグランが叫ぶ。リオンたち他のものも、まさかの光景に驚きを隠せないでいる。

振り切った形で制止している未確認。斬り飛ばされ、宙を舞っていたイーグルの腕は重力に従って地面に落ちる。

フェイスで表情は見えないが未確認の操縦者の青年はなんとも思っていないのか、当然だといわんばかりに、無表情であるのに対して、代わりに切り飛ばされた腕のイーグルを操っていた、ラスト・ブライスマンはそんな馬鹿なという啞然とした表情を崩せないでいた。

「ああ・・・」

そう啞然とした表情から搾り出したかのようなうなり声だったラストであるが、すぐにきつと顔をしかめると。

「てめえ・・・、分かってねえだろ!!」

慌てて展開した左手に握られた魔力刃によるサーベル。上から切り下ろすように一閃されたが、からだを半身にすることで、未確認に回避される。

前のめりになるラスト。

未確認は一回転すると、肩越しから抜き取った柄から桜色の刃を持った『GNビームサーベル』を展開する。

——ビームサーベルだとお！？何でお前がそんなスペシャルな武器を持ってるんだよ！！

そして、その遠心力を生かして、更にその左腕を斬り飛ばす。

一方的に斬られているラストは叫ぶ。

「俺は！！」

更に右腕にGNソードで左足を切られる。

「スペシャルで！！」

更にメインカメラをGNビームサーベルで破壊される。

「そして！！」

止めとして残っていたふらふらと立っている、左足をGNソードで切り飛ばす。

ゆっくりと倒れながら、ラスト・ブライスマンは叫ぶ。

「模擬戦なんだよオオオオオオ！！」

人体には影響はないが、それでも四肢を失った気体では立ち上がることはできないでいた。

GNソードを折りたたみ、ライフルモードの状態で、横を向く。

そのラストが惨敗したその光景を見ていた各世界の上官たちはため息にも似た声を漏らすしかできなかった。

未確認を操縦しているものも何も言わずに黙っている。

不意に動いたものがいた。

「失礼」

後ろから双眼鏡を持っていたものからグランがそう言って双眼鏡を奪い、覗き込む。

「な、何をする」

「失礼だといったはずだ」

そう言いはねて、覗き込む先はあの未確認である。

——一体あれはなんなのだ・・・??

機体の装甲、フェイス、どれもが今まで見てきたそれとはまったく違っていた。そして何よりも眼に留まったのは頭部に刻まれている

る文字。

“ G U N D A M ”

「が・・・んだむ??」

双眼鏡から眼を離す。

「あのモビルスーツ・・・、ガンダムというのか」

グランを覗き込んでいたリオンもそのガンダムという名前を呟く。グランの様子を見ていたリオンもまた、そのMSを見つめながら呟く。

「ガンダム・・・」

聞いたこともない名前である。どこかの新型としては、登場が派手すぎる。それにこれは喧嘩をふっかけているようにも見えるのだから。

白い四肢、青いボディ、ところどころ黄色の線が入ったMS。V字型のアンテナが2本あり、青色の眼をしている。

「エクシア、ファーストフェイズ終了」

操作している青年が淡々とその言葉を紡ぐ。彼にとってはこれはただの任務であり、こなすだけである。

きつと顔を上げる。

「セカンドフェイズに移行する」

すると背中中の推進部である円錐状のコーン型のものから緑色の粒子が発生し始める。GNソードを折りたたみ、ガンダムはくると体を反転させると、呼び動作無しに背中から大量の緑色をした粒子を噴出させて、一気に上空へと飛び出していく。あっという間に空の彼方まで飛んでいってしまった。

「また、あの光か・・・」

双眼鏡から眼を離して、推進部から発生している緑色の粒子を見てグランは言う。他のものたちもそれが一体なんなのか、分からないでいた。

「推進力も無しに・・・どうして??」

「あれはどういうことなんだ、リオン」

「僕に言われてもね・・・」

グランに言われても、リオンはそういうことしかできない。

それに予備動作無しで飛び上がるだなんて、MSには多少の屈伸や加速運動などの水力が必要だというのに。あのMSはそれをなしに空へと上がって見せた。

——明らかに我々のものとは性能が違いすぎる・・・。

グランは空へと上がっていくMS・・・ガンダムを見つめながら、その恐ろしいほどの性能を感じていた。

はるか上空に言っているときに、ぼろぼろにされたイーグルを解

除して、ボディースーツ姿のラストの姿が見える。

「やった??? やったのか!??」

やや興奮がまだ収まりきっていない様子が伺える。

「俺様の名前は!!! ラスト・ブライスマン様だ!!!」

そんなことを叫んでいるラストを無視してグランは呟く。

「最新兵器『ヘリオン』。模造品だという割には、使用者の安全性は高そうだな」

小さく笑みを作っていたグランはすぐに真剣そのものの表情に変わる。空を見上げ、もう姿が小さくなっているMSの方向を見ていた。

「しかし、あのMS……。軍備増強を図っている管理局及び管理世界への牽制……。いや警告と取るべきか……」

するととぜん演習場にサイレンが鳴り響く。

「だとしても、ここまでコケにされた管理世界が黙っているはずがない」

そういうグランの予想は当たっていた。

数機のヘリオンを展開した管理世界滞在中の管理局員たちが次々と空へと飛翔していく。MAへの変形をかねたそれが大空へと舞い上がっていった。

ここは次元旅行用船における各世界の上官たちが集まったの大規模な食事が開かれていた。もちろん管理局からもその上層部の一部がやってきていた。

ここではお互いに管理しされるという立場をもう一度強固なものにするという目論見が成されていた。

中央ホールは、さまざまな種類の人たちで賑わいを見せていた。各世界の軍上官、技術開発部最高責任官、関連企業の役員、さらには報道関係者などがいた。

そんな人で溢れかえっているホールを一人のボーイが手に持つトレイにドリンクを載せながら、軽やかに移動していた。あちらこちらでめまぐるしくグラスを求める姿が見受けられ、ボーイはそこへ行つて受け取り、代わりのものを手渡す作業を繰り返す。それと何もっていない人に対して、飲み物を勧めるのも彼らの仕事でもあった。

「お飲み物はいかがですか？？」

ボーイが歩いている途中に見つけた少女に声をかける。彼女の手は何ももたれていなかったためだった。

彼女からは年若さを感じるが、それでも着ているドレスが大人びているにしても、それを完璧に着こなしていることから相当のトップ関係者ではないかと思う。艶のある黒い長い髪を腰まで下ろされた彼女はボーイから話しかけられ、振り向く。

その彼女はボーイを大きな瞳で覗き込む形で見ている。見つめら

れたボーイはこう思った。

——予想以上だ……。

自分がある程度考えていた彼女の姿からの顔立ちがそれ以上にすばらしいものだった。思わず見ほれてしまい、顔が朱に染まるのを感じた。

ごくりと生唾を飲み込む。

ボーイという職業柄からして、今まで何人もの女性を見てきた。ある程度、その容姿から顔を想像して、美しいときもあれば、外れるときもあった。そのどちらにも、変わらぬ対応ができる自身にはあった。

しかし、彼女を見た瞬間、まるで金縛りにあったようにまったく動けなくなったのだ。今までにないこの状況に、内心慌てていた。

どこから来た少女だろうかと思う。ここまですばらしい容姿と顔立ちをしているなら、相当上の家系であろうと思った。軍関係者か、それとも技術開発者か。

そんな風に考えていると突然、妖艶な笑みを作った彼女が言う。

「そんな顔をしていると、男が下がってよ」

そういわれて一層顔が熱くなるのが感じられた。それを見て少女はくすくすと笑う。

——恥ずかしい……。

見られていたのを見抜かれてしまったのだ。少女はトレーに乗っていたドリンクの入ったグラスを手にとるとゆっくりとした足取りで別の方向に歩いていってしまった。

名残惜しさが残る。そんな風にして彼女の事を見てみると、そこにゆっくりと近づく男の姿があった。しっかりと着こなされたスーツ姿。遠目からでも分かる。美青年だ。

思わず舌打ちをしてしまった。仕方ないと思いつつ、また会えればと仕事に集中するボーイだった。

少女・・・リン・シェンロンの元に歩み寄る男性。

「お嬢様」

ビシッと着こなされたスーツ。硬めに整えられた髪形。リンの秘書兼護衛のフォン・ルイメンである。

「始まりました、お嬢様」

そのロンの言葉にはかなりの重みがあった。グラスに口を付け、そしてゆっくりと目を見開くリン。

「ついに、彼らが動き出すのね・・・」

映し出された七色に輝く次元空間を見つめながら彼女は言う。

「ソレスタルビーイングの、ガンダムマイスターたちが・・・」

新型MSを破壊してから、演習場を飛び去ったGN-001ガンダムエクシアは、真っ直ぐにその管理世界の中心にある軍用司令塔に向かって飛行していた。

エクシアを起動させているハヤト・ブリッグスは目の前のモニターに映し出されている計器を見つめていた。

——GNドライブ異常なし。GN粒子散布状態良好。

一つ一つの数値を確認していた。他の装備やほかの機関に関して、特に以上などは見られなかった。作戦行動を続行するべく、聳え立つ軍司令塔に沿って飛び続ける。

ハヤト・ブリッグス。第97管理外世界において起こったPT事件および闇の書事件の解決に関わった人物である。

顔付きは6年前においても大人びていたが、長い年月を得て、更に精悍な大人の男性になっていた。

アメジストのような紫色の瞳、茶髪の髪の毛は、やはり頑固な寝癖頭は相変わらずである。

4年前の隕石落下事件において、自らとエクシアを犠牲にして地球を守った。あの時発生した大爆発に巻き込まれ、死んだはずだった。しかし、あの時突然の光に包まれ、目が覚めると治療ポットに眠らされていたということだった。

それからソレスタルビーイングに参加。こうして、今ガンダムマイスターとして戦っているわけである。

すでにファーストフェイズは終了している。

ファーストフェイズは、管理世界が開発していた新型のMSを圧倒的な強さにてひざまずかせるというものだった。

その作戦を見事にハヤトはやってのけた。管理世界やそれらを管理する管理局に対して、いくらMSの性能が上がろうと、それ以上の性能を持っているものがこの世に存在することをまざまざとその圧倒的な強さを見せ付けて、知らしめる事ができた。

しかし、それはすぐに効果を上げることはない。帰って相手の逆上を買ったようで、それについてもすでに作戦の内であったので、予想の範囲内であった。

それでよかったのだ。彼らの心の奥底に、圧倒的な、敵わないと思わせるような、驚異的な力を見せ付けることができたのだから。そう、ガンダムが存在を、ガンダムというMSの存在感と恭威力を見せ付け、知らしめるのが今回のミッションの本当の目的なのだから。

すると突然警告音^{アラート}が鳴り響く。

後方からやってきたのはヘリオンであった。

可変式機能を持つために陸空のどちらでも戦闘が可能な万能MSである。しかし一々のパーツ交換が必要ということで、今は装備されている実体剣や、魔力刃による攻撃は気にすることはなく、装備されているハンドガン式の魔力弾による攻撃もそれほど脅威にはならない。

その機体についての性能を一気に頭を駆け巡らせ、後方から連射されてくる魔力弾をからだを傾けることでそれを回避する。

先ほどまでエクシアがいたそこを鉛色の魔力弾が通過していく。次々と高速でエクシアの横を通り過ぎていくヘリオン。それらが起こす振動によって乱れた態勢を立て直す。

再び旋回してエクシアに向かってくるヘリオンの三機。それらに對して、すぐさまGNソード改の折りたたみ式の剣と内蔵式の銃を切り替える。展開されていたGNソード改のソードモードからライフルモードへと切り替えて、ためらいなくトリガーを引いて次々と粒子弾を放つ。

その粒子弾を回避しつつ、接近してくる。

牽制に成功し、案の定ハヤトとエクシアの距離に入り込んできたそれらに對して、再びソードモードにしたGNソード改にて、すれ違いざまにヘリオンの機体の一部を斬り飛ばす。先頭を飛んでいたヘリオンは機体の一部を破壊されたために、そのまま地上へと落ちていった。

ハヤトはすぐさま残りの二機にエクシアを向けさせる。相手の陣形は崩れることなくエクシアに向かって飛んでくる。次々と放たれる魔力弾を高軌道にて回避する。

一瞬だけだがヘリオンを起動させているものたちに動揺が見える。ガンダムは全てのMSにおける性能の常識を逸脱したものである。

しかし、ハヤトに課せられたここでのミッションは残りの二機を

破壊することではなかった。先ほど墜落していったものも含めてこの三機のヘリオンはこの軍事演習上の近くにある基地から飛んできたものたちであろうと思われる。

セカンド・フェイズ
今回の目的は、その別施設に隠されている部隊をあぶり出し、持ちすぎた力を露呈させることであつた。

その持ちすぎた力がいつしか管理世界から逸脱するために反乱を起こし、周りの世界にも影響を及ぼすかもしれないということを知らしめるのだ。

すると突然司令塔上空から編隊したヘリオンたちが発進してきたのだ。エクシアのモニターに映し出される9つの機影を確認しながら、ハヤトは舌打ちをする。

「やはり、過剰戦力。この世界もそうなのか」

持ちすぎる力はいつか歪みとなり、世界を滅ぼす。

ハヤトとエクシアは向かってくる敵MS部隊を迎え撃つために上昇を開始する。

ここまでは作戦を考えた戦術予報士の通りにことが進んでいる。ヘリオン部隊はエクシアを取り囲んでの射撃を近接戦を仕掛けてくる。近接に特化したエクシアにとってはやりにくい戦い方である。

それでもこの状況も全て予想通りである。

ハヤトは上空からハイパーセンサーにて地上にいるだろう仲間のことを託すことにする。

「頼むぞ、カイ・S・レオンハルト」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5266t/>

魔道新世紀リリカルガンダム

2011年10月10日10時33分発行